千葉県文化財センター調査報告 第222集

千葉東南部ニュータウン 18

—— 鎌 取 遺 跡 ——

1 9 9 3

住 宅 ・ 都 市 整 備 公 団
財団法人 千葉県文化財センター

千葉東南部ニュータウン　18

―― 鎌取（かまとり）遺跡 ――

1993

住宅・都市整備公団
財団法人　千葉県文化財センター

本 文 目 次

序　文
凡　例

第１章　調査の概要
　第１節　調査の経緯と方法 …… 1
　第２節　遺跡の位置と環境 …… 2

第２章　調査の成果
　第１節　旧石器時代
　　１．基本層序 …… 4
　　２．第１文化層 …… 4
　　３．第２文化層 …… 24
　　４．単独資料 …… 30
　　５．まとめ …… 31
　第２節　縄文時代
　　１．グリッド出土遺物 …… 41
　　２．遺構と出土遺物 …… 102
　第３節　古墳時代
　　１．遺　構 …… 145
　　２．出土土器 …… 171
　　３．土器以外の出土遺物 …… 228
　第４節　奈良・平安時代以降
　　遺構と出土遺物 …… 255
　第５節　貝サンプルの分析結果 …… 260

第３章　まとめ
　第１節　出土土器からみる鎌取縄文集落の様相…… 262
　第２節　製鉄関連遺物について…… 264
　第３節　古墳時代住居間接合の土器について…… 265

挿 図 目 次

第 1 図　グリッド配置図…… 1
第 2 図　鎌取遺跡の位置と赤塚支谷周辺の遺跡… 3
第 3 図　標準土層…… 4
第 4 図　旧石器時代調査状況 …… 5・6
第 5 図　第1ブロック群石器別分布図…… 8
第 6 図　第1ブロック群石材別分布図…… 9
第 7 図　第1ブロック群出土石器(1) …… 10
第 8 図　第1ブロック群出土石器(2) …… 11
第 9 図　第1ブロック群出土石器(3) …… 12
第 10 図　第1ブロック群出土石器(4) …… 13
第 11 図　第1ブロック群出土石器(5) …… 14
第 12 図　第1ブロック群出土石器(6) …… 15
第 13 図　第1ブロック群出土石器(7) …… 16
第 14 図　第1ブロック群出土石器(8) …… 17
第 15 図　第1ブロック群出土石器(9) …… 18
第 16 図　第1ブロック群出土石器(10)…… 19
第 17 図　第2ブロック群石器別分布図 …… 21
第 18 図　第2ブロック群石材別分布図 …… 21
第 19 図　第2ブロック群出土石器(1) …… 22
第 20 図　第2ブロック群出土石器(2) …… 23
第 21 図　第3ブロック群石器別分布図…… 25
第 22 図　第3ブロック群石材別分布図 …… 25
第 23 図　第3ブロック群出土石器(1) …… 26
第 24 図　第3ブロック群出土石器(2) …… 27
第 25 図　単独出土石器(1) …… 28
第 26 図　単独出土石器(2) …… 29
第 27 図　出土土器数量比…… 41
第 28 図　グリッド出土土器(1) …… 43
第 29 図　グリッド出土土器(2) …… 45
第 30 図　グリッド出土土器(3) …… 47
第 31 図　グリッド出土土器(4) …… 49
第 32 図　グリッド出土土器(5) …… 51
第 33 図　グリッド出土土器(6) …… 53
第 34 図　グリッド出土土器(7) …… 55
第 35 図　グリッド出土土器(8) …… 57
第 36 図　グリッド出土土器(9) …… 59
第 37 図　グリッド出土土器(10)…… 61
第 38 図　グリッド出土土器(11)…… 63
第 39 図　グリッド出土土器(12)…… 65
第 40 図　グリッド出土土器(13)…… 67
第 41 図　土器片錘 …… 69
第 42 図　土製品・石製品 …… 70
第 43 図　石鏃の諸属性と計測点(1) …… 78
第 44 図　石鏃の諸属性と計測点(2) …… 79
第 45 図　石鏃の諸属性と計測点(3) …… 80
第 46 図　石鏃の諸属性と計測点(4) …… 81
第 47 図　測定誤差の契機 …… 82
第 48 図　縄文時代石器(1) …… 83
第 49 図　縄文時代石器(2) …… 84
第 50 図　縄文時代石器(3) …… 85
第 51 図　縄文時代石器(4) …… 86
第 52 図　縄文時代石器(5) …… 87
第 53 図　縄文時代石器(6) …… 88
第 54 図　縄文時代石器(7) …… 89
第 55 図　縄文時代石器(8) …… 90
第 56 図　縄文時代石器(9) …… 91
第 57 図　縄文時代石器(10)…… 92
第 58 図　縄文時代石器(11)…… 93
第 59 図　縄文時代石器(12)…… 93
第 60 図　縄文時代遺構配置図 …… 103

第 61 図　002号跡 …… 104
第 62 図　004号跡(1) …… 105
第 63 図　004号跡(2) …… 106
第 64 図　004号跡(3) …… 107
第 65 図　005号跡(1) …… 109
第 66 図　005号跡(2) …… 110
第 67 図　006号跡(1) …… 111
第 68 図　006号跡(2) …… 112
第 69 図　007号跡(1) …… 113
第 70 図　007号跡(2) …… 115
第 71 図　007号跡(3) …… 116
第 72 図　008号跡 …… 117
第 73 図　009号跡(1) …… 118
第 74 図　009号跡(2) …… 118
第 75 図　012号跡 …… 119
第 76 図　013A・B号跡(1) …… 120
第 77 図　013A号跡(2) …… 121
第 78 図　040号跡(1) …… 121
第 79 図　040号跡(2) …… 122
第 80 図　040号跡(3) …… 123
第 81 図　042号跡(1) …… 124
第 82 図　042号跡(2) …… 125
第 83 図　001号跡(1) …… 126
第 84 図　001号跡(2) …… 127
第 85 図　003号跡 …… 128
第 86 図　014号跡 …… 129
第 87 図　041号跡 …… 130
第 88 図　P04,06,20,28,32,52号土坑 …… 133・134
第 89 図　P21,24,36,38,44,48号土坑 …… 135
第 90 図　P21号土坑 …… 136
第 91 図　P24号土坑 …… 136
第 92 図　FP01号土坑(1) …… 137
第 93 図　FP01号土坑(2) …… 138
第 94 図　FP02号土坑 …… 138
第 95 図　FP03～07号土坑 …… 139
第 96 図　FP08～24号土坑(1) …… 140
第 97 図　FP08～24号土坑(2) …… 141
第 98 図　FP08～24号土坑(3) …… 141
第 99 図　FP08～24号土坑(4) …… 142
第 100 図　FP25,26号土坑 …… 142
第 101 図　FP26号土坑 …… 143
第 102 図　P01,29,30,31,33,39,40号土坑 …… 144
第 103 図　古墳時代遺構配置図 …… 145
第 104 図　016号住居跡 …… 146
第 105 図　017号住居跡 …… 147
第 106 図　018号住居跡 …… 148
第 107 図　024号住居跡 …… 149
第 108 図　026号住居跡 …… 149
第 109 図　027A号住居跡 …… 150
第 110 図　027B号住居跡 …… 150
第 111 図　028号住居跡 …… 151
第 112 図　030号住居跡 …… 152
第 113 図　032号住居跡 …… 153
第 114 図　034号住居跡 …… 154
第 115 図　035号住居跡 …… 155
第 116 図　036号住居跡 …… 155
第 117 図　037号住居跡 …… 156
第 118 図　043号住居跡(1) …… 156
第 119 図　043号住居跡(2) …… 157
第 120 図　044号住居跡 …… 159
第 121 図　045号住居跡 …… 160
第122 図　046号住居跡 …… 161
第 123 図　047号住居跡 …… 162
第 124 図　048号住居跡 …… 162

第 125 図　049号住居跡…… 163
第 126 図　050号住居跡・出土遺物…… 164
第 127 図　051号住居跡…… 164
第 128 図　052号住居跡…… 165
第 129 図　053号住居跡…… 166
第 130 図　055号住居跡…… 167
第 131 図　056号住居跡…… 167
第 132 図　057号住居跡…… 168
第 133 図　038号住居跡…… 169
第 134 図　054号住居跡…… 170
第 135 図　016号住居跡出土土器(1) …… 178
第 136 図　016号住居跡出土土器(2) …… 179
第 137 図　017号住居跡出土土器…… 180
第 138 図　018号住居跡出土土器…… 181
第 139 図　024号住居跡出土土器…… 182
第 140 図　026号住居跡出土土器…… 183
第 141 図　027A号住居跡出土土器 …… 184
第 142 図　027B号住居跡出土土器 …… 185
第 143 図　028号住居跡出土土器(1) …… 186
第 144 図　028号住居跡出土土器(2) …… 187
第 145 図　030号住居跡出土土器…… 188
第 146 図　032号住居跡出土土器…… 189
第 147 図　034号住居跡出土土器…… 189
第 148 図　035号住居跡出土土器…… 190
第 149 図　036号住居跡出土土器…… 191
第 150 図　043号住居跡出土土器(1) …… 193
第 151 図　043号住居跡出土土器(2) …… 194
第 152 図　043号住居跡出土土器(3) …… 195
第 153 図　044号住居跡出土土器(1) …… 196
第 154 図　044号住居跡出土土器(2) …… 197
第 155 図　045号住居跡出土土器(1) …… 199
第 156 図　045号住居跡出土土器(2) …… 200
第 157 図　045号住居跡出土土器(3) …… 201
第 158 図　046号住居跡出土土器(1) …… 202
第 159 図　046号住居跡出土土器(2) …… 203
第 160 図　047号住居跡出土土器…… 204
第 161 図　048号住居跡出土土器…… 205
第 162 図　049号住居跡出土土器(1) …… 206
第 163 図　049号住居跡出土土器(2) …… 207
第 164 図　050号住居跡出土土器…… 208
第 165 図　051号住居跡出土土器(1) …… 209
第 166 図　051号住居跡出土土器(2) …… 210
第 167 図　052号住居跡出土土器…… 211
第 168 図　053号住居跡出土土器…… 211
第 169 図　055号住居跡出土土器…… 212
第 170 図　056号住居跡出土土器…… 213
第 171 図　057号住居跡出土土器…… 214
第 172 図　038号住居跡出土土器(1) …… 215
第 173 図　038号住居跡出土土器(2) …… 216
第 174 図　038号住居跡出土土器(3) …… 217
第 175 図　054号住居跡出土土器…… 218
第 176 図　古墳時代グリッド出土土器 …… 219
第 177 図　古墳時代土製品－板状土製品－ …… 229
第 178 図　古墳時代土製品―紡錘車― …… 231
第 179 図　古墳時代石製品―紡錘車― …… 232
第 180 図　古墳時代石製品―模造品― …… 233
第 181 図　古墳時代石製品―勾玉― …… 234
第 182 図　臼玉計測値分布 …… 235
第 183 図　古墳時代石製品―臼玉― …… 236
第 184 図　古墳時代石製品―砥石― …… 238
第 185 図　古墳時代石製品―磨石― …… 239
第 186 図　古墳時代石製品―台石(1)― …… 240
第 187 図　古墳時代石製品―台石(2)― …… 241
第 188 図　古墳時代石製品―軽石(1)― …… 243

第 189 図　古墳時代石製品—軽石(2)— …… 244
第 190 図　古墳時代石製品—軽石(3)— …… 245
第 191 図　古墳時代鉄製品出土住居跡 …… 247
第 192 図　古墳時代鉄製品(1) …… 247
第 193 図　古墳時代鉄製品(2) …… 249
第 194 図　古墳時代鉄製品(3) …… 250
第 195 図　古墳時代鉄滓 …… 251
第 196 図　古墳時代羽口 …… 254
第 197 図　M01号方形周溝状遺構 …… 255
第 198 図　M02号方形周溝状遺構 …… 255
第 199 図　M06号溝状遺構 …… 256
第 200 図　P02号土坑 …… 256
第 201 図　P02号土坑出土土器 …… 257
第 202 図　グリッド出土土器 …… 258
第 203 図　歴史時代銭貨 …… 259
付　　図　鎌取遺跡遺構配置図 (1:1,000)

表 目 次

第 1 表　出土石器計測表…… 33～40
第 2 表　グリッド出土土器数量表…… 41
第 3 表　土器片錘の時期別統計値…… 70
第 4 表　土製品・石製品属性…… 70
第 5 表　土器片錘属性…… 71
第 6 表　縄文時代石器属性(1) …… 94～99
第 7 表　縄文時代石器属性(2) …… 100
第 8 表　縄文時代石器属性(3) …… 100
第 9 表　縄文時代石器属性(4) …… 101
第 10 表　縄文時代石器属性(5) …… 101
第 11 表　縄文時代石器属性(6) …… 101
第 12 表　縄文時代住居跡 …… 102
第 13 表　縄文時代土坑 …… 102
第 14 表　古墳時代・歴史時代土器属性 …… 220～226
第 15 表　古墳時代住居跡一覧 …… 227
第 16 表　板状土製品一覧 …… 230
第 17 表　土製紡錘車一覧 …… 231
第 18 表　石製紡錘車一覧 …… 232
第 19 表　石製模造品一覧 …… 232
第 20 表　勾玉一覧 …… 233
第 21 表　臼玉一覧 …… 236～237
第 22 表　砥石一覧 …… 239
第 23 表　磨石一覧 …… 240
第 24 表　台石一覧 …… 240
第 25 表　軽石一覧 …… 242
第 26 表　鉄滓一覧 …… 253
第 27 表　銭貨一覧 …… 259
第 28 表　貝サンプル採取量 …… 260
第 29 表　動物遺存体種名表 …… 260
第 30 表　006号跡貝サンプルの分析結果 …… 261

図　版　目　次

図版 1　　調査遺跡とその周辺

図版 2　1　調査前全景

　　2　旧石器第 1 ブロック検出状況

　　3　旧石器第 2 ・ 3 ブロック検出状況

図版 3　1　第 1 ブロック出土石器

　　2　第 2 ブロック出土石器

図版 4　1　第 3 ブロック出土石器

　　2　単独出土石器

図版 5　　グリッド出土土器(1)

図版 6　　グリッド出土土器(2)

図版 7　　グリッド出土土器(3)

図版 8　　グリッド出土土器(4)

図版 9　　グリッド出土土器(5)

図版10　　グリッド出土土器(6)

図版11　　グリッド出土土器(7)

図版12　　グリッド出土土器(8)

図版13　　グリッド出土土器(9)

図版14　　グリッド出土土器(10)

図版15　　グリッド出土土器(11)

図版16　　グリッド出土土器(12)

図版17　　グリッド出土土器(13)

図版18　　土器片錘

図版19　1　土製品・石製品

　　2　縄文時代石器(12)

図版20　　縄文時代石器(1)・(2)

図版21　1　縄文時代石器(2)・(3)

　　2　縄文時代石器(4)・(5)・(6)

図版22　1　縄文時代石器(7)・(8)

　　2　縄文時代石器(9)

図版23　1　縄文時代石器(9)・(10)

　　2　縄文時代石器(10)・(11)

図版24　1　004号跡

　　2　004号跡遺物出土状況

　　3　004号跡埋甕炉

図版25　1　004号跡埋甕炉土層断面

　　2　005号跡

　　3　006号跡

図版26　1　007号・012号跡,52号土坑

　　2　007号跡遺物出土状況

　　3　008号跡,20・22号土坑

図版27　1　009号跡

　　2　013A号跡

　　3　013A号跡埋甕

図版28　1　040号跡

　　2　040号跡埋甕炉

　　3　042号跡

図版29　1　001号跡

　　2　002・003・041号跡

　　3　014号跡

図版30　1　中期土坑

　　2　陥し穴状土坑

図版31　　炉穴

図版32　　時期・性格不明土坑

図版33　　遺構出土土器(1)

図版34　　遺構出土土器(2)

図版35　　遺構出土土器(3)

図版36　　遺構出土土器(4)

図版37　　遺構出土土器(5)

図版38　　遺構出土土器(6)

図版39　　遺構出土土器(7)

図版40　遺構出土土器(8)
図版41　遺構出土土器(9)
図版42　遺構出土土器(10)
図版43　遺構出土土器(11)
図版44　遺構出土土器(12)
図版45　遺構出土土器(13)
図版46　遺構出土土器(14)
図版47　1　016号住居跡
2　017号住居跡
3　017号住居跡遺物出土状況
図版48　1　018号住居跡
2　024号住居跡
3　024号住居跡遺物出土状況
図版49　1　026号住居跡
2　027A号住居跡
3　027B号住居跡
図版50　1　028号住居跡
2　030号住居跡
3　032号住居跡
図版51　1　034号住居跡
2　035号住居跡
3　036号住居跡
図版52　1　037号住居跡
2　043号住居跡
3　043号住居跡遺物出土状況
図版53　1　043号住居跡遺物出土状況
2　044号住居跡
3　044号住居跡遺物出土状況
図版54　1　045号住居跡
2　045号住居跡遺物出土状況
図版55　1　046号住居跡
2　046号住居跡遺物出土状況
3　047号住居跡
図版56　1　048号住居跡
2　048号住居跡遺物出土状況
図版57　1　049号住居跡
2　049号住居跡遺物出土状況
図版58　1　050号住居跡
2　050号住居跡遺物出土状況
3　051号住居跡
図版59　1　052・054号住居跡
2　053号住居跡
3　055号住居跡
図版60　1　055号住居跡遺物出土状況
2　056号住居跡
図版61　1　056号住居跡遺物出土状況
2　057号住居跡
3　057号住居跡遺物出土状況
図版62　1　038号住居跡
2　038号住居跡遺物出土状況
3　054号住居跡
図版63　1　054号住居跡遺物出土状況
2　01・02号土坑
3　02号土坑遺物出土状況
図版64　1　M01号方形周溝状遺構
2　M02号方形周溝状遺構
3　M03号溝状遺構
図版65　住居跡出土土器(1)－016(1)－
図版66　住居跡出土土器(2)－016(2)・017－
図版67　住居跡出土土器(3)－018・024(1)－
図版68　住居跡出土土器(4)－024(2)・026(1)－
図版69　住居跡出土土器(5)－026(2)－

図版70　住居跡出土土器(6)－027A・028(1)－
図版71　住居跡出土土器(7)－028(2)・030・032(1)－
図版72　住居跡出土土器(8)－032(2)・035－
図版73　住居跡出土土器(9)－036(1)－
図版74　住居跡出土土器(10)－036(2)・043(1)－
図版75　住居跡出土土器(11)－043(2)－
図版76　住居跡出土土器(12)－043(3)－
図版77　住居跡出土土器(13)－043(4)・044(1)－
図版78　住居跡出土土器(14)－044(2)－
図版79　住居跡出土土器(15)－044(3)－
図版80　住居跡出土土器(16)－044(4)・045(1)－
図版81　住居跡出土土器(17)－045(2)－
図版82　住居跡出土土器(18)－045(3)－
図版83　住居跡出土土器(19)－045(4)－
図版84　住居跡出土土器(20)－046(1)－
図版85　住居跡出土土器(21)－046(2)・047(1)－
図版86　住居跡出土土器(22)－047(2)・048(1)－
図版87　住居跡出土土器(23)－048(2)・049(1)－
図版88　住居跡出土土器(24)－049(2)－
図版89　住居跡出土土器(25)－049(3)－
図版90　住居跡出土土器(26)－050(1)－
図版91　住居跡出土土器(27)－050(2)・051(1)－
図版92　住居跡出土土器(28)－051(2)・053－
図版93　住居跡出土土器(29)－055・056(1)－
図版94　住居跡出土土器(30)－056(2)・057－
図版95　住居跡出土土器(31)－038(1)－
図版96　住居跡出土土器(32)－038(2)－
図版97　住居跡・土坑出土土器(33)－038(3)・054・P02－
図版98　土製品(1)－板状土製品－
図版99　土製品(2)－板状土製品－
　　石製品(1)－紡錘車・石製品模造品－
図版100　石製品(2)－勾玉・砥石－
図版101　石製品(3)－磨石・台石－
図版102　石製品(4)－台石・軽石－(1)
図版103　石製品(5)－軽石(2)－
　　鉄製品(1)－鉄器－
図版104　鉄製品(2)
図版105　その他の遺物(1)－鉄滓・銭貨－
図版106　その他の遺物(2)－転用羽口－
図版107　石器表面にみられる痕跡・土器整形痕

序　　文

千葉市は、県都であるとともに首都圏の政治・経済や文化の重要な拠点として位置付けられており、首都・東京から30～40㎞圏にあって通勤圏内でもあるため、宅地開発などが急激に進みつつあります。この傾向は、さらに進展することがうかがえることから、適正な開発計画に基づく宅地供給が必要とされていたところ、千葉市の南部に住宅・都市整備公団による千葉東南部地区土地区画整理事業が計画されるところとなりました。

しかし、この地域の台地は村田川の支流が複雑に流れ、緑豊かな平坦な台地と清水の湧き出る谷が形成され、原始・古代より、人々が生活や活動する場所としては非常に恵まれた条件を備えております。このことから各時代にわたって人々の暮らした痕跡が数多く認められており、開発事業計画の進捗に伴い、貴重な埋蔵文化財の取扱いが大きな検討事項の一つとなりました。

その結果、これら埋蔵文化財の取扱いについては、千葉県教育庁文化課と住宅・都市整備公団との度重なる協議によって、できる限り公園に取り込むことによって、現状で保存する措置が講ぜられましたが、その他の埋蔵文化財はやむなく記録保存とすることとなりました。発掘調査は昭和49年から開始されて以来、今日まで連綿として継続されております。調査実施機関としては千葉県教育委員会の指名により、当初は財団法人千葉県都市公社の文化財調査事業所が実施し、昭和50年以降は財団法人千葉県文化財センターが実施しております。

ここに報告する「鎌取遺跡」は昭和58・60年度に発掘調査され、平成元年度より整理作業が実施された遺跡で、旧石器時代から奈良・平安時代までの遺構・遺物が数多く出土し、この地に暮らした人々のようすが明らかとなり、そのなかでも古墳時代中期の製鉄跡は非常に注目されており、この地域の製鉄の歴史に新たな知見をもたらすとともに、古代以降の製鉄遺跡との関係について、新たな課題を提供しております。

この発掘調査報告書が、県民の皆様の文化財に対する啓蒙・普及に役立つことはもとより、歴史・考古学の研究にも役立つならば幸いとするところであります。

最後に、発掘調査から整理作業まで御協力を賜わった住宅・都市整備公団、発掘調査事業の調整・御指導をいただいた千葉県教育庁生涯学習部文化課、調査成果について多大なる御指導をいただいた研究者の方々、並びに暑さ・寒さ・風雨をものともせず発掘調査や、整理作業に御協力をいただいた数多くの調査補助員の皆様に心から感謝を申し上げます。

平成５年３月

財団法人　千葉県文化財センター
理事長　　奥　山　　浩

凡　　例

1．本書は住宅・都市整備公団首都圏開発本部による千葉市東南部地区におけるニュータウン建設計画に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告である。

2．本書に所収した遺跡（市町村コードー遺跡コード）は、昭和58・60年度に調査された鎌取遺跡（201-041）である。

3．発掘調査から報告書作成にいたる業務は、住宅・都市整備公団首都圏開発本部との委託契約に基づき、千葉県教育委員会の指導のもとに財団法人千葉県文化財センターが実施した。

4．発掘調査に関わる各年度の組織および担当職員は、下記のとおりである。

昭和58年度

組織　　調査部長　白石竹雄、部長補佐　根本　弘、班長　古内　茂

担当職員　調査研究員　田形孝一

昭和60年度

組織　　調査部長　鈴木道之助、部長補佐　岡川宏道、班長　阪田正一

担当職員　主任調査研究員　西口　徹

5．整理作業および報告書作成作業は、昭和63年度から平成３年度にかけて、下記の組織および担当職員で行われ、平成４年度に成果を刊行した。

組織　　調査部長　堀部昭夫、天野　努

部長補佐　岡川宏道、西山太郎、佐久間豊

班長　　佐久間豊、大原正義、三浦和信、矢戸三男

担当職員　主任技師　永沼律朗、今泉　潔、萩原恭一、倉内郁子、上守秀明

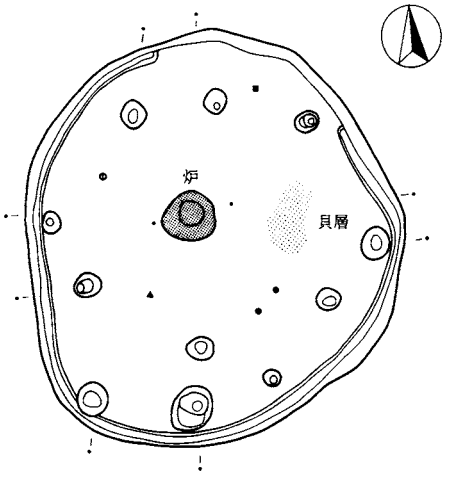
技師　　出口雅人

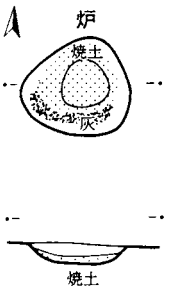
6．本書の執筆は、三浦和信、萩原恭一、上守秀明、出口雅人を中心に行った。ただし旧石器時代は島立　桂、縄文時代出土遺物のうち石器については田島　新、加藤修司、古墳時代のうち遺構については麻生正信、遺物については半沢幹雄、矢本節朗、四柳　隆の、それぞれ協力を得た。また、田井知二氏には古墳時代と奈良・平安時代以降の一部について、原稿執筆のご協力をいただいた。

7．本書の編集は、調査部長　天野　努、部長補佐　佐久間豊、班長　矢戸三男の指導のもとに、上守秀明・出口雅人が行った。

8．本書に使用した地形図のうち、第１図は国土地理院発行の 1:25,000 蘇我（NI-54-19-15-2）である。

縄文時代遺構

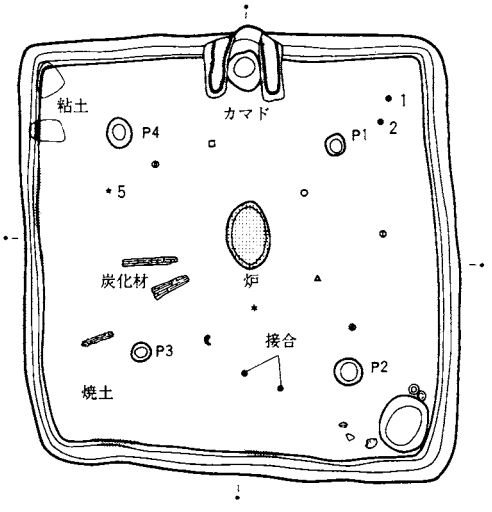




出土遺物

- ● 土器
- ■ 土製品
- ▲ 剥片石器
- ◎ 礫石器
- ▣ 石製品

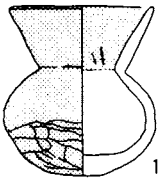
古墳時代・歴史時代遺構



出土遺物

- ● 土器
- * 板状土製品
- ◉ 紡錘車
- ◎ 滑石
- ◖ 勾玉
- ○ 砥石
- ・ 台石
- ◎ 軽石
- △ 鉄製品
- ▫ スラグ

古墳時代・歴史時代遺物


1
土師器

2
須恵器

3
026－5

上段　種類別遺物番号
下段　遺構番号－遺物番号
（遺構挿図に対応）

▭ 赤彩の範囲

9．写真撮影のうち遺跡・遺構の撮影は発掘担当者が行い、整理作業に伴う遺物撮影は永沼律朗、今泉　潔によるものである。ただし空中写真については、京葉測量株式会社の撮影によるものを使用した。

10．本書に使用した図面の方位は、座標北を示すものである。

11．遺物のうち、縄文式土器の縄文原体表記は、特別な場合を除き0段を省略した。また、胎土中に繊維を混入するものについては、断面に網点で示してある。古墳時代土器のうち、赤彩については、その塗彩範囲を網点で示している。また断面白抜きは土師器、断面黒塗りは須恵器を表している。

12．遺構・遺物挿図に示した各種の用例は以下の通りである。なお旧石器時代については、本文挿図中に示した。

土器につけた番号は遺構ごとの通し番号で平面図と断面図の遺物番号と一致する土器以外の遺物については二段組みの番号をつけた。上段は遺物の種類ごとの通し番号で、下段は初めが遺構番号、次が遺構ごとの通し番号で、これは遺構の平面図と断面図の遺物番号と一致する。

13．遺構・遺物挿図の縮尺は、以下を基本とした。

（1）旧石器時代　　ブロック…1／150、石器…2／3

（2）縄文時代　　住居跡…1／80、炉…1／40、土坑・陥し穴状遺構・炉穴…1／60、土器…1／3・1／4、土製品 …1／3、石製品…1／2、石器…2／3・1／3

（3）古墳時代・歴史時代　住居跡…1／100、方形周溝遺構…1／200、土坑…1／60、土器 …1／4、土製品1／1・1／2、石製品…2／3・1／2・1／3・1／4、鉄製品…1／1・1／2、銭貨…1／1

14．発掘調査から本書の刊行にいたるまで、住宅・都市整備公団首都圏開発本部、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉市教育委員会の関係各位、ならびに穴澤義功、澤野　弘、田井知二、田村　隆の各氏には御指導・御協力を賜りました。また当センター職員有志、多くの補助員の方々に助言・協力をいただきました。併せてここに謝意を表す次第です。

第１章　調査の概要

第１節　調査の経緯と方法

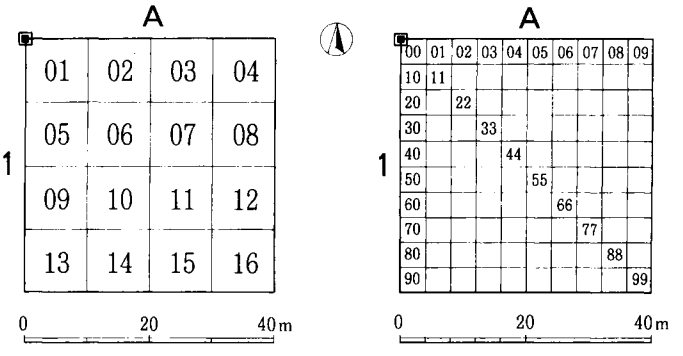
１．調査の経緯

住宅・都市整備公団によって、千葉東南部地区における土地区画整理事業が計画された。対象区域内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについては千葉県教育庁文化課と協議の結果、一部を緑地として現状保存に努める一方で、現状保存の困難な部分についてはやむを得ず発掘調査による記録保存を行うこととなり、当文化財センターが委託を受け、現在も発掘調査を継続中である。鎌取遺跡もこうした経緯のもとで調査された遺跡の一つである。発掘調査は昭和58・60年度の２次にわたって実施された。第１次は遺跡範囲23,000㎡のうち、遺跡中央部以西の16,000㎡が対象となり、昭和58年４月１日から７月15日まで確認調査を実施した。この結果を受けて対象面積13,000㎡について同年９月１日から昭和59年３月31日まで本調査を行った。第２次は遺跡東部に残った7,000㎡を対象とし、昭和60年４月１日から６月９日まで確認調査を実施した。この結果を受けて対象面積5,200㎡について同年６月10日から８月１日まで本調査を行い、次章以降に収載する成果を挙げて、本遺跡の発掘調査は完了した。

ところで『千葉県埋蔵文化財分布地図（2）』（千葉県教育委員会 1986）によると「鎌取遺跡」と呼称される遺跡は他に３か所が数えられている。しかし、本遺跡以外は命名の経緯やその詳細は不明であり、なかには既に消滅したものがあることを記しておきたい。

２．調査の方法

発掘調査の開始に際して、対象となる区域を包含するよう国土地理院国家座標（第Ⅸ座標系）を基準とした発掘区の設定を行った。この発掘区は基本的に40×40ｍの方眼を大グリッドとして設定し、北西隅の基準杭を起点に40ｍ単位に西から東へ A・B・C・… 、北から南へ 0・1・2・…というように呼称することとし、大グリッドはこれらを組み合わせて、例えばA1区と呼ぶこととした。小グリッドは第１次調査の確認調査と上層本調査では大グリッドを10×10ｍに16分割したもの、下層本調査では４×４ｍに100分割したものを使用し、（第１図）第２次調査ではすべてで10×10ｍの小グリッドが使用されるという、不統一が生じた。このため整理段階では、使用の便宜のため例外を除き、他はすべて４×４ｍの小グリッドに振り替え統一をはかった。確認調査は各調査対象



第１図　グリッド配置図

面積に対して上層10%,下層４%の規模について行った。本調査はその結果を受け、遺構部分や遺物の集中地点は土層観察用のベルトを残しながら、遺物の出土位置を記録することを基本とした。なお遺跡の基本層序については、旧石器時代の項で簡単にふれた。

第２節　遺跡の位置と環境

１．遺跡周辺の地形

鎌取遺跡は、ＪＲ外房線鎌取駅の南西約200ｍの千葉市鎌取町716-2他の東南部ニュータウン造成地域内に所在した。現在は、千葉市の政令指定都市移行に伴って、緑区おゆみ野に含まれており、ニュータウンは「おゆみ野」と称されている。

千葉市付近の地形は、東京湾に面した海岸平野と、その東側の下総台地という二つの平坦面からなっていて、台地は都川・村田川などに注ぐ大小の谷によって樹枝状に刻まれている。東南部ニュータウン付近の台地は、村田川水系の数本の谷津により千葉市付近でも最も開析が進んでおり、谷の密度が大きいことと、台地をみると平坦面より斜面の面積の方が広いことの二つが特徴となっている。谷奥となる台地の東端は都川水系（仁戸名支谷）との分水界となっており、西端は縄文時代に形成された海蝕崖となって村田川低地に直接面している。

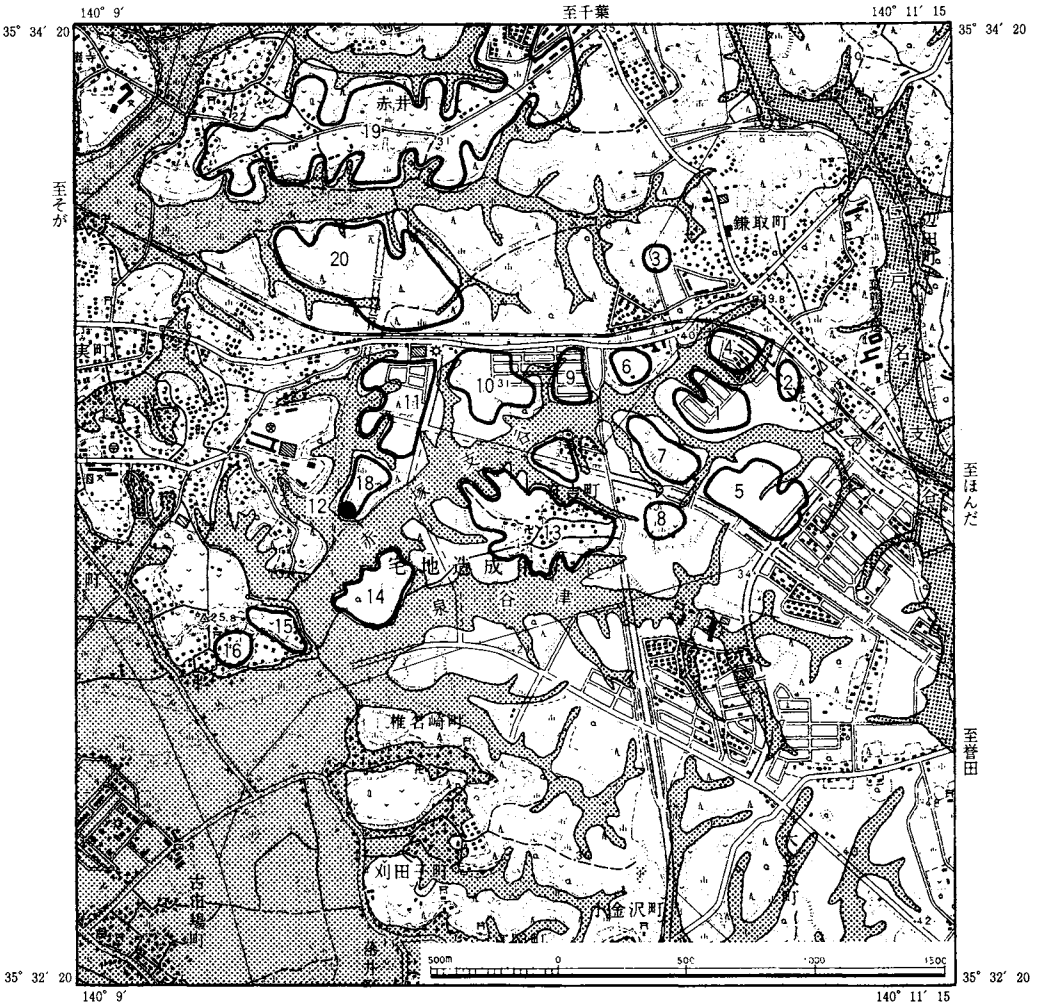
鎌取遺跡は、「赤塚支谷」と呼ばれる小支谷の最奥部の台地上に占地している。前述した四つの鎌取遺跡のうち、今回調査されたのは鎌取駅付近から延びる舌状台地の西半分の南北約300m、東西約400ｍの範囲で、東側は南から入った凹地によって線引きをした。台地の形状を見ると、緩斜面がかなり上部までおよんでおり、北西からの小谷もあって、平坦部分はとても狭い。一方、凹地より東の地区は都川水系との分水界であり、広い平坦地が南北に長く展開している。現在は消滅して確認できないが、当遺跡がここまで連続していた可能性も考えられる。

２．周辺の遺跡

赤塚支谷は遺跡の宝庫である。第２図に主な遺跡を示したが、空白部は未調査区域で、台地上はすべて遺跡といってよい。とくに、鎌取遺跡の主体となる縄文時代中期後半加曽利Ｅ式期と古墳時代前・中期の遺跡が最も充実している。

加曽利Ｅ式期の集落跡は、当遺跡・有吉北貝塚・有吉南貝塚・鎌取場台遺跡・南二重堀遺跡・大井戸作貝塚（未調査で消滅のため位置と内容は明らかでない）の６遺跡が隣合って存在していた。いずれも貝塚を伴い、とくに有吉北貝塚と有吉南貝塚は大規模な斜面貝層が形成されている。ほかに、高沢遺跡・有吉遺跡・有吉城跡でも住居跡が発見された。

古墳時代の遺跡を見ると、古墳群や集落跡がとても多い東南部ニュータウン地区のなかでも、前期・中期の集落跡は赤塚支谷に集中している。支谷の奥から、当遺跡・馬の口遺跡・鎌取場台遺跡・南二重堀遺跡・高沢遺跡・有吉遺跡・城ノ台遺跡の各遺跡でこの時期の住居跡が発見されたほか、松原東遺跡・東堀遺跡で同時期の土器が発見されている。また、この時期の古墳としては、上赤塚１号墳がある。



第２図　鎌取遺跡の位置と赤塚支谷周辺の遺跡（１：25,000）

縄文時代中期後半の遺跡

１．鎌取　　６．鎌取場台　　７．有吉北貝塚　　８．有吉南貝塚　　９．南二重堀

10．有吉　　11．有吉城跡

古墳時代前・中期の遺跡

１．鎌取　　５．馬の口　　６．鎌取場台　　９．南二重堀　　10．高沢　　11．有吉

12．上赤塚１号墳　　14．城ノ台　　15．松原東　　16．東堀　　19．榎作　　20．種ヶ谷津

その他の遺跡

２．鎌取　　３．鎌取　　４．鎌取　　17．有吉南　　18．上赤塚貝塚

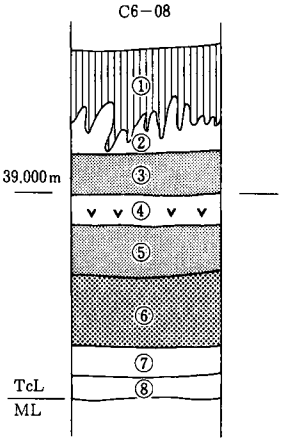
第２章　調査の成果

第１節　旧石器時代

本遺跡では３か所の石器集中地点と６か所の石器単独出土地点が検出され、前者は層位的にみて２枚の文化層として認識された。また、縄文時代から古墳時代にかけての遺構の覆土からも、原位置を離れた状態で石器が出土している。

１．基本層序

本遺跡における立川ローム層の基本層序は以下のとおりである。



第３図　標準土層

①黄褐色軟質ローム層(Ⅲ層)。(註１)

②明褐色硬質ローム層。黒色・赤色のスコリアを含み、全体に赤みをおびる(Ⅳ層)。第２文化層は、本層下部に位置する。

③褐色硬質ローム層。黒色・赤色のスコリアを多く含む。立川ローム層第１黒色帯に相当する(Ⅴ層)。

④明黄褐色硬質ローム層。ＡＴ火山灰が混在するが、ブロック状に含まれてはいない(Ⅵ層)。

⑤褐色硬質ローム層。黒色・赤色のスコリアを含む。立川ローム層第２黒色帯上～中部に相当する(Ⅶ～Ⅸａ層)。

⑥暗褐色硬質ローム層。黒色・赤色のスコリアを多く含み、全体に黒みをおびる。立川ローム層第２黒色帯下部に相当する(Ⅸｃ層)。第１文化層は、本層上部に位置する。

⑦褐色硬質ローム層。赤色のスコリアを含み、若干赤みをおびる。(Ｘａ層)。

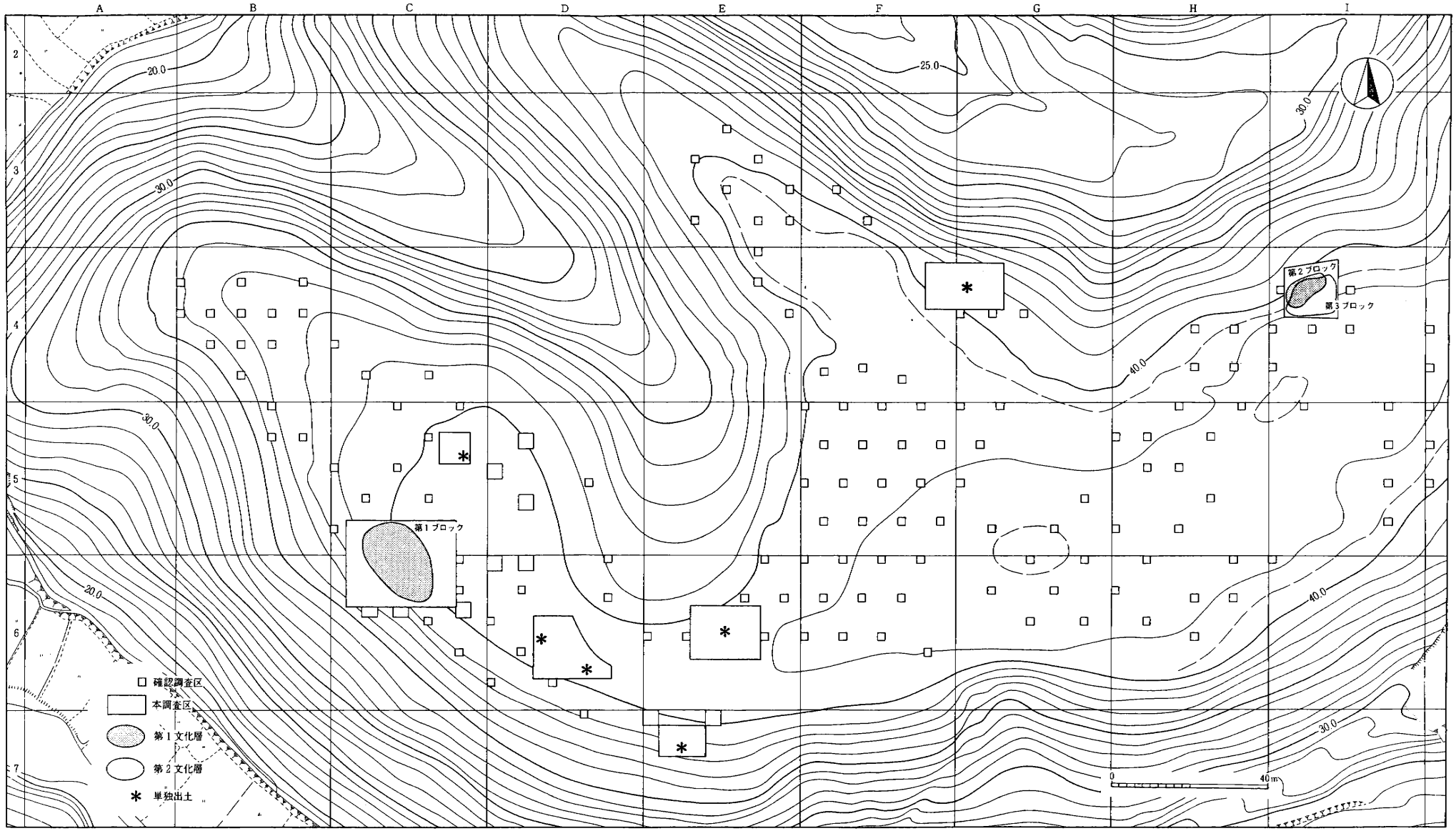
⑧褐色軟質ローム層。スコリアを含まず、粘性をおびる。⑦層に比べてやや暗い。立川ローム層最下部に相当する(Ｘｂ～Ｘｃ層)。

２．第１文化層

本文化層は立川ローム層第２黒色帯下部に包含される石器群で、２か所の石器集中地点がある。両石器集中地点は複数の中・小ブロックによって構成されており、ここではそれぞれをブロック群と呼ぶことにする。

Ａ．第１ブロック群

概要　本ブロック群はＣ５グリット西南部からＣ６グリット西北部にかけてみられ、長軸20ｍ、短軸14ｍ程の長楕円形を呈する。石器群はこの長楕円形の範囲に満遍なく分布するわけではなく、４か所の中規模ブロックが中央の空白部をめぐるドーナツ状になっており、近年、第２黒

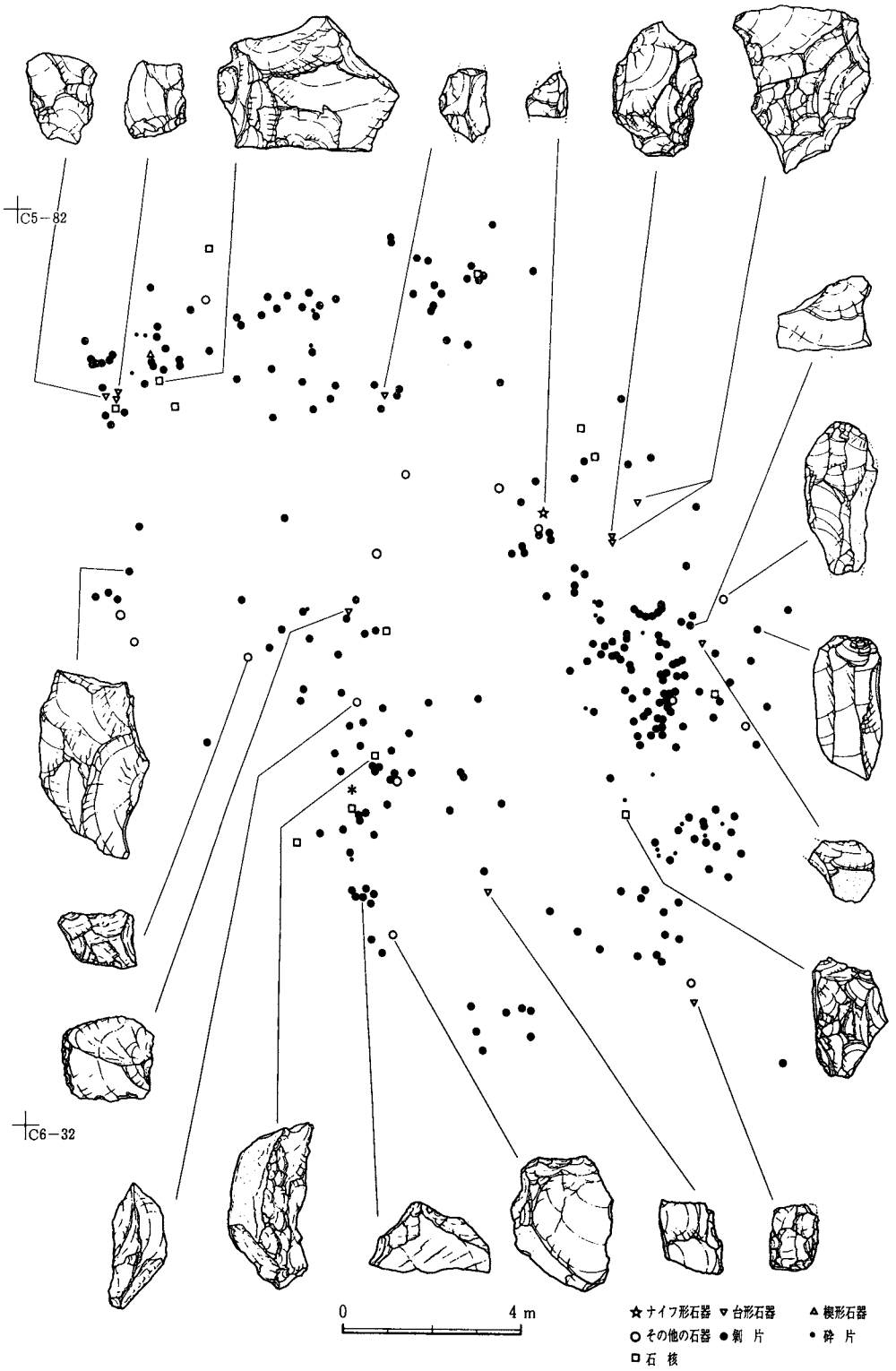


第4図　旧石器時代調査状況

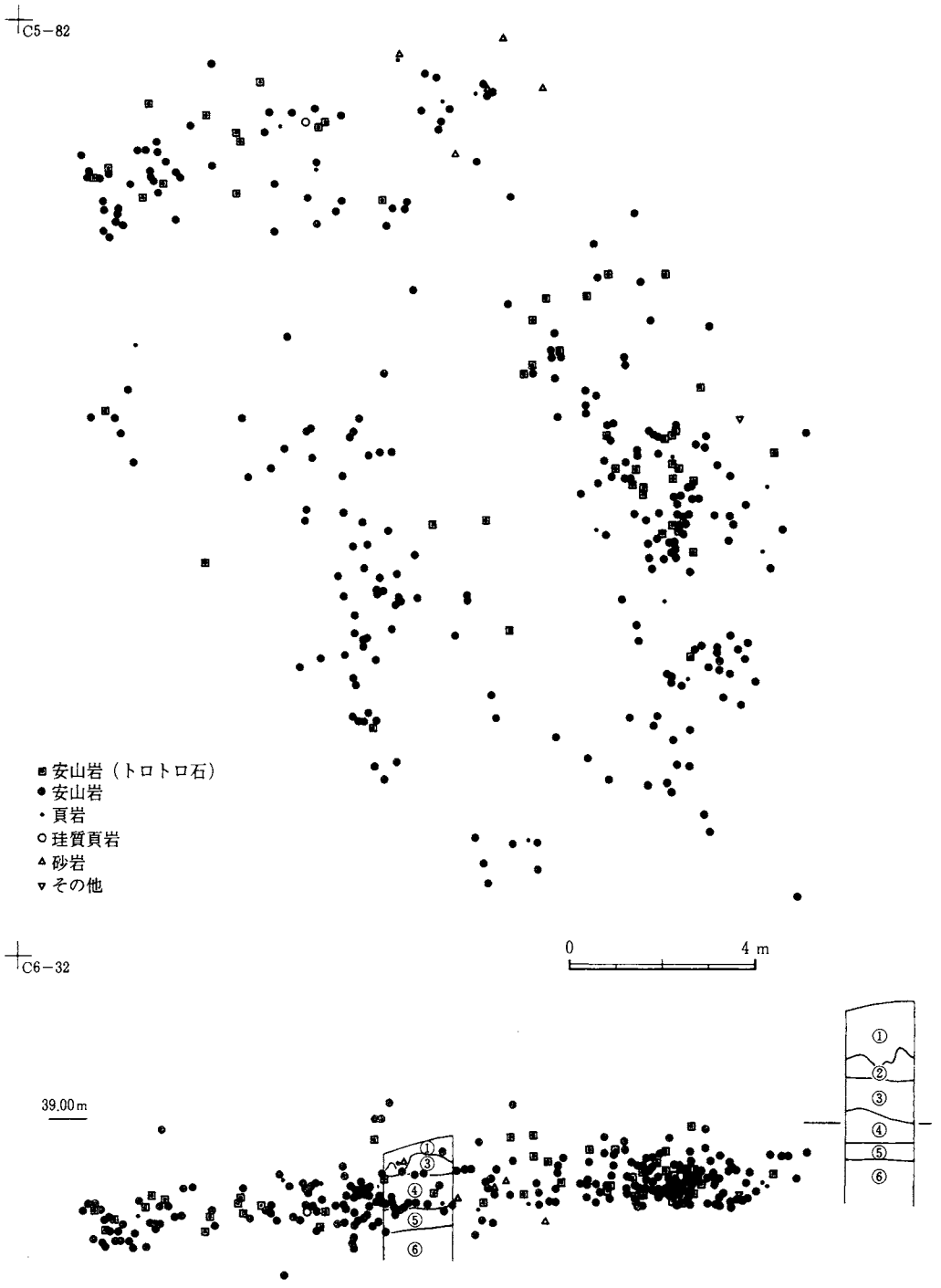
色帯下半部を中心に検出例の増えている「環状ブロック群」（註２）と理解することができる（第５図）。

石器総数は 316点で、内訳は台形石器11点、ナイフ形石器１点、楔形石器１点、加工痕ある剥片５点、使用痕ある剥片８点、剥片257点、砕片17点、石核16点である。石器の形態別分布をみると、台形石器、使用痕ある剥片、剥片、砕片、石核といった点数の多い各形態は、とくに一定区域に偏ることなく分布しており、本ブロック群を４か所の中規模ブロックに分割しても、それぞれは比較的等質な構成内容になっていることがわかる（第５図）。使用石材は安山岩296点（うち46点は灰白色に風化したトロトロ石）、頁岩13点、珪質頁岩１点、砂岩５点、チャート１点で、安山岩が全体の94％を占めている。石材別の分布は、通常の安山岩がブロック群全体に広く分布し、灰白色に風化した安山岩はブロック群西北部と東半部に比較的まとまっている（第６図）。石器群の垂直分布は、平坦部では④層から⑥層にかけて認められる。平均標高は38.235ｍで標準偏差は0.293である。石器群の垂直分布のピークは⑥層上部にあたる（第６図）。

出土遺物（第７図１～第16図79）　１～９は安山岩製の台形石器である。１は横長剥片の打面部を表面側から切断して概略方形とした後、上端の鋭利な１側縁を残して、他の側縁に細かな平坦調整加工を施している。２は横長剥片を素材とし、打面部を表面側から切断した後、切断面に表裏から急斜な調整加工（Blunting）を行っている。３も横長剥片を素材とし、細かな交互剥離によって打面部を除去している。表面左側の大きな剥離面はポジティブ（Positive）な面であり、本石器の素材を剥離した石核が中型厚手の剥片素材であることがわかる。４は長幅比が１：１ほどの寸詰まりの縦長剥片を素材とし、打面とは反対の縁辺に細かな調整加工を裏面から施している。打面はそのまま残されている。５も４と共通した素材、加工部位である。上縁には微細な刃こぼれがみられる。６は横長剥片を素材とし、打面側には裏面に平坦で粗い調整加工がなされている。打面とは反対側の側縁には表面側に細かく角度の急な剥離がみられる。裏面の調整痕は打瘤の高まりを除去したものであろう。打面は自然面である。７は横長剥片の打面部とその反対側にわずかな調整痕がみられる。背面構成をみると、本石器の素材は求心的な打点移動によって剥離されたことがわかる。８は台形石器の未成品である。横長剥片を素材とし、交互剥離によって厚い打面を除去している。左側縁の調整途上で半分に割れ、製作を放棄している。表面には多方向からの一次面がみられることから、素材は７と同様、求心的な剥離手順の石核から得られたことがわかる。９は横長剥片を素材とし、打面側の裏面に平坦な調整が施されている。台形石器全体をみると、６・８は中・大型で平坦な調整痕が２側縁にわたってみられるが、その他は小型で調整痕が周辺部の一部に限られるという差異があり、大きさと調整加工のあり方から２群に大別できる。なお、３・５以外は鋭利な側縁（刃部）に明瞭な使用痕はみられない。

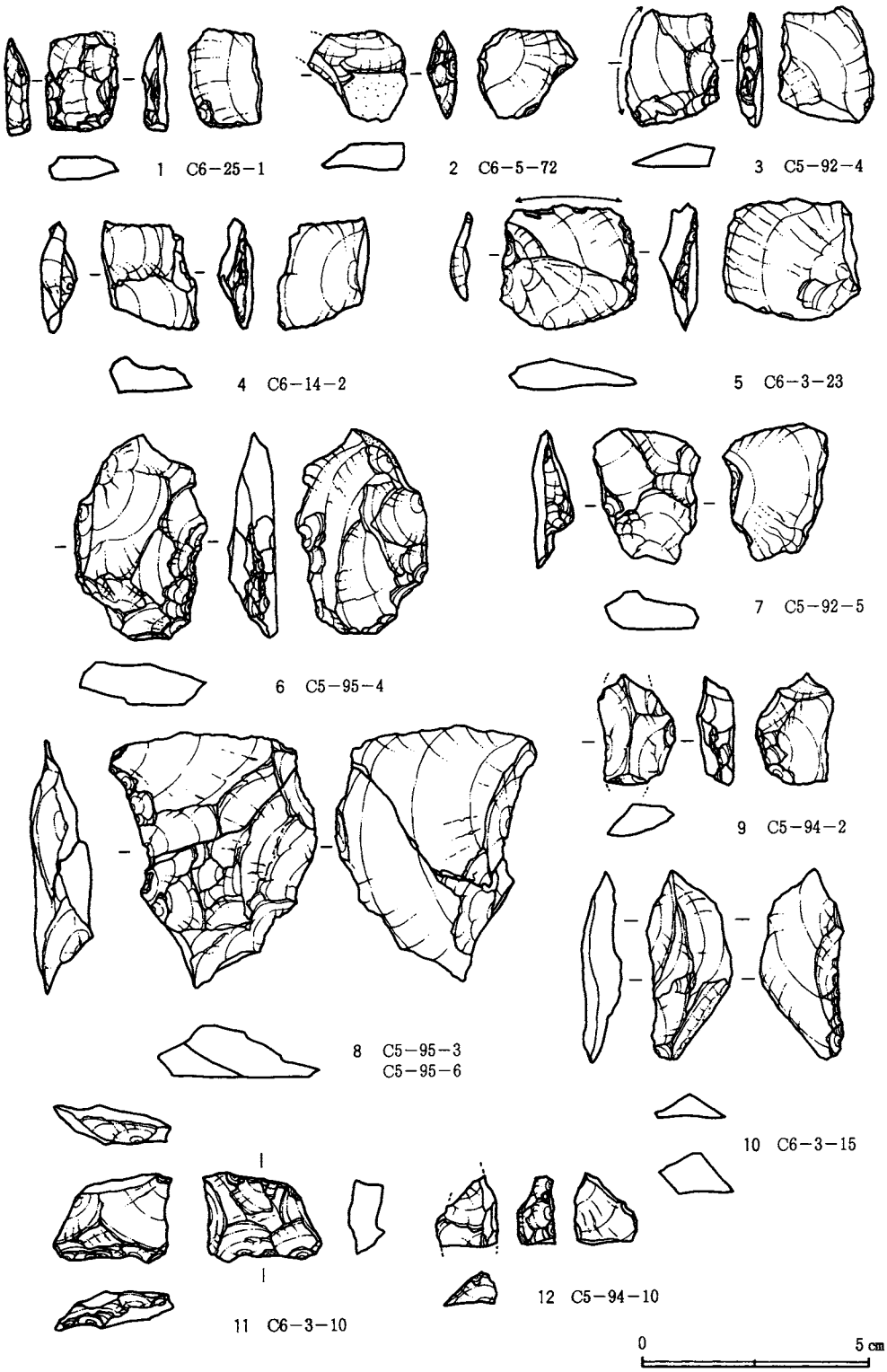


第5図　第1ブロック群石器別分布図

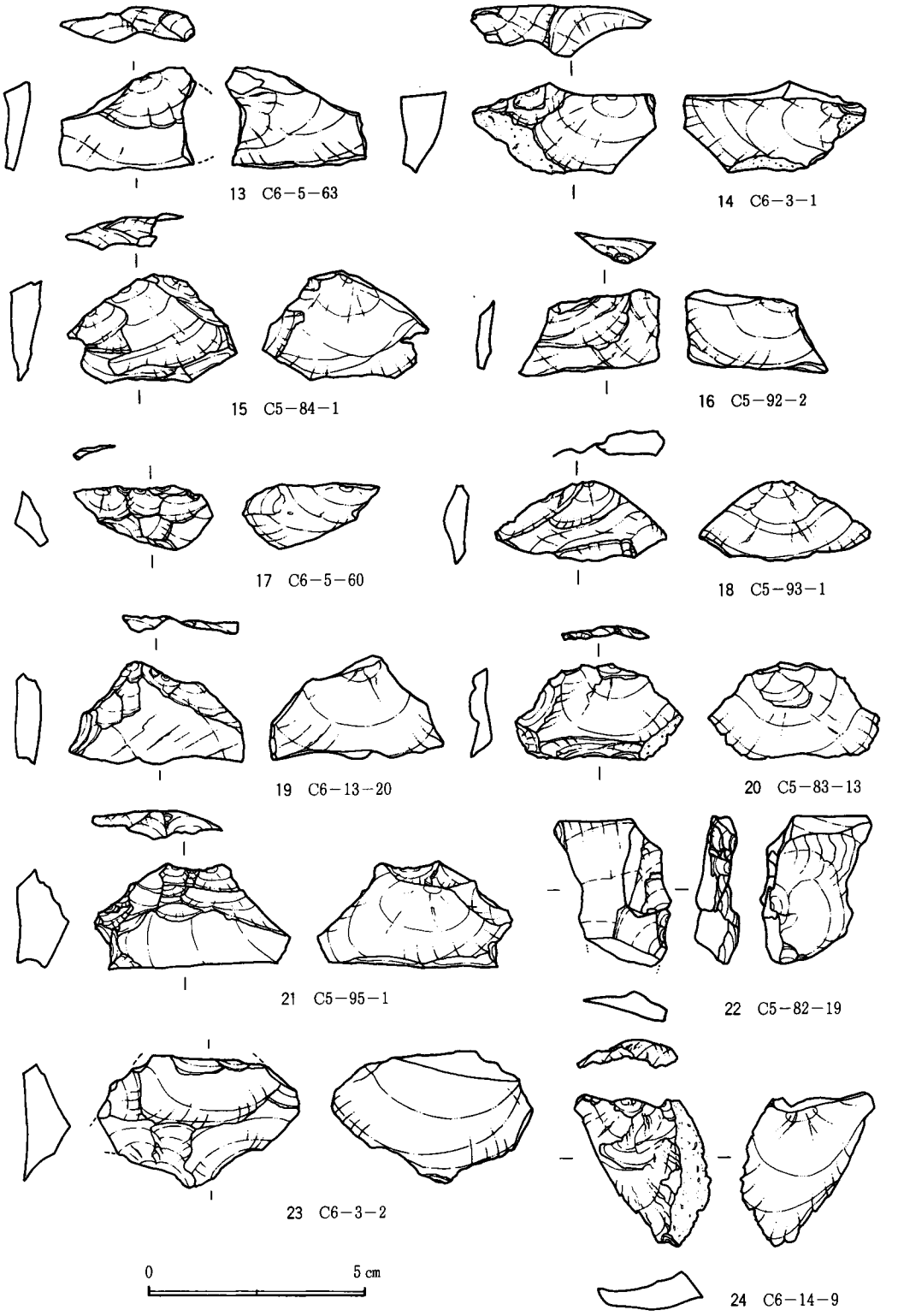


第6図　第1ブロック群石材別分布図

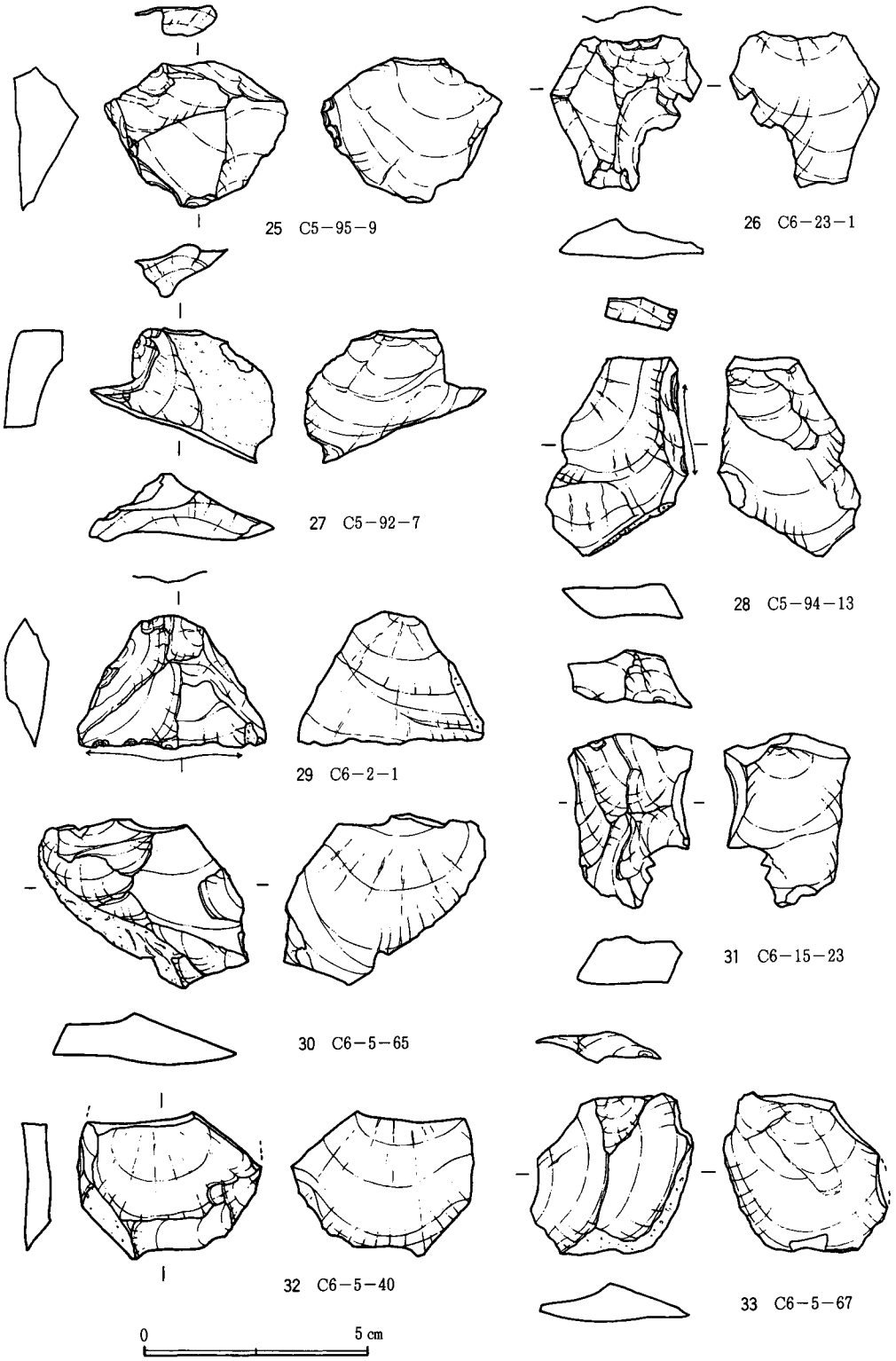
10・11は加工痕ある剝片である。10は安山岩製の横長剝片を素材とし、裏面の一部に平坦な調整がみられる。調整部位や調整痕の特徴は台形石器にきわめて類似する。表面右側には石核素材時のポジティブな面が認められる。11は表裏面に平坦な調整の施された石器である。裏面



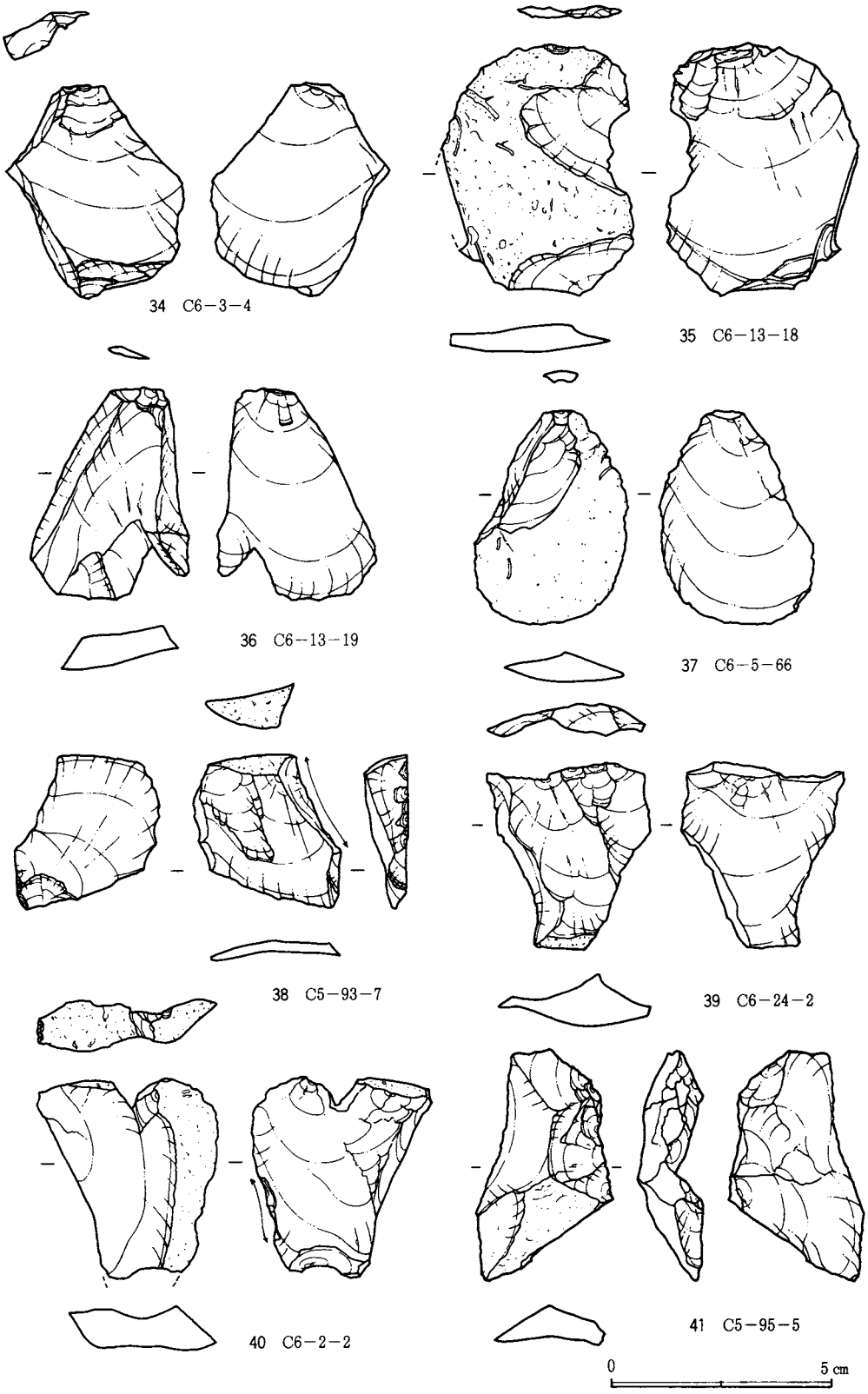
第7図　第1ブロック群出土石器(1)



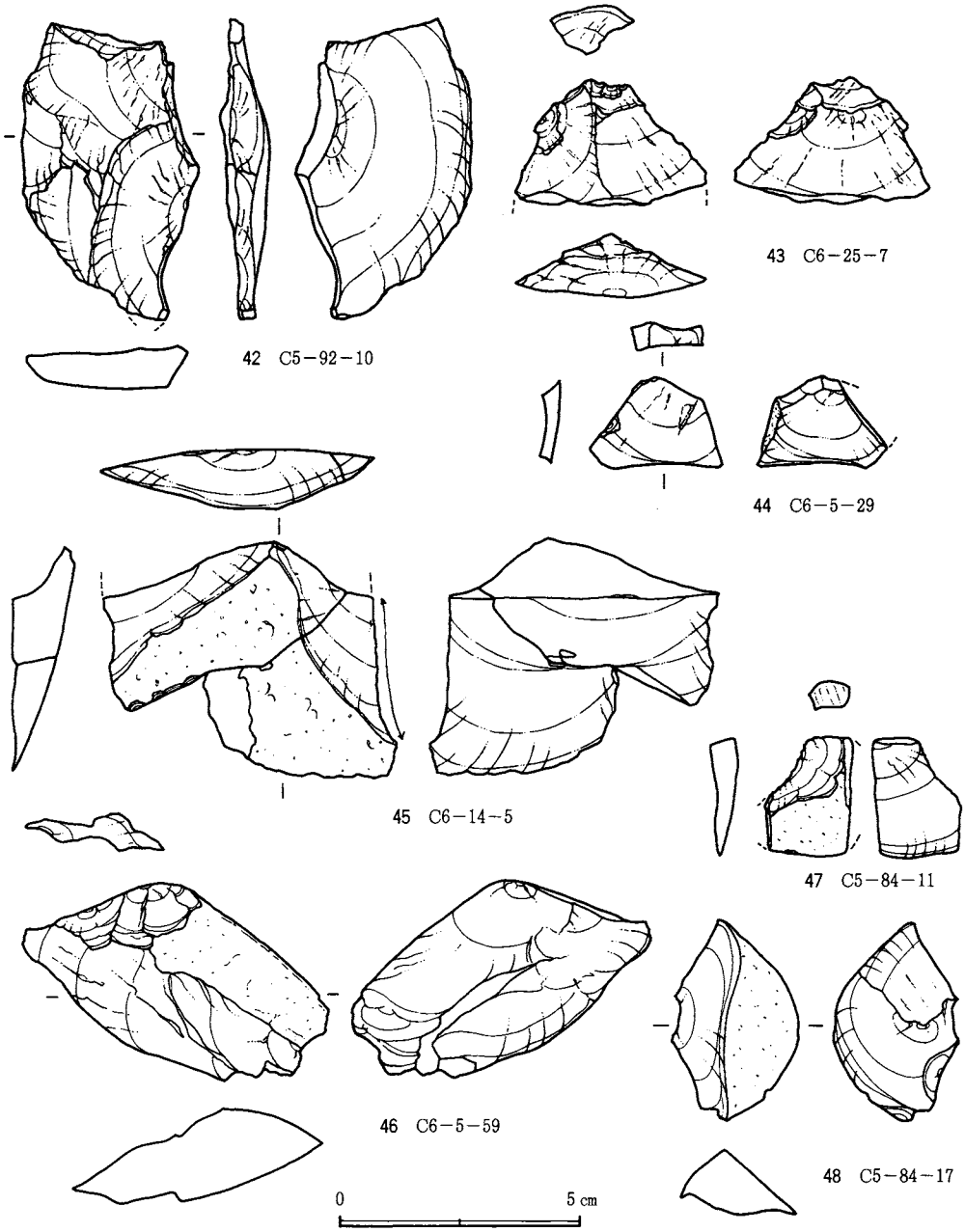
第8図　第1ブロック群出土石器(2)



第9図　第1ブロック群出土石器(3)



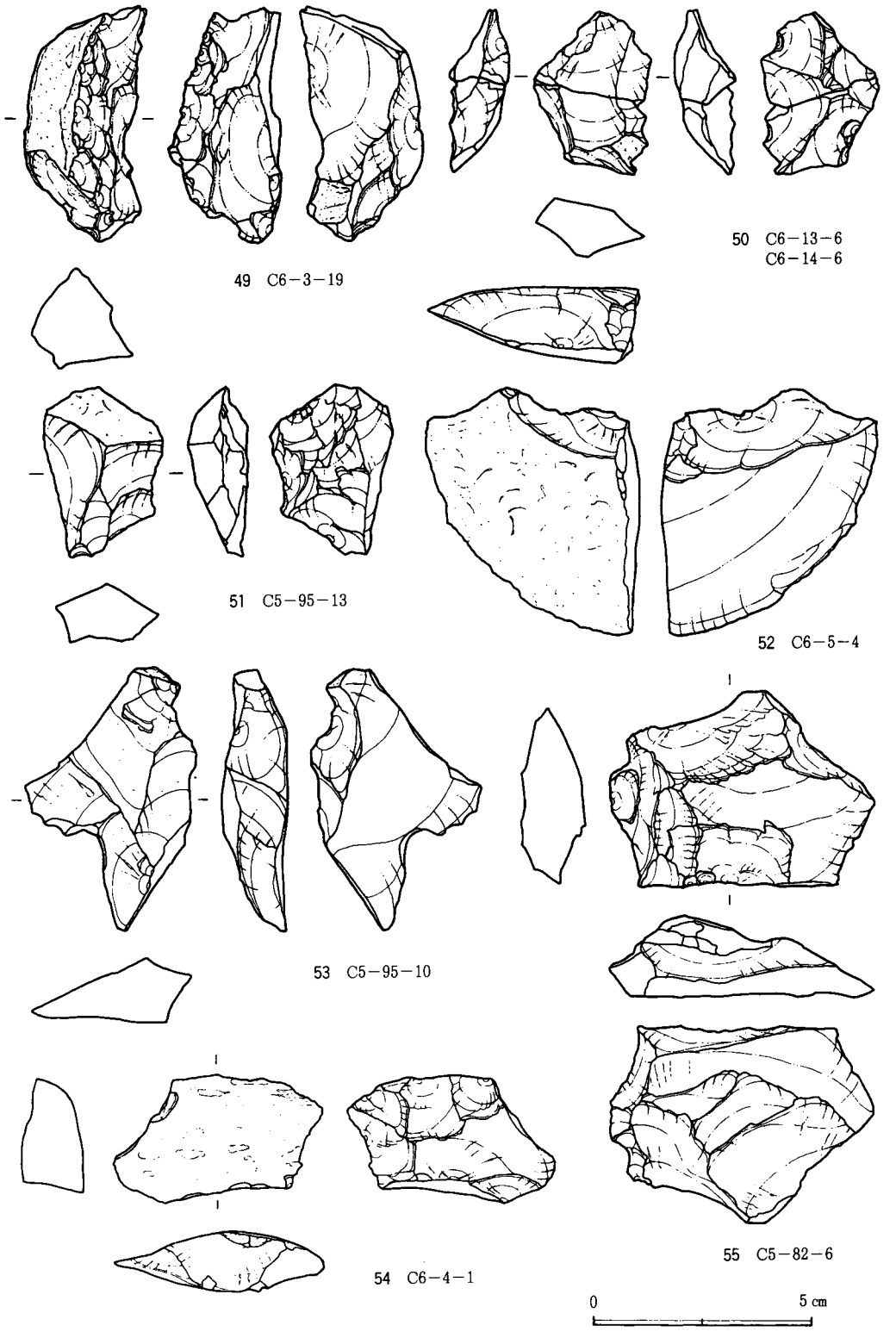
第10図　第１ブロック群出土石器(4)



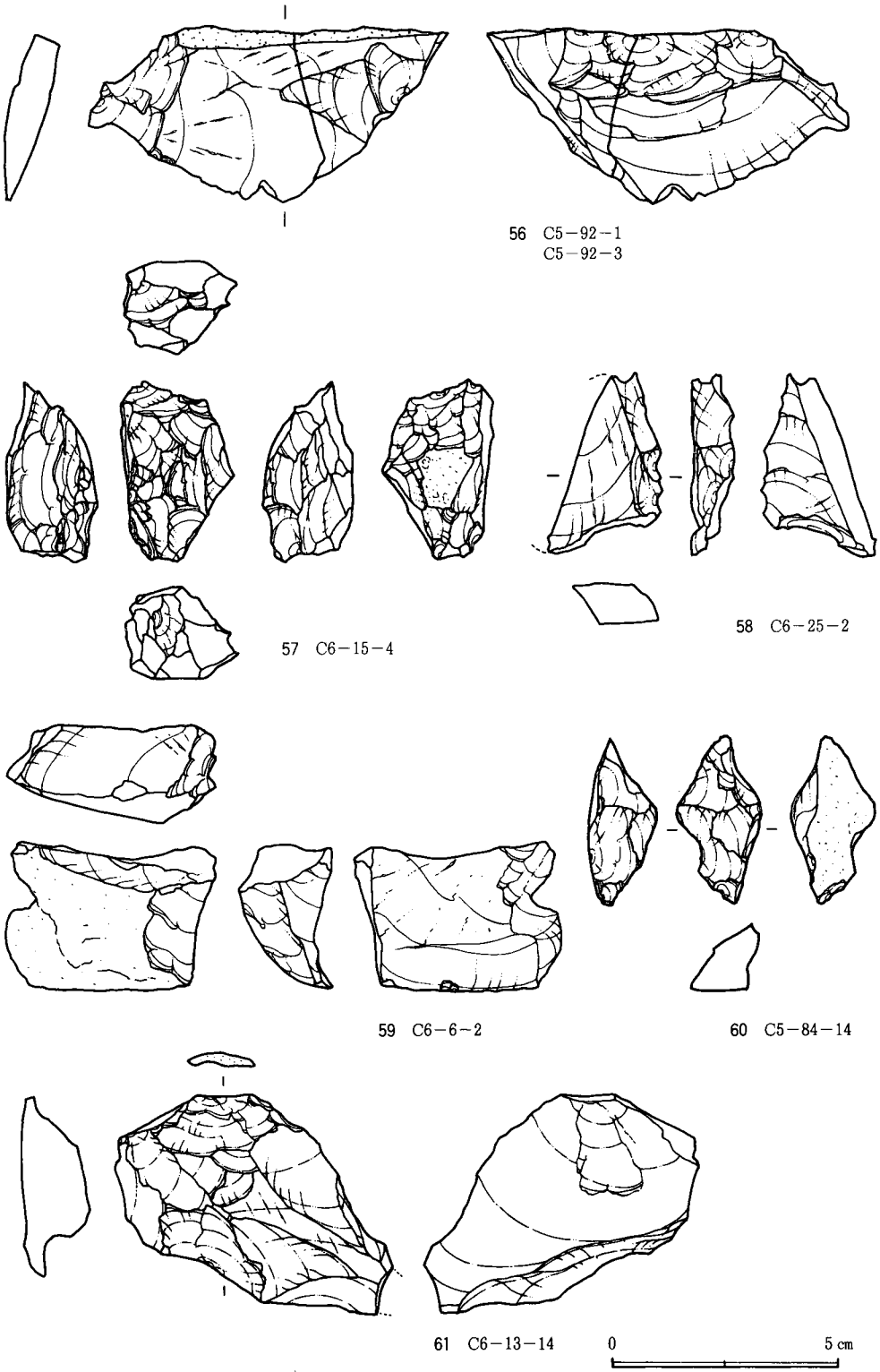
第11図　第1ブロック群出土石器(5)

中央には素材の主要剝離面が残され、表面にはそれと直交する剝離方面の一次面がみられることから、不定型の横長剝片を素材としたものと思われる。調整痕の形状からみて、台形石器の欠損品の可能性がある。

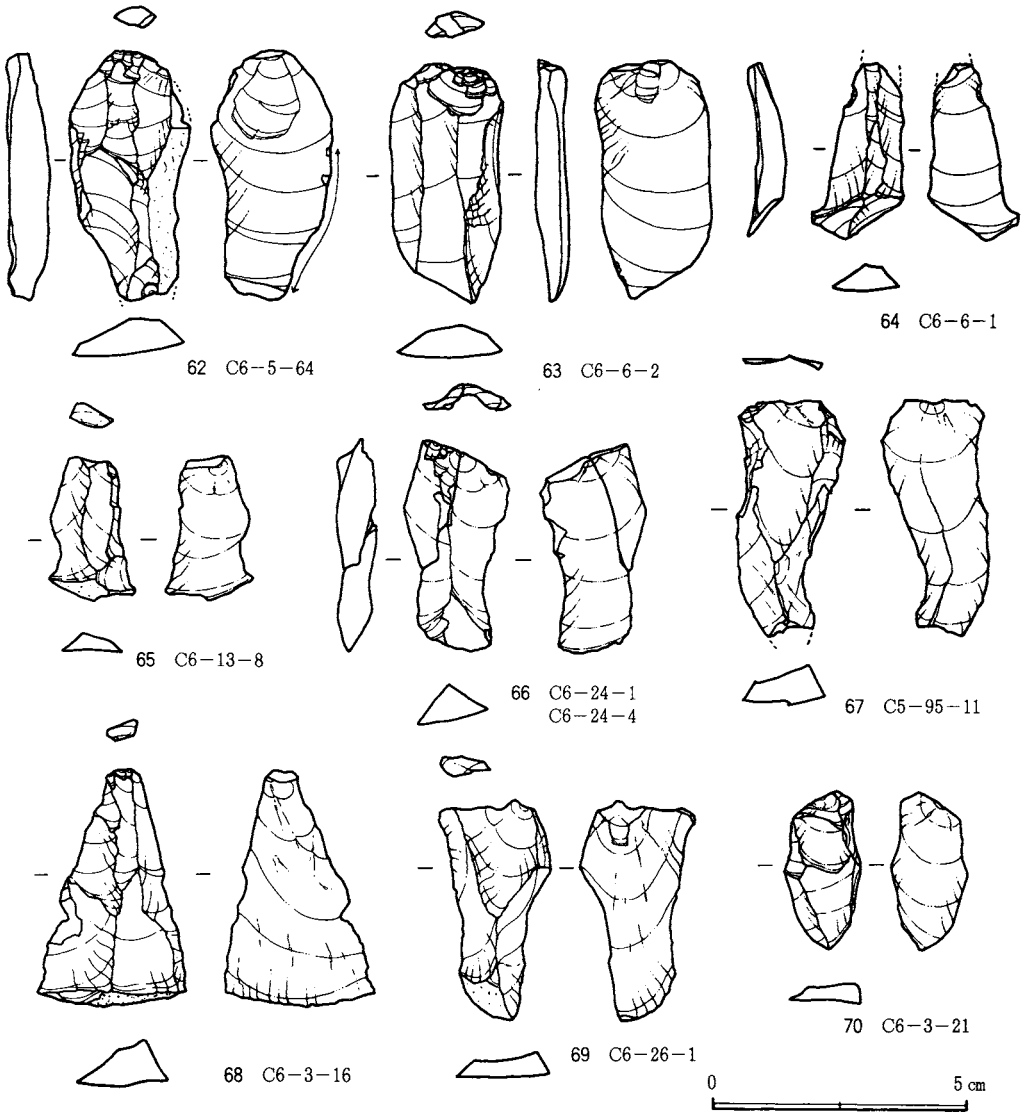
12は安山岩製のナイフ形石器である。素材、全体の形状は欠損品のため不明である。表面右側縁に急斜な調整加工がみられる。



第12図　第１ブロック群出土石器(6)

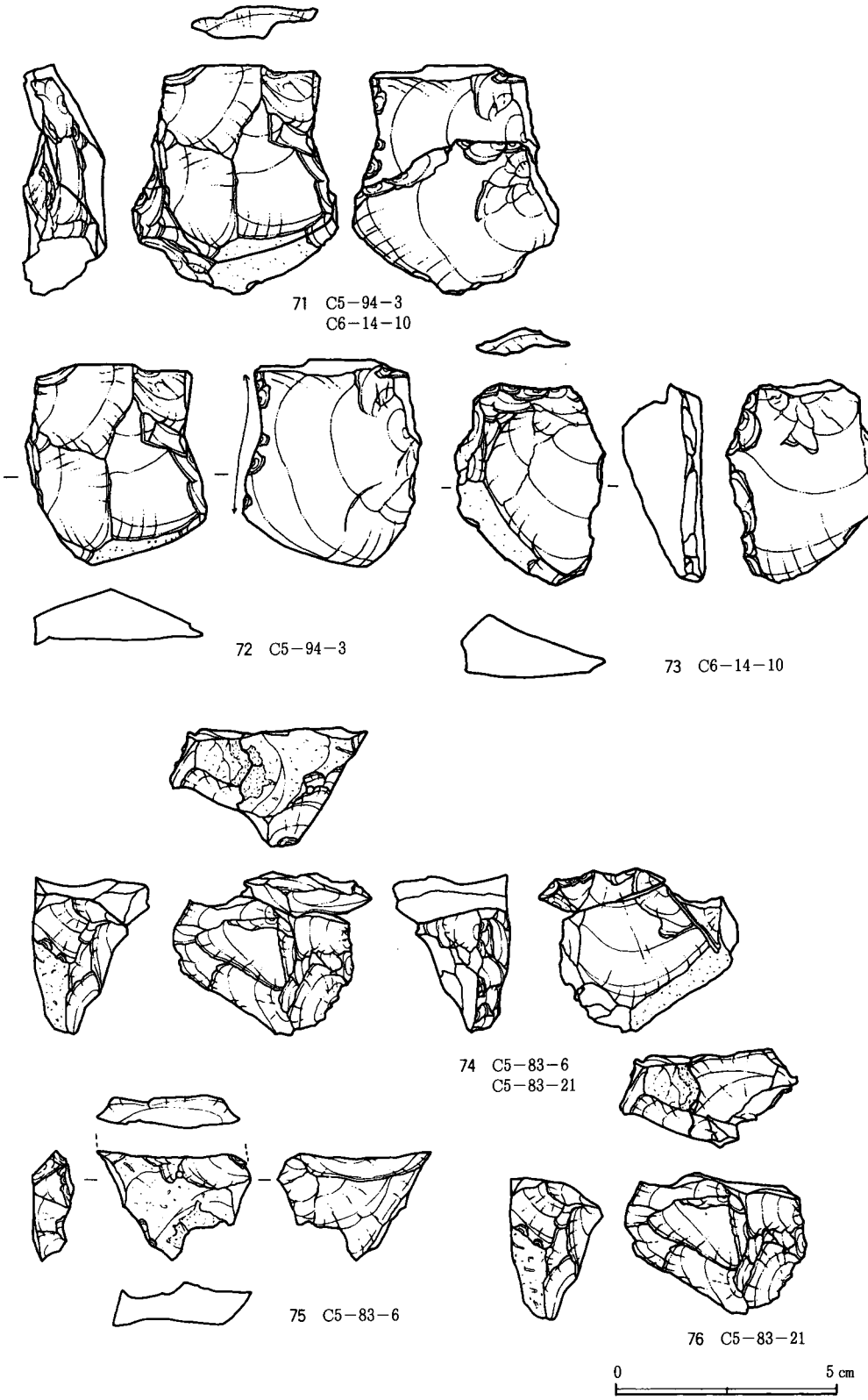


第13図　第１ブロック群出土石器(7)

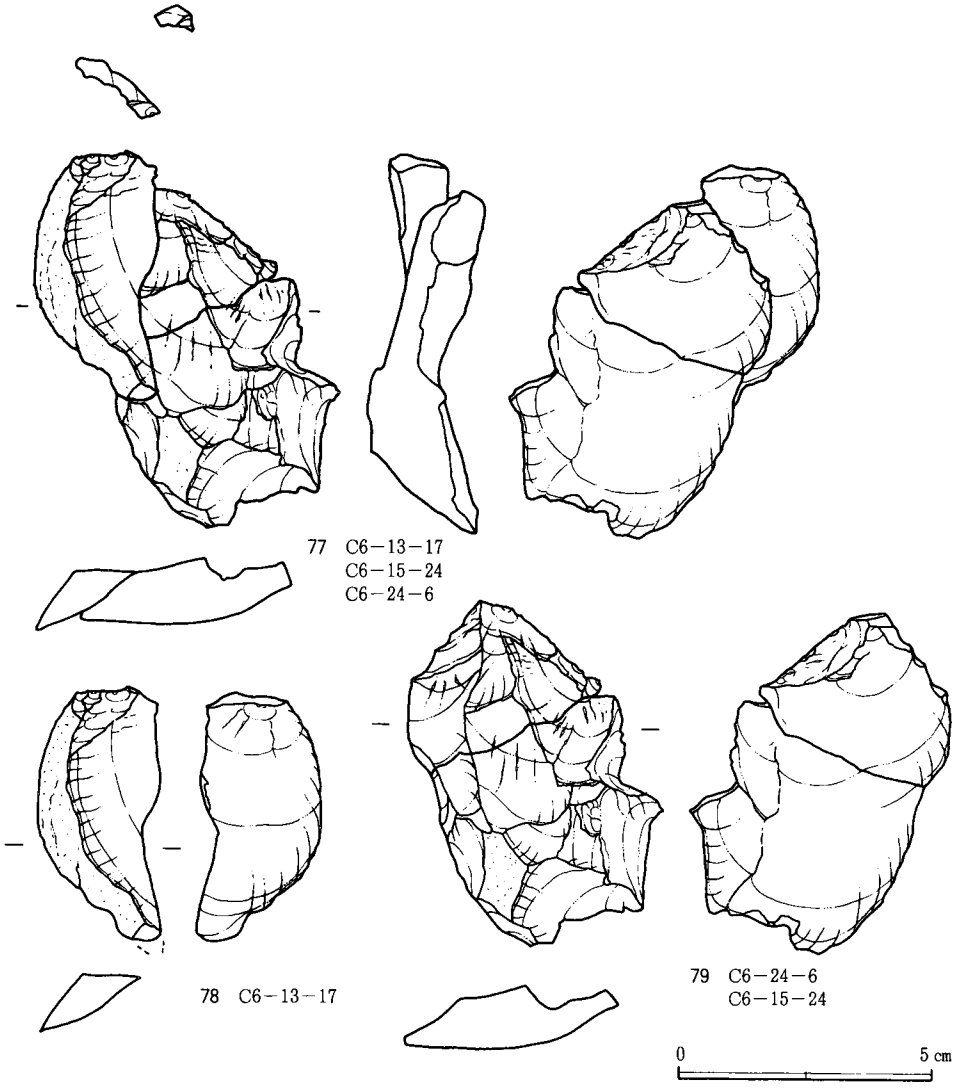


第14図　第１ブロック群出土石器(8)

13～45は安山岩製の横長剝片である。打面は２・３枚の大きな剝離面で構成され、その交点の稜上を打点にする例が多い。表面が裏面（主要剝離面）と同じ方向の剝離面のみで構成されるものの他に、裏面とは直交、あるいは逆方向の剝離面を含むものがあり、交互剝離の手法とともに求心的な打点移動による石核から得られた剝片類と考えられる。また、表面にポジティブで大型の剝離面をもつ例があり、剝片素材の石核から剝離されたことがわかる。28・29・38・40・45の側縁には使用痕が認められる。46は灰白色に風化した安山岩製、47・48は淡黄色を呈する砂岩製の横長剝片である。例数が少ないため、剝離手法は不明である。第１ブロック群の剝片は、長さの平均値が2.12cm、標準偏差1.23、幅の平均値が2.34cm、標準偏差1.24で、長幅比が１：１の方形に近い形状である。49～52、54～58、60・61は安山岩製の横長剝片石核である。



第15図　第１ブロック群出土石器(9)



第16図　第１ブロック群出土石器(10)

いずれも大・中型厚手の剝片を素材とし、交互剝離と求心的な打点移動が顕著に認められる。13～45の横長剝片に対応する内容をもつ。53・59は灰白色に風化した軟質な安山岩製の石核である。石核素材や剝片の剝離手法は通常の安山岩製の石核と共通した内容である。

62～70は縦長剝片である。62は黒灰色を呈するチャート製の縦長剝片（石刃）を用いた使用痕ある剝片である。打面は平坦で、細かな調整はみられない。表面には上下両方向からの剝離面があり、両設打面の石核から剝離されたことがわかる。頭部調整が若干認められる。裏面右側縁に微細な刃こぼれがみられる。右上端部と下端部は欠損する。63は淡黄色に風化した頁岩製の縦長剝片である。打面は平坦な１枚の剝離面である。両側縁はきわめて鋭利であるが刃こ

ぼれはみられない。64も63と類似する頁岩製の縦長剥片である。表面は上下両方向からの剥離面によって構成される。65～70は安山岩製の縦長剥片である。打面は１枚の平坦打面と２・３枚の複剥離面で構成されるものの両者がある。表面は裏面と同じ剥離方向の剥離面のみで構成される。なお、縦長剥片を剥離した石核はみられない。

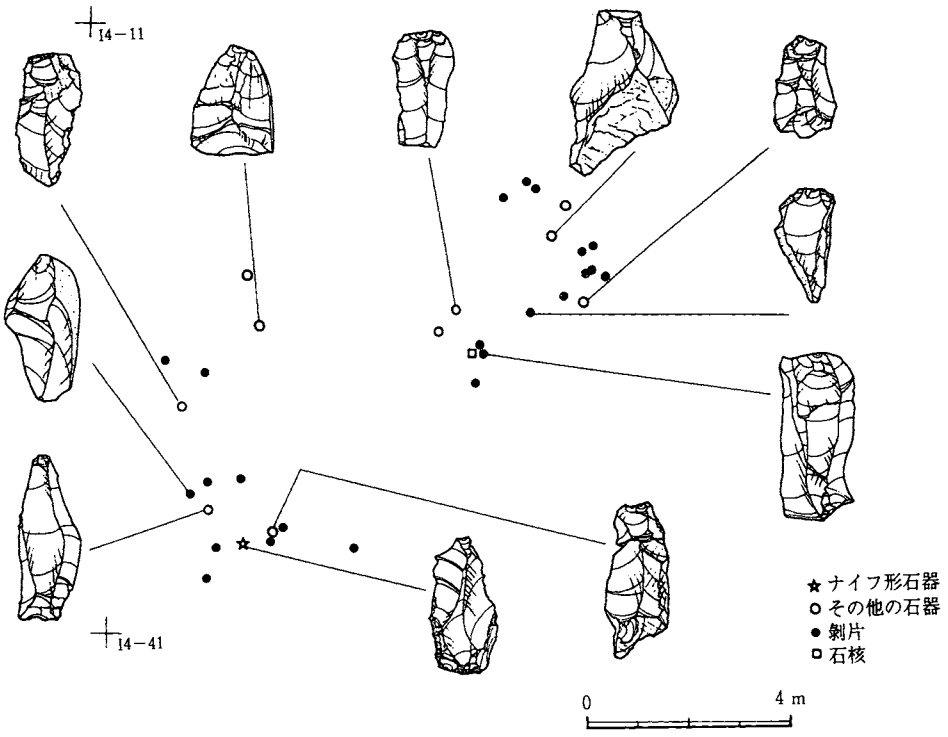
71は安山岩製の使用痕ある剥片(72)と加工痕ある剥片１点(73)の接合資料である。71の表面をみると、その中央には上端の打面を用いた剥離面と、それとは90度異なる剥離方向の剥離面がみられ、両打面が絶えず行き来している状況がうかがえる。72の裏面左側縁には刃こぼれが認められる。73は裏面左側縁には大きさの一定しない調整痕がみられる。74は安山岩製の剥片１点(75)と石核１点(76)の接合資料である。打面と作業面を頻繁に転移させながら小型で不定型の横長剥片や長幅比が１：１ほどの寸詰まりの縦長剥片を生産したものと思われる。77は安山岩の縦長剥片１点(78)と横長剥片１点(79)の接合資料である。77の表面をみると、まず右から左へ向かって打点が移動して剥片が剥離され、次いで78が剥離される。その後、打点が右にもどり79が剥離されていることがわかる。表面の剥離面は横長のものが中心で、78も本来は横長剥片を意図して剥離されたようである。打面調整や頭部調整、側面調整は認められず、求心的に打点を移動しつつ、打面と作業面を入れ替える交互剥離によって横長剥片を生産する技術が復元できる。

B．第２ブロック群

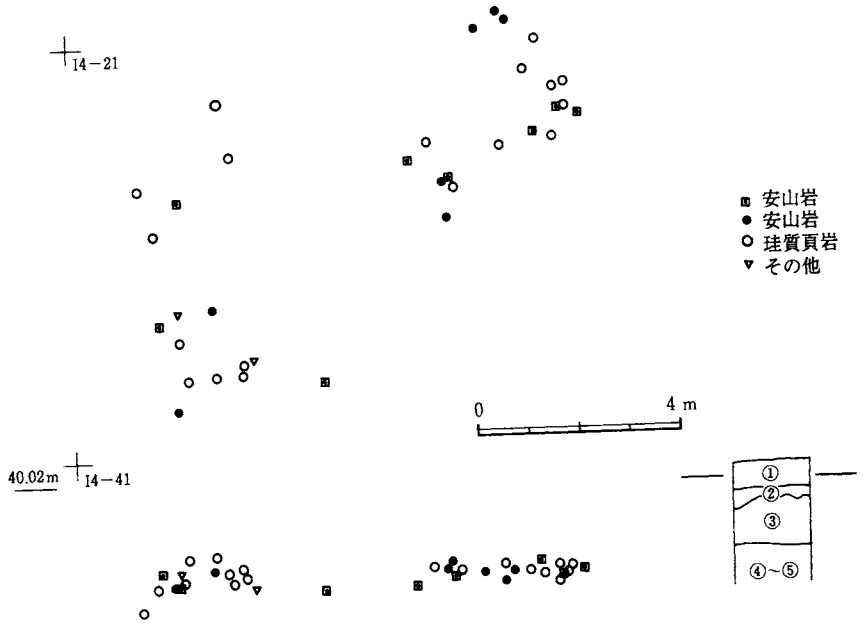
概要　本ブロック群はＩ４グリッド東北部に位置し、２か所の小ブロックにより構成される(第17図)。第２ａブロックは長軸４ｍ、短軸３ｍの楕円形を呈し、16点の石器群が分布する。第２ｂブロックは長軸５ｍ、短軸３ｍの楕円形で、19点の石器群が分布する。両ブロック間には幅３ｍほどの明瞭な空白がある。ａ・ｂ両ブロック間で母岩の共有関係はみられないが、石器組成、石材構成は類似する。本ブロック群の特徴は、珪質頁岩製や頁岩製の利器、および形状の整った縦長剥片（石刃）が主体を占め、砕片や石核を含まないことがあげられる。各石器群は母岩単位でみると単独資料が中心であることから、他の遺跡で製作された石器類が搬入されたと思われる。

第２ブロックは石器総数35点で、その内訳はナイフ形石器１点、加工痕ある剥片２点、使用痕ある剥片８点、剥片22点、砕片１点、石核１点である。使用石材は珪質頁岩18点、安山岩14点（うち灰白色に風化したトロトロ石７点)、砂岩１点、粘板岩１点、玉髄１点である。石器群の垂直分布は、③層から④－⑤層にかけてみられる。平均標高は39.141ｍで標準偏差は0.138である。石器群の垂直分布のピークは④－⑤層上部にあたる（第18図)。

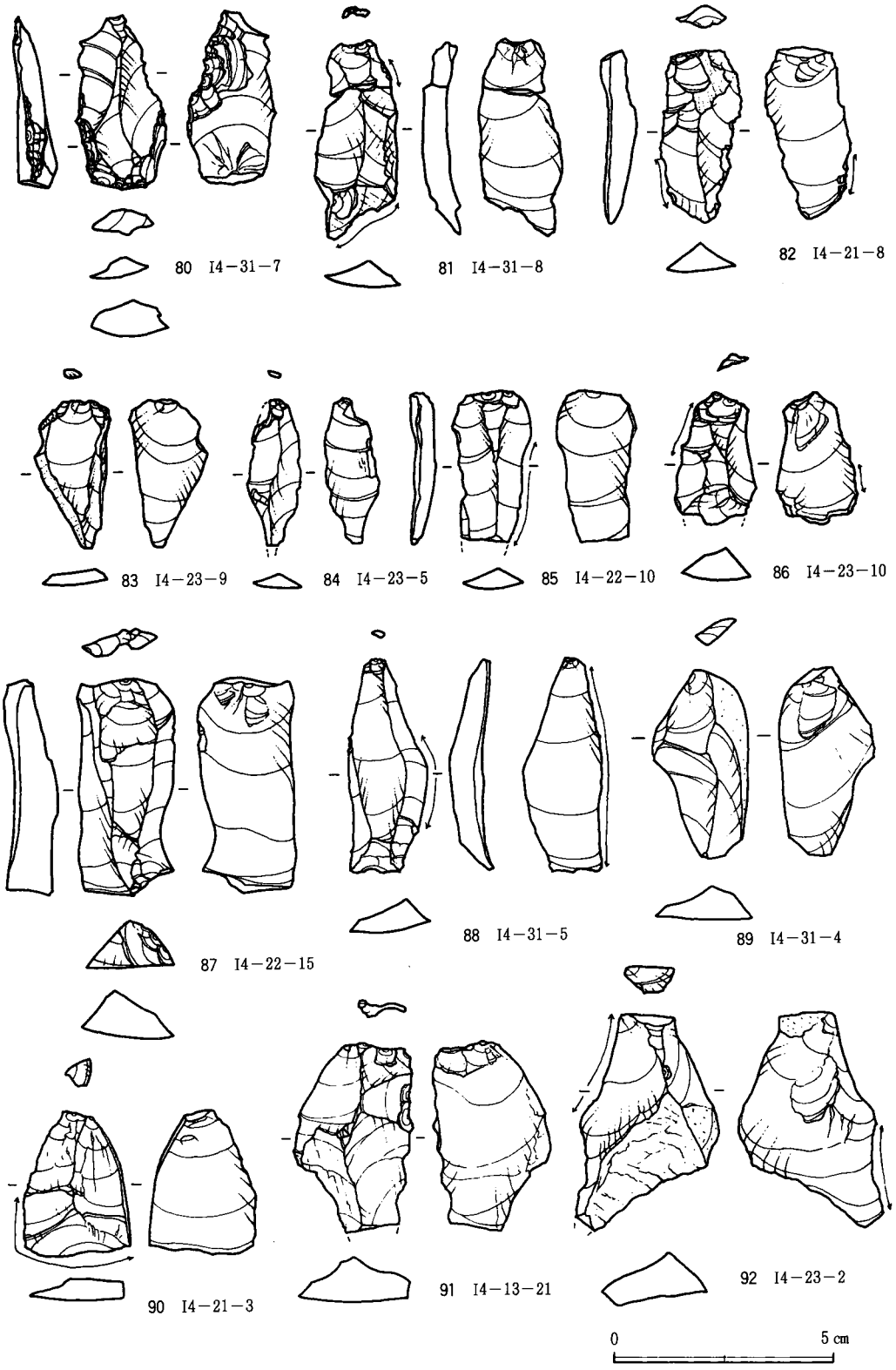
出土遺物（第19図80～第20図 100）　80はナイフ形石器である。暗褐色の珪質頁岩を用いた縦長剥片を素材とし、基部左側縁に細かな調整が施されている。裏面の左側には粗い剥離痕が



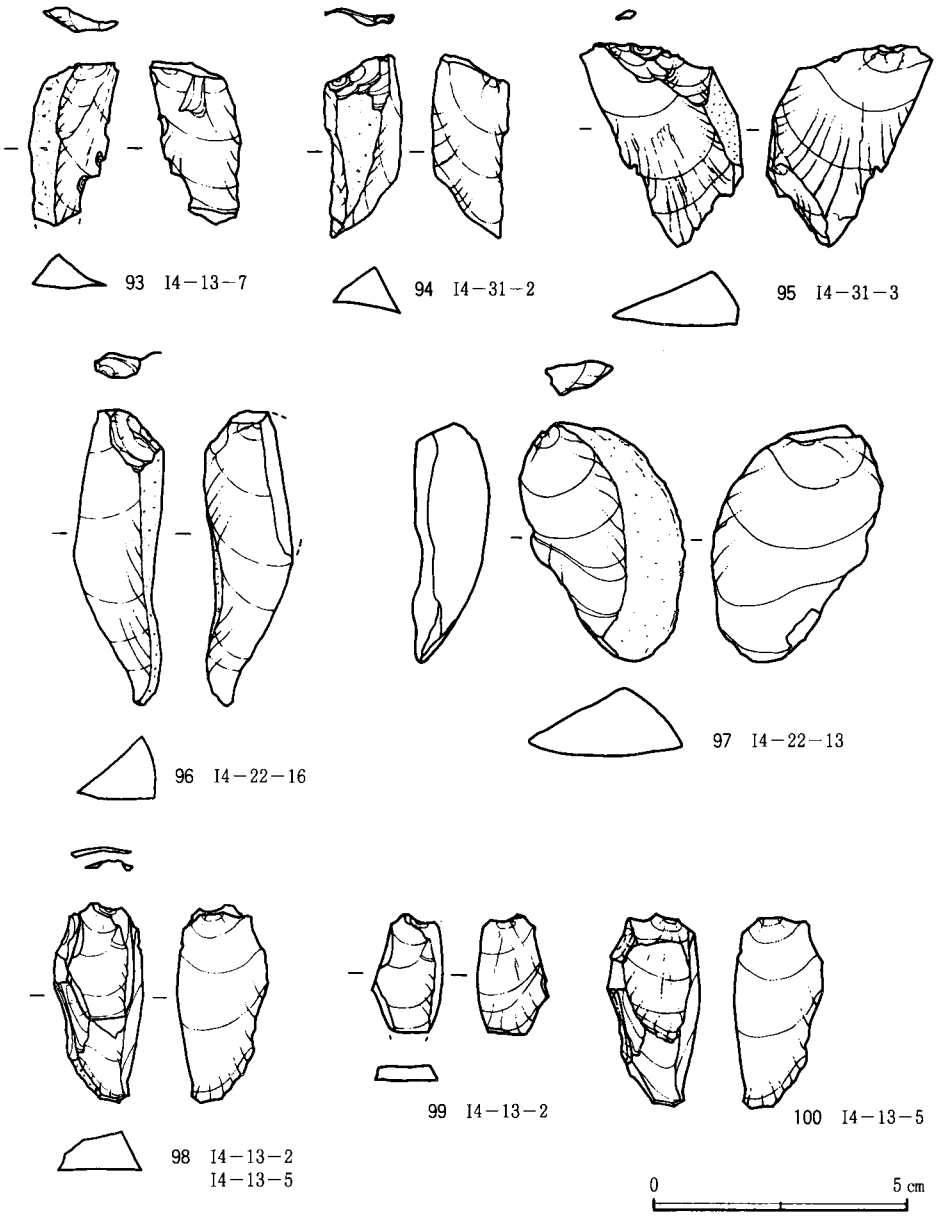
第17図　第２ブロック群石器別分布図



第18図　第２ブロック群石材別分布図



第19図　第２ブロック群出土石器(1)



第20図　第２ブロック群出土石器(2)

みられるが、調整加工なのか使用による欠損なのかは不明である。素材は平坦打面で頭部調整のみられる縦長剝片である。表面は主要剝離面と同一方向の剝離面で構成される。81～88・90～92は珪質頁岩製の縦長剝片、およびそれを利用した使用痕ある剝片である。81・82・85・86・88・90・92の鋭利な側縁には微細な刃こぼれがみられる。打面は平坦な１枚の剝離面で、細かな打面調整はみられない。また、頭部調整や石核の側面調整も認められない。表面は裏面と同一方向の剝離面のみで構成されるもの（81～83・85・92）と逆方向の剝離面を含むもの（84・86～88・90～91）の両者がある。剝片の平面形は両側縁がほぼ平行するものと、打面直下がゆ

るやかに外湾するものとがある。93・94・96は通常の安山岩製、95は粘板岩製、89・97は灰白色に風化した安山岩製の縦長剝片である。打面はいずれも平坦な1枚の剝離面で、打面調整や頭部調整はみられない。98は安山岩製の縦長剝片2点の接合資料である。99・100と同一打面から連続して縦長剝片を剝離している。

3．第2文化層

本文化層は立川ローム層のソフトローム層下部からハードローム層上部にかけて包含され、1か所のブロック群が検出されている。武蔵野台地におけるⅣ層下部の石器群に対応する内容である。

A．第3ブロック群

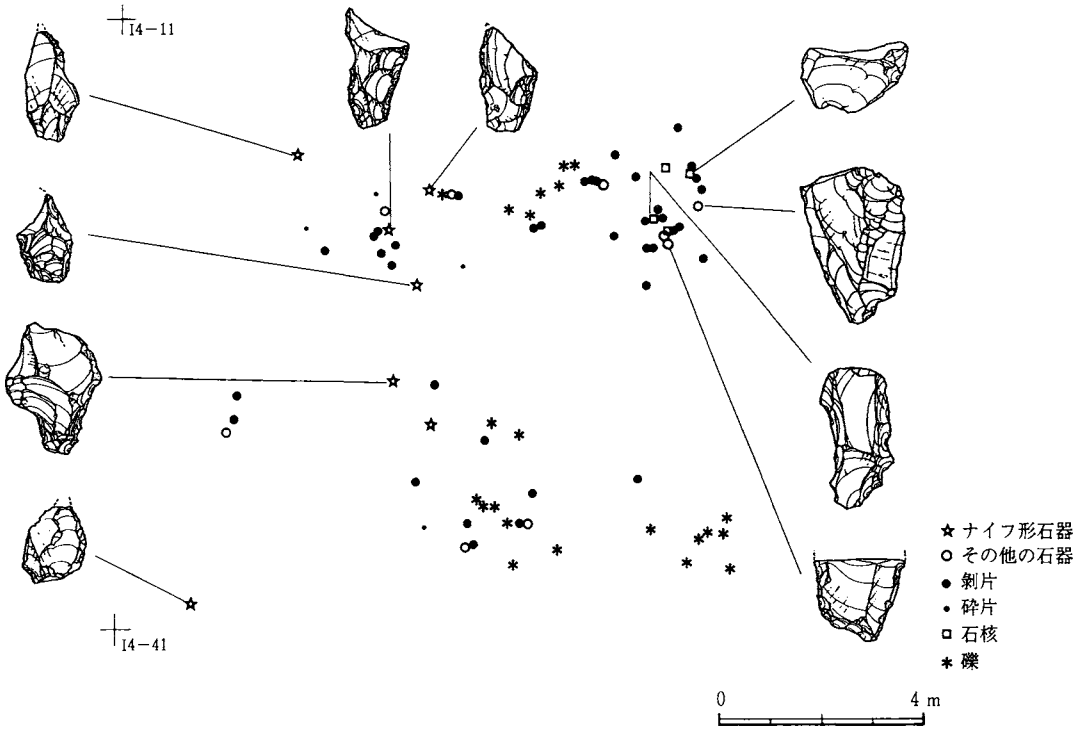
概要　本ブロック群はI4グリッド東北部にあり、長軸10m、短軸9mほどの馬蹄形の範囲に石器、礫が散漫に分布する。ブロック群の東部と中央部には広い空白がみられる（第21図）。なお、平面的に第2ブロック群と重なる。

石器総数は85点で、内訳はナイフ形石器7点、掻器2点、加工痕ある剝片1点、使用痕ある剝片6点、剝片40点、砕片2点、石核4点、礫23点である。各石器形態ともとくに集中することなく、散漫に分布する。石材は黒曜石49点、安山岩5点（うち灰白色に風化したトロトロ石3点）、頁岩2点、珪質頁岩3点、砂岩26点で、黒曜石が主体を占める。礫は焼けて細かく破砕され、南北に離れて分布するが、両者は頻繁に接合しており、石器も含めて互いに密接な関係がうかがえる。垂直分布は石器群・礫群ともに①層から③層にかけてみられる。石器群は平均標高は39.775mで標準偏差は0.164である。これは②－③層にあたる。一方、礫群は平均標高39.809m、標準偏差0.120で、これは①層下部にあたる（第22図）。

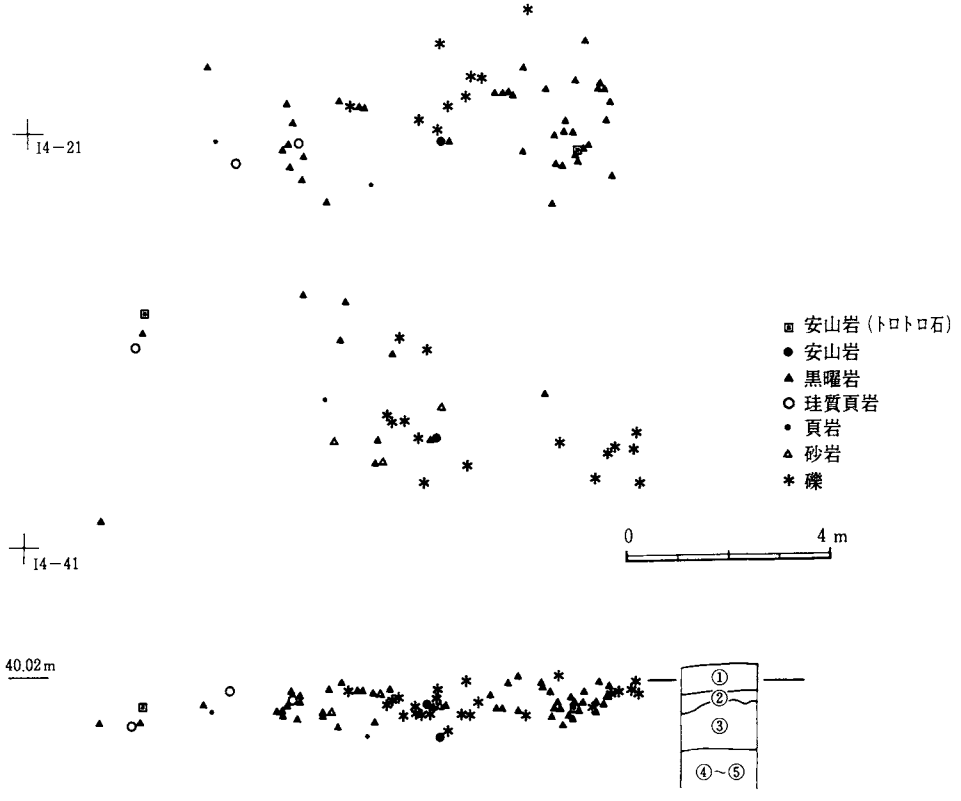
出土遺物（第23図101～第24図118）

101～106はナイフ形石器である。101は黒曜石製で薄身の縦長剝片（石刃）を素材とし、先端と基部に細かな調整加工を施している。打面は基部側の調整加工によって除去されている。

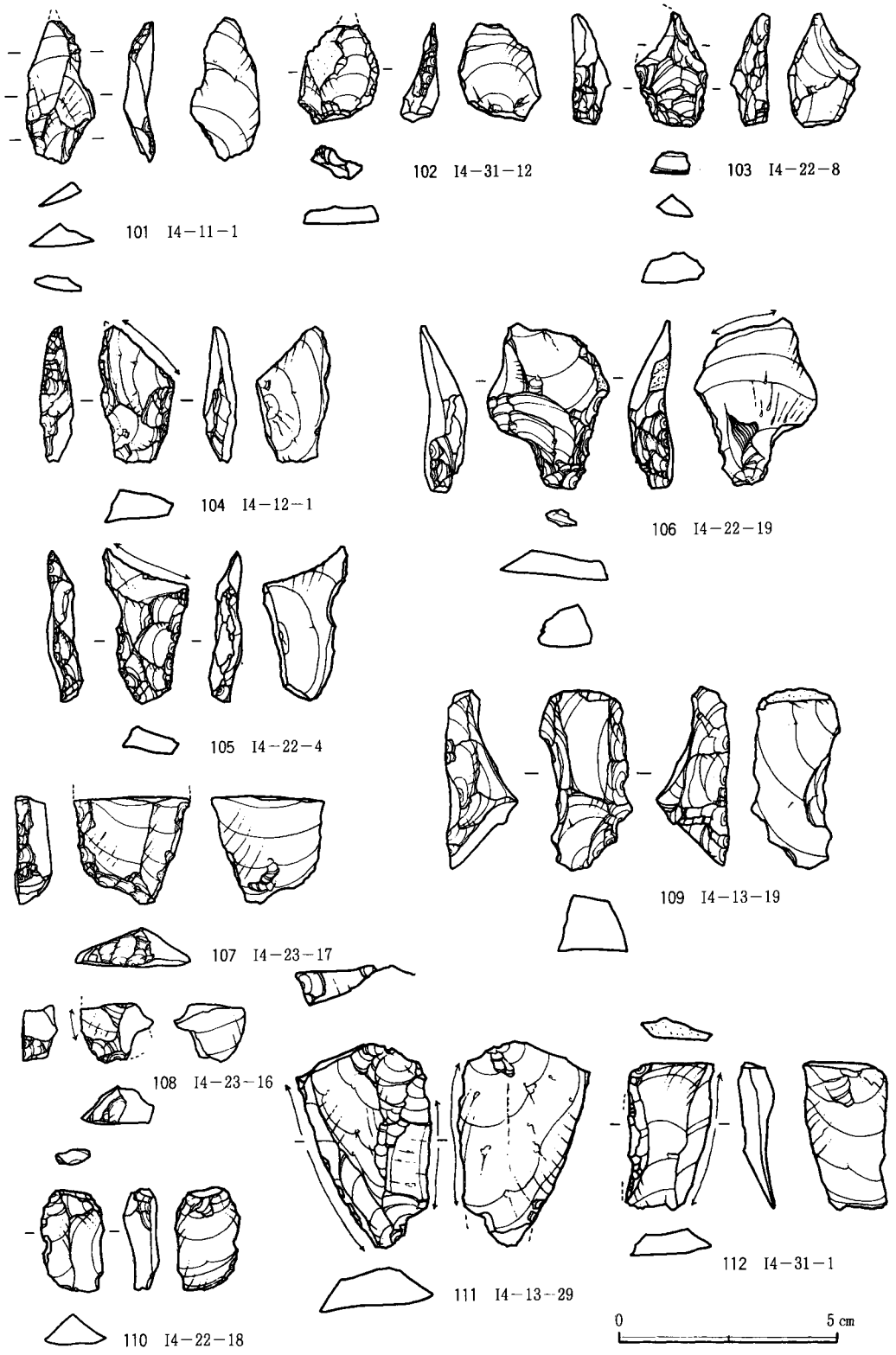
102は黒曜石製で長幅比1：1ほどの寸詰まりの縦長剝片を素材とし、右側縁全体と左側縁の基部側に調整加工のなされたものである。打面は大きく残されている。調整加工と刃部の位置から、切出形のナイフ形石器と同類のものと思われる。103は黒曜石製の横長剝片を素材とする切出形のナイフ形石器である。両側縁には急斜で細かな調整加工が施されている。刃部は裏面に向かって大きく欠損している。104も黒曜石製の切出形ナイフ形石器である。左側縁は急斜な調整加工がなされているが、右側縁は打面がそのまま残されている。右側縁の細かな剝離痕は打面を薄くするための調整かもしれない。右上半部の鋭利な側縁には微細な刃こぼれが認められる。105は乳白色を呈するチャートの横長剝片を素材とする切出形のナイフ形石器である。104と同様、左側縁には急斜な調整加工がみられ、右側縁には打面を残しつつも、細かく平坦な調



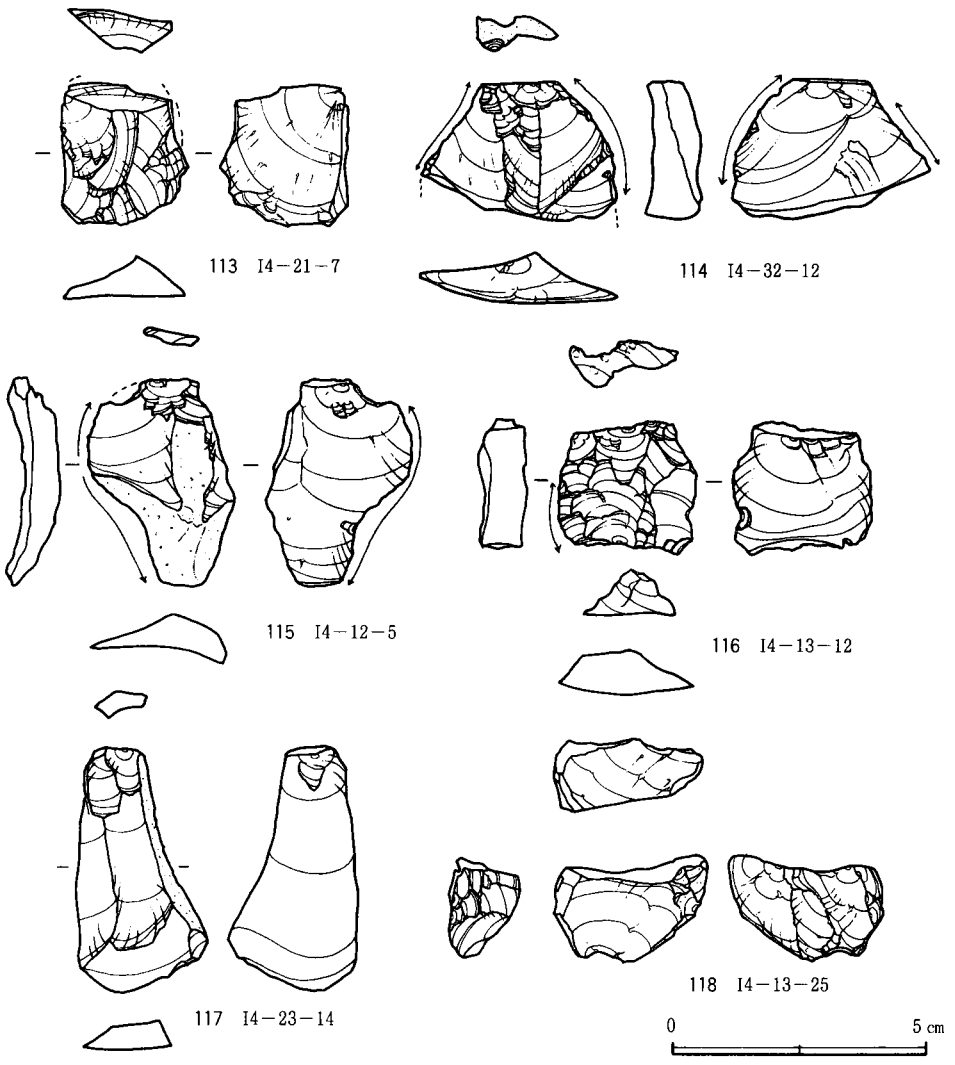
第21図　第３ブロック群石器別分布図



第22図　第３ブロック群石材別分布図



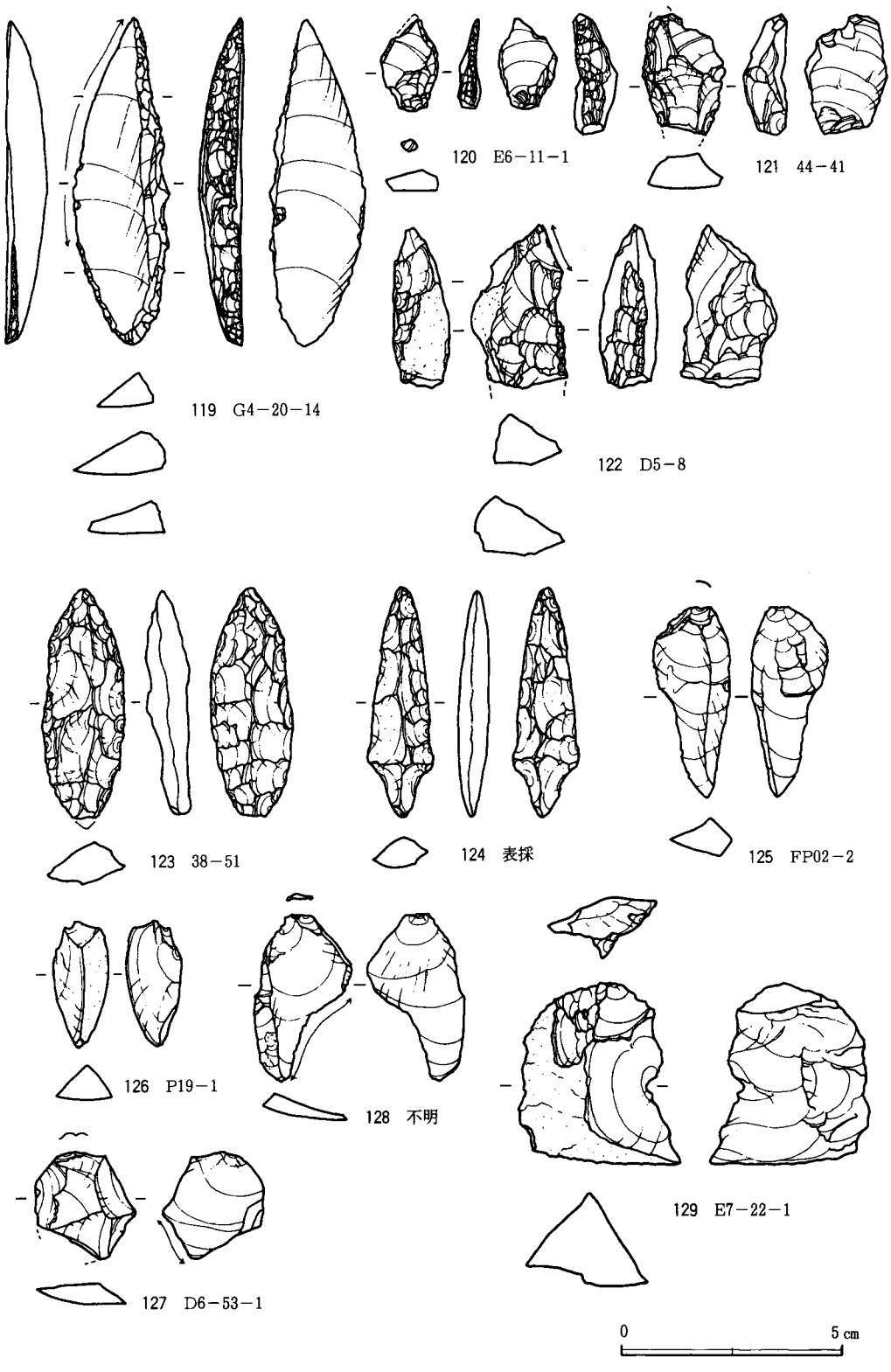
第23図　第３ブロック群出土石器(1)



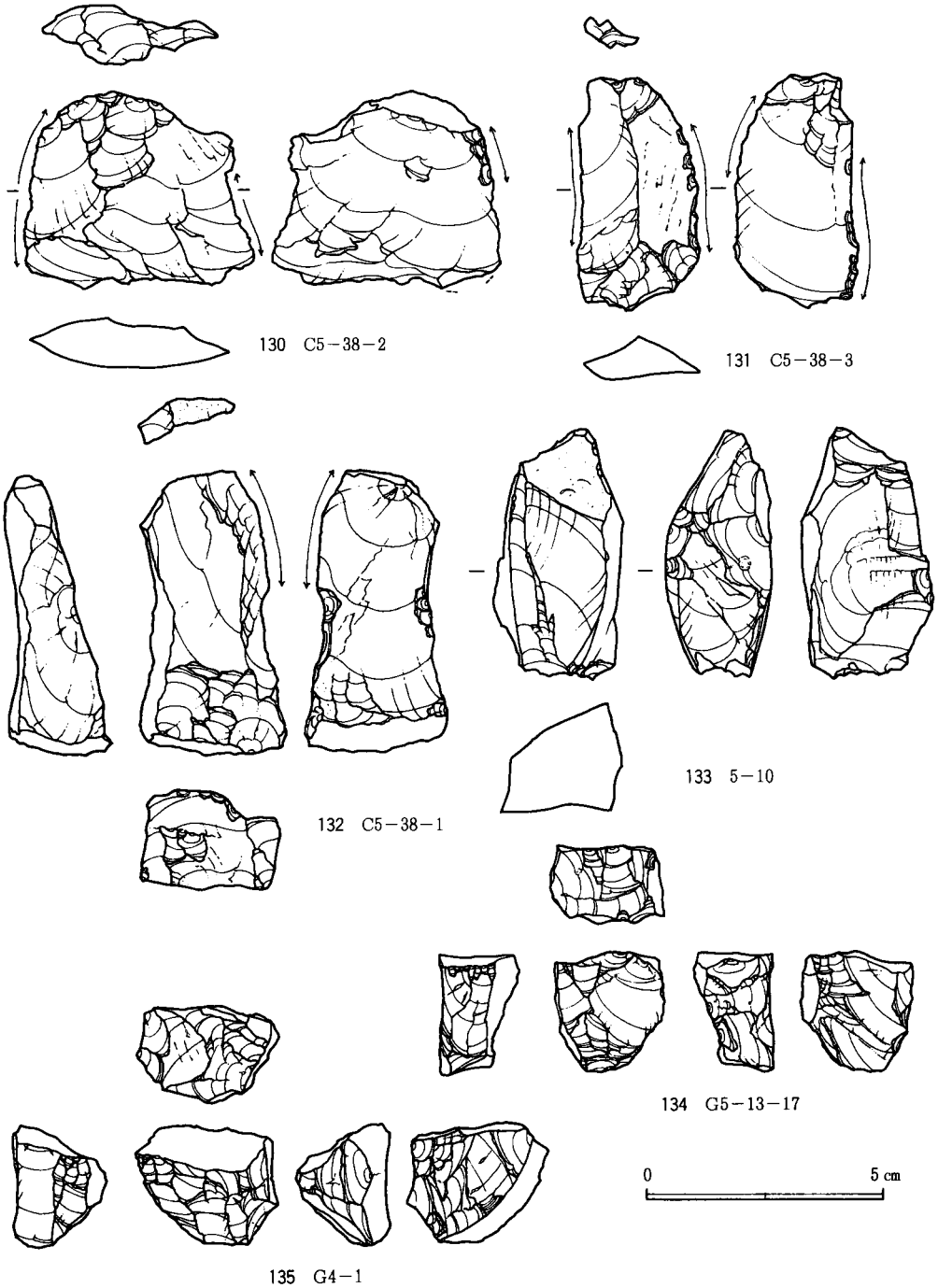
第24図　第３ブロック群出土石器(2)

整加工が認められる。刃部には刃こぼれがみられる。 106は黒曜石製の寸詰まりの縦長剥片を素材としたナイフ形石器である。基部両縁側には抉り込むような調整加工がなされ、打面は小さく残されている。 110は黒曜石製の小型の縦長剥片を素材とするナイフ形石器である。打面の右側に細かな調整加工がみられる。

107・108は黒曜石製の掻器である。107は縦長剥片の端部から左側縁にかけて角度の急な調整加工がなされている。上半部は欠損する。108は、107の製作時に刃部が欠損した破片、もしくは刃部の再生・更新に伴う剥片と考えられる資料である。接合こそしないが、石質やそのなかに含まれる縦縞から、同一個体と判断した。107の刃部平面が若干内湾しているのも、108を剥離した影響かもしれない。



第25図　単独出土石器(1)



第26図　単独出土石器(2)

109は黒曜石製の加工痕ある剝片とした資料である。角錐状石器の未成品ないしは小型の剝片を生産する石核の可能性がある。平坦な主要剝離面から急斜な剝離がなされている。111・114・115・116は黒曜石製の使用痕ある剝片である。111は横長剝片を素材とし、鋭利な2側縁に刃こ

ぼれが認められる。114は縦長剥片の両側縁に刃こぼれがみられる。打面は自然面で調整痕はないが、頭部調整が認められる。115も縦長剥片の一部に刃こぼれのある使用痕ある剥片である。

116は不定型の剥片を素材とし、表面左側縁に微細な刃こぼれが認められる。表面は上下からの小剥離面によって構成されている。112は珪質頁岩製の縦長剥片である。表面には主要剥離面と逆方向の剥離面がみられ、打面は自然面である。左側縁の細かな剥離痕は発掘調査時のキズである。113は黒曜石の不定型な剥片である。表面の剥離方向は一定しない。117は灰白色に風化した安山岩の縦長剥片である。118は黒曜石の石核である。厚手の剥片を素材とし、打面を各所に動かしながら小型不定型の剥片を生産している。

4．単独資料

本遺跡からは文化層として認定し得た石器群の他に、単独で石器が検出されている。なかには縄文時代以降の遺構覆土内に混在していたものもある。 119は暗褐色を呈する頁岩のナイフ形石器である。定型的な縦長剥片（石刃）を素材とし、右側縁全体と左側縁の基部側に調整加工を施している。右側先端部周辺の調整加工は表裏両方向からなされている。鋭利な左側縁には微細な刃こぼれが顕著である。G4－20グリット②層出土。120は透明度の高い良質な黒曜石のナイフ形石器である。小型寸詰まりの縦長剥片を素材とし、右側縁全体に細かな調整加工を施している。打面は、小さく残されている。E6－55グリッド④層出土。121は不純物の目立つ漆黒色の黒曜石のナイフ形石器である。寸詰まりの縦長剥片を素材とし、左側縁全体と右側縁の基部側に調整加工がみられる。上層遺構覆土中からの検出であるが、本来は第2文化層に帰属するものであろう。122は青灰色のチャート製のナイフ形石器である。横長剥片を素材とし、左側縁には急斜な、右側縁にはやや平坦な調整加工がみられる。裏面の打瘤付近には平坦な調整加工が認められる。右上端には刃こぼれがみられる。D5－8グリッド①層出土。123は安山岩を用いた小型細身の木葉形を呈する槍先形尖頭器である。表裏とも調整加工に覆われており、素材面を残していない。124は頁岩の有茎尖頭器である。全体が著しく風化しており、細かな観察が困難である。本来隆線文土器に伴うものであろう。 125は安山岩製の縦長剥片である。B4－56グリッド内にある上層遺構中から出土した。 126は黄緑色の珪質頁岩製の剥片である。上層遺構中出土。127は乳白色の玉髄製の使用痕ある剥片である。表面には求心的な一次面がみられる。D6－53グリッド⑤層出土。 128は珪質頁岩製の使用痕ある剥片である。縦長剥片の鋭利な側縁に刃こぼれが認められる。出土地点不明。 129は頁岩製の剥片である。表面には不定方向からの剥離面がみられる。また、左側の自然面の一部は被熱により剥落している。E7－22グリッド⑦層上面出土。130～132は暗青灰色のチャートの縦長剥片で同一母岩と考えられる資料である。いずれも鋭利な側縁に微細な刃こぼれがみられる。砕片・石核がみられないことから搬入品であろう。C5－38グリッド①層上面出土。133は黒曜石の石核である。不定方向からの剥離面

がみられ、裏面には主要剥離面が残されている。上層遺構内出土。134・135は黒曜石製の石核である。両者とも厚手の剥片、あるいは分割礫を素材とし、打面転移を繰り返しながら小型寸詰まりの縦長剥片を剥離している。前者はG5－13グリット出土、後者は上層遺構内出土。

5．まとめ

本遺跡では、3か所のブロック群と6か所の石器単独出土地点が確認され、ブロック群は上下2枚の文化層に区分することができた。

第1文化層は立川ローム層第2黒色帯下部を中心とする層準に位置し、第1・2ブロック群により構成される。第1ブロック群は長軸20mほどの長楕円形を呈する中型の環状ブロック群で、石器組成に台形石器を含むことを特徴とする。使用石材は通常の安山岩が圧倒的に多く、これに灰白色でトロトロに風化した安山岩（トロトロ石）が加わって大半を占めている。石材が比較的均質な安山岩が中心であるため、母岩別資料の分析は行えなかったが、全体を概観すると、明らかに搬入品とわかるものはきわめて少なく、剥片剥離作業から石器の調整加工に至る各工程が遺跡内で行われていたことがうかがえる。ただし、剥片剥離作業の初期段階に生じる、表面が自然面のみで構成される剥片や大型厚手の剥片が少ないこと、遺存する石核が原石を数個体に分けた内の一部であること、接合資料が少ないことから、母岩の消費が本遺跡以前の滞在地から継続され、なおかつ本遺跡で完了してはいなかったことが想定される。第1ブロック群全体におけるこの傾向から、単一集団による回帰的移動の累積、あるいは複数集団による同時形成のいずれかが考えられる。剥片剥離技術は、原石から厚手の剥片を剥離してこれを石核素材とし、交互剥離の手法と求心的な打点移動によって形状の一定しない横長剥片を剥離するものが主流を占める。安山岩、頁岩ともに同様の技術と思われる。この他、打面転移を繰り返しながら幅広寸詰まりの縦長剥片を剥離する技術が伴っている。石器組成は、定型的な石器形態として台形石器とナイフ形石器があり、この他に加工痕ある剥片（台形石器の欠損品の疑いあり）と使用痕ある剥片が加わる単純な構成である。台形石器は小型で周辺調整が部分的になされるものと、中・大型で平坦調整によるものの2者が存在する。前者は北陸地方を中心に分布するウワダイラ型に類似する。ナイフ形石器は欠損品で形状不明である。環状ブロック群に通有の石斧は検出されなかった。第2ブロック群は中規模のブロック2か所が近接して分布する構成である。使用石材は珪質頁岩が中心で、砕片、石核はみられず、その全てが本遺跡外で製作された搬入品と思われる。石器組成はナイフ形石器と使用痕ある剥片、それに形状の整った縦長剥片（石刃）である。ナイフ形石器は縦長剥片を素材とし、基部に調整加工がなされている。縦長剥片は平坦打面で、細かな打面調整や頭部調整、側面調整のみられない剥離技術による。両設打面の形跡がある。

以上、第1文化層における2か所のブロック群は、石器組成、剥片剥離技術、石材構成、石

器群の分布形などの諸要素について、きわめて対照的な内容である。珪質頁岩の定型的な縦長剝片（石刃）とナイフ形石器、安山岩の横長剝片や不定型剝片と台形石器の両者は、わずかな時間差をも含めて、互いに異なる系統の集団によるものか、同一集団による生業、あるいは移動ルート、石材供給の違いを反映したものか、現状では判断材料に乏しい。ただし、台形石器が主体となるもの（八千代市芝山遺跡第1文化層、四街道市池花南遺跡第1文化層、同出口鐘塚遺跡、佐倉市大堀遺跡）（註3）と、ナイフ形石器と台形石器の両者が共存するもの（柏市中山新田Ⅰ遺跡）とがあることから、これに石器群の分布形をも重ねてみると、当該期の活動をどう読み取るかという課題について、重要な情報を提供しているように思われる。石器群の編年的位置づけについては、全国的に資料の増加が著しい台形石器と石斧を指標とする、南関東地方立川ローム層第2黒色帯下部（武蔵野台地Ⅸ層）に特徴的な石器群である。

第2文化層は立川ローム層Ⅳ層下部において典型的な石器群で、第3ブロック群が相当する。同時に、被熱破砕礫が石器群の分布と重なっており、これも南関東地方においてⅣ層下部に礫群が多い傾向に共通する現象と考える。本文化層の資料も黒曜石が主体という石材に起因する理由で母岩別資料の分析が行えなかった。だだし、きわめて類似した石質の剝片、砕片がまとまることから、原石の一部を搬入し、剝片剝離作業を部分的に行ったと考えられる。石器組成はナイフ形石器と掻器、加工痕ある剝片、使用痕ある剝片で構成され、とくにナイフ形石器は基部調整と切出形の両者が特徴的にみられる。使用石材は黒色半透明で不純物を含む黒曜石が大半を占め、安山岩、頁岩、チャートなどがわずかに加わる。剝片剝離技術は、打面と作業面を頻繁に転移させながら幅広寸詰まりの縦長剝片を生産するものがみられる。同時に、切出形ナイフ形石器の素材として用いられる横長剝片も併せて得られたものと思われる。

註1　田村　隆　1987a「第Ⅰ部先土器時代、第1章立川ローム層の層序区分」『八千代市井戸向遺跡－萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』

田村　隆　1987b「Ⅲ出土遺物、1先土器時代の石器群、E彦八山遺跡石器文化の編年的位置、a下総台地西縁部の立川ローム層」『松戸市彦八山遺跡－北総開発鉄道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－』

島立　桂・新田浩三・渡辺修一 1992「下総台地における立川ローム層の層序区分－平成2・3年度職員研修会から－」『研究連絡誌』第35号

註2　橋本勝雄　1989「AT降灰以前における特殊な遺物分布の様相－いわゆる『環状ユニット』について（その1）」『考古学ジャーナル』№309

註3　落合章雄編 1989『八千代市仲ノ台遺跡・芝山遺跡1－東葉高速鉄道引込み線および車庫用地内埋蔵文化財調査報告書－』

田村　隆　1986「中山新田Ⅰ遺跡」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅳ－元割・聖人塚・中山新田Ⅰ－』

田村　隆編　1989『佐倉市南志津地区埋蔵文化財発掘調査報告書1－佐倉市御塚山・大林・大堀・西野・芋窪遺跡－』

渡辺修一編　1991『四街道市内黒田遺跡群－内黒田特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書－』

渡辺政治　1989「物井地区出口鐘塚遺跡出土の垂飾様石製品について」『研究連絡誌』第24号

第1表　出土石器計測表

遺物番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	打面状況	剥離角	背面構成	出土位置 N→(m)	出土位置 W→(m)	レベル	文化層	ブロック	備考
A4－08	B	Cs	(2.2)	(3.0)	2.3	8.5	－	－	Ⅰ	－	－	－	－	－	
C5－12	B	Ch	4.3	(2.9)	1.1	9.3	0	118	Ⅳ	－	－	－	－	－	
C5－38－ 1	Uf	Ch	4.8	2.9	2.0	34.9	2	95	Ⅱ＋Ⅲ	1.12	0.30	39.681	－	－	第26図132
C5－38－ 2	Uf	Ch	4.0	4.8	1.4	23.2	2	100	Ⅰ	0.86	0.80	39.699	－	－	第26図130
C5－38－ 3	Uf	Ch	4.9	2.6	1.0	11.9	2	105	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ＋S	0.96	0.98	39.712	－	－	第26図131
C5－38－ 4	B	Ch	3.2	4.9	2.4	40.9	1	87	Ⅱ＋Ⅲ	1.58	0.80	39.764	－	－	
C5－82－ 1	B	An	2.4	3.0	0.9	4.6	0	121	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅳ	－	－	－	－	－	
C5－82－ 2	B	An	(2.7)	(2.6)	0.7	4.4	－	－	Ⅰ＋C	3.33	3.48	37.959	第1文化層	第1ブロック群	
C5－82－ 3	B	An	(2.6)	2.1	0.4	1.9	－	－	Ⅰ＋C	3.42	3.50	38.254	第1文化層	第1ブロック群	
C5－82－ 4	B	An	(2.3)	(2.2)	0.6	1.7	－	－	Ⅰ＋Ⅱ	3.09	3.18	38.057	第1文化層	第1ブロック群	
C5－82－ 5	B	An(t)	1.4	(1.5)	0.6	1.2	2	106	Ⅰ	3.56	3.15	38.136	第1文化層	第1ブロック群	
C5－82－ 6	D	An	6.0	4.4	1.7	41.5	－	－	－	3.78	3.04	38.894	第1文化層	第1ブロック群	第12図55
C5－82－ 7	B	An	1.0	1.7	0.2	0.3	2	109	Ⅰ	3.47	2.90	37.819	第1文化層	第1ブロック群	
C5－82－ 8	Pi	An	2.3	1.2	0.9	1.9	－	－	－	3.36	2.85	37.880	第1文化層	第1ブロック群	
C5－82－ 8	B	An	(2.6)	(2.7)	1.1	6.5	2	108	Ⅰ＋C	3.36	2.85	37.880	第1文化層	第1ブロック群	
C5－82－ 9	B	An	(1.1)	1.0	0.6	0.8	1	90	Ⅰ＋Ⅱ＋C	2.85	3.01	38.059	第1文化層	第1ブロック群	
C5－82－10	B	An	(1.6)	2.6	0.6	3.1	－	－	Ⅱ	2.63	3.00	37.894	第1文化層	第1ブロック群	
C5－82－11	C	An	0.8	1.2	0.3	0.2	2	108	Ⅰ＋Ⅲ	2.80	2.74	37.619	第1文化層	第1ブロック群	
C5－82－12	C	An	0.8	0.7	0.3	0.2	0	104	Ⅰ	2.79	2.58	38.135	第1文化層	第1ブロック群	
C5－82－13	B	An(t)	(2.1)	(2.2)	0.6	2.1	－	－	Ⅰ	3.86	2.71	38.062	第1文化層	第1ブロック群	
C5－82－14	C	An	0.8	0.9	0.3	0.2	1	114	Ⅰ	3.60	2.45	37.622	第1文化層	第1ブロック群	
C5－82－15	B	An(t)	(1.3)	(1.1)	0.3	0.3	－	－	Ⅰ	1.79	2.84	38.175	第1文化層	第1ブロック群	
C5－82－16	B	An	(1.3)	(0.9)	(0.2)	0.2	－	－	Ⅰ	3.32	1.96	37.943	第1文化層	第1ブロック群	
C5－82－17	B	An(t)	(1.5)	(1.2)	0.5	0.7	－	－	Ⅰ	3.25	1.98	37.925	第1文化層	第1ブロック群	
C5－82－18	B	An	(1.7)	(2.2)	0.5	1.3	4	－	Ⅰ	3.40	1.75	38.022	第1文化層	第1ブロック群	
C5－82－19	B	An	2.6	(3.7)	0.9	5.9	3	101	Ⅱ	3.94	1.79	37.657	第1文化層	第1ブロック群	第8図22
C5－82－20	B	An(t)	(0.9)	(1.5)	0.5	0.4	2	－	Ⅳ	3.40	1.61	38.029	第1文化層	第1ブロック群	
C5－82－21	B	An	(1.5)	1.3	0.3	0.6	－	－	Ⅰ＋C	3.38	1.55	38.078	第1文化層	第1ブロック群	
C5－82－21	B	An	(1.0)	1.7	0.6	0.6	－	－	Ⅲ＋C	3.38	1.55	38.078	第1文化層	第1ブロック群	
C5－82－22	B	An	(1.8)	(2.3)	0.4	1.1	－	－	Ⅱ＋Ⅲ	2.92	1.37	38.012	第1文化層	第1ブロック群	
C5－83－ 1	B	An(t)	(0.9)	1.0	0.3	0.2	－	－	Ⅰ	3.92	3.89	38.359	第1文化層	第1ブロック群	
C5－83－ 2	B	An	(3.4)	(2.2)	0.9	7.5	1	107	Ⅰ＋C	3.92	2.97	38.089	第1文化層	第1ブロック群	
C5－83－ 3	B	An	1.4	1.2	0.5	0.7	2	110	Ⅱ＋Ⅲ＋C	2.06	3.00	38.054	第1文化層	第1ブロック群	
C5－83－ 3	C	An	(0.6)	0.9	0.3	<0.1	－	－	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	2.06	3.00	38.054	第1文化層	第1ブロック群	
C5－83－ 4	B	An(t)	(0.6)	(0.8)	(0.2)	<0.1	－	－	Ⅰ	2.20	2.62	38.009	第1文化層	第1ブロック群	
C5－83－ 5	B	An(t)	1.9	2.0	0.3	0.8	1	121	Ⅱ	2.39	2.51	37.856	第1文化層	第1ブロック群	
C5－83－ 6	B	An	(2.7)	(2.9)	0.9	6.1	－	－	Ⅰ＋C	1.93	2.40	38.003	第1文化層	第1ブロック群	第15図75
C5－83－ 7	B	Cs	1.1	1.3	0.5	0.8	1	113	C	2.22	2.22	38.018	第1文化層	第1ブロック群	
C5－83－ 8	B	An(t)	1.0	(1.8)	0.3	0.4	1	99	Ⅰ	3.13	2.45	38.304	第1文化層	第1ブロック群	
C5－83－ 8	B	An	－	－	－	<0.1	－	－	－	3.13	2.45	38.304	第1文化層	第1ブロック群	遺物なし
C5－83－ 9	B	An	1.4	1.2	0.3	0.4	1	115	Ⅰ	3.85	2.24	38.217	第1文化層	第1ブロック群	
C5－83－10	B	An	(1.3)	(2.1)	0.5	1.4	－	－	Ⅰ＋C	2.00	1.90	37.959	第1文化層	第1ブロック群	
C5－83－11	B	An(t)	(1.0)	1.2	0.3	0.3	－	－	Ⅰ	1.35	1.23	38.082	第1文化層	第1ブロック群	
C5－83－12	B	S	(0.8)	1.1	0.5	0.3	－	－	Ⅰ	2.25	1.68	38.362	第1文化層	第1ブロック群	
C5－83－13	B	An	2.3	3.8	0.5	3.9	2	119	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅳ＋C	3.54	1.54	37.916	第1文化層	第1ブロック群	第8図20
C5－83－14	B	An	2.4	2.5	0.9	1.7	1	121	Ⅰ＋Ⅲ	2.00	1.43	37.994	第1文化層	第1ブロック群	
C5－83－15	B	An	1.1	1.2	0.4	0.3	3	116	Ⅰ	2.40	1.32	38.019	第1文化層	第1ブロック群	
C5－83－16	B	An(t)	2.7	(3.8)	0.8	6.2	2	106	Ⅰ＋C	2.62	0.85	37.992	第1文化層	第1ブロック群	
C5－83－17	B	An(t)	1.4	1.8	0.4	0.7	2	126	Ⅰ	2.42	0.76	38.109	第1文化層	第1ブロック群	
C5－83－18	B	An(t)	1.4	2.4	0.6	1.5	2	98	Ⅰ	3.74	0.76	38.159	第1文化層	第1ブロック群	
C5－83－19	B	An	3.6	3.6	0.8	12.1	1	107	Ⅱ＋Ⅲ＋C	3.16	0.14	38.024	第1文化層	第1ブロック群	
C5－83－20	Uf	An(t)	3.6	4.1	0.9	10.2	1	108	Ⅰ＋C	2.06	0.11	37.963	第1文化層	第1ブロック群	
C5－83－21	D	An	2.9	4.2	2.1	25.8	－	－	－	0.90	0.18	37.855	第1文化層	第1ブロック群	75と接合
C5－84－ 1	B	An	2.4	3.7	0.8	5.6	2	114	Ⅰ＋Ⅲ	3.98	0.40	38.125	第1文化層	第1ブロック群	第8図15
C5－84－ 2	B	An	(0.7)	1.7	0.3	0.3	－	－	Ⅰ＋Ⅲ＋C	3.06	1.94	38.754	第1文化層	第1ブロック群	
C5－84－ 3	B	Sa	2.2	(1.8)	0.4	1.8	0	106	Ⅰ＋C	2.93	1.48	38.154	第1文化層	第1ブロック群	
C5－84－ 4	B	An	1.5	1.5	0.5	1.3	1	116	Ⅰ＋Ⅱ＋C	2.30	1.16	38.663	第1文化層	第1ブロック群	
C5－84－ 5	B	An	3.4	2.0	1.0	5.0	1	124	Ⅰ＋Ⅳ	1.90	1.38	38.079	第1文化層	第1ブロック群	
C5－84－ 6	B	S	(1.8)	(1.8)	0.3	0.8	3	103	S	1.58	1.95	38.049	第1文化層	第1ブロック群	

遺物番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	打面状況	剥離角	背面構成	出土位置 N→(m)	出土位置 W→(m)	レベル	文化層	ブロック	備考
C5－84－ 7	B	S	1.6	1.9	0.8	2.4	1	111	Ⅰ+S	1.75	1.20	38.114	第1文化層	第1ブロック群	
C5－84－ 8	B	An	1.9	(0.9)	0.4	0.8	1	115	Ⅰ+C	1.94	0.74	38.424	第1文化層	第1ブロック群	
C5－84－ 9	B	An	1.9	1.8	0.6	1.3	0	103	Ⅰ+Ⅲ	1.25	1.08	38.300	第1文化層	第1ブロック群	第11図47
C5－84－10	B	An	1.0	(1.2)	0.4	0.5	1	104	Ⅲ	1.15	0.82	38.099	第1文化層	第1ブロック群	遺物なし
C5－84－11	B	Sa	2.4	(1.7)	0.5	2.2	0	106	Ⅰ+C	0.75	0.24	38.575	第1文化層	第1ブロック群	
C5－84－11	B	S	－	－	－	－	－	－	－	0.75	0.24	38.575	第1文化層	第1ブロック群	第13図60
C5－84－12	B	An	(1.7)	0.8	0.3	0.4	－	－	Ⅰ＋C	3.84	2.70	38.565	第1文化層	第1ブロック群	
C5－84－14	D	An	(3.6)	(2.0)	1.4	5.5	－	－	－	1.58	2.22	38.127	第1文化層	第1ブロック群	
C5－84－14	B	Sa	1.4	(1.0)	0.2	0.3	1	－	Ⅰ	1.58	2.22	38.127	第1文化層	第1ブロック群	
C5－84－15	B	An	1.1	1.5	0.4	0.5	1	115	Ⅰ	1.54	2.30	38.219	第1文化層	第1ブロック群	
C5－84－15	C	An	(0.8)	1.6	0.2	0.2	1	111	Ⅰ＋Ⅱ	－	－	－	－	－	第11図48
C5－84－16	B	An	1.8	2.2	1.2	3.2	2	106	Ⅰ＋Ⅱ	1.38	2.08	38.342	第1文化層	第1ブロック群	
C5－84－17	B	Sa	3.9	2.6	1.4	10.8	1	154	Ⅳ＋C	1.48	3.43	37.923	第1文化層	第1ブロック群	
C5－84－18	B	Sa	0.8	(1.5)	0.3	0.4	1	93	C	0.42	2.54	38.349	第1文化層	第1ブロック群	遺物なし
C5－84－19	B	An	(1.1)	0.7	0.3	0.3	－	－	Ⅰ	2.20	1.20	38.032	第1文化層	第1ブロック群	第8図16
C5－92－ 1	D	An	3.8	8.0	1.4	39.5	－	－	－	0.36	3.38	37.962	第1文化層	第1ブロック群	第13図56
C5－92－ 2	B	An	1.6	3.5	0.6	2.9	－	－	Ⅰ	0.46	2.24	37.843	第1文化層	第1ブロック群	第7図 3
C5－92－ 3	D	An	－	－	－	－	－	－	－	0.38	2.12	37.784	第1文化層	第1ブロック群	
C5－92－ 4	Tr	An	(1.7)	1.4	0.4	1.0	2	115	Ⅰ	0.16	2.12	37.682	第1文化層	第1ブロック群	第7図 7
C5－92－ 4	Tr	An	2.5	2.0	0.5	2.8	－	－	－	0.16	2.12	37.682	第1文化層	第1ブロック群	第7図27
C5－92－ 5	Tr	An	2.8	2.3	0.8	4.7	－	－	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅳ	0.12	1.86	37.919	第1文化層	第1ブロック群	
C5－92－ 7	B	An	3.3	4.1	1.5	10.9	2	101	Ⅳ＋C	0.56	1.82	37.615	第1文化層	第1ブロック群	
C5－92－ 8	B	An	(0.7)	(2.3)	0.7	1.7	1	122	Ⅰ	0.72	1.94	37.737	第1文化層	第1ブロック群	第11図42
C5－92－ 9	B	S	(1.2)	1.1	0.2	0.4	－	－	Ⅰ	2.98	2.54	37.953	第1文化層	第1ブロック群	
C5－92－10	B	An	3.5	6.3	0.8	16.6	2	115	Ⅰ＋Ⅳ	3.96	2.36	37.682	第1文化層	第1ブロック群	第8図18
C5－92	C	An	(0.7)	0.7	0.1	0.1	－	－	Ⅰ	－	－	－	第1文化層	第1ブロック群	
C5－93－ 1	B	An	1.8	3.9	0.6	4.1	0	95	Ⅰ＋Ⅲ	0.42	3.99	39.169	第1文化層	第1ブロック群	
C5－93－ 2	B	An	0.9	1.1	0.5	0.3	1	113	Ⅰ＋Ⅱ	0.18	2.84	38.083	第1文化層	第1ブロック群	
C5－93－ 3	B	An	1.3	2.1	0.4	0.8	1	134	Ⅰ＋Ⅱ	0.41	2.46	37.809	第1文化層	第1ブロック群	
C5－93－ 4	B	An	(2.2)	2.2	0.5	2.0	－	－	Ⅰ＋C	0.62	1.56	38.409	第1文化層	第1ブロック群	第10図38
C5－93－ 6	B	An	1.5	2.5	0.7	2.0	2	108	Ⅰ＋Ⅳ	2.80	1.80	38.279	第1文化層	第1ブロック群	
C5－93－ 7	Uf	An	3.4	3.4	0.8	8.8	0	106	Ⅳ	3.60	3.92	38.109	第1文化層	第1ブロック群	第7図 9
C5－94－ 1	B	An	1.2	1.9	0.8	1.3	2	104	Ⅱ＋Ⅳ	0.10	0.34	38.069	第1文化層	第1ブロック群	第15図72
C5－94－ 2	Tr	An	2.4	1.7	0.7	2.8	－	－	Ⅱ＋Ⅳ	0.10	0.08	38.057	第1文化層	第1ブロック群	
C5－94－ 3	Uf	An	4.5	4.9	1.1	21.8	2	125	Ⅰ＋Ⅱ＋C	1.86	0.56	38.104	第1文化層	第1ブロック群	
C5－94－ 4	B	An(t)	(4.3)	(5.2)	1.1	24.1	－	－	Ⅲ＋C	3.60	2.96	38.209	第1文化層	第1ブロック群	
C5－94－ 5	B	An	1.6	1.7	0.3	0.6	0	104	Ⅰ	3.58	3.18	38.322	第1文化層	第1ブロック群	
C5－94－ 6	B	An	(1.0)	1.3	0.6	0.5	－	－	Ⅰ＋Ⅲ	3.28	3.78	38.605	第1文化層	第1ブロック群	
C5－94－ 7	Rf	An	(2.3)	(3.1)	(1.3)	10.3	－	－	Ⅳ＋C	3.16	3.56	38.126	第1文化層	第1ブロック群	
C5－94－ 7	B	An	2.9	3.4	1.6	8.9	0	123	Ⅰ＋Ⅳ	3.16	3.56	38.126	第1文化層	第1ブロック群	第7図12
C5－94－ 8	B	An(t)	2.1	(1.2)	0.6	1.5	0	87	Ⅲ	3.14	3.76	38.326	第1文化層	第1ブロック群	
C5－94－10	Kn	An	(1.5)	1.3	0.8	1.3	－	－	Ⅰ	2.74	3.62	38.276	第1文化層	第1ブロック群	
C5－94－11	B	An(t)	(0.9)	(1.5)	0.4	0.7	－	－	Ⅰ	3.42	3.16	38.627	第1文化層	第1ブロック群	第9図28
C5－94－12	B	An(t)	(1.8)	2.0	0.4	1.1	－	－	Ⅰ	2.46	3.16	38.839	第1文化層	第1ブロック群	
C5－94－13	Uf	An	4.5	3.1	0.9	11.6	1	112	Ⅰ＋C	2.12	2.61	38.182	第1文化層	第1ブロック群	第8図21
C5－94－14	B	An(t)	(1.6)	(1.2)	(0.6)	0.7	－	－	Ⅰ＋Ⅱ	2.00	3.44	38.559	第1文化層	第1ブロック群	第7図 8
C5－95－ 1	B	An	3.1	4.5	1.4	11.6	2	133	Ⅰ＋Ⅱ	3.94	0.33	38.349	第1文化層	第1ブロック群	第7図 6
C5－95－ 3	Tr	An	5.5	4.6	1.2	21.7	－	－	－	3.42	1.14	38.224	第1文化層	第1ブロック群	第10図41
C5－95－ 4	Tr	An	4.4	3.0	0.7	10.9	－	－	－	3.26	1.16	38.242	第1文化層	第1ブロック群	8と接合
C5－95－ 5	B	An	3.0	5.2	1.0	13.4	2	109	Ⅰ＋Ⅲ＋C	2.60	3.02	38.317	第1文化層	第1ブロック群	
C5－95－ 6	Tr	An	－	－	－	－	－	－	－	2.48	1.72	38.277	第1文化層	第1ブロック群	第9図25
C5－95－ 8	B	An(t)	1.2	(1.8)	0.4	0.8	2	119	Ⅱ	1.96	0.34	38.694	第1文化層	第1ブロック群	第12図53
C5－95－ 9	B	An	3.2	3.8	1.4	17.5	2	105	Ⅰ＋Ⅲ	1.58	0.58	38.249	第1文化層	第1ブロック群	第14図67
C5－95－10	D	An(t)	5.5	3.7	1.4	22.1	－	－	－	1.50	0.81	38.285	第1文化層	第1ブロック群	
C5－95－11	B	An	(4.5)	2.4	0.9	6.8	2	113	Ⅰ＋Ⅳ	1.66	1.52	38.517	第1文化層	第1ブロック群	第12図51
C5－95－12	B	An(t)	(1.6)	2.9	0.6	2.8	－	－	Ⅰ	1.50	2.02	38.457	第1文化層	第1ブロック群	
C5－95－13	D	An	(3.7)	(3.1)	1.5	12.0	－	－	－	0.87	0.50	38.317	第1文化層	第1ブロック群	
C5－95－14	B	An	(1.7)	(1.7)	0.6	1.4	－	－	Ⅱ	0.22	1.38	38.515	第1文化層	第1ブロック群	第9図29
C5－95－15	B	An(t)	1.1	2.1	0.8	2.0	2	119	Ⅰ	3.88	2.79	38.344	第1文化層	第1ブロック群	第10図40
C6－02－ 1	Uf	An	2.9	4.3	1.0	10.5	4	－	Ⅰ	1.45	2.47	37.798	第1文化層	第1ブロック群	
C6－02－ 2	Uf	An	(4.5)	4.0	1.3	21.7	0	107	Ⅳ＋C	0.87	2.20	37.806	第1文化層	第1ブロック群	

遺物番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	打面状況	剥離角	背面構成	出土位置 N→(m)	出土位置 W→(m)	レベル	文化層	ブロック	備考
C6－02－ 3	B	An	(2.7)	1.4	1.0	4.3	－	－	C+S	0.56	2.10	37.820	第1文化層	第1ブロック群	
C6－02－ 4	B	An(t)	1.7	3.1	0.8	4.8	2	114	Ⅰ	0.40	1.88	37.830	第1文化層	第1ブロック群	
C6－02－ 5	B	An	(1.1)	(0.9)	0.3	0.3	－	－	－	0.52	1.60	37.741	第1文化層	第1ブロック群	
C6－03－ 1	B	An	2.4	4.2	1.2	9.1	2	93	Ⅰ+C	0.54	3.37	38.367	第1文化層	第1ブロック群	第8図14
C6－03－ 2	B	An	(3.0)	4.6	1.2	13.8	－	－	Ⅰ+Ⅲ+Ⅳ	0.96	3.18	38.315	第1文化層	第1ブロック群	第8図23
C6－03－ 3	B	An	4.4	5.4	1.6	43.3	－	126	C	1.32	3.57	38.086	第1文化層	第1ブロック群	
C6－03－ 4	B	An	4.7	3.8	1.3	16.5	1	117	Ⅰ+Ⅲ	1.26	3.82	38.132	第1文化層	第1ブロック群	第10図34
C6－03－ 5	B	An	1.7	2.0	0.5	0.9	2	118	Ⅰ+Ⅱ+Ⅲ	1.78	3.00	38.529	第1文化層	第1ブロック群	
C6－03－ 6	B	An	1.2	2.0	0.4	0.7	1	129	Ⅰ	0.79	2.26	38.089	第1文化層	第1ブロック群	
C6－03－ 6	C	An	1.0	1.0	0.2	0.1	－	－	Ⅰ	0.79	2.26	38.089	第1文化層	第1ブロック群	
C6－03－ 7	B	An	(2.0)	(1.3)	0.3	0.8	－	－	Ⅰ	1.38	2.32	38.309	第1文化層	第1ブロック群	
C6－03－ 8	B	An	0.8	1.6	0.4	0.3	3	128	Ⅰ	1.23	1.76	37.339	第1文化層	第1ブロック群	
C6－03－ 9	B	An	(1.9)	3.7	0.7	4.3	－	－	Ⅰ+C	1.62	1.46	38.095	第1文化層	第1ブロック群	
C6－03－10	Rf	An	1.9	2.6	0.8	4.4	－	－	Ⅰ+Ⅱ+Ⅲ	1.82	0.98	37.965	第1文化層	第1ブロック群	第7図11
C6－03－11	B	An	(1.5)	(1.6)	(0.6)	1.2	－	－	Ⅰ	0.56	0.82	38.294	第1文化層	第1ブロック群	
C6－03－12	B	An	(1.6)	(2.2)	0.4	1.7	－	－	Ⅰ	2.53	2.20	38.275	第1文化層	第1ブロック群	
C6－03－13	B	An	(1.3)	(1.5)	0.5	1.1	－	－	Ⅰ	2.76	2.17	38.326	第1文化層	第1ブロック群	
C6－03－14	B	An	(0.9)	1.1	0.3	0.3	－	－	Ⅰ	2.60	3.04	38.416	第1文化層	第1ブロック群	
C6－03－15	Rf	An	4.1	1.8	0.9	5.2	－	－	Ⅰ+Ⅲ	2.77	3.42	38.209	第1文化層	第1ブロック群	第7図10
C6－03－16	B	An	4.6	2.9	1.1	11.5	1	124	Ⅰ+C	2.98	3.98	38.129	第1文化層	第1ブロック群	第14図68
C6－03－17	B	An	(1.4)	2.6	0.8	3.3	0	96	Ⅰ	3.22	3.52	38.209	第1文化層	第1ブロック群	
C6－03－18	B	An	1.2	(2.0)	0.7	1.3	0	87	Ⅰ	3.33	3.22	38.179	第1文化層	第1ブロック群	
C6－03－19	D	An	2.9	5.3	3.2	31.1	－	－	－	3.97	3.82	38.179	第1文化層	第1ブロック群	第12図49
C6－03－20	B	An	1.7	1.8	1.0	2.6	1	131	Ⅰ	3.74	3.48	38.272	第1文化層	第1ブロック群	
C6－03－21	B	An	2.7	1.5	0.5	2.7	1	100	Ⅰ	3.90	2.91	37.899	第1文化層	第1ブロック群	第14図70
C6－03－22	B	An(t)	(1.0)	(1.4)	(0.7)	0.8	－	－	－	3.64	0.04	37.802	第1文化層	第1ブロック群	
C6－03－23	Tr	An	2.6	2.9	0.7	5.8	1	122	Ⅰ+Ⅳ	0.84	3.25	38.026	第1文化層	第1ブロック群	第7図5
C6－04－ 1	D	An	2.7	4.8	1.3	18.1	－	－	－	1.26	0.07	38.194	第1文化層	第1ブロック群	
C6－04－ 1	B	An	(0.7)	1.4	(0.2)	0.2	－	－	Ⅰ	3.87	0.17	38.042	第1文化層	第1ブロック群	第12図54
C6－04－ 2	B	An	(0.9)	(1.4)	(0.2)	0.2	－	－	Ⅰ	3.48	0.57	38.439	第1文化層	第1ブロック群	
C6－04－ 3	B	An(t)	2.0	(1.3)	(0.8)	2.1	4	－	Ⅰ	2.82	1.00	38.209	第1文化層	第1ブロック群	
C6－04－ 4	B	An(t)	0.8	1.1	0.4	0.3	－	－	－	2.71	2.12	38.133	第1文化層	第1ブロック群	
C6－04－ 5	B	An	(1.6)	2.8	(0.6)	1.8	－	－	Ⅰ	0.50	3.70	38.533	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－ 1	B	An	(1.6)	2.4	0.4	1.1	2	136	Ⅰ	2.38	3.74	38.179	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－ 2	B	An	(1.2)	1.7	0.4	0.7	－	－	Ⅰ+Ⅱ	3.18	3.39	38.466	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－ 3	B	An	(1.7)	(2.9)	0.6	2.5	－	－	Ⅰ+C	2.82	3.52	38.481	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－ 4	D	An	5.4	(4.8)	1.3	33.8	－	－	－	2.64	3.43	38.352	第1文化層	第1ブロック群	第12図52
C6－05－ 5	B	An	－	－	－	－	－	－	－	1.77	3.42	38.579	第1文化層	第1ブロック群	遺物なし
C6－05－ 6	B	An	0.8	(1.5)	0.5	0.6	1	99	Ⅱ	2.93	3.06	38.448	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－ 7	B	An	(1.3)	(1.4)	0.5	0.9	－	－	Ⅰ	2.24	2.72	38.401	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－ 8	B	An	(2.5)	1.9	0.5	2.6	－	－	Ⅳ	2.25	2.60	38.358	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－ 9	B	An	(1.2)	(1.7)	(0.5)	1.1	－	－	Ⅰ	1.98	2.59	38.343	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－10	B	An	0.8	(2.1)	0.6	0.8	1	115	Ⅰ	2.00	2.52	38.256	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－11	B	An	(2.1)	(1.3)	1.2	1.6	0	101	Ⅰ	3.83	2.54	38.688	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－12	B	An(t)	1.2	1.0	0.4	0.4	1	116	Ⅰ	3.39	2.68	38.486	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－13	B	An	1.0	(1.5)	0.5	1.2	1	122	Ⅰ	3.53	2.24	38.297	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－14	B	An	(1.3)	(1.7)	0.3	0.6	－	－	Ⅰ	3.18	2.20	38.364	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－15	B	An	(0.8)	(1.6)	(0.4)	0.6	－	－	Ⅰ	3.18	2.15	38.379	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－16	B	An	(0.4)	(2.8)	(0.4)	0.4	－	－	Ⅰ	3.02	2.40	38.268	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－17	Rf	An	0.7	1.2	0.6	0.5	2	104	Ⅰ	2.78	2.43	38.494	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－18	B	An	0.9	1.6	0.3	0.4	1	106	Ⅰ	2.80	2.39	38.501	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－19	B	An	(0.8)	(1.3)	(0.2)	0.2	－	－	Ⅰ	2.60	2.52	38.178	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－20	B	An	(1.6)	(1.7)	0.4	0.9	－	－	Ⅰ	2.64	2.41	38.329	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－21	B	An	2.6	3.1	0.9	5.6	2	118	Ⅰ+Ⅱ	2.18	2.34	38.244	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－22	B	An	(1.4)	(2.5)	(0.5)	1.4	－	－	Ⅰ+C	2.34	2.27	38.535	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－23	B	An	0.9	2.0	0.2	0.6	1	101	Ⅰ	2.58	1.87	38.194	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－24	B	An	2.2	(1.6)	0.5	1.9	1	143	Ⅰ	2.72	1.58	38.296	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－25	B	An(t)	(1.3)	(2.0)	0.3	0.6	－	－	Ⅰ	3.03	1.85	38.555	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－26	B	An	(1.2)	(1.3)	0.2	0.3	－	－	Ⅰ	3.22	1.61	38.381	第1文化層	第1ブロック群	

遺物番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	打面状況	剥離角	背面構成	出土位置 N→(m)	出土位置 W→(m)	レベル	文化層	ブロック	備考
C6－05－27	B	An	0.9	2.8	0.4	1.2	1	120	Ⅰ	3.53	1.69	38.496	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－28	B	An	1.0	1.4	0.3	0.5	2	140	Ⅰ	3.55	2.00	38.259	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－29	B	An	1.9	(2.7)	0.5	2.4	2	122	Ⅰ	3.78	1.76	38.358	第1文化層	第1ブロック群	第11図44
C6－05－31	B	An(t)	2.6	(2.2)	0.4	1.9	1	99	Ⅰ	1.92	2.63	38.243	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－32	B	An(t)	1.2	1.3	0.6	0.5	1	83	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅳ	2.92	2.36	38.303	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－33	B	An	0.8	(1.6)	0.3	0.4	0	107	Ⅰ	2.23	2.22	38.316	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－34	B	An	0.7	1.4	0.5	0.4	1	132	Ⅰ	3.02	1.89	38.256	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－35	B	An	(1.4)	(1.7)	(0.5)	1.1	－	－	Ⅰ＋C	3.40	2.17	38.199	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－36	B	An	(1.0)	(1.9)	(0.6)	1.6	－	－	Ⅲ＋C	3.36	2.22	38.237	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－37	B	An(t)	(0.8)	(0.9)	(0.2)	0.1	－	－	Ⅰ	2.83	2.20	38.174	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－39	B	An	2.1	1.2	0.8	1.5	0	85	Ⅱ	3.03	0.72	38.824	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－40	B	An	(3.0)	(4.1)	0.7	10.1	－	－	Ⅰ＋Ⅱ＋C	1.92	0.57	38.334	第1文化層	第1ブロック群	第9図32
C6－05－41	B	An	(1.4)	(1.8)	0.8	1.1	－	－	Ⅰ	1.77	0.90	38.644	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－42	B	An(t)	1.9	(2.2)	0.8	2.5	1	113	Ⅰ	1.60	0.95	38.684	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－43	B	An	(1.7)	(2.7)	(0.7)	2.2	－	－	Ⅰ	1.47	1.16	38.675	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－44	B	An	2.0	1.4	0.6	1.1	0	68	Ⅱ	1.33	1.46	38.121	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－44	B	An	(0.9)	(1.8)	(0.5)	0.3	－	－	Ⅰ	1.33	1.46	38.121	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－45	B	An(t)	(0.6)	(0.9)	(0.2)	<0.1	－	－	－	1.64	1.40	38.174	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－46	B	An	(2.0)	(3.1)	0.4	2.0	0	－	Ⅲ	1.82	1.17	38.402	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－47	B	An(t)	(1.8)	(1.4)	0.5	1.1	－	－	Ⅰ	1.89	1.32	38.383	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－48	B	An(t)	(2.1)	(2.6)	0.8	2.8	－	－	Ⅰ	2.12	1.54	38.473	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－49	B	An	(2.0)	(1.9)	(0.5)	2.3	－	－	Ⅰ＋Ⅱ	2.58	1.39	38.302	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－50	B	An	1.0	1.5	0.2	0.4	1	117	Ⅰ	2.62	2.32	38.116	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－52	B	An	1.3	2.3	0.5	1.5	1	129	Ⅰ＋Ⅳ	2.62	3.10	38.127	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－53	B	An(t)	2.3	2.4	0.9	2.4	1	134	Ⅰ	1.83	2.20	38.244	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－54	B	An(t)	3.0	(1.5)	0.7	1.9	4	－	Ⅰ	1.58	2.32	38.139	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－55	B	S	(1.8)	0.7	0.5	0.5	－	－	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅳ	1.44	2.18	38.261	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－56	C	An	(0.4)	(0.8)	0.3	<0.1	－	－	Ⅰ	1.28	1.86	38.257	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－57	B	An	1.4	(1.9)	0.6	1.4	－	－	Ⅰ	0.80	1.66	38.618	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－58	B	An(t)	(1.1)	(1.9)	0.4	0.6	－	－	Ⅰ	0.94	2.01	39.694	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－59	B	An(t)	4.7	5.4	1.8	27.1	1	111	Ⅰ＋Ⅲ＋C	0.81	2.23	38.381	第1文化層	第1ブロック群	第11図46
C6－05－60	B	An	1.5	3.2	0.7	2.6	2	125	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅳ	0.73	2.26	38.379	第1文化層	第1ブロック群	第8図17
C6－05－61	B	An	2.2	3.9	0.9	6.6	2	121	Ⅰ＋C	0.92	2.90	38.900	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－62	B	An	(1.2)	(1.7)	(0.2)	0.3	－	－	Ⅰ	1.10	2.70	38.389	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－63	B	An	(2.2)	(3.4)	0.8	4.7	2	110	Ⅰ	1.18	2.90	38.418	第1文化層	第1ブロック群	第8図13
C6－05－64	Uf	Ch	(4.9)	2.4	0.8	9.1	1	111	Ⅰ＋Ⅲ＋C	0.60	3.63	38.212	第1文化層	第1ブロック群	第14図62
C6－05－65	B	An	3.6	4.7	1.3	15.2	－	－	Ⅰ＋Ⅱ＋C	0.04	0.52	38.162	第1文化層	第1ブロック群	第9図30
C6－05－66	B	An	4.8	3.5	0.6	11.6	1	112	Ⅰ＋C	0.24	0.31	38.198	第1文化層	第1ブロック群	第10図37
C6－05－67	B	An	3.4	4.1	0.8	9.9	2	98	Ⅰ＋Ⅳ＋C	0.42	0.32	38.332	第1文化層	第1ブロック群	第9図33
C6－05－68	B	An	(1.0)	1.8	0.3	0.5	－	－	Ⅰ	0.67	0.86	38.434	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－69	B	An	(1.7)	(3.6)	(0.4)	2.5	－	－	Ⅰ	1.01	0.89	38.522	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－70	B	An	(1.2)	(1.8)	(0.3)	0.5	－	－	Ⅰ	1.45	0.73	38.664	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－71	B	An	(0.9)	1.9	(0.2)	0.5	－	－	Ⅰ	2.15	0.20	38.344	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－72	Tr	An	1.9	(2.1)	0.6	2.1	－	－	Ⅱ＋Ⅳ＋C	1.53	3.16	38.106	第1文化層	第1ブロック群	第7図2
C6－05－73	B	An(t)	4.6	2.6	1.1	10.0	2	115	Ⅲ＋C	0.85	2.18	38.268	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－74	B	An	(0.7)	1.1	0.4	0.2	－	－	－	0.94	1.93	38.652	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－75	B	An	(0.8)	(2.0)	(0.3)	0.3	－	－	－	0.88	1.75	38.509	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－76	C	An	(1.0)	0.4	0.1	<0.1	－	－	Ⅱ	0.67	0.80	38.294	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－78	C	S	－	－	－	<0.1	－	－	－	2.93	0.54	38.340	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－79	B	An(t)	2.6	(3.9)	1.1	10.0	1	88	Ⅰ	2.02	1.56	38.221	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05－80	B	An	(1.0)	(0.8)	(0.4)	0.2	－	－	Ⅰ	1.82	1.27	38.295	第1文化層	第1ブロック群	
C6－05	B	An	1.8	4.5	0.7	4.8	1	129	Ⅰ＋C	－	－	－	第1文化層	第1ブロック群	
C6－06－ 1	B	S	(3.4)	1.7	0.6	2.1	1	131	Ⅰ＋Ⅲ	1.94	0.23	38.311	第1文化層	第1ブロック群	第14図64
C6－06－ 1	B	An	2.2	(2.0)	0.7	2.8	1	135	Ⅰ＋C	3.75	0.30	38.646	第1文化層	第1ブロック群	
C6－06－ 2	B	S	4.6	2.4	0.6	7.4	1	101	Ⅰ	1.26	0.38	38.454	第1文化層	第1ブロック群	第14図63
C6－06－ 2	D	An(t)	3.2	4.5	2.2	25.6	－	－	－	3.35	0.12	38.356	第1文化層	第1ブロック群	第13図59
C6－06－ 3	B	An	1.7	(2.1)	0.5	1.7	2	132	Ⅰ	0.84	1.05	38.683	第1文化層	第1ブロック群	
C6－06－ 3	B	An	(1.7)	(1.3)	0.5	0.8	－	－	Ⅰ＋Ⅲ	2.91	0.54	38.650	第1文化層	第1ブロック群	
C6－06－ 3	B	An	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	第1文化層	第1ブロック群	遺物なし

遺物番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	打面状況	剥離角	背面構成	出土位置 N→(m)	出土位置 W→(m)	レベル	文化層	ブロック	備考
C6-11- 1	B	An(t)	(3.5)	2.1	0.9	4.3	−	−	Ⅰ	3.62	3.10	36.589	第1文化層	第1ブロック群	
C6-13- 1	B	An	0.7	1.5	0.4	0.2	0	85	Ⅰ+Ⅲ	0.23	3.87	38.412	第1文化層	第1ブロック群	
C6-13- 2	B	An	2.3	3.4	0.5	3.4	4	−	Ⅰ+S	0.22	3.76	38.142	第1文化層	第1ブロック群	
C6-13- 3	B	An	2.7	2.4	0.9	2.7	1	108	Ⅰ+Ⅱ+C	0.31	3.02	37.914	第1文化層	第1ブロック群	
C6-13- 4	焼礫	−	−	−	−	−	0.9	−	−	0.72	3.41	38.162	第1文化層	第1ブロック群	
C6-13- 5	B	An	1.0	1.4	0.3	0.4	4	−	Ⅰ	0.74	3.27	37.883	第1文化層	第1ブロック群	
C6-13- 6	D	An	3.7	2.8	1.3	11.0	−	−	−	1.11	3.28	38.255	第1文化層	第1ブロック群	第12図50
C6-13- 8	B	An	2.7	1.7	0.5	1.9	1	107	Ⅰ+Ⅱ+C	1.21	3.55	38.289	第1文化層	第1ブロック群	第14図65
C6-13- 9	B	An	2.5	2.7	0.5	3.1	1	120	Ⅰ	1.27	3.47	38.232	第1文化層	第1ブロック群	
C6-13-10	B	An	1.1	2.0	0.7	1.1	2	117	Ⅰ	1.37	3.44	38.254	第1文化層	第1ブロック群	
C6-13-11	B	An	3.1	(1.8)	0.5	3.1	4	−	Ⅰ+C	1.68	3.74	37.916	第1文化層	第1ブロック群	
C6-13-12	B	An	(1.3)	1.2	0.9	1.3	−	−	Ⅰ	1.58	3.08	38.184	第1文化層	第1ブロック群	
C6-13-13	B	An	(1.6)	(1.4)	(0.6)	0.9	−	−	Ⅰ+Ⅲ	1.64	2.56	38.159	第1文化層	第1ブロック群	
C6-13-14	D	An	5.0	6.6	1.5	39.8	−	−	−	1.84	2.05	37.949	第1文化層	第1ブロック群	第13図61
C6-13-15	B	An	1.1	(1.8)	0.2	0.4	1	120	Ⅲ	2.09	3.26	37.699	第1文化層	第1ブロック群	
C6-13-16	C	An	(0.6)	(1.0)	0.4	0.1	−	−	−	2.20	3.27	37.746	第1文化層	第1ブロック群	
C6-13-17	B	An	5.0	2.8	1.0	12.0	2	125	Ⅰ+C	2.88	3.25	37.679	第1文化層	第1ブロック群	第16図78
C6-13-18	B	An	5.6	4.2	0.8	19.6	1	126	Ⅰ+Ⅲ+C	3.00	3.34	37.942	第1文化層	第1ブロック群	第10図35
C6-13-19	B	An	4.7	3.6	0.7	14.4	1	99	Ⅱ+Ⅲ	3.02	3.47	37.953	第1文化層	第1ブロック群	第10図36
C6-13-20	B	An	2.5	3.7	0.6	5.7	2	125	Ⅰ+Ⅳ	2.84	3.59	37.994	第1文化層	第1ブロック群	第8図19
C6-13-21	B	An	3.1	3.5	1.1	15.3	4	−	Ⅰ+C	2.97	3.76	39.036	第1文化層	第1ブロック群	
C6-13-22	B	An(t)	2.7	3.3	0.7	6.0	1	124	Ⅰ+C	3.16	3.67	38.803	第1文化層	第1ブロック群	
C6-13-23	B	An	0.9	1.8	0.6	0.7	1	117	Ⅰ	3.97	3.70	37.879	第1文化層	第1ブロック群	
C6-13-24	B	An	2.6	2.4	0.6	2.6	1	93	Ⅰ	0.28	3.78	39.035	第1文化層	第1ブロック群	
C6-13	C	An	(0.3)	(1.1)	0.2	〈0.1	1	−	Ⅰ	−	−	−	第1文化層	第1ブロック群	
C6-14- 1	B	An	1.1	1.8	0.3	0.6	1	110	Ⅰ	3.36	3.68	38.460	第1文化層	第1ブロック群	
C6-14- 2	Tr	An	2.7	1.9	0.7	3.1	2	113	Ⅰ	2.90	2.33	38.482	第1文化層	第1ブロック群	第7図4
C6-14- 3	B	An	1.0	(1.6)	0.7	0.7	1	115	Ⅰ	2.46	2.26	38.381	第1文化層	第1ブロック群	
C6-14- 5	Uf	An	(5.2)	6.2	1.2	26.8	−	−	Ⅰ+C	0.37	0.62	38.169	第1文化層	第1ブロック群	第11図45
C6-14- 6	D	An	−	−	−	−	−	−	−	0.48	0.30	38.452	第1文化層	第1ブロック群	50と接合
C6-14- 7	B	An	1.8	3.0	0.3	1.7	2	95	Ⅰ	0.43	1.76	38.499	第1文化層	第1ブロック群	
C6-14- 8	B	An	(1.6)	(1.7)	(0.6)	1.5	−	−	Ⅰ+Ⅲ	1.03	0.07	38.175	第1文化層	第1ブロック群	
C6-14- 9	B	An	3.3	3.2	0.7	6.1	2	113	Ⅰ+C	1.14	1.48	38.462	第1文化層	第1ブロック群	第8図24
C6-14-10	Rf	An	4.3	3.3	1.4	19.9	1	120	Ⅰ+C	3.88	0.17	38.005	第1文化層	第1ブロック群	72と接合
C6-14-11	B	An(t)	(1.4)	1.3	0.2	0.4	−	−	Ⅰ	3.88	0.17	38.005	第1文化層	第1ブロック群	
C6-14-11	B	An	(0.7)	(1.0)	(0.2)	〈0.1	−	−	Ⅰ	1.02	2.67	38.819	第1文化層	第1ブロック群	
C6-14-12	B	An	(0.4)	(1.1)	(0.1)	〈0.1	−	−	Ⅰ	0.39	0.25	38.067	第1文化層	第1ブロック群	
C6-14-13	B	An	1.2	(1.2)	0.4	0.7	1	120	Ⅰ	0.53	0.19	38.057	第1文化層	第1ブロック群	
C6-15- 2	B	An	(1.0)	(2.5)	0.6	1.1	−	−	Ⅰ	0.45	1.11	38.764	第1文化層	第1ブロック群	
C6-15- 3	C	An	0.7	0.9	0.1	〈0.1	−	−	Ⅰ	0.95	1.40	38.151	第1文化層	第1ブロック群	
C6-15- 4	D	An	3.5	2.7	2.1	22.0	−	−	−	1.25	1.44	38.282	第1文化層	第1ブロック群	第13図57
C6-15- 5	C	S	(0.7)	(0.4)	0.3	〈0.1	−	−	Ⅰ+S	0.42	2.02	38.330	第1文化層	第1ブロック群	
C6-15- 6	B	An	1.6	0.8	0.5	0.5	1	105	Ⅰ	1.35	2.80	38.446	第1文化層	第1ブロック群	
C6-15- 7	B	An(t)	(0.8)	(1.4)	(0.3)	0.3	−	−	Ⅰ	1.58	2.60	38.975	第1文化層	第1ブロック群	
C6-15- 8	B	An	(1.9)	2.0	0.5	1.5	−	−	Ⅰ+Ⅲ	1.95	2.08	38.824	第1文化層	第1ブロック群	
C6-15- 9	B	An	(0.8)	1.5	0.3	0.3	−	−	Ⅰ+C	2.22	2.40	38.488	第1文化層	第1ブロック群	
C6-15-10	B	S	(0.7)	(1.1)	0.4	0.1	−	−	−	2.08	2.52	38.414	第1文化層	第1ブロック群	
C6-15-11	B	An	1.7	0.9	0.2	0.4	1	127	Ⅰ	1.80	2.95	38.131	第1文化層	第1ブロック群	
C6-15-12	B	An	(1.5)	(2.5)	(0.6)	2.1	−	−	Ⅳ+C	1.87	3.20	38.643	第1文化層	第1ブロック群	
C6-15-13	C	An	(0.5)	(0.9)	0.1	〈0.1	−	−	Ⅰ	1.70	3.20	38.201	第1文化層	第1ブロック群	
C6-15-14	B	An	(0.9)	(1.6)	0.4	0.4	−	−	Ⅰ+Ⅱ	1.45	3.15	38.396	第1文化層	第1ブロック群	
C6-15-14	B	An	0.6	1.3	0.3	0.1	0	121	Ⅰ	1.45	3.15	38.396	第1文化層	第1ブロック群	
C6-15-15	B	An	1.6	1.3	0.5	0.8	1	122	Ⅰ+C	1.94	3.41	38.144	第1文化層	第1ブロック群	
C6-15-16	B	An	(1.8)	(1.8)	0.6	1.5	−	−	Ⅰ	1.15	3.41	38.131	第1文化層	第1ブロック群	
C6-15-17	C	An	0.7	0.9	0.1	〈0.1	−	−	Ⅰ	1.44	3.59	38.199	第1文化層	第1ブロック群	
C6-15-18	B	An	1.3	1.8	0.5	0.8	2	125	Ⅰ	1.30	3.80	38.478	第1文化層	第1ブロック群	
C6-15-19	B	An	(4.4)	3.7	1.8	33.8	−	−	C	1.65	3.76	38.357	第1文化層	第1ブロック群	
C6-15-20	B	An	1.7	0.9	0.8	1.0	1	98	Ⅰ+C	2.10	3.94	38.259	第1文化層	第1ブロック群	
C6-15-21	B	An	(1.3)	(0.5)	(0.4)	0.2	0	−	−	2.44	3.26	38.243	第1文化層	第1ブロック群	

遺物番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	打面状況	剥離角	背面構成	出土位置 N→(m)	出土位置 W→(m)	レベル	文化層	ブロック	備考
C6－15－22	B	An	(0.9)	1.3	0.3	0.2	－	－	Ⅰ	2.62	3.65	38.183	第1文化層	第1ブロック群	
C6－15－23	B	An	3.8	2.9	1.2	11.7	2	99	Ⅰ＋Ⅱ	3.14	2.55	38.587	第1文化層	第1ブロック群	第9図31
C6－15－24	B	An	6.6	5.2	1.6	44.9	2	133	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ＋C	3.38	2.23	38.296	第1文化層	第1ブロック群	78と接合
C6－15－25	B	An	(1.4)	(3.1)	0.5	2.0	－	－	Ⅰ	3.90	2.28	38.301	第1文化層	第1ブロック群	
C6－15－26	B	An	0.6	(1.1)	0.3	0.1	－	－	Ⅰ＋S	3.97	2.55	38.139	第1文化層	第1ブロック群	
C6－15－27	B	An	(0.8)	(1.4)	0.3	0.3	－	－	Ⅰ＋Ⅱ	3.07	1.75	38.608	第1文化層	第1ブロック群	
C6－15－28	B	An	(0.8)	(2.5)	0.2	0.5	－	－	Ⅰ	2.87	1.84	38.414	第1文化層	第1ブロック群	
C6－15－29	B	An	1.2	2.0	0.5	0.9	2	114	Ⅰ＋Ⅲ	2.93	1.28	38.569	第1文化層	第1ブロック群	
C6－15－31	B	An	(1.4)	(1.7)	0.4	1.1	0	133	Ⅰ	3.79	0.34	38.573	第1文化層	第1ブロック群	
C6－15－32	C	An	(1.3)	0.7	0.2	0.2	－	－	Ⅰ	1.47	2.69	38.394	第1文化層	第1ブロック群	
C6－15－33	C	An	0.8	0.7	0.2	0.1	－	－	－	2.04	2.15	38.283	第1文化層	第1ブロック群	
C6－23－1	B	An	3.5	3.3	1.2	9.5	4	－	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	0.25	3.92	37.805	第1文化層	第1ブロック群	第9図26
C6－24－1	B	An	3.4	2.5	0.9	5.6	2	104	Ⅰ＋C	2.10	3.24	38.250	第1文化層	第1ブロック群	第14図66
C6－24－2	B	An	4.1	3.7	1.1	12.0	2	109	Ⅰ	1.52	3.24	38.136	第1文化層	第1ブロック群	第10図39
C6－24－3	B	S	0.9	1.4	1.0	－	1	90	Ⅰ	1.47	3.07	38.119	第1文化層	第1ブロック群	
C6－24－4	B	An	－	－	－	－	－	－	－	1.58	2.72	39.177	第1文化層	第1ブロック群	第14図66
C6－24－5	B	An	1.4	1.4	0.3	0.7	－	－	Ⅰ	2.40	2.15	37.932	第1文化層	第1ブロック群	
C6－24－6	B	An	－	－	－	－	－	－	－	2.00	2.03	37.949	第1文化層	第1ブロック群	78と接合
C6－24－7	B	An	(4.0)	2.1	1.4	6.1	－	－	Ⅰ	1.46	1.90	37.791	第1文化層	第1ブロック群	
C6－25－1	Tr	An	2.1	1.6	0.5	2.0	－	－	Ⅲ	1.32	2.98	38.599	第1文化層	第1ブロック群	第7図1
C6－25－2	D	An	(3.4)	(3.1)	1.0	8.2	－	－	－	0.96	2.86	38.726	第1文化層	第1ブロック群	第13図58
C6－25－3	イモ	－	－	－	－	8.0	－	－	－	0.57	2.38	38.346	第1文化層	第1ブロック群	
C6－25－4	B	An	(1.5)	(1.3)	0.4	0.7	－	－	Ⅰ	0.47	2.15	38.319	第1文化層	第1ブロック群	
C6－25－5	B	An	1.1	1.2	0.2	0.4	1	111	Ⅰ	0.32	2.07	38.199	第1文化層	第1ブロック群	
C6－25－6	B	An	1.8	2.9	0.7	2.5	1	115	Ⅰ＋S	0.35	1.64	38.286	第1文化層	第1ブロック群	
C6－25－7	B	An	(2.6)	(3.9)	1.4	11.0	1	117	Ⅰ	0.22	0.80	38.182	第1文化層	第1ブロック群	第11図43
C6－26－1	B	An	4.3	2.2	0.8	5.1	2	103	Ⅰ＋Ⅳ＋C	2.65	0.85	38.407	第1文化層	第1ブロック群	第14図69
D5－08	Rf	Ch	(3.5)	2.1	1.1	9.0	－	－	Ⅲ＋C	－	－	－	－	－	第25図122
D6－53－1	Uf	J	(2.4)	(2.2)	0.6	2.7	4	－	Ⅱ＋Ⅲ＋Ⅳ	0.85	2.48	38.916	第1文化層	第1ブロック群	第25図127
D6－76－1	B	S	(3.1)	(1.9)	1.0	4.0	－	－	Ⅰ＋C	2.02	2.68	38.941	第1文化層	第1ブロック群	
E6－11－1	Kn	Ob	2.1	1.3	0.5	1.0	1	92	Ⅰ	1.67	1.85	39.330	第1文化層	第1ブロック群	第25図120
E7－22－1	B	不明	4.1	3.7	2.0	27.1	1	127	Ⅰ＋Ⅱ＋C	1.80	2.28	38.313	第1文化層	第1ブロック群	第25図129
G4－01	D	Ob	2.2	3.1	2.2	13.5	－	－	－	－	－	－	－	－	第26図135
G4－20－14	Kn	S	7.2	2.2	0.8	10.0	－	－	Ⅰ	1.04	1.70	38.631	第1文化層	第1ブロック群	第25図119
G5－09－1	Es	Ch	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	遺物なし
G5－13－17	D	Ob	2.5	2.5	1.7	12.0	－	－	－	－	－	－	－	－	第26図134
G5－13－17	B	Ob	(1.7)	1.6	0.3	0.7	－	－	Ⅰ	－	－	－	－	－	
I4－11－1	Kn	Ob	3.2	1.6	0.5	1.6	－	－	Ⅰ	2.66	3.56	39.763	第2文化層	第3ブロック群	第23図101
I4－12－1	Kn	Ob	3.0	1.7	0.7	2.6	2	106	Ⅰ＋Ⅲ	3.32	2.14	39.914	第2文化層	第3ブロック群	第23図104
I4－12－2	焼礫②	Sa	－	－	－	3.7	－	－	－	3.41	2.42	39.920	第2文化層	第3ブロック群	
I4－12－3	B	Ob	(2.0)	2.2	1.3	4.1	－	－	Ⅰ＋Ⅱ	3.43	2.62	39.922	第2文化層	第3ブロック群	
I4－12－3	Rf	Ob	1.4	1.9	0.5	1.1	0	114	Ⅰ	3.43	2.62	39.922	第2文化層	第3ブロック群	
I4－12－4	C	Ob	0.9	1.0	0.4	0.2	4	－	Ⅰ	3.40	1.08	39.702	第2文化層	第3ブロック群	
I4－12－5	Uf	Ob	4.0	2.9	0.9	8.0	1	122	Ⅰ＋C	3.74	1.25	39.890	第2文化層	第3ブロック群	第24図115
I4－12－6	焼礫②	Sa	－	－	－	147.8	－	－	－	3.63	3.76	39.688	第2文化層	第3ブロック群	3点接合
I4－13－1	焼礫②	Sa	－	－	－	－	－	－	－	2.14	0.18	39.925	第2文化層	第3ブロック群	3点接合
I4－13－2	B	An	(2.3)	1.3	0.3	1.4	2	－	Ⅰ	3.64	0.04	39.140	第1文化層	第2ブロック群	第20図99
I4－13－3	焼礫③	Sa	－	－	－	1.8	－	－	－	3.78	0.12	39.858	第2文化層	第3ブロック群	
I4－13－4	焼礫③	Sa	－	－	－	157.9	－	－	－	3.36	0.37	39.540	第2文化層	第3ブロック群	2点接合
I4－13－5	B	An	3.5	1.7	0.6	3.5	1	113	Ⅰ＋C	3.36	0.48	39.060	第1文化層	第2ブロック群	99と接合
I4－13－6	焼礫②	Sa	－	－	－	－	－	－	－	3.20	0.68	39.710	第2文化層	第3ブロック群	3点接合
I4－13－7	B	An	(3.1)	2.6	0.7	3.2	1	118	Ⅰ＋C	3.48	0.66	39.145	第1文化層	第2ブロック群	第20図93
I4－13－8	焼礫③	Sa	－	－	－	－	－	－	－	2.80	0.82	39.717	第2文化層	第3ブロック群	
I4－13－9	焼礫②	Sa	－	－	－	9.0	－	－	－	2.82	1.00	39.828	第2文化層	第3ブロック群	2点接合
I4－13－10	B	Ob	(1.5)	3.0	0.4	1.4	－	－	Ⅰ＋Ⅱ＋C	3.12	1.26	39.876	第2文化層	第3ブロック群	
I4－13－11	B	Ob	(1.0)	1.7	0.4	0.5	－	－	Ⅰ＋Ⅳ	3.10	1.42	39.750	第2文化層	第3ブロック群	
I4－13－11	B	Ob	(0.5)	(0.9)	(0.2)	<0.1	－	－	Ⅱ	3.10	1.42	39.750	第2文化層	第3ブロック群	
I4－13－12	Uf	Ob	2.5	2.7	1.0	6.9	1	104	Ⅰ＋Ⅱ	3.12	1.58	40.000	第2文化層	第3ブロック群	第24図116
I4－13－13	B	Ob	(1.2)	1.7	0.4	0.5	1	113	Ⅰ	2.60	1.83	39.722	第2文化層	第3ブロック群	

遺物番号	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	打面状況	剝離角	背面構成	出土位置 N→(m)	出土位置 W→(m)	レベル	文化層	ブロック	備考
I4－13－14	焼礫④	Sa	－	－	－	114.0	－	－	－	1.48	1.90	39.705	第2文化層	第3ブロック群	
I4－13－15	B	Ob	(1.3)	2.1	0.7	1.1	－	－	Ⅰ＋Ⅲ＋Ⅳ	3.03	2.26	40.005	第2文化層	第3ブロック群	
I4－13－16	D	Ob	(2.4)	(1.2)	(1.1)	1.8	－	－	－	2.84	2.84	39.855	第2文化層	第3ブロック群	
I4－13－17	B	Ob	1.2	1.0	0.2	0.2	2	101	Ⅱ	3.66	2.70	39.582	第2文化層	第3ブロック群	
I4－13－18	B	Ob	2.0	2.1	0.5	1.4	2	97	Ⅰ＋C	3.86	2.79	39.677	第2文化層	第3ブロック群	
I4－13－19	DorRf	Ob	1.8	4.0	1.9	11.1	－	－	－	3.84	2.62	39.803	第2文化層	第3ブロック群	第23図109
I4－13－20	B	Ob	(1.0)	(1.6)	0.3	0.5	－	－	Ⅰ	3.90	2.46	39.905	第2文化層	第3ブロック群	
I4－13－21	Rf	Cs	(4.2)	2.6	1.1	8.6	2	123	Ⅰ＋Ⅲ	3.84	1.26	39.130	第1文化層	第2ブロック群	第19図91
I4－13－23	B	Ob	1.5	2.3	0.7	2.0	2	96	Ⅳ＋C	2.04	3.06	39.822	第2文化層	第3ブロック群	
I4－13－24	B	Ob	1.4	2.6	0.6	1.5	1	128	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	2.88	3.36	39.805	第2文化層	第3ブロック群	
I4－13－25	D	Ob	1.9	3.0	1.2	6.2	－	－	－	2.94	3.35	39.686	第2文化層	第3ブロック群	第24図118
I4－13－26	B	Ob	1.6	1.6	0.4	0.8	1	103	Ⅰ	3.00	3.40	39.990	第2文化層	第3ブロック群	
I4－13－28	B	Ob	(0.8)	(0.9)	0.3	0.1	－	－	Ⅳ＋C	3.25	3.56	39.845	第2文化層	第3ブロック群	
I4－13－29	Uf	Ob	4.3	3.0	0.9	112.0	4	－	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ＋C	3.60	3.48	39.810	第2文化層	第3ブロック群	第23図111
I4－21－ 1	C	S	(0.4)	(0.6)	0.1	<0.1	－	－	－	0.13	3.70	39.710	第2文化層	第3ブロック群	
I4－21－ 2	Uf	Cs	(1.5)	1.1	0.4	0.6	－	－	Ⅰ	1.14	2.98	39.140	第1文化層	第2ブロック群	
I4－21－ 3	Uf	Cs	(3.2)	2.3	0.6	4.5	－	－	Ⅰ＋Ⅲ	2.10	3.12	39.050	第1文化層	第2ブロック群	第19図90
I4－21－ 5	B	An(t)	(4.1)	2.0	0.6	4.3	1	113	Ⅰ	2.97	2.06	39.022	第1文化層	第2ブロック群	
I4－21－ 6	B	An(t)	3.0	2.2	0.5	2.4	1	121	Ⅰ	3.43	2.36	39.759	第2文化層	第3ブロック群	
I4－21－ 7	B	Ob	(2.9)	2.5	0.8	5.4	－	－	Ⅳ	3.86	2.30	39.585	第2文化層	第3ブロック群	第24図113
I4－21－ 8	Uf	Cs	3.9	1.7	0.7	3.7	1	110	Ⅰ	3.62	1.58	38.998	第1文化層	第2ブロック群	第19図82
I4－21－ 9	B	Cs	(4.0)	(1.2)	1.0	3.7	－	－	Ⅰ	2.74	1.28	38.796	第1文化層	第2ブロック群	
I4－22－ 1	B	Cs	(1.4)	(2.3)	(0.8)	1.3	－	－	Ⅰ	0.54	0.07	39.920	第2文化層	第3ブロック群	
I4－22－ 2	B	Ob	(0.9)	1.1	0.7	0.6	－	－	Ⅰ＋Ⅳ	0.26	1.02	39.717	第2文化層	第3ブロック群	
I4－22－ 3	B	Ob	(0.7)	(1.4)	0.3	0.3	－	－	Ⅰ	0.14	1.13	39.670	第2文化層	第3ブロック層	
I4－22－ 4	Kn	Cs	3.5	1.8	0.6	2.9	1	114	Ⅰ	0.13	1.33	39.827	第2文化層	第3ブロック群	第23図105
I4－22－ 5	B	Ob	1.3	1.5	0.6	0.7	3	95	Ⅰ＋S	0.57	1.18	39.750	第2文化層	第3ブロック群	
I4－22－ 6	B	Ob	(1.1)	(1.8)	(0.6)	0.9	－	－	Ⅰ＋C	0.40	1.45	39.841	第2文化層	第3ブロック群	
I4－22－ 7	B	Ob	(1.8)	(1.8)	0.5	1.3	－	－	Ⅱ	0.82	1.39	39.633	第2文化層	第3ブロック群	
I4－22－ 8	Kn	Ob	(2.6)	(1.6)	0.8	2.5	－	－	Ⅰ＋Ⅱ	1.23	1.90	39.703	第2文化層	第3ブロック群	第23図103
I4－22－10	Uf	Cs	(3.3)	1.8	0.5	2.3	4	－	Ⅰ	1.86	3.04	39.197	第1文化層	第2ブロック群	第19図85
I4－22－11	Rf	An(t)	3.9	3.2	1.2	10.5	1	126	Ⅲ＋C	2.24	2.70	38.998	第1文化層	第2ブロック群	
I4－22－13	B	An(t)	4.5	3.2	1.3	13.4	1	112	Ⅰ＋C	2.56	3.48	39.107	第1文化層	第2ブロック群	第20図97
I4－22－14	D	An	(3.7)	(2.4)	(2.0)	16.8	－	－	－	2.64	3.36	39.158	第1文化層	第2ブロック群	
I4－22－15	B	Cs	4.8	2.1	1.2	12.1	1	102	Ⅰ＋Ⅲ	2.72	3.58	39.155	第1文化層	第2ブロック群	第19図87
I4－22－16	B	An	5.6	(1.7)	1.1	10.3	3	119	Ⅰ＋C	3.30	3.42	39.237	第1文化層	第2ブロック群	第20図96
I4－22－17	焼礫①	Sa	－	－	－	310.3	－	－	－	3.86	3.40	39.843	第2文化層	第3ブロック群	8点接合
I4－22－18	Kn	Ob	2.2	1.4	0.7	1.8	1	122	Ⅰ＋Ⅱ	3.90	2.20	39.505	第2文化層	第3ブロック群	第23図110
I4－22－19	Kn	Ob	3.7	2.7	0.9	6.0	1	102	Ⅰ＋Ⅱ＋C	3.04	1.46	39.815	第2文化層	第3ブロック群	第23図106
I4－22－20	B	Ob	1.0	(1.2)	0.3	0.3	1	140	Ⅰ	3.16	2.28	39.970	第2文化層	第3ブロック群	
I4－23－ 1	B	An	2.7	1.3	0.4	0.9	1	－	Ⅰ	0.06	0.22	39.495	第2文化層	第3ブロック群	
I4－23－ 2	Uf	Cs	(4.9)	3.1	1.0	10.3	－	－	Ⅰ＋C	0.44	0.98	39.150	第1文化層	第2ブロック群	第19図92
I4－23－ 3	B	Ob	1.9	1.6	0.4	1.3	4	－	Ⅰ＋C	0.22	1.82	40.050	第2文化層	第3ブロック群	
I4－23－ 4	B	Cs	(2.0)	(2.3)	0.7	2.6	1	107	Ⅰ	0.80	1.58	39.040	第1文化層	第2ブロック群	
I4－23－ 5	B	Cs	3.2	1.2	0.3	1.0	1	114	Ⅰ＋Ⅱ	0.68	1.78	39.165	第1文化層	第2ブロック群	第19図84
I4－23－ 6	B	An(t)	(1.7)	1.8	0.5	1.3	1	128	Ⅰ	1.20	1.66	39.080	第1文化層	第2ブロック群	
I4－23－ 7	B	CS	(1.5)	2.7	0.6	1.5	－	－	Ⅰ	1.16	1.74	39.140	第1文化層	第2ブロック群	
I4－23－ 8	B	An(t)	1.0	1.3	0.4	0.6	1	92	Ⅰ	1.64	1.20	39.250	第1文化層	第2ブロック群	
I4－23－ 9	B	Cs	3.3	1.8	0.4	1.7	0	114	Ⅰ＋S	1.92	0.50	39.180	第1文化層	第2ブロック群	第19図83
I4－23－10	Uf	Cs	(2.8)	1.7	0.7	2.9	0	124	Ⅰ＋Ⅱ＋S	1.74	1.54	39.180	第1文化層	第2ブロック群	第19図86
I4－23－11	B	An(t)	(2.3)	1.9	0.5	1.7	－	－	Ⅰ	1.27	2.06	39.145	第1文化層	第2ブロック群	
I4－23－12	B	Ob	(1.4)	2.4	0.6	1.0	－	－	Ⅰ＋C	1.20	2.45	39.650	第2文化層	第3ブロック群	
I4－23－13	B	Ob	2.0	3.2	0.9	4.2	0	92	Ⅰ＋C	0.45	2.52	39.738	第2文化層	第3ブロック群	
I4－23－13	B	Ob	1.8	(1.0)	0.5	0.9	0	115	Ⅰ	0.45	2.52	39.738	第2文化層	第3ブロック群	
I4－23－14	B	An(t)	4.7	2.5	0.5	5.4	1	108	Ⅰ＋Ⅲ＋C	0.17	2.92	39.760	第2文化層	第3ブロック群	第24図117
I4－23－15	D	Ob	2.9	2.7	1.5	10.8	－	－	－	0.12	2.97	39.737	第2文化層	第3ブロック群	
I4－23－16	Es	Ob	(1.4)	(1.6)	(0.7)	1.0	－	－	Ⅰ	0.23	2.87	39.640	第2文化層	第3ブロック群	第23図108
I4－23－17	Es	Ob	(2.3)	(2.6)	(0.8)	3.8	－	－	Ⅰ	0.33	2.90	39.808	第2文化層	第3ブロック群	第23図107
I4－23－18	B	Ob	2.8	2.3	1.2	6.7	0	94	Ⅰ＋C	0.04	3.10	39.915	第2文化層	第3ブロック群	

遺物番号	器種	石材	③長さ (cm)	③幅 (cm)	③厚さ (cm)	重さ (g)	④打面状況	⑤剥離角	⑥背面構成	⑦出土位置 N→(m)	⑦出土位置 W→(m)	レベル	文化層	ブロック	備考
I4－23－19	B	Ob	1.0	1.3	0.8	0.7	2	89	Ⅲ	0.00	0.38	39.780	第2文化層	第3ブロック群	
I4－23－20	B	Ob	1.3	1.7	0.5	0.5	2	103	Ⅰ	0.65	3.58	39.962	第2文化層	第3ブロック群	
I4－31－ 1	Uf	Cs	3.2	1.9	0.5	3.8	2	110	Ⅲ	0.12	2.16	39.560	第2文化層	第3ブロック群	第23図112
I4－31－ 2	B	An	2.7	2.8	0.8	4.2	1	124	Ⅰ＋Ⅳ＋C	1.04	2.70	39.175	第1文化層	第2ブロック群	第20図94
I4－31－ 3	B	S	3.9	3.1	1.0	8.4	1	118	Ⅰ＋C	1.12	2.06	39.160	第1文化層	第2ブロック群	第20図95
I4－31－ 4	B	An(t)	4.2	2.2	0.8	4.8	1	114	Ⅰ＋Ⅲ＋C	1.36	1.70	39.155	第1文化層	第2ブロック群	第19図89
I4－31－ 5	Uf	Cs	4.7	1.8	0.7	5.1	1	124	Ⅰ＋Ⅱ	1.64	2.05	39.042	第1文化層	第2ブロック群	第19図88
I4－31－ 6	B	Cs	(4.2)	1.7	0.9	3.8	－	－	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	2.40	2.22	39.307	第1文化層	第2ブロック群	
I4－31－ 7	Kn	Cs	3.9	1.9	0.8	4.9	1	112	Ⅰ	2.36	2.76	39.307	第1文化層	第2ブロック群	第19図80
I4－31－ 8	Uf	Cs	4.4	1.9	0.5	3.8	1	117	Ⅰ＋Ⅳ	2.12	3.32	39.130	第1文化層	第2ブロック群	第19図81
I4－31－ 9	B	Cs	2.0	(1.2)	0.5	1.2	1	95	Ⅰ	2.32	3.28	39.190	第1文化層	第2ブロック群	
I4－31－10	B	Ja	(2.6)	(3.7)	1.5	8.9	－	－	Ⅰ	2.03	3.52	38.990	第1文化層	第2ブロック群	
I4－31－11	B	An	(2.3)	(1.3)	(0.5)	1.6	－	－	Ⅰ＋C	3.00	2.00	39.025	第1文化層	第2ブロック群	
I4－31－12	Kn	Ob	(2.0)	2.0	0.6	2.0	1	92	Ⅰ＋C	3.46	1.50	39.585	第2文化層	第3ブロック群	第23図102
I4－32－ 1	B	Ob	(1.5)	(1.9)	0.3	0.9	－	－	Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ	0.18	3.26	39.928	第2文化層	第3ブロック群	
I4－32－ 2	焼礫①	Sa	－	－	－	－	－	－	－	0.06	3.98	39.694	第2文化層	第3ブロック群	8点接合
I4－32－ 3	B	S	(0.5)	(0.9)	0.3	0.1	－	－	－	1.04	1.92	39.676	第2文化層	第3ブロック群	
I4－32－ 4	B	An(t)	5.0	2.2	0.9	9.9	1	115	Ⅰ	2.43	0.92	38.992	第2文化層	第3ブロック群	
I4－32－ 5	C	Sa	(0.5)	0.7	0.3	<0.1	－	－	C	1.88	2.10	39.700	第1文化層	第2ブロック群	
I4－32－ 6	焼礫①	Sa	－	－	－	－	－	－	－	1.38	3.16	39.772	第2文化層	第3ブロック群	8点接合
I4－32－ 7	焼礫③	Sa	－	－	－	84.1	－	－	－	1.48	3.24	39.780	第2文化層	第3ブロック群	
I4－32－ 8	焼礫①	Sa	－	－	－	－	－	－	－	1.48	3.48	39.657	第2文化層	第3ブロック群	8点接合
I4－32－ 9	焼礫	Sa	－	－	－	16.6	－	－	－	2.66	3.88	39.715	第2文化層	第3ブロック群	
I4－32－10	焼礫①	Sa	－	－	－	－	－	－	－	1.82	3.75	39.765	第2文化層	第3ブロック群	8点接合
I4－32－11	B	Ob	(2.5)	(2.0)	(0.6)	1.8	－	－	C	1.85	2.94	39.615	第2文化層	第3ブロック層	
I4－32－12	Uf	Ob	(2.6)	3.9	1.1	9.9	0	104	Ⅰ	2.28	2.93	39.875	第2文化層	第3ブロック群	第24図114
I4－32－13	B	Sa	2.2	1.6	0.5	1.3	0	95	Ⅳ＋C	2.25	3.04	39.865	第2文化層	第3ブロック群	
I4－33－ 1	B	Sa	3.6	5.2	1.1	18.9	0	119	Ⅰ＋C	1.21	0.24	39.780	第2文化層	第3ブロック群	
I4－33－ 2	Uf	Ob	2.4	2.3	0.6	2.4	0	74	Ⅰ＋Ⅱ	1.83	0.07	39.765	第2文化層	第3ブロック群	
I4－33－ 2	B	An	(0.9)	(0.7)	(0.3)	0.1	－	－	Ⅳ	1.83	0.07	39.765	第2文化層	第3ブロック群	
I4－33－ 3	B	Sa	(0.8)	(1.2)	0.3	0.4	1	135	C	2.31	0.76	40.013	第2文化層	第3ブロック群	
I4－33－ 4	B	Ob	(1.5)	2.3	0.7	1.5	3	113	Ⅰ＋Ⅲ	0.93	2.33	39.963	第2文化層	第3ブロック群	
I4－33－ 6	焼礫③	Sa	－	－	－	9.4	－	－	－	1.90	2.60	40.065	第2文化層	第3ブロック群	
I4－33－ 7	焼礫①	Sa	－	－	－	－	－	－	－	2.53	3.32	39.738	第2文化層	第3ブロック群	8点接合
I4－33－ 8	焼礫①	Sa	－	－	－	－	－	－	－	2.04	3.60	39.898	第2文化層	第3ブロック群	8点接合
I4－33－ 9	焼礫④	Sa	－	－	－	50.1	－	－	－	1.94	3.73	39.890	第2文化層	第3ブロック群	
I4－34－ 1	焼礫④	Sa	－	－	－	6.7	－	－	－	1.63	0.11	39.986	第2文化層	第3ブロック群	
I4－34－ 2	焼礫①	Sa	－	－	－	－	－	－	－	1.94	0.04	39.935	第2文化層	第3ブロック群	8点接合
I4－34－ 3	焼礫③	Sa	－	－	－	318.0	－	－	－	2.60	0.17	39.870	第2文化層	第3ブロック群	
P－19－ 1	B	Cs	1.2	2.7	0.8	2.0	1	129	Ⅰ＋C	－	－	－	－	－	第25図126
不明	Uf	Cs	3.6	2.3	0.3	－	1	114	Ⅰ＋S	－	－	－	－	－	第25図128
表採	Tp	An(t)	5.1	1.4	0.6	3.4	－	－	－	－	－	－	－	－	第25図124
FP－02－ 2	B	An	4.1	1.7	0.8	3.9	4	－	Ⅰ	－	－	－	－	－	第25図125
5 －10	D	Ob	5.2	2.6	2.2	31.9	－	－	－	－	－	－	－	－	第26図133
9 － 1	B	An	2.3	3.1	0.7	4.6	0	117	Ⅰ	2.26	3.73	38.284	第1文化層	第1ブロック群	遺物なし
38－51	Po	An	5.1	1.8	0.9	7.2	－	－	－	－	－	－	－	－	第25図123
44－41	Kn	Ob	(2.8)	1.8	0.9	3.8	－	－	－	－	－	－	－	－	第25図121

凡例

①Tr:台形石器　Kn:ナイフ形石器　Po:尖頭器　Tp:有茎尖頭器　Pi:楔形石器　Es:掻器　Rf:加工痕ある剝片　Uf:使用痕ある剝片　B:剝片　C:砕片　D:石核

②An:安山岩　An(t):安山岩（トロトロ石）　Ob:黒曜石　Ry:流紋岩　Ch:チャート　S :頁岩　Cs:珪質頁岩　Sa:砂岩　Ja:玉随

③長さは主要剝離面の剝離軸に沿った長さで打面部を含む最大長、幅は長さに直交する最大幅をとった。

④0:自然面　1:平坦打面　2:複剝離打面　3:細部調整打面　4:線状打面　－:打面欠

⑤打面と主要剝離面のなす角度で、計測器を直接あてて計った。

⑥Ⅰ:主要剝離面と同一方向　Ⅱ:主要剝離面とは右90°異なる方向　Ⅲ:主要剝離面とは逆方向　Ⅳ:主要剝離面とは左90°異なる方向　C:自然面　S:節理面

⑦出土位置は、4m四方の小グリッドを基準に北からと西からの距離を示した。単位はメートル。

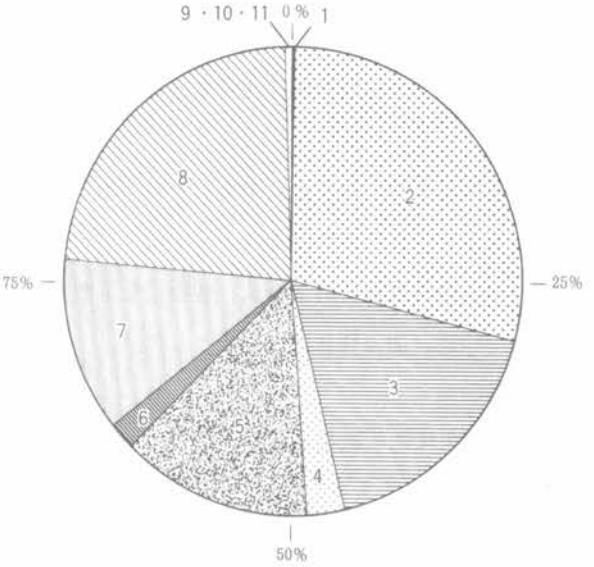
第２節　縄文時代

１．グリッド出土遺物

本遺跡の縄文時代の主体は加曽利Ｅ式後半の集落跡にあるため、出土遺物も概ねこの時期のものを中心とする。遺構外出土つまりグリッド出土遺物は、遺構出土のものに加え、早期～晩期最終末・弥生前期併行期までが出土している。グリッド出土遺物の取り上げは、小グリッド一括のものが大半を占めている。しかしながら先述のとおり、確認・本調査を通して小グリッドの設定が不統一であり、なおかつ４×４ｍ単位で一括取り上げ、あるいは出土位置を記録したものもきわめて少ない。また全体の出土量もそれほど多くないので、小グリッド単位での遺物分布の把握はなしえなかった。ここでは土器、土製品、石製品、石器の順で記載していく。なお土器以外の遺物については、出土量が僅少であるので遺構内のものも本項に含め説明する。

Ａ．土器

出土土器の個体識別は不充分で、なおかつ先述したような遺物取り上げ状況のため、概括的な分布状況を述べることは一部で可能であっても、多くは類別ごとに分布を図示できなかった。それでも細別時期の判明したものを単純に数量化すると、総数6,758点を数える。事実記載は類別ごとに順を追って説明していくが、ここでは全体を第２表に表したグループごとの数量比で示しておきたい（第27図）。ところで本遺跡グリッド出土土器は、土器の諸要素を考慮して分類することのできる個体資料はごく少量にすぎず、大部分を破片が占める。分布はこのため本資料については事実記載のための便宜的な分類をし、遺構出土土器の説明も基本的にこれに従った。また、分布については第１章の調査の方法の項で述



第27図　出土土器数量比（N＝6,758）

第２表　グリッド出土土器数量表

No.	1	2	3	4		5	6	7	8	9	10	11	
時　期	田戸下層	条痕文	黒　浜	前期後半		前期後～中期初	五領ヶ台	阿玉台	加曽利Ｅ	称名寺	加曽利Ｂ	晩期後半	総　計
				竹管文	貝殻文								
合　計	9	1952	1174	115	52	992	57	828	1567	4	3	5	6758
%	0.13	28.88	17.37	1.7	0.77	14.68	0.85	12.25	23.19	0.06	0.04	0.08	100

べたように遺物の取り上げが不統一であったため、記載可能なものについては、大グリッドを単位にすることとなった。以下に分類の基準を示し、出土点数と分布の大略的な傾向については、各項で記しておきたい。

第Ⅰ群土器

早期を本群とするが、微量の沈線文系土器と少量の条痕文系土器が出土している。

1類　田戸下層式を本類とした。

2類　条痕文系土器を本類とした。茅山下層式を主体とし、鵜ケ島台式終末の可能性があるものを若干含む。

第Ⅱ群土器

前期を本群とするが、中葉以降のものが出土している。

1類　黒浜式を本類とした。

2類　諸磯式、浮島式・興津式を本類とした。

3類　前期後半～中期初頭に比定される、縄文施文の土器を本類とした。

第Ⅲ群土器

中期を本群とする。初頭から末葉のものが出土しているが、主体は前半にある。

1類　五領ケ台式を本類とした。

2類　阿玉台式直前、阿玉台式、勝坂式を本類とした。

3類　中峠式、加曽利E式を本類とした。

第Ⅳ群土器

後期を本群とする。微量の称名寺式が出土している。

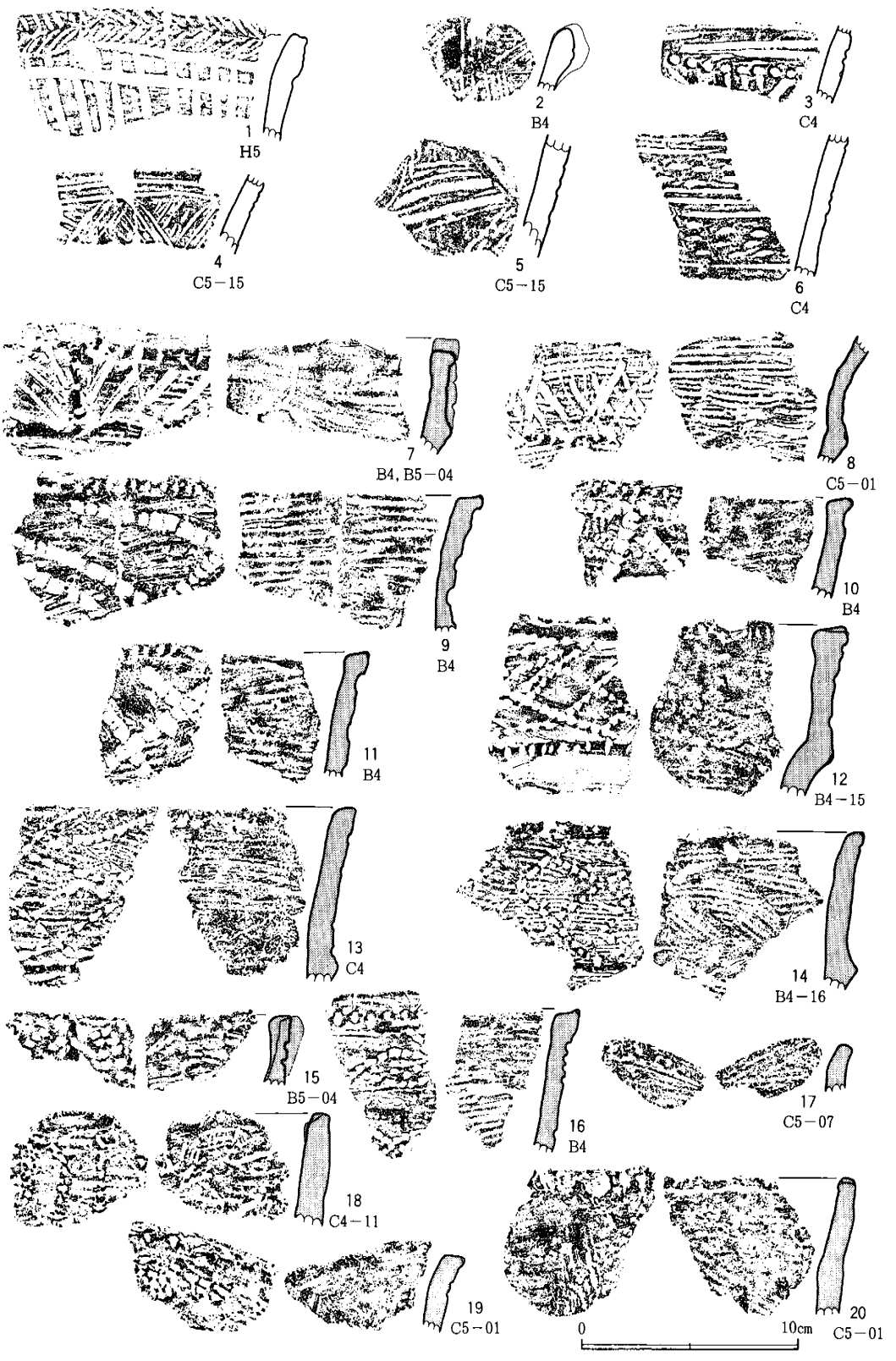
第Ⅴ群土器

晩期末葉～弥生時代中期前半に比定できるものを本群とする。微量出土している。

第Ⅰ群土器（第28図1～第30図38・第40図1、図版5・6・7・17）

1類（第28図1～6）

田戸下層式に比定されるものである。本類は出土総数9点（0.1%）を数えるが、6点を図示しえた。出土点数が僅少のため分布といえるものではないが、1点を除き遺跡西部のB4・C4・C5区から出土している。1・2は口縁部で、1は外反する口唇部上と口縁端部にかけて矢羽状に沈線が巡らされるが、以下の太沈線による文様帯とは横位の太沈線で区画される。2は口唇部上から口縁端部にかけてが肥厚し、小突起状になる。3は口縁部との区画以下に、横位の列点文と太沈線による幾何学文が形成されよう。4～6は沈線区画内に充填文が施されるものである。5は太沈線、4は細沈線で斜格子をつくり、内側を5は短沈線で、4は複列の列点文で



第28図　グリッド出土土器(1)

充填する。6は横位の沈線による区画内に短沈線が充填される。

2類（第28図7～第30図38、第40図1）

茅山下層式に比定できるものであるが、鵜ケ島台式終末の可能性のあるものを含むと思われる。口縁部では下端に1段の屈曲を有し、胴部と区画するものが多く認められる。屈曲上には刻み目が付される場合がある。口縁部文様帯が形成されるものは、地文条痕の上に種々の文様が施される。また、34は外面のみであるが、他は内外面ともに条痕もしくは擦痕が認められる。器形は端部の断面形にバラエティはあるものの、口縁部が外に開く傾向が強い。本類は出土総数1,952点（28.9%）を数え、分布は遺跡西側に偏在する。特にB4、C5区の北西に延びる台地平坦部から斜面部に総数の約64%、C4区を中心とする斜面部に総数の約17%が検出されている。ともに土器の廃棄場を想定できようが、前者は炉穴の分布域を含むものである。以下に文様要素などによって種別される。

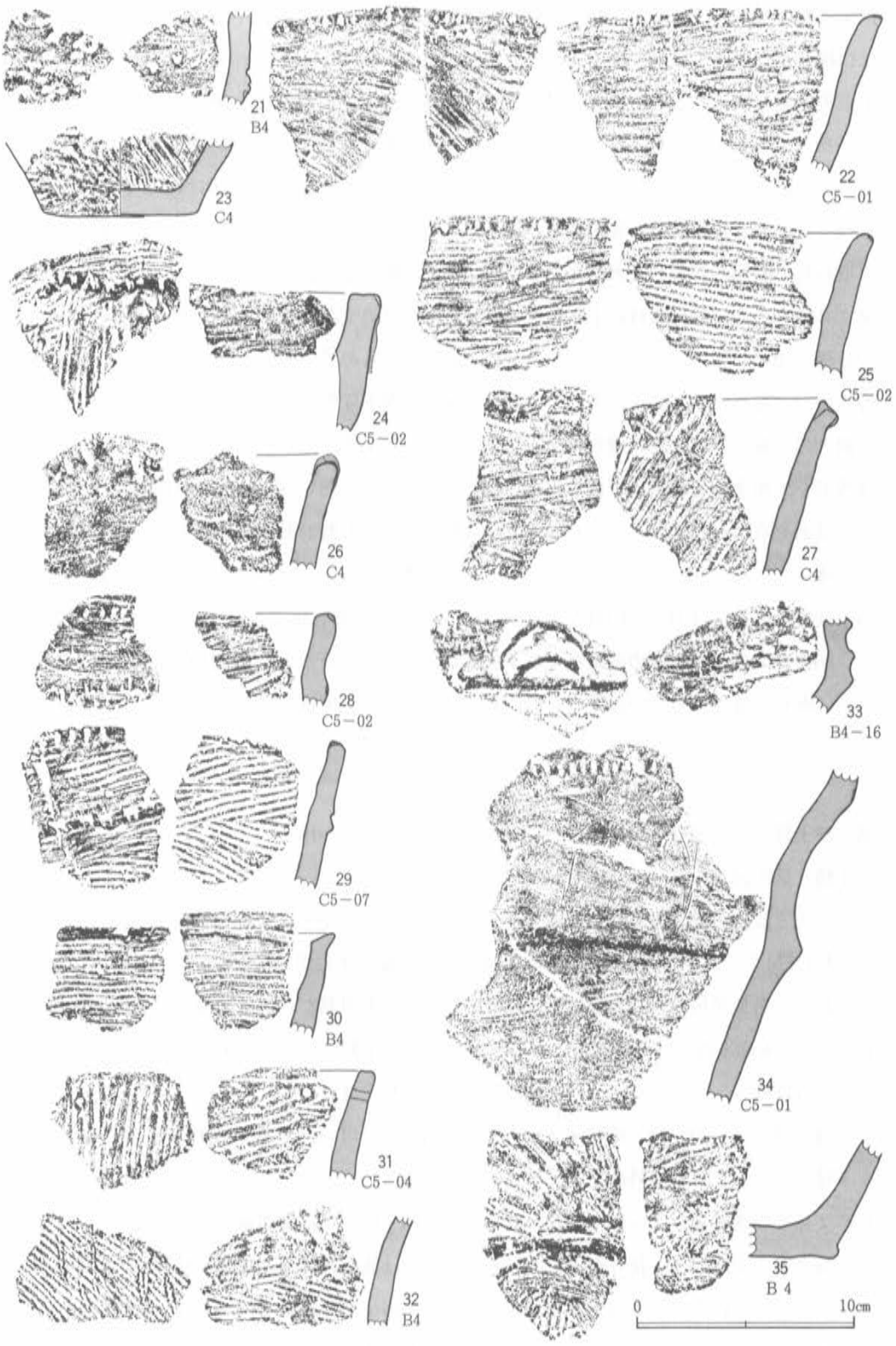
a種（7・8） 口縁部区画内に、竹管様の工具によって斜めあるいは格子目状に条痕が引かれる。7はゆるやかな波状を呈す平坦なつくりの頂部から、刻み目が付される低隆帯が垂下する。平坦なつくりの口縁端部には、刻み目や凹みが付けられる。

b種（9～16・21、第40図1） 口縁部区画内に押引文が施されるものである。押引文描出にはその断面形から判断すると、湾曲のそれほど大きくない半截竹管、あるいは角棒状の工具が施文具として用いられたと思われる。13・14を除き、平坦なつくりの口縁端部に刻み目や凹みが付けられる。9～14・16は、押引文が口縁部区画内に格子目状に施される。9～11は幅広な施文具が用いられていよう。15は欠損するが筒状を呈する突起と思われ、その頂部から低隆帯が垂下しよう。16は格子目状のモチーフの内側にも押引文が充填される。21は口縁部下端を区画する隆帯上にも押引文が施され、区画接点には鵜ケ島台式に多く認められる円形竹管による刺突文が配されると思われる。第40図1はこれらの諸特徴がうかがわれる個体である。刻み目の付された低隆帯で下端を区画された内側は、基本的に押引文による格子目状のモチーフで、部分的にモチーフ内にも押引文が充填される。また口縁波頂部から垂下する刻み目の付された低隆帯が、縦位に文様帯を分割すると思われる。推定最大径は39.6cmである。

c種（17～20） 基本的にはb種と同様に「押し引き手法」によるものだが、施文具が異なったり、b種と同様でも先端に加工が施されているものを本種とした。17を除き、平坦なつくりの口縁端部に刻み目や凹みが付けられる。17はこのなかでも異質で、単独で繊細な爪形文が施される。18はやや先端の尖った施文具で、曲線的なモチーフを表出している。19は幅広だが、先割れ状の施文具が用いられている。20は半截竹管の内側を用いて、いわゆる複列の角押文が格子目状に施される。

d種（22・24・25・27～32）

内外面ともに地文条痕が認められるもので、口縁部の場合は明確な区画帯を有せず隆帯で区



第29図　グリッド出土土器(2)

画する程度である。22・24・25・27～29の口縁部端部には、刻み目や凹みが付けられる。器形は口縁部が外に開く傾向が強い。24は波状縁の頂部が分厚くつくられているが、その平坦面にも条痕が施されている。27はやや肥厚した口縁端部が、表裏から強く押されねじれ気味の波状形となっている。28は刻み目の付された口縁端部とあまり明瞭でない低隆帯で、口縁部が区画される。29～32は本類中で最も明瞭な条痕文が施されるものである。29はゆるやかな波状縁となろうが、浅くついた段に先割れ状の施文具よって列点文が巡らされよう。30は裏面端部がそぎ取られ、断面形が鋭利な刃状となる。31は端部に焼成前の円孔が認められる。32は条痕文の施文具でもある貝殻の腹縁による刺突文が、まばらに地文条痕上に施される。

e種（26・33・34）　地文として擦痕の認められるものである。26は山形を呈すと思われる波状縁で、端部に刻み目が付される。33は口縁部下端の隆帯で区画帯が形成されるが、これに区画内の二重の半円状隆起線が接する。茅山下層式に通例認められるモチーフである。34は口縁端部を欠損するため定かではないが、刻み目の付された弱い屈曲と強い屈曲で、口縁部は2段の湾曲を有すと思われる。これは従来から鵜ケ島台式の器形といわれるものである。

f種（23・35～38）　底部を一括した。36が平底ながらも上げ底状になっている他は、通常の平底である。23は内外に明瞭な条痕が、35は内外面と底面に擦痕と判別しにくい条痕が施される。36は外面端部に縦位の明瞭な条痕が施され、内面にも通常の条痕が施される。37は外面と底面に条痕が施される。38は突出した器形で外面と底面が擦痕、内面に条痕がそれぞれ施される。

第Ⅱ群土器（第30図39～第33図126・第40図2・3、図版7～10・17）

1類（第30図39～第31図77、第40図2）

黒浜式土器に比定できるものを本類とするが、文様要素などによって以下に種別される。出土総数1,174点（17.4%）を数え、分布は遺跡西側に偏在する傾向にある。特にB4、C5区の北西に延びる台地平坦部から斜面部に、総数の約83%（平坦部だけでは約52%）が検出される。B4区には、本群土器の時期に比定される性格不明竪穴遺構である001号跡が検出されているが、他に遺構は検出されておらず、この範囲に廃棄場が想定されよう。

a種（39～56・69～74・第40図2）　竹管を施文具に用いて各種の文様を表出しているものを本種とするが、竹管以外の工具による沈線も僅少のため含めた。口縁部区画の多くは、これらの文様でなされる。39～42・70は半截竹管の内側を用いた結節沈線を引くもので、41・42・70は施文具の先端に浅い抉りが入ると思われる。39は波頂部からの垂線や区画内の幾何学的モチーフも、これによって表出される。40は区画内に鋸歯文が充填される。41は波頂部下の端部に円形竹管による刺突文が施され、これを起点に平行沈線による米字文が展開されよう。42は附加条による羽状縄文を地文にもつ。43は口縁端部に平行して2条の平行沈線が引かれる。70

第30図　グリッド出土土器(3)

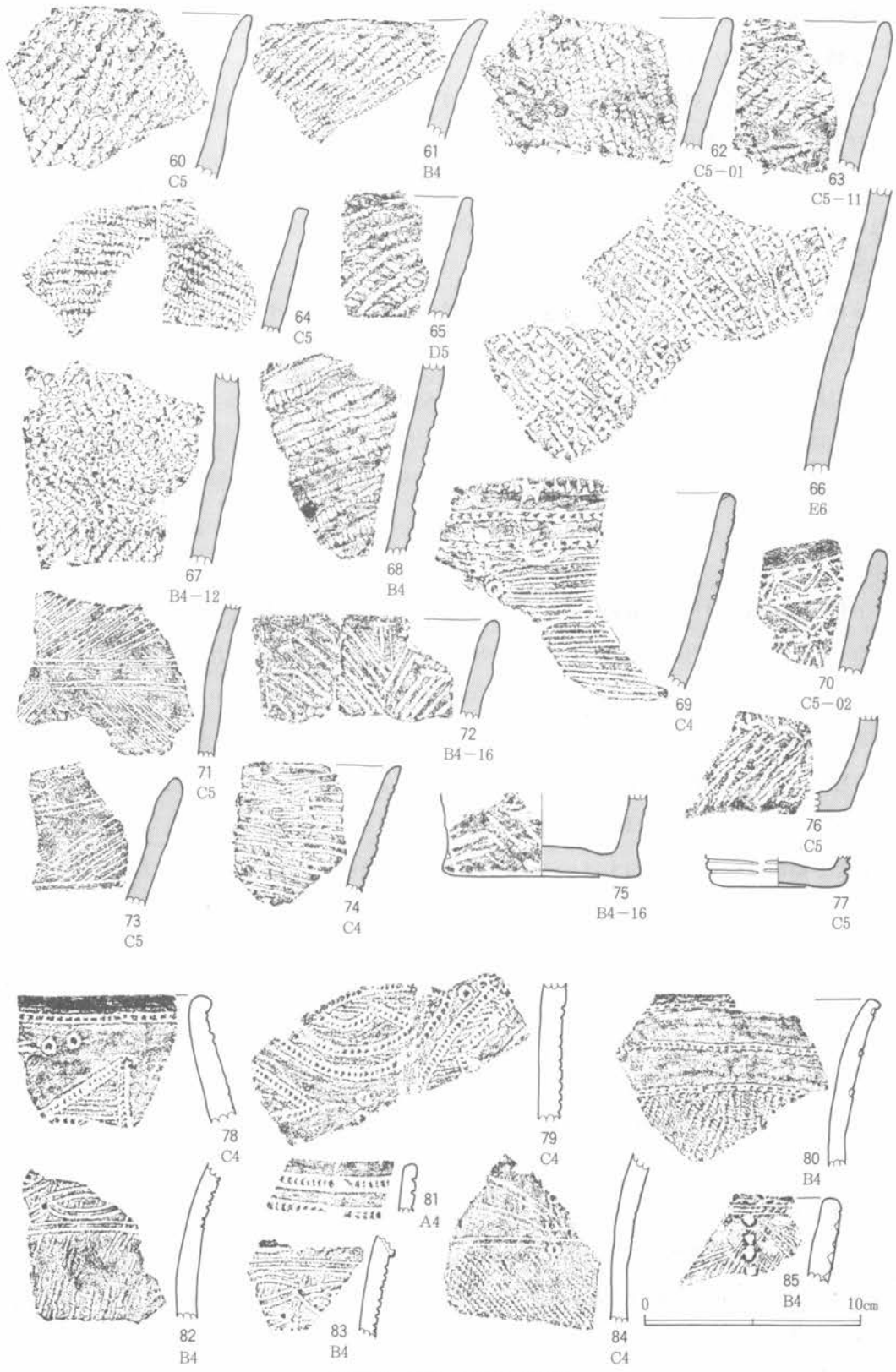
は波状縁に沿って結節沈線が多段に引かれ、その間を鋸歯状文が充填する。結節沈線の施文方向は右から左で他と異なる。

44～48・69は先端に抉りの入った半截竹管内側を用いた結節沈線で、幾何学的構成をとる無文帯を区画する。44は縦横の無文帯の交差部に大きく凹みが付けられる。45は無文帯が口縁部と胴部を区画する。口縁部には平行沈線が流水状に充填され、胴部以下は縄文が施される。また縦位の分割線として口縁部内には平行沈線、以下には円形竹管の刺突が認められる。47には焼成後の穿孔が認められる。48は口縁端部に無文帯が形成されるが、直下はコンパス文となる。69は口縁端部に沿って無文帯が形成され、以下に密接して横位の平行沈線が引かれる。

49～56・71～74は基本的に半截竹管の内側を用いて平行沈線を表出し、口縁部を以下と区画する。区画内は幾何学的な文様構成をとるものが認められる。49は口縁端部に沿って断続した平行沈線が引かれる。波頂部直下には注口部が付く片口注口土器となろうか。50はゆるやかな波状縁に沿って2条の平行沈線が引かれ、波頂部からの中軸線上に複数の円文が垂下する。51の口縁部と胴部の区画帯は平行沈線によるものだが、これは両端を区切り鋸歯状のモチーフを充填する。口縁部内には葉脈文が施されるのであろうか。胴部では地文縄文上に区画帯に接して鋸歯状文が引かれる。52は地文縄文上に51の区画帯と同様なモチーフが認められる。53は平行沈線で両端が区切られた無文帯が、胴部中位に巡り上下を区画しよう。無文帯内には口縁部の幾何学文（米字文？）の軸線上に位置する円孔が穿たれる。平行沈線の表出は浅い。第40図2は53と同一個体になる可能性が強い。内湾する4単位の波状口縁で、波頂部下に円孔が貫通し、その軸線上と波状口縁間の軸線上に貫通しない円孔が複数穿たれる。縄文は付加条の羽状縄文で推定口径29.0cmを測る。54は膨らみをもつ口縁部で、重畳する平行沈線と円形竹管による刺突が認められる。55は口縁端部に密接して鋸歯状文が施され、強く外反する器形となる。56はコンパス文的に鋸歯状文が引かれている。71は平行沈線によって両端を区切られた無文帯が口縁部と胴部を区画するが、ともに区画内は密接して平行沈線が引かれ、山形のモチーフをとろう。72は口縁端部直下から密接した葉脈文が施される。73は口縁端部下の区画内に、74は口縁端部の直下から密接して平行沈線が引かれる。

b種（57～68）　単独で撚糸文（絡条体回転文）や縄文が施されるものを本種とする。57・58は絡条体回転文が施されるもの。57は波頂部が叉状となった波状縁で、強く外反する。59～67は縄文が施されるもの。59は横位のＲＬ（０段多条）である。60・61は横位のＬＲで、61は端部にナデで狭小な無文帯が形成される。62は横位のRLで、63はLR（異束）である。64は横位ならびに斜位のRLである。65･66は附加条である。67は結束第1種による羽状縄文である。68は絡条体圧痕文が認められる。

c種（75～77）　底部を一括する。75は上げ底気味で、胴部下端まで撚糸文（絡条体回転文）が認められる。76には末端が閉じた縄で反撚LRが施される。77は上げ底気味で、胴部下端にま



第31図　グリッド出土土器(4)

で横位の平行沈線が引かれる。

2類（第31図78～第32図106、第40図３）

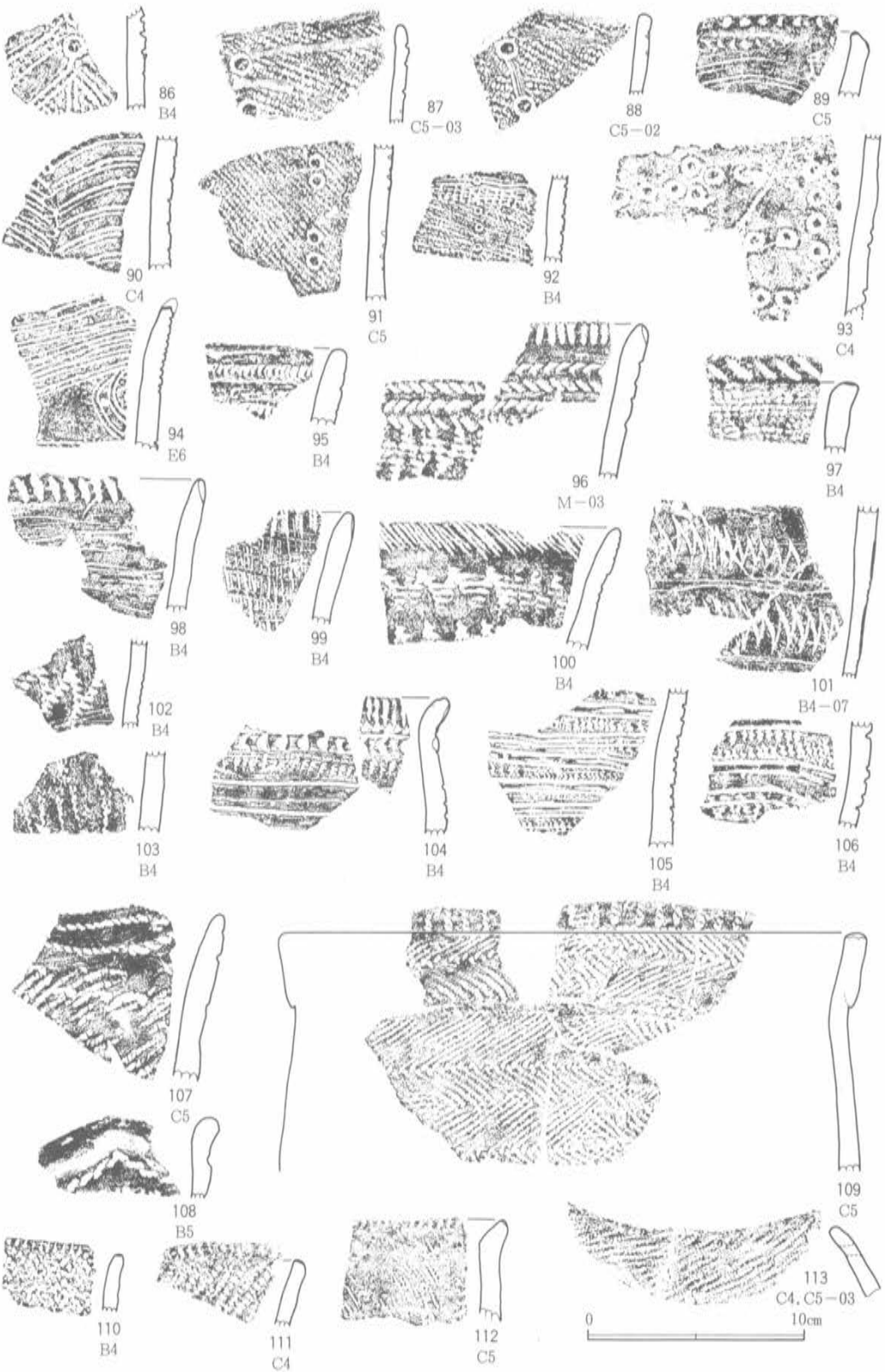
諸磯式、浮島式・興津式を本類とするが、いずれかに分別しにくいものも含むため、主要な文様要素である広義の竹管文、貝殻文などで分け、以下に種別してみた。本類は出土総数167点（2.5％）を数えるが、内訳は竹管文115点、貝殻文52点である。出土点数が少ないため分布は言及しづらいが、本群土器に時期が比定できる001号跡が検出されたＢ４区に、総数の約53％が検出されている。

a種（78～81・95）　広義の竹管文のうち結節沈線文（爪形文）を主要に施すもの。78･79は結節沈線によって閉じた図形を描くが、短冊文もしくは入組木葉文を表出しよう。無文の帯状部には円形竹管による刺突文が施される。78ではやや肥厚する口縁端部下にも結節沈線文が沿う。80は口縁部に結節沈線によって両端が区切られた無文帯を形成し、以下の縄文帯と区画される。さらに中位にもほぼ平行して結節沈線文が施される。81は口縁端部に平行して、２条の結節沈線が施される。以上は諸磯ａ式である。95は密に連続的な爪形文が施される。諸磯ｂ式土器である。

b種（82・83・94）　広義の竹管文のうち、平行沈線文で文様を構成するもの。82・83は同一個体で、半截竹管内側による平行沈線で横位に連繋する木葉文が施される。地文にはまばらな撚糸文（絡条体回転文）が施される。これらは地文から考えると、より東関東的な諸磯ａ式である。94は重畳する平行沈線による区画内に、二重の円弧状の文様が施されよう。

c種（84～93）　竹管による連続的な刺突文（ほとんどが円形竹管）、押引文を基軸とする文様が描かれるもの。84は口縁部文様帯に肋骨文が施される。85は撚糸文（絡条体回転文）を地文とし、器面の粘土がはみ出すほど強い押引文を基軸に葉脈文が施される。86は縄文を地文とし、磨消部をもつ葉脈文が施されよう。87・88は同一個体で、ヘラ状工具による幅狭なナゾリで地文上に文様を構成すると思われるが、葉脈文の可能性があろう。89・90は肋骨文が施されるが、89は内屈する口縁部の裏面端部には刻み目を付し、表面端部の稜線直下には、半截竹管による連続的な刺突文が巡ると思われる。91は２個１組の円形竹管による刺突文が、単に垂下すると思われる。92は基軸となる円形竹管による刺突文に直交して、僅かに蛇行した平行沈線文と櫛葉状工具による連続刺突文が施される。93は円形竹管による連続的な刺突文が、方形を基調とした区画文を形成しよう。多くが諸磯ａ式に比定される。

d種（96～103）　口縁部以下には変形爪形文や連続貝殻文、竹管文、条線文がみられるもので、口唇部上や口縁端部には刻み目状の短沈線が施される。96は二列の変形爪形文以下に鋸歯状貝殻腹縁による波状貝殻文が認められる。97は横位の連続した沈線に重ねて、鋸歯状貝殻腹縁による波状貝殻文が施される。98・99の刻み目状短沈線以下には、それぞれ密接した沈線が横位、格子目状に施される。100は密接して斜位に施された短沈線以下から鋸歯状貝殻腹縁によ



第32図　グリッド出土土器(5)

る波状貝殻文が施される。101は波状貝殻文間を横位の細い沈線が区切る。102・103は胴部に鋸歯状貝殻腹縁による波状貝殻文が施される。以上は浮島Ⅱ式とⅢ式に比定できるものである。

e種（104～106）　いわゆる磨消貝殻文やそれに類するものである。104は口縁端部に刻み目状短沈線が付され、直下に横位のD字爪形文（器面を抉り起こすように付す）、以下に磨消貝殻文が施される。105は無文地がほとんどみられないが、本種の範疇であろう。105・106とも区画は半截竹管内側を用いた平行沈線による。以上は興津式に比定されよう。

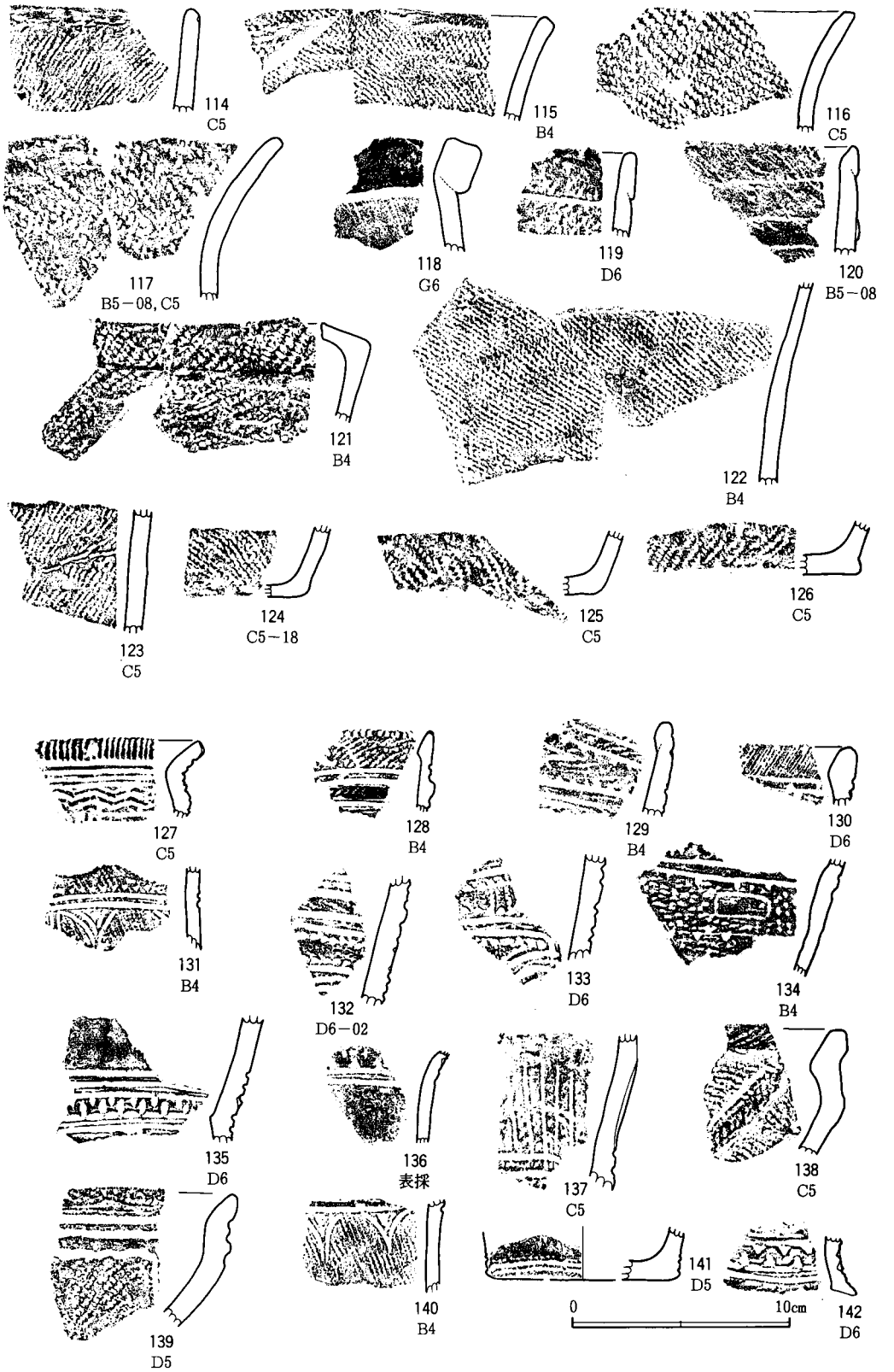
3類（第32図107～第33図126、第40図3）

大部分は第2類のうち、特にその後半の土器群に伴うと考えられる縄文施文の土器で、東関東地域を主要な分布圏とする。本類と分別が困難な中期初頭の縄文施文の土器をいくらか含んでいると思われる。回転縄文の施文方向が横位であるものは、ほとんど前期としてよいかもしれない。出土総数992点（14.7%）を数え、分布は遺跡西側に偏在する傾向にある。特にB4・C5区の北西に延びる台地平坦部から斜面部に、総数の約75%（平坦部だけでは約48%）が検出される。B4区での周辺遺構との時期関係など大略的には1類と一致し、本類にもこの範囲に廃棄場が想定されよう。

a種（107～112）　口縁端部や口唇部上に縄の側面圧痕や刻み目など、装飾的な文様が付加されるものである。107は波状口縁端部に縄の側面圧痕による文様帯をつくり、以下に末端を閉じた横位のLR縄文が施される。108は肥厚した波状口縁以下に無文帯を置き、縄の側面圧痕が口縁部に平行して施文される。109は折り返し口縁でこの部分で括れを有し、胴部以下がやや膨らむ器形となろう。縄の側面圧痕を口唇部上に刻み目状に付し、以下には結束第1種の羽状縄文が施されるが、2種類認めることができる。推定口径25.2cmを測る。110は口唇部上に刻み目が付され、口縁部上端から結束第1種の縄文が施される。112は縄文の施文方向が縦位であることと、口縁端部の断面形態から中期初頭の可能性がある。

b種（113～123、第40図3）　口縁部ではa種のように装飾性を持たないものと、胴部を本種とした。113は波状口縁の端部に円孔が開けられ、胎土中に角閃石を含む。114は口縁部の上端から横位の回転縄文が施されるが、末端が閉じている。114～116は内面の磨きが顕著である。第40図3はやや肥厚した口縁部が外反する。推定口径23.2cmを測る。117は附加条縄文が施される。118～120は折り返し口縁を呈するものである。118は断面形が角頭状のかなり肥厚した口縁部で、撚目の細かな絡条体回転文が施される。胎土も粘土主体で色調は淡褐色を呈し、他と異なる。119は扁平に整えられた折り返し口縁である。120は口縁部以下に扁平な隆帯が付される。121は端部が強く内折するゆるやかな波状口縁となろう。123は閉じた縄の痕跡が認められる。

c種（124～126）　本類の底部を一括した。124の縄文は結束第1種が施され、結束部が下端に認められる。



第33図　グリッド出土土器(6)

第Ⅲ群土器（第33図127～第39図258、第40図４・５、図版10～17）

１類（第33図127～142）

五領ケ台式に比定できるものを本類とした。出土総数57点（0.9%）と少なく分布は言及しづらいが、遺跡西側に散漫にある傾向である。このうちC5、D6区にかけて32点認められるが、C6－05区には中期初頭～前葉にかけての土器埋設土坑であるP－06号跡が位置しており、何らかの関係があろう。

a種（127）　口縁端部には半截竹管内側による浮線状の押引文、以下には平行沈線文や鋸歯状沈線文が施される。五領ケ台Ⅰ式集合沈線系で１点のみの出土である。

b種（128～136）　竹管や角棒状工具の角を用いた刺突を列点状に施したり、交互刺突文をつくり出しているものを本種とした。128は口唇部上に刻み目を付し、端部の区画内に刺突を密に充填する。129・131～134は区画沈線に並列して列点文が施される。131には区画沈線に140と同様の重三叉文が付随する。134では区画内にも細かな列点文が密に施され、さらに方形の小区画が認められる。130・135・136は交互刺突文が施されるが、130は口縁端部に斜位に密な条痕が認められ、刷毛目状沈線的である。以上は五領ケ台Ⅱ式の範疇になると思われる。

c種（137～140）　地文に縄文が施されるものを本種とした。137は地文縄文上に沈線による区画と充填文が重ねられる。138は貼り付けた隆帯上にも同様の縄文が施される。138・139胎土なかには細かな雲母粒が多量、石英・長石粒が中量含まれる。140は区画沈線に接して重三叉文が施される。以上は五領ケ台Ⅱ式で138・139は最末期となろう。

d種（141･142）　本類の底部を一括した。ともに胴部下端に区画沈線が引かれ、これに並列して列点文、交互刺突文が施される。141は推定底径8.9cmを測る。142は張り出す器形となる。ともに五領ケ台Ⅱ式である。

２類（第34図143～第36図200、図版11～図版13）

阿玉台式直前、阿玉台式、勝坂式に比定できるものを本類とした。出土総数828点（12.3%）を数え、分布は台地平坦部のC5区を中心とする遺跡西側に、偏在する傾向が認められる。しかし他と異なるのは、隣接するD5区にもややまとまりをみせる点である。以上の範囲で総数の約64%が検出されている。

a種（143･144）　角押文が主要な文様要素であるが、印刻文が表や裏に施されるものを本種とした。143は２本の粘土帯を貼り付けた突起が波頂部に付され、以下の区画内に印刻文が施される。剝落しているが波頂部裏面には貼付文が付されたと思われる。胎土中に粗い石英・長石粒が多量、細かな雲母粒が中量含まれる。144は波頂部下に角押文が叉状のモチーフを形成しよう。裏面には大きく印刻文が施される。以上は阿玉台式直前に比定できよう。

b種（145～163）　貼付文と印刻状の沈線が認められ、a種との分別が不明瞭なものを含む

第34図　グリッド出土土器(7)

が、単列の角押文を施し基本的には口縁部に区画を形成するものを本種とした。145は粘土棒を芯にした突起を中心に枠状区画が形成される。角押文は区画や口唇部上に施され、裏面には印刻状の沈線が端部と内面の稜に沿って引かれる。146～150は裏面に非対称を意識した貼付文が付けられる。146・147は同一個体の可能性が高いが、裏面貼付文の端部には交互刺突文が付される。146～148は胎土中に粗い石英・長石粒、細かな雲母粒が含まれる。148・150は扇形把手の祖形となる突起の裏面に貼付文が付されるが、148のそれには円形竹管による刺突文と角押文が認められる。151～153は突起や波頂部に刻み目状の凹線が引かれるものである。151は波頂部下に玉抱き状のモチーフを中心とした貼付文を付すが、これは両側の区画接点になろう。内面に明瞭な稜をもつ。胎土中に細かな雲母・石英・長石粒を少量含む。152は叉状になった波頂部下に、狭小な枠状区画が貼付文と組んで玉抱き状のモチーフをつくろう。153は枠状区画の接点が叉状となるが、おそらく突起の刻み目は非対称を意識して現存部側だけに付されると思われる。角押文は口縁端部にも施される。154・155は接合しないが同一個体と思われる。波頂部の片側面に非対称を意識した刻み目状の凹線が付される。156～158は叉状をモチーフとするＶ字またはW字状の貼付文が付される。157・158は叉状の波頂部下に付され、口縁端部には交互刺突文、刻み目状の凹線が付される。159は叉状をモチーフとした対のＹ字状の角押文が施される。160は粘土棒を芯とした小突起以下の片側に、角押文の付随する弧状の貼付文が付される。欠損部側には単独で弧状に角押文が施されるが貼付文は認められず、非対称が意識されていよう。また枠状区画は完成されていない。161は角押文単独で枠状区画が形成されるものである。区画内には支点を交互にずらして引いたコンパス文的な波状沈線文が認められる。162～164は口縁端部（やや内面寄り）に細い刻み目状の凹線と刺突文で、交互刺突文を付すものである。162は波状口縁で、刻み目状の凹線が付されるＹ字状の貼付文が枠状区画の接点となる。これは扇状把手の祖形となると思われる。163はおそらく隆帯によって枠状区画が形成されると思われ、区画内には波状の角押文が充填される。164は剝落しているが、隆帯によって枠状区画が形成されたと思われる。以上は阿玉台Ｉａ式に比定できよう。

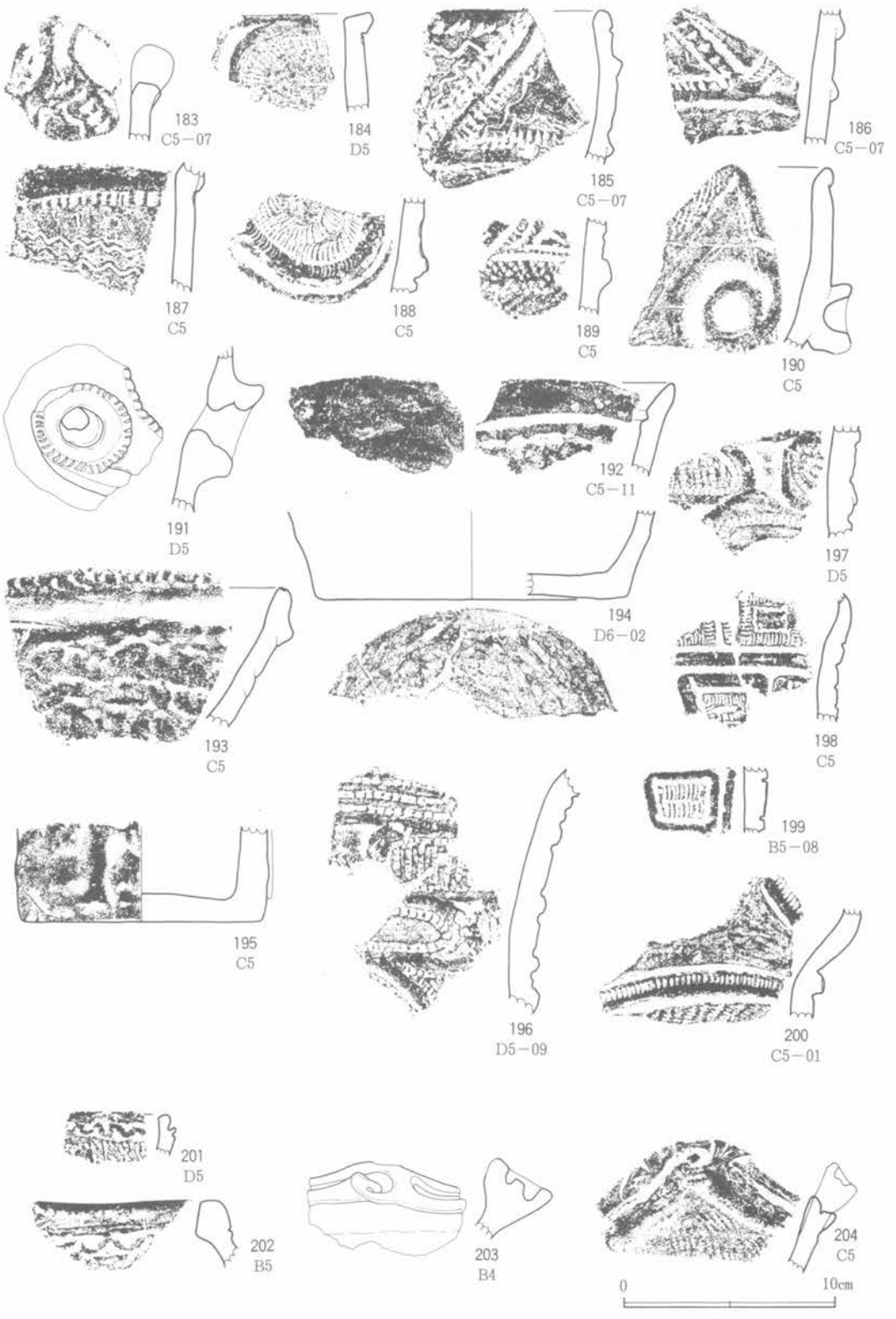
ｃ種（165～181）　単列の角押文を施し、口縁部の枠状区画が完成するもので、扇状把手や突起が発達したものを本種は含む。165～168はやや低めの隆帯によって枠状区画が形成されるものである。166では区画接点が粘土棒を芯にした突起となる。165･166とも区画直下に鋸歯状の角押文、以下にひだ状文が施される。167は区画に付随して連続弧状の角押文が施される。168は区画を形成する隆帯に連続的に押捺が加えられ、区画内には鋸歯状の角押文が充填される。169・170は同一個体で、幅の差はあるが内外とも有節線文による区画が形成される。区画内も有節線文で、複列の鋸歯状モチーフが充填される。171は口縁端部隆帯に刻み目状の凹線が付され、区画内に鋸歯状の角押文が密接して充填され、三角形の空間には円形刺突文が密に施される。胎土中に細かな雲母・石英・長石粒がやや多量に含まれる。172・173は発達した棒状突起

第35図　グリッド出土土器(8)

を区画接点とし、大型の枠状区画が形成されるが、ともに区画内には角押文による充填文がよく施されている。172は口唇部上に角押文が施され、173は刻み目が連続的に付され、胎土中に粗い石英・長石粒を多量に含む。174～178は隆帯が高まり、区画接点や中間点に把手や突起が発達しているものである。174は区画中間点に半開き状の扇形把手が付けられ、隆帯あるいは把手に付随して連続弧状の角押文が施される。胎土中に細かな雲母粒、粗い石英・長石粒を多量含む。175は口縁端部に発達した棒状突起が付けられる。これは突起の先端に、大きな凹みを有し周縁に列点状の角押文が付けられた、環状の貼付文が結合したものである。176は口縁端部に枠状区画が延び、巻き上げられたような突起が付く。胎土中に細かな雲母粒、粗い石英・長石粒を中量含む。177は口縁部内外面にかけて2本の粘土紐を付し、中間を丁寧に整形した突起が付く。突起以外の口縁端部には浅い段を有し、口唇部上には凹線が巡る。178は枠状区画接点に、刻み目状の凹線が付された箱状把手が付けられる。胎土中に細かな雲母粒をやや多量に、粗い石英・長石粒を少量含む。179～181は胴部である。179は口縁部下端からの破片で断面三角形の隆帯で形成される区画に付随してあるいは充填して角押文が施される。以下には無文帯を介在して胴部にも隆帯による区画が形成されよう。胎土中に細かな雲母粒を中量、粗い石英・長石粒を少量含む。180は胴部に多段に区画が形成されるであろう。胴部を分ける区画隆起線には、単位文的な横長の突起やＹ字状の貼付文が付され、さらに曲線的な隆起線が垂下すると思われる。区画に付随してあるいは充填されて連続弧状や波状の沈線文、連続爪形文が施される。細かな雲母粒を少量、石英・長石粒を微量含み、推定最大径13cmを測る。181はひだ状文を施した後に、断面三角形の隆帯で縦横に区画が形成されると思われる。区画内に沈線による充填文が施されよう。以上は阿玉台Ｉｂ式に比定されよう。

ｄ種（182）　枠状区画に付随して複列の角押文が施されるものを本種とするが、1点のみの出土である。口縁部に重三角形の枠状区画が形成され、先端を丸く仕上げた施文具によるペン先様の複列角押文がこれに付随する。阿玉台Ⅱ式である。

ｅ種（183～191）　基本的に枠状区画に幅広な角押文（爪形文）や、これを密に施文したキャタピラ文が付随するもの、沈線文が付随するものを本種としたが、前者では隆帯上に刻み目状に付されるものや、中間的なものも含めた。183～188・191は幅広な角押文（爪形文）やキャタピラ文が施されるものである。183は先端がやや叉状となった突起の付く波状縁である。184は口縁部に楕円形区画が形成されよう。185・186は口縁部に重三角形区画が形成されるが、186は幅広な角押文（爪形文）を、隆帯上や周縁に刻み目状に付している。187は区画内に鋸歯状の沈線文が複列施されている。188は楕円形区画が形成されるが、区画隆帯上に単列、隆帯に付随して複列のキャタピラ文が施される。191は波状口縁端部と円孔の伴う曲線的な隆帯上に、幅広な角押文（爪形文）が施される。189は地文に縦位のRLが施文され、三角区画を形成する隆帯上には刻み目状に角押文を施す。区画内には三叉文を伴う重三角文が、沈線と連続的な刺突で描



第36図　グリッド出土土器(9)

出される。胎土中に粗い砂粒が中量含まれる。190は地文に縄文の施される大形で突出した波状口縁で、端部の隆帯がそのまま環状の突起に接合する。胎土中に細かな雲母粒、石英・長石粒が中量含まれる。以上は阿玉台Ⅲ式あるいはⅣ式に比定されよう。

f種（192・193）　本類の浅鉢を一括した。192は口縁部内面の下端に彫刻的な深みのある沈線文が施される。193は口唇部上に刻み目状の角押文が施され、胴部と横位の隆帯で区画される。胴部は輪積みの修正痕で覆われよう。いずれも阿玉台Ⅰb式以前に比定できよう。

g種（194・195）　本類の底部を一括した。194は底面がヘラで入念に整形されている。胎土中に細かな雲母粒、粗い石英・長石粒を多量に含む。推定底径15.0cmを測る。195は胴部下端まで輪積みの修正痕で覆われると思われ、貼り付けられた垂下する隆起線下端が認められる。阿玉台Ⅰb式以前に比定できよう。

h種（196～200）　西関東・甲信系の土器で、阿玉台式に並行するものを本種とした。196・197は同一個体で、楕円形を基調とする多段に形成された隆帯による区画に、角押文が付随する。一部の区画内には、密接して角押文が充填されている。胎土中に細かな雲母粒を少量、粗い石英・長石粒を中量含む。清水台式に比定できよう。198・199は深く引かれた沈線によって方形を基調としたパネル文がつくられる。198は沈線に付随してキャタピラ文が、さらにその内側には波状沈線や印刻的な沈線が充填されるパネル文が形成される。199は区画内がキャタピラ文で埋め尽くされる。いずれも勝坂Ⅱ式に比定できよう。200は口縁部下半に無文帯を有し、縦位の0段多条のRLが施される胴部と、キャタピラ文が付される隆帯で区画される。口縁部には先述の区画と同一の隆帯で楕円形の区画文が形成されよう。勝坂Ⅲ式でも最終末に位置づけられよう。

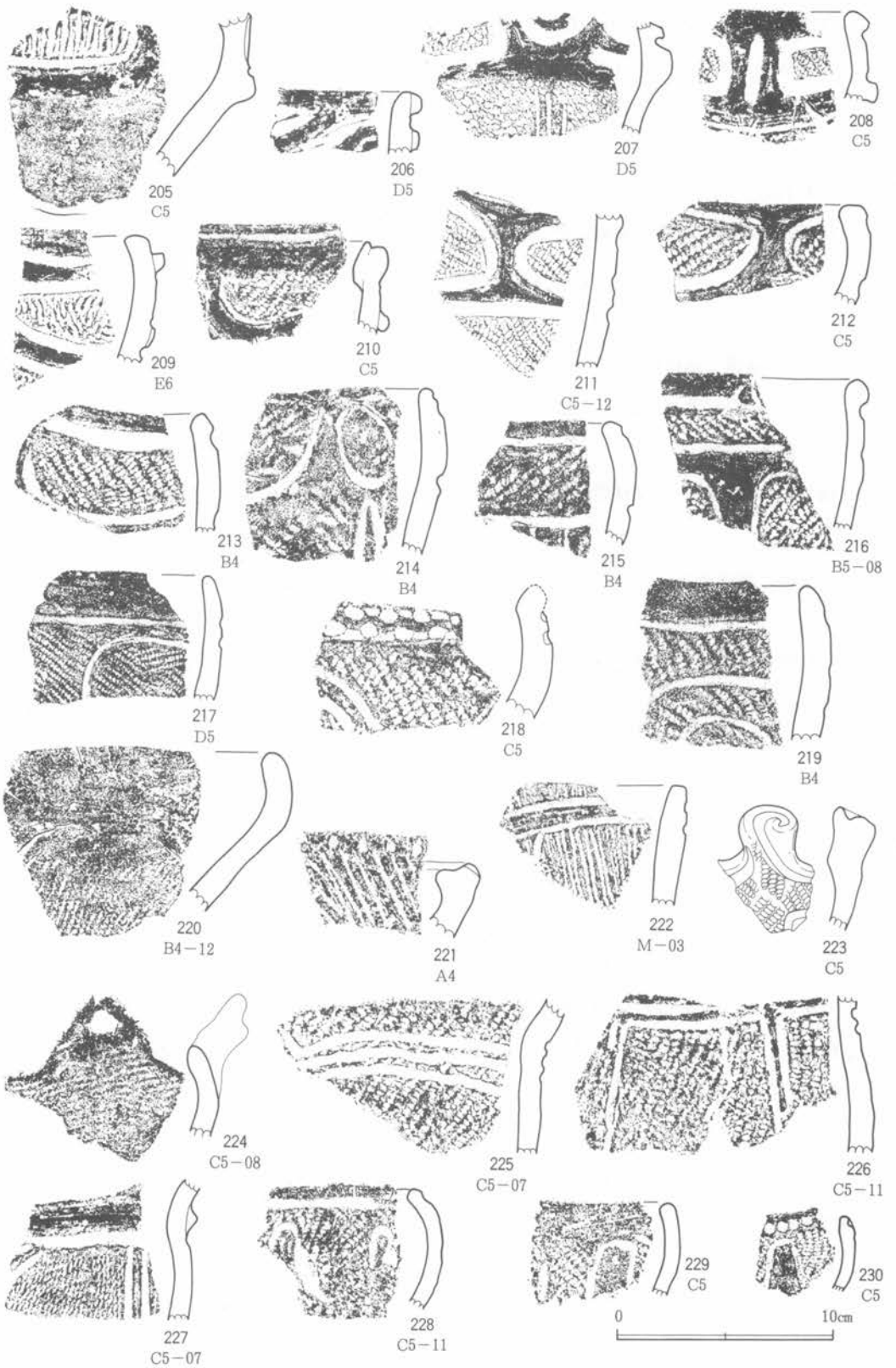
3類（第36図201～第39図258、第40図4・5、図版13～図版16・17）

中峠式、加曽利E式に比定できるものを本類とした。出土総数1,567点（23.2%）を数え、分布は遺跡西側に偏在する。B4、C4・5、D5区にかけて北西に延びる台地平坦部から斜面部のほぼ全体に認められるが、これは本類のうち大部分を占める加曽利E式後半期の集落の範囲に重なるものである。

a種（201・202）　口縁端部に無文帯を有し、直下に交互刺突文が巡るものを本種とした。201は狭小な無文帯というよりは、端部直下に交互刺突文が巡る。202は胎土中に細かな雲母粒、粗い石英・長石粒を多量含む。以上は中峠式に比定できよう。

b種（203・204）　口縁端部の隆帯間に沈線文を深く引き巡らし、波頂部に渦巻文をつくるもので、以下の口縁部下半には無文帯が形成されよう。加曽利EⅠ式に比定できよう。

c種（205～214、第40図4）　口縁部にⅠ文様帯として枠状区画を形成する、いわゆるキャリパー形土器を本種とするが、この区画は隆帯や沈線、それらが複合したものなどでつくられ



第37図　グリッド出土土器(10)

る。205は区画内に深く刻まれた縦位の沈線が充填される。207は区画接点に渦巻文がつくられ、直下の胴部に3本1単位の沈線が垂下する。208は区画接点となる隆帯上に、縦位の深みのある沈線が引かれる。第40図4はⅠ文様帯の区画内に、横位に蛇行する隆帯がナゾリで付加されるが、隆帯に付随して部分的に沈線が引かれる。推定口径28.5cmを測る。以上は加曽利ＥⅠ式の範疇と思われる。209・210は、おそらく渦巻文と組み合いⅠ文様帯を形成する区画文が認められる。以上は加曽利ＥⅡ式の範疇と思われる。211は上部の欠損部から判断すると、区画文が入り組んでつくられると考えられる。胴部との区画の曲率は小さく、直線的である。212～214は沈線単独で区画が形成される。212・214では渦巻文が変容したと思われる円形の区画文が描出されよう。214は横一次区画文が不明瞭で、曲率も小さい。また、懸垂文の上端は閉じている。以上のうち、214が加曽利ＥⅢ式に比定できる他は、決定要素に乏しく加曽利ＥⅡ式あるいはＥⅢ式としておきたい。

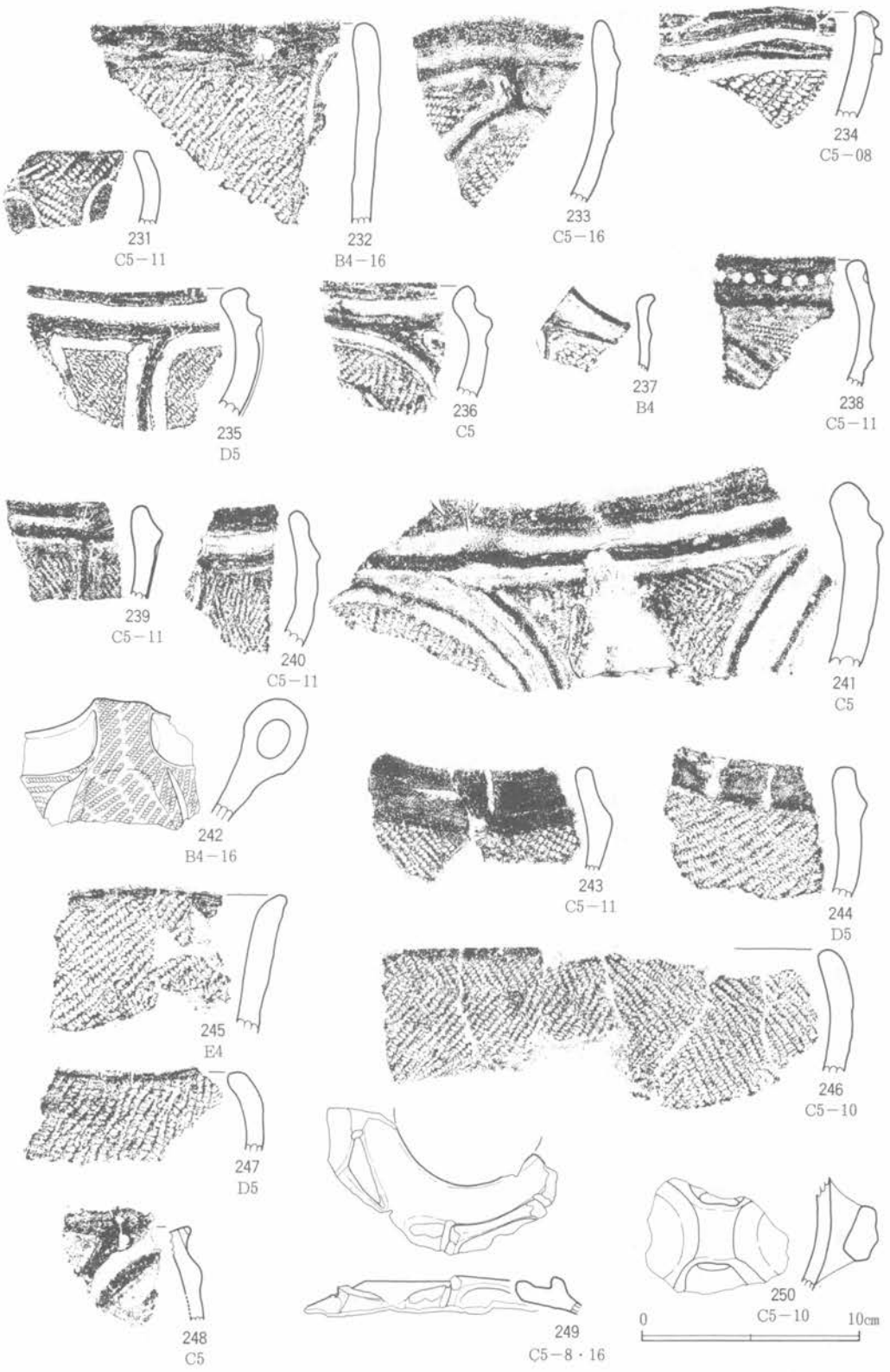
d種（215・216）　Ⅰ文様帯に、上部が連結することで弧状を呈す磨消懸垂文が認められるものを本種とした。図示した2点のⅠ文様帯は、内部を分割しない帯状の区画文となり、区画下端の沈線に磨消懸垂文が連結し弧状を呈する。文様帯の区画線の曲率はゆるやかである。216はｅ種にも分類されるように、懸垂文が連結して孤線文となると思われ、口縁端部も肥厚する。以上は加曽利ＥⅡ式でも新しい段階、つまりＥⅢ式への過渡期的なものとなる可能性は高い。

e種（217～219）　横位の沈線によって狭小なⅠ文様帯を作出し、以下の縄文地のⅡ文様帯に充填系的な孤線文を描出するものを本種とした。文様帯の区画線の曲率は小さいが、この部分で内傾気味である。217は口縁部に無文帯を有し、現存部から判断すれば1本の沈線で胴部に孤線文が描出される。218・219は2本対の沈線で孤線文が描出される。218は区画線として交互刺突文が巡らされようが、これは連孤文土器の影響によると思われ、残存部から判断すると孤線文は連繋する可能性がある。以上は加曽利ＥⅢ式に比定できよう。

f種（220）　その部分の曲率が大きい他は明確な区画文を有せず、Ⅰ文様帯が無文帯となるものである。特定はしづらいが、加曽利ＥⅡ式あるいはⅢ式の範疇であろうか。

g種（221･222）　西関東・甲信系、あるいはその影響を受けて成立した土器を本種とした。221は口唇部上に刻み目を付け、口縁部には単独の斜沈線を連続的に引いている。口縁端部内側には蓋受け状の突帯が巡らされよう。曽利式系（Ⅲ式あるいはⅣ式）の土器である。222は地文に撚糸文（絡条体回転文）が施され、残存部から判断すると口縁端部に2本対の沈線で連孤文が描出される連孤文土器である。また、連孤文から懸垂文が垂下すると思われる。以上は加曽利ＥⅡ式に併行すると考えられる。

h種（225～227）　本類前半期に比定できる胴部を一括した。225はⅠ・Ⅱ文様帯の区画に、やや波を打つ2本対の沈線が引かれ、この上端に接して口縁部には直線的な沈線で枠状区画がつくられよう。胎土中に細かな雲母粒、粗い石英・長石粒が多量に含まれる。中峠式に比定で



第38図　グリッド出土土器(11)

きようか。226はⅠ・Ⅱ文様帯の区画位置が括れ、胴部が張り出す。区画文としての沈線に接して間隔の狭い2本対の沈線が垂下し、胴部を縦位に分割しよう。加曽利ＥⅠ式に比定できよう。227はⅠ文様帯の枠状区画下端の可能性のある隆起線が認められるが、これは側面をなぞられた断面三角形のものである。以下には2本以上が組になった沈線が垂下し、地文には撚糸文（絡条体回転文）が施される。加曽利ＥⅠ式あるいはＥⅡ式に比定できると思われる。

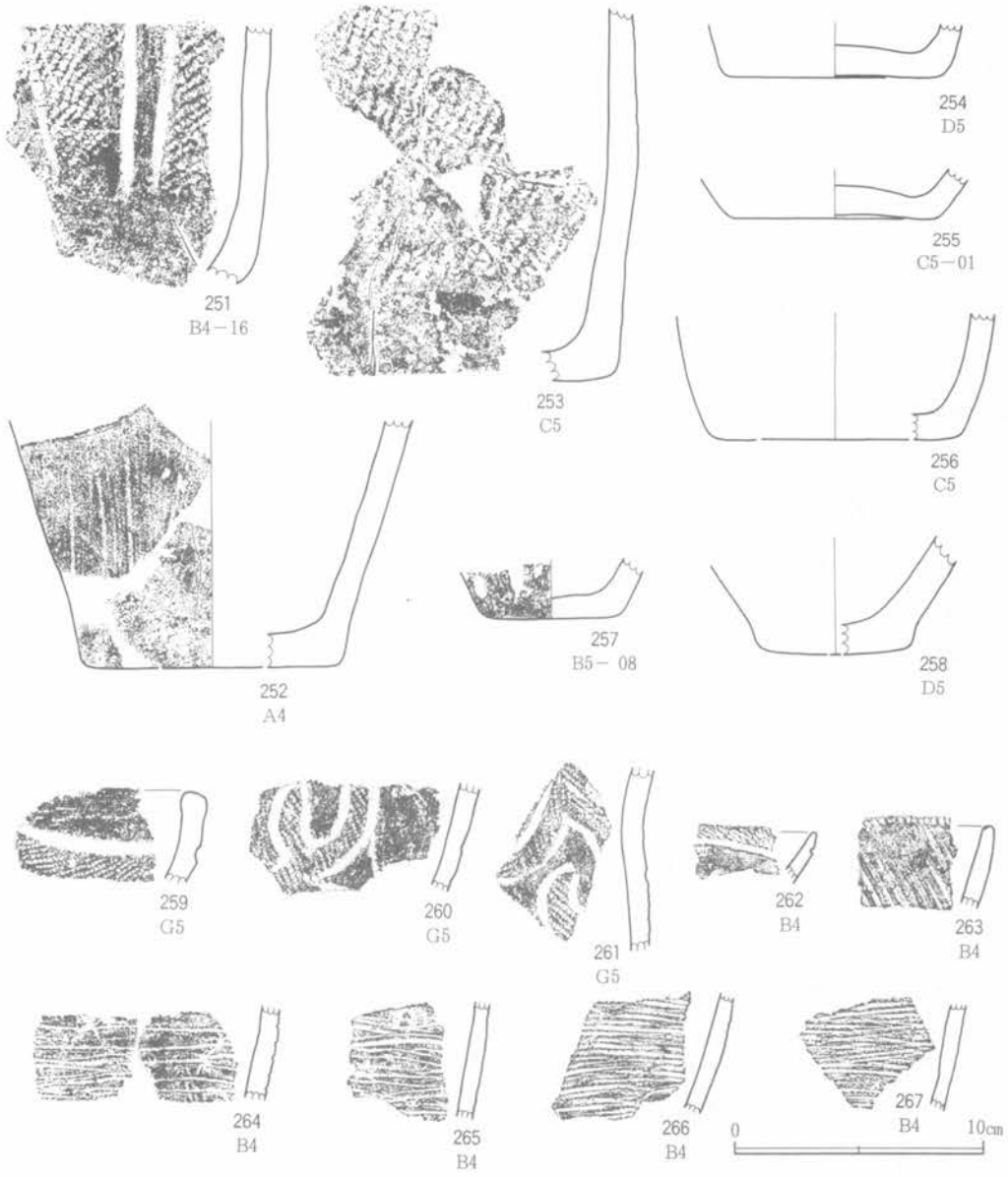
ｉ種（223･224）　本類後半期に比定できる突起・把手を本種とした。223は突起頂部を渦巻状に巡る沈線が無文帯を作出する沈線と一体化する。以下の残存部には、ｊ種に分類される横位連繋孤線文の上端が区画沈線に付着せずに描出されるようである。加曽利ＥⅢ式に比定できよう。224は波頂部に凹みを有し以下に縄文が施されるが、磨耗が著しいため他は不明である。

ｊ種（228～232）　沈線によって主要な文様（横位連繋孤線文）が描出されるものを本種とした。口縁部無文帯の作出は沈線によるものが多いが、区画線を設けないもある。228～230は横位連繋孤線文が無文帯に付着しないものである。230は狭小な無文帯に列点文が巡らされる。以上は加曽利ＥⅢ式に比定される。231は口縁端部に原体の幅で横位のＬＲが施文されるが、これに横位連繋孤線文が付着する。胴部は縦位のLRである。232は口縁部無文帯に横位連繋孤線文が貫入する。以上は加曽利ＥⅣ式である。

ｋ種（233～242）　隆起線によってパネル化した文様（渦巻文など）を描出し、器面に充填していくものを本種とした。233～237・239・240は1本隆起線で文様が描出されるものである。233はおそらく残存部以下に、主文様として渦巻文が描かれよう。以上は加曽利ＥⅢ式でも古い段階に比定できよう。238・241・242 は2本隆起線で文様が描出されるものである。238は無文帯に列点文が巡らされる。241は胴部の無文の帯状部が区画文に付着し、主文様と副文様とも単位文化する。242は隆起線上まで縄文の施文はおよび、無文の帯状部はよく研磨されている。238が加曽利ＥⅢ式かどうか微妙である以外は、ＥⅣ式と思われる。

ｌ種（243～247）　縄文・条線文など単一の文様要素で施文されるものを本種とした。243は無文帯が強い研磨でつくられた段によって作出され、縄文はこの段の側面まで及ぶ。244は無文帯を作出する隆起線まで縄文が施される。いずれも加曽利ＥⅣ式に比定できよう。245～247は口縁端部から縄文の施されるものである。245は口縁端部がやや分厚くつくられ、外反する。246・247は内湾する器形で、246は口縁端部が帯状に横位のＲＬ、以下は横位のままの部分と縦位の部分が認められる。器形や口縁端部の縄文帯から246・247は加曽利ＥⅢ式以降と考えられる。

ｍ種（248～250）　深鉢以外の器種を本種で一括した。248は口縁端部に焼成前の穿孔が巡ると思われる小型の壷形土器で、曲線的なモチーフが描出される。口縁端部は鍔状を呈し、有孔鍔付土器の1種と考えられる。249は強く内傾する器形で、口縁端部に広い凹面が巡る小型の有孔鍔付土器である。250は穿孔方向が縦位の把手で、壷形土器や有孔鍔付土器、注口付土器などの側面に付くと思われる。以上は加曽利ＥⅢ式以降に比定できよう。



第39図　グリッド出土土器(2)

n種（251～258、第40図５）　胴部下半から底部のものを一括した。251は磨消懸垂文が認められる。252は器面が磨耗しているため定かではないが、数条の沈線が垂下する。底面からやや垂直に立ち上がった後に、ゆるやかに開く器形となる。255はやや上げ底となる。257は懸垂文の区画となる沈線の下端となるものか、深みのある沈線が垂下する。258は突出した底部で、周縁に丸みをもつ。第40図５は底面を欠損するが、258と同様の突出した底部となろう。底径と現存最大径は推定でそれぞれ5.4cm、21.3cm、現高で16.0cmを測る。以上のうち251は加曽利ＥⅡ式、258と第40図５は加曽利ＥⅢ～ＥⅣ式にそれぞれ比定できるが、他は加曽利Ｅ式の細分型式を特定すること差し控えたい。

第Ⅳ群土器（第39図259～263、図版16）

本群は称名寺式に比定できるものがすべてであるため、類別は行わず以下に種別のみを記載した。いずれもＩ式でもやや古い段階に属そう。

a種（259）　沈線の上がり方から考えると、口縁部文様帯の描線が弧状を呈すると思われる。

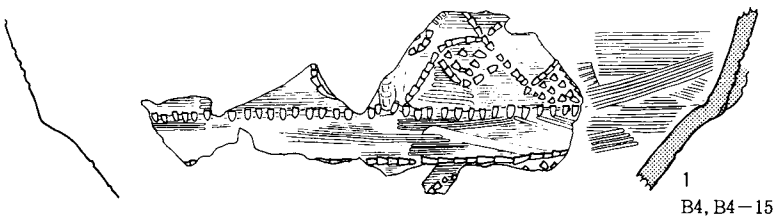
b種（260・261）　胴部でおそらく描線はＪ字文を連繋すると思われる。

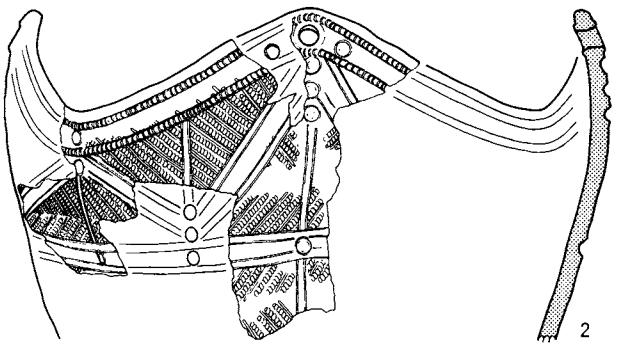
第Ｖ群土器（第39図262～267、第40図６、図版16・17）

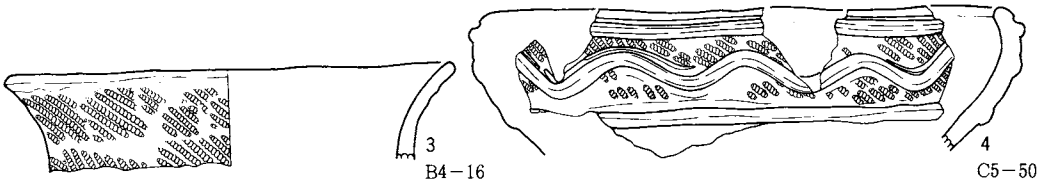
本群は晩期末葉～弥生時代中期前半に比定できるものがすべてであるため、類別は行わず以下に種別のみを記載した。

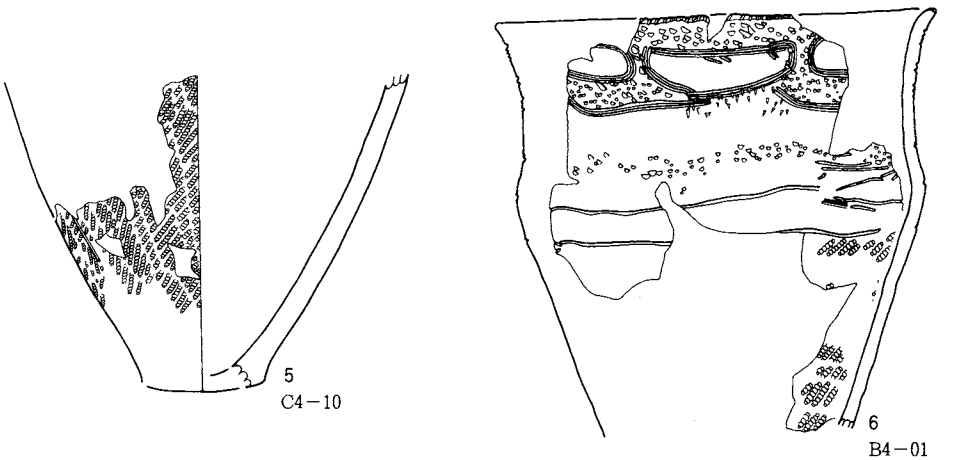
ａ種（第40図６）　半精製の土器を本種とする。頸部がやや内傾し口縁部が張り出す半精製の甕（あるいは深鉢）である。最大径は口縁部にあり、推定径23cm、器厚６～７㎜で、屈曲部分の残存は約1／3である。口頸部上半は半截竹管（幅３㎜）による枠状区画とそれらを連絡する弧状の沈線施文後、区画外が半截竹管の切り口の角で押したと思われる刺突で充填され、枠内がやや丁寧に磨かれる。下半にも刺突がみられるが、上半文様との間にはミガキが多少加えられ、無文となる。屈曲部には２条の雑な沈線が平行して巡らされ、胴部には横位のLRが僅かに認められる。口唇部には篦状工具による刻みが加えられる。本例は器形・文様帯構成において荒海式深鉢の系譜を引くが、装飾文様が上端に限定され、小型竹管による刺突と枠状区画による磨消刺突文手法で構成されるなど、新しい様相が認められる。小型竹管刺突の例は成田市殿台遺跡、佐倉市大崎台遺跡、銚子市余山貝塚の荒海式比定のなかに散見されるが、盛行するのはそれ以降で、三角状の刺突は須和田式に見いだせる。また磨消刺突文は磨消縄文手法に関連し、新しい様相とみることができよう。本例は半截竹管による文様描出と同一工具での刺突施文からなるが、上記の内容から弥生時代中期前半の位置づけが最も妥当と思われる。

b種（第39図263～267）　粗製土器を本種とする。263～267は条痕施文の粗製深鉢、または甕の破片である。263は口唇部に刻みを有し、斜位の条痕が施される。264・265は櫛歯状、266・267は細密な条痕が横位に施文される。262は鉢形土器の口縁部破片で、Ｒの縄文帯を有し、やや鋭利な沈線で区画される。口唇は尖鋭で、同一原体による文様が加えられる。









第40図　グリッド出土土器(13)

B．土器片錘（第41図、表３・５、図版18）

土器片錘は完形に近いもの37点、「半欠品」および「側縁欠」18点の計55点出土した。「半欠品」とは切り込みを一方しか残していないもの、「側縁欠」は側縁に大きな欠損があるものである。素材となった土器片は、中期初頭から加曽利Ｅ式の後半のものまであり、阿玉台式と加曽利Ｅ式の前半期のものが多い。出土地点別にみると加曽利Ｅ式期の住居跡から９点、土坑から2点で、残りの44点は縄文時代の包含層や表土から発見された。全体の半数以上がＣ５区から出土しているが、とくにまとまった発見例はなかった。

計測・計量、観察と分類の方法は、基本的に前回『高沢遺跡』での報告と同様である。東南部地区では、現在5000点以上の資料を得た有吉北貝塚の整理作業中であり、その報告で本格的な数量的な分析をした上で、周辺遺跡群のデータを比較検討したい。

形　態　「正位軸－切り込み軸角」、切り込みの付設位置、周囲の調整加工の状態の３点について観察し、分類を行った。それぞれの分類の基準は以下の通り。ただし、「正位軸－切り込み軸角」とは、素材となった元の土器の正位軸と土器片錘の切り込み軸のなす角度であり、実測図に２つの直線を書き入れて、その挟む角を計測した（第５表では「軸角」と省略した）。

① Ⅰ…軸角が90°に近いもの　　（80°＜Ⅰ≦90°）
　Ⅱ…軸角が90°に近いもの　　（ 0°≦Ⅰ＜10°）
　Ⅲ…それ以外　　（10°≦Ⅰ≦80°）

② Ａ…切り込み軸を長軸に付設したもの
　Ｂ…切り込み軸を短軸に付設したもの
　Ｃ…短軸：長軸比の小さいもの　　（短軸／長軸≧0.95）

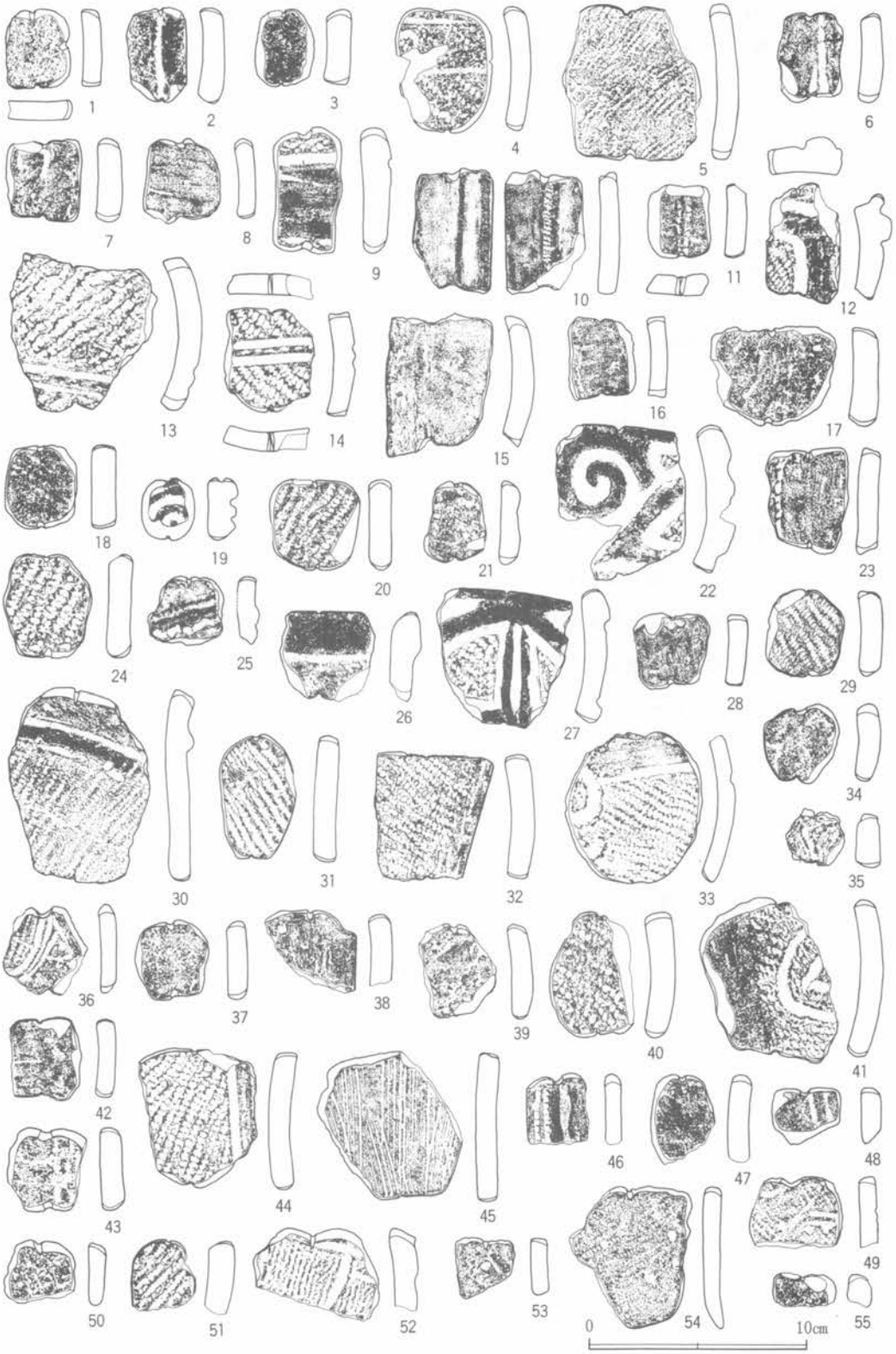
③ ａ…ほぼ全周に調整を加えているもの
　ｂ…一部に調整を加えているもの
　ｃ…調整の見られないもの

これによると、計測可能な45個のうちの79％が 0°と90°から前後10°のずれのなかに入ってしまい、正位軸と切り込み軸の相関はとても強いといえるだろう。なお、切り込みを３つもつものについては、対称な2辺に付設している方を切り込み軸とした。

計量・計測値　長軸の長さは最大8.9㎝、最小2.7㎝、平均4.8㎝である。短軸／長軸比は平均で0.839であった。重量は、最大75.3ｇ、最小7.8ｇ、平均27.2ｇ。なお、これらの値は半欠品・側縁欠とした資料を除外している。

時期的な傾向　時期の判明した資料を中期初頭、阿玉台式期、中峠～加曽利Ｅの３時期に分けて若干の比較を試みた。資料数が少なすぎるが、以下のような傾向がうかがえる。

①中期初頭の資料は4点のみで比較に耐えないが、短軸と長軸の差の小さいものが多い。また、切り込みがとても幅広いものが見られる。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
0
10cm

第41図　土器片錘

A．中期初頭（資料数２）

	長軸長	短軸長	短軸／長軸比	重　量
平　均	5.6	5.1	0.925	37.9
最　小	7.2	6.3	0.975	61.1
最　大	4.0	3.9	0.875	14.6

B．阿玉台式期（資料数14）

	長軸長	短軸長	短軸／長軸比	重　量
平　均	5.6	5.1	0.925	37.9
最　小	7.2	6.3	0.975	61.1
最　大	4.0	3.9	0.875	14.6

C．中峠～加曽利Ｅ式期（資料数18）

	長軸長	短軸長	短軸／長軸比	重　量
平　均	5.6	5.1	0.925	37.9
最　小	7.2	6.3	0.975	61.1
最　大	4.0	3.9	0.875	14.6

第３表　土器片錘の時期別統計値

②阿玉台式期のものは、中峠～加曽利Ｅ式期に比べて両軸とも１cmほど小さい。薄い素材を使ったものが多いために、重量ではさらに大きな差がある。

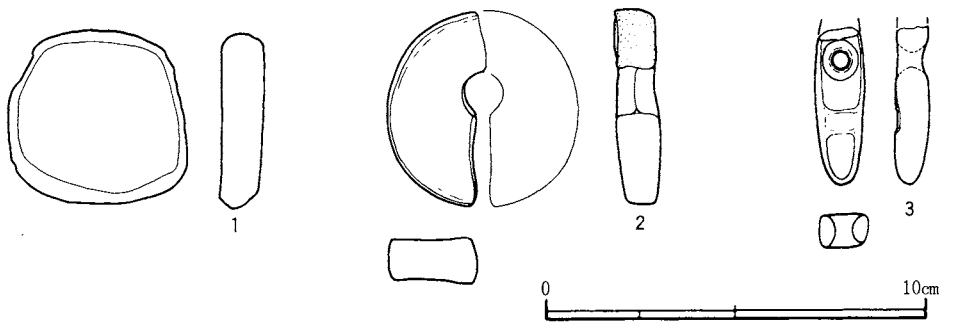
③中峠～加曽利Ｅ式期のものは切り込みの幅が狭く、細くきわめて平滑に仕上げられた溝が観察できるものがほとんどだが、阿玉台式期では幅広いものの方が主体を占めている。

Ｃ．土製品・石製品（第42図・表４・図版19）

１は中期の深鉢胴部の破片を再利用した土製円板である。土器片錘の未成品にも似るが、側面の研磨は凹凸なく入念に行われている点で、元々用途が異なる可能性もある。２は縄文前期後半の土製耳飾の破片。表裏面はミガキ、側面はナデ調整され、円孔部と切り込み部は表裏両側からのケズリ痕跡が観察できる。石製垂飾は、蛇紋岩製であり、中央からややずれた部位に穿孔されたものであろう。表面には幅４mmの低い部分が作り出されている。加曽利ＥⅢ式期の007号住居跡から出土した。

No.	位　置	器　　種	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重（g）	材　　質	備　　考
1	Ｃ－５	円板状土製品	44.8	46.9	11.1	31.1	土器再利用	
2	Ｃ－５	玦状耳飾	50.2	51.1	11.9	(16.6)	土器と同様	孔径10.2mm
3	００７	垂飾	(40.2)	12.7	8.7	(7.6)	蛇紋岩	孔径 4.5mm

第４表　土製品・石製品属性



第42図　土製品・石製品

No.	長軸cm	短軸cm	長短比	重　量	軸　角	分　類	切込形	時　期	保　存	備　考	位　置
1	3.7	3.0	0.811	14.1	89	ⅠAa	細	阿玉台		切り込み3つ	008
2	4.5	2.7	0.600	20.7	89	ⅠAa	細			口縁部	C5
3	3.7	2.7	0.730	13.9	87	ⅠAa	細	中峠～加E			D5
4	5.9	4.5	0.763	(31.2)	90	ⅠAa	細	中峠～加E	一部欠		002B
5	7.2	6.3	0.875	(61.1)	88	ⅠAb	太	中期初頭			C5
6	4.2	2.9	0.690	17.0	88	ⅠAb	太	阿玉台			C5
7	3.8	3.4	0.895	18.4	85	ⅠAb	太	阿玉台			C5
8	3.9	3.6	0.923	15.4	85	ⅠAb	太				C5－12
9	5.8	3.2	0.552	30.4	90	ⅠAb	太細	加EⅡ～Ⅲ			D5
10	5.8	3.7	0.638	(26.3)	90	ⅠAb	太	阿玉台			D6
11	3.5	3.0	0.857	11.9	88	ⅠAb	太	阿玉台		切り込み3つ	C5
12	5.6	3.4	0.607	(29.8)	86	ⅠAb	細	加EⅠ～Ⅱ			C6－04
13	7.2	6.8	0.944	60.2	87	ⅠAc	細	加EⅡ			P20
14	4.7	4.1	0.872	24.1	83	ⅠAc	細	加EⅠ～Ⅱ		口縁部	D5
15	6.5	5.0	0.769	41.8	90	ⅠAc	太	阿玉台～中峠			D6
16	3.9	3.1	0.795	12.5	89	ⅠAc	細	阿玉台			C5
17	5.7	4.5	0.789	39.3	84	ⅠBa	太	中峠～加E			D5
18	3.8	3.3	0.868	18.3	4	ⅡAa	－	中峠～加E		口縁部	B5－08
19	2.8	2.5	0.893	9.4	2	ⅡAa	細	加EⅠ～Ⅱ			002B
20	4.2	4.1	0.976	24.2	3	ⅡAa	細	中峠～加E			C4－16
21	3.7	3.0	0.811	(9.6)	8	ⅡAa	太	阿玉台	一部欠		B4
22	7.1	6.0	0.845	(61.6)	0	ⅡAb	細	加EⅠ～Ⅱ			D5
23	4.8	3.9	0.813	22.3	6	ⅡAc	太	阿玉台			F4－79
24	4.7	4.1	0.872	23.9	2	ⅡA?	－	中峠～加E		摩耗顕著	009
25	3.5	3.1	0.886	(10.2)	3	ⅡBb	細	阿玉台			C4
26	4.4	4.0	0.909	27.2	0	ⅡBc	細	阿玉台	一部欠	口縁部	C5－07
27	6.3	6.3	1.000	55.4	3	ⅡCb	細	加EⅠ～Ⅱ		口縁部	P28
28	3.5	3.5	1.000	13.0	6	ⅡCb	太	阿玉台			C5－11
29	4.0	3.7	0.925	18.3	72	ⅡAa	細	中峠～加E			A2
30	8.9	6.4	0.730	75.3	10	ⅡAb	細	中峠～加E	一部欠		B5
31	5.7	3.5	0.614	26.8	12	ⅡAc	細	中峠～加E			C5
32	5.8	5.5	0.948	43.0	72	ⅡAc	細	中峠～加E		口縁部	P20
33	6.8	6.2	0.912	49.0	80	ⅡAc	－	加EⅢ	一部欠	切り込み1欠損	004
34	3.6	3.5	0.972	15.0	77	ⅡCa	太細	阿玉台			C5
35	2.7	2.7	1.000	7.8	63	ⅡCa	細	阿玉台			D5－09
36	4.0	3.9	0.975	14.6	62	ⅡC?	太	五領ヶ台			B4
37	3.5	3.4	0.971	12.3	－	?Ca	太				C5
平均	4.8	4.0	0.839	27.2							
最大	8.9	6.8	1.000	75.3							
最小	2.7	2.5	0.552	7.8							

（欠損品）

No.	長軸cm	短軸cm	長短比	重　量	軸　角	分　類	切込形	時　期	保　存	備　考	位　置
38	－	－	－	(14.9)	－	???	細		半　欠	口縁部	013A
39	4.3	－	－	(16.4)	88	Ⅰ?a	太細	阿玉台	側縁欠		C5
40	5.7	－	－	(35.2)	88	Ⅰ?a	細	中峠～加E	側縁欠		C5
41	7.5	－	－	(54.9)	82	Ⅰ?b	細	中峠～加E	側縁欠		009
42	3.7	－	－	(14.9)	88	Ⅰ?c	細		側縁欠		D5
43	3.8	－	－	(16.8)	5	Ⅱca	太	阿玉台	側縁欠		C5
44	6.3	－	－	(44.2)	8	Ⅱ?c	太細	加EⅡ	側縁欠		C5
45	6.7	－	－	(53.5)	4	Ⅱ??	細	中峠～加E	側縁欠		C5－11
46	－	－	－	(9.9)	－	Ⅰ??	太	阿玉台	半　欠		C5
47	－	2.9	－	(13.0)	0	ⅡA?	太細		半　欠		005
48	－	2.5	－	(8.7)	－	Ⅱ??	太		半　欠	摩耗顕著	C5
49	4.3	－	－	(15.9)	33	Ⅱ?a	太	五領ヶ台	半　欠		B4
50	3.3	3.0	－	(8.7)	－	ⅡBb	太	阿玉台	半　欠		C5－03
51	－	2.9	－	(12.3)	－	?a?	細	中峠～加E	半　欠		B5－08
52	－	－	－	(29.6)	－	???	細	加EⅡ?	半　欠		D5
53	－	2.8	－	(7.7)	－	???	太	阿玉台	半　欠		C5
54	6.5	－	－	(30.9)	－	???	細	中期初頭	半　欠		C5
55	2.9	－	－	(5.4)	－	???	－		半　欠		008

第5表　土器片錘属性

D．石器（第48～59図、第６～11表、図版19～23）

石器組成は、石鏃19、削器１、U･R-fl６、楔形石器７、石核５、剝片39、磨製石斧９、打製石斧10、磨石・敲石類32、石皿３、軽石製品６である。

第48図15は、石鏃としたが、尖頭器様石器（東北歴史資料館（1984）『里浜貝塚Ⅲ』）と仮称される石器かもしれない。第48図16～19は石鏃の未成品か。ただし、19は削器ないしU･R-flの可能性もある。

第51図２・第53図９の破損面には磨り減った痕跡がみられる。第53図８は擦切石斧か。第55図16は一応、打製石斧としたが、別器種かもしれない。両端に末端がステップないしヒンジ気味の剝離痕を残す。また、両側縁上部から中部にかけて剝離痕と打製石斧の側縁に観察されるような磨耗痕がみられた。切り合い関係は、剝離痕の後に磨耗痕が観察される。また、図上、破線のスクリーントーンで示した部位には、幅１㎜程度の平行した多数の線条痕（キズ）がみられる。当初は、調査時についたものかと考えていたが、同じ石器の他の調査時についたと思われるキズと比較すると明らかに光沢が異なることから、区別した。図版107に写真を載せた。

磨石・敲石類および石皿の実測図において、実線はタタキ、破線はスリを表している。概して、磨石・敲石類は、破損後も使用している。また、タタキ・スリのみという石器はなく、すべて両者の機能が複合している。第57図20は石皿の破損品の転用か。第57図22については田村隆氏よりスタンプ形石器ではないかという指摘を受けている。第57図26の磨石・敲石類の図上右の折断面は、きわめて平坦で一見擦ったようにもみえるが、縁辺部はつぶれていない。あるいは、折断後は使用されていないのかもしれない。

軽石製品は、ヒスイ製等の例が知られる「玉斧」に似たものが４点出土している（第59図１～４）。網の錘でなく、垂飾品の可能性もあるが、分類名は従来通り「浮子」としておいた。調査された住居跡の数からすればまとまった数であり、注目される。石材については追求できなかった。同様のものを使っている有吉北貝塚が整理中であり、その報告で触れたい。

なお、石材の鑑定については、（財）山武郡市文化財センターの田村隆氏に依頼した。ご協力に深く感謝します。

最後に、石鏃については、別な属性表を作成したので、簡単に補足説明を行っておこう。

計測および類型の決定は、千葉事務所（旧東南部事務所）の調査補助員３名が、トレース図（外郭線 0.3㎜）のコピーをもとに行った。調整角１～３については実物を計測した。数値によらない最大厚の位置２、側面観・側面形状、遺存部については２名あるいは３名の合議ないし多数決によって決定した。また、この他の数値は、２名あるいは３名の計測値の平均値を代表値とし、第６表に示した。さらに、３名の個々の計測値およびその平均値と不偏標準偏差も、第６表に掲載した。

石鏃の属性表について

1．Ｎｏ　通し番号。

2．遺構種類　遺構の種類。

3．遺構番号　遺構の番号。

4．遺物番号　遺物の注記番号。

5．器種　　石器の種類。

6．長さ（mm）Ｌ（第43図）　0.1mm単位で計測。元々の折断は（　）、発掘時欠損は［　］。計測には㈱田島製作所のカーボンファイバーノギスDIAL-15を使用。以下、幅・厚さの計測についても同じ器具を使用。

7．幅（mm）Ｗ（第43図）　0.1mm単位で計測。元々の折断は（　）、発掘時欠損は［　］。

8．厚さ（mm）Ｔ（第43図）0.1mm単位で計測。元々の折断は（　）、発掘時欠損は［　］。

9．重量（g）　0.1ｇ単位で計測。元々の折断は（　）、発掘時欠損は［　］。計測には研精工業㈱の電磁式はかりFY-3000を使用。

10．先端角１（第43図）　Ｌ／２の各側縁の点と先端を結んだ角度。１度単位で計測。

11．先端角２（第43図）　先端から５mmの各側縁の点と先端を結んだ角度。１度単位で計測。

12．先端角３（第43図）　先端から10mmの各側縁の点と先端を結んだ角度。１度単位で計測。

13．先端角４（第43図）　各側縁の最大幅と先端を結んだ角度。１度単位で計測。

14．先端角５（第43図）　側縁末端と先端を結んだ角度。１度単位で計測。

15．調整角１（第43図）　Ｌ／２の両側縁における剝離痕の角度の平均値。（$\alpha_1+\alpha_2$）／２。欠損品は先端から10mmの両側縁における角度。１度単位で計測。計測にはシンワ測定㈱のプロトラクターNo.19を使用。以下、調整角２・３の計測についても同じ器具を使用。

16．調整角２（第43図）　先端から５mmの両側縁における剝離痕の角度の平均値。１度単位で計測。（$\beta_1+\beta_2$）／２。

17．調整角３（第43図）　先端から15mmの両側縁における剝離痕の角度の平均値。１度単位で計測。（$\gamma_1+\gamma_2$）／２。

18．仕上げ痕１（第44図）　両側縁における仕上げ痕の比率。

19．仕上げ痕２　両面における仕上げ痕の比率。Ａ型：片面に、その裏面の２倍を超える仕上げ痕のあるもの。Ｘ型：片面の仕上げ痕が、その裏面の２倍以下のもの。仕上げ痕１・２については、阿部祥人氏（『東京都埋蔵文化財センター研究論集Ⅰ』東京、1982）の分類に準じている。

20．先端形状１（第45図）　Ｌ／２の各側縁の点と先端を結んだ線を各側縁に接するように平行移動して得られた先端の間隔。0.1mm単位で計測。計測には㈱田島製作所のカーボンファイバーノギスDIAL-15を使用。以下、先端形状２～５の計測についても同じ器具を使用。

21. 先端形状２（第45図）　先端から５㎜の各側縁の点と先端を結んだ線を各側縁に接するように平行移動して得られた先端の間隔。0.1㎜単位で計測。

22. 先端形状３（第45図）　先端から10㎜の各側縁の点と先端を結んだ線を各側縁に接するように平行移動して得られた先端の間隔。0.1㎜単位で計測。

23. 先端形状４（第45図）　各側縁の最大幅と先端を結んだ線を各側縁に接するように平行移動して得られた先端の間隔。0.1㎜単位で計測。

24. 先端形状５（第45図）　側縁末端と先端を結んだ線を各側縁に接するように平行移動して得られた先端の間隔。0.1㎜単位で計測。

25. 側縁形状１（第45図）　Ｌ／２の各側縁の点と先端を結んだ線と、各側縁に接するように平行移動して得られた線との最大間隔の平均値。（ａ＋ｂ）／２。0.1㎜単位で計測。計測には㈱田島製作所のカーボンファイバーノギスDIAL-15を使用。以下、側縁形状２～５の計測についても同じ器具を使用。

26. 側縁形状２（第45図）　先端から５㎜の各側縁の点と先端を結んだ線と、各側縁に接するように平行移動して得られた線との最大間隔の平均値。（ａ＋ｂ）／２。0.1㎜単位で計測。

27. 側縁形状３（第45図）　先端から10㎜の各側縁の点と先端を結んだ線と、各側縁に接するように平行移動して得られた線との最大間隔の平均値。（ａ＋ｂ）／２。0.1㎜単位で計測。

28. 側縁形状４（第45図）　各側縁の最大幅と先端を結んだ線と、各側縁に接するように平行移動して得られた線との最大間隔の平均値。（ａ＋ｂ）／２。0.1㎜単位で計測。

29. 側縁形状５（第45図）　側縁末端と先端を結んだ線と、各側縁に接するように平行移動して得られた線との最大間隔の平均値。（ａ＋ｂ）／２。0.1㎜単位で計測。

30. 基部形状（第45図）　抉りの深さ（長さ）。（e_1＋e_2）／２。基部（茎）の長さ。－は凹基、＋は凸基、０は平基。ただし、鎌取遺跡では０およびーのみであった。0.1㎜単位で計測。計測には㈱田島製作所のカーボンファイバーノギスDIAL-15を使用。

31. 形態示数（第45図）　最大幅の末端からの位置（長さ）およびその全長との関係（比率）。（a_1＋a_2）／２Ｌ。

32. 最大厚の位置１（第45図）　最大厚の末端からの位置（長さ）。0.1㎜単位で計測。計測には㈱田島製作所のカーボンファイバーノギスDIAL-15を使用。

33. 最大厚の位置２（第45図）　最大厚の末端からの位置。

34. 最大幅と最大厚の関係（第45図）　全長に対する最大幅と最大厚の関係。（a_1＋a_2）／２ｌ。

35. 先細り示数（第45図）　Ｌ／２の幅と最大幅の関係（比率）。ｎ／ｍ。

36. 対称性（第45図）　先端から末端側におろした垂線とそこから各側縁までの長さの比率。$\left|(a-b)/(a+b)\right|$。

37. 傾斜角（第45図）　両側縁の末端を結んだ線の垂直二等分線と、両側縁の末端を結んだ線の二等分点と先端を結んだ線との角度。
38. 最大幅と抉り度の関係（第45図）　各側縁の最大幅の末端からの位置（長さ）と抉りの深さ（長さ）の関係（比率）。（a_1+a_2）／（e_1+e_2）
39. 側面観・側面形状（第45図）　側面の形状、側面観における側縁の形状。
40. 側面観における先端角１（第45図）　側面観におけるＬ／２の各面の点と先端を結んだ角度。１度単位で計測。
41. 側面観における先端角２（第45図）　側面観における先端から５㎜の各面の点と先端を結んだ角度。１度単位で計測。
42. 側面観における先端角３（第45図）　側面観における先端から10㎜の各面の点と先端を結んだ角度。１度単位で計測。
43. 側面観における先端角４（第45図）　側面観における最大厚の点と先端を結んだ角度。１度単位で計測。
44. 遺存部（第46図）　遺存部の類型。
45. 石材　石材。
46. 挿図番号　報告書の挿図番号
47. 備考

計測の注意点

１．長さ・幅・厚さ・重量の計測で、元々の破損しているものは（　）、発掘時欠損は［　］をつける。実測では、元々の破損は実線、発掘時欠損は破線で表現する。

eg. 元々破損しており、なおかつ発掘時に欠損したものは［(　)］と表記する。

２．先端角１～５・先端形状１～５・側縁形状１～５の計測で、若干の欠け（１～２㎜大きくても３㎜ぐらい）により推定した場合は（　）［　］をつけて完形の資料による数値と区別する。完全に推定せざるを得ないほど欠損している場合は計測せず、－とした。

３．先端形状１～５・側縁形状１～５の計測では、先端と各計測点との間において各側縁に接するように平行移動する。

４．調整角１～３・側縁形状１～５の計測で片側縁のみの場合は、その片側縁を計測して（　）［　］をつけて表示する。

５．先端角４・先端形状４・側縁形状４の計測で、側縁が弧を呈するため最大幅の接する部分が接点とならない場合はその中点とする。

６．先端角５・先端形状５・側縁形状５の計測で、側縁末端とは機械的に末端（脚部）の接する点とする。

eg1.脚部が円弧あるいは平坦な場合はその中点とする。

eg2.平基・円基・凸基・棒状凸基あるいは凹基のなかで特別な形状により、側縁末端が判別しにくく上記の計測数値（方法）とは著しく異なる場合は実測図上でその計測点を明記し、＊等何らかの方法で上記の方法で得られた数値とは区別する。なおかつ破損・欠損を区別する。

eg. 元々破損しており、なおかつ発掘時に欠損したものの場合は［(　)］＊と表記する。

7．基部形状の計測で、えぐりの深さは各側縁の末端からの長さの平均（e_1+e_2）／2とする。若干の欠け、片側縁のみの場合は 破損・欠損に従って（　）あるいは　［　］と表記する。完全に推定せざるを得ないほど欠損している場合は無理して計測せず、－とする。

eg. 片側縁のみあるいは片側縁のみでかつ元々の破損で発掘時の欠損の見られる資料は［(　)］と表記する。

8．形態示数の計測で、最大幅の末端からの長さは各側縁の末端からの長さの平均（a_1+a_2）／2とする。若干の欠けや両側縁の遺存部が1／2以上ある推定可能な資料の場合は破損・欠損に従って（　）あるいは［　］と表記する。完全に推定せざるを得ないほど欠損している場合は無理して計測せず、－とする。

eg. 両側縁の遺存部が2／3以上あり全長の推定が可能な資料あるいは両側縁の遺存部が2／3以上あり全長が推定可能でしかも脚部が若干破損していて発掘時の欠損も見られる資料は［(　)］と表記する。

9．最大厚の位置1の計測で、最大厚は側面観で最も厚いところの数値とする。若干の欠けや両側縁の遺存部が2／3以上ある推定可能な資料の場合は破損・欠損に従って（　）あるいは［　］と表記する。完全に推定せざるを得ないほど欠損している場合は無理して計測せず、－とする。

eg. 両側縁の遺存部が2／3以上あり全長の推定が可能な資料あるいは両側縁の遺存部が2／3以上あり全長が推定可能で発掘時の欠損も見られる資料は［(　)］と表記する。

10. 最大厚の位置2は、7最大厚の位置1での計測は不可能だが、推定は可能な資料の場合に記入する。ただし、計測可能な資料についても記入している。

eg. 上部ないし下端部が1／3ないし1／2以下の欠損品の場合など。

11. 側面観における先端角1～5の計測で、若干の欠け（1～2㎜大きくても3㎜ぐらい）により推定した場合は破損・欠損の別により（　）［　］をつけて完形の資料による数値と区別する。完全に推定せざるを得ないほど欠損している場合は無理して計測せず、－とする。

数量化ないし数量分析における資料の優先度

@計測点が明確な場合

完形値	1	完形資料	無印
推定値	2	元々、破損している資料	( )
	3	発掘時に欠損した資料	[ ]
	4	元々、破損しておりなおかつ発掘時に欠損した資料	[( )]
未計測値	5	計測不可能な資料	−

@計測点が不明確な場合（特に側縁末端の位置）

完形値	1	完形資料	無印＊
推定値	2	元々、破損している資料	( ) ＊
	3	発掘時に欠損した資料	[ ] ＊
	4	元々、破損しておりなおかつ発掘時に欠損した資料	[( )] ＊
未計測値	5	計測不可能な資料	−

ただし、完形資料以外でも、その計測値に影響しないと思われる場合は、無印でよい。

eg. 先端部から９㎜のみ遺存する資料の先端角２、調整角２、先端形状２、側縁形状２、側面観における先端角２は無印となる。

測定誤差の契機（第47図）

（１）同一計測者内の測定誤差

ａ．計測基準（測点）が一定ではない場合。

ｂ．計測者が熟練していない場合。測定器具のあて方など測定方法の問題。

ｃ．測定器具が正常ではない場合。

ｄ．ａ～ｃの条件をクリアーしたにもかかわらず、誤差が生じる場合は、資料自体に内在する問題か。たとえば、資料計測の単位が細かすぎるのではないか、あるいは、物理的に計測が不可能な場合。

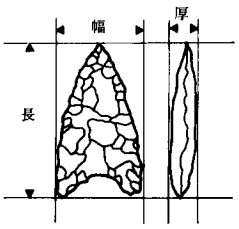
同一計測者内に測定誤差の生じる組合せ

｛ａ｝｛ｂ｝｛ｃ｝｛ａｂ｝｛ａｃ｝｛ｂｃ｝｛ａｂｃ｝｛ｄ｝

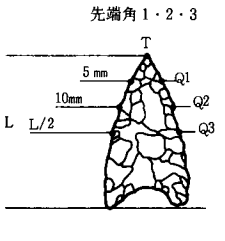
（２）異計測者間の測定誤差

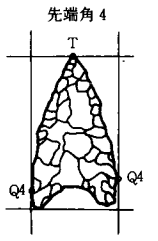
１．（１）ａ～ｃまでの条件をクリアーし、同一計測者内には測定誤差はない場合は資料自体に内在する問題。

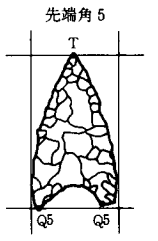
２．（１）ａ～ｄに当てはまらない場合。



長・幅・厚の計測

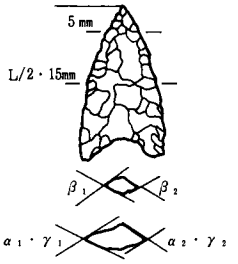






先端角1～5の計測点

先端角は石鏃の先端（T）と両側縁のQ1～Q5を結んだ角度

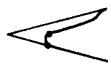


調整角1 $(\alpha_1+\alpha_2)/2$
2 $(\beta_1+\beta_2)/2$
3 $(\gamma_1+\gamma_2)/2$
計測器具を使用

調整角1・2・3の計測

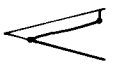
1（Crescent Break）

2（Shallow-Feathered）

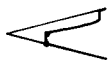


5（Break Shallow-Feathered）

8（Steep-Feathered）

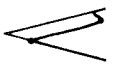


3（Shallow-Step）



6（Break Shallow-Step）

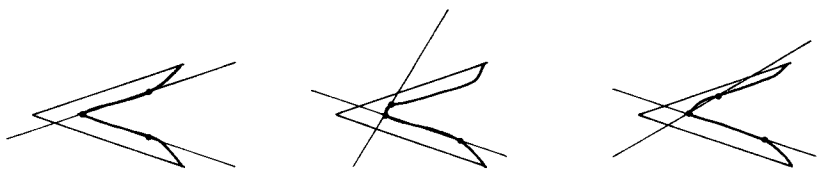
9（Steep-Step）



4（Shallow-Hinge）

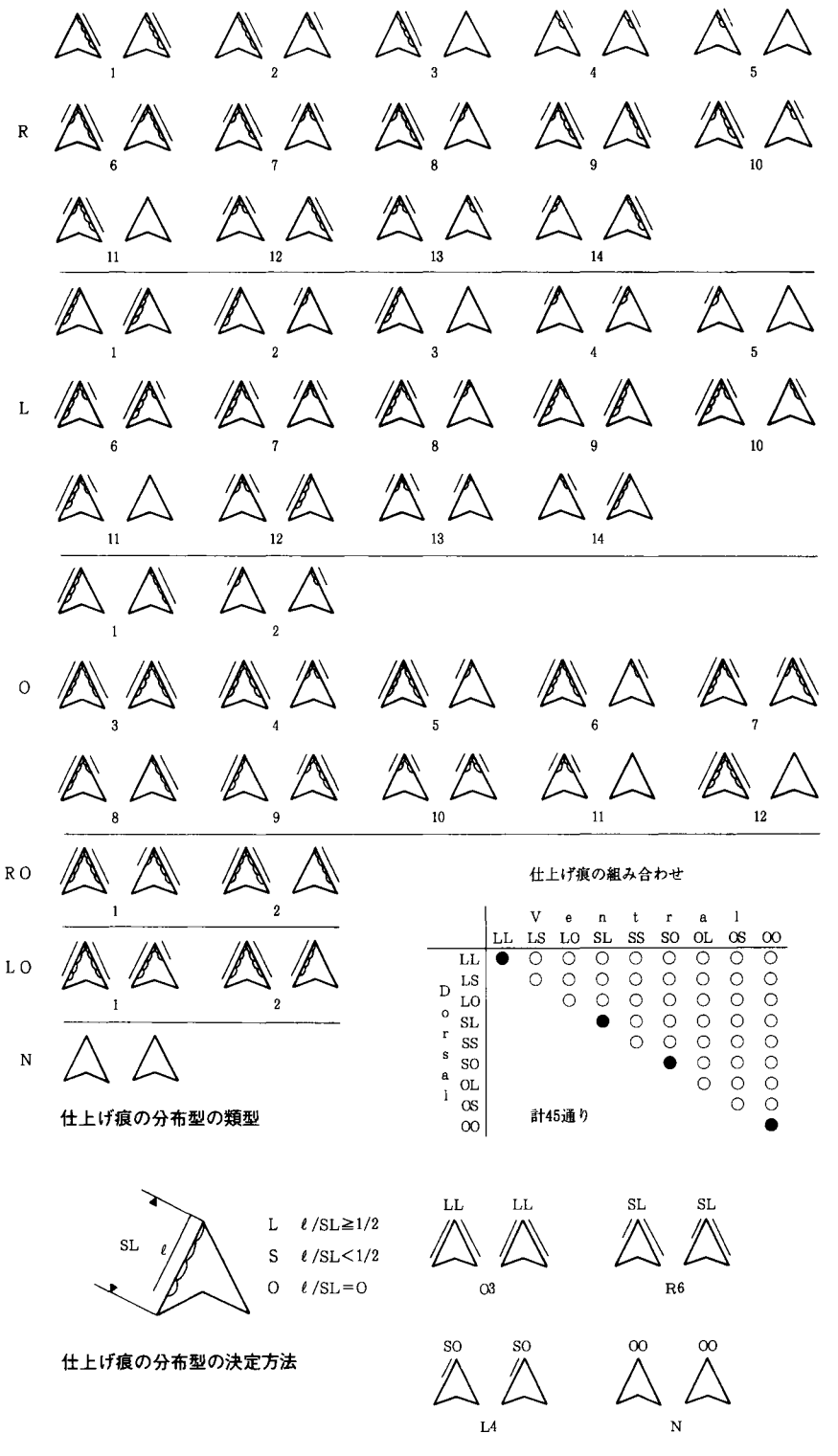
7（Break Shallow-Hinge）

3（Steep-Hinge）



調整（剝離）の種類と調整角の計測点

第43図　石鏃の諸属性と計測点(1)



仕上げ痕の分布型の類型

仕上げ痕の組み合わせ

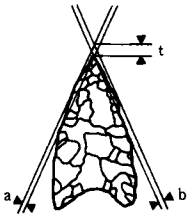
Dorsal \ Ventral	LL	LS	LO	SL	SS	SO	OL	OS	OO
LL	●	○	○	○	○	○	○	○	○
LS		○	○	○	○	○	○	○	○
LO			○	○	○	○	○	○	○
SL				●	○	○	○	○	○
SS					○	○	○	○	○
SO						●	○	○	○
OL							○	○	○
OS								○	○
OO									●

計45通り

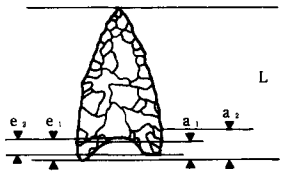
L　ℓ/SL≧1/2
S　ℓ/SL<1/2
O　ℓ/SL=O

仕上げ痕の分布型の決定方法

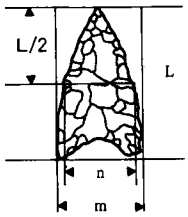
第44図　石鏃の諸属性と計測点(2)



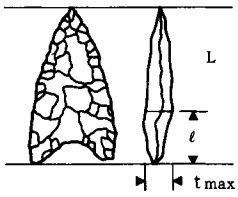
先端形状　t
側縁形状　(a＋b)/2



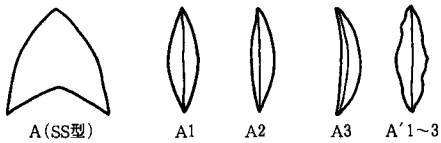
基部形状　(e₁＋e₂)/2
形態示数　(a₁＋a₂)/2L
最大幅と基部形状の関係　(a₁＋a₂)/(e₁＋e₂)
最大幅と最大厚の関係　(a₁＋a₂)/2ℓ

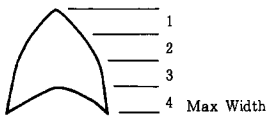


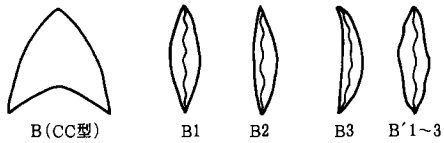
先細り示数　n/m

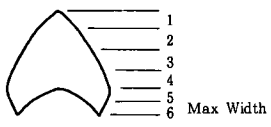


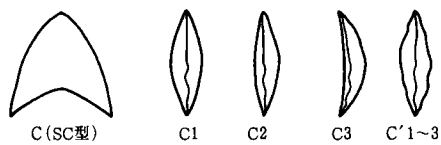
最大厚の位置1　ℓ/L

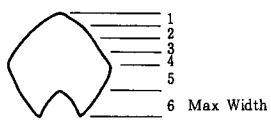




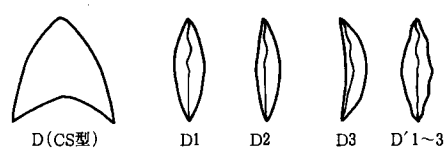


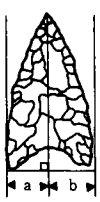




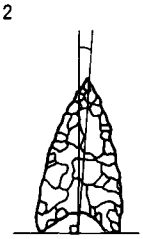


最大厚の位置2



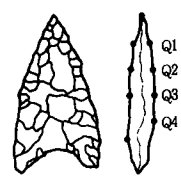


対称性



傾斜角

対称性　$\frac{a-b}{a+b}$

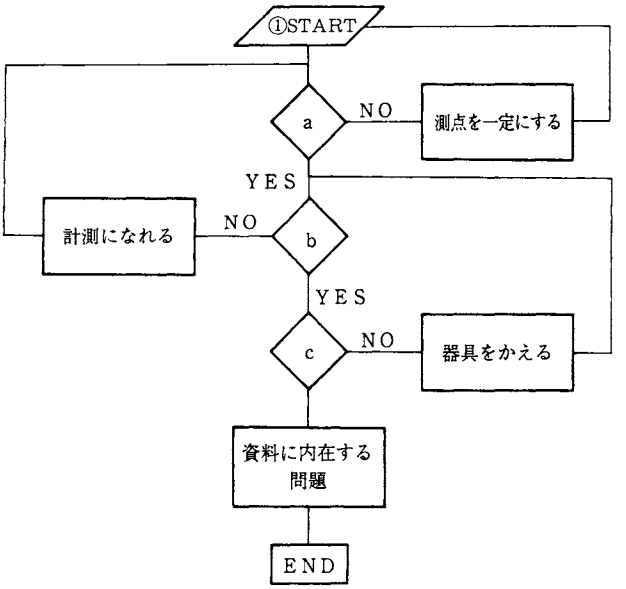


側面観における先端角1～4

第45図　石鏃の諸属性と計測点(3)

第46図　石鏃の諸属性と計測点(4)

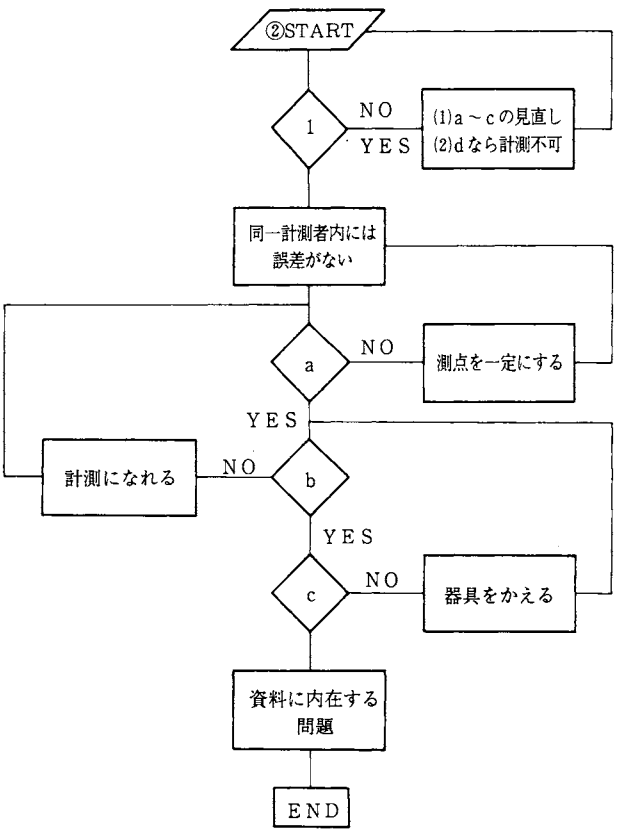
同 一 計 測 者 内 の 測 定 誤 差



①同じ計測者にどうして
測定誤差が生じるのか

a．計測基準（測点）は一定か
b．計測者は熟練しているか
c．測定器具は正常か

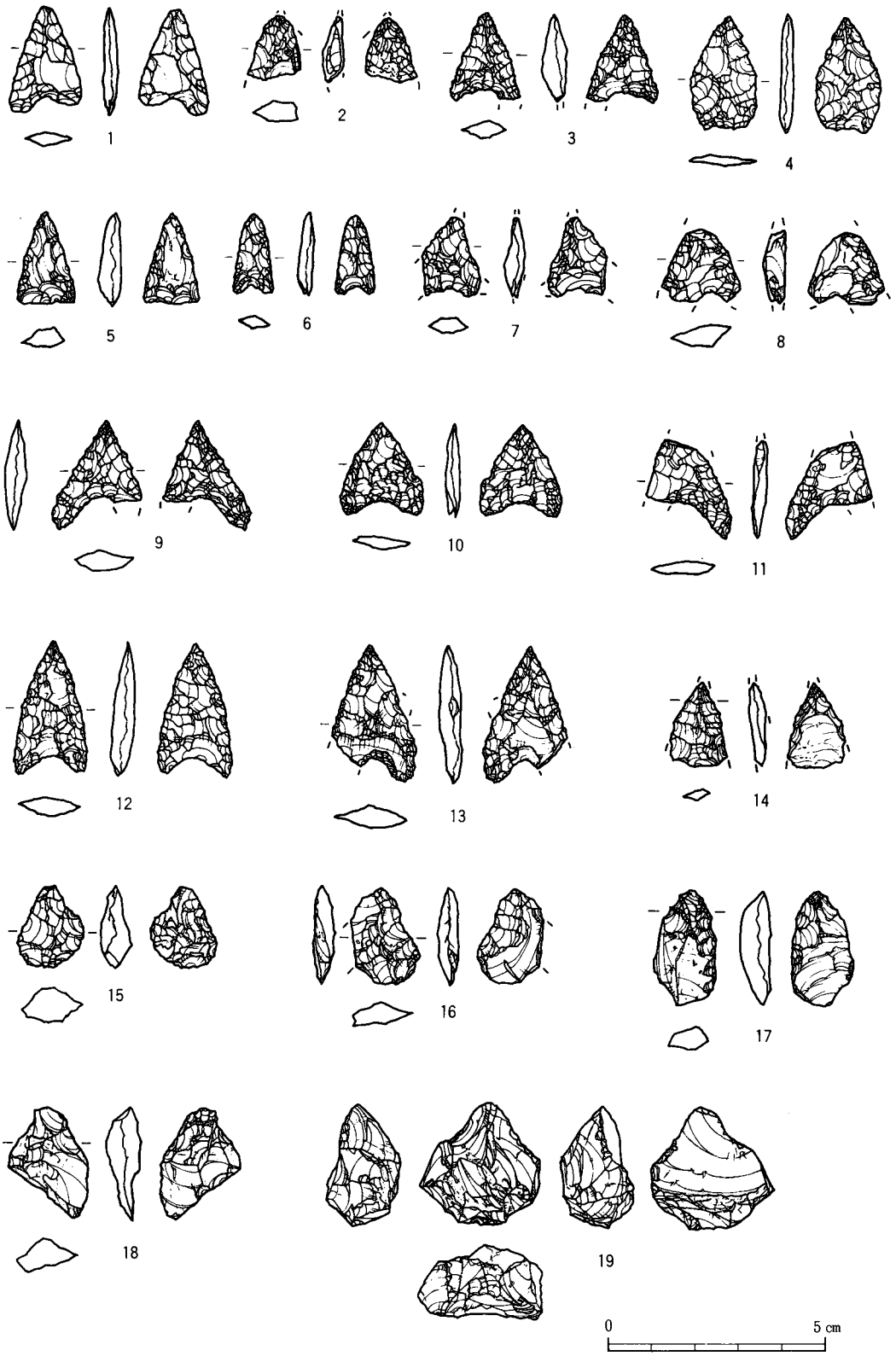
異 計 測 者 間 の 測 定 誤 差



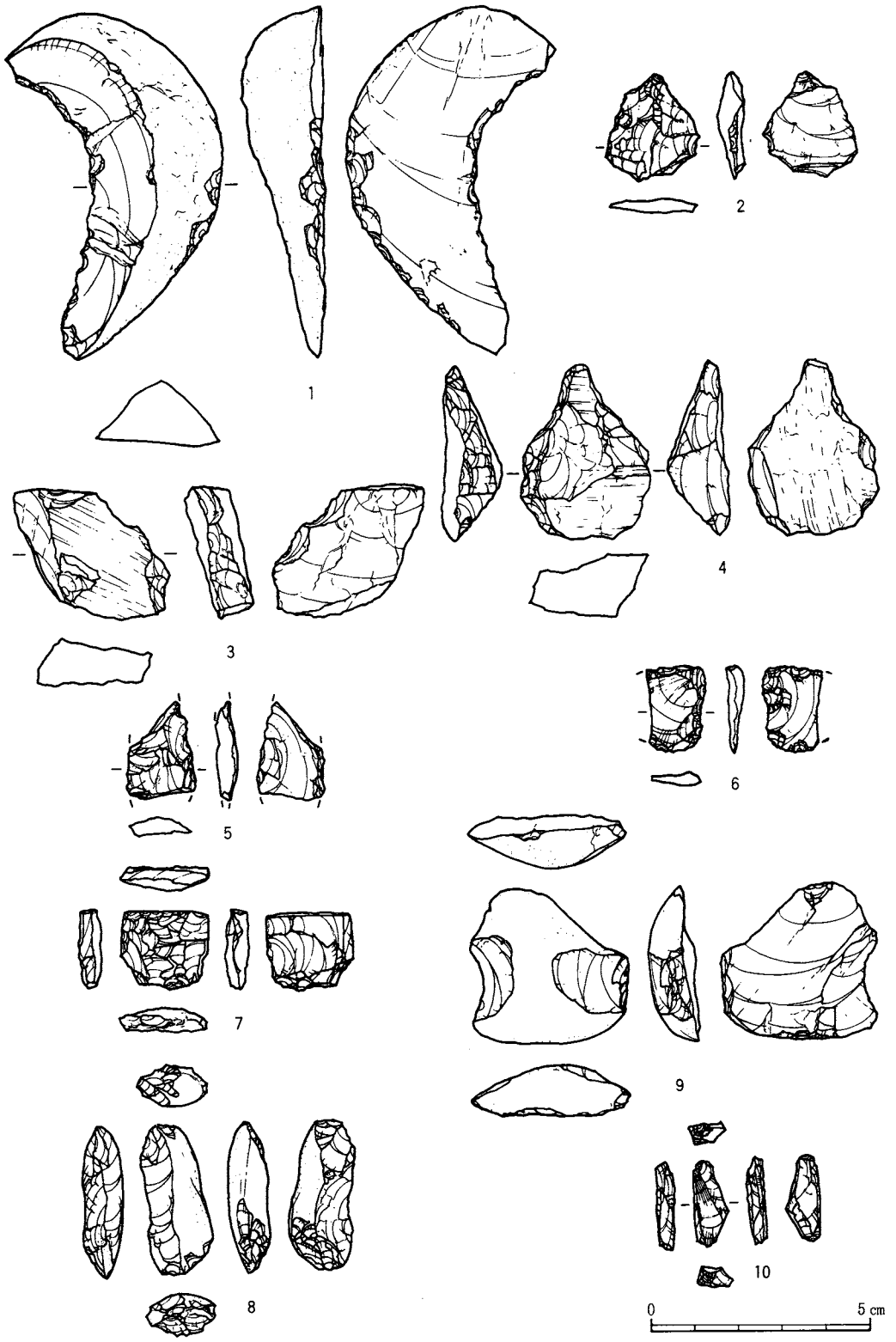
②異なる計測者にどうして
測定誤差が生じるのか

1．同一測定者内には測定誤差はないか
a．計測基準（測点）は一定か
b．計測者は熟練しているか
c．測定器具は正常か

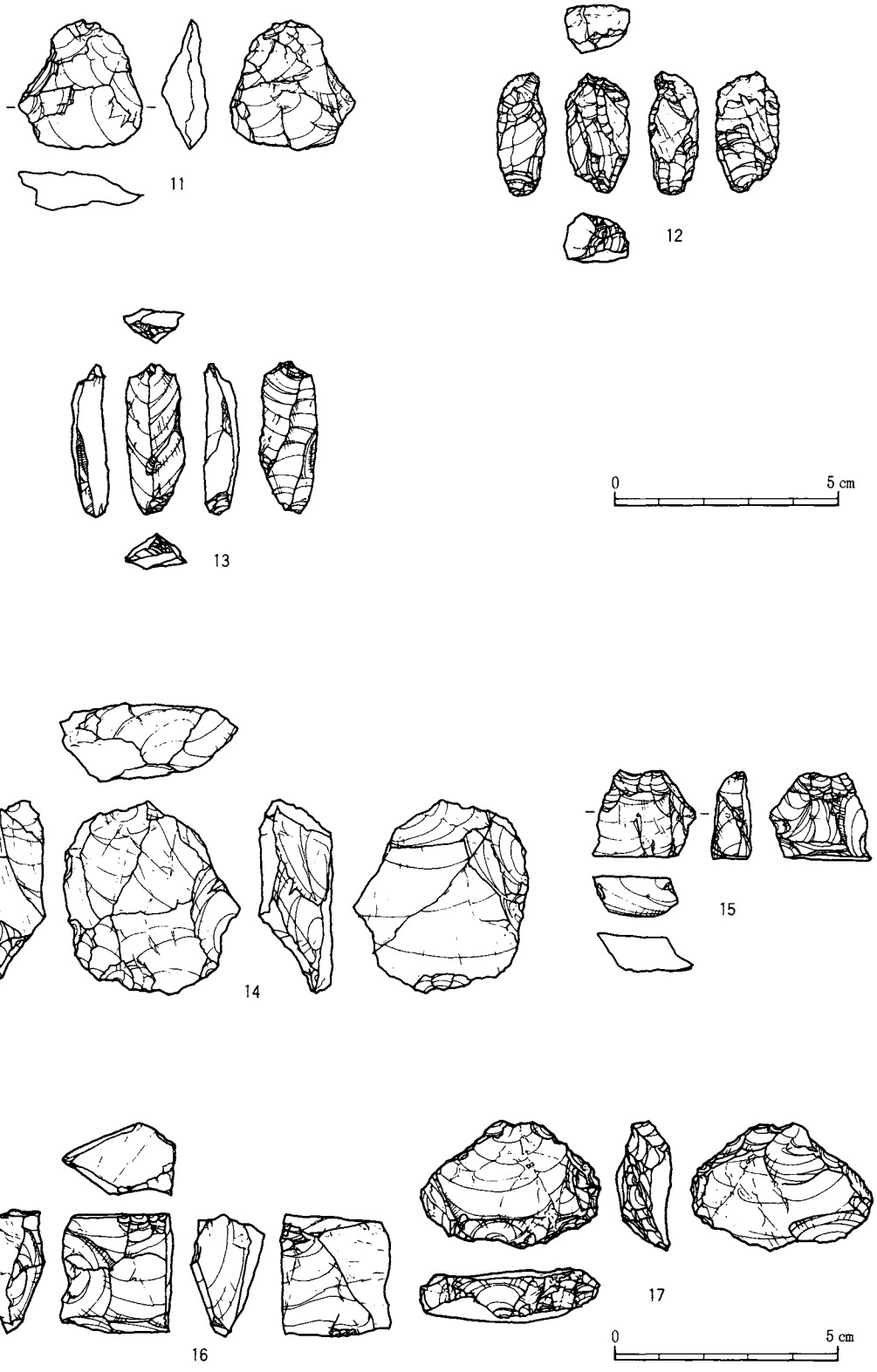
第47図　測定誤差の契機



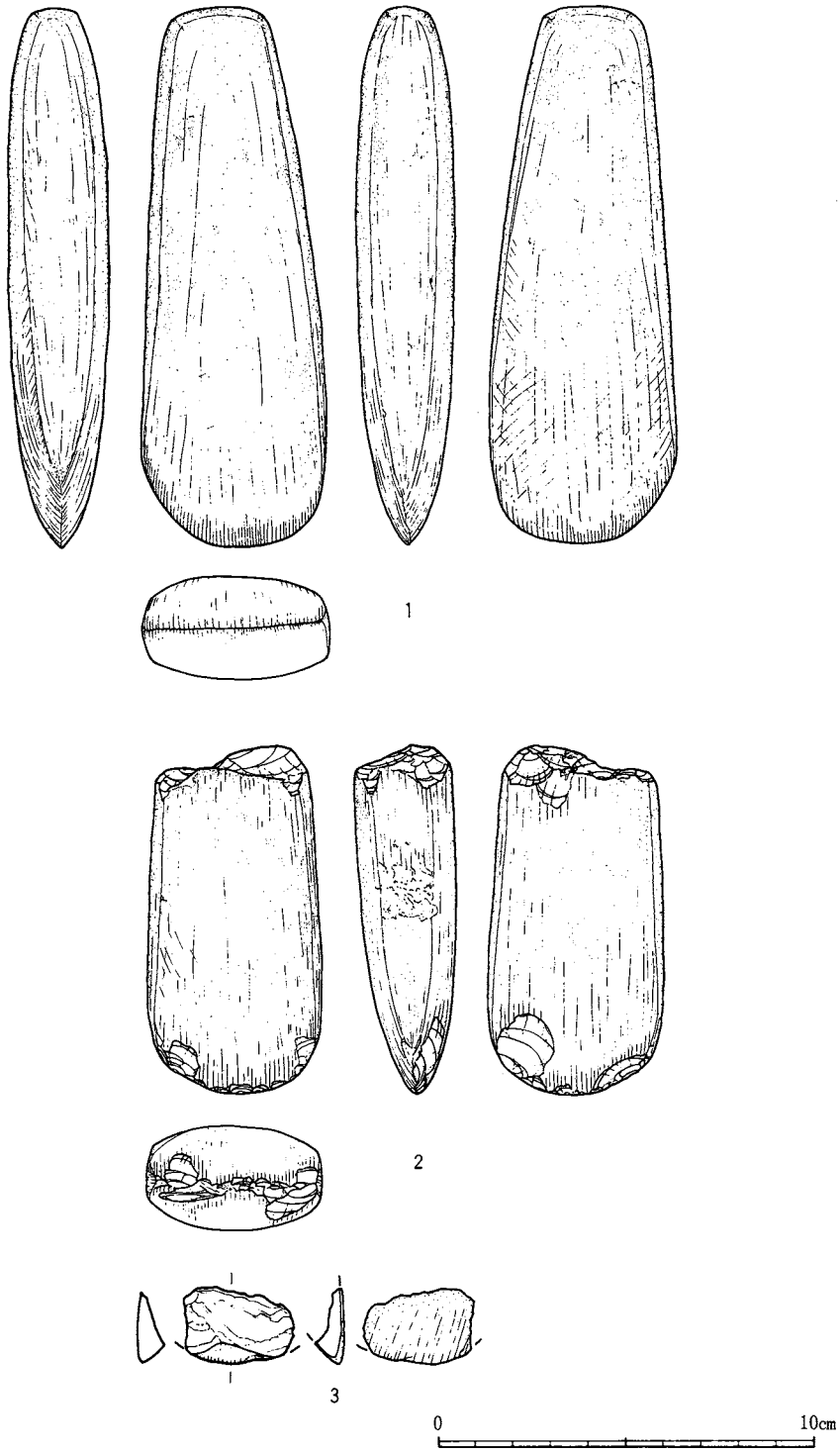
第48図　縄文時代石器(1)



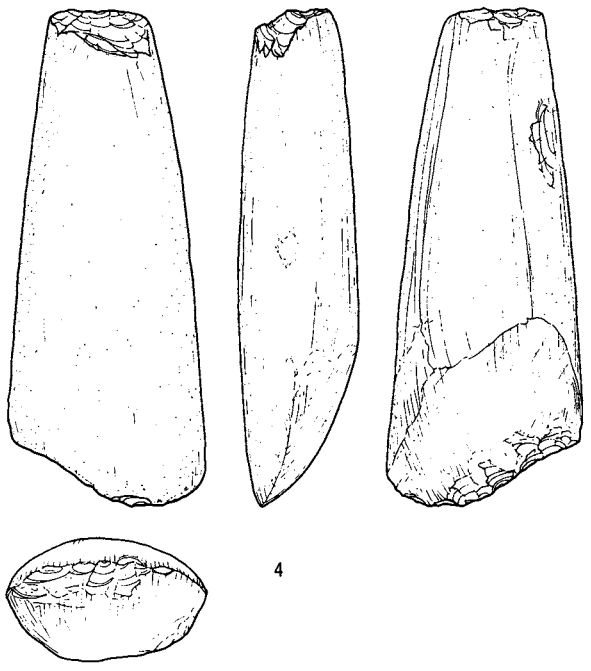
第49図　縄文時代石器(2)

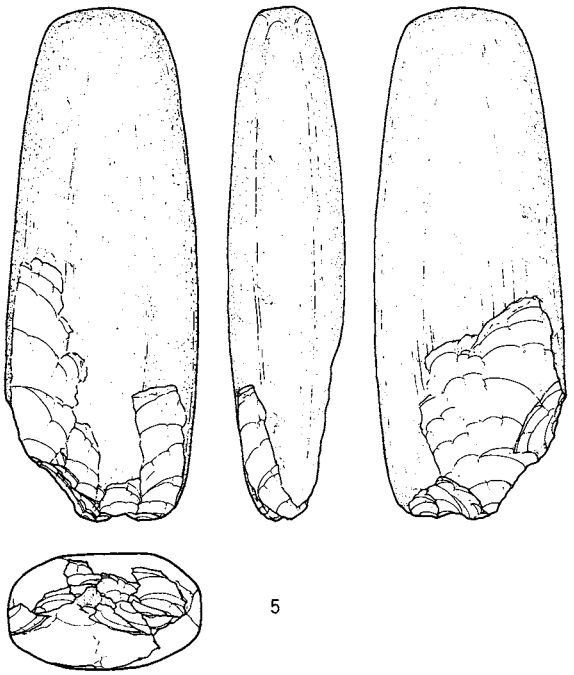


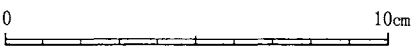
第50図　縄文時代石器(3)



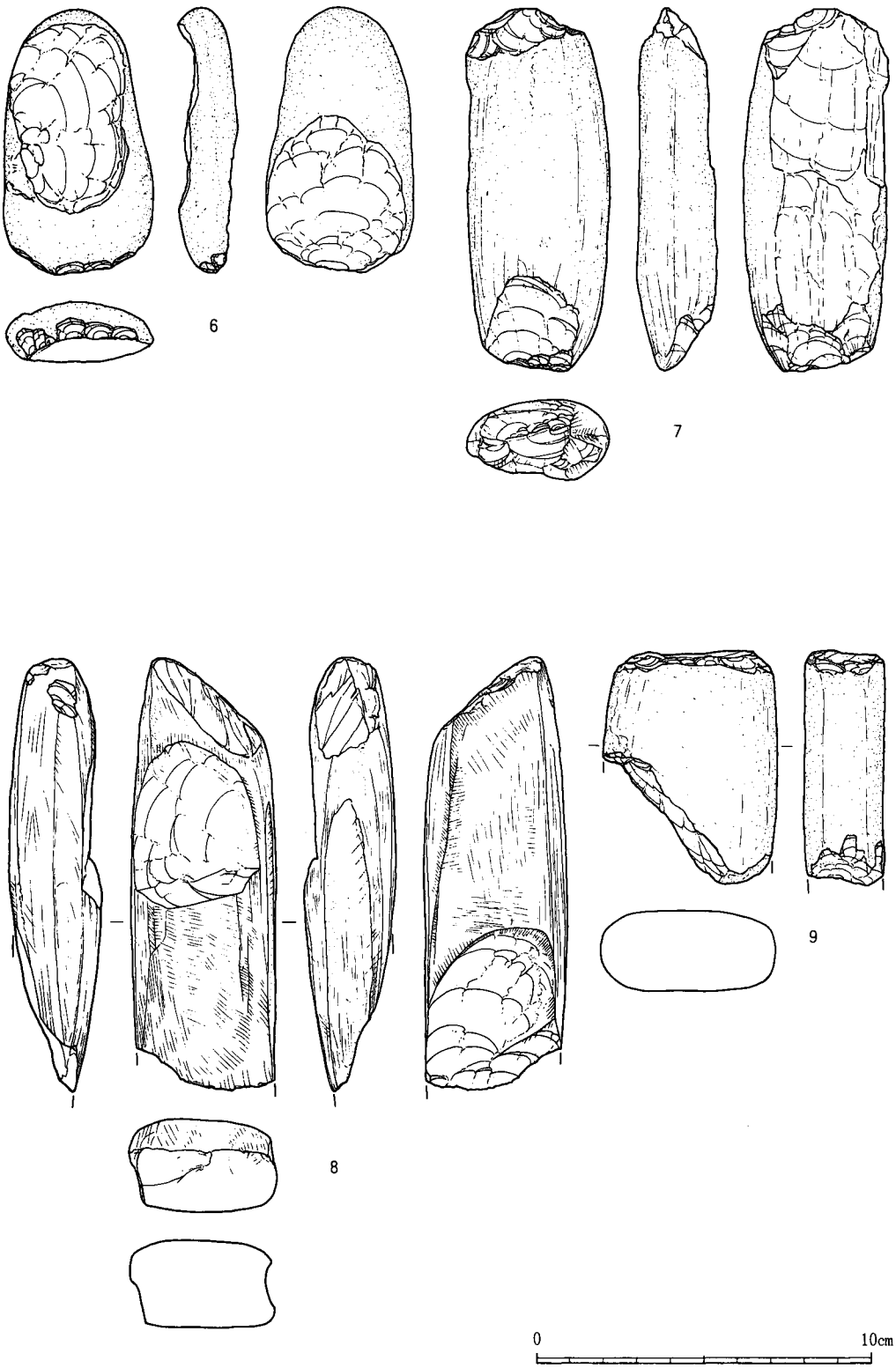
第51図　縄文時代石器(4)



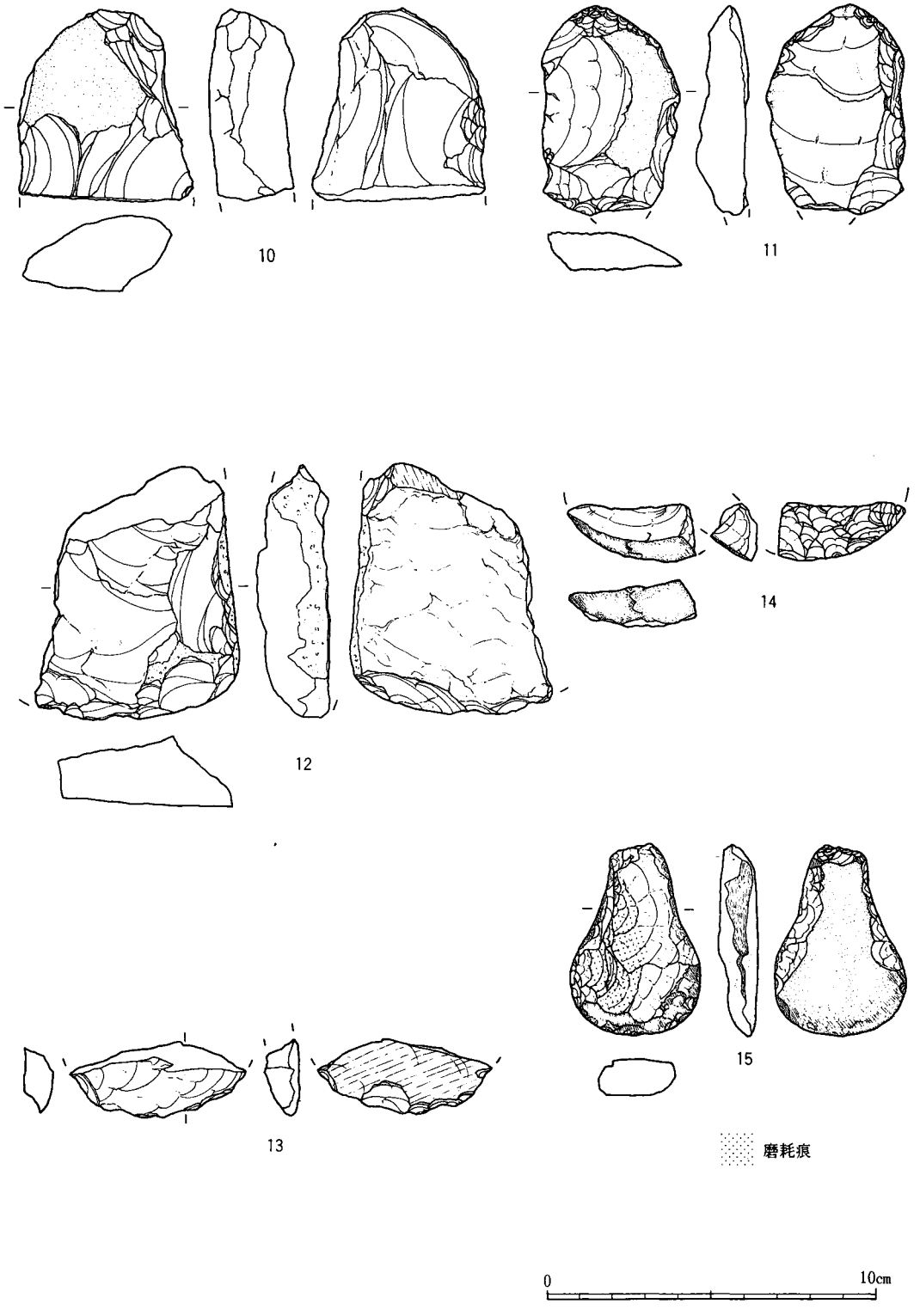




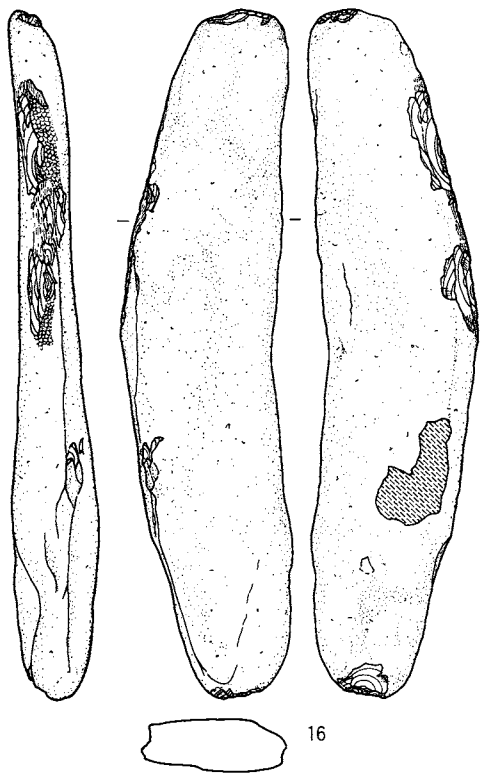
第52図　縄文時代石器(5)

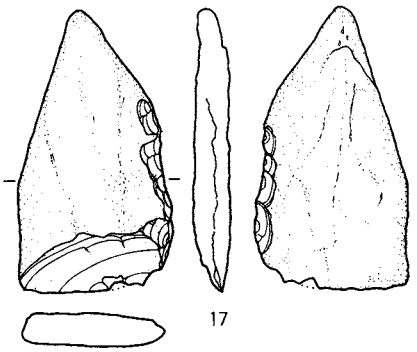


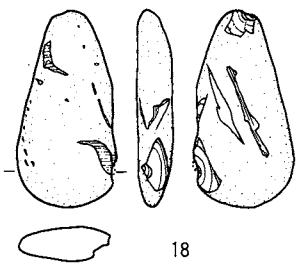
第53図　縄文時代石器(6)



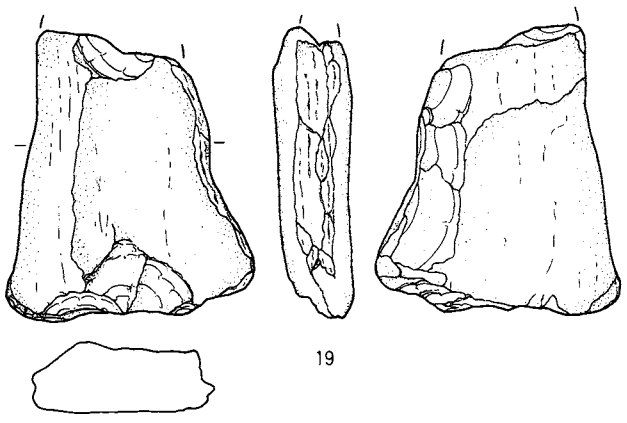
第54図　縄文時代石器(7)

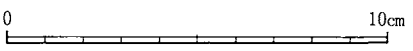




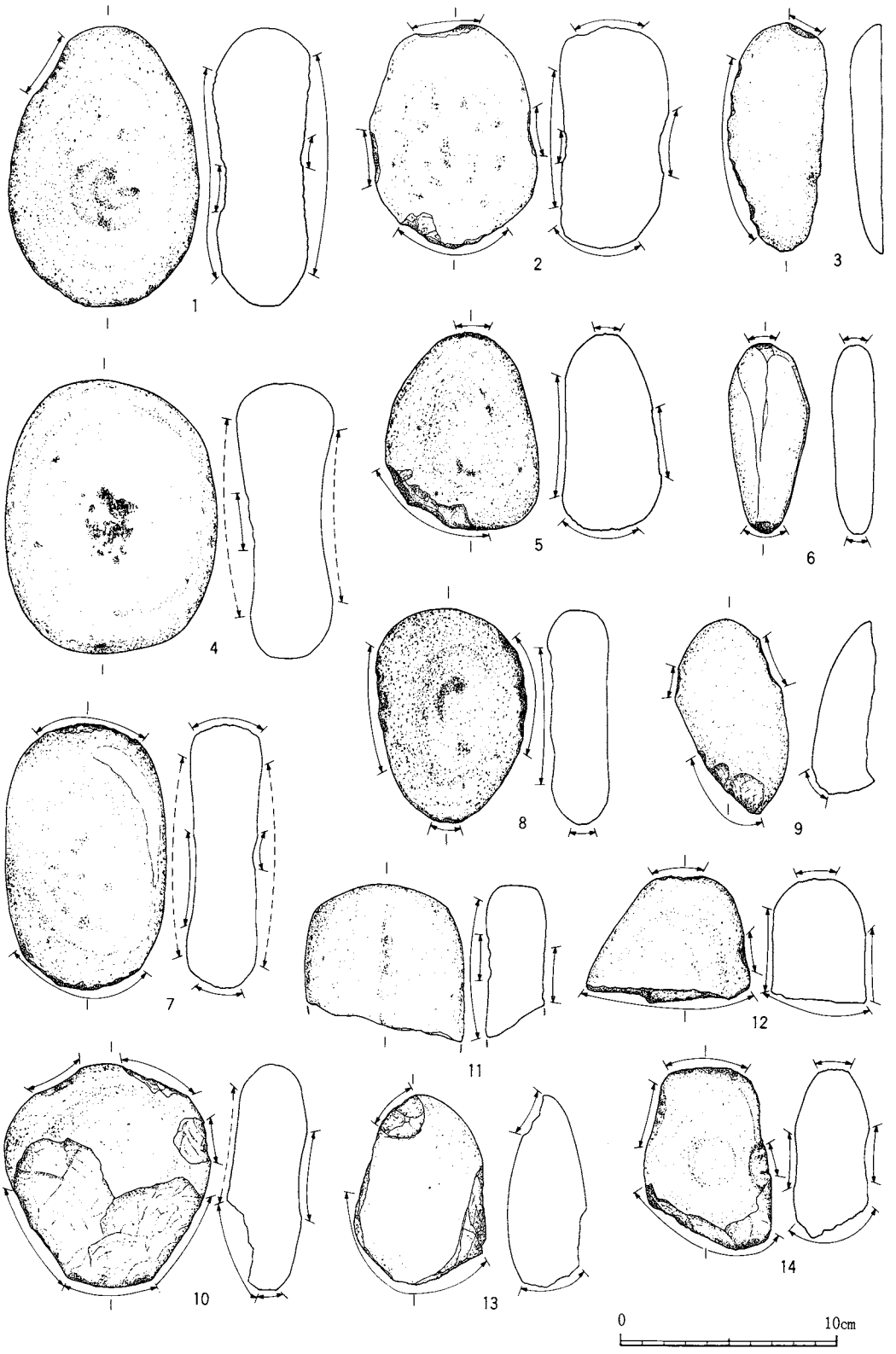


不明線条痕

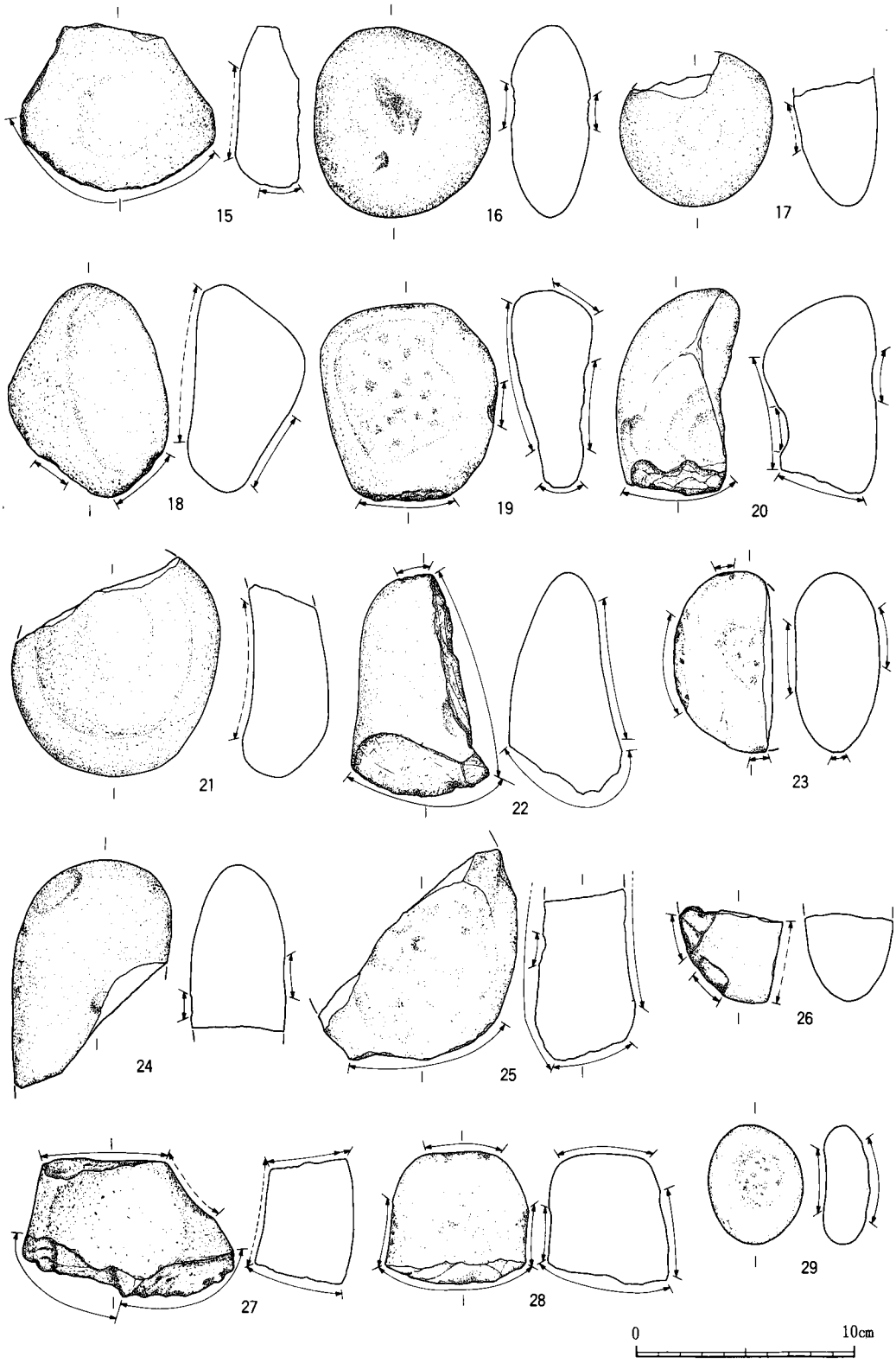




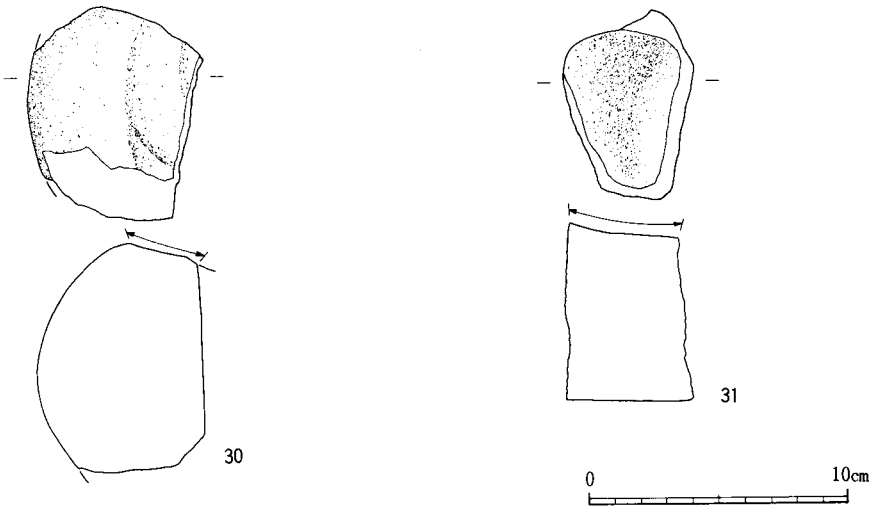
第55図　縄文時代石器(8)



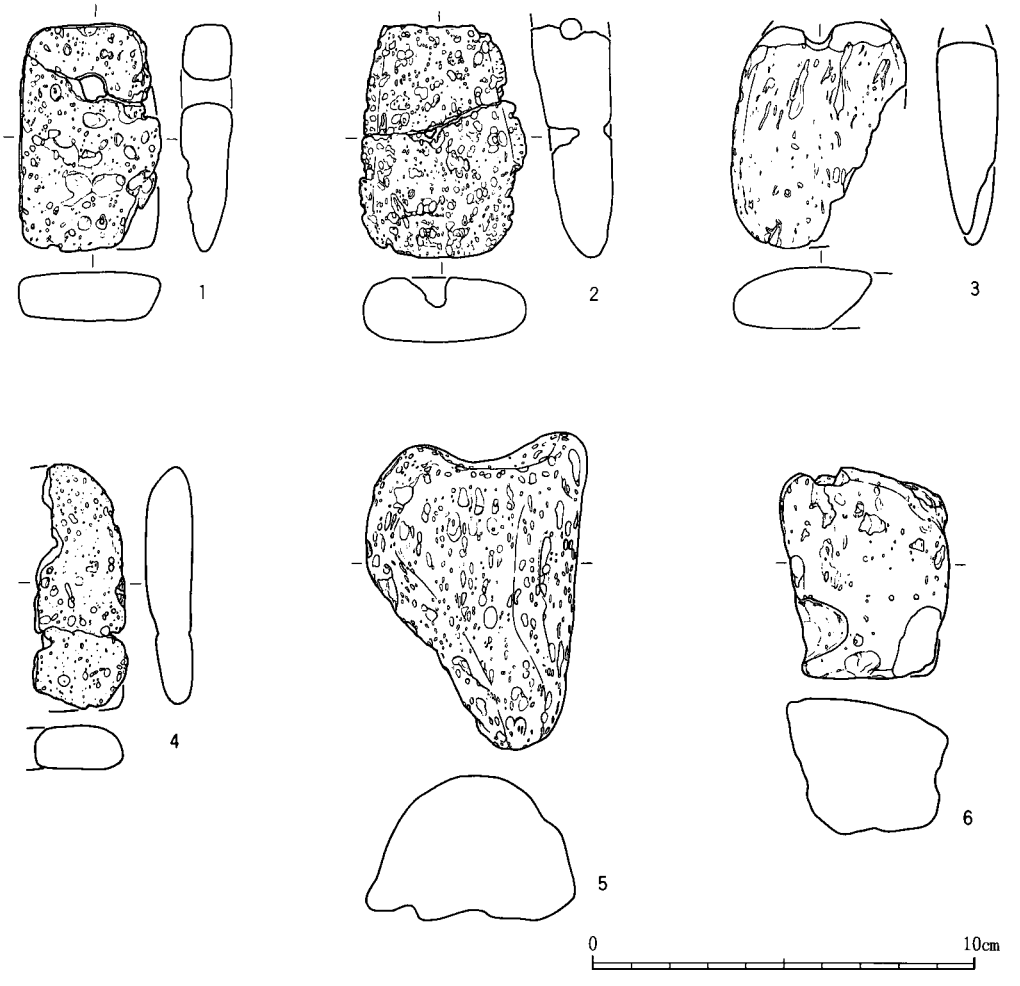
第56図　縄文時代石器(9)



第57図　縄文時代石器(10)



第58図　縄文時代石器(11)



第59図　縄文時代石器(12)

第6表　縄文時代石器属性(1)

属性														
1．No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
2．遺構種類														
3．遺構番号	1	2A	8	55	D-4	B4-11	C-4	C5-11	D-5	E-3	F-4	P-6	M-2	Z-4
4．遺物番号	52	5	9	9	2	1	13	38	8	2	9	6	1	不明
5．器種	AH	AH	AH	AH	AH	AH	AH	AH	AH	AH	AH	AH	AH	AH
6．長さ（mm）	25.0	(15.3)	(20.6)	27.0	21.2	18.4	(18.4)	(17.1)	(25.1)	21.0	(22.8)	30.4	(31.4)	(18.8)
7．幅（mm）	17.1	(12.2)	(16.7)	15.2	13.7	9.4	(14.1)	(18.3)	(20.9)	19.2	(20.1)	17.1	(19.7)	(13.3)
8．厚さ（mm）	4.0	5.1	5.9	3.5	5.7	4.1	5.4	5.5	5.4	3.7	3.8	5.7	5.8	(4.0)
9．重量（g）	1.1	(0.8)	(1.1)	1.2	1.1	0.5	(0.8)	(1.4)	(1.2)	1.0	(1.0)	2.0	(2.2)	(0.7)
10．先端角1	53	-	(57)	55	49	44	-	-	59	67	-	47	(52)	-
11．先端角2	66	-	63	68	58	60	-	-	60	78	-	61	63	-
12．先端角3	57	-	56	58	50	41	-	-	64	70	-	54	58	-
13．先端角4	43	-	(48)	48	39	32	-	-	-	59	-	37	-	-
14．先端角5	27	-	-	20	36	21	-	-	-	41	-	25	-	-
15．調整角1	67	-	53	34	90	58	-	-	60	39	-	55	-	-
16．調整角2	50	-	65	43	56	52	-	-	55	47	-	56	55	-
17．調整角3	37	-	65	36	83	76	-	-	55	46	-	46	71	-
18．仕上げ痕1	不明	-	R6	O3	L6	R6	-	-	(L6)	R6	-	O4	(L1)	-
19．仕上げ痕2	不明	-	X	X	X	X	-	-	(X)	X	-	A	(X)	-
20．先端形状1	2.5	-	(2.2)	2.4	1.9	3.6	-	-	1.7	1.7	-	2.2	(2.6)	-
21．先端形状2	1.3	-	2.1	1.2	1.1	1.8	-	-	1.7	0.9	-	0.7	1.2	-
22．先端形状3	2.2	-	2.2	2.1	2.0	3.6	-	-	1.1	1.5	-	1.4	1.2	-
23．先端形状4	4.5	-	(3.9)	4.3	4.2	5.8	-	-	-	3.6	-	6.5	-	-
24．先端形状5	16.0	-	-	28.3	4.6	14.3	-	-	-	10.9	-	16.9	-	-
25．側縁形状1	1.0	-	(1.0)	1.1	0.7	1.3	-	-	0.8	0.9	-	0.9	(1.0)	-
26．側縁形状2	0.7	-	(0.7)	0.6	0.4	0.8	-	-	0.9	0.4	-	0.5	0.6	-
27．側縁形状3	1.0	-	(1.0)	1.0	0.8	1.1	-	-	0.6	0.8	-	0.6	0.6	-
28．側縁形状4	1.5	-	(1.5)	1.6	1.4	1.5	-	-	-	1.8	-	2.0	-	-
29．側縁形状5	3.6	-	-	5.0	1.5	2.2	-	-	-	3.7	-	3.6	-	-
30．基部形状	2.9	-	(2.7)	0	0	1.9	-	-	(7.6)	3.1	(8.1)	3.9	(5.3)	-
31．形態示数	0.09	-	(0.13)	0.30	0.06	0.08	-	-	(0.15)	0.18	-	0.13	(0.23)	-
32．最大厚の位置1	0.32	-	(0.34)	0.25	0.27	0.30	-	-	(0.49)	0.34	-	0.33	(0.51)	-
33．最大厚の位置2	4	-	3	4	4	3	-	-	3	4	-	4	3	-
34．最大幅と最大厚の関係	0.28	-	(0.32)	1.38	0.23	0.28	-	-	(0.30)	0.57	-	0.40	(0.49)	-
35．先細り示数	0.73	-	(0.67)	0.90	0.70	0.79	-	-	(0.68)	0.75	-	0.78	(0.77)	-
36．対称性	0.10	-	(0.05)	0.16	0.02	0.03	-	-	(0.20)	0.03	-	0.01	(0.13)	-
37．傾斜角	7	-	-	7	3	3	-	-	-	2	-	5	-	-
38．最大幅と抉り度の関係	0.81	-	(0.92)	0	0	0.83	-	-	(0.50)	1.25	-	1.04	(1.41)	-
39．側面観・側面形状	A1	-	A2	B2	B2	C2	-	-	D1	A1	-	B1	C2	-
40．側面観における先端角1	16	-	(31)	12	25	19	-	-	(24)	19	-	18	(19)	-
41．側面観における先端角2	34	-	39	29	40	29	-	-	37	31	-	30	39	-
42．側面観における先端角3	19	-	32	14	25	18	-	-	26	18	-	23	28	-
43．側面観における先端角4	15	-	26	10	21	21	-	-	24	15	-	16	(17)	-
44．遺存部	13	4	3	13	13	13	4	4	3	13	5	13	3	4
45．石材	An	Ob	Ob	Ob	Ob	Ch	Ob	Ob	Ob	Ob	Ob	Ch	Ob	Ch
46．挿図番号	48-1	48-2	48-3	48-4	48-5	48-6	48-7	48-8	48-9	48-10	48-11	48-12	48-13	48-14
47．備考														

器種のAHは石鏃。
石材のAnは安山岩、Obは黒曜岩、Chはチャート。
遺存部は「たておれ」の10～12は除く。
14の計測等は1人で行った。

各属性の3名の計測者による平均とばらつき

長さ	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	24.6	(14.6)	(20.3)	26.5	20.9	17.9	(18.0)	(16.7)	24.7	20.3	(22.3)	30.1	(30.8)
B	25.3	(15.6)	(20.8)	27.2	21.6	18.7	(18.6)	(17.4)	25.2	21.5	(23.1)	30.5	(31.7)
C	25.1	(15.6)	(20.7)	27.3	21.0	18.6	(18.6)	(17.2)	25.3	21.3	(23.0)	30.7	(31.6)
MEAN	25.0	(15.3)	(20.6)	27.0	21.2	18.4	(18.4)	(17.1)	25.1	21.0	(22.8)	30.4	(31.4)
STD	0.36	0.58	0.26	0.44	0.38	0.44	0.35	0.36	0.32	0.64	0.44	0.31	0.49

幅	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	16.7	(11.7)	16.1	14.5	13.4	9.0	(13.4)	(17.7)	(20.3)	19.1	(19.5)	16.3	(19.4)
B	17.4	(12.3)	16.9	15.7	14.0	9.5	(14.3)	(18.2)	(21.7)	19.1	(20.3)	17.6	(19.6)
C	17.3	(12.5)	17.0	15.5	13.7	9.7	(14.5)	(18.9)	(20.7)	19.5	(20.4)	17.5	(20.0)
MEAN	17.1	(12.2)	16.7	15.2	13.7	9.4	(14.1)	(18.3)	(20.9)	19.2	(20.1)	17.1	(19.7)
STD	0.38	0.42	0.49	0.64	0.30	0.36	0.59	0.60	0.72	0.23	0.49	0.72	0.31

厚さ	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	3.3	4.6	5.3	3.1	5.2	3.6	4.8	5.1	5.1	3.2	3.3	5.4	5.2
B	4.3	5.3	6.3	3.7	6.0	4.6	5.8	5.6	5.5	4.0	4.2	6.0	6.1
C	4.3	5.5	6.1	3.6	5.8	4.2	5.6	5.7	5.5	3.8	3.9	5.8	6.0
MEAN	4.0	5.1	5.9	3.5	5.7	4.1	5.4	5.5	5.4	3.7	3.8	5.7	5.8
STD	0.58	0.47	0.53	0.32	0.42	0.50	0.53	0.32	0.23	0.42	0.46	0.31	0.49

先端角1	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	54	-	(56)	54	49	45	-	-	57	67	-	47	(53)
B	54	-	(56)	55	51	43	-	-	60	67	-	48	(52)
C	52	-	(58)	56	47	44	-	-	61	68	-	47	(52)
MEAN	53	-	(57)	55	49	44	-	-	59	67	-	47	(52)
STD	1.15	-	1.15	1.00	2.00	1.00	-	-	2.08	0.58	-	0.58	0.58

先端角2	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	65	-	60	69	59	60	-	-	60	79	-	63	62
B	67	-	64	69	57	60	-	-	60	77	-	61	64
C	67	-	64	67	59	60	-	-	60	77	-	60	63
MEAN	66	-	63	68	58	60	-	-	60	78	-	61	63
STD	1.15	-	2.31	1.15	1.15	0	-	-	0	1.15	-	1.53	1.00

先端角3	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	56	-	56	57	50	40	-	-	65	69	-	54	59
B	57	-	56	60	50	42	-	-	64	72	-	54	57
C	58	-	57	58	50	41	-	-	64	69	-	55	58
MEAN	57	-	56	58	50	41	-	-	64	70	-	54	58
STD	1.00	-	0.58	1.53	0	1.00	-	-	0.58	1.73	-	0.58	1.00

先端角4	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	42	-	(47)	47	37	33	-	-	-	59	-	37	-
B	43	-	(48)	49	40	31	-	-	-	60	-	37	-
C	43	-	(48)	47	39	32	-	-	-	59	-	37	-
MEAN	43	-	(48)	48	39	32	-	-	-	59	-	37	-
STD	0.58	-	0.58	1.15	1.53	1.00	-	-	-	0.58	-	0	-

先端角5	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	27	-	-	20	36	19	-	-	-	40	-	25	-
B	27	-	-	20	37	25	-	-	-	42	-	25	-
C	26	-	-	20	35	19	-	-	-	41	-	25	-
MEAN	27	-	-	20	36	21	-	-	-	41	-	25	-
STD	0.58	-	-	0	1.00	3.46	-	-	-	1.00	-	0	-

A～Cは計測者、1～13はNo。

調整角1	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	68	-	53	32	89	58	-	-	60	40	-	53	-
B		-					-	-			-		-
C	65	-	53	35	90	58	-	-	60	38	-	56	-
MEAN	67	-	53	34	90	58	-	-	60	39	-	55	-
STD	2.12	-	0	2.12	0.71	0	-	-	0	1.41	-	2.12	-

調整角2	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	50	-	65	43	56	52	-	-	55	46	-	55	55
B		-					-	-			-		
C	50	-	64	43	55	51	-	-	55	47	-	56	54
MEAN	50	-	65	43	56	52	-	-	55	47	-	56	55
STD	0	-	0.71	0	0.71	0.71	-	-	0	0.71	-	0.71	0.71

調整角3	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	39	-	63	37	80	72	-	-	55	46	-	47	71
B		-					-	-			-		
C	35	-	66	35	85	80	-	-	55	45	-	44	71
MEAN	37	-	65	36	83	76	-	-	55	46	-	46	71
STD	2.83	-	2.12	1.41	3.54	5.66	-	-	0	0.71	-	2.12	0

先端形1	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	2.3	-	(2.1)	2.1	1.5	3.4	-	-	1.6	1.5	-	1.8	(2.6)
B	2.8	-	(2.4)	2.2	1.9	3.5	-	-	1.9	1.8	-	2.5	(2.7)
C	2.5	-	(2.2)	2.8	2.3	3.8	-	-	1.5	1.8	-	2.3	(2.5)
MEAN	2.5	-	(2.2)	2.4	1.9	3.6	-	-	1.7	1.7	-	2.2	(2.6)
STD	0.25	-	0.15	0.38	0.40	0.21	-	-	0.21	0.17	-	0.36	0.10

先端形2	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	1.1	-	2.0	1.1	0.9	1.5	-	-	1.4	0.8	-	0.5	1.1
B	1.5	-	2.2	1.2	1.2	2.0	-	-	2.0	1.2	-	0.8	1.2
C	1.3	-	2.1	1.2	1.1	2.0	-	-	1.8	0.7	-	0.9	1.2
MEAN	1.3	-	2.1	1.2	1.1	1.8	-	-	1.7	0.9	-	0.7	1.2
STD	0.20	-	0.10	0.06	0.15	0.29	-	-	0.31	0.26	-	0.21	0.06

先端形3	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	2.0	-	2.0	2.0	1.9	3.2	-	-	1.0	1.4	-	1.4	1.3
B	2.5	-	2.1	2.2	2.0	3.7	-	-	1.4	1.5	-	1.4	1.2
C	2.1	-	2.4	2.2	2.0	4.0	-	-	1.0	1.5	-	1.4	1.2
MEAN	2.2	-	2.2	2.1	2.0	3.6	-	-	1.1	1.5	-	1.4	1.2
STD	0.26	-	0.21	0.12	0.06	0.40	-	-	0.23	0.06	-	0	0.06

先端形4	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	4.1	-	(3.9)	4.2	4.0	5.6	-	-	-	3.6	-	6.2	-
B	4.8	-	(3.9)	4.4	4.3	5.7	-	-	-	3.5	-	6.6	-
C	4.7	-	(4.0)	4.3	4.2	6.0	-	-	-	3.7	-	6.7	-
MEAN	4.5	-	(3.9)	4.3	4.2	5.8	-	-	-	3.6	-	6.5	-
STD	0.38	-	0.06	0.10	0.15	0.21	-	-	-	0.10	-	0.26	-

先端形5	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	16.2	-	-	27.8	4.4	13.6	-	-	-	10.5	-	16.7	-
B	15.0	-	-	28.4	4.8	14.7	-	-	-	11.1	-	16.9	-
C	16.7	-	-	28.6	4.7	14.7	-	-	-	11.1	-	17.0	-
MEAN	16.0	-	-	28.3	4.6	14.3	-	-	-	10.9	-	16.9	-
STD	0.87	-	-	0.42	0.21	0.64	-	-	-	0.35	-	0.15	-

A～Cは計測者、1～13はNo。

側縁形1	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	0.9	-	(0.9)	0.9	0.6	1.1	-	-	0.7	0.7	-	0.8	(0.9)
B	1.0	-	(1.1)	1.0	0.5	1.4	-	-	0.9	1.0	-	0.9	(1.1)
C	1.1	-	(1.1)	1.3	1.0	1.4	-	-	0.8	1.0	-	0.9	(1.0)
MEAN	1.0	-	(1.0)	1.1	0.7	1.3	-	-	0.8	0.9	-	0.9	(1.0)
STD	0.13	-	0.12	0.21	0.28	0.17	-	-	0.13	0.17	-	0.09	0.10

側縁形2	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	0.5	-	(0.5)	0.6	0.3	0.7	-	-	0.7	0.4	-	0.3	0.6
B	0.8	-	(0.7)	0.7	0.5	0.7	-	-	1.0	0.4	-	0.7	0.6
C	0.9	-	(1.1)	0.6	0.5	1.0	-	-	0.9	0.4	-	0.5	0.6
MEAN	0.7	-	(0.7)	0.6	0.4	0.8	-	-	0.9	0.4	-	0.5	0.6
STD	0.20	-	0.33	0.06	0.12	0.20	-	-	0.15	0	-	0.23	0

側縁形3	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	0.9	-	(0.9)	1.0	0.8	1.0	-	-	0.6	0.7	-	0.6	0.5
B	1.0	-	(0.9)	1.0	0.7	1.1	-	-	0.6	0.9	-	0.6	0.7
C	1.0	-	(1.1)	1.0	0.8	1.4	-	-	0.5	0.9	-	0.6	0.7
MEAN	1.0	-	(1.0)	1.0	0.8	1.1	-	-	0.6	0.8	-	0.6	0.6
STD	0.05	-	0.13	0	0.09	0.24	-	-	0.06	0.12	-	0	0.12

側縁形4	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	1.3	-	(1.4)	1.6	1.3	1.5	-	-	-	1.7	-	2.0	-
B	1.4	-	(1.6)	1.4	1.4	1.5	-	-	-	1.9	-	1.7	-
C	1.7	-	(1.6)	1.7	1.5	1.6	-	-	-	1.8	-	2.2	-
MEAN	1.5	-	(1.5)	1.6	1.4	1.5	-	-	-	1.8	-	2.0	-
STD	0.23	-	0.12	0.15	0.10	0.09	-	-	-	0.10	-	0.25	-

側縁形5	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	3.3	-	-	4.9	1.3	2.1	-	-	-	3.5	-	3.3	-
B	3.6	-	-	5.0	1.7	2.0	-	-	-	3.7	-	3.8	-
C	3.8	-	-	5.0	1.6	2.4	-	-	-	3.9	-	3.7	-
MEAN	3.6	-	-	5.0	1.5	2.2	-	-	-	3.7	-	3.6	-
STD	0.25	-	-	0.05	0.24	0.21	-	-	-	0.23	-	0.29	-

基部形状	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	2.6	-	(2.7)	0	0	1.6	-	-	(7.4)	2.8	(7.9)	3.6	(5.1)
B	3.1	-		0	0	2.1	-	-	(7.6)	3.3		4.1	(5.6)
C	3.0	-	(2.7)	0	0	2.0	-	-	(7.8)	3.3	(8.3)	4.1	(5.3)
MEAN	2.9	-	(2.7)	0	0	1.9	-	-	(7.6)	3.1	(8.1)	3.9	(5.3)
STD	0.25	-	0	0	0	0.26	-	-	0.20	0.28	0.28	0.32	0.25

形態示数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	0.08	-	(0.11)	0.32	0.06	0.06	-	-	(0.14)	0.17	-	0.12	(0.22)
B	0.09	-	(0.13)	0.29	0.07	0.09	-	-	(0.15)	0.19	-	0.14	
C	0.11	-	(0.14)	0.30	0.04	0.09	-	-	(0.16)	0.19	-	0.14	(0.24)
MEAN	0.09	-	(0.13)	0.30	0.06	0.08	-	-	(0.15)	0.18	-	0.13	(0.23)
STD	0.02	-	0.02	0.02	0.02	0.02	-	-	0.01	0.01	-	0.01	0.01

最大厚1	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	0.31	-	(0.33)	0.21	0.25	0.20	-	-	(0.48)	0.27	-	0.32	(0.47)
B	0.31	-	(0.31)	0.16	0.27	0.34	-	-	(0.49)	0.29	-	0.34	(0.55)
C	0.33	-	(0.38)	0.38	0.28	0.35	-	-	(0.51)	0.46	-	0.33	(0.50)
MEAN	0.32	-	(0.34)	0.25	0.27	0.30	-	-	(0.49)	0.34	-	0.33	(0.51)
STD	0.01	-	0.04	0.12	0.02	0.08	-	-	0.02	0.10	-	0.01	0.04

A～Cは計測者、1～13はNo。

幅と厚	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	0.20	-	(0.15)	1.51	0.23	0.30	-	-	(0.29)	0.65	-	0.39	(0.48)
B	0.32	-	(0.44)	1.82	0.31	0.27	-	-	(0.31)	0.66	-	0.40	
C	0.32	-	(0.37)	0.80	0.14	0.26	-	-	(0.31)	0.41	-	0.42	(0.49)
MEAN	0.28	-	(0.32)	1.38	0.23	0.28	-	-	(0.30)	0.57	-	0.40	(0.49)
STD	0.07	-	0.15	0.52	0.09	0.02	-	-	0.01	0.14	-	0.02	0.01

先細り	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	0.73	-	(0.66)	0.90	0.70	0.78	-	-	(0.67)	0.74	-	0.79	(0.76)
B	0.74	-	(0.67)	0.92	0.71	0.80	-	-	(0.68)	0.76	-	0.77	(0.78)
C	0.73	-	(0.67)	0.89	0.70	0.78	-	-	(0.68)	0.74	-	0.78	(0.78)
MEAN	0.73	-	(0.67)	0.90	0.70	0.79	-	-	(0.68)	0.75	-	0.78	(0.77)
STD	0.01	-	0.01	0.02	0.01	0.01	-	-	0.01	0.01	-	0.01	0.01

対称性	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	0.11	-	(0.05)	0.18	0.03	0.03	-	-	(0.21)	0.04	-	0.01	(0.10)
B	0.08	-	(0.03)	0.17	0.01	0.02	-	-	(0.20)	0.02	-	0.02	(0.12)
C	0.11	-	(0.08)	0.13	0.01	0.03	-	-	(0.20)	0.02	-	0.01	(0.16)
MEAN	0.10	-	(0.05)	0.16	0.02	0.03	-	-	(0.20)	0.03	-	0.01	(0.13)
STD	0.02	-	0.03	0.03	0.01	0.01	-	-	0.01	0.01	-	0.01	0.03

傾斜角	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	7	-	-	7	2	3	-	-	-	1	-	6	-
B	7	-	-	8	4	3	-	-	-	2	-	4	-
C	8	-	-	7	3	3	-	-	-	3	-	4	-
MEAN	7	-	-	7	3	3	-	-	-	2	-	5	-
STD	0.58	-	-	0.58	1.00	0	-	-	-	1.00	-	1.15	-

幅と抉り	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	0.77	-	(0.96)	0	0	0.85	-	-	(0.47)	1.25	-	1.06	(1.37)
B	0.79	-		0	0	0.81	-	-	(0.51)	1.26	-	1.01	
C	0.88	-	(1.15)	0	0	0.83	-	-	(0.51)	1.23	-	1.04	(1.45)
MEAN	0.81	-	(1.06)	0	0	0.83	-	-	(0.50)	1.25	-	1.04	(1.41)
STD	0.06	-	0.13	0	0	0.02	-	-	0.02	0.02	-	0.03	0.06

側先角1	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	16	-	(30)	10	25	18	-	-	(23)	15	-	20	(19)
B	15	-	(32)	12	25	19	-	-	(24)	23	-	18	(19)
C	16	-	(31)	13	25	20	-	-	(24)	19	-	17	(19)
MEAN	16	-	(31)	12	25	19	-	-	(24)	19	-	18	(19)
STD	0.58	-	1.00	1.53	0	1.00	-	-	0.58	4.00	-	1.53	0

側先角2	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	32	-	41	30	41	29	-	-	40	31	-	30	38
B	35	-	38	29	39	29	-	-	33	32	-	28	39
C	34	-	37	28	41	30	-	-	38	31	-	32	41
MEAN	34	-	39	29	40	29	-	-	37	31	-	30	39
STD	1.53	-	2.08	1.00	1.15	0.58	-	-	3.61	0.58	-	2.00	1.53

側先角3	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	15	-	32	13	22	16	-	-	25	19	-	22	26
B	21	-	32	14	26	19	-	-	25	18	-	23	28
C	21	-	32	16	26	18	-	-	28	18	-	24	29
MEAN	19	-	32	14	25	18	-	-	26	18	-	23	28
STD	3.46	-	0	1.53	2.31	1.53	-	-	1.73	0.58	-	1.00	1.53

A～Cは計測者、1～13はNo。

側先角4	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
A	15	-	22	8	21	20	-	-	21	14	-	15	(17)
B	15	-	29	11	21	22	-	-	26	16	-	18	(17)
C	15	-	28	11	20	22	-	-	25	16	-	15	(17)
MEAN	15	-	26	10	21	21	-	-	24	15	-	16	(17)
STD	0	-	3.79	1.73	0.58	1.15	-	-	2.65	1.15	-	1.73	0

A～Cは計測者、1～13はNo。

遺　存　部　の　類　型

	1～2	3	4	5	6	7～9	13	計
鎌取遺跡	0	3	4	1	0	0	6	14
	0.0%	21.4%	28.6%	7.1%	0.0%	0.0%	42.9%	100.0%
草刈遺跡B区	4	12	5	7	21	11	43	103
	3.9%	11.7%	4.9%	6.8%	20.4%	10.7%	41.7%	100.0%
草刈貝塚	7	32	5	13	15	3	73	148
	4.7%	21.6%	3.4%	8.8%	10.1%	2.0%	49.3%	100.0%
向原遺跡	9	13	1	4	13	8	57	105
	8.6%	12.4%	1.0%	3.8%	12.4%	7.6%	54.3%	100.0%
上深沢遺跡	11	18	2	1	12	0	47	91
	12.1%	19.8%	2.2%	1.1%	13.2%	0.0%	51.6%	100.0%
実験例	0	2	0	0	7	0	7	16
（御堂島）	0.0%	12.5%	0.0%	0.0%	43.8%	0.0%	43.8%	100.1%

参考までに早川天神森遺跡での完形品の出土率は25%（14点／56点）。
新戸遺跡での完形品の出土率は38.2%（26点／68点）。

鎌取遺跡のNo13は側縁部が若干欠けているが、類型3とした。

遺　存　部　の　類　型

	1～2	3	4	5	6	7～9	13	計	
草刈B区	4	12	5	7	21	11	43	103	
草刈貝塚	7	32	5	13	15	3	73	148	
計	11	44	10	20	36	14	116	251	$\chi^2=17.54$ df=6 $p<0.1$

遺　存　部　の　類　型

	1～2	3	4	5	6	7～9	13	計	
草刈貝塚	7	32	5	13	15	3	73	148	
向原	9	13	1	4	13	8	57	105	
計	16	45	6	17	28	11	130	253	$\chi^2=13.16$ df=6 $p<0.5$

遺　存　部　の　類　型

	1～2	3	4	5	6	7～9	13	計	
草刈B区	4	12	5	7	21	11	43	103	
向原	9	13	1	4	13	8	57	105	
計	13	25	6	11	34	19	100	208	$\chi^2=9.75$ df=6 $1<p$

第7表　縄文時代石器属性(2)

挿図番号	遺物番号	器　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	備　考
第48図15	4-4-12	石鏃	18.1	15.6	6.8	1.0	黒曜石	尖頭器様石器か
第48図16	A-4-9	石鏃	(21.8)	(15.9)	4.7	(2.2)	黒曜石	未成品
第48図17	A-4-9	石鏃	25.9	14.1	7.1	2.1	チャート	未成品
第48図18	42-不明	石鏃	24.9	18.1	8.0	1.4	チャート	未成品
第48図19	13A-37	石鏃	27.6	28.6	16.2	9.4	黒曜石	未成品

第8表　縄文時代石器属性(3)

挿図番号	遺物番号	器　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	備　考
第49図1	B-4-11-3	削器	80.5	50.0	18.4	46.1	砂岩	
第49図2	D-5-8	U·R-fl	24.9	21.5	6.5	2.1	黒曜石	
第49図3	5-26	U·R-fl	29.8	35.9	16.0	12.2	石英	
第49図4	P32-6	U·R-fl	39.7	29.7	14.3	14.7	石英	
第49図5	C-5-45	U·R-fl	(22.2)	(16.1)	(5.6)	(1.6)	チャート	
第49図6	13A-18	U·R-fl	19.6	(14.2)	4.6	(0.9)	黒曜石	
	35-16	U·R-fl	15.1	18.4	4.8	1.1	頁岩	
第49図7	2-A-4	楔形石器	18.0	20.4	5.7	2.4	チャート	
第49図8	A-4-9	楔形石器	34.2	16.3	9.5	5.2	チャート	
第49図9	A-4-9	楔形石器	35.5	36.5	12.1	13.1	チャート	
第49図10	A-4-9	楔形石器	19.8	8.5	4.5	0.7	黒曜石	
第50図11	B-4-6	楔形石器	30.2	28.3	10.5	6.4	安山岩	
第50図12	D-5-9	楔形石器	28.0	14.5	11.1	4.7	チャート	
第50図13	不明	楔形石器	33.9	13.6	8.2	2.7	黒曜石	
第50図14	C-5-23	石核	43.6	40.1	17.2	27.7	石英	
第50図15	P-02-54	石核	19.7	23.2	9.2	14.6	黒曜石	
第50図16	3-7	石核	27.1	25.6	16.1	11.6	チャート	
第50図17	9-1	石核	28.5	41.1	11.9	14.4	チャート	
	D-5-16	石核	17.0	19.4	12.9	3.6	チャート	
	1-48	剝片	(6.8)	(16.3)	(2.8)	(0.3)	黒曜石	
	1-66	剝片	(16.6)	23.8	3.9	(1.2)	安山岩	
	2-B-15	剝片	(14.6)	(18.0)	(6.4)	(1.5)	チャート	
	4-33	剝片	(11.1)	13.4	2.9	(0.3)	黒曜石	
	5-7	剝片	18.9	23.8	11.2	3.2	石英	
	5-9	剝片	23.9	27.4	12.0	9.0	石英	
	5-10	剝片	(10.5)	(15.3)	(5.2)	(0.6)	チャート	
	5-26	剝片	30.3	37.4	12.4	15.0	石英	
	5-28	剝片	27.4	29.2	7.4	5.5	石英	
	6-32	剝片	20.9	(17.5)	6.9	(1.3)	黒曜石	
	13A-19	剝片	(10.3)	7.4	1.4	(0.1)	黒曜石	
	13A-20	剝片	(6.5)	13.0	2.0	(0.1)	チャート	
	13A-20	剝片	(6.2)	(4.6)	1.6	(<0.1)	黒曜石	
	38-50	剝片	24.4	16.5	5.1	1.3	チャート	
	38-50	剝片	6.1	14.7	3.4	0.2	黒曜石	
	38-50	剝片	22.1	9.7	4.8	0.7	黒曜石	
	42-20	剝片	(11.6)	(17.4)	(6.3)	(0.9)	チャート	
	42-不明	剝片	16.8	(17.7)	3.2	(0.5)	チャート	
	FP-1-2	剝片	25.8	32.0	7.4	3.3	砂岩	
	FP-2-4	剝片	[15.7]	[21.0]	4.2	[0.9]	安山岩	
	P2-55	剝片	22.8	13.1	8.6	1.4	黒曜石	
	P4-1	剝片	14.0	(6.4)	(2.1)	(0.1)	黒曜石	
	A-4-9	剝片	14.1	6.9	3.3	0.3	黒曜石	
	A-4-9	剝片	21.0	13.8	5.7	0.9	安山岩	
	A-4-9	剝片	(14.8)	(15.8)	(2.5)	(0.5)	黒曜石	
	A-4-9	剝片	(13.9)	(20.3)	(2.8)	(0.7)	黒曜石	
	A-4-9	剝片	[20.5]	[15.0]	9.6	[2.0]	黒曜石	
	A-4-9	剝片	(9.1)	6.8	6.2	(0.3)	黒曜石	
	A-4-12	剝片	9.7	(14.1)	3.8	(0.3)	黒曜石	
	B-4-12-5	剝片	(11.6)	10.6	3.4	(0.4)	黒曜石	
	B-5-4-7	剝片	(21.9)	(13.5)	(5.1)	(1.1)	黒曜石	
	C-4-6	剝片	15.8	5.7	4.0	0.8	チャート	
	C-5-2-42	剝片	[22.5]	17.4	7.3	[2.0]	チャート	
	C-5-11-39	剝片	26.3	26.9	5.7	4.0	安山岩	
	C-5-57	剝片	16.5	23.2	5.5	1.8	石英	
	D-5-5	剝片	(11.2)	(11.5)	2.8	(0.2)	黒曜石	
	D-5-8	剝片	17.7	17.3	21.0	6.4	チャート	
	D-5-9	剝片	(14.0)	(8.5)	(9.8)	(1.3)	チャート	
	不明	剝片	18.0	24.7	17.8	5.3	黒曜石	

第９表　縄文時代石器属性(4)

挿図番号	遺物番号	器　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	備　考
第51図1	C-5-56	磨製石斧	142.8	50.1	27.1	303.7	砂岩	
第51図2	7-5	磨製石斧	91.0	47.3	27.5	189.6	砂岩	
第51図3	C-5-3-43	磨製石斧	(18.9)	(34.8)	(7.6)	(3.7)	砂岩	
第52図4	A-4-9	磨製石斧	130.0	52.1	32.0	316.0	砂岩	
第52図5	C-5-3-43	磨製石斧	132.9	50.8	30.3	317.1	砂岩	
第53図6	C-5-49	磨製石斧	79.9	44.4	18.1	67.2	砂岩	
第53図7	B-5	磨製石斧	108.7	43.4	24.0	152.6	片岩	
第53図8	B-4-12-3	磨製石斧	(127.2)	44.2	27.8	(233.6)	砂岩	
第53図9	14-11	磨製石斧	(68.6)	(52.1)	(24.5)	(131.8)	砂岩	
第54図10	C-5-5	打製石斧	(59.1)	(52.7)	25.0	(92.8)	砂岩	
第54図11	B-4-32	打製石斧	(64.8)	41.0	15.5	(45.3)	砂岩	
第54図12	C-4-9	打製石斧	(75.9)	(61.5)	(20.2)	(118.2)	ホルンフェルス	
第54図13	4-1	打製石斧	(22.7)	(53.4)	(10.1)	(11.0)	砂岩	
第54図14	C-5-7-33	打製石斧	(17.4)	(38.5)	(13.8)	(7.8)	砂岩	
第54図15	C-5-11-37	打製石斧	57.8	39.8	11.7	31.8	ホルンフェルス	
第55図16	40-1	打製石斧	179.5	44.7	22.5	197.4	砂岩	
第55図17	C-5-11-36	打製石斧	[74.6]	40.3	10.1	[40.3]	砂岩	
第55図18	B-4-37	打製石斧	50.8	[26.3]	9.2	[17.9]	砂岩	
第55図19	A-4-7	打製石斧	(75.3)	65.1	20.8	(118.7)	片岩	

第10表　縄文時代石器属性(5)

挿図番号	遺物番号	器　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	備　考
第56図1	D-5-9-15	磨石・敲石類	129.6	88.2	55.4	825.7	安山岩	
第56図2	17-5·17-6	磨石・敲石類	104.5	78.4	55.1	626.7	砂岩	
第56図3	C-6-5	磨石・敲石類	106.1	45.8	17.0	86.5	砂岩	
第56図4	A-4-4	磨石・敲石類	125.6	98.2	46.9	991.6	安山岩	
第56図5	A-4-3	磨石・敲石類	89.9	71.3	47.7	440.7	砂岩	
第56図6	H-5-22	磨石・敲石類	86.5	37.0	20.7	73.1	砂岩	
第56図7	4-10·4-24·4-55	磨石・敲石類	121.5	74.7	34.3	494.8	安山岩	
第56図8	B-4-22	磨石・敲石類	98.2	70.7	31.5	303.4	安山岩？	
第56図9	B-4-37	磨石・敲石類	89.2	52.7	30.2	140.6	砂岩	
第56図10	18-21	磨石・敲石類	102.3	95.3	39.8	473.1	凝灰岩	
第56図11	B-5-4-7	磨石・敲石類	(71.5)	74.5	29.2	(240.5)	安山岩	
第56図12	C-4-9	磨石・敲石類	58.0	75.6	45.6	270.4	安山岩	
第56図13	E-5-19	磨石・敲石類	87.1	61.6	40.7	253.8	砂岩	
第56図14	24-15	磨石・敲石類	82.9	58.7	36.8	256.0	安山岩	
第57図15	D-5-7	磨石・敲石類	77.1	88.9	33.7	270.9	砂岩	
第57図16	C-5-11-60	磨石・敲石類	87.6	81.5	41.5	427.5	石英斑岩	
第57図17	A-4-9	磨石・敲石類	(71.0)	70.1	38.4	(221.4)	砂岩	
第57図18	C-4-15	磨石・敲石類	96.0	73.5	56.6	462.5	石英斑岩	
第57図19	B-4-19	磨石・敲石類	88.6	82.5	41.0	415.1	石英斑岩	
第57図20	C-4-9	磨石・敲石類	93.2	56.9	53.4	348.7	安山岩	
第57図21	14-13	磨石・敲石類	(98.6)	(95.5)	42.1	(467.3)	砂岩	
第57図22	C-5-15-61	磨石・敲石類	100.6	63.8	51.8	367.2	砂岩	スタンプ形石器か
第57図23	38-54	磨石・敲石類	81.8	(45.0)	30.2	(206.8)	砂岩	
第57図24	4-7	磨石・敲石類	(104.8)	72.1	45.2	(429.2)	砂岩	
第57図25	C-5-11-60	磨石・敲石類	(95.6)	(91.8)	51.1	(524.7)	石英斑岩	
第57図26	D-5-16	磨石・敲石類	(43.4)	47.7	45.5	(108.9)	石英斑岩	
第57図27	B-4-32	磨石・敲石類	61.5	96.5	49.2	425.0	安山岩	
第57図28	16-25	磨石・敲石類	59.6	66.0	60.6	383.9	安山岩	
第57図29	C-5-28	磨石・敲石類	53.7	43.4	21.8	72.4	砂岩	
	1-55	磨石・敲石類	105.7	51.8	33.9	284.1	砂岩	
	7-6	磨石・敲石類	119.8	62.2	39.8	370.8	砂岩	
	不明	磨石・敲石類	119.6	47.8	31.6	254.2	砂岩	
第58図30	6-15	石皿	(71.0)	(50.5)	(67.9)	(336.1)	安山岩	
第58図31	1-58	石皿	(83.7)	(67.4)	(93.6)	(468.4)	安山岩	
	16-54	石皿	(62.9)	(35.2)	(22.8)	(42.3)	安山岩	

第11表　縄文時代石器属性(6)

挿図番号	遺物番号	器　種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石　材	備　考
第59図1	不明	浮子	58.7	(36.4)	13.5	(4.2)	軽石	
第59図2	不明	浮子	59.6	(43.9)	17.1	(9.4)	軽石	
第59図3	12-5	浮子	(58.3)	(45.3)	16.5	(9.7)	軽石	
第59図4	7-10	浮子	(63.0)	(23.8)	(12.0)	(2.2)	軽石	
第59図5	不明	軽石製品	82.5	39.2	39.2	15.7	軽石	原石か
第59図6	不明	軽石製品	54.8	(32.7)	32.7	(21.4)	軽石	原石か

2．遺構と出土遺物

縄文時代の住居跡は、疑問の残るものも含めると16軒検出した。内訳は前期後半１軒（住居かどうか疑いあり）、中期後半13軒（疑問あるもの２軒を含む）、時期不明２軒（住居かどうか疑いあり）で、主体となる中期後半では、加曽利ＥⅡ２軒、ＥⅢ６軒、ＥⅡ～Ⅲ１軒である。

土坑は、早期のものと思われる落とし穴、炉穴と加曽利Ｅ式期に通有な円形の土坑が主体である。中期の遺構は比較的平坦部に集中し、落とし穴・炉穴は斜面に分散する傾向が見られる。

No.	時　期	平面形	規　模	面積	炉　跡	柱　穴	備　　考
002	ＥⅡ～Ⅲ	不整円形	4.4×4.2	13.6	炉体？	主柱穴５	
004	ＥⅢ	円形	4.7×4.7	17.6	土器片囲い	主柱穴5～8	壁溝全周
005	ＥⅢ	円形	6.2×6.0	29.3	－	小ピット12	
006	ＥⅢ	円形	6.2×6.1	(31.3)	２基炉体	小ピット13	小規模貝ブロック５ヶ所
007	ＥⅢ	不整円形	4.7×4.6	(17.7)	地床炉？	主柱穴5～6	他にピット３
008	加Ｅ後半	円形	5.3×5.1	(21.8)	なし？	小ピット12	中央のピットは炉の可能性有
009	ＥⅡ	円形	5.5×5.0	21.3	地床炉	深い柱穴９	壁溝あり。他にピット２
012	加Ｅ？	不整円形	3.4×3.0	(8.6)	炉体？	主柱穴6～8	遺構に伴う土器は皆無か？形態から加曽利Ｅ期
013A	ＥⅡ	楕円形	4.5×3.9	13.7	炉体？	主柱穴5～6	床面から出土した土器は、炉体の可能性高い
013B	不明	不明	4.2×？	－	－	－	柱穴不明、住居跡かどうか
040	ＥⅢ	不明	(6.2×5.2)	－	２基	ピット14	炉の１基は炉体あったか？ピットは壁柱穴か？
042	ＥⅢ	楕円形	4.6×4.1	(15.7)		ピット20以上	地床炉と埋設土器ある炉。建て替えありか？
001	前期？	不整楕円	7.1×4.3	26.5	－		プラン不明瞭。住居でない可能性あり
003	不明	不明	(5.3×4.7)	－	－		壁、床とも不明。住居跡かどうか？
014	Ｅ？	円形？	5.1×(5.5)	(21.4)	－	小ピット９	住居跡でない可能性あり
041	不明	円形	4.5×4.3	(16.3)	－	ピット９	住居跡でない可能性あり

第12表　縄文時代住居跡

土坑（中期）

No.	平面形	規模（m）	備　考	時　期	No.	平面形	規模（m）	備　考	時　期
P04	円形	1.4×1.4		阿玉台Ⅰb	P28	円形	1.4×1.4		ＥⅡ？
P06	楕円形	0.9×0.8	土器一部を埋設	阿玉台直前	P32	円～楕円	1.2×1.1		ＥⅣ？
P20	不整円形	1.6×1.4	土器時期幅あり	中期	P52	円形	2.7×2.6	旧039	ＥⅡ

落とし穴状遺構

No.	平面形	規模（m）	備　考	時　期	No.	平面形	規模（m）	備　考	時　期
P21	長方形	1.4×0.7	条痕文２点	不明	P38	長方～楕円	2.0×1.4	遺物なし	縄文？
P24	隅丸長方形	1.8×1.0	条痕文19点	早期末	P44	長方形	2.3×1.2	遺物なし	縄文？
P36	隅丸長方形	1.1×0.6	遺物なし	縄文？	P48	長方形	1.6×1.2	遺物なし	縄文？

炉穴

No.	重　複	規模（m）	備　考	時　期	No.	重　複	規模（m）	備　考	時　期
FP01	２基	2.8×1.0		早期末	FP25	なし	2.2×0.9	旧P09	早期末
FP02	なし	1.3×1.0		早期末	FP26	なし	2.1×0.6	旧P34	早期末
FP03～07	５基	2.0×0.9	FP04で土器	早期末	FP08～24	18基	－×0.8		早期末

時期・性格不明の土坑

No.	平面形	規模（m）	備　考	時　期	No.	平面形	規模（m）	備　考	時　期
P01	長円形	1.0×0.7		不明	P33	楕円～不整形	1.2×1.0		不明
P29	円形	1.0×1.0		不明	P39	円形	1.2×1.2	旧FP39	不明
P30	不整楕円	1.3×0.9		不明	P40	長方形	1.6×1.0		不明
P31	不整円～楕円	2.5×2.1		不明					

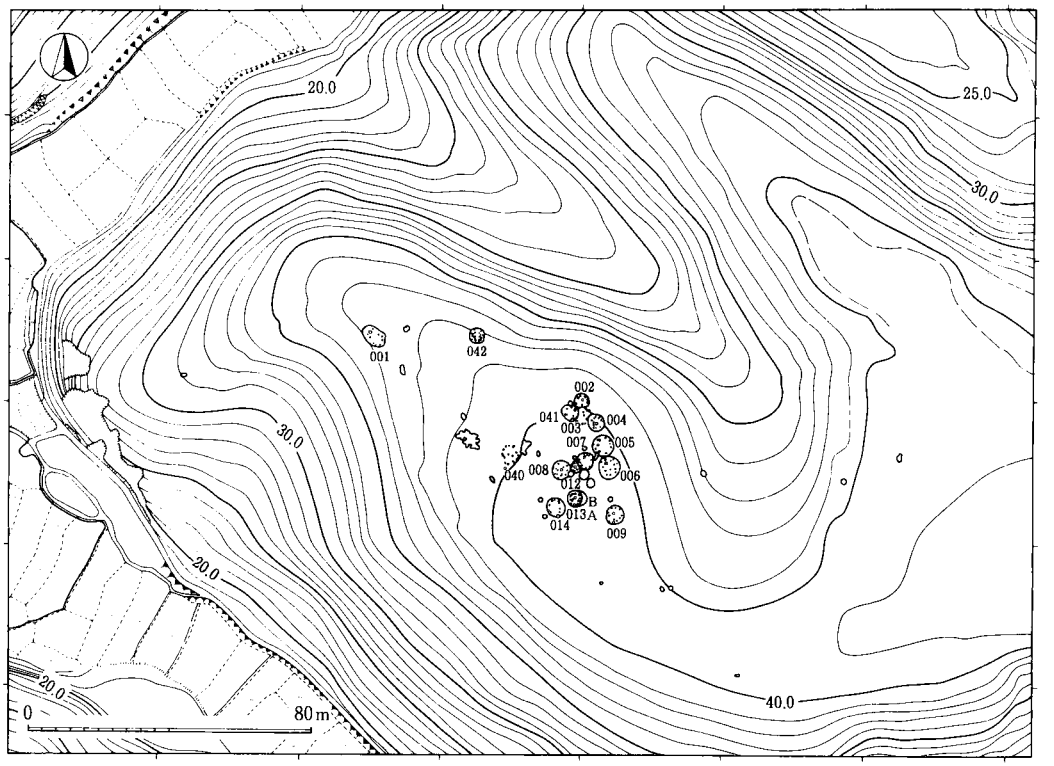
第13表　縄文時代土坑

A．住居跡

今回発見された住居跡の確認面からの深さは、最高でも30cm程度で、主体となるのは０～20cmである。したがって、これらよりも掘り込みが浅く、検出できなかった住居跡があった可能性を考慮する必要がある。残念ながら、単独で発見されたピットは皆無であるので、そのような住居跡の存在を考える手がかりは得られなかった。また、縄文時代の住居跡は、住居跡であるかどうかの検討が難しい場合も多く、疑わしい場合には特に慎重に観察・記録を行う必要がある。今回の調査では、床面とピット（柱穴かどうか）の記録にとぼしく、「住居跡かどうか」疑問なものが多くなってしまった。なお、遺構の形態等の基礎データは第13表に記載した。遺構出土遺物の記載は、大半を占める土器は既述したグリッド出土土器の分類に即し、図示しえたものを遺構ごとに、それ以外はグリッド出土遺物の項で併せて述べた。

時期の判明したのは加曽利ＥⅡ～Ⅲ式期の住居跡９軒であり、断続的にせよこの期間は居住域として意識されていたと思われる。配置は台地の中央から北側斜面に近い部分に集中しており、南対岸の環状集落である有吉北貝塚の「集落の中心には穴を掘らない」という意識は、ここではみられない。占地した当初から集落の機能または居住の仕方に差があるのであろう。

住居跡の位置は、台地の中央付近でもすべて北側に寄っているが、なかでもＥⅢ式期のものは北側斜面に向かう傾斜変換点付近に線状に並んでいる。これは北側の斜面がゆるやかで谷に降りるのに都合が良かったからかもしれない。



第60図　縄文時代遺構配置図

００２号跡（第61図、図版29・36）

Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ５が炉からほぼ等距離に位置するのに対し、Ｐ４は離れており、その部分の壁も張り出している。入り口施設の可能性もあろう。Ｐ６は20cmとやや浅い。炉には焼土が平坦に堆積し、立ち上がりに及んでいないことから、炉囲いがあった可能性が高い。

土器（第61図、図版36）

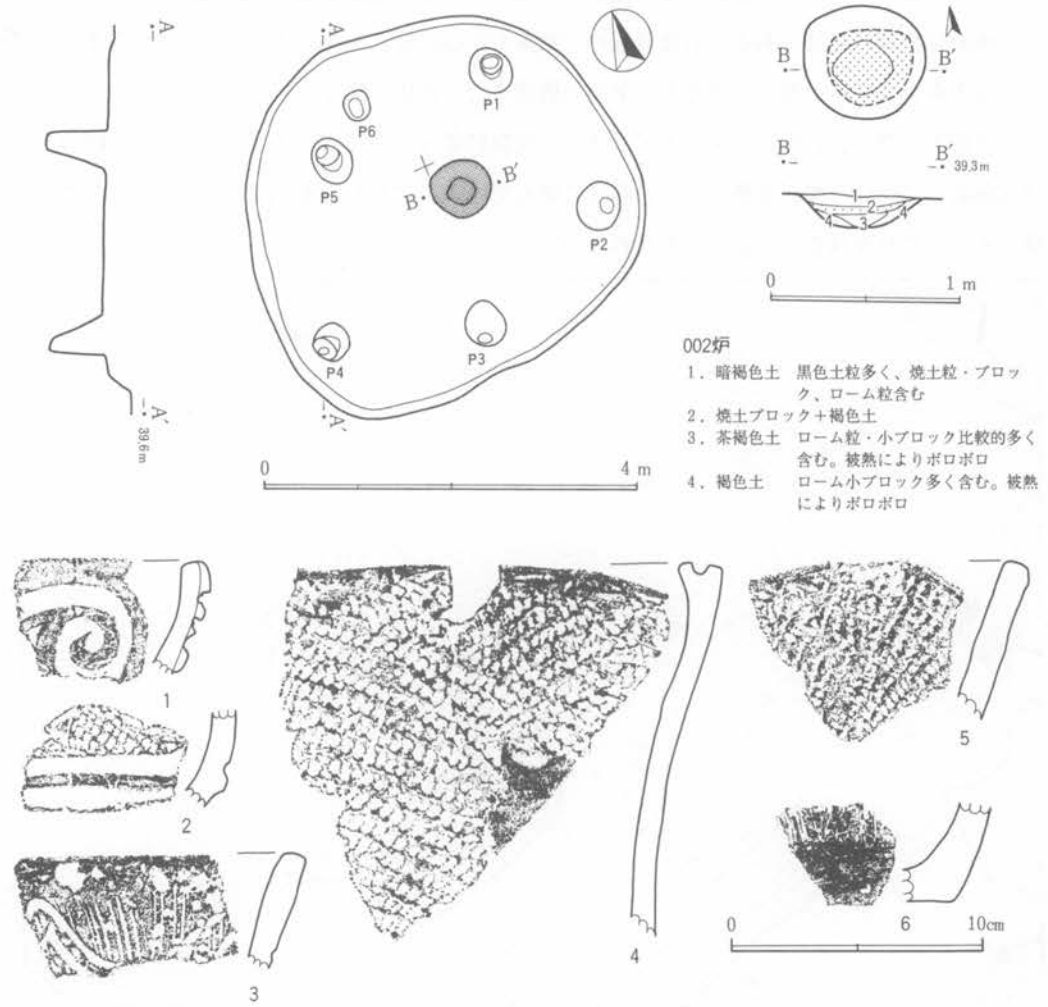
第Ⅲ群３類ｃ種（１・２）　１は区画文間の渦巻文が、２は区画下端の隆帯が認められる。

第Ⅲ群３類ｇ種（３）　地文は条線文の、在地的なＥⅢ式段階の連孤文土器と思われる。

第Ⅲ群３類ｌ種（４・５）　４は幅のある口唇部上に深い沈線が巡り、以下の縄文ＬＲＬは口縁端部で横位の縄文帯、胴部で縦位となる。４はＥⅢ式までは下らないであろう。

第Ⅲ群３類ｎ種（６）　条線文の末端が認められる。

時期　零細かつ遺構一括のため決定要素に欠ける。加曽利ＥⅡ～ＥⅢ式と考えておきたい。



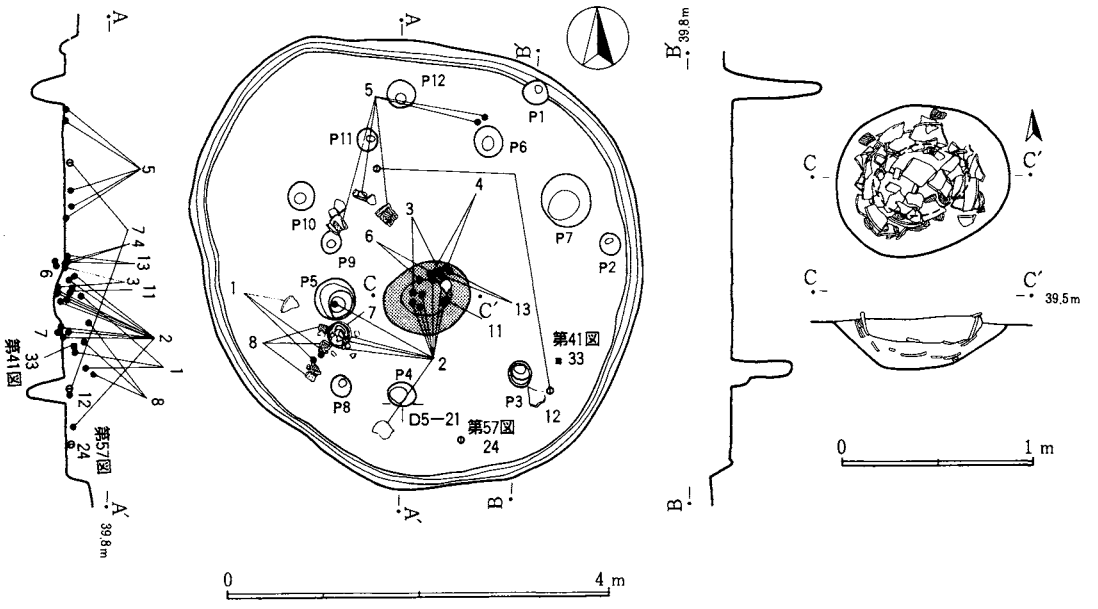
第61図　002号跡

００４号跡（第62～64図、図版24・25・33・34・38）

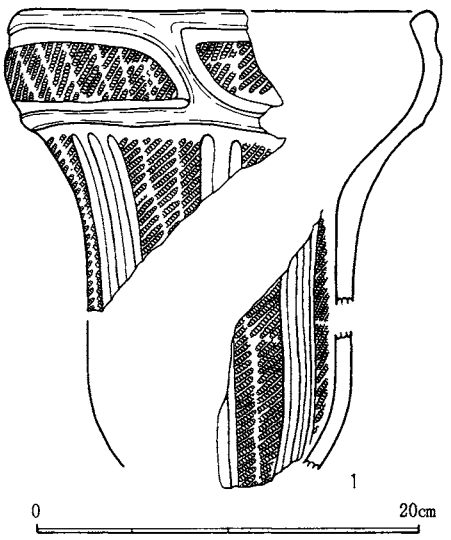
ピットの位置を見ると、Ｐ６（またはＰ７）－Ｐ３－Ｐ８－Ｐ10－Ｐ12の５本柱の主柱穴構造が考えられるが、他のピットも掘り方がしっかりしている。壁溝は全周する。炉には土器片による囲いがあり、少なくとも８個体の土器が使われていた。このうち３個体分は、口縁部から胴部上半がほぼ全周した（第63図２～４）。

土器（第62図１～第64図14、図版33・34・38）

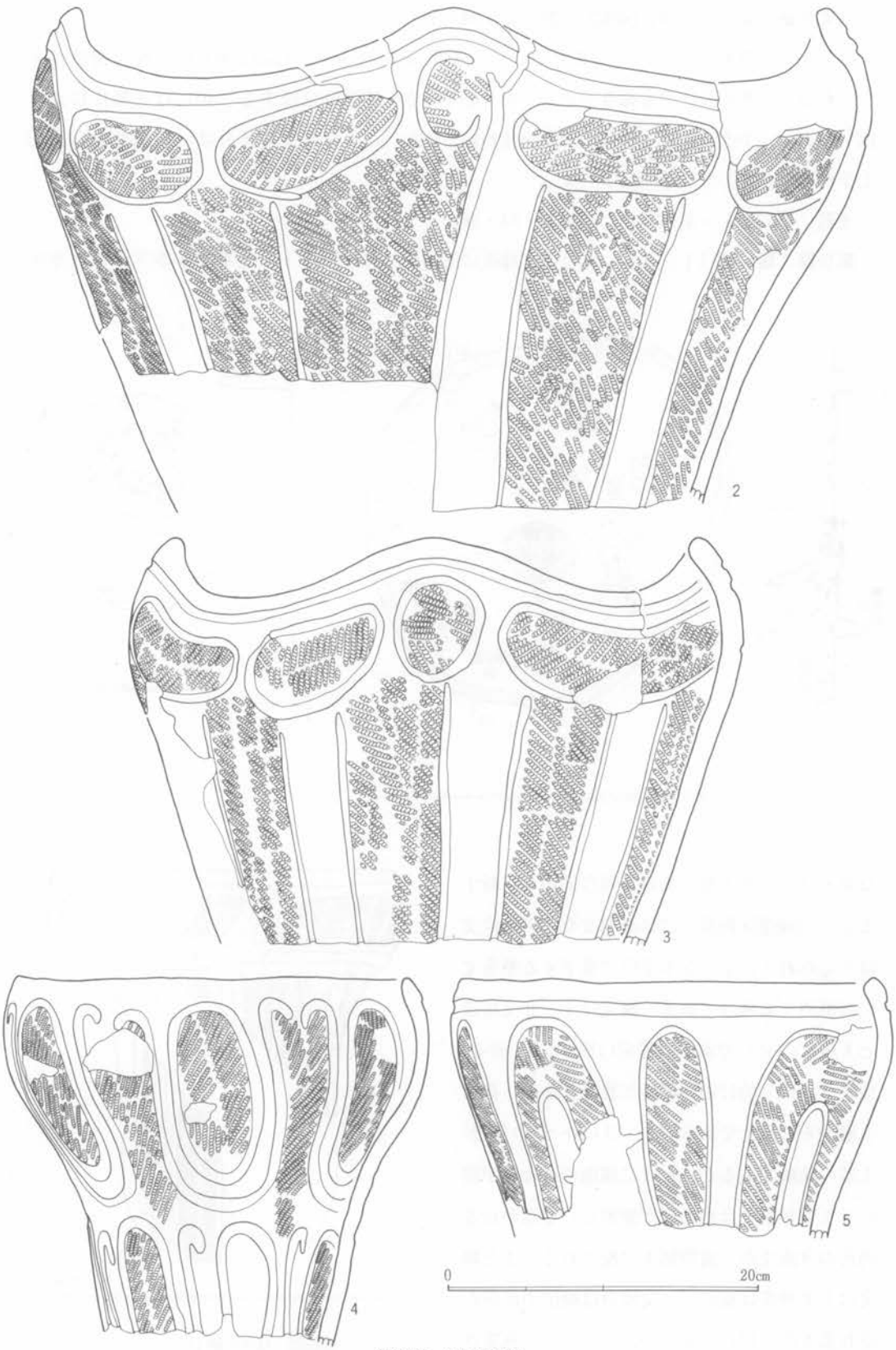
第Ⅲ群３類ｃ種（１～３）　１はＩ文様帯に区画文を有し、以下に懸垂文が垂下する典型的



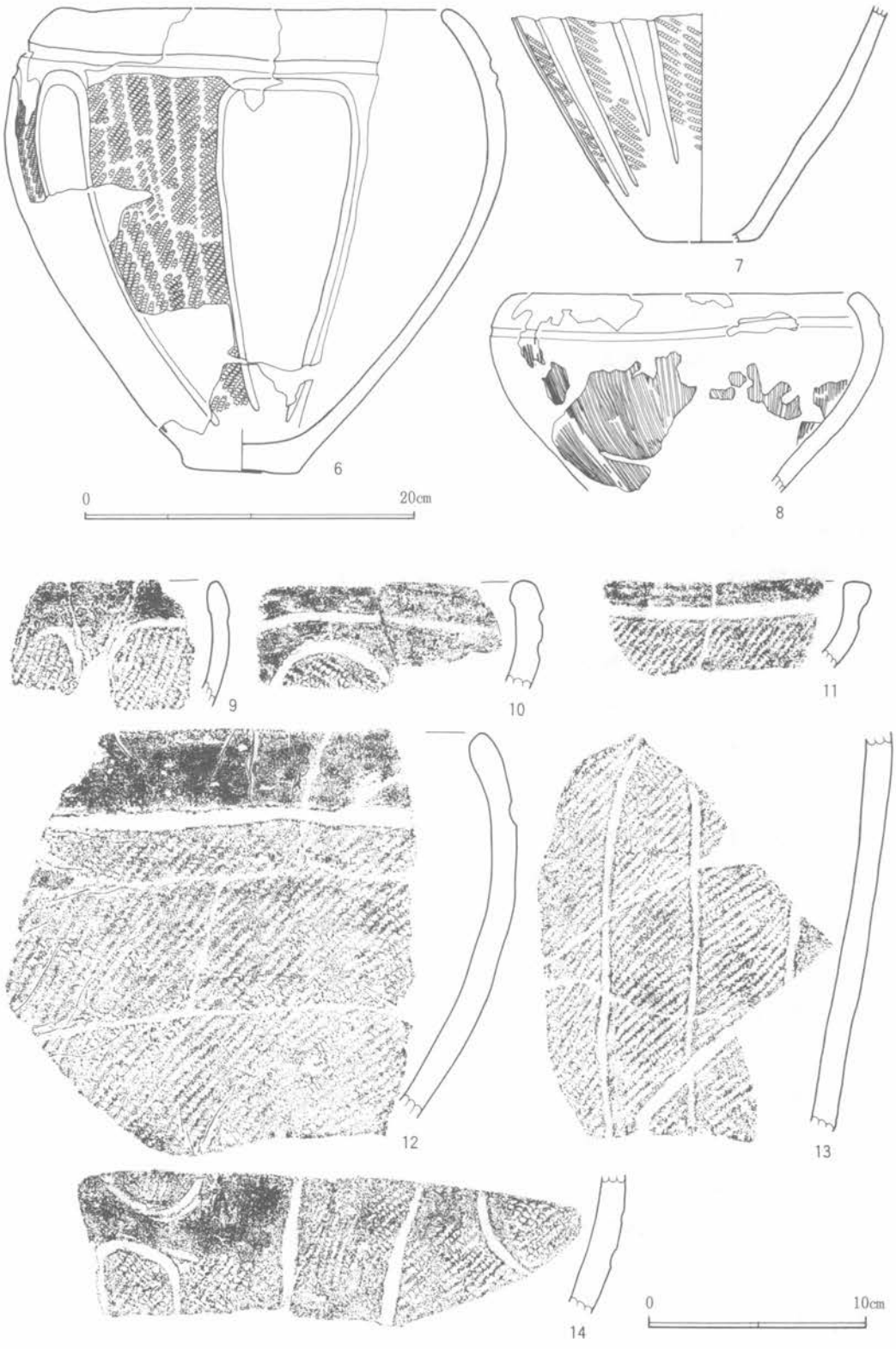
なキャリパー形土器である。残存部から判断すると、口縁部区画接点には渦巻文などの単位文はつくられず、２～３本単位で垂下する懸垂文には磨消が未発達である。縄文はⅠ・Ⅱ文様帯とも縦位のＲＬである。推定口径21.5cmを測る。他より型式学的に古い段階と思われるが、覆土上層からの出土である。２・３はキャリパー形土器の範疇であるが、ともに屈曲の度合いが弱い。Ⅰ文様帯では渦巻文が変容したと思われる円形の区画文が、波頂部下に配される。また縄文はⅠ文様帯は横位、Ⅱ文様帯は縦位の原則が崩れ基本的に縦位、部分的にランダムに施文さ



第62図　004号跡(1)



第63図　004号跡(2)



第64図　004号跡(3)

れる。2はこの円形区画文の一つから続く形で、Ⅱ文様帯の懸垂文を区画する沈線が垂下したり、懸垂文と地文の関係が不明瞭である点が看取される。部分的に縄文原体末端を閉じた痕跡が、認められる。口径は波頂部で48.3cm、現高31.5cmを測る。3はⅡ文様帯の懸垂文効果が、縄文地に移行しつつある様相を呈するとともに、図示しえなかった裏側1か所の懸垂文は、これを区画する沈線が上部で連結して弧状を呈す。口径は波頂部で33.5cm、現高25.0cmを測る。

第Ⅲ群3類d種（5・6・9・10）　5は沈線で口縁部無文帯を作出し、胴部以下には沈線で区画された楕円や逆U字状のモチーフが交互に配されるが、大木9a式の影響であろうか。口径26.5cmを測る。6は鉢で、幅広な沈線で口縁部無文帯を作出し、この区画沈線に接近して大柄な弧状沈線が描出され幅広な無文部をつくるが、懸垂文効果は縄文地に移行しつつある。推定口径23.3cmを測る。9は明確な区画がされない口縁部無文帯に、弧状を呈する懸垂文が貫入し、縄文地が懸垂文効果を有す。10は沈線で口縁部無文帯を作出し、おそらく弧状を呈すと思われる懸垂文が接する。

第Ⅲ群3類e種（13・14）　充填系の隆起線が沈線に置換されたもので、EⅢ式である。

第Ⅲ群3類j種（4）　基本的には横位連繋孤線文系であるが、上半部の孤線文先端は結合せず蕨手状であったり、無文部と縄文地との関係が判然としてない。さらに上半部では楕円区画文が、下半部では蕨手状沈線が孤線文間に配される。横位連繋孤線文系の古手でⅢ式古段階に比定されよう。口径25.0cmを測る。

第Ⅲ群3類l種（8・11・12）　いずれも沈線によって口縁部無文帯が作出される。8は以下に条線文が施され、推定口径20.7cmを測る鉢であろうか。他は縄文施文である。

第Ⅲ群3類n種（7）　磨消懸垂文が認められ、底径7.0cmを測る。

時期　1は型式学的には前段階の範疇と思われるが、他はEⅢ式古段階に比定できるもので、遺構の帰属時期とする。本遺跡中の遺構出土土器では最も良好な一括資料を提示する。

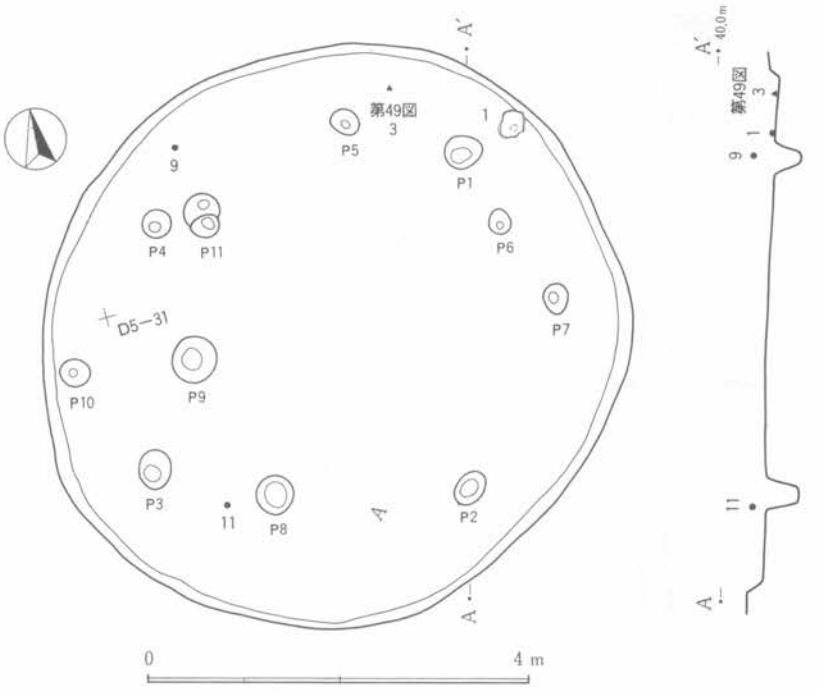
005号跡（第65・66図、図版25・34・37）

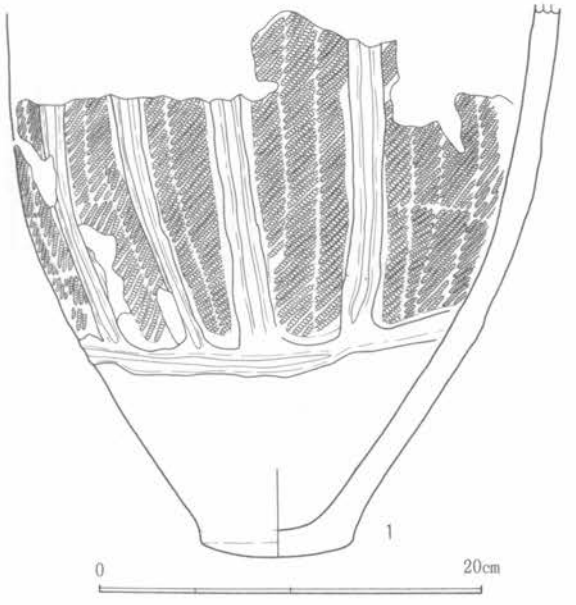
整った円形のプランが検出されていることから住居跡と認定した。ピットは17cm～40cmのものを11基確認した。みな浅いが、深さは比較的揃っている。土器は加曽利EⅢ式の大破片が数点見つかっており、この時期に属す可能性が高い。ただし、加曽利E末期の住居跡は炉を伴う例が多いことや、はっきりした床面が検出されたかどうかわからないことからやや疑問が残る。

1の大型の深鉢土器は、胴部中位から底部が北東の壁近くの床面に正立していた。遺構検出面のレベルからいって、本来は上部まで残っていたものかも知れない。

土器（第65図1～第66図13、図版34・37）

第Ⅲ群3類c種（8）　欠損上部にはⅠ文様帯の区画文が形成、以下の懸垂文は2～3本1単位の沈線で描出されると思われる。





第65図　005号跡(1)

第Ⅲ群３類ｄ種（９・10）　いずれも口縁部を欠損するが、残存部にＩ文様帯を区切る横位の沈線が認められ、これに接して連結した磨消懸垂文が垂下する。

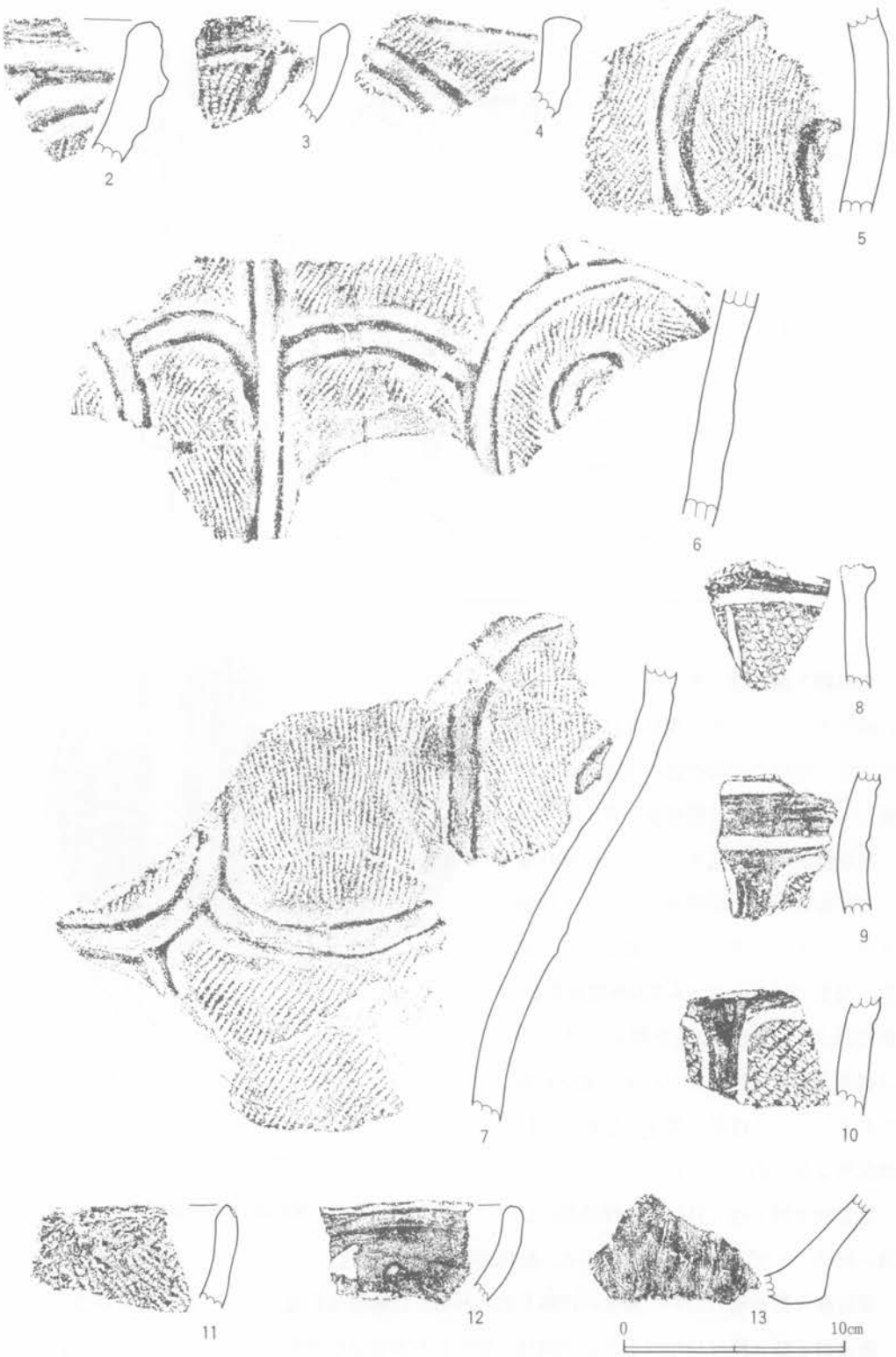
第Ⅲ群３類ｋ種（１～７）　いずれも２本隆起線で文様が描出される。１は胴部中位以下で、突出した底部をもつ。胴部下端まで縦長のパネル文が充填される。現高28.3㎝、底径8.0㎝を測る。２～７は渦巻文を主文様としたパネル文が充填される。４～７は同一個体と思われ、口縁部無文帯を形成しない。

第Ⅲ群３類ｌ種（11）　口縁端部には強い線状のナゾリが加えられている。縦位のＬが施される。

第Ⅲ群３類ｍ種（12）　無文の浅鉢と思われる。口縁端部が強くナデつけられている。

第Ⅲ群３類ｎ種（13）　１の底部同様に突出した不安定な底部であろう。

時期　８～10のような時期的には前段階のものを混入するが、床面に直立していた１、大形破片である４～７をはじめ、他は加曽利ＥⅢ式古段階に比定でき、遺構の帰属時期としたい。



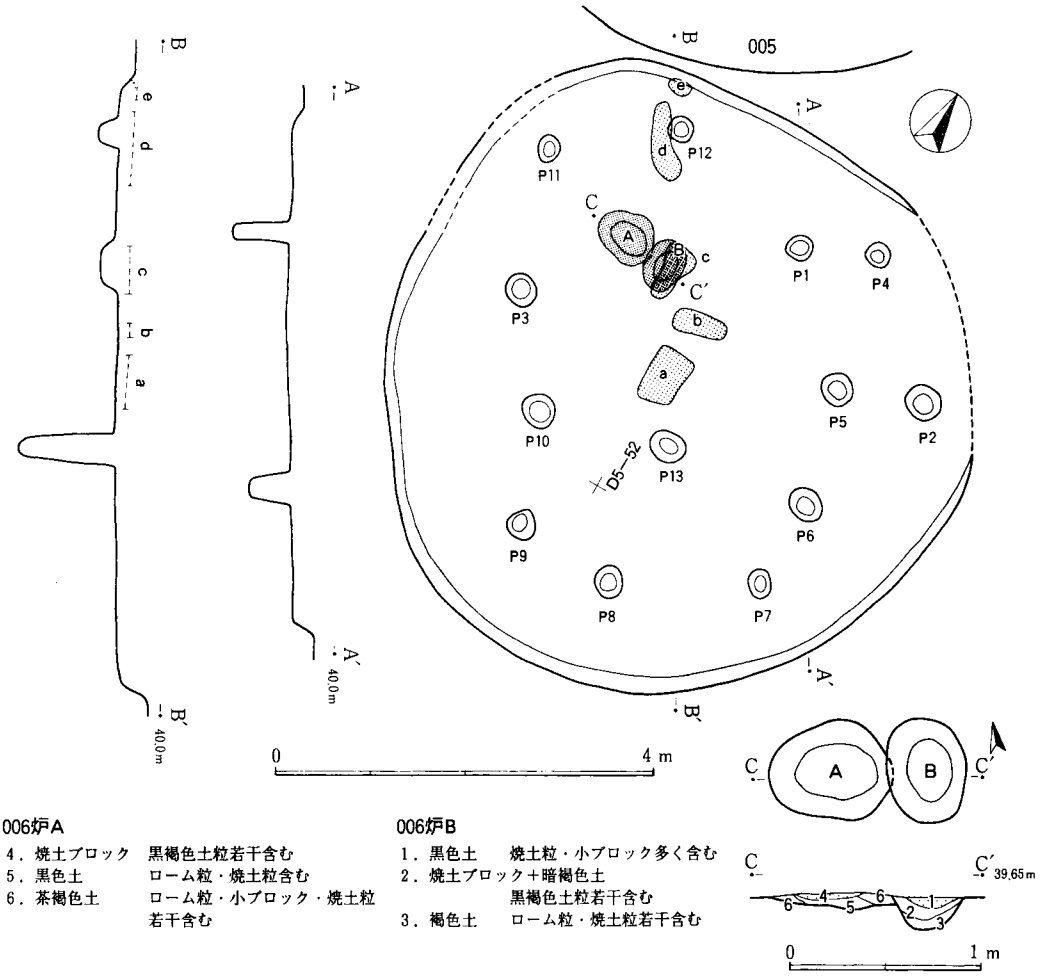
第66図　005号跡(2)

００６号跡（第67・68図、図版25・38）

炉に切り合いがみられることから、住居跡が重複していると考えられる。ピットは13基検出したが、柱穴の並びはランダムで、構造は不明である。２基の炉は、プランからすればかなり北西に片寄った位置にある。いずれも焼け面は床面レベルにあり、立ち上がりの部分は焼けていないことから、炉囲いが設けられていた可能性が高い。

また、覆土中には小さな貝層が５ブロック入っていたため、ブロックごとにすべてサンプリングして、採取された全量約18.5リットルの内容を調べた。５つの貝層は接近しており、ほぼ同レベルに堆積していたようなので、本来は連続した層であった可能性も考えられる。ただし、貝サンプルの集計結果を見ると、少なくとも２層以上の堆積によることがうかがえる。すなわち、ａブロックとｂはハマグリ主体であり、ｄ・ｅではイボキサゴを主体とすることである。ちなみに、ｃは両者の中間的な傾向を示している。

なお、貝サンプルの分析結果については、第２章第５節に記載した。



006炉A

4．焼土ブロック　黒褐色土粒若干含む
5．黒色土　ローム粒・焼土粒含む
6．茶褐色土　ローム粒・小ブロック・焼土粒若干含む

006炉B

1．黒色土　焼土粒・小ブロック多く含む
2．焼土ブロック＋暗褐色土　黒褐色土粒若干含む
3．褐色土　ローム粒・焼土粒若干含む

第67図　006号跡(1)

土器（第68図１～９、図版38）

第Ⅲ群３類ｂ種（２）　２本１組の沈線が懸垂文となろう。

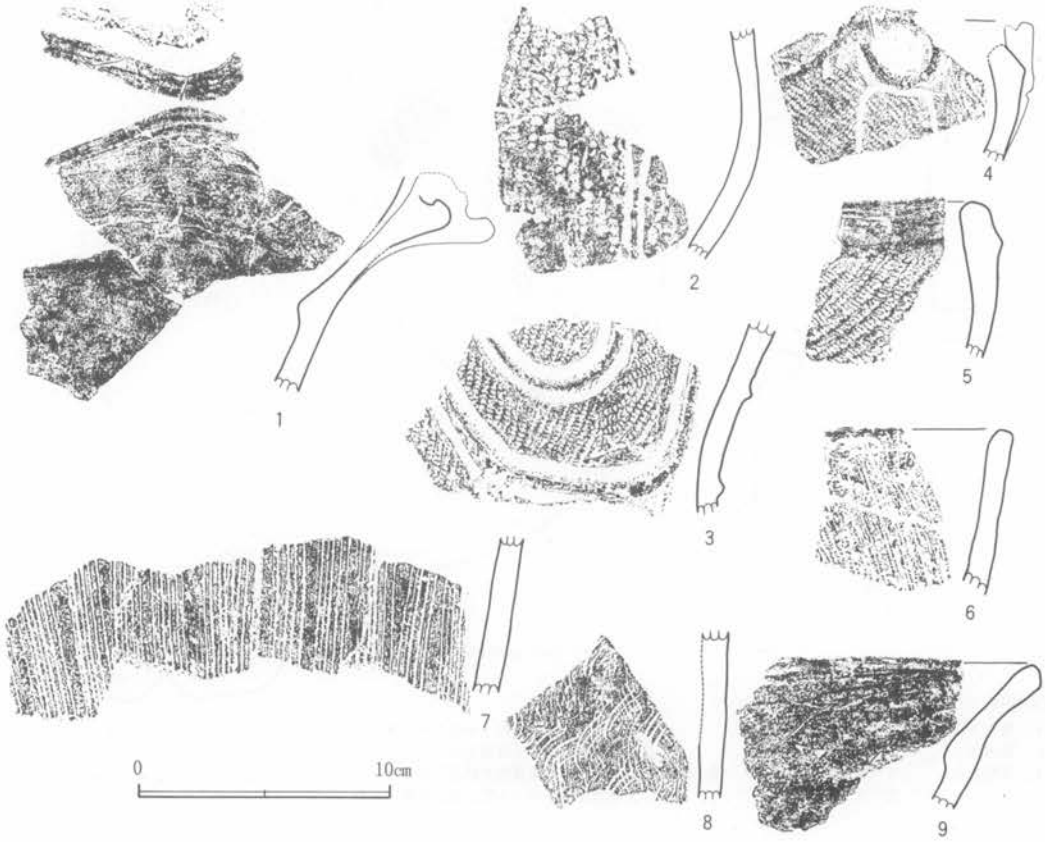
第Ⅲ群３類ｅ種（４）　口縁部無文帯作出の隆起線が両側から上がって波頂部をつくるが、この部分は叉状を意識した隆起線となる。これに付着して充填系的な孤線文が沈線で描出される。

第Ⅲ群３類ｋ種（３）　１本隆起線で描出される渦巻文を主文様として、パネル文が充填されよう。隆起線の両側のナゾリは、沈線化した明瞭なものである。

第Ⅲ群３類ｌ種（５～８）　５は口縁部無文帯作出の隆起線下端に接して、縄文が施される。６は口縁部無文帯を作出するような浅い沈線を横位に引き、以下は斜位の条線文が施される。７は縦位に６本１単位の条線文が、若干の間隔をおいて施される。８は支点をずらしながら波状に描出した条線文が、重ねて施文される。

第Ⅲ群３類ｍ種（１・９）　いずれも内面の口縁部下に稜を有する。１は内外面とも横方向のミガキが丁寧で、口縁端部沈線が波頂部で渦巻文を描出する。

時期　出土遺物はすべて遺構一括であり、また資料的にはやや零細である。しかし２を混入と考え、他から遺構帰属時期の可能性を加曽利ＥⅢ式古段階としておきたい。



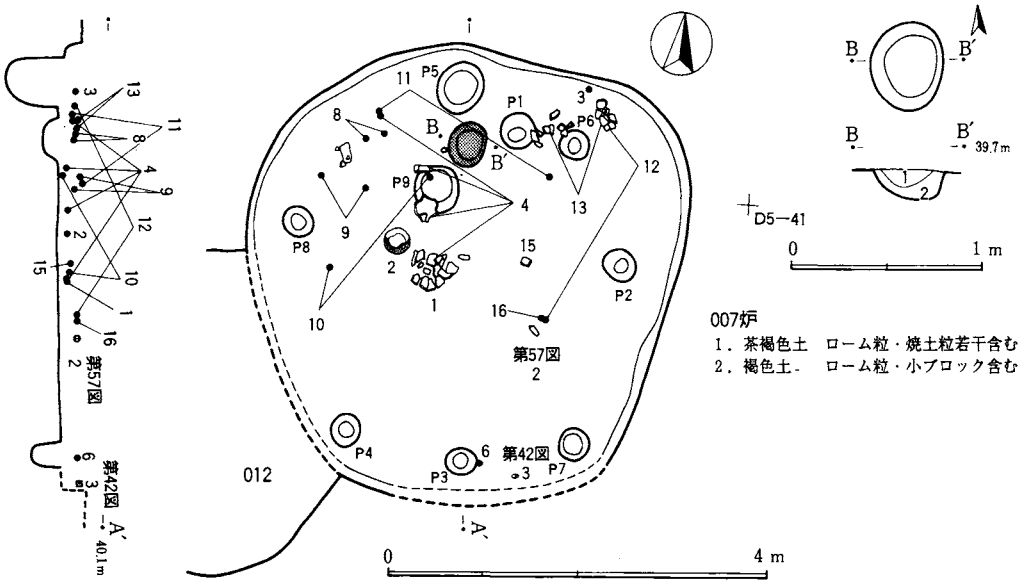
第68図　006号跡(2)

００７号跡（第69・70・71図、図版26・34・35・39）

プランは五角形に近く、やや張り出した部分に位置するＰ６・Ｐ７・Ｐ４・Ｐ８・Ｐ５と、Ｐ２・Ｐ３が主柱穴となろうか。いずれも、かなり壁に接近している。012号跡と重復する部分には、図示したほかに２基のピットがあったが、本遺構の掘り込みの下場にかかる位置にあり、他のピットが壁に接していないことから、012号跡に伴うと判断した。炉は、極端に北側に片寄っており、主柱穴と見られるP5に接近している。構造は不明確だが、囲いの施設のある炉にみられる、掘り込みの立ち上がりが焼けていないタイプであるかもしれない。

012号跡との新旧関係については、遺構確認時の観察から、本住居跡の方が新しいと判断した。012号跡は時期の判る土器が皆無であったので、遺物からは検証されていない。

覆土からは多量の土器が発見された。みな床面から15～20cm浮いている。（図でやや低い位置になっている２点は、Ｐ９の上に位置するので、堆積後に沈んだものと思われる。）したがって、住居廃絶後、若干の土が堆積した後に土器が廃棄されたと考えられる。



第69図　007号跡(1)

土器（第70図１～第71図16、図版34・35・39）

第Ⅲ群３類ｃ種（５～７）　５のＩ文様帯区画文は残存部から推定すると、沈線表出の渦巻と楕円の組み合わせが流れ気味である。また、縄文の施文方向は口縁部で横位、以下では縦位となろう。Ｉ文様帯の状況とキャリパーの度合いのゆるやかさから、加曽利ＥⅢ式であろう。６・７は僅かな残存部から判断すると、沈線表出の渦巻文が単位文となるかも知れない。

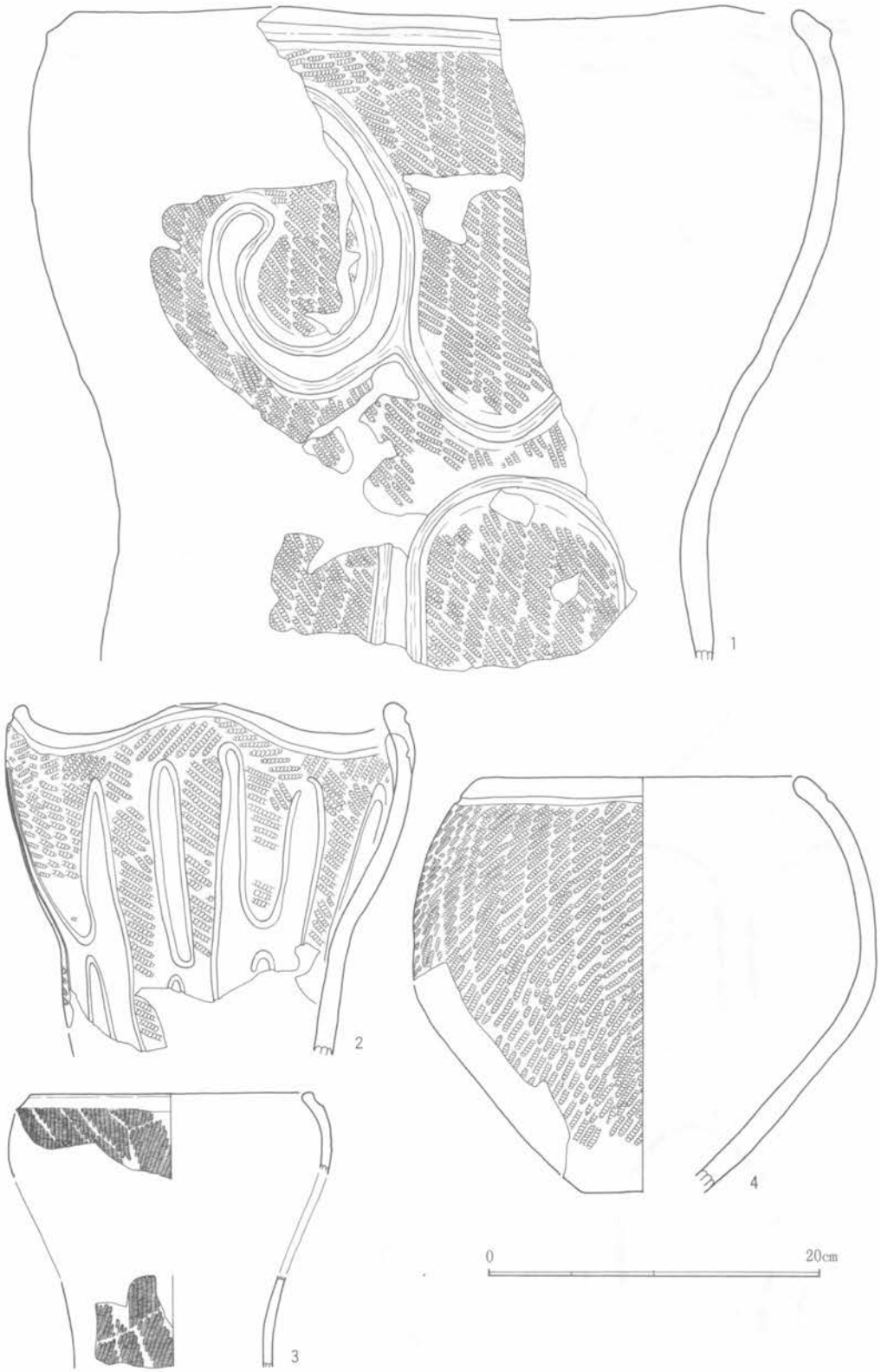
第Ⅲ群３類ｅ種（13）　胴部中位の括れ付近の破片で、縄文地に１本あるいは２本対の沈線で充填系的な孤線文を描出する。２本対の間は無文となる。

第Ⅲ群3類j種（2）　Ⅰ文様帯として沈線作出の狭小な無文帯を有し、Ⅱ文様帯は基本的には入組状となった横位連繋孤線文と近似関係にあるモチーフとなる。無文の帯状部の先端は、Ⅰ文様帯に付着しない。これは加曽利ＥⅡ式のキャリパー形土器胴部の縄文部のうち、上下に2分割されるものから生成されると考えられている。これに加えて本例は一つ置きに上下2分割される間の縄文地に、胴部の上下に対向する細長い楕円形モチーフが配される。縄文は区画沈線下では横位あるいは斜位、以下では縦位のＬＲが施される。床面からやや浮いた位置で逆位で検出されていることが起因しようか、胴部下半から欠損する。口径は4単位となる波頂部で22.5cm、現高は21.0cmをそれぞれ測る。以上述べた諸特徴から、本土器は加曽利ＥⅢ式古段階と考えられる。

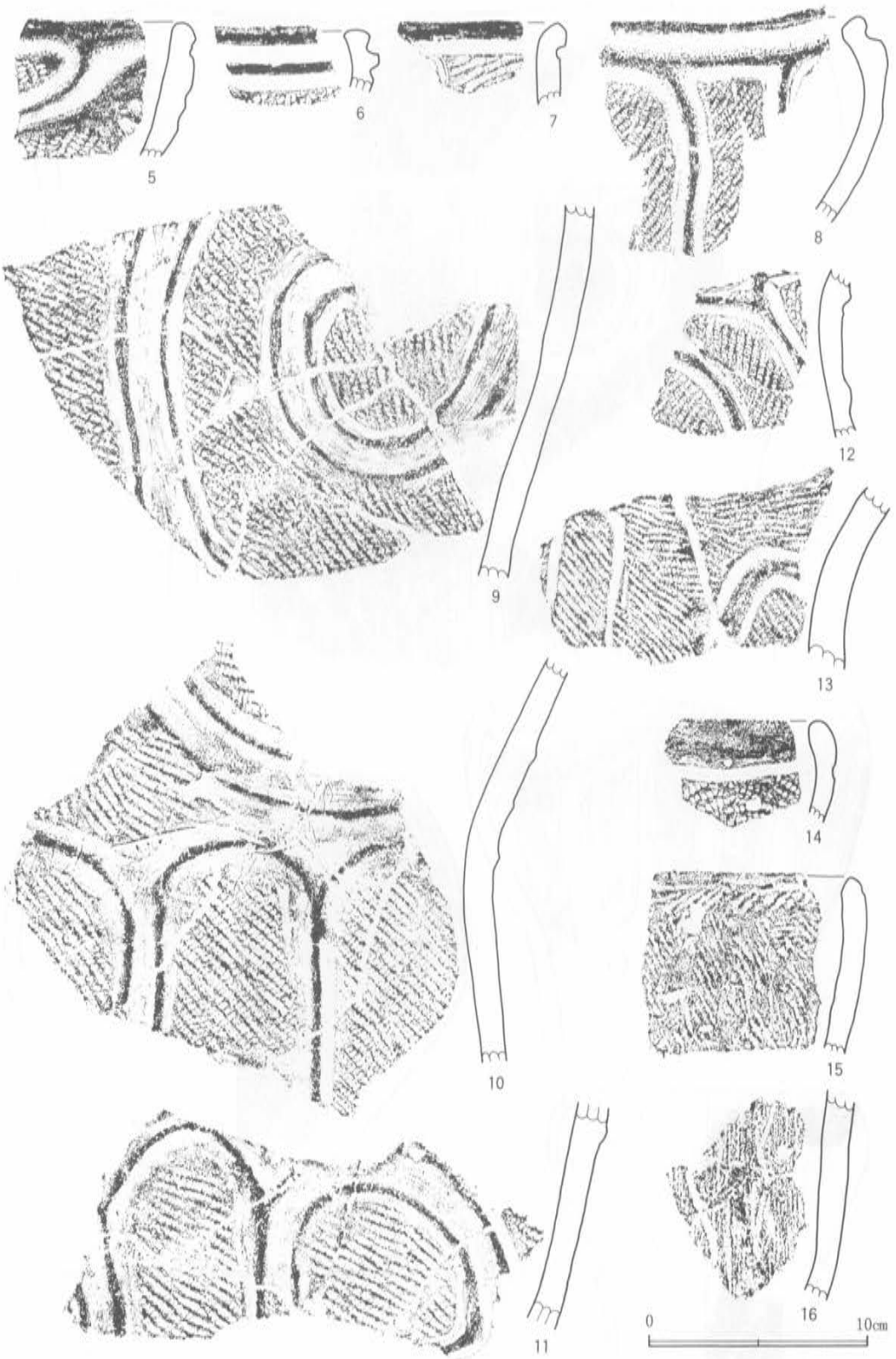
第Ⅲ群3類k種（1・8～12）　1はⅠ文様帯として隆起線作出の狭小な無文帯を有し、現存部から推察すれば主文様に渦巻文を配した充填系の土器で、口縁部から胴部下半にかけての大形破片である。モチーフを形成する隆起線は、渦巻文と下半の懸垂文が2本対になって無文の帯状部を作出する他は、1本である。1本では両側、2本対では外縁に沿ってナゾリが認められるが、半ば沈線化している。パネル化した図形の充填は、ややラフな感じを与える。縄文はＬＲが、一部を除き縦位に施される。推定口径43.7cm、現高39.0cmを測る。10は同一個体と思われる。8はおそらくⅡ文様帯に渦巻文を主文様として、1本隆起線でパネル化した図形が充填されると思われる。隆起線のナゾリは明瞭で、沈線化している。9は胴部上半で、2本対の隆起線で文様が充填されると思われるが、主文様としては渦巻文が配される。隆起線のナゾリは顕著であるが、沈線化する部分とそうでない部分が認められる。11は胴部下半で、2本対の隆起線で文様が充填されるが、おそらく主文様として渦巻文が配されよう。胎土や焼成、器厚から1・8と同一個体である可能性がある。12も括れ以下の胴部下半で、1本隆起線でパネル化した図形が充填されようが、11同様に主文様として胴部下半にも渦巻文が配されよう。隆起線両側のナゾリは、明瞭で沈線化している。以上、本種は加曽利ＥⅢ式古段階に位置づけられよう。

第Ⅲ群3類l種（3・4・14～16）　3は口縁部から胴部の一部と、胴部下半より器形が推定される。内傾する口縁部に段が付いて、これより上部に無文帯をつくり、胴部には括れを有すと思われる。縄文は斜位または縦位にＲが施される。推定口径15.3cmを測る。4は口縁部が内湾し、胴部中位に最大径をもつ器形で、広口だが壷形を呈するといえよう。Ⅰ文様帯として沈線作出の狭小な無文帯を有し、胴部には縦位のＲＬが施され、底部は欠損する。推定口径19.0cm、推定最大径27.9cm、現高25.0cmを測る。14は口縁部が内湾し、やや幅広な沈線で無文帯が作出される。15は浅い沈線で狭小な無文帯が作出され、直下では横位、それ以下では縦位のＬが施される。16は胴部下半で、縦位の条線文を施した後に波状沈線を垂下する。

時期　出土土器はj種やk種をはじめとして一括性が高いので、加曽利ＥⅢ式古段階とする。



第70図　007号跡(2)



第71図　007号跡(3)

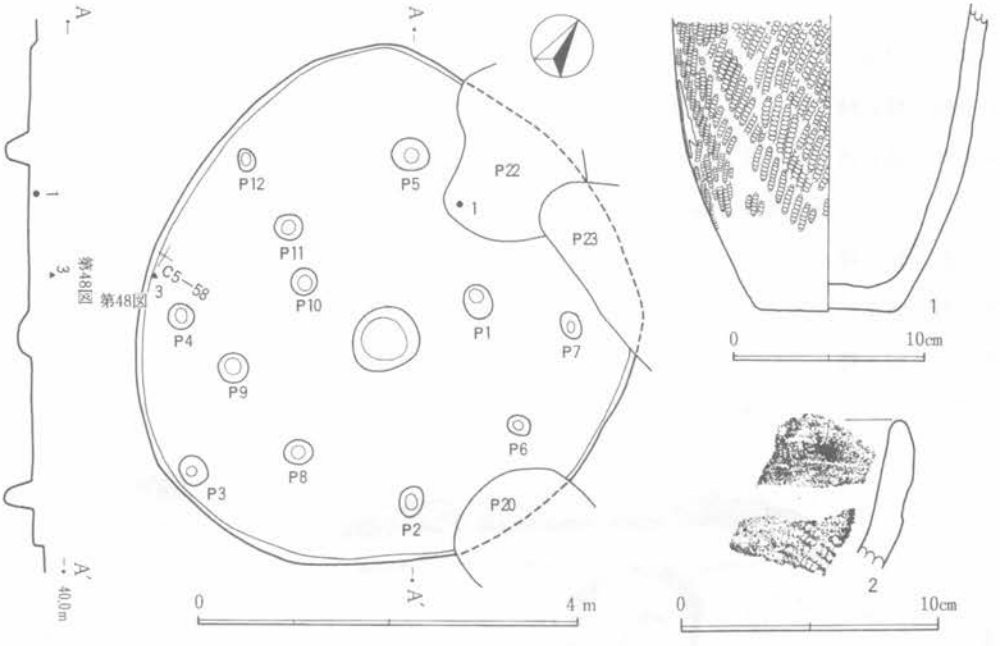
００８号跡（第72図、図版26・35・40）

円形に近いプランとほぼ平坦な底面から住居跡と認定した。中央に径70cm深さ14cmのすり鉢状の窪みがあり、炉の可能性があるが、焼土は無く、調査者も「炉ではない」としている。ピットは推定床面から10～30cmのものが12基記録されている。柱穴かどうかはわからない。北東部の壁と重複した不整形の落ち込みは、形状や遺物の出土状況から遺構ではないと判断したものである。１の土器はこの一部にかかっており、住居跡と落ち込みの新旧は明確でないため帰属は微妙である。一応住居跡に関連する可能性が高いものとして報告する。

土器（第72図、図版35・40）

第Ⅲ群３類Ⅰ種（１・２）　１は胴部中位以下で、底部付近を除きＲＬがやや斜位に施される。底径7.0cm、現高15.0cmを測る。２は繰り返し引かれたため幅広くなった沈線で無文帯が作出される。内面端部は平坦なつくりとなる。

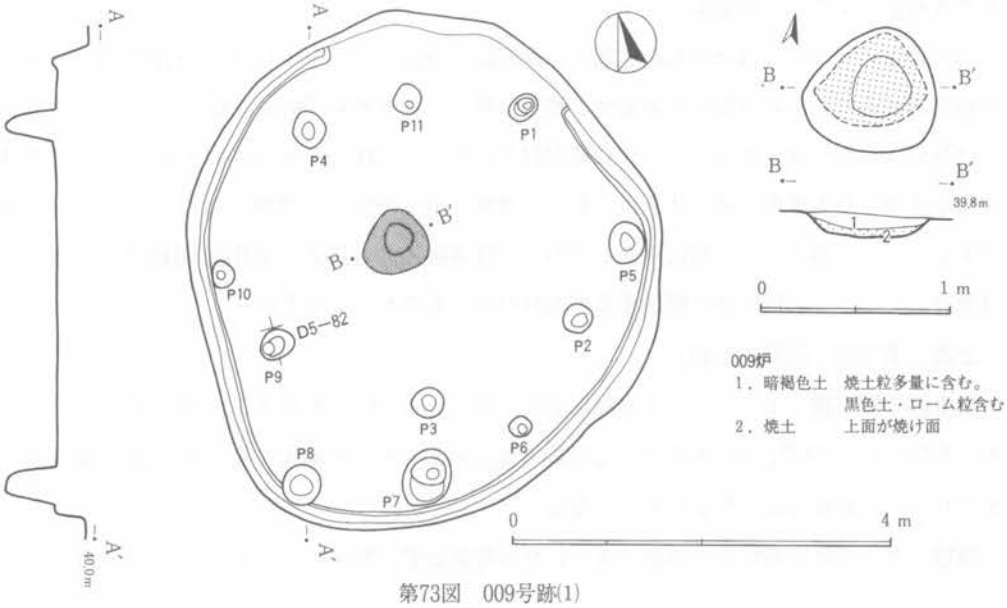
時期　出土遺物が零細かつ特徴に乏しいため特定せず、加曽利Ｅ式後半期としておく。



第72図　008号跡

００９号跡（第73・74図、図版27・40）

ややいびつな円形プランで、一部を除いて浅い壁溝が巡っている。出土遺物は破片が少量のみである。ピットは壁近くにほぼ等間隔に７基、やや壁から離れた位置に２基（Ｐ３・Ｐ９）ある。いずれも床面から50cm以上と深く、掘り込みは垂直なので、柱穴であろう。Ｐ６とＰ11については20cmほどのごく浅いもので、柱穴でない可能性もある。炉の位置からみて南側の壁が張り出しており、Ｐ７・Ｐ８は出入口の施設かもしれない。炉はほぼ中央にあり、２層の上面が焼け面である。立ち上がりの部分が焼けていないことから、炉体があった可能性も考えられる。



第73図　009号跡(1)

土器（第74図１～６、図版40）

第Ⅲ群３類ｃ種（１）　口縁端部が強く外反し、以下にＩ文様帯を形成する鉢である。

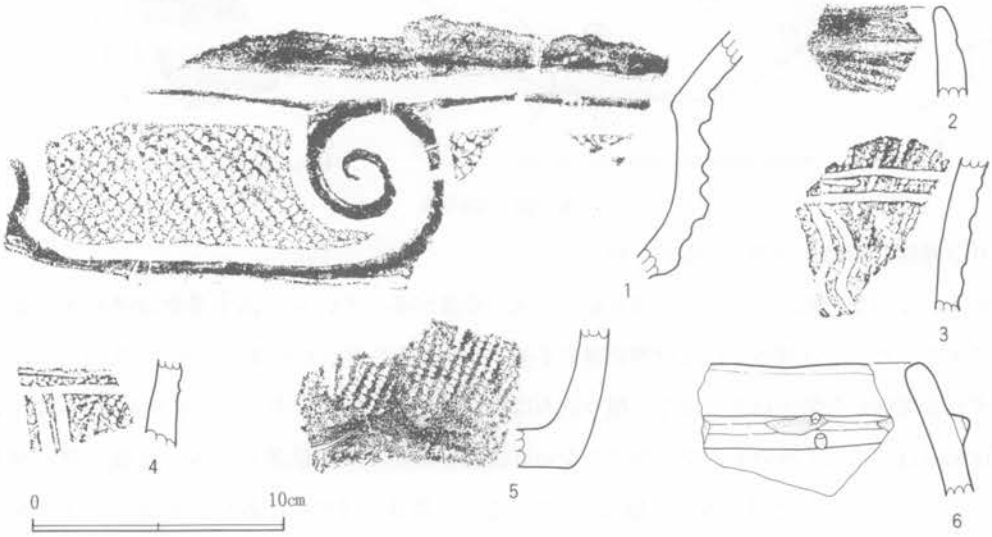
第Ⅲ群３類ｈ種（３・４）　いずれも胴部あるいは口縁部下を横に区切る沈線下に接して、２～３本単位の波状沈線や沈線が垂下する。３は中峠式、４は加曽利ＥＩ式であろう。

第Ⅲ群３類ｌ種（２）　沈線で無文帯は作出され、内面端部は平坦である。ＥⅣ式である。

第Ⅲ群３類ｍ種（６）　ＥⅢ式以降の有孔鍔付土器であろう。２同様本遺構では最も新しい。

第Ⅲ群３類ｎ種（５）　底部付近まで縦位のＲＬが施文される。

時期　出土資料からは決め手に欠けるが、住居形態から１の土器のＥⅡ式を考えておきたい。

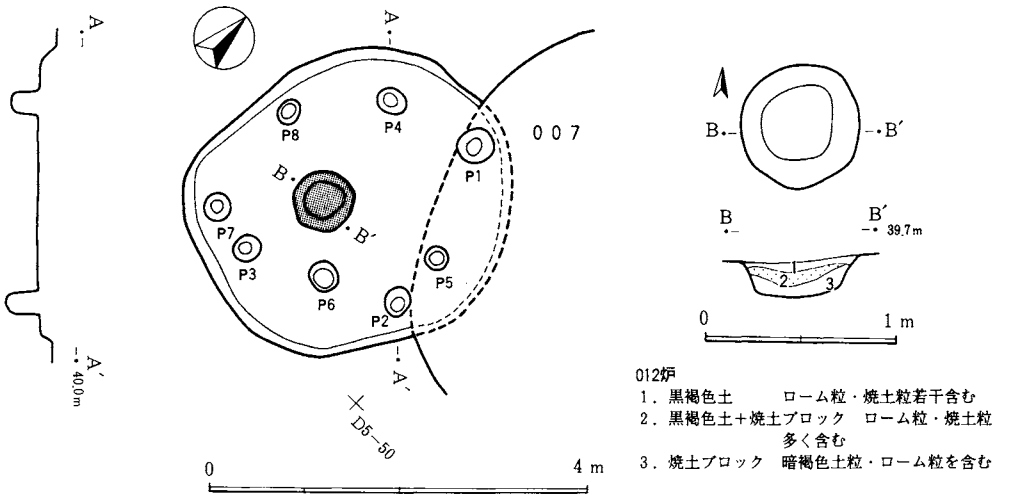


第74図　009号跡(2)

０１２号跡（第75図、図版26）

円形に近い小型の住居跡である。主柱穴構造であろうか。中央近くに比較的掘り込みの深い炉がある。深い位置に焼け面があり、立ち上がりが焼けていないのは炉体があったからかもしれない。

時期　遺構にともなう土器は皆無であるが、形態から加曽利Ｅ式期の住居跡の可能性が高い。



第75図　012号跡

０１３Ａ号跡（第76・77図、図版27・35・40）

楕円形の住居跡。Ｐ1－Ｐ2－Ｐ9－Ｐ3－Ｐ4（またはＰ13）は主柱穴であろうか。１は、床面近くに倒立していた深鉢の口縁部～胴部上半である。若干床面にくい込んで出土した。①頸部の下で比較的直線的に割れていて、以下の破片が見つからないこと②炉内から小破片が１点見つかったこと、の２点から炉体として使われていたものと思われる。一方、炉は壁が焼けていないことから、炉体を伴っていたと考えられ、１の土器が炉体であった可能性がある。

土器（第76図１～第77図９、図版35・40）

第Ⅲ群３類ｃ種（１）　渦巻文を主文様とし、楕円区画文と組み合わせが６単位となってＩ文様帯を形成するが、このうち交互にくる３単位は渦巻文間を横Ｓ字の隆起線が繋ぐ。Ⅱ文様帯には３本１単位の沈線が懸垂する。縄文はLRLでＩ文様帯では横位に何度も重ねて施文しているので、表現しにくい。単位のわかった分を図示した。口径44.0cm、現高22.5cmを測る。

第Ⅲ群３類ｄ種（５）　口縁端部に無文帯を設け以下より縄文が施され、沈線が垂下する。

第Ⅲ群３類ｈ種（３・４・６～８）　３・４にはそれぞれ文様帯境界の横位の隆起線、列点文が認められる。６～８は狭小な磨消を伴った複数（３本）１単位の懸垂文が認められよう。

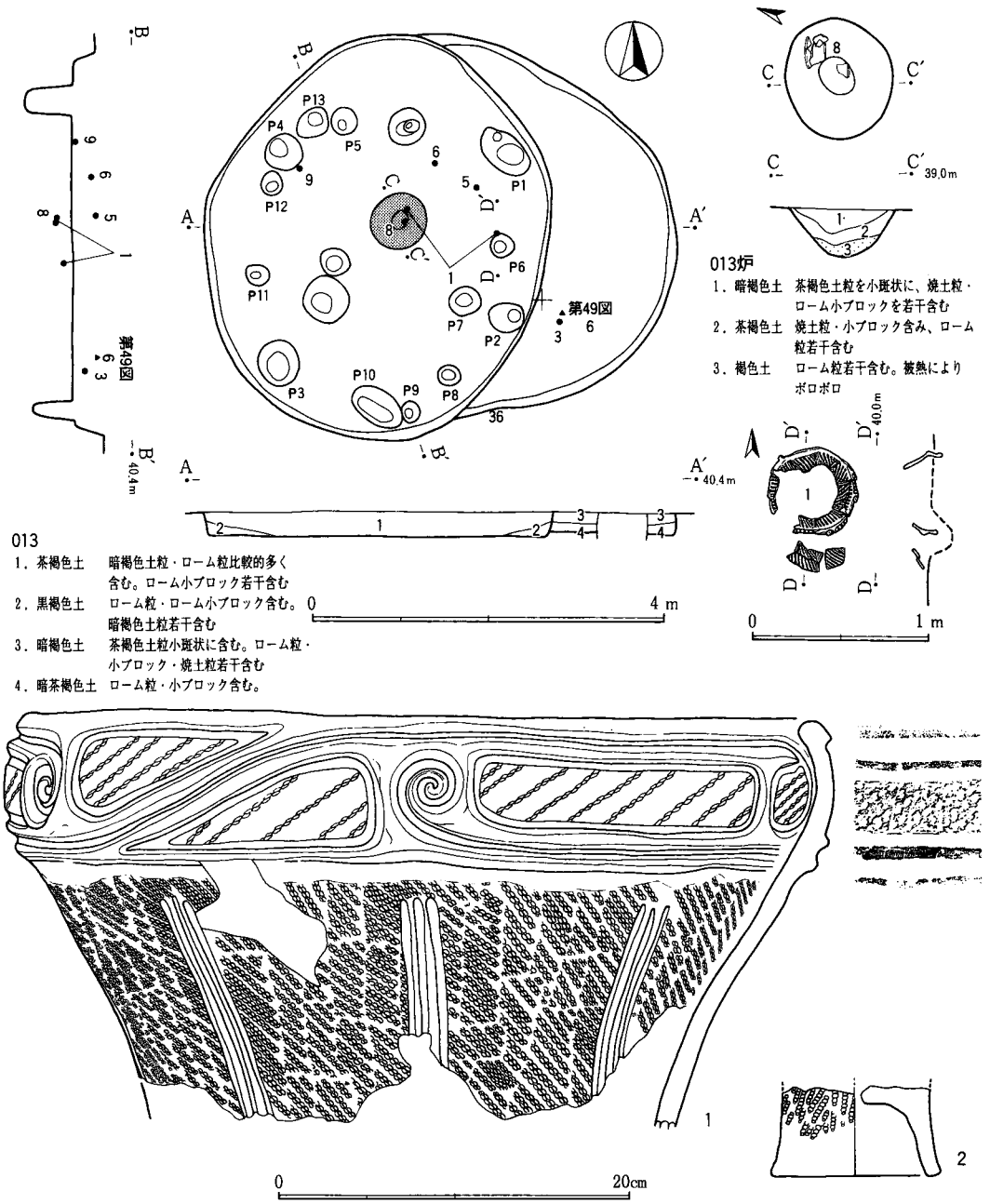
第Ⅲ群３類ｎ種（２・９）　２は脚付きの底部で底径8.5cmを測る。９は底径14.7cmを測る。

時期　炉体の可能性のある１をはじめ、一括性が認められるので、加曽利ＥⅡ式期としたい。

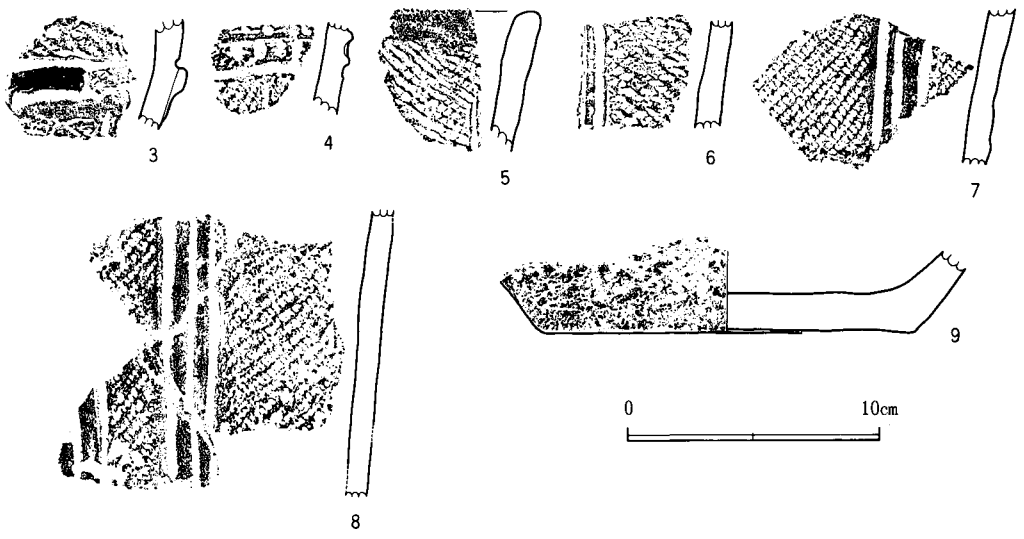
０１３Ｂ号跡（第76図）

楕円形のプランが確認されており、形状・規模から住居跡の可能性がある。013Ａに切られている。柱穴は、013Ａの範囲内のいくつかが該当するかも知れないが、不明である。土器は、阿玉台式土器の小片が１点出土しているのみである。

時期　出土遺物、遺構形態いずれからも、帰属時期を決めることはできない。



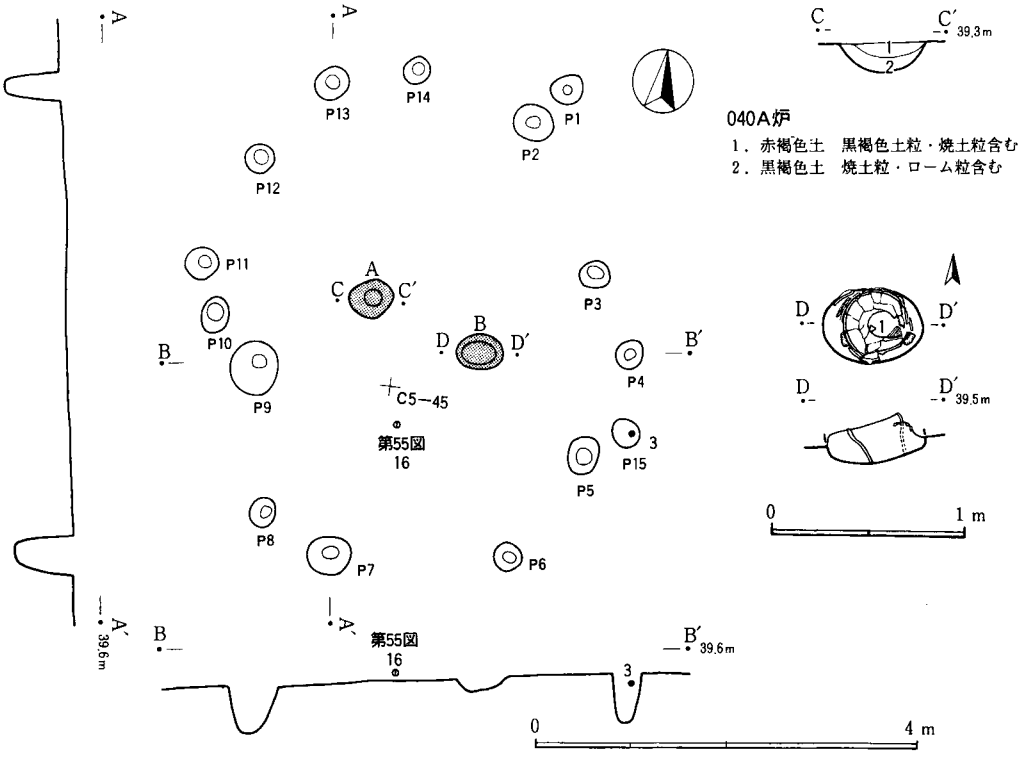
第76図　013A・B号跡(1)



第77図　013A号跡(2)

０４０号跡（第78・79・80図、図版28・35・41）

炉２基とピット14基を検出した。2軒の住居跡の重複と思われる。炉Aは、焼土の堆積が見られず、構造不明確。炉Bは、炉体土器を伴い、口縁部が床面の上に出ているので、こちらの炉の方が新しいであろう。ピットはP3・P6・P12・P14が30cm未満で、他は50～80cmを測る。



第78図　040号跡(1)

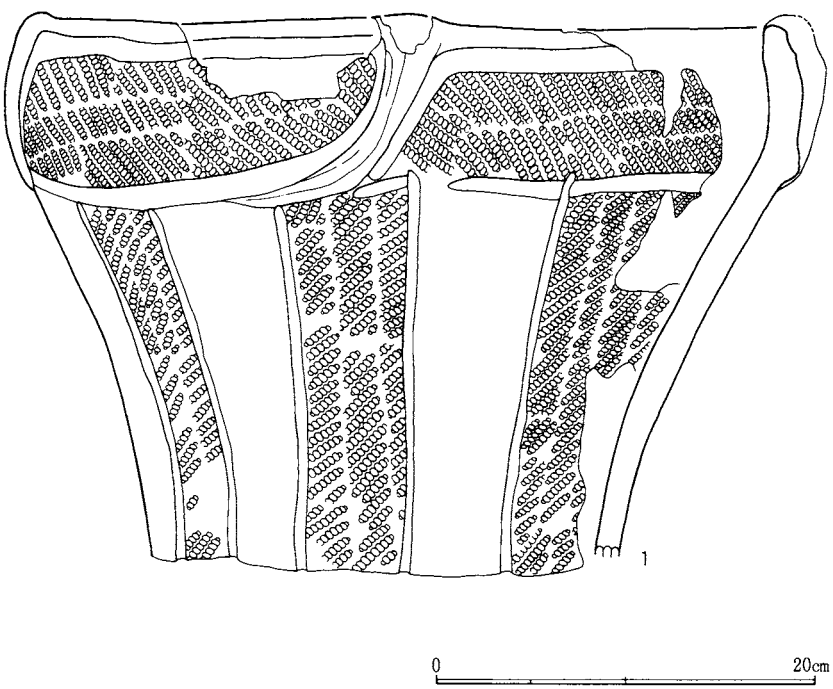
土器（第79図１～第80図６、図版35・41）

第Ⅲ群３類ｃ種（１～３）　１は炉Ｂの炉体として使われていたものである。Ⅰ文様帯として上下を幅広な沈線で区切るが、沈線間を４単位の小突起より片だすき状に隆起線が垂下し、同単位の枠状区画が形成される。Ⅱ文様帯は沈線で区画される無文の帯状部が幅広になり、懸垂文効果が縄文部に移行しつつある。器形は、内面でみると徐々に平坦化し、キャリパーの度合いがゆるやかになるようである。口径27.3cm、現高20.0cmを測る。２は１同様にⅠ文様帯に隆起線による枠状区画を形成すると思われるが、区画内は沈線によって円・楕円などの閉じた図形が描かれよう。残存部でみる限り、Ⅰ文様帯はキャリパー形の湾曲があると思われる。３は微隆起線で区画が形成されよう。薄手で精緻なつくりである。

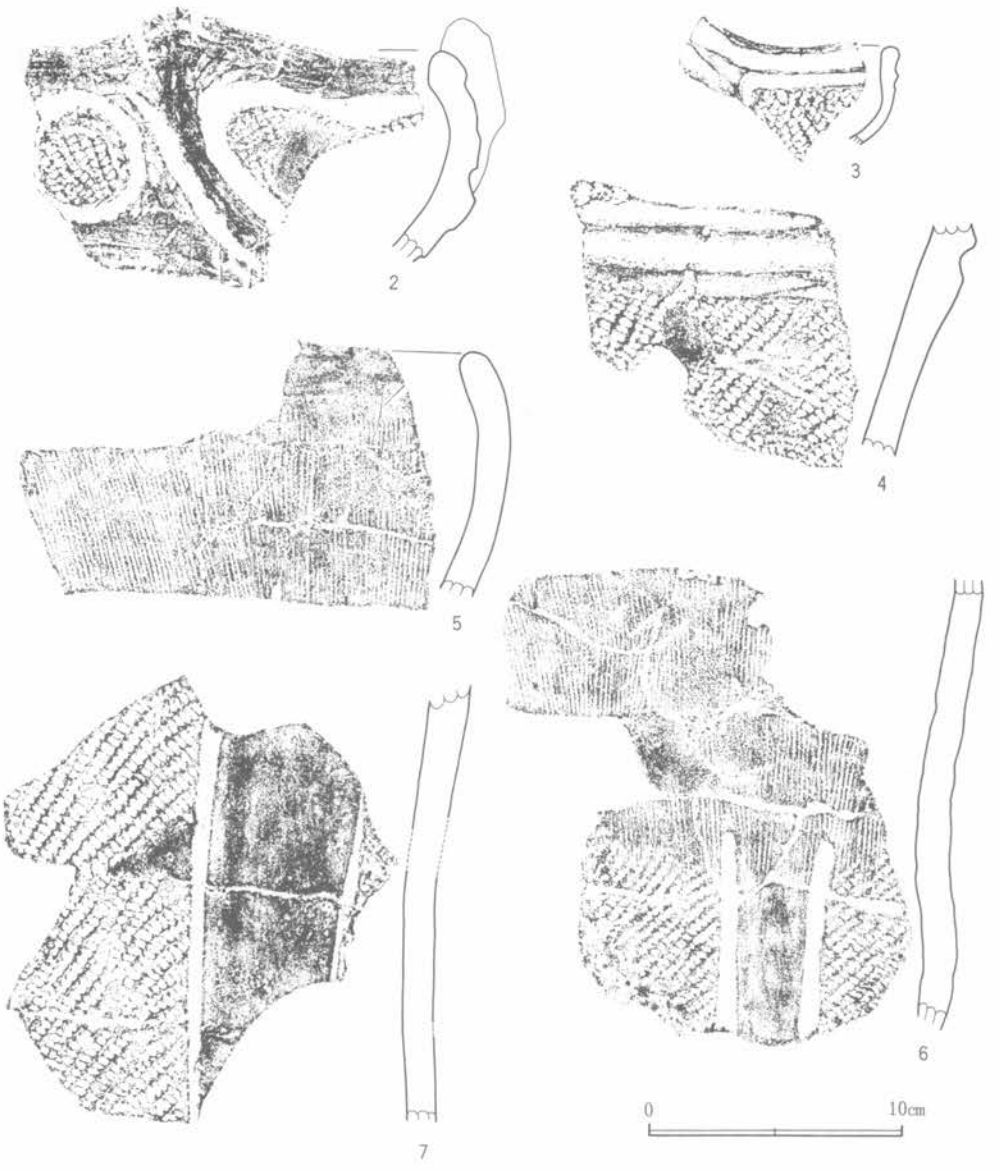
第Ⅲ群３類ｇ種（５・６）　同一個体である。口縁部は内湾する器形で、西関東系の影響であろうか、Ⅰ文様帯には全面的に条線文が施される。Ⅱ文様帯には縄文地の上に、深く引かれた沈線で区画された、やや幅広な無文の帯状部が垂下する。この無文の帯状部はⅠ文様帯に貫入している。

第Ⅲ群３類ｈ種（４・７）　４は口縁部を欠損するがキャリパー形土器で、Ⅰ・Ⅱ文様帯の境界が平坦なつくりとなる。７はキャリパー形土器の胴部で、沈線区画による無文の帯状部が拡大し、懸垂文効果が縄文地に移行しつつあると思われる。

時期　炉体をはじめ全体的な土器様相から、加曽利ＥⅢ式古段階と考えられる。



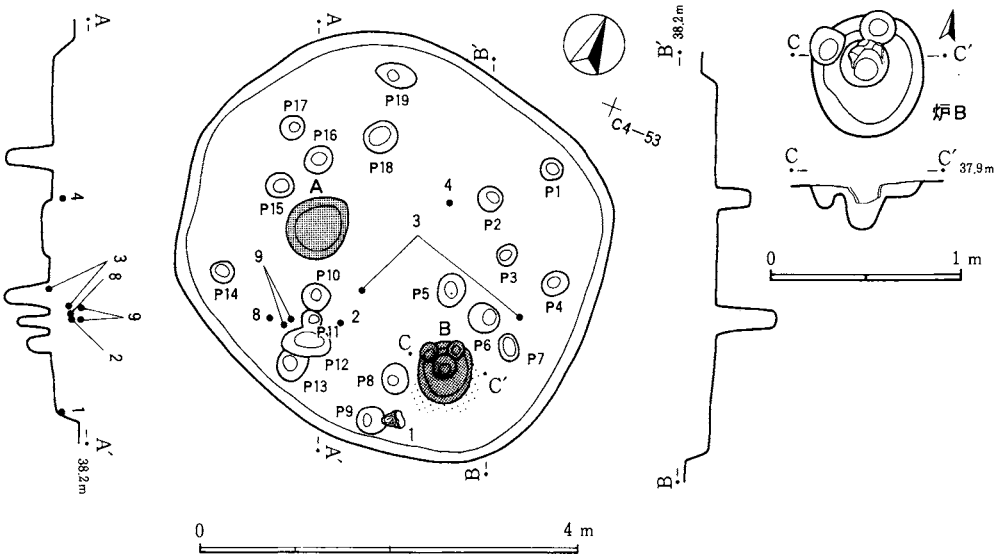
第79図　040号跡(2)



第80図　040号跡(3)

０４２号跡（第81・82図、図版28・35・41）

略円形のプラン中に、21基のピットと2基の炉を検出した。炉Ｂの焼土が床面に拡散し、炉体土器が床面より上に出ないことから、炉Ｂ→炉Ａの順が考えられる。炉Ａは焼け面の記録を欠くが、床面に近いレベルだったようである。炉Ｂの炉体はキャリパー形の深鉢胴部で、磨滅が著しいため図示しなかった。ピットの深さは不揃いで、Ｐ２・Ｐ５・Ｐ６・Ｐ７・Ｐ８・Ｐ10・Ｐ16・Ｐ19が40㎝以上を測る。Ｐ２・Ｐ６・Ｐ10・Ｐ16はほぼ長方形に位置しており、炉Ａに伴う主柱穴かもしれない。一方、10㎝ほどのＰ１・Ｐ17・Ｐ21や、15～20㎝のＰ４・Ｐ13・Ｐ15・Ｐ18・Ｐ20は柱穴かどうか疑わしい。１はほぼ完形で、壁近くの床面出土。



第81図　042号跡(1)

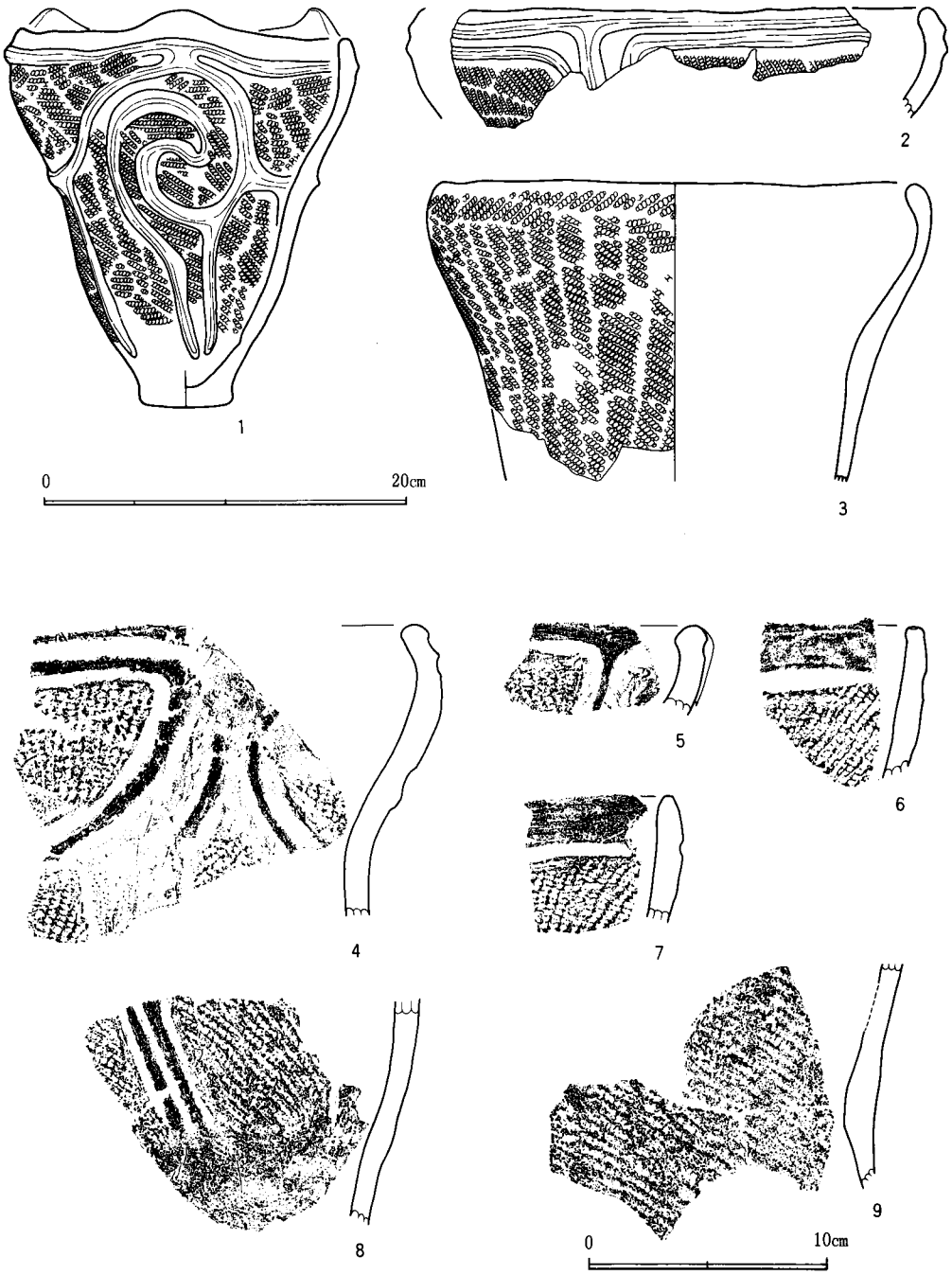
土器（第82図１～９、図版35・41）

第Ⅲ群３類ｃ種（４）　Ⅰ文様帯の区画文間に、Ⅱ文様帯の沈線区画による幅広な無文の帯状部が貫入するが、区画に付随する部分は隆起線となる。キャリパー形は保たれている。文様帯内に施される縄文は、ともに縦位のＲＬである。

第Ⅲ群３類ｋ種（１・２・５・８）　１はⅠ文様帯の内湾する無文部が隆起線で作出され、３単位のゆるやかな波状縁となる。この波状縁の中軸上で、区画隆起線に付着した形で渦巻文が主文様として配されるが、これは他のパネル化した副文様とともに１本隆起線で充填されるものである。従来、加曽利ＥⅢ式古段階に限定される１本隆起線による渦巻文は、胴部上半に配されるものを主とするが、胴部の上・下半にそれぞれ独立して配されるものも少数存在する。本例は副文様の間に、主文様の渦巻文が胴部下半から細長く入り組む、稀有なものである。１本隆起線のため、主・副文様とも単位文化しないのでＥⅢ式古段階と思われるが、ＥⅣ式的な文様構成ともいえよう。突出した不安定な底部を有し、口径19.5cm、器高20.8cmを測る。２・５は渦巻文などの主文様を持たずに、分割されたパネル文が充填される可能性がある。２は推定口径27.6cmを測る。８は胴部下半で、２本隆起線によるパネル文の下端が認められる。

第Ⅲ群３類Ｉ種（３・６・７）　３はやや内湾気味の口縁を呈する。縄文はＬＲで、口縁端部で横位に施され縄文帯を形成し、以下では縦位に施される。推定口径26.1cm、現高18.4cmを測る。６は幅広な沈線で、７はやや深みのある沈線で無文帯を作出する。ともに区画線以下には縦位のＲＬが施される。

時期　１はやや稀有な例だが、全体的には加曽利ＥⅢ式古段階とすることが妥当であろう。

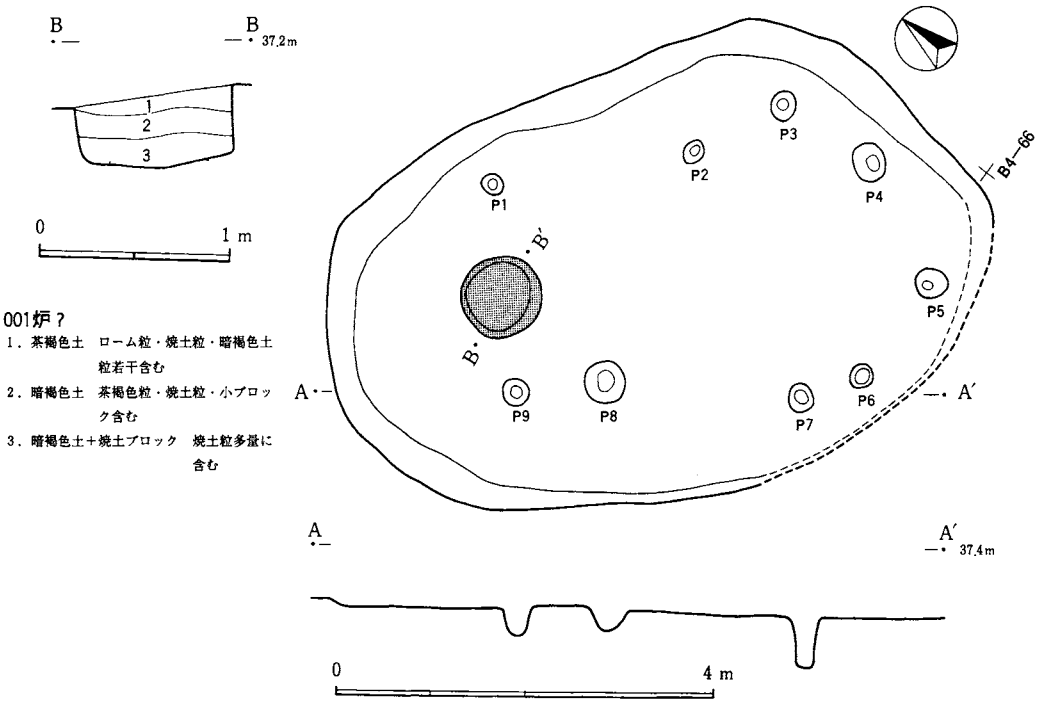


第82図　042号跡(2)

００１号跡（第83・84図、図版29・42）

おおよそ楕円形の浅い掘り込みから前期後半の土器が発見されたが、床面・壁はともに不明瞭で、住居跡かどうか疑わしい。９基記録されたピットのうち、Ｐ１・Ｐ３・Ｐ７・Ｐ９は、台形に並んでいるように見えるが、深さは15cm・36cm・52cm・28cmと、不揃いである。焼土入りのピットは、「住居より新しい」、「炉穴か」と記録されている。形状からは、炉穴よりは住居跡内の炉の可能性が高いと思われる。東南部ニュータウン区域内では、この時期の包含層が多数調査されているが、住居跡の検出例はきわめて稀であり、住居跡の形態もわからない点が多い。

土器は、前期後半の土器が比較的まとまっているが、周辺は同時期の包含層であり、掘り込みの範囲に特に集中することはなかった。



第83図　001号跡(1)

土器（第84図１～20、図版42）

第Ⅱ群１類ａ種（１～６）　１・２は細沈線が交差した文様が施されるもので、２は斜格子目文を描く。３・４は深く器面をえぐるような沈線で斜格子を描くが、３では単一の沈線と半截竹管の内側を用いた幅広な沈線が交差する。５・６は半截竹管を用いて施文されるものである。５は口縁端部に沿って２条の結節沈線が引かれる。

第Ⅱ群１類ｂ種（７・８）　７は羽状縄文、８の内面には条痕様の調整痕が認められる。

第Ⅱ群２類ｂ種（９）　口縁部は重畳する平行沈線文によって区画され、区画内はやはり平

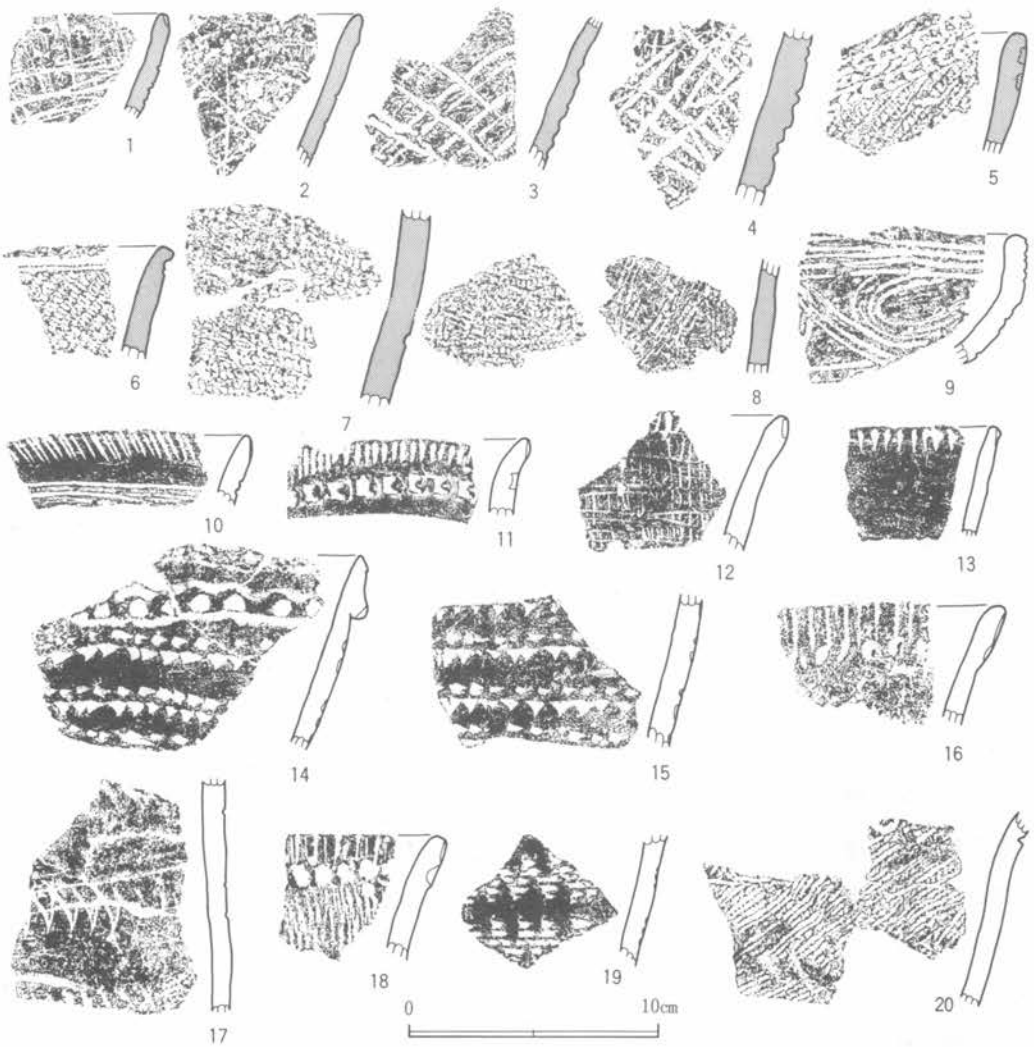
行沈線によって、木葉文など幾何学的な構成をとると思われる。

第Ⅱ群2類d種（10・12～15）　いずれも口縁端部に短沈線、折り返し部分に連続的な押捺が巡らされるもので、口縁部以下10では沈線による区画、12では平行沈線による格子目文、14では三角文が、それぞれ認められる。15は14と同一個体であろう。

第Ⅱ群2類e種（11・16～19）　16・18は口縁端部に短沈線が巡らされ、直下に逆D字爪形文が巡らされる。口縁部以下には波状貝殻文が施されるが、このうち18は鋸歯状貝殻腹縁を用いる。17は横位の細沈線で胴部が分帯される可能性があろう。

第Ⅱ群2類c種（20）　円形竹管文、結束第1種の縄文が施される。

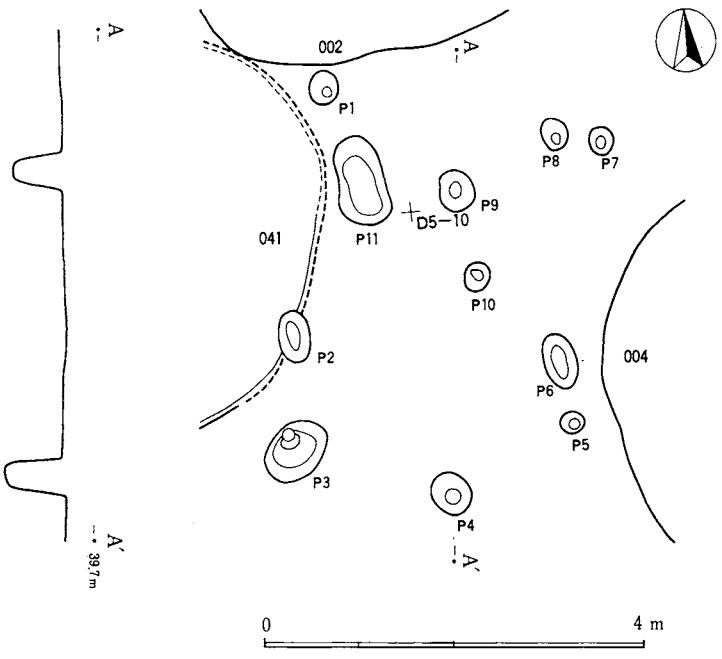
時期　出土土器は黒浜式～興津式まで断続的に認められるが、冒頭の理由により特定しない。



第84図　001号跡(2)

００３号跡（第85図、図版29）

楕円形プランの住居跡を想定して調査され、現地での記録には破線で書かれているが、実際はピットが確認されたのみである。プランを検討する材料がないので、図では示さなかった。しかし、Ｐ３・Ｐ４・Ｐ８・Ｐ９は50cm以上、Ｐ１・Ｐ６・Ｐ10は30～40cmと垂直に深く掘り込まれたピットがあることから、この付近に住居跡が存在した可能性は充分考えられる。一方、Ｐ２・Ｐ５・Ｐ７・Ｐ11は浅いもので、柱穴ではない可能性が高い。



第85図　003号跡

０１４号跡（第86図、図版29・43）

壁の一部が記録されているが、床面が検出されたにしては、ピットが浅すぎるなど、住居跡として良いか疑問である。発掘途中で遺構でないと判断した可能性もある。土器は比較的多く出土しているが、すべて摩滅した破片であった。

土器（第86図、図版43）

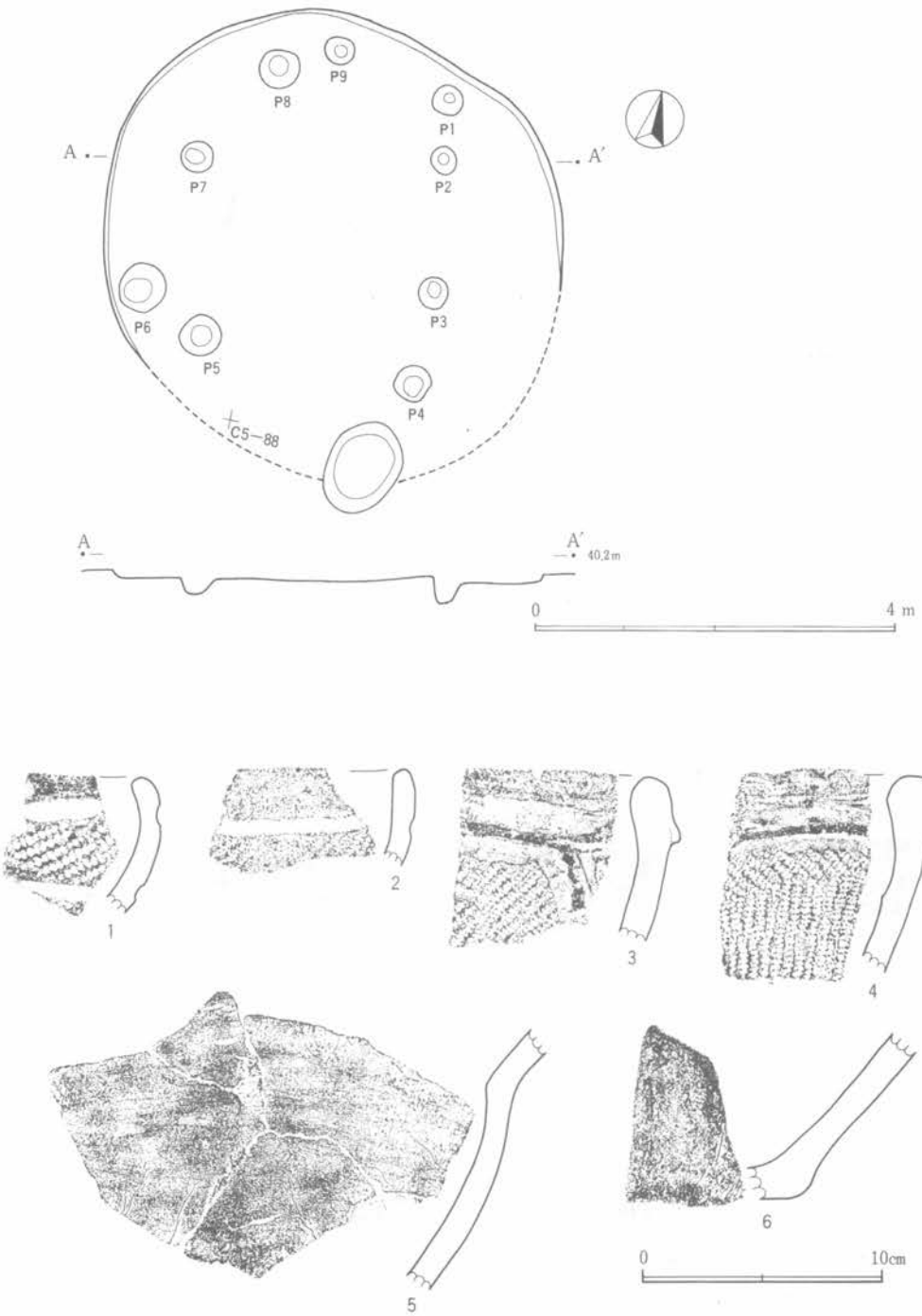
第Ⅲ群３類ｃ種（１）　Ｉ文様帯が沈線区画される、ＥⅡ式のキャリパー形であろう。

第Ⅲ群３類ｋ種（３）　Ｉ文様帯以下には、１本隆起線で充填文が施されるであろうか。

第Ⅲ群３類ｌ種（２・４・５）　２は沈線によって、４は下半側のナゾリが強い隆起線によって無文帯が作出される。２はｊ種、４はｋ種の可能性もあろう。５は欠損するが、大きく外反する口縁を呈す鉢であろうか。

第Ⅲ群３類ｎ種（６）　周縁に丸みをもつ、やや突出した底部である。

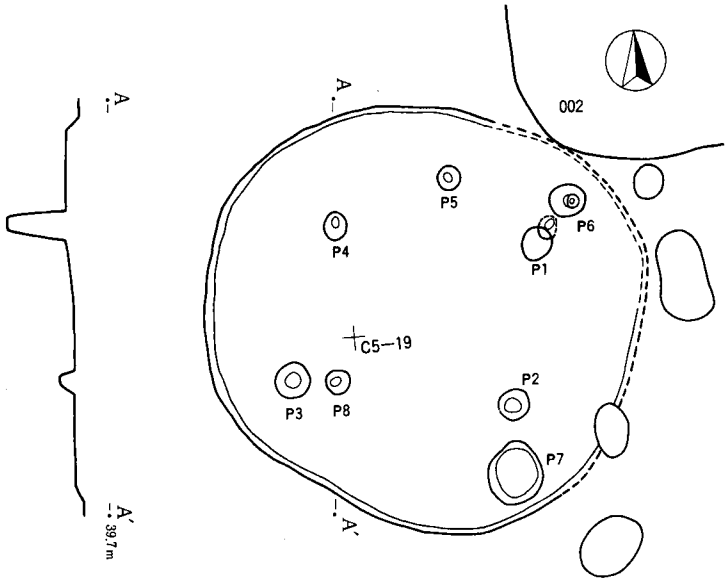
時期　遺構や遺物の状況から、時期の特定は差し控える。

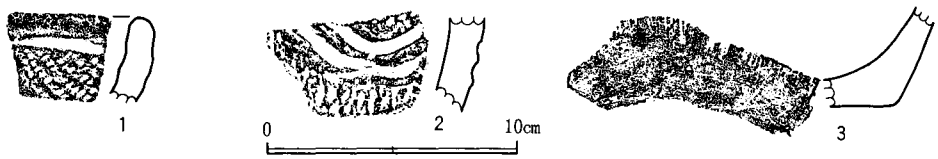


第86図　014号跡

０４１号跡（第87図１～３、図版29・43）

円形に近い比較的整ったプランと10cmほどの覆土が記録されている。土器は図示したものも含めて小片のみ。炉は検出されていない。また、ピットはＰ１・Ｐ４が60cm以上、Ｐ３・Ｐ６・Ｐ７は20～40cm。Ｐ２・Ｐ７は15～20cmほどのごく浅いものである。





第87図　041号跡

土器（第87図１～３、図版43）

第Ⅲ群３類ｈ種（２）　２条１単位の幅広沈線が、胴部中途に波状に引かれると思われる。中峠式の可能性がある。

第Ⅲ群３類ｉ種（１）　沈線によって無文帯が作出される。

第Ⅲ群３類ｎ種（３）　残存部上端に条線文が認められる。

時期　出土土器が零細で決定要素に欠けるため、不明とする。

B．土坑（中期）（第88図、図版30）

土坑として記録されたもののうち、縄文時代中期の土坑と認められたものは、６基である。

P04（第88図）

径1.4ｍの円形の土坑で、断面形は鍋底状に近いすり鉢状。整った形状から、人為的な掘り込みと見られる。大破片１点を含めて、時期的にほぼ純粋な土器が検出されている。

土器（第88図１～３、図版44）

第Ⅲ群２類ｃ種（１～３）　１は平縁でＩ文様帯に枠状区画がつくられるが、突起を繋いだ間に交互刺突が伴い、未発達な箱状把手となろう。区画内には単列の角押文が付随するが、その内側や区画直下には、連続弧状に施される。胎土中に細かな雲母粒、粗い石英・長石粒を含む。２は区画に付随して単列、内側には充填の角押文が施されよう。３は胴部でＹ字状隆起線が垂下し、修正痕が認められる。

時期　出土土器は僅少ながら阿玉台Ｉｂ式で、一括性が認められる。帰属時期としたい。

P06（第88図、図版30）

阿玉台式直前の深鉢の上半部が、伏せた状態で発見された。その下からは、0.6×0.8ｍの楕円形の掘り込みが検出された。底面はやや凹凸のある丸底である。当遺跡ではこの他には同時期の土器が見られず、単独に現れた存在である。なお、土器は遺構検出面よりも高い位置にあり、下半部は後世に失われた可能性もある。

土器（第88図４、図版36）

第Ⅲ群２類ａ種（４）　湾曲しながら外に開く口縁部には、端部に巡る交互刺突による連続コの字状文と横位の隆起線で、Ｉ文様帯が形成される。文様モチーフは主に角押文によって描出されるが、交互刺突による連続コの字文との連結部の状態から判断すると、同一施文具で表出されると思われる。基本的には、図示したように左右に連続コの字状文の延びる円形の突起と沈線による渦巻文という単位文的文様の間を、三叉状印刻文の伴う連続したＹ字状文というモチーフである。胎土中に雲母粒などが含まれない。推定口径26.5cm、現高9.7cmを測る。

時期　埋設土器は雷８類に比定できるので、帰属時期を阿玉台式直前としたい。

P20（第88図）

やや不整な円形で、壁は垂直に立ち上がっている。

土器（第88図５～10、図版44）

第Ⅲ群２類ｃ種（５・６）　５は口縁端部に区画に伴うと思われる単列の角押文が認められる。６は胴部に垂下する断面三角形の隆起線、輪積修正痕が認められる。阿玉台式Ｉｂ式。

第Ⅲ群３類ｃ種（８）　Ｉ文様帯に、隆起線による区画文が形成される。加曽利ＥⅡ式。

第Ⅲ群３類ｈ種（７・９・10）　７は平行する隆帯間に波状の隆帯を貼り付ける。９は地文状に平行する沈線と波状沈線が引かれる。いずれも中峠式であろうか。10は口縁端部下に、連

孤文系の影響による交互刺突文が認められる。加曽利ＥⅡないしⅢ式と思われる。

時期　零細な資料ながら、出土土器には時間幅がある。下限の破片ほど摩滅しており、むしろ古い時期のものが遺存が良いため、時期の決定は難しい。

P28（第88図、図版30）

円形に近い径1.4ｍの掘り込みである。

土器（第88図11～14、図版44）

第Ⅲ群2類c種（11）　口縁端部に区画に伴うと思われる単列の角押文が認められる。

第Ⅲ群3類h種（12・13）　12は複数本で1単位の沈線が懸垂文となろう。13は地文を切って曲線的な沈線が引かれる。加曽利ＥⅡ式であろう。

第Ⅲ群3類n種（14）　加曽利ＥⅡ式の磨消懸垂文が、胴部下半に認められる。底径9.0cm。

時期　資料は零細ながら加曽利ＥⅡ式の可能性を指摘したい。

P32（第88図、図版）

楕円に近い円形をした径1.1～1.2ｍの小形の掘り込みである。底のピットは土坑を切る別のピットかもしれない。

土器（第88図15～22、図版44）

第Ⅲ群2類e種（15～18）　15・16は基本的に隆起線に沈線が付随し、これで区画文が形成されるものである。15は口縁端部に下端を粘土帯で囲ったＶ字状の貼付文が付されるが、これは以下の区画文の単位となろう。16は胴部に楕円形の区画文が形成されよう。17・18は隆起線が単独で付されるもので、胎土中に多量の雲母粒を含む。阿玉台Ⅳ式に比定されよう。

第Ⅲ群3類k種（19）　Ⅰ文様帯に列点文が巡らされ、区画隆起線に隆起線区画の無文の帯状部が付着する。加曽利ＥⅣ式と思われる。

第Ⅲ群3類l種（20）　内湾する口縁を呈す。

第Ⅲ群3類m種（21･22）　微隆起文が描かれる、壷形や注口付土器などの特殊な器種である。

時期　いずれの出土位置も覆土上層なので、より新しい加曽利ＥⅣ式の可能性が高い。

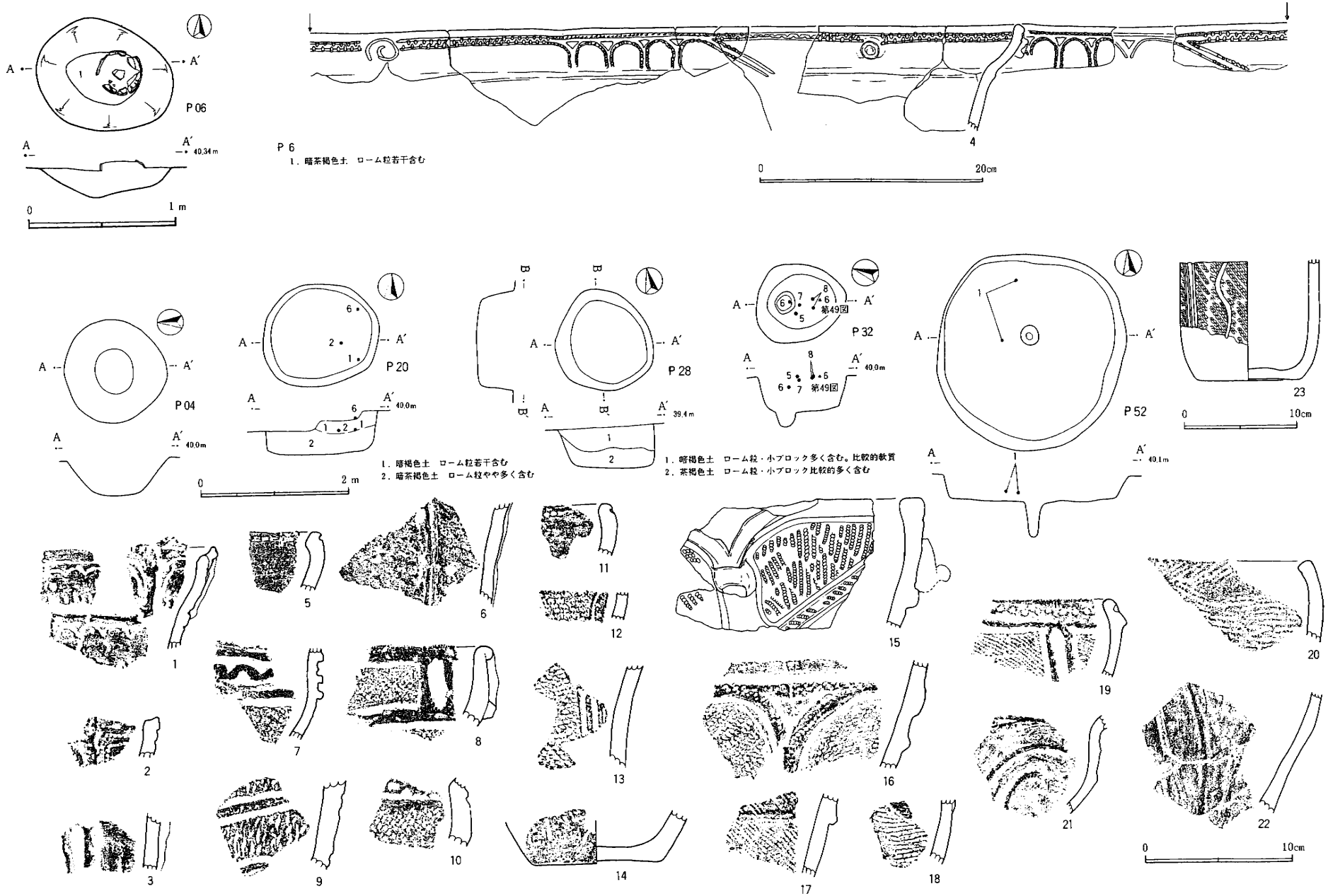
P52（第88図）

径2.6～2.7ｍの円形の土坑である。調査された深さは50cmほどでごく浅いが、平面的な形状からすれば縄文中期の「小竪穴」と呼ばれるものであろう。

土器（第88図23、図版36）

第Ⅲ群3類n種(23)　沈線間は磨り消される3本1単位の沈線、波状沈線が交互に4単位で垂下する。底径9.0cm、現高10.7cmを測る。加曽利ＥⅡ式である。

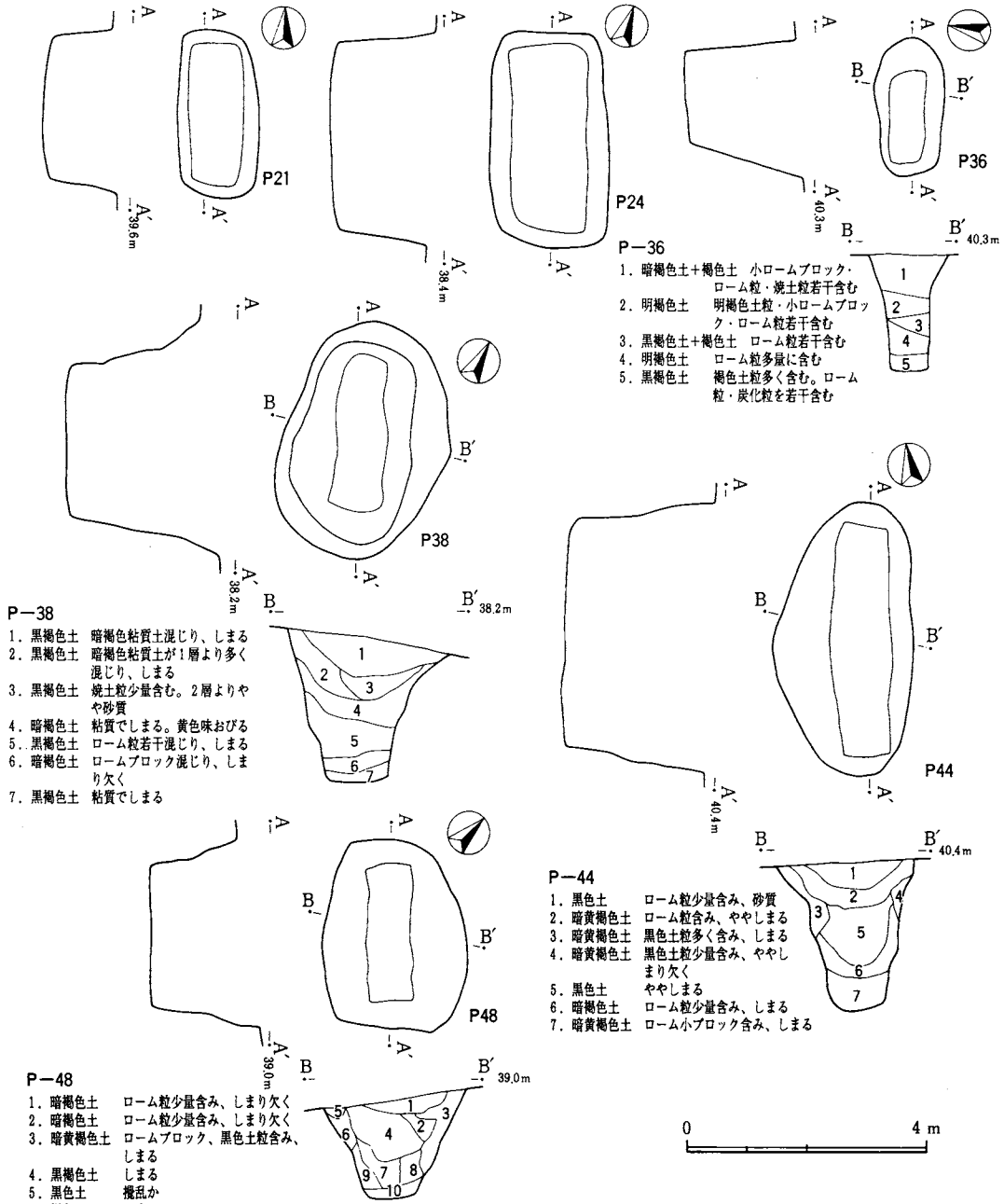
時期　谷を挟んだ対岸の有吉北貝塚の例を見ると、中央にピットがあるのは加曽利Ｅ式前半期であり、出土土器もこの時期のものを主体としている。出土位置は不明だが、数点含まれる加曽利ＥⅢ式以降の小破片は紛れ込んだと考え、加曽利ＥⅡ式を帰属時期としたい。



第88図　P04, 06, 20, 28, 32, 52号土坑

C．落とし穴状遺構

縄文時代の落とし穴状の土坑を6基検出した。P21・P24からは条痕文系土器が出土し、他は遺物が皆無である。これまでの東南部地区の例も同様だが、ほとんど早期と考えられている。前期以降の包含層の土器が覆土に入らないことも早期に比定する材料になり得るか。



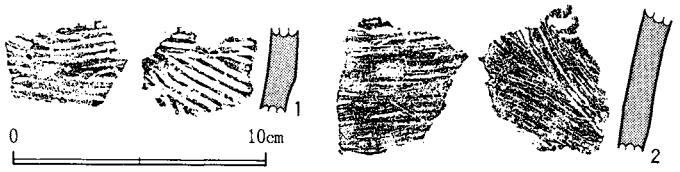
第89図　P21，24，36，38，44，48号土坑

P 21（第89図、図版30）

遺構かどうかの検討が不十分であったため判断に困ったが、形状から落とし穴の可能性が高いものとしておく。底はほぼ平坦だが、壁はかなり傾斜している。覆土は、暗褐色土粒を斑状に含み、ローム粒・小ブロックやや多く含む黒褐色土からなる。条痕文土器の小片２点が出土しているが、位置の記録はなく、遺構にともなうかどうかは不明である。

土器（第90図１・２）

第Ⅰ群２類ｄ種　（１・２）　１は口縁部と以下を区画するゆるやかな段を有し、表裏とも貝殻条痕文が認められる。２は表裏とも木口を用いたような浅い条痕が認められる。



第90図　P21号土坑

時期　土器は零細かつ出土位置の記録がないため、不明。

P 24（第89図、図版30）

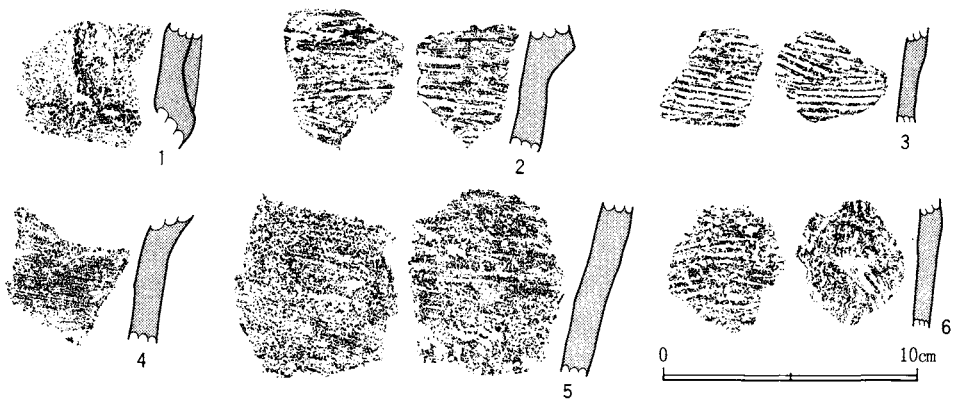
平面形は隅が丸みを帯びた長方形、底は平坦、壁は垂直であり、落とし穴状遺構とみられる。

土器（第91図１～６）

第Ⅰ群２類ｄ種（２・３・６）　６以外は表裏条痕である。２は口縁部以下に段を有す。

第Ⅰ群２類ｅ種（１・４・５）　浅い擦痕が表裏に認められ、１は口縁部に隆起線が付く。

時期　条痕文土器の破片が19点発見されており、ある程度遺構の時期を示している可能性があろう。今回報告した中では2番目に底の面積が広く、短軸方向の幅は圧倒的に広い。



第91図　P24号土坑

P 36（第89図、図版30）

検出面での平面形は楕円形に近く、下半部から底では長方形である。覆土は5層に分層されており、炭化粒・焼土粒を若干含んでいる。遺物は出土しなかったが、形状から他の例と同様の縄文時代の落とし穴状遺構と考えられる。

P 38（第89図、図版30）

検出面で楕円、底で長方形である点がいくつかの例と共通するが、とくに上部での広がりが大きい。覆土はかなり複雑であることも他とは異なっている。締まった層が多いのは斜面に位置する関係で掘削が武蔵野ローム層に達していることも一因であろう。遺物は出土しなかった。

P 44（第89図、図版30）

今回発見されたなかで最も規模の大きなもので、底面で2.3m×1.2mを測る。上部では楕円形で、西側がとくに広がっている。他の方向の壁ではほぼ垂直に立ち上がっている。遺物は出土しなかったが、縄文時代の落とし穴状遺構とみて良いであろう。

P 48（第89図、図版30）

底は1.6m×1.2mの長方形で平坦だが、壁はかなりの傾斜を持っており、上部は大きく広がっている。覆土はかなり分層しているが、内容の変化は少ないようである。この遺構も遺物が出土していないが、形状からすれば縄文時代の落とし穴状遺構とみてよいであろう。

D．炉　穴

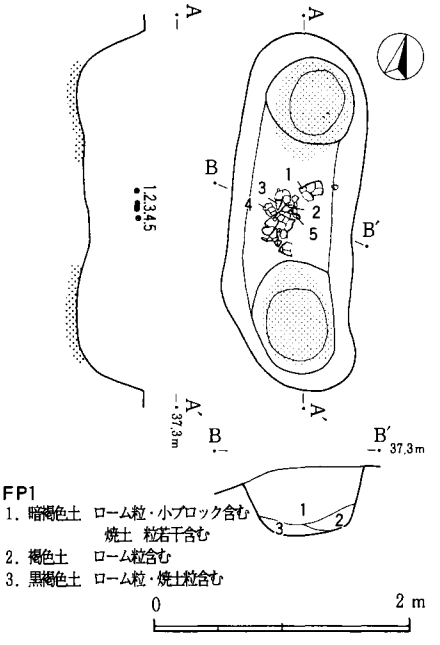
台地の中央から馬の背状に延びた斜面にかけて、分散的に6群26基が位置している。時期は土器の出土しなかったものも含めて早期後半条痕文期と考えて良かろう。このうち、FP－03～07・FP－08～24の2群は多数の重複がみられ、ある期間この地が生活の場所として意識されていたことを示している。東南部地区では、他の遺跡でも、この時期の住居跡はほとんど発見されず、炉穴は多くの台地に分布している。

FP01（第92図、図版31）

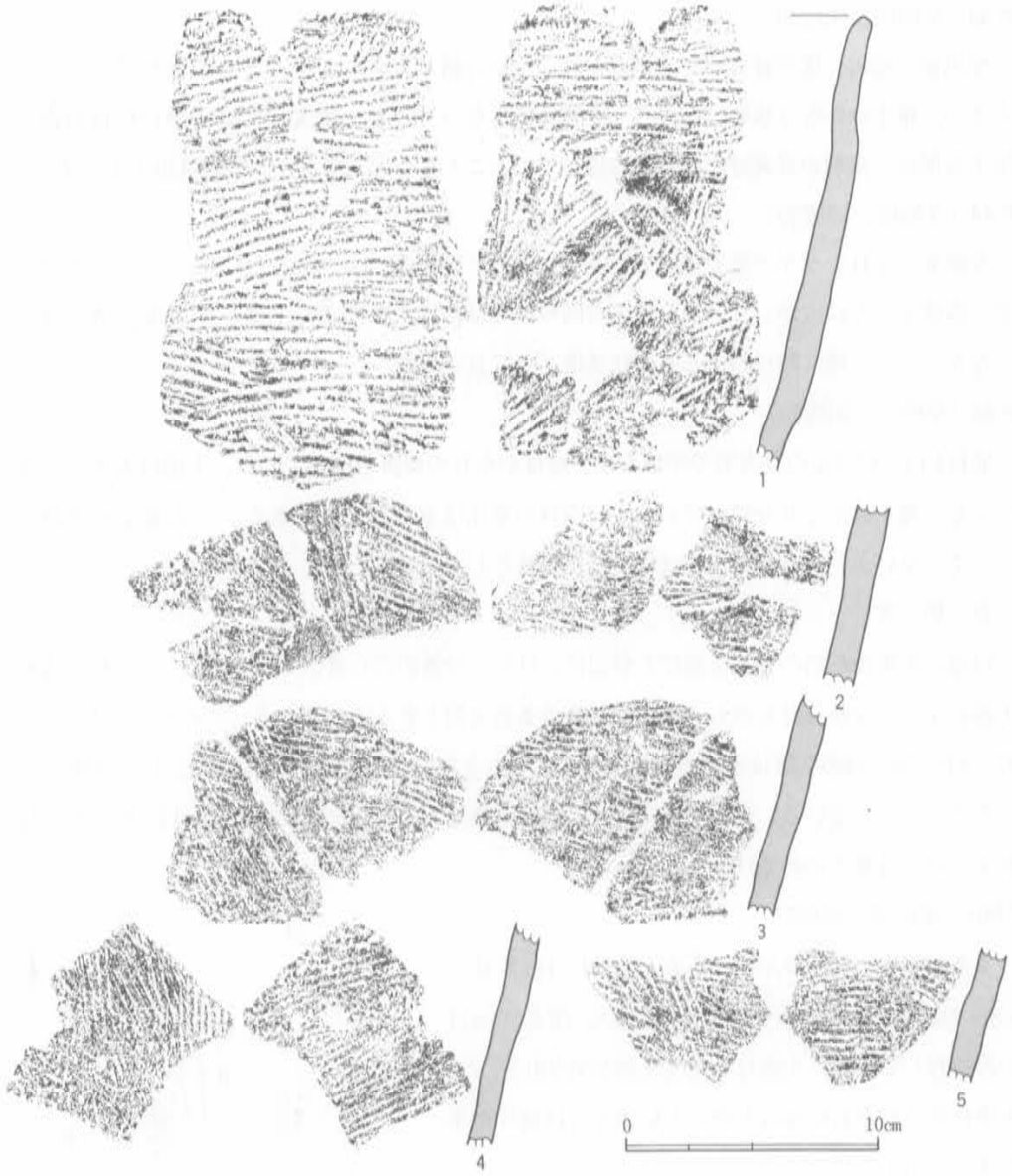
2基の重複、新旧は不明である。幅0.9～1m×長さ2.8mの掘り込みの両側に燃焼部をもつ。深さ50cmほどが遺存していた。土器は条痕文土器が66点出土した。中央付近の底から40cmほど浮いた位置からは破片がまとまって出土している。

土器（第93図1～5、図版45）

第Ⅰ群2類d種（1～5）　いずれも表裏条痕であるが、特に1では深く明瞭に施文されている。施文方向は1の表面と4の裏面が概ね横位、4の表面が概ね縦位である他は、比較的ランダムである。1は口縁端部に、条痕文と同一の施文具である鋸歯状貝殻の腹縁で、刺突文を密接して施しており、やや不明瞭ながらも文様帯を形成している可能性がある。他は胴部で、4は口縁部を区画する僅かな段が認められる。



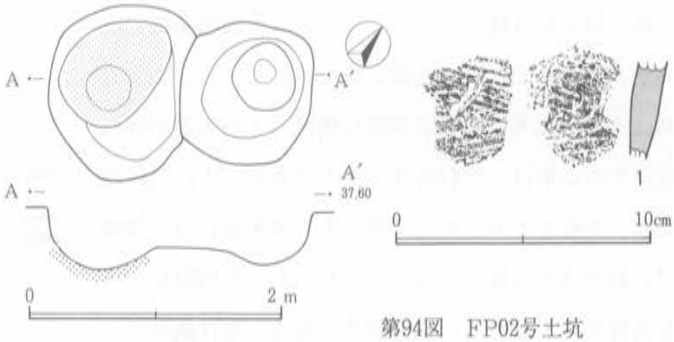
第92図　FP01号土坑(1)



第93図　FP01号土坑(2)

FP02（第94図、図版31）

平面図を見ると２基の円形の掘り込みと、１基の炉穴の可能性が考えられる。燃焼部は良く焼けており、焼け面が立ち上がり部分にかかっている方が奥壁側であることからすれば、足場は南東方向に延びていたとも考えられよう。



第94図　FP02号土坑

土器（第94図１、図版45）

第Ⅰ群２類ｄ種（１）　繊維の含有が多く、表面にその痕跡が認められる。

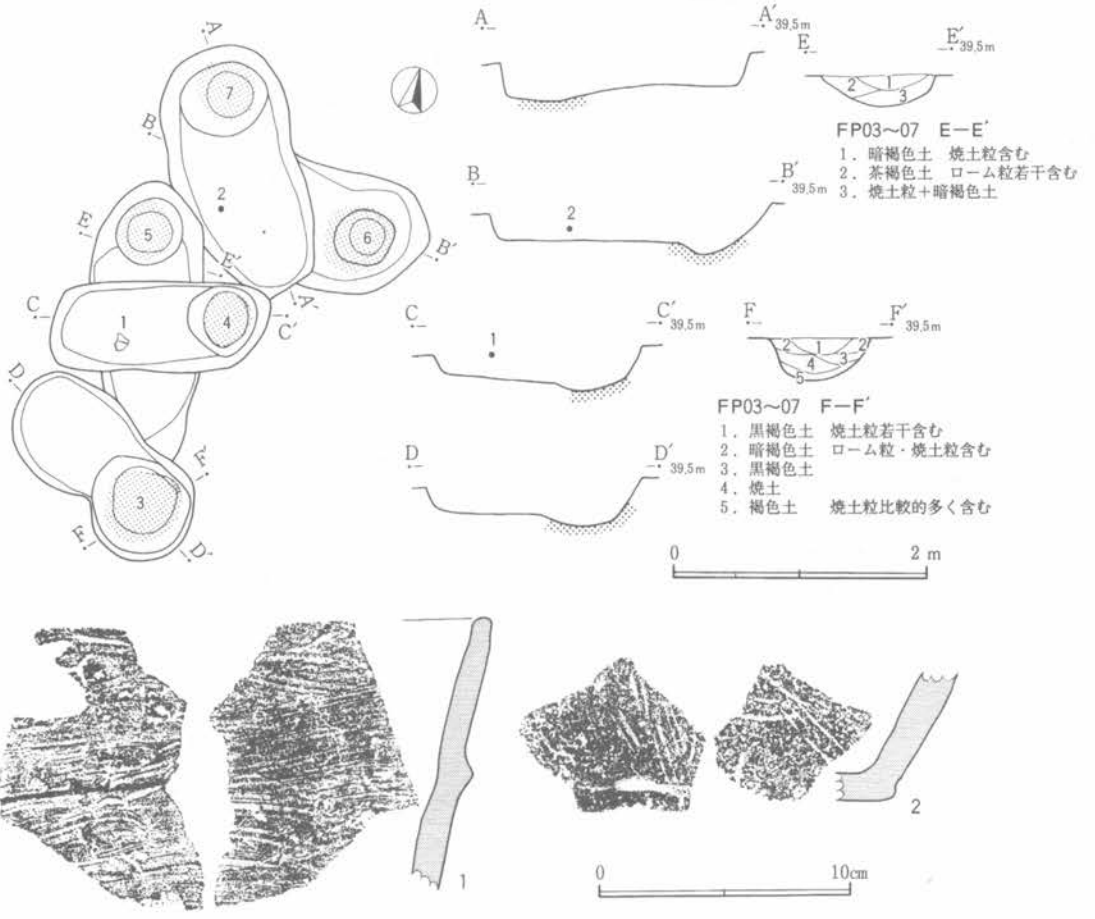
FP03～07（第95図、図版31）

５基の炉穴の重複が見られるが、直接切り合っているもの同士ではすべて長軸方向が異なっている。FP－03・04・06は燃焼部を東から南東に向けており、05・07は北に向けている。規模や形態はほぼ同様であり、平均で長さ2ｍ×幅0.9ｍ程度を測る。底面はほぼ平坦で、燃焼面が若干窪んでいる。奥壁は立ち上がりに焼け面の残るもので見ると、他の壁よりやや傾斜がゆるやかであり、これはFP-06で顕著である。

土器（第95図、図版45）

第Ⅰ群２類ｄ種（１）　表裏とも木口を施文具としたような、浅い概ね横位の条痕である。口縁部は断面三角形の隆起線で区画される。

第Ⅰ群２類ｆ種（２）　平底で、表裏とも木口を施文具としたような、浅い条痕である。



第95図　FP03～07号土坑

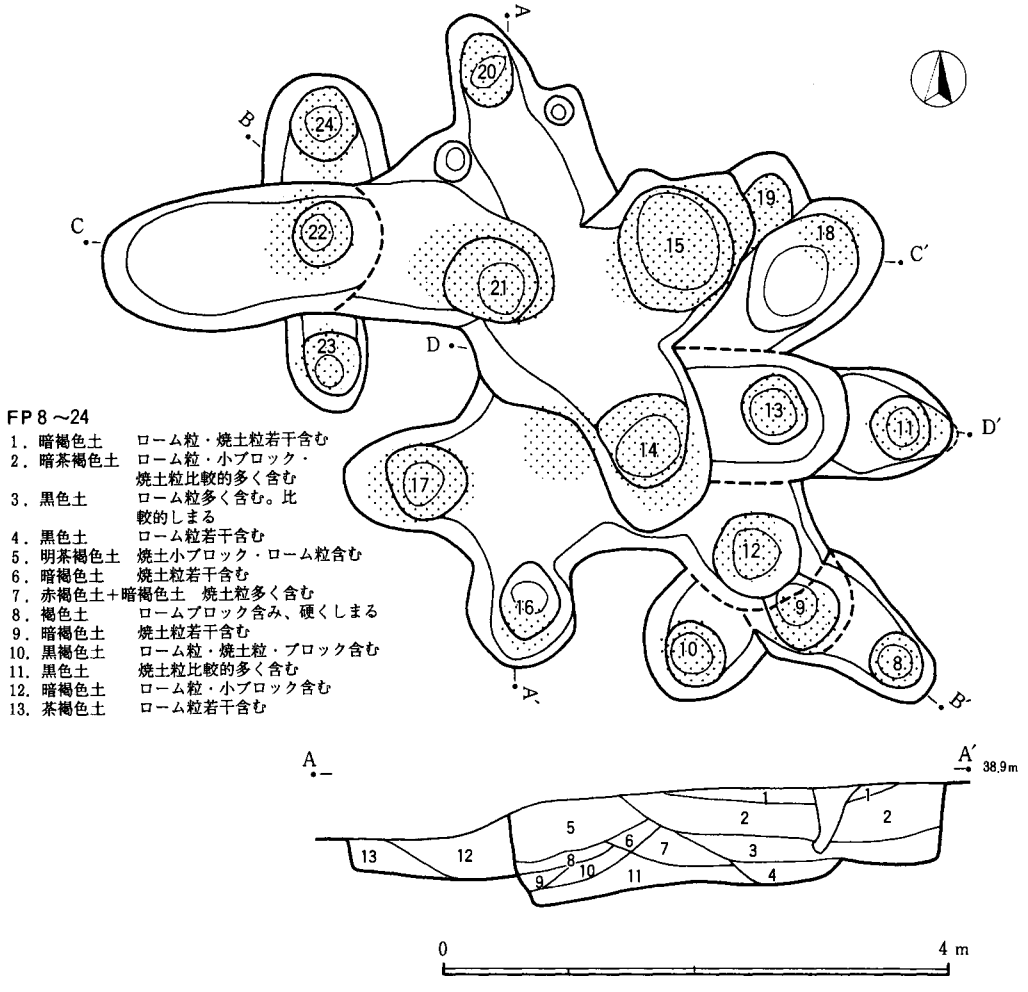
FP08～24（第96・97図、図版31）

一部分に重複を持ちながら、次々に新しい炉穴が造られている。燃焼部に17のナンバーが付けられているが、他に1つあるので、18基以上が切り合っているとみられる。燃焼部の設置方向を集計すると、外側を向くものが多く18基中15基におよび、重複部の反対側に設置する意識が働いているようである。方位では、15基が北北西－東－南の範囲に向いており、西側が少ない。

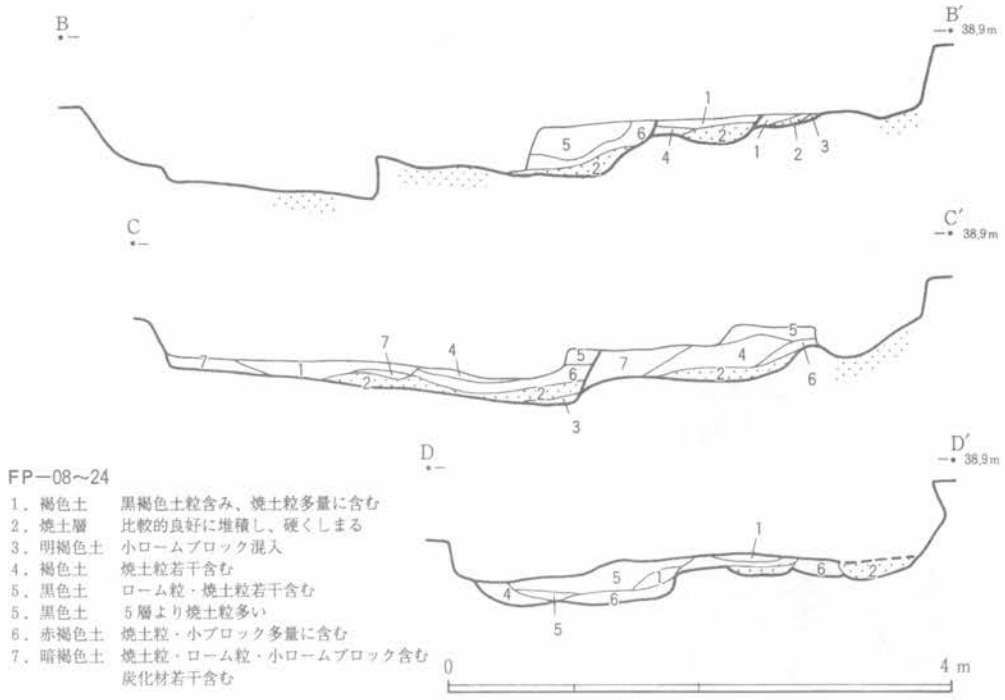
規模は幅が0.6m～1mで、平均0.8mを測る。長軸長は計測できないが、2m程度が多いと思われる。流れ込み以外の土器は全体でも15点であり、重複関係の記載は省略した。

土器（第98図1～第99図9、図版46）

第Ⅰ群2類d種（1～5・6・8・9）　1は波状縁で、端部上に突起状の平坦部を有す。中軸上には連続的に凹みが付く隆起線が垂下し、口縁部を区画する横位の隆起線に付着する。表裏とも粗く条痕文が施される。2は薄手なつくりで、焼成良好である。表面は明瞭な条痕文



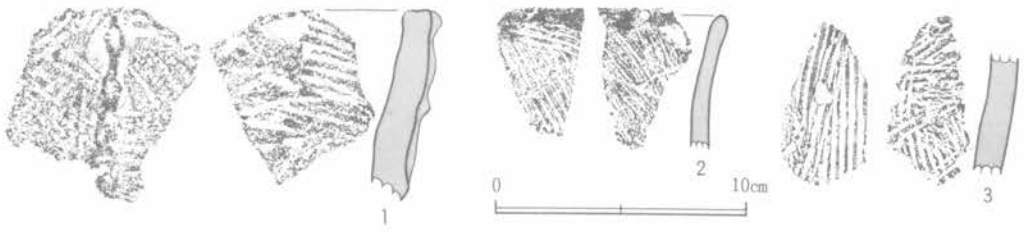
第96図　FP08～24号土坑(1)



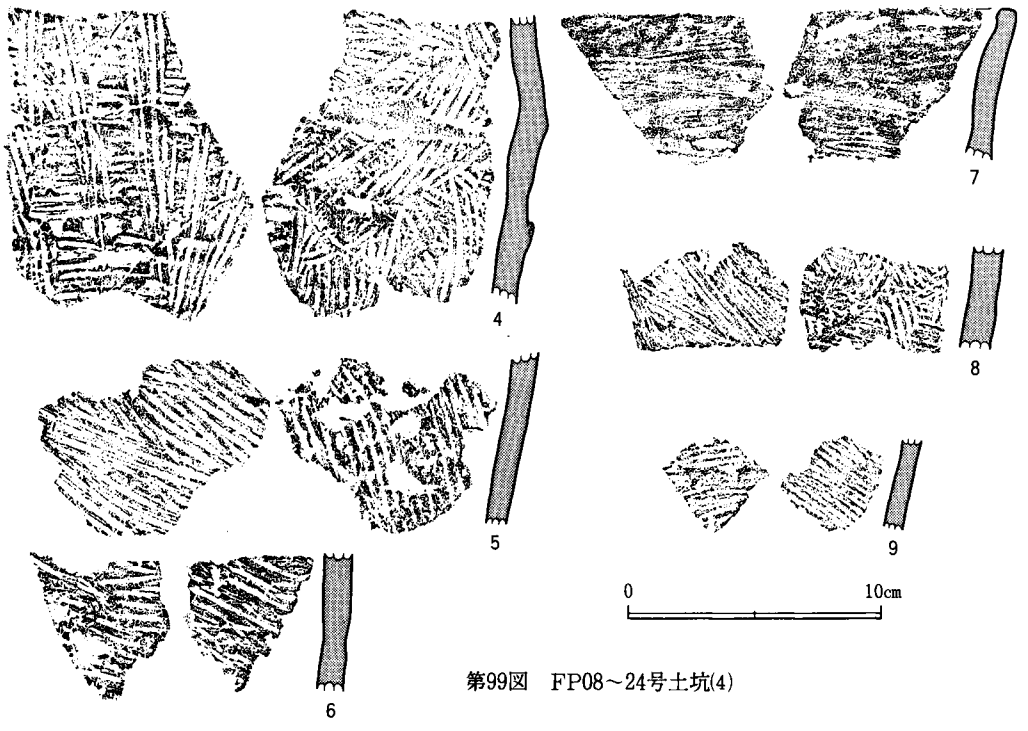
第97図　FP08～24号土坑(2)

が施される。3は表面に明瞭な縦位の条痕文が施される。4は胴部上半に偏平な隆起線が横位に付されるが、これには円形竹管による刺突文が伴う。表面の条痕文は概ね格子目状に施され、装飾性が看取される。6は表裏とも明瞭な条痕文が認められるが、表面は概ね斜位、裏面はランダムに施される。7は表裏とも明瞭な条痕文が認められるが、表面は概ね斜位に施される。裏面は2次焼成を受けて脆弱になり、器面の剝落が著しい。8は表裏に条痕文が認められるが、表面は概ね横位、裏面は密に概ね斜位に施される。9は表裏とも明瞭な条痕文が認められるが、表裏とも細かい単位で、概ね斜位に施される。

第Ⅰ群Ⅱ類e種（5）　表裏とも繊細な擦痕が概ね横位に施されるが、口縁端部は表裏から交互に弱く押捺され、ゆるやかに波を打ったようなつくりとなる。



第98図　FP08～24号土坑(3)



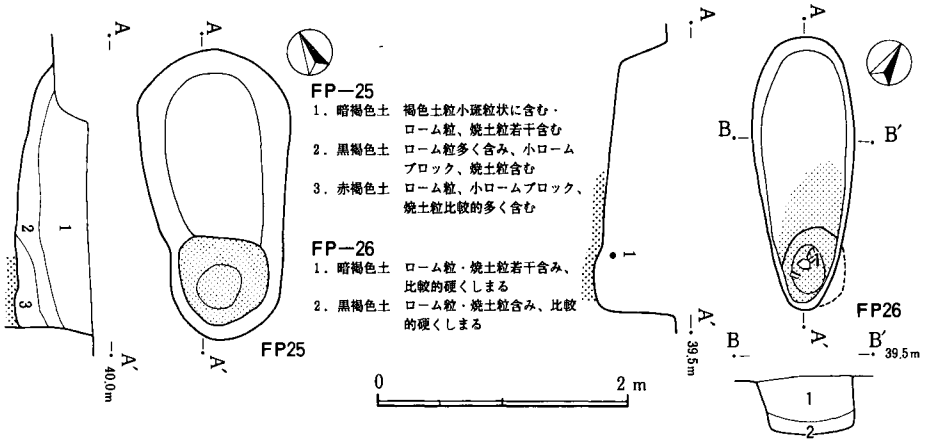
第99図　FP08～24号土坑(4)

FP25（P09）（第100図）

長軸長2.2m・最大幅は0.9mで、燃焼部の方では若干括れて幅が狭くなる。燃焼部には焼土が充満していた。セクション図には現れないが、4層の下に存在したらしい。北側で005号跡と切り合うが、住居跡の方が新しい。条痕文土器が2点出土したので、早期末の炉穴であろう。

FP26（P34）（第100図）

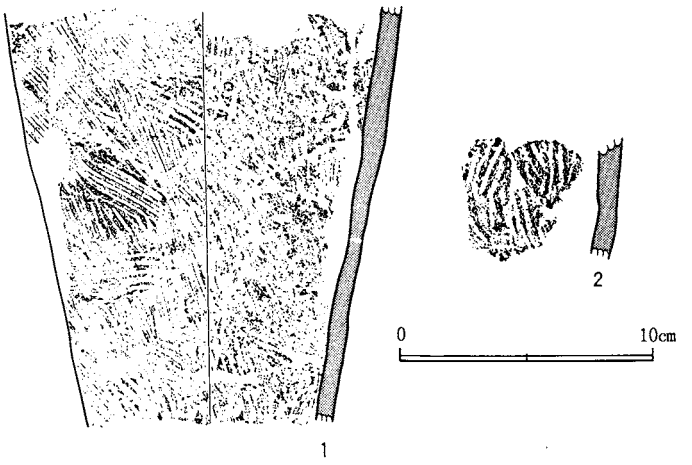
長軸長2.1m・最大幅は0.8mで、燃焼部の方ほど幅が狭くなっている。ただし燃焼部は底面近くが横にオーバーハングして広くなっている。ある程度天井部分を残している可能性もあるが、記録が少なく判然としない。燃焼部から条痕文土器の大破片が出土した。



第100図　FP25，26号土坑

土器（第101図、図版46）

第Ⅰ群2類d種（1・2）いずれも表裏条痕である。1は口縁部と底部を欠損する。明瞭な条痕文を、器面を埋め尽くすかのように密に施すが、施文順は先ず概ね斜位に施し、空間を多方向に充填していると思われる。推定最大径16.8cm、現高15.8cmを測る。



第101図　FP26号土坑

E．時期・性格不明の土坑

ここでは、現地で記録された土坑のうち、縄文時代の可能性があるものの、判定の材料のないものを取り上げた。具体的には、遺物が皆無でも定形的な縄文時代の遺構に似ていて、否定材料がなければ、各遺構の記載のなかで疑問符をつけて扱った。

こういった記録を将来活かせる可能性は少ないが、報告者の判断で断ち切ることも、誤りと考えて、あえて報告する。今後、こういった性格のよくわからない掘り込みこそ現地での観察・記録を考えて行わないと、扱いにくいデータが無闇に増えることになる。また、これとは逆に、大切なデータがいつまでたっても失われ続けることも考えられる。

P01（第102図）

楕円形の垂直な掘り込み。遺構検出面上で数点の土器片が得られたが、表面の劣化が著しいため図示できない。土器が遺構に伴うかどうか微妙で、縄文時代の土坑と言い切れない。

P29（第102図、図版32）

径1mの円形で垂直な掘り込みを持ち、底も平坦。土坑であると思われるが、出土遺物なく時期は不明、性格も不明である。

P30（第102図、図版32）

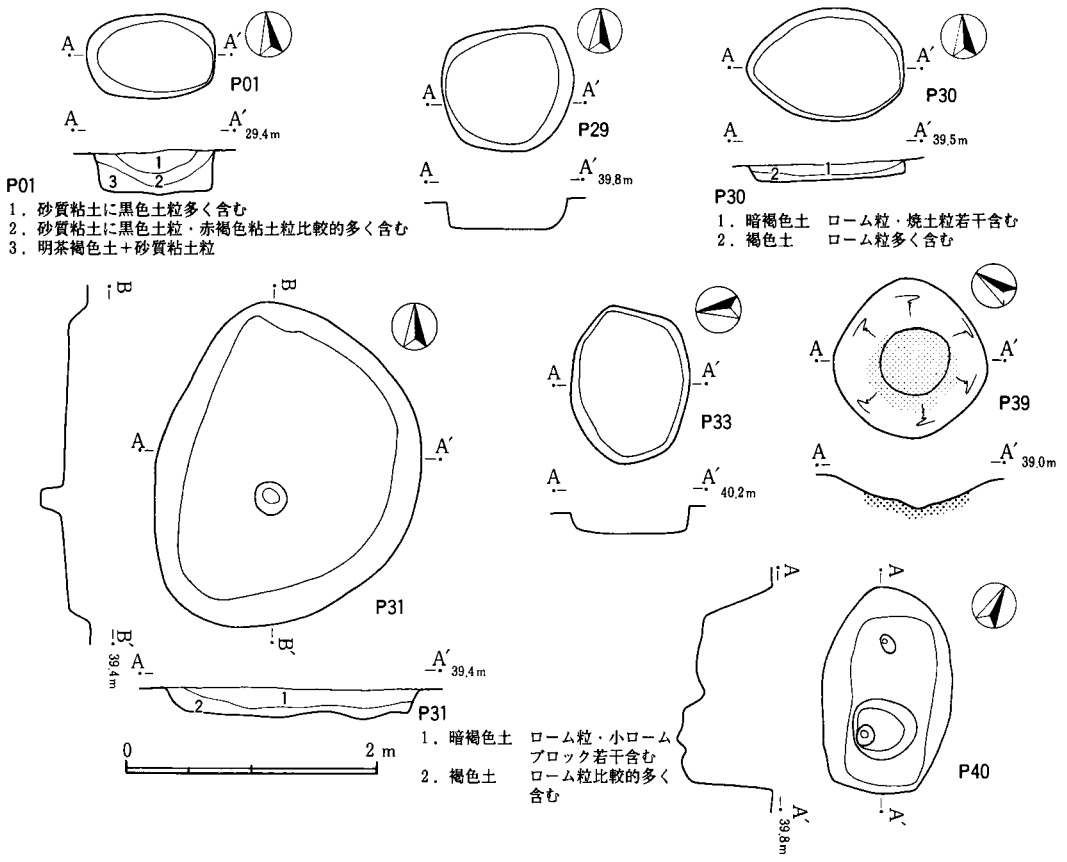
1.3m×0.7mのやや不整の楕円形で、底は平坦である。人為的な掘り込みではあろうが、出土遺物なく時期・性格とも不明である。

P31（第102図、図版32）

2.5m×2.1mの不整楕円形で、平面形は中期のいわゆる小竪穴にも似ている。しかし、底に凹凸があり、中央のピットは浅すぎる。壁もかなり傾斜する。遺物も全く出土していない。

P33（第102図、図版32）

1.2m×1mのややいびつな楕円形で、壁は低いものの垂直に近く、底も平坦である。遺物は出土していない。



第102図　P01, 29, 30, 31, 33, 39, 40号土坑

P 39（第102図、図版32）

浅いすり鉢状ないし皿状の落ち込みで、底面に焼土粒が集積していた。①炉穴の燃焼部のみ②中期の住居に伴う炉③前期の炉などの可能性が考えられる。位置からすれば②は考えにくい。炉穴は当遺跡で多数発見されており、考えやすいが、焼け面はどの方向にも伸びていない点は否定材料である。③は例が少ないが、近くの有吉遺跡で集石を伴う炉が見つかっている。

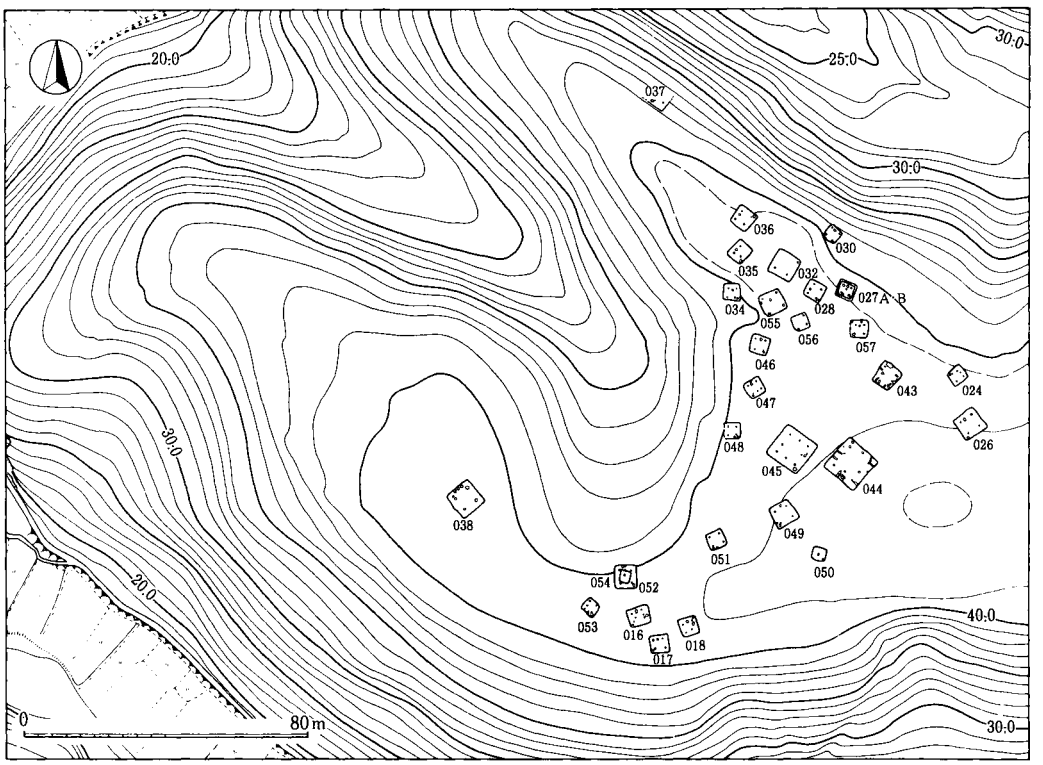
P 40（第102図、図版32）

形状は落とし穴状遺構に似るが全体にしまり欠く土が入っており、縄文時代遺構とは考えにくい。最近の耕作によるものかもしれない。

第3節　古墳時代

1．遺　構

南東から北西方向に舌状に延びる台地が村田川の支流によって開析され、北西に開口した馬蹄形状を呈する台地上に遺跡は所在している。調査によって検出された遺構のほとんどは古墳時代中期の遺構で、住居跡が27軒、後期の遺構は住居跡が2軒である。重複している住居跡は2軒のみであった。検出された古墳時代中期の住居跡の配置を見ると馬蹄形状に開口する台地の付け根部に遺構の空白部分が2か所認められ、3グループに分けられる。第1グループは馬蹄形状に開口した台地北東半分の標高の高い部分に北西から南東方向に占地し、中型の住居と比較的それより小さな住居が16軒集中して存在するが、やや離れて、北東斜面にも1軒存在する。027A、027B号住居跡は、重複住居であるが同一住居の拡張と考えられる。第2グループは馬蹄形状に開口した台地奥の中央部の南東から北西方向に向いた緩い斜面に占地し、比較的大型の住居2軒と小型の住居4軒が存在する。第3グループは馬蹄形状に開口した台地の南東半分の付け根部の標高の高い部分に占地し、比較的小型の住居が5軒存在する。古墳時代後期の住居跡は、馬蹄形状に開口した台地の南東半分の標高の高い部分に占地し、やや離れて2軒存在する。054号住居跡は、中期の052号住居跡と重複している。



第103図　古墳時代遺構配置図

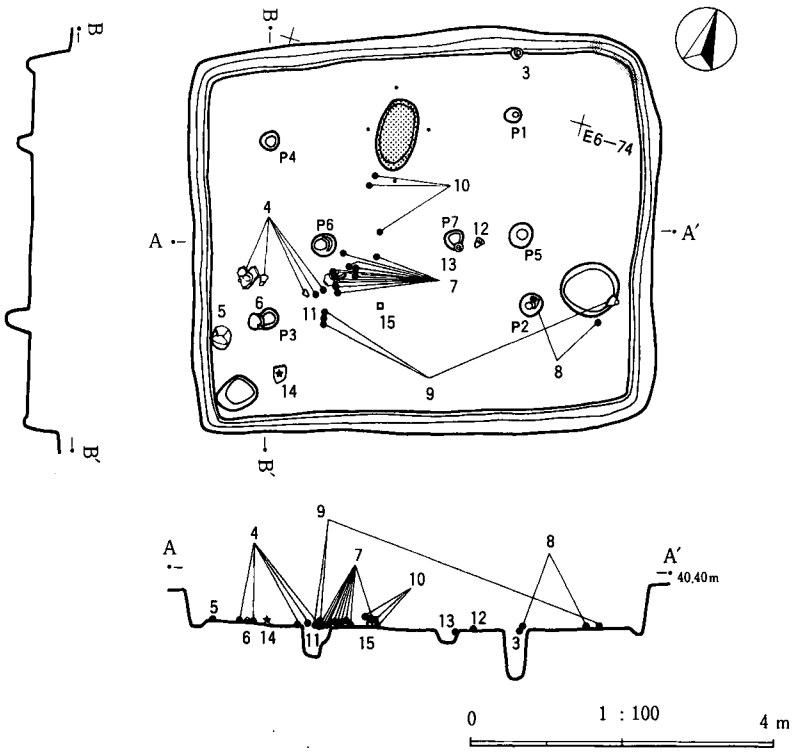
０１６号住居跡（第104図、図版47）

壁はほぼ垂直に掘り込まれている。覆土はレンズ状の自然堆積であり、若干の焼土粒とローム粒を含み、北東隅壁下には床面からかなり浮いた状態で、焼土塊がわずかに検出された。壁溝は幅0.2～0.3m、深さ0.05m前後ほどで掘り込まれている。柱穴は、Ｐ１からＰ４が主柱穴で、対角線上に掘り込まれ、Ｐ５・Ｐ６が副柱穴の棟持ち柱と考えられる。Ｐ７は深さ0.1mと掘り方が浅く柱穴とは考えられない。Ｐ８は深さ0.15mと浅く、覆土状態から判断して本住居跡に伴うものではない。貯蔵穴は南西隅に検出され、深さ0.3mほどの擂り鉢状を呈していた。炉は、北西壁中央より0.5mほど離れた所に位置し、長円形を呈する。使用頻度は高かったようで、火床部が硬質化し焼土が多く充填していた。床面はハードローム上面に達しており全体的に硬化していたが、貼床ではない。

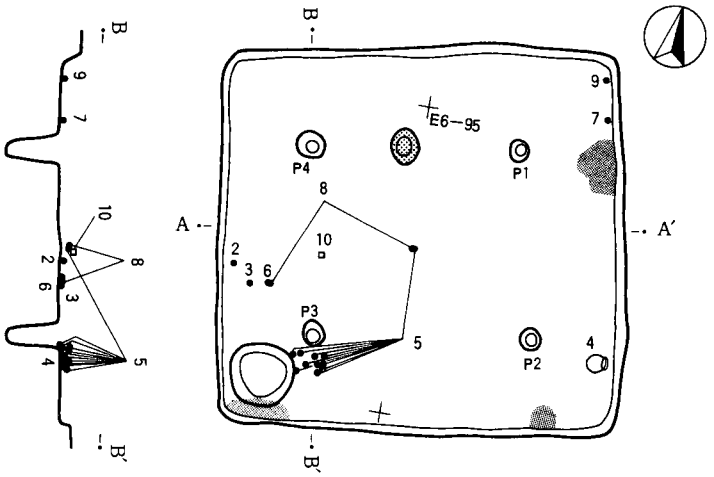
出土遺物量はそれほど多くはないが、中央部から西側に若干の集中傾向が見られ、床面の直上から出土している。また、特記すべき点として本住居跡からは製鉄（小鍛冶）に関係した遺物が出土している。鉄滓が３点、高坏の脚部を転用した羽口が２点、台石が１点出土している。

０１７号住居跡（第105図、図版47）

壁はほぼ垂直に掘り込まれている。覆土はローム粒を多く含むレンズ状の自然堆積で、貯蔵



第104図　016号住居跡



1．黒褐色土　暗褐色土粒・ローム粒微量含む。
粒子中・粘性有
2．黒色土　暗褐色土を斑状に含む。ローム粒、小ロームブロック微量含む。
粒子粗・粘性弱
3．茶褐色土　暗褐色土粒含み、ローム粒多量に含む。
粒子中・粘性弱

第105図　017号住居跡

穴南側の壁下と東壁北寄りの壁下にやや浮いた状態で焼土塊が検出された。また、焼土・炭化材を若干検出したが焼失家屋というよりも、住居廃絶に伴う家屋構築材の焼却痕跡と考えられる。壁溝は、検出されなかった。柱穴は、P1からP4が主柱穴で、ほぼ対角線上に整然と掘り込まれていた。貯蔵穴は南西隅に検出され、深さ0.25mほどの擂り鉢状を呈していた。炉は楕円形を呈し、北壁中央より0.8mほど離れたところに位置する。使用頻度はあまり高くなかったようで、覆土に若干の焼土粒が認められた程度であった。床面は全体的に軟弱であった。

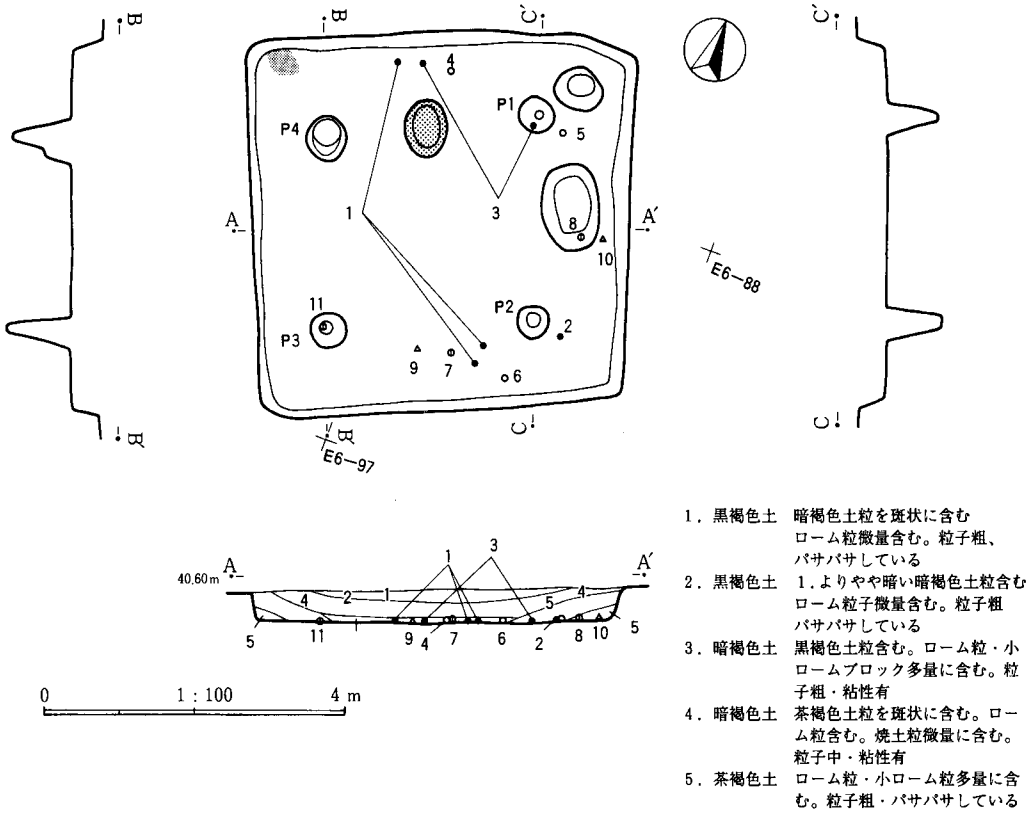
遺物は何点かを床面から完形で検出することができた。南西隅の貯蔵穴付近、反対側の南東隅壁下付近、北東隅付近に若干の集中傾向が見られ、床面の直上から出土している。また、製鉄に関連する遺物として鉄滓が1点出土している。

018号住居跡（第106図、図版48）

壁はほぼ垂直に掘り込まれている。覆土はレンズ状の自然堆積であり、ローム粒と若干の焼土粒を含み、北西隅壁下には床面からかなり浮いた状態で、焼土塊が検出されたが、焼失家屋というよりも、住居廃絶に伴う家屋構築材の焼却痕跡と考えられる。壁溝は検出されなかった。柱穴は、P1からP4が主柱穴で、ほぼ対角線上に整然と掘り込まれていた。P4は掘り方によるものか住居の廃絶時の抜き取り跡か判然としないが住居の内側に向かって掘り方が2段になっていた。貯蔵穴は北東隅と北東壁中央下に2基検出され、北東隅のものは不正円形を呈し、深さ0.4mほどの擂り鉢状を呈していた。北東壁中央のものは、長円形で、深さ0.4mほどの擂り鉢

状を呈する。炉は長円形を呈し、北東壁中央より0.8mほど離れたところに位置し、炉内に良好な焼土の堆積は認められず、火床もさほど熱を受けた様子が見られなかった。床面は全体的に軟弱であったが、凹凸が無く平坦であった。

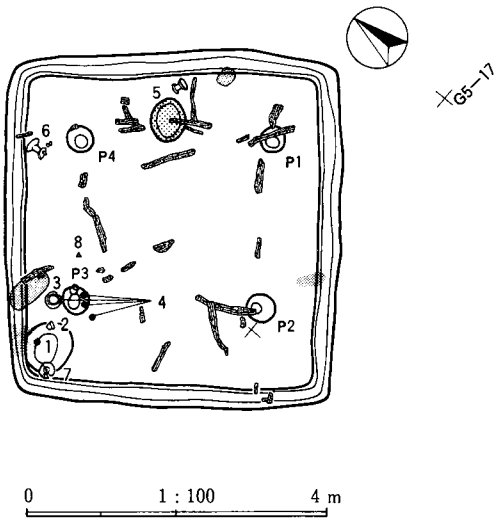
出土遺物量は僅かであるが、大体床面直上の北東壁付近、南東壁付近、北東隅貯蔵穴付近に若干の集中傾向がみられる。また、陶邑産とみられる須恵器の高坏、鉄製のやりがんな、砥石などが出土している。



第106図　018号住居跡

０２４号住居跡（第107図、図版48）

壁はほぼ垂直に掘り込まれている。覆土はレンズ状堆積であり、焼土粒・焼土塊と炭化材が多量に出土している。炭化材は南東・北西の両方向に倒れたように検出されたが、焼失というよりも焼却の可能性が高いと考えられる。壁溝は、幅0.5m、深さ0.05m前後ほどで掘り込まれていた。柱穴は、P1からP4が主柱穴で、ほぼ対角線上に掘り込まれていた。貯蔵穴は西隅に検出され、円形を呈し、深さ0.3mほどの擂り鉢状を呈していた。炉は、長円形を呈し、北東壁



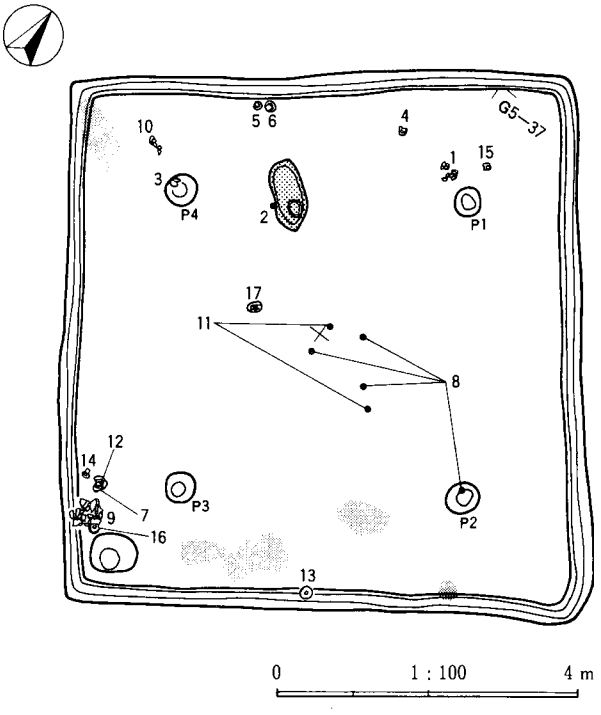
第107図　024号住居跡

中央から0.6ｍほど離れたところに位置し、使用痕跡がさほど認められなかった。床面は住居の中央部を中心に固く踏み固められ、各隅は軟弱であった。

遺物は西隅付近を中心に、完形品に近い土器が良好なかたちで検出された。西隅付近、北西壁付近、北東壁中央付近に集中して出土している。

０２６号住居跡（第108図、図版49）

壁はほぼ垂直に掘り込まれている。覆土はレンズ状堆積であり、焼土も若干含まれている。壁溝は、深さ0.1ｍ、幅0.3ｍほどで掘り込まれていた。柱穴は、Ｐ1からＰ4が主柱穴で、ほぼ対角線上に掘り込まれていた。貯蔵穴は南隅に検出され、隅丸方形を呈し、深さ0.5ｍほどの深い擂り鉢状を呈していた。炉は、長い楕円形を呈し、北西壁やや南隅寄りから0.5ｍほど離れたところに位置し、使用頻度は高く、火床部が硬質化し焼土が充填されていた。床面は、ほぼ平坦で全体的に軟弱であった。

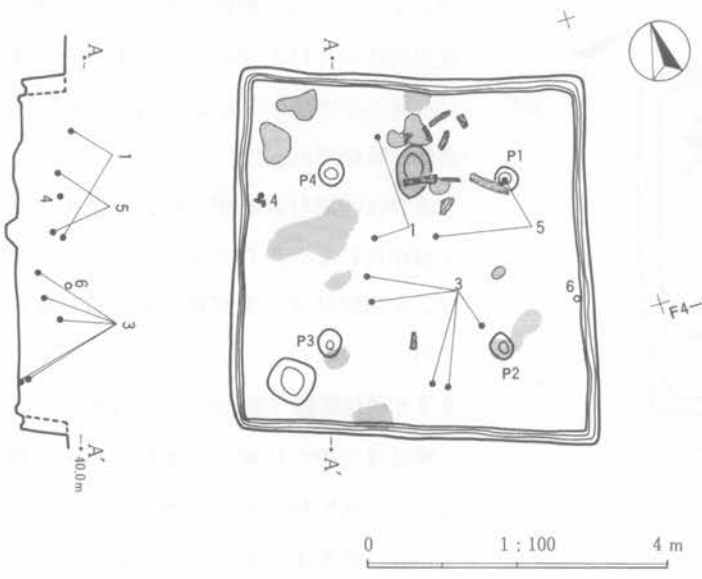


第108図　026号住居跡

出土遺物量はそれほど多くはないが、床面全体に見られ、そのなかで西隅壁際、北西壁際に若干の集中がみられる。土器の良好なセット資料である。また、遺構の中央付近から台石が出土している。

０２７Ａ号住居跡（第109図、図版49）

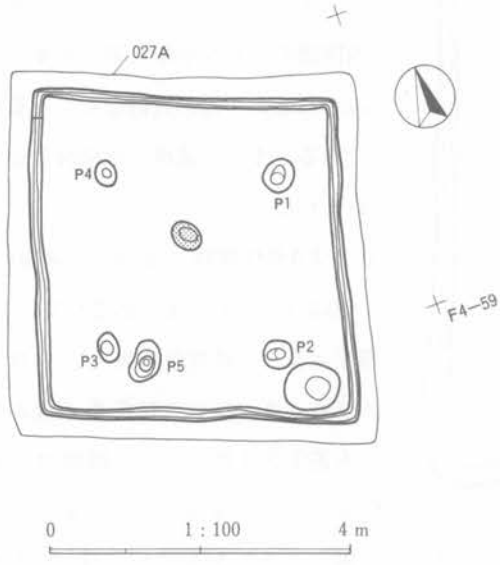
壁はほぼ垂直に掘り込まれている。覆土はレンズ状堆積であり、小ロームブロック・ローム粒を多く含み焼土も若干含まれている。壁溝は、幅0.18～0.2ｍ、深さ0.04ｍで非常に浅い掘り込みである。柱穴は、Ｐ1からＰ4が主柱穴で、ほぼ対角線上に掘り込まれていたが、位置的には



第109図　027A号住居跡

027B住居跡の柱穴と同じである。貯蔵穴は、やや長方形を呈し、西隅に検出され深さ0.5mほどの深い擂り鉢状を呈していた。炉は、長い楕円形を呈し、北壁中央から0.8mほど離れたところに位置し、使用頻度は高く火床部が硬質化していた。床面は全体的にほぼ平坦で硬質であり、とくに住居の主柱穴の内側部分が硬質化した貼り床であった。この貼り床の下に主軸方位を同じくする本跡よりも一回り小さな027B号住居跡が検出され、本跡は027B住居を拡張し建て替えたものと思われる。

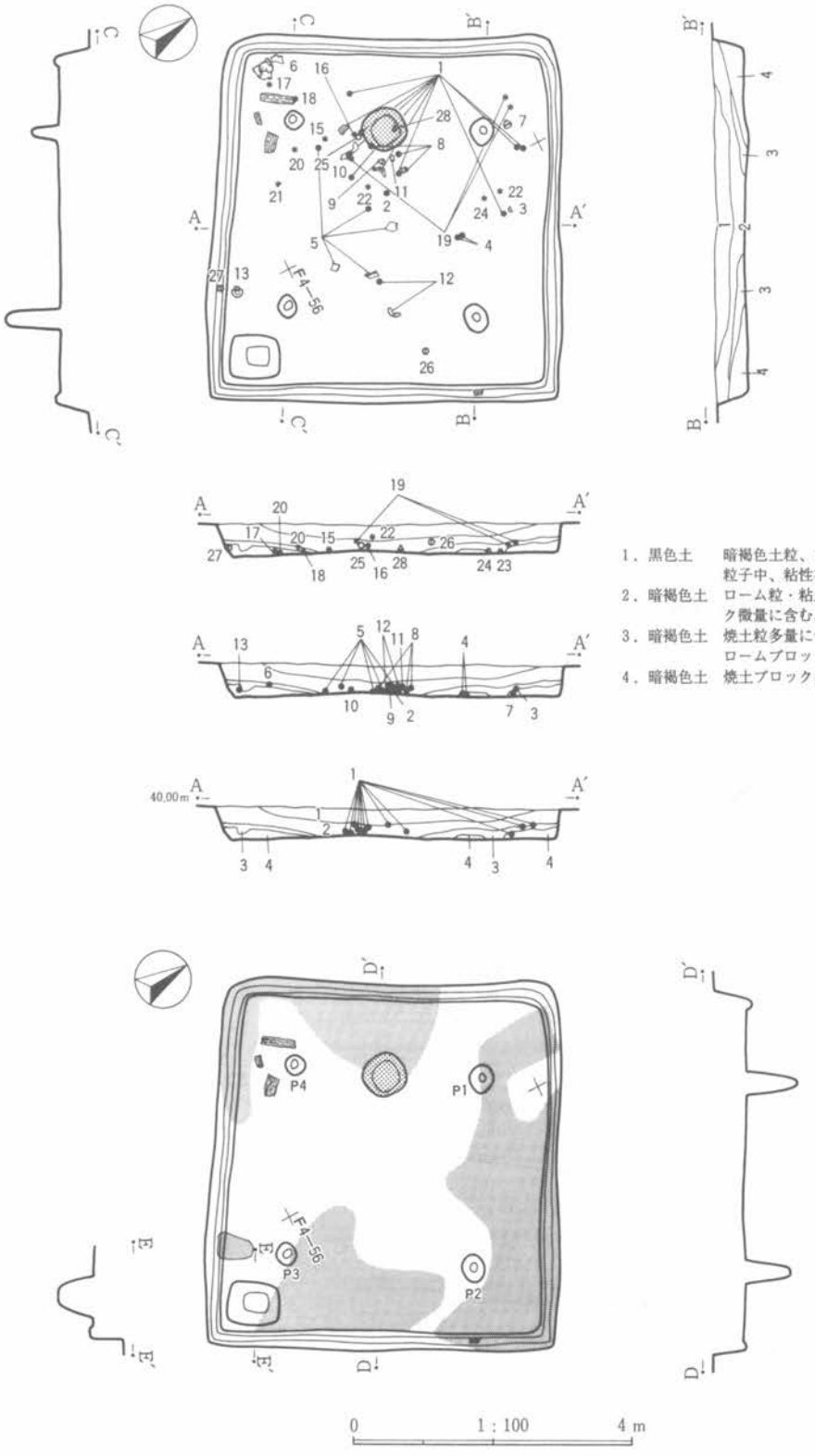
遺物はそれほど多くはなく、床面よりかなり浮いた状態で出土している。炭化材が検出されているが、その量はそれほど多くはなく、おそらく住居の廃絶に伴う建築部材を焼却したものと考えられる。



第110図　027B号住居跡

０２７B号住居跡（第110図、図版49）

027A号住居跡の貼り床の下から検出された。027A号住居跡と主軸方位がほぼ同じで明らかに一回り小さなつくりをしている。覆土は埋め戻しの人為堆積であり、貼り床の下のために固く締まっていた。壁溝は、幅0.14mで狭いが深さ0.05mほどあり比較的しっかりした作りである。柱穴は、P1からP4が主柱穴で、ほぼ対角線上に深くてしっかりと掘り込まれていた。P1とP2は建て替え以前の掘り方が検出されている。P5の性格不明である。貯蔵穴は不正な円形を呈し、南東隅に検出され深さ0.7mほどで擂り鉢状を呈し、しっかりしたつくりであった。



第111図　028号住居跡

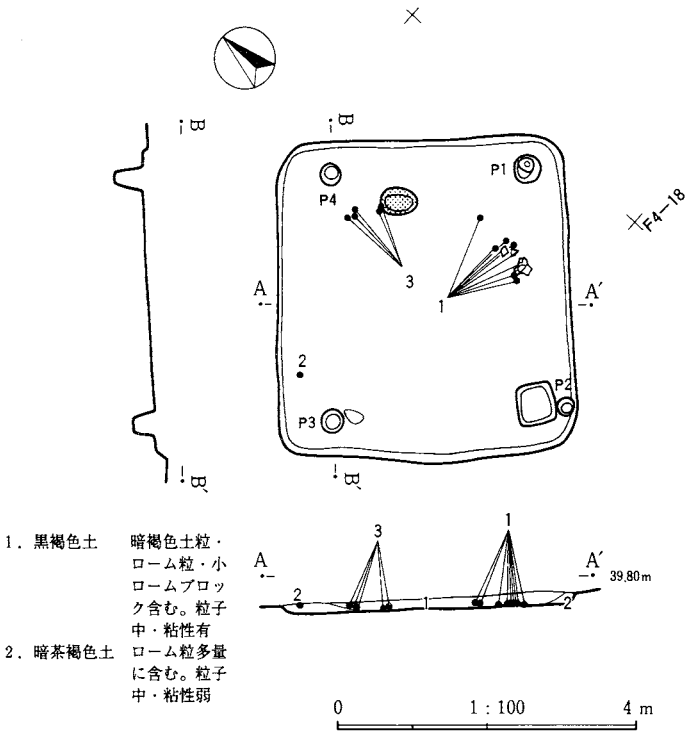
炉は楕円形を呈し、北東壁中央から1.6ｍほど離れたところに位置し、痕跡程度の遺存状態であったが、使用頻度はそれほど低くはなかったようで火床部が比較的固かった。

遺物はほとんど出土しなかった。

０２８号住居跡（第111図、図版50）

壁はほぼ垂直に掘り込まれている。覆土はレンズ状堆積であり、覆土下層の床面から0.2～0.3ｍほどの厚さで焼土が多量に出土し、炭化材も若干出土している。壁溝は、幅0.14～0.3ｍ、深さ0.05～0.1ｍで掘り込んでいた。柱穴は、Ｐ１からＰ４が主柱穴で、ほぼ対角線上に掘り込まれていたが、Ｐ４が他の柱穴より掘り方が浅い。貯蔵穴は長方形を呈し、南隅に検出され、深さ0.5ｍほどの逆台形状を呈していた。炉は、円形を呈し、北西壁中央から0.9ｍほど離れたところに位置し、使用頻度は高く火床部が硬質化し、焼土が充填していた。床面は壁付近を除いて硬質で、とくに主柱穴に囲まれた範囲は硬質化した貼り床であった。

出土遺物量は僅かで住居跡中央部付近、北隅付近、西隅付近にやや集中する傾向がみられ、床面直上と床面から僅かに浮いた状態で出土した。焼土は中央部と南西壁を除いた部分に広く分布しており、炭化材は西隅に集中して検出された。炭化材の出土量が多くないことから見ても焼失家屋というよりも、住居廃絶に伴う家屋構築材の焼却痕跡と考えられる。また、貯蔵穴のすぐ西側には床面直上に厚さ0.1ｍほどの白色粘土塊が検出された。また、20点の板状土製品が遺構の西側から出土した。さらに釘、軽石、砥石なども発見された。



1．黒褐色土　暗褐色土粒・ローム粒・小ロームブロック含む。粒子中・粘性有

2．暗茶褐色土　ローム粒多量に含む。粒子中・粘性弱

第112図　030号住居跡

０３０号住居跡（第112図、図50）

壁はほぼ垂直に掘り込まれている。覆土はレンズ状堆積であり、小ロームブロックを少量、ローム粒を多く含む。壁溝は、検出されなかった。柱穴は、Ｐ１からＰ４が主柱穴で、ほぼ対角線上に整然と掘り込まれていたが、全体的に壁際に位置していた。Ｐ２はとくに壁際にあり、貯蔵穴との関係があるとすれば先に貯蔵穴が掘られたものであろう。貯蔵穴はほぼ方形を呈し、南隅に検出され、深さ0.25ｍほ

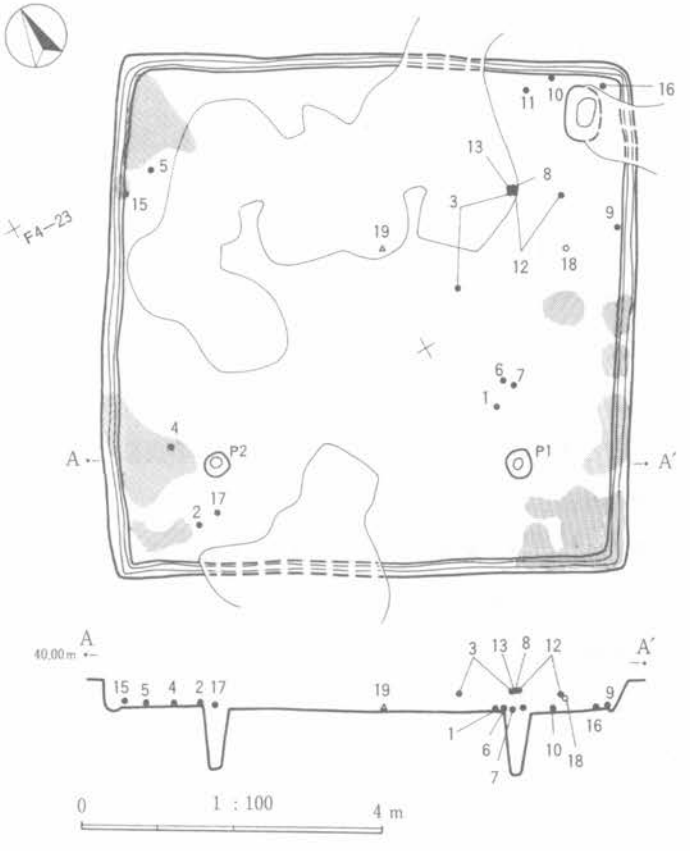
どの逆台形状を呈していた。炉は長円形を呈し、使用痕があまり認められなかった。床面は中央部分がやや固いが各隅や壁際は軟弱であり平坦であった。

出土遺物量は多くはないが、住居跡中央部よりやや北隅寄り、東隅寄りに集中する傾向が見られ、床面の直上から出土し、北西壁際南寄りの床面で甕がほぼ完形に近い状態で正立して出土した。P3の南東際に白色粘土の小塊が床面から若干浮いた状態で検出された。

032号住居跡（第113図、図版50）

本遺跡では最も大規模な住居跡である。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。覆土はレンズ状堆積であり、小ロームブロック・ローム粒を含んでいるが、本跡の北半分と南西の一部が近世から近代の土壙墓によりかく乱されている。壁溝は幅0.2m、深さ0.08mでかく乱部以外に検出された。柱穴は、P1とP2が主柱穴であるが、本来は、かく乱部にも2本の主柱穴があったものと考えられる。貯蔵穴は隅丸長方形を呈し、東隅に検出され、深さ0.6mほどの逆台形のしっかりした作りのものであった。炉はかく乱部にあったものと考えられる。床面は中央部分が硬質化した貼り床であったが、各隅は軟弱であった。

出土遺物量は多くはないが、北西壁際と南東壁際に集中するという傾向を見せている。これ

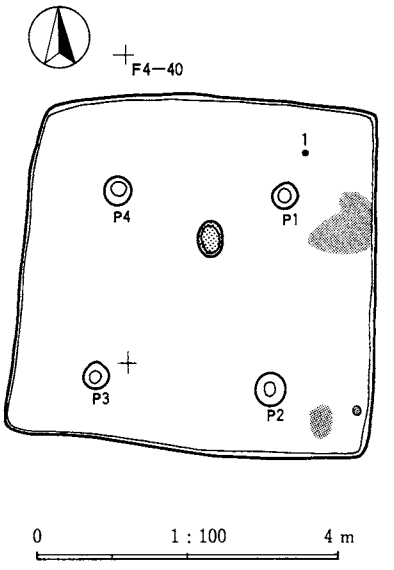


第113図　032号住居跡

は、かく乱によるものと考えられ、かく乱部中出土以外は、床面直上から出土した。かく乱を受けていない部分の北西際と南東壁際に焼土の散布がみられたが、焼失家屋というよりも、住居廃絶に伴う家屋構築材の焼却痕跡と考えられる。

０３４号住居跡（第114図、図版51）

壁はほぼ垂直に掘り込まれている。覆土はレンズ状堆積であり、小ロームブロックを少量、ローム粒を多く含む。壁溝、貯蔵穴は、検出されなかった。柱穴は、Ｐ１からＰ４が主柱穴で、ほぼ対角線上に掘り込まれていたが、Ｐ２、Ｐ３は壁際に位置していた。炉は楕円形を呈し、北壁中央から1.6ｍほど離れて位置し、使用痕があまり認められなかった。床面は全体的に軟質で、やや凸凹であった。



第114図　034号住居跡

出土遺物量は僅かであった。東壁北東隅寄りと南東隅の２か所で焼土が検出されたが、焼失家屋というよりは、住居廃絶後の焼却に伴うものと考えられる。Ｐ３の南東際に白色粘土の小塊が床面から若干浮いた状態で検出された。

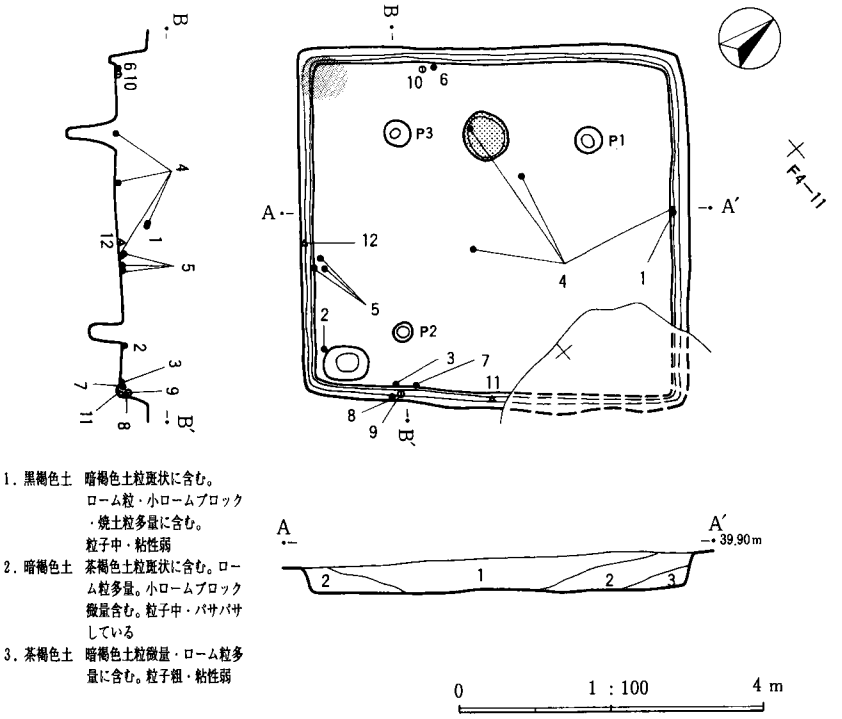
０３５号住居跡（第115図、図版51）

壁はほぼ垂直に掘り込まれている。覆土はレンズ状堆積であり、小ロームブロック、ローム粒、焼土粒を多く含む。壁溝は、幅0.2ｍ前後、深さ0.08ｍほどでほぼ均一に掘り込まれている。柱穴は、Ｐ１からＰ３が主柱穴で、ほぼ対角線上に掘り込まれていた。本来は、東隅付近のかく乱部にも柱穴が存在していたと考えられる。貯蔵穴は隅丸長方形を呈し、南隅に検出され、深さ0.5ｍほどの深い擂り鉢状を呈す。炉は、楕円形を呈し、北西壁中央部から0.85ｍほど離れたところに位置し、さほど使用頻度は高くなかった。床面は、中央部が硬質化し、炉跡の南東側に硬質化した貼り床を検出した。壁際は、全体的に軟弱であった。

遺物はそれほど多くはないが、南隅に若干の集中がみられ、床面の直上から出土した。とくに注目されるのは、鉄製の鉇（第193図、図版104）で刃先を下に柄を上に向けて、まるで立てかけてあったような状態で出土した。焼土が床面より若干浮いた状態で西隅に検出されたが、焼失家屋というよりも、住居廃絶に伴う家屋構築材の焼却痕跡と考えられる。また、土器、鉄器の他には小形の滑石製勾玉１点、軽石２点（住居跡の東西壁際から各１点ずつが出土）などの遺物が発見された。

０３６号住居跡（第116図、図版51）

壁はほぼ垂直に掘り込まれている。覆土はレンズ状堆積であり、ローム粒、焼土粒が若干含

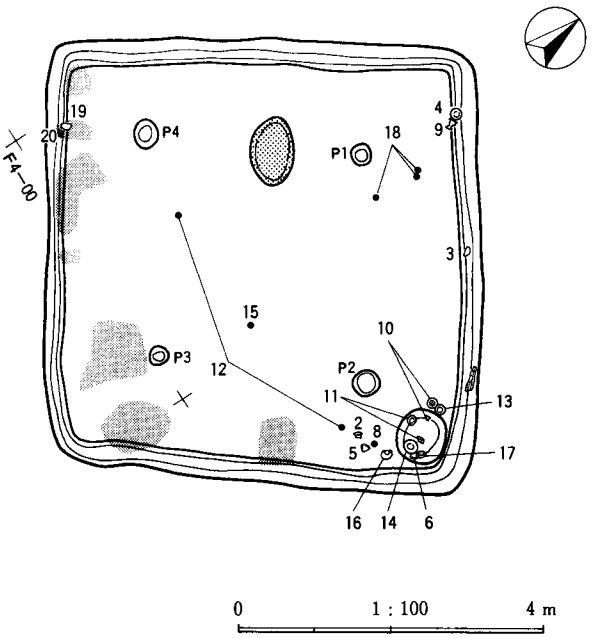


1. 黒褐色土　暗褐色土粒斑状に含む。ローム粒・小ロームブロック・焼土粒多量に含む。粒子中・粘性弱
2. 暗褐色土　茶褐色土粒斑状に含む。ローム粒多量。小ロームブロック微量含む。粒子中・パサパサしている
3. 茶褐色土　暗褐色土粒微量・ローム粒多量に含む。粒子粗・粘性弱

第115図　035号住居跡

まれている。壁溝は、深さ0.05m、幅0.3mほどで掘り込まれていた。柱穴は、P1からP4が主柱穴で、ほぼ対角線上に掘り込まれていた。貯蔵穴は隅丸方形を呈し、東隅に検出され、深さ0.3mほどの擂り鉢状を呈していた。炉は、長い楕円形を呈し、北西壁中央部から1mほど離れたところに位置し、使用頻度は高く、火床部が硬化しており焼土が充填されていた。床面は、中央部が若干硬質化しておりほぼ平坦であった。

遺物は多く出土し、東隅の貯蔵穴付近に集中している。また、焼土が南西壁際、南東壁際に集中して検出された。北東壁東隅寄りで壁に接して炭化材が出土したが、壁が崩れないための土留め用の施設



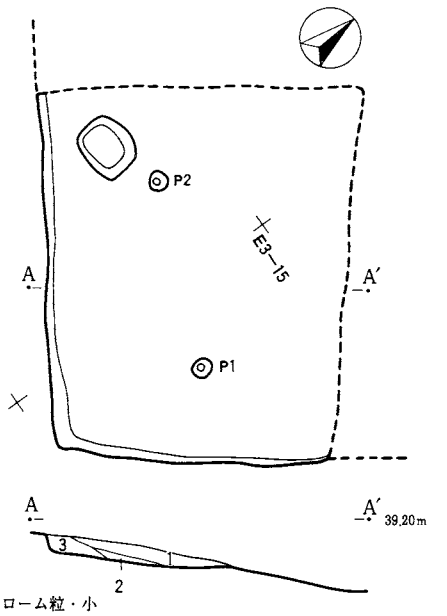
第116図　036号住居跡

に伴うものと思われる。焼失家屋というよりも、住居廃絶に伴う家屋構築材の焼却痕跡と考えられる。

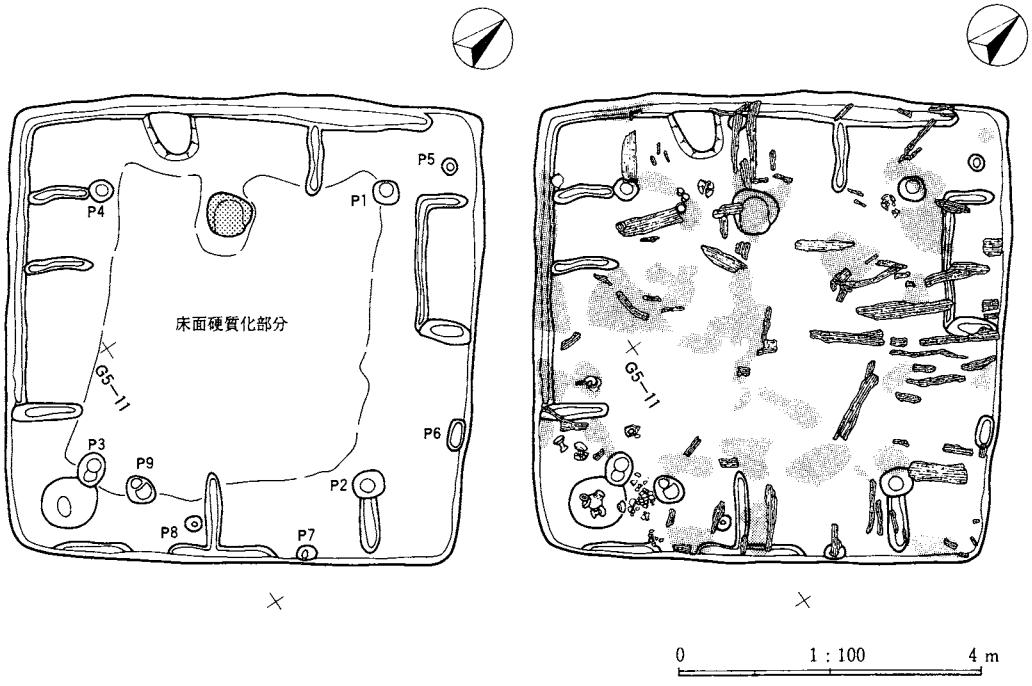
０３７号住居跡（第117図、図版52）

集落の中心から離れて、北側斜面に建てられている。調査に入る前に工事により、北東、北西側の壁、床を破壊されている。壁溝は、検出されなかった。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。

覆土はレンズ状堆積であり、ローム粒、小ロームブロックを含む。柱穴は、２本が検出され、本来は４本有るものと考えられる。貯蔵穴は隅丸長方形を呈し、西隅に検出され、深さ0.6ｍほどの深い擂り鉢状を呈していた。炉あるいはカマドは、検出されなかった。床面は、ほぼ平坦で全体的に軟弱であった。斜面なりにやや傾斜する。出土遺物量は僅かであった。



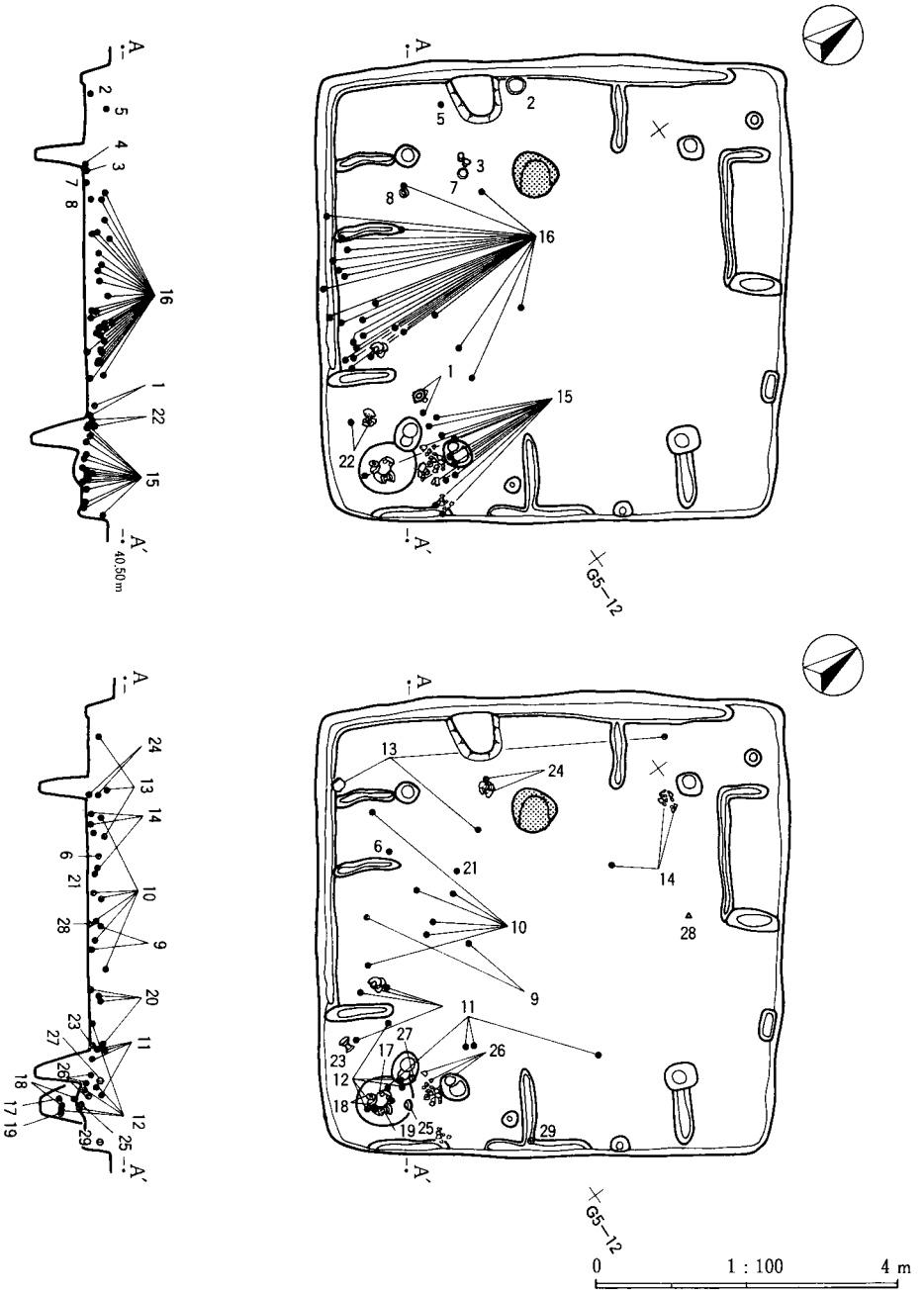
第117図　037号住居跡



第118図　043号住居跡(1)

０４３号住居跡（第118・119図、図版52・53）

壁はほぼ垂直に掘り込まれている。覆土はレンズ状堆積であり、焼土を多量に含む。壁溝は、



第119図　043号住居跡(2)

深さ0.06～0.1m、幅0.25～0.45mほどあり北隅付近を除く北西壁、南隅付近を除く南西壁付近、北東、南東壁の一部に断続的に掘り込まれている。柱穴は、P1からP4が主柱穴で、ほぼ対角線上に掘り込まれていた。他の5本の柱穴は、副柱穴あるいは棚の支柱と考えられる。貯蔵穴は不正円形を呈し、南隅に検出され、深さ0.6mほどの深い擂り鉢状を呈していた。炉は、不正円形を呈し、北西壁やや南隅寄りから1.2mほど離れたところに位置し、使用頻度は高く、火床部が硬質化し焼土が充填されていた。床面は、ほぼ平坦で主柱穴の内側は硬質化していた。壁際は軟弱であった。

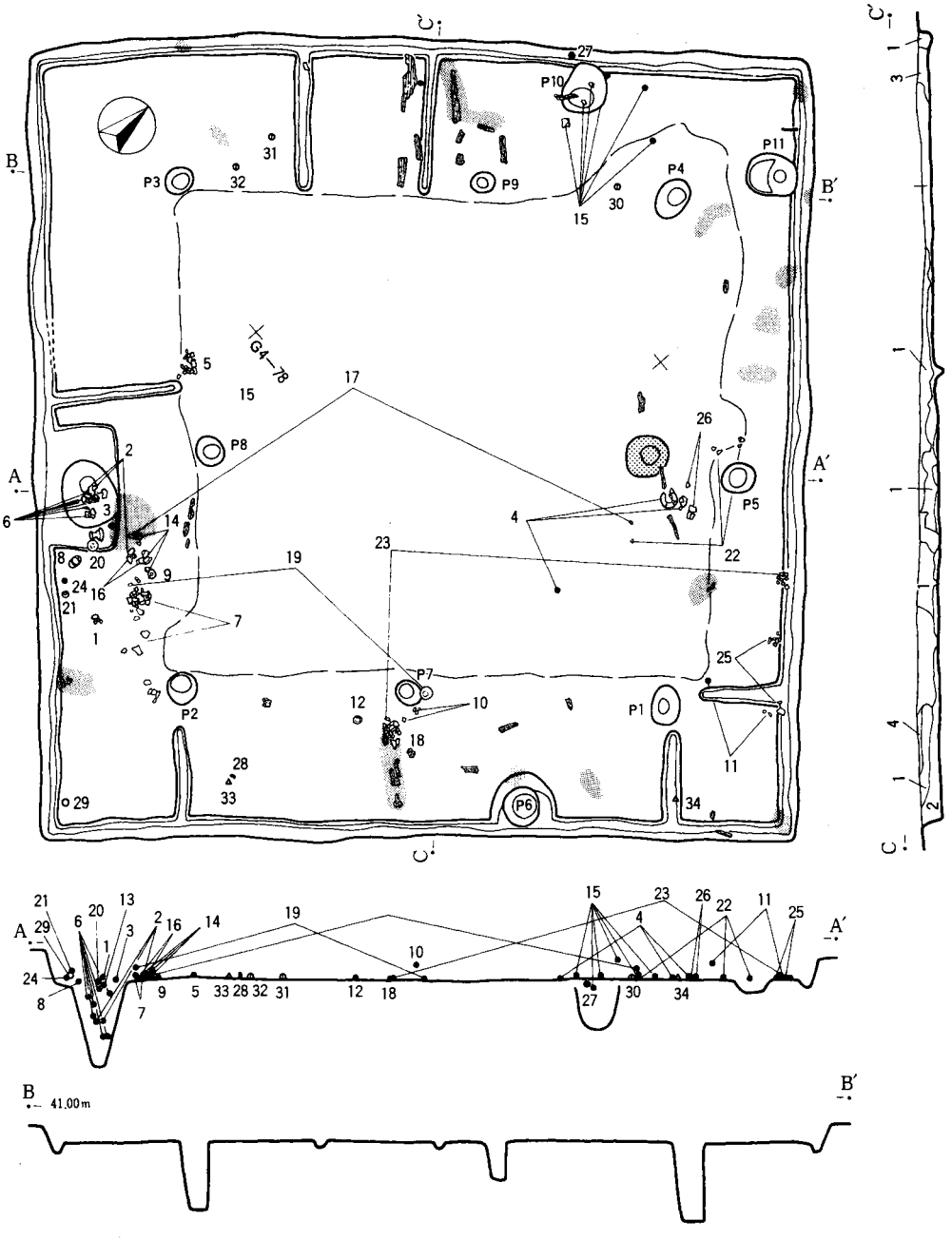
間仕切りと考えられる溝が、北西壁に1本、南西壁に3本、南東壁に2本、北東壁に2本検出されている。なお、北東壁に直交する2本の溝を結ぶ溝があり、「コ」の字状に巡っている。また、北西壁やや南西寄りのところには、上部平坦面0.5×0.5×高さ0.05mの半円形の踏み台状の土壇が築かれている。これは、ローム塊を主体にして突き固めたもので、おそらく出入口施設に伴うものと考えられる。

遺物は南西壁付近、南隅の貯蔵穴付近の床面および床面寄りやや浮いた状態で集中して多数出土した。床面のほぼ全面から、焼土塊、炭化材が多量に検出され、焼失家屋と考えられる。また、北側中央の床面からは板状の鉄製品が2点出土している。さらに、南隅付近では覆土下層から合計3点の軽石が発見された。

044号住居跡（第120図、図版53）

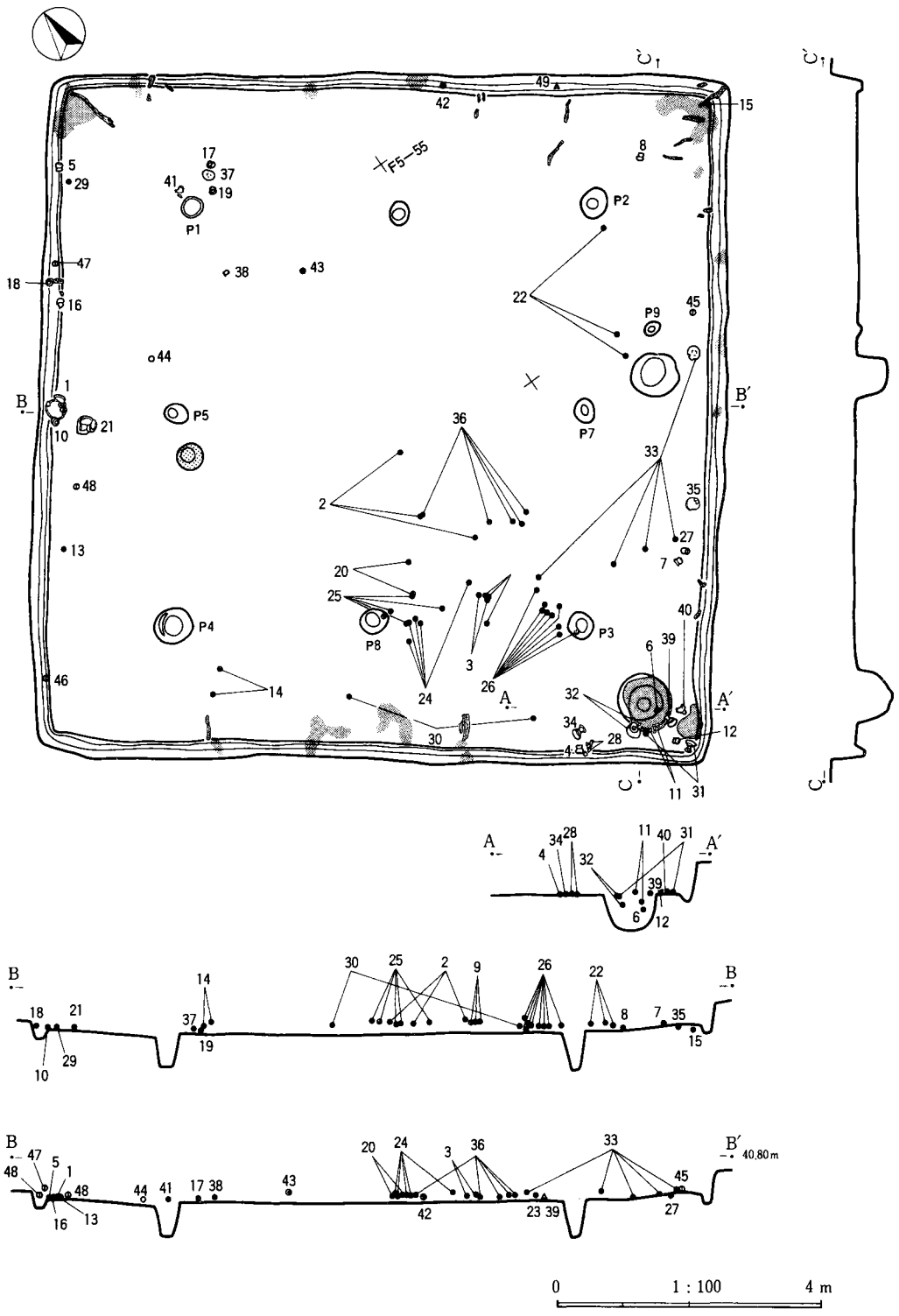
壁はほぼ垂直に掘り込まれている。覆土はレンズ状堆積であり、ローム粒を含む。壁溝は、深さ0.05～0.15m、幅0.25mで掘り込んでいた。柱穴は、P1からP4が主柱穴で、ほぼ対角線上に掘り込まれていた。主柱穴の並びの間に掘り込みの浅い副柱穴をもつ。このうち、P1、P4間の副柱穴は、炉を避けて北東壁寄りのところに掘り込まれている。この他に、北東壁北隅寄りおよび南西壁東隅寄りの壁際の対称位置に、また、北東壁北隅寄りに検出された柱穴は、上屋構造に関連すると考えられる。貯蔵穴は長い楕円形を呈し、南西壁中央やや南寄りに検出され、深さ1.1mほどの深い擂り鉢状を呈していた。貯蔵穴の周辺を1.7×1.0×0.1mの長方形の浅い掘り込みが囲んでおり、使用時には蓋の存在が考えられる。炉は、不正な円形を呈し、北東壁中央から1.6mほど離れたところに位置していた。床面は、ほぼ平坦で主柱穴の内側が硬質化していた。壁際が軟弱であった。間仕切りと考えられる溝が、北東壁に1本、南東壁に2本、南西壁に1本、北西壁に2本検出された。

遺物は貯蔵穴内およびその周辺、四方の壁際に集中がみられ、ほぼ床面から出土した。焼土塊、炭化材が四方の壁際に床面よりやや浮いた状態で検出されたが量が少なく、家屋の焼失の結果というよりは、住居廃絶後の凹みに廃材等の焼却に伴うものと考えられる。また、P10東側の周溝内から石製紡錘車が、東側壁寄りの床面から鑿と小札状の鉄製品が出土した。さらに滑石製勾玉、軽石、砥石なども発見された。



1．黒色土　しまりがない
2．黒褐色土　ローム粒含む。ややしまり有
3．暗褐色土　ローム粒・ロームブロック・炭化粒含む。しまり有
4．黒褐色土　炭化粒多量。粘性有

第120図　044号住居跡



第121図　045号住居跡

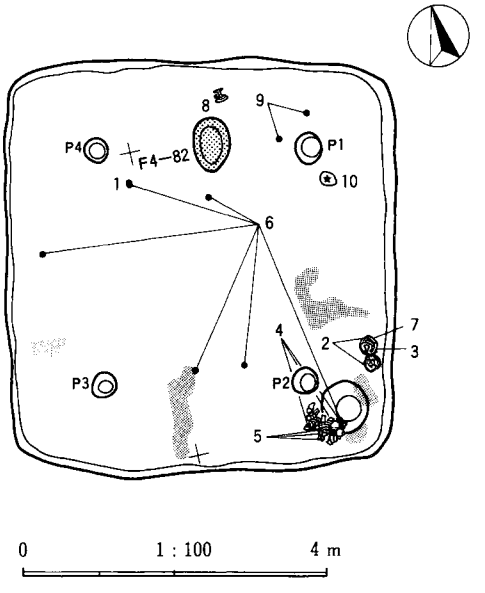
０４５号住居跡（第121図、図版54）

壁はほぼ垂直に掘り込まれている。覆土はレンズ状堆積であり、焼土粒を若干含む。壁溝は深さ0.14～0.8m、幅0.3mで掘り込んでいた。柱穴は、P1からP4が主柱穴で、ほぼ対角線上に掘り込まれていた。主柱穴の並びの間に貯蔵穴は副柱穴をもつ。貯蔵穴は南隅と南西壁中央やや北寄りに2か所検出され、南隅のものは円形を呈し、深さ0.55mほどの深い擂り鉢状を呈し、南西壁中央やや北寄りのものは不正円形を呈し、深さ0.45mほどの逆台形状を呈していた。炉は、円形を呈し、主柱穴の並びの間の北西壁中央やや南隅寄りから2.2mほど離れたところに位置し、さほど使用頻度は高くなかった。床面は、ほぼ平坦で全体的に軟弱であった。

遺物は南隅の貯蔵穴付近、P3の北側付近に集中がみられ、貯蔵穴付近は床面で、P3の北側付近は床面よりやや浮いた状態で出土した。焼土塊、炭化材が北東壁際、南西壁際で検出されているが、総量は僅かであった。焼失家屋というよりも、住居廃絶に伴う家屋構築材の焼却痕跡と考えられる。南隅の貯蔵穴の直上および壁際で灰白色粘土塊が検出された。また、北側周溝ほぼ中央からは線刻のある石製紡錘車が出土した。ほかに、石製紡錘車がもう1点、曲刃鎌磨石、軽石、砥石なども発見された。

０４６号住居跡（第122図、図版55）

壁はほぼ垂直に掘り込まれている。覆土はレンズ状堆積であり、ローム粒を含む。壁溝は、検出されなかった。柱穴は、P1からP4が主柱穴で、ほぼ対角線上に掘り込まれていた。貯蔵穴は南東隅に検出され、不正円形を呈し、深さ0.5mほどの深い擂り鉢状を呈していた。炉は、長い楕円形を呈し、北壁中央から0.7mほど離れたところに位置し、使用頻度は高く、火床部が硬化しており焼土が充填されていた。床面は、ほぼ平坦で全体的に軟弱であった。



第122図　046号住居跡

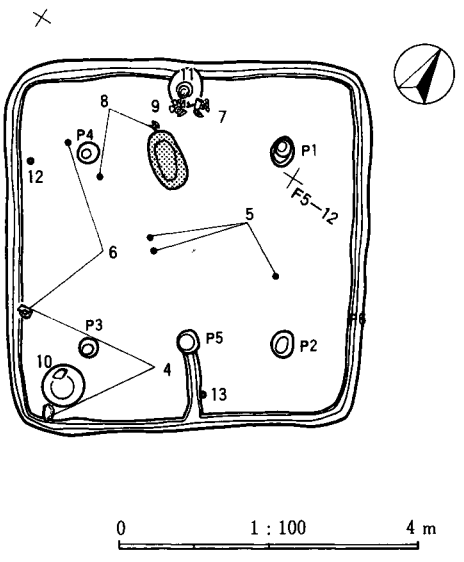
遺物は貯蔵穴付近と炉の周辺に集中が認められた。焼土塊が、東壁の南寄り、南壁中央、西壁の南寄り、貯蔵穴付近の壁際に壁に直交する方向に検出されたが、焼失家屋というよりは住居廃絶後の焼却に伴うものと考えられる。また、台石が出土している。

０４７号住居跡（第123図、図版55）

壁はほぼ垂直に掘り込まれている。覆土はレンズ状堆積であり、ローム粒を含む。壁溝は、深さ0.02～0.05m、幅0.2～0.25mほどで掘り込まれている。柱穴は、P1からP4が主柱穴で、ほ

ぼ対角線上に掘り込まれていた。P2とP3の間の柱穴は副柱穴と考えられる。またこの柱穴と南東壁との間に間仕切りと考えられる溝が検出された。貯蔵穴は南隅と北西壁中央壁際に2か所検出され、南隅のものは円形を呈し、深さ0.5mほどの深い擂り鉢状を呈し、北西壁中央壁際のものは楕円形を呈し、深さ0.5mほどの深い擂り鉢状を呈していた。炉は、長い楕円形を呈し、北西壁中央やや南隅寄りから1mほど離れたところに位置し、あまり使用頻度は高くなく、やや火床部が硬化していた。床面は、ほぼ平坦で全体的にやや硬質化していた。

遺物は炉の周辺、南の壁際で集中して出土している。

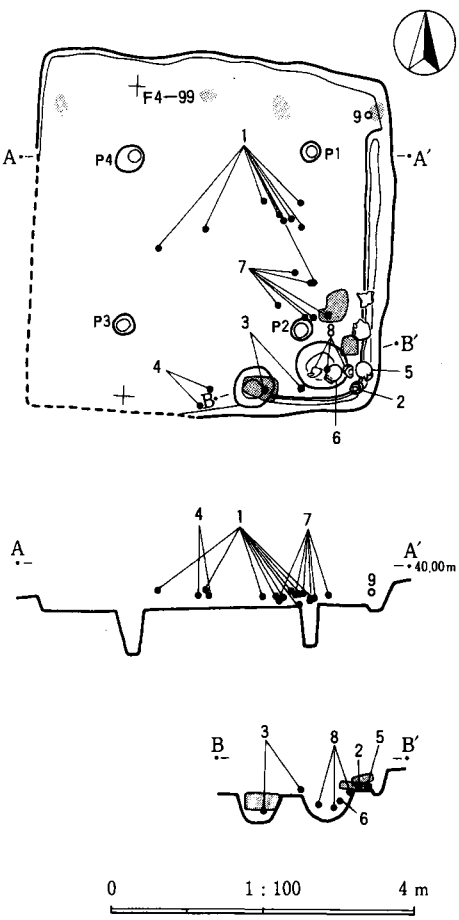


第123図　047号住居跡

０４８号住居跡（第124図、図版56）

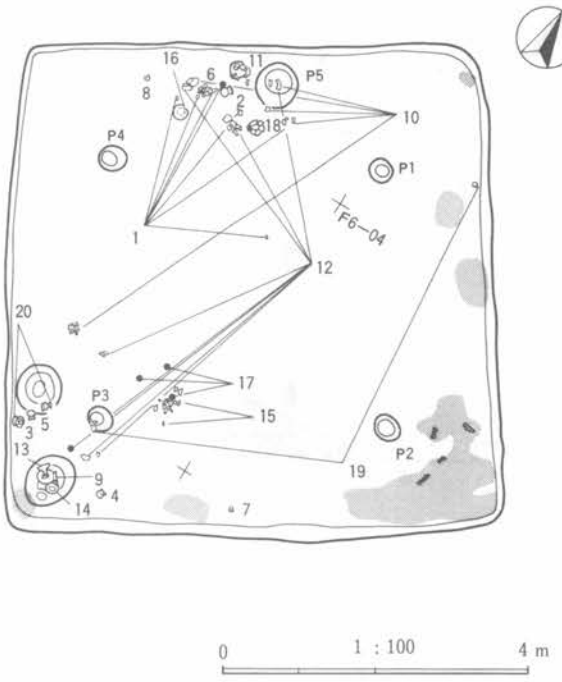
壁はほぼ垂直に掘り込まれている。西壁と南壁の一部はかく乱により破壊されていた。覆土はレンズ状堆積であり、ローム粒を含む。壁溝は、深さ0.04m、幅0.25～0.3mほどあり東壁と南壁の一部に掘り込まれていた。柱穴は、P1からP4が主柱穴で、ほぼ対角線上に掘り込まれていた。貯蔵穴は東南隅とその西側に並んで2か所検出され、東南隅のものは楕円形を呈し、深さ0.35mほどの擂り鉢状を呈し、その西側のものは不正円形を呈し、深さ0.35mほどの擂り鉢状を呈していた。炉は、確認することができなかった。床面は、ほぼ平坦で全体的に軟弱であった。

遺物は床面中央付近と南隅の貯蔵穴付近に集中しているが、住居跡中央付近は床面よりやや浮いた状態で、貯蔵穴付近は床面直上に検出された。焼土塊が北壁沿いに床面から浮いた状態で検出されたが、家屋焼失に伴うものではなく、住居廃絶



第124図　048号住居跡

後の焼却に伴うものと考えられる。貯蔵穴付近の床面および西側の貯蔵穴内からは、白色粘土塊が検出された。とくに西側の貯蔵穴からは、覆土上層の0.25ｍほどをこの白色粘土で充填していた。また、粘土の下の黒色土層内からは「カキ」の破片が２点検出された。



第125図　049号住居跡

０４９号住居跡（第125図、図版57）

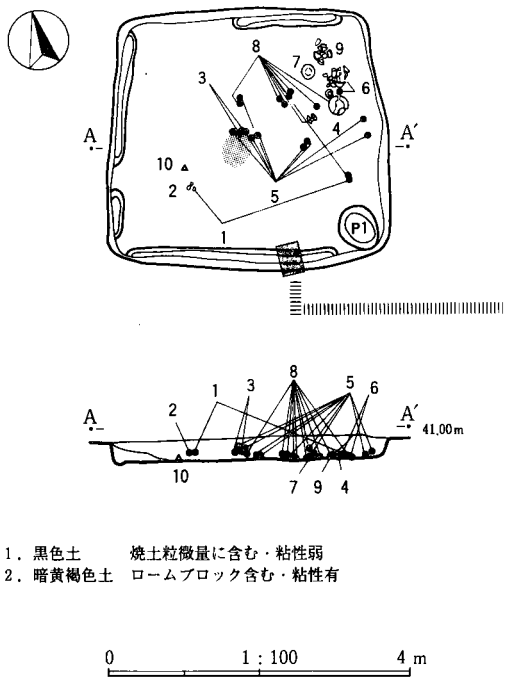
壁はほぼ垂直に掘り込まれている。覆土はレンズ状堆積であり、ローム粒、ハードローム粒を含む。柱穴は、Ｐ１からＰ４が主柱穴で、ほぼ対角線上に掘り込まれていた。壁溝は、検出されなかった。貯蔵穴は南隅とその西側に並んで２か所、北西壁中央やや北寄りに１か所の計３か所に検出された。南隅のものは、楕円形を呈し、深さ0.4ｍほどの逆台形状を呈し、南隅側に柱穴をもつ。その西側のものは、不正円形を呈し、深さ0.45ｍほどの擂り鉢状を呈していた。北西壁中央やや北寄りのものは、円形を呈し、深さ0.4ｍほどの擂り鉢状を呈していた。炉は、確認することができなかった。床面は、ほぼ平坦で全体的にあまり硬質化してなかった。

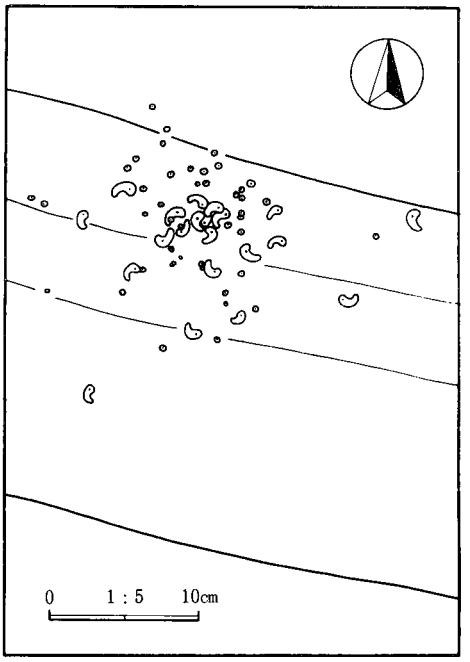
遺物は完形品に近い土器が多く、破損しているものも接合によりかなりの部分まで復元できるものが多かった。南隅の貯蔵穴付近と北西壁の貯蔵穴付近に集中が見られる。焼土塊は、東隅と北東壁際、南東壁際に床面からやや浮いた状態で検出された。家屋焼失に伴うものではなく、住居廃絶後の焼却に伴うものと考えられる。

０５０号住居跡（第126図、図版58）

壁はほぼ垂直に掘り込まれている。覆土はレンズ状堆積であり、ローム粒、焼土を若干含む。壁溝は、深さ0.04～0.08ｍ、幅0.2～0.3ｍほどで掘り込まれ、北壁、西壁、南壁の一部に断続的に掘り込まれていた。柱穴は、検出されなかった。貯蔵穴は楕円形を呈し、南東隅に検出され、深さ0.1ｍほどの浅い皿状を呈していた。炉は、検出されなかった。床面は、ほぼ平坦で全体的に軟弱であった。

遺物のうち、土器は北東隅の床面直上に集中して、滑石製模造品は南壁中央やや東寄りの壁際に勾玉21個、臼玉50個が集中して出土した。焼土塊が、住居跡中央やや南側に検出され、最



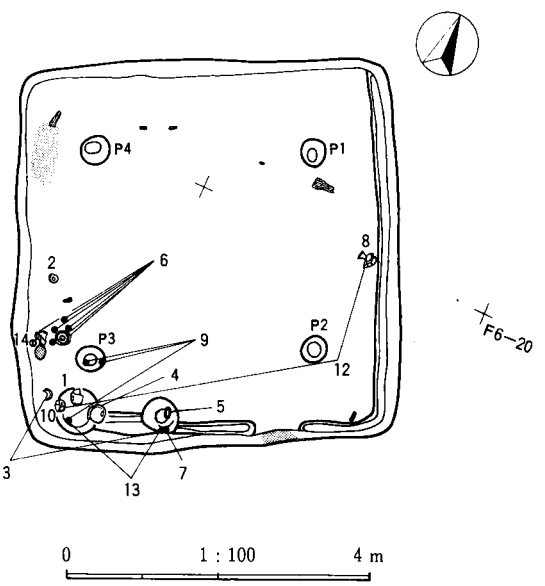


第126図　050号住居跡・出土遺物

初、炉かとも思われたが掘り込みも硬化面も検出されないため、炉であるとは考えられない。

０５１号住居跡（第127図、図版58）

壁はほぼ垂直に掘り込まれている。覆土はレンズ状堆積であり、焼土粒、炭化粒、ローム粒を含む。壁溝は、深さ0.05～0.1m、幅0.2mほどで北東壁、南東壁の一部に断続的に掘り込まれている。柱穴は、Ｐ１からＰ４が主柱穴で、ほぼ対角線上に深くてしっかりと掘り込まれていた。貯蔵穴は南隅に２か所並んで検出され、西側のものは円形を呈し、深さ0.15mほどの浅い擂り鉢状を呈し、東側のものは、不正円形を呈し、深さ0.25mほどの擂り鉢状を呈していた。炉は、検出されなかった。床面は、ほぼ平坦で全体的に軟弱であった。



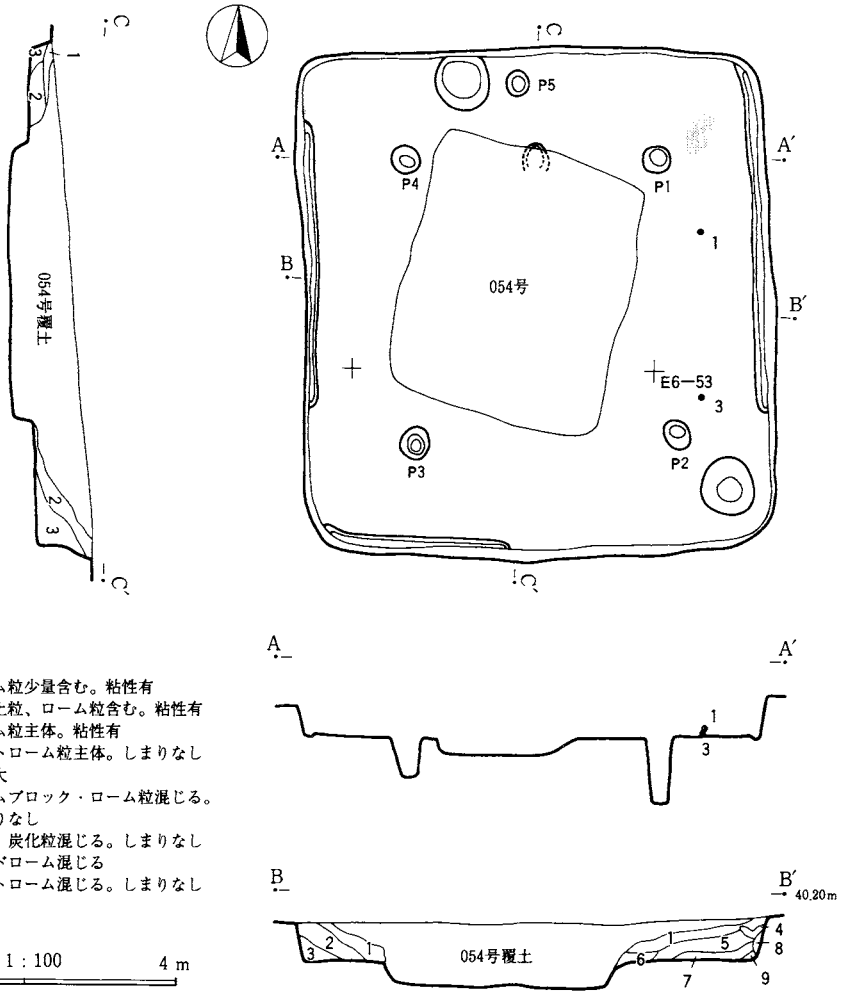
第127図　051号住居跡

遺物は南隅の貯蔵穴付近に集中して出土した。白色粘土塊が、Ｐ３西側壁際で検出された。焼土塊が、南東壁際やや西寄りと南西壁際やや東寄りに2か所検出された。炭化材が、北西壁付近

と南東壁際で出土した。量も多くなく焼失家屋というよりは住居廃絶後の焼却に伴うものと考えられる。

０５２号住居跡（第128図、図版59）

壁はほぼ垂直に掘り込まれている。覆土はレンズ状堆積であり、ローム粒を若干含む。壁溝は深さ0.04ｍ、幅0.2ｍほどで東壁、西壁、南壁の一部に断続的に掘り込まれている。柱穴は、Ｐ１からＰ４が主柱穴で、ほぼ対角線上に深くしっかり掘り込まれていた。北壁中央やや壁に入り口の施設に伴う柱穴が検出された。貯蔵穴は南東隅と北壁際中央やや西寄りに２か所検出され、南東隅のものは、不正円形を呈し、深さ0.4ｍほどの深い擂り鉢状を呈し、北壁際のものは、不正円形を呈し、深さ0.55ｍほどの擂り鉢状を呈する。炉は、北壁中央から1.25ｍほど離れたところに位置し、重複している古墳時代後期の054号住居跡により大半が破壊されていた。床面は、



052

1．黒褐色土　ローム粒少量含む。粘性有
2．暗褐色土　黒色土粒、ローム粒含む。粘性有
3．暗黄褐色土　ローム粒主体。粘性有
4．暗黄褐色土　ソフトローム粒主体。しまりなし
5．黒褐色土　粘性大
6．暗黄褐色土　ロームブロック・ローム粒混じる。しまりなし
7．褐色土　焼土、炭化粒混じる。しまりなし
8．暗黄褐色土　ハードローム混じる
9．褐色土　ソフトローム混じる。しまりなし

0　1：100　4 m

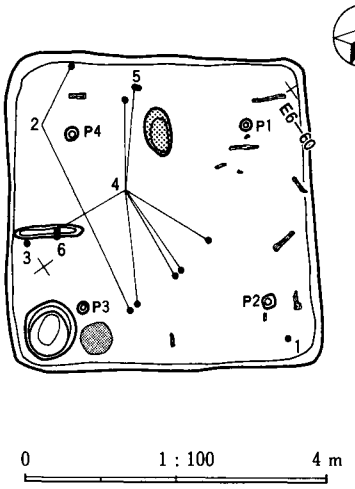
第128図　052号住居跡

中央部を054号住居跡により破壊されており、硬質化していたかどうかは不明である。壁際は、ほぼ平坦で全体的に軟弱であった。焼土塊、炭化材が北壁際に検出されたが、焼失家屋に伴うものではなく、住居廃絶後の焼却に伴うものと考えられる。

出土遺物は僅かであった。

０５３号住居跡（第129図、図版59）

壁はほぼ垂直に掘り込まれている。覆土はレンズ状堆積であり、ローム粒、焼土粒を含む。壁溝は、検出されなかった。柱穴は、Ｐ１からＰ４が主柱穴で、ほぼ対角線上に深さ0.1～0.15ｍと浅くて、かなり小さく掘り込まれていた。貯蔵穴は不正円形を呈し、南隅に検出され、深さ0.2ｍほどの浅い擂り鉢状を呈していた。炉は、長い楕円形を呈し、北西壁中央から0.7ｍほど離れたところに位置し、使用頻度はあまり高くなく火床部は硬質化していなかったが焼土が充填されていた。床面は、ほぼ平坦で全体的に軟弱であった。南西壁中央やや南寄りに壁と直交して間仕切りと考えられる溝が検出された。



第129図　053号住居跡

出土遺物は僅かであるが、炉西側と貯蔵穴北側に若干の集中が見られる。北東壁、北西壁付近に炭化材が検出されたが、焼失家屋というよりは住居跡廃絶後の焼却に伴うものと考えられる。貯蔵穴東側に灰白色粘土塊が検出された。

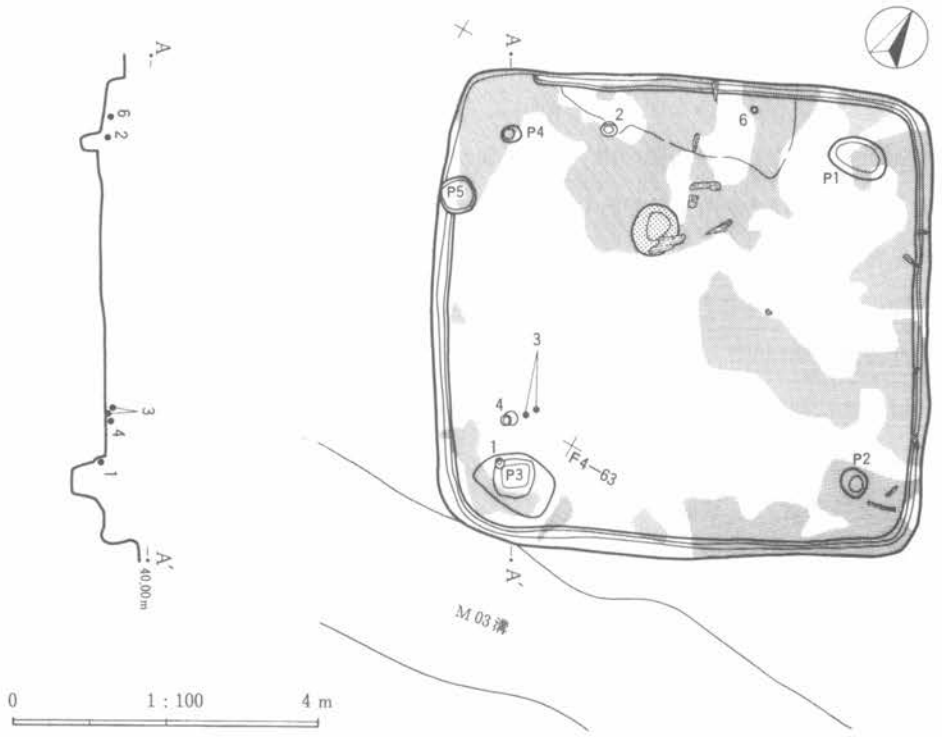
０５５号住居跡（第130図、図版59・60）

壁はほぼ垂直に掘り込まれている。覆土はレンズ状堆積であり、焼土粒、炭化材粒を若干含む。壁溝は、深さ0.05ｍ、幅0.2ｍほどあり、北西隅で一部途切れている。柱穴は、Ｐ１からＰ４が主柱穴で、ほぼ対角線上に掘り込まれていたが、Ｐ２、Ｐ４は径0.2～0.4ｍ、深さ0.3ｍであるのに、Ｐ１は径0.7×0.5ｍ、深さ0.15ｍ、Ｐ３は径1.1×0.7ｍ、深さ0.3ｍと大きさがアンバランスである。南西壁際やや西隅寄りに副柱穴が検出されている。貯蔵穴は検出されていないが、Ｐ３と掘り込みが一緒になってしまった可能性がある。炉は、楕円形を呈し、北西壁中央やや西寄りから1.7ｍほど離れたところに位置し、使用頻度はあまり高くなかった。床面は、ほぼ平坦で全体的に軟弱であったが、北西壁際だけは硬質化していた。

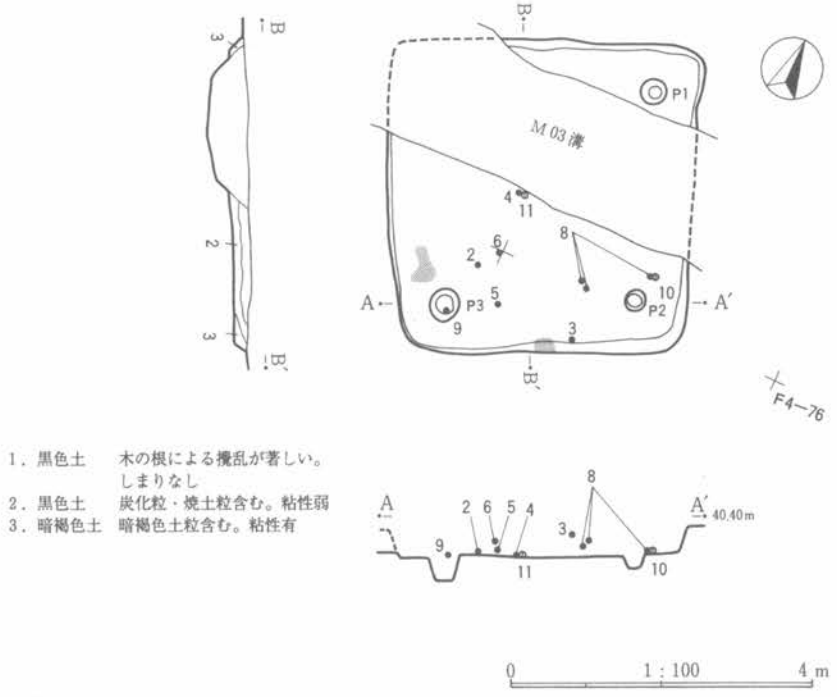
出土遺物は少ない。焼土塊が床面中央部と南西壁際を除いて、広い範囲に厚く堆積していたが、炭化材が少ないので住居廃絶後の焼却に伴うものと考えられる。

０５６号住居跡（第131図、図版60・61）

壁はほぼ垂直に掘り込まれている。覆土はレンズ状堆積であり、焼土粒、炭化材粒を若干含



第130図　055号住居跡



1．黒色土　木の根による攪乱が著しい。しまりなし
2．黒色土　炭化粒・焼土粒含む。粘性弱
3．暗褐色土　暗褐色土粒含む。粘性有

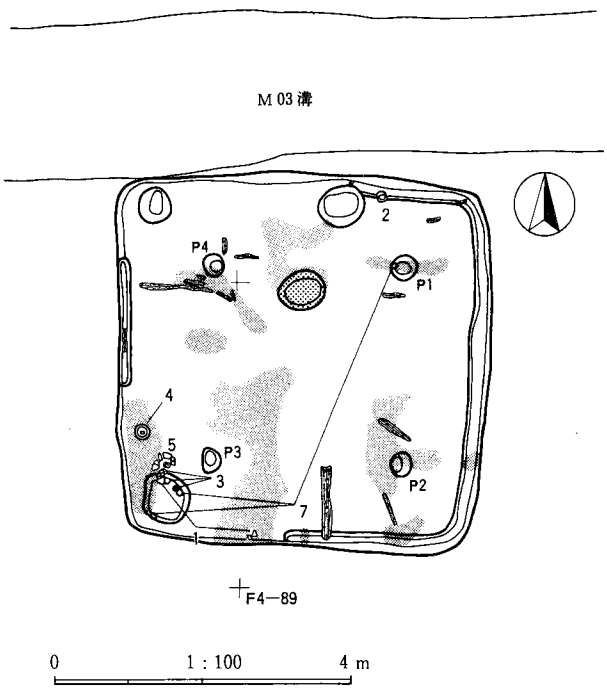
第131図　056号住居跡

む。壁溝、貯蔵穴、炉は、検出されなかった。柱穴は、P1からP3が主柱穴で、ほぼ対角線上に掘り込まれていた。本来は4本であったと考えられるが、溝M03により全体の1／3ほどが破壊されているため、検出できなかった。床面は、ほぼ平坦で全体的に軟弱であった。

遺物は僅かであったが、住居跡の南半分の床面からやや浮いた状態で出土した。焼土塊が南壁際中央とP3北側に2か所少量であるが検出されたが、焼失家屋というよりも、住居廃絶に伴う家屋構築材の焼却痕跡と考えられる。また、軽石が出土しており、製鉄に関連した住居から出土例が報告されていることから、製鉄と関係がある可能性がある。

057号住居跡（第132図、図版61）

壁はほぼ垂直に掘り込まれている。覆土はレンズ状堆積であり、ローム粒を少し、焼土粒を多く含む。壁溝は、深さ0.06～0.08m、幅0.2～0.3mほどあり西壁の一部と北壁、南壁の東半分と東壁に掘り込まれている。柱穴は、P1からP4が主柱穴で、ほぼ対角線上に深くしっかり掘り込まれていた。貯蔵穴は南西隅、北東隅、北壁中央やや東寄りに3か所検出され、南西隅のものは不正方形を呈し、深さ0.4mほどの逆台形状を呈し、北東隅のものは、不正円形を呈し、深さ0.2mほどの皿状を呈し、北壁中央やや東寄りのものは、楕円形を呈し、深さ0.25mほどの皿状を呈していた。炉は、楕円形を呈し、北壁中央から1.2mほど離れたところに位置し、使用頻度はあまり高くなかった。床面は、ほぼ平坦で全体的に軟弱であった。

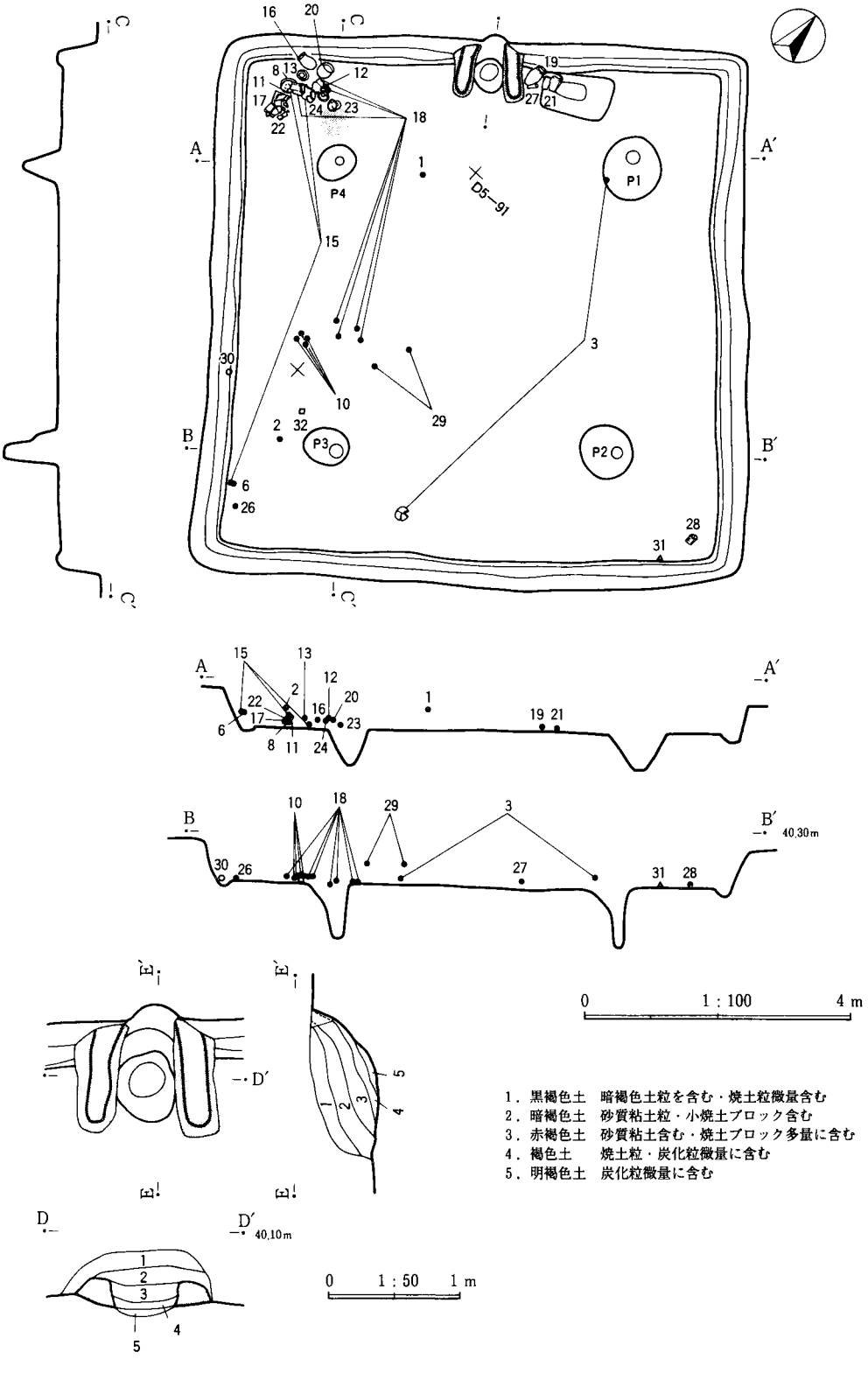


第132図　057号住居跡

遺物はそれほど多くはないが、南西隅の貯蔵穴付近に若干の集中がみられる。焼土塊、炭化材が床面の1/5ほどに覆土下層から床面にかけて検出されたが、焼失家屋というよりは住居廃絶後の焼却に伴うものと考えられる。

038号住居跡（第133図、図版62）

壁はほぼ垂直に掘り込まれている。覆土はレンズ状堆積で、ローム粒を含む。壁溝は、深さ0.1m、幅0.3mほどありカマド部を除いて掘り込まれている。柱穴は、P1からP4が主柱穴で、ほぼ対角線上に位置し、4本とも抜き取り痕が認められた。貯蔵穴は長方形を呈し、カマド東側に検出され、深さ0.5mほどの逆台形状を呈していた。カマドは、北西壁中央にあり、天井部は



第133図　038号住居跡

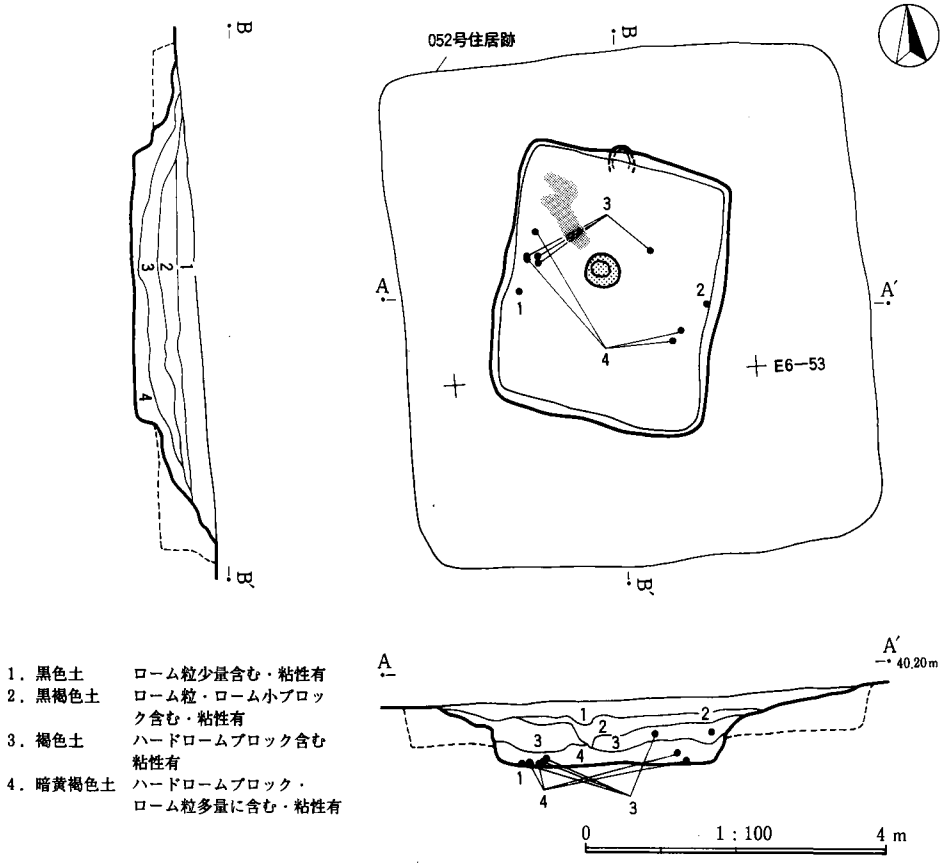
崩落していた。両袖は、山砂で構築され、カマド尻の壁外への掘り込みは僅かで、遺物は検出されなかった。床面は、ほぼ平坦で若干硬質化しているが貼り床ではない。

遺物は完形品に近いものが多く出土し、貯蔵穴付近、西隅、P4北側に集中が見られ、床面からはやや浮いた状態であった。土器のセット資料としては良好な物であった。

054号住居跡（第134図、図版59・62・63）

壁はほぼ垂直である。覆土はレンズ状堆積であり、ローム粒、ロームブロック粒を含む。古墳時代中期の052号住居跡と重複する。土層の観察から、052号住居跡が廃絶後、埋まり切ってから覆土を掘り込んで構築されている。土層が擂り鉢状を呈すのは、覆土が軟弱なため壁が崩れたためか、052号住居跡が埋まり切らないうちに054号住居跡を構築したためかは不明である。壁溝、柱穴、貯蔵穴は、検出されなかった。炉は不正円形を呈し、北西壁中央やや北寄りから1.1mほど離れたところに位置し、使用頻度は高く、火床部が硬質化し焼土が充填されていた。床面は、ほぼ平坦でハードローム面まで掘り込まれているため、全体的にやや硬質化していた。

出土遺物は僅かであった。焼土塊が北西壁際に検出されたが、少量であり焼失家屋に伴うものよりは住居廃絶後の焼却に伴うものと考えられる。



1．黒色土　ローム粒少量含む・粘性有
2．黒褐色土　ローム粒・ローム小ブロック含む・粘性有
3．褐色土　ハードロームブロック含む粘性有
4．暗黄褐色土　ハードロームブロック・ローム粒多量に含む・粘性有

第134図　054号住居跡

2．出土土器

土器の分類について

出土土器は少量の須恵器を除いてすべて土師器である。実測したものは、完形、復元した物を合わせて313個体、このうち 308個体を本報告に収録した。

ここでは主体となる古墳時代中期の土器について分類の基準を述べる。なお、量的に少ない須恵器と038号住居跡、054住居跡から発見された後期の土器は分類を行っていない。

分類は、まず器種ごとに大別した後、各器種内で細分を行った。類別したのは壺、坩、甕、坏、甕、甑、椀・鉢、高坏、の９つである。

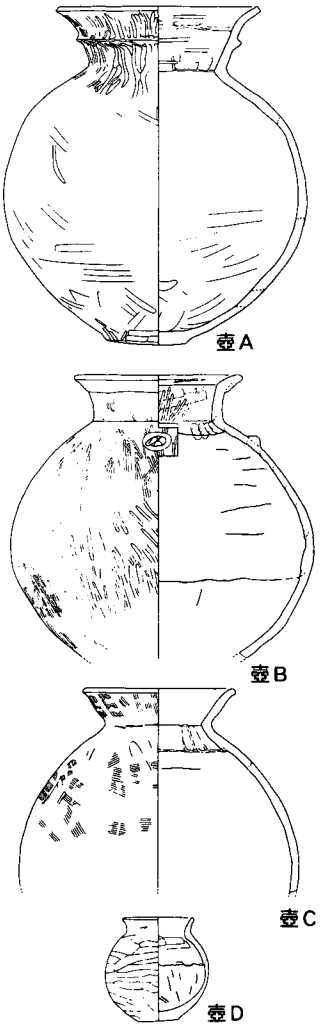
壺　全体的な器形のほかに口縁部の形態と最終的な調整で分類した。具体的には、二重口縁および複合口縁、胴部外面の比較的ていねいなヘラミガキなどを指標とした。ただし小形の壺と大形の坩の一部には双方の分離が困難なものがあった。最終的に壺として分類したものは全部で16点、これは全体の５％にあたる。

壺A　口縁部に突帯状の段を持つもの。
この突帯状の段は粘土紐の貼りつけによって形成される。本遺跡例では、すべて口唇部にはっきりとした平坦面をもつ。胴部はほぼ球形で最大径を中位よりやや上に持つ、ヘラミガキは壺Ｂに比べて、ていねいである。

壺B　いわゆる「折り返し」ふうの複合口縁となるもの。
口唇に近い部分に粘土帯を貼りつけ、厚みを持たせている。本遺跡例では、複合部に装飾を持つものは認められない。胴部はほぼ球形で最大径を中位よりやや上に持つ。ていねいにヘラミガキを行ったものと、そうでないものがある。口径・複合部の巾にバラエティーがあるが、数が少ないので細分はしない。

壺C　単純に開く口縁となるもの
口縁はほぼ直線的に外傾し、口縁端部には平坦面を持つようである。胴部外面にはハケ状の工具による調整痕が認められる。内面頸部のすぐ下には指頭による押さえの跡が残る。一点しか出土しておらず、胴部下半の形状は不明。胎土は粗い小石を多く含む白っぽい土であるが搬入品の可能性は少ない。

壺D　壺Ｃと同様に単純口縁の壺であるが容量が極端に少なく、

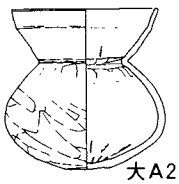


小壺とでも呼ぶべきもの。小形の甕、大形の坩との分離が難しいが、以下の特徴から壺として分類した。外面の最終調整はミガキや砂粒の動きがみられるケズリ様のナデで、細かいミガキが認められない場合でもナデはていねいに施されていること、赤彩の痕跡があること。

坩　基本的な器形には違いがほとんど認められないので、まず、大きさで大と小の二つに分類した。基準として、口径・器高・胴部最大径の各寸法について10cmを目安とした。

さらに底部・胴部の形状で細分を行った。底部については丸底と平底に分けた。平底としたもののなかには中央付近を削って窪みを持たせた底の一群がある。本来は別のグループとして扱うべきかとも思うが、平底との区別があいまいな土器も複数存在したので今回は一括して平底とした。胴部の形状については球形のものと屈曲するものの二つに分けたがここにも分類の難しいものが存在する。頸部から口縁部にかけての形状・開き具合などにもバラエティーがあるが今回は細分していない。

また調整が雑な坩のなかには、小形の甕と分離できないものがあった。

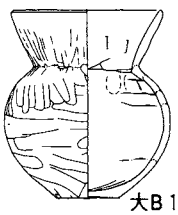

大A2

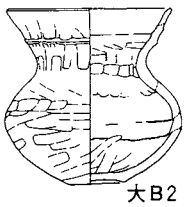
大形坩A　各寸法が10cm以上の坩のなかで丸底

（1　丸底のうち球形の胴部を持つもの）

本遺跡では出土例がない

2　丸底のうち屈曲した胴部を持つもの

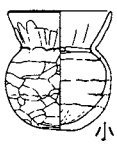

大B1

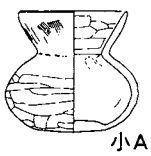

大B2

大形坩B　各寸法が10cm以上の坩のなかで平底

1　平底のうち球形の胴部を持つもの

2　平底のうち屈曲した胴部を持つもの

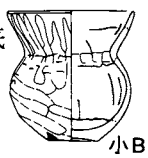

小A1

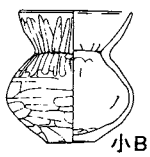

小A2

小形坩A　各寸法の一つ以上が10cm以下の坩のなかで丸底

1　丸底のうち球形の胴部を持つもの

2　丸底のうち屈曲した胴部を持つもの

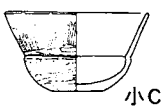

小B1


小B2

小形坩B　各寸法の一つ以上が10cm以下の坩のなかで平底

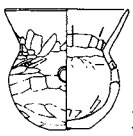
1　平底のうち球形の胴部を持つもの

2　平底のうち屈曲した胴部を持つもの


小C

小形坩C　各寸法の一つ以上が10cm以下で明らかに球形・屈曲以外の胴部を持つもの

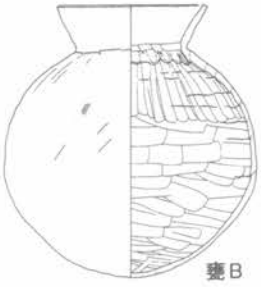
鉢　2点出土している。形状や調整は小形の坩形土器と同じで、1点は小形坩A1と、もう1点は小形坩B1と同形である。前者の穿孔は焼成前、後者の穿孔は焼成後のものである。出土点数が少ないので細分はしない。


鉢

甕　図上復元したものも含めて全体の25％にあたる79個体が分類された。容量の著しく小さいものを小形甕とした。さらに底部の形状でＡとＢの二つに分けたが丸底の甕Ｂは１点だけである。鎌取遺跡では平底の甕Ａのなかでも１ａ、１ｂ、２ａ、２ｂなどの形態的特徴を持つものが主体となっている。

甕Ａ

甕　Ａ　底部が平底となるもの、口縁部や胴部の形態が下のように細分されるので、その組み合わせに従がって多くのバラエティーがある。しかし量的に多いのは１ａ、２ａのタイプで整形や調整の手法は共通するものが多い、口縁部はヨコナデ、胴部外面はハケあるいはヘラケズリによる整形後ナデによって調整されるのが一般的である。


甕Ｂ

甕　Ｂ　底部が丸底となるもの、一個体しか出土しておらず本遺跡では特殊な例である。

小型甕

小形甕　容量の小さい甕（便宜的に 1,600ccより小さいもの）を小形甕とした、基本的な形状や成整形に手法は甕Ａと共通である。甕Ａと同様に底部は平底で口縁部や胴部の形態にはいくつかのバラエティーが見られるが量的に多いのは１ａのタイプである。

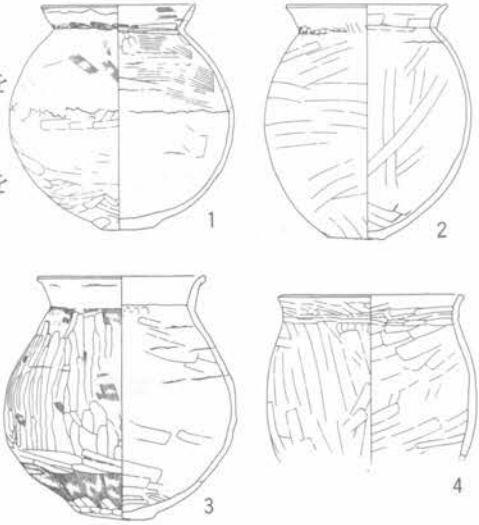
胴部形態のバラエティー

1　球形の胴部で、最大径を胴部中位に持つ

2　たまご形・いちぢく形の胴部で、最大径を胴部上位に持つ

3　たまご形・いちぢく形の胴部で、最大径を胴部下位に持つ

4　肩の張らないやや長めの胴部を持つ



甕胴部のバラエティー

口縁部形態のバラエティー

a　頚部から口縁部にかけて「く」の字状に外傾する

b　頚部から口縁部にかけてゆるやかに外反する

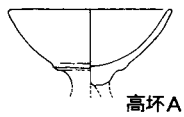
c　頚部から直立し口縁端部が外反する

甕口縁部のバラエティー

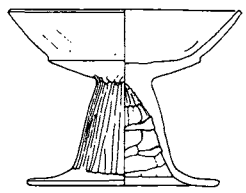
＊分類は甕Ａ１ａ、小形甕２ｂのように記載した

高坏　甕や坩と並んで量的に多い器種で全体の37％にあたる118個体が分類された、坏部・脚部の形状や脚部の整形手法には多くのバラエティーがあり幾つかの細分が可能である、ここではある程度量的にまとまるものだけを類別し、全体の器形が分からないものや個体数の少ないものは一括して扱った。

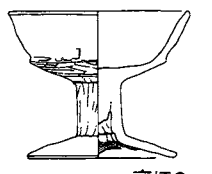
高坏A　aタイプの坏部を持つもので、ていねいな調整が施こされ、作りは薄い、坏部は深く外面の接合部付近に段や稜を持つ、脚部は残存例がないが中空で接合部から裾部にかけて「ハ」の字状に開く形となろう、大部分のものが赤彩される。


高坏A

高坏B　坏部はb、d、eの三種があり、多くの個体は坏部の外面に明確な稜を持つ。接合部から稜までは水平に近く開き、稜で傾きを変え口縁までほぼ直線的に広がる口唇部は丸みを持つものと平坦面を持つものがある。脚部はa、b、dの三タイプで、aが最も多い。整形や調整の手法はほぼ共通で、口縁・裾端部はヨコナデ、坏部内外面ともハケ整形後ていねいなナデかヘラミガキ、坏部外面の稜はこのナデやヘラミガキによって形成されるていることが多い。脚・裾部外面の最終調整もていねいなナデかヘラミガキ、脚・裾部内面はc、d、e、のどれか。この高坏Bは鎌取遺跡のなかでは量的に最も多いタイプである。


高坏B

高坏C　cの坏部にeの脚部が付く。最終調整はていねいなナデ、ほとんどすべてのものが赤彩されている。出土する遺構に偏りがある。


高坏C

高坏D　ここでは個体数が少ないもの、全体の器形が分からないものを一括して扱う

1　iの坏部にcの脚部が付く、脚部の内面調整はd、大形の高坏。

2　dの坏部にaの脚部が付く、たいへんシャープな仕上がりで口縁・裾の端部は平面を作り出している、脚部の内面調整はd、最終調整はナデ。

3　bの坏部にgの脚部が付く、脚部の内面調整はc、裾部を欠損しているが直線的に大きく開くと思われる。ミガキ様の細かいナデで最終的に調整され、坏内外面と脚外面が赤彩されている。

4　fの坏部を持つもの、脚部以下は不明

5　gの坏部を持つもの、脚部以下は不明

6　hの坏部を持つもの、口縁部と脚部以下は不明

7　脚部の形態はおそらくd、脚部の内面調整はa、全体の形状は不明

坏部形態のバラエティー

a．口径の割に深い坏部、外面接合部近くに稜を持ち内湾しながら口縁にいたる

b．坏部の内外面に稜を持ち、稜から口縁にかけてほぼ直線的に、あるいはごく僅かに外反ぎみに開く

c．坏部の内外面に稜を持ち、稜から口縁にかけてほぼ直線的に、あるいはごく僅かに内湾ぎみに開く（bによく似ているがやや小ぶりのものが多く、坏部の開き方が僅かに違う）

d．坏部の内外面に稜を持ち、稜から口縁にかけて外反しながら開く

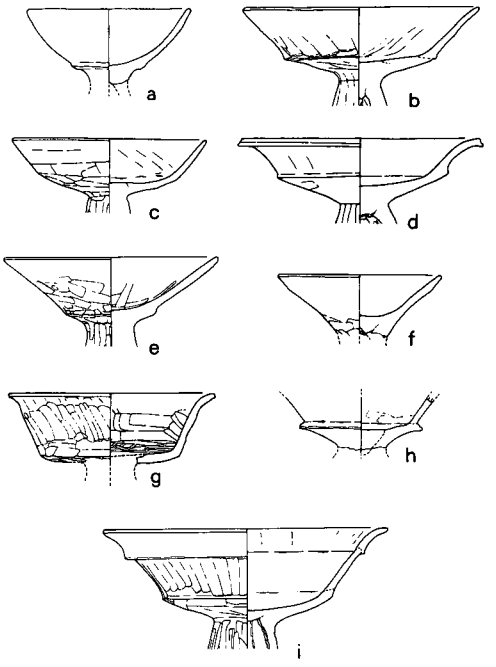
e．坏部の外面に稜を持ち、稜から口縁にかけてほぼ直線的に開く

f．接合部から口縁にかけて直線的に開く

g．dよりさらに屈曲し「箱形」に近い

h．坏部の外面に突帯をもつ

i．いわゆる「複合口縁」状で有段となる



高坏坏部のバラエティー

脚部・裾部形態のバラエティー

a．脚部は下方が開く円錘形で裾部との境に明らかな稜を持ち、裾部は大きく開く

b．脚部は下方が開く円錘形で裾部との境に明らかな稜を持ち、裾部は水平に近く開く

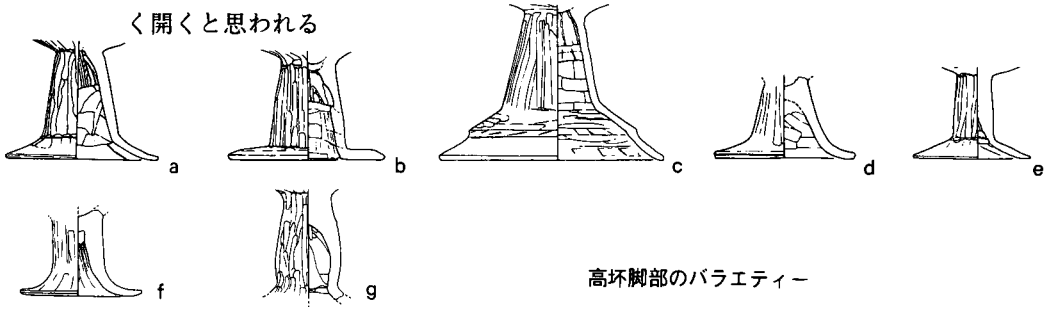
c．脚部は下方が開く円錘形で裾部との境に明らかな稜を持つ、裾部は段を持ち、大きく開く

d．脚部は下方が開く円錘形で裾部との境に明らかな稜はなく、漸移的に大きく開く裾部へ移行する

e．脚部は円筒形で裾部との境に明確な稜を持ち、裾部は直線的に大きく開く

f．脚部は円筒形で裾部との境に明確な稜はなく、漸移的に大きく開く裾部へ移行する

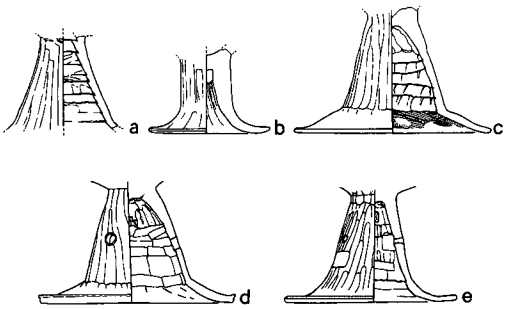
g．脚部は円筒形に近いが少し中膨れしている、裾部との境には稜が有り、裾部は大きく開くと思われる



高坏脚部のバラエティー

脚部・裾部の内面調整のバラエティー

a．輪積み痕をそのまま残すもの
b．いわゆる「絞り目」をそのまま残すもの
c．指ナデ痕と輪積み痕を残すもの
d．下半分をヘラナデで調整したもの
e．全体をヘラナデで調整したもの



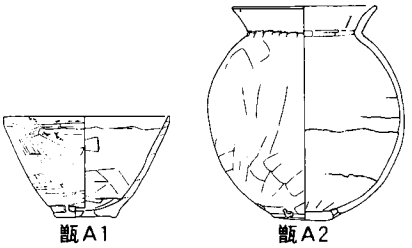
脚部内面のバラエティー

甑　2点出土している。

甑A　いづれも土器焼成後の穿孔で、転用された甑

1　底部から口縁にかけて直線的に開く土器の底部に穿孔、孔は1つ。

2　甕A2aの底部と胴部最下端に穿孔、孔は3つ。


甑A1　甑A2

坏　体部の形状によって分類。さらに坏Aについては、深さや底部の形状によって細分した。図化した土器の約3％に相当する9個体が確認されたが、出土する遺構に偏りがある。

坏A　底部から内側に湾曲して口縁端部にいたるもの

1　坏Aのなかで浅いもの（便宜的に器高が口径の25％以下の坏を「浅い」とした）

a　浅い坏Aのなかで丸底のもの

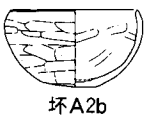
b　浅い坏Aのなかで平底のもの

2　坏Aのなかで深いもの（便宜的に器高が口径の25％以上の坏を「深い」とした）

a　深い坏Aのなかで丸底のもの

b　深い坏Aのなかで平底のもの

坏A1a　坏A1b


坏A2b

坏B

坏B　体部上半から外側に反って口縁端部にいたるもの

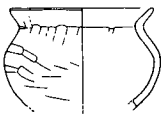
埦・鉢　埦や鉢に代表される小形土器の一群を扱う、本来は別々に分類されるべき複数の器種を含んでいる可能性が高いが、現時点では坏としたもの以外は分離できなかった

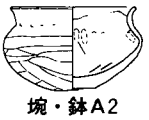
埦・鉢A　横につぶれた球形の胴部に外傾もしくは外反する口縁がつく一群、口縁からくびれ部にかけての形状で細分した

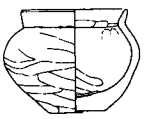
1　くびれ部で「く」の字状に屈曲し外傾する直線的な口縁を持つ、口縁は比較的長く、口縁端部が最大径となる

2　1と同じような器形だが口縁は短く最大径は胴部にある

3　2よりもさらに短い口縁がつく、口縁は外傾するものと外反するものがある


椀・鉢A1


椀・鉢A2


椀・鉢A3

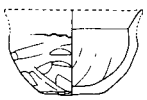
椀・鉢B　口縁がゆるいS字状となる一群、口唇端部の径が最大径となる

1　口縁内面にはっきりした稜を持つ、底部から内湾ぎみに広がる

2　口縁内面の稜は明確でない、底部は少し上げ底ふうになり底部から内湾ぎみに立ち上がる、口縁端部は丸みを持たない

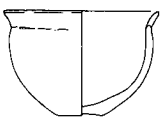
3　くびれ部に輪積み痕が残っており口縁部が「複合口縁」状になっている、器形にはバラエティーがある

4　くびれ部は体部から連続してゆるやかにS字状となる、1～3に比べると曲線的である、器高が大きく、浅い上げ底となるものが多い


椀・鉢B1

椀・鉢B2

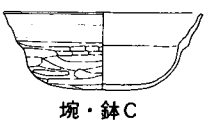
椀・鉢B3

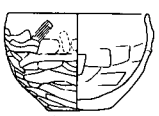

椀・鉢B4

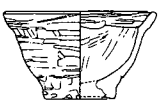
椀・鉢C　丸底ではないが不安定な底部から胴部は内湾気味に立ち上がる、頸部で小さな段が付き、さらに口縁に向かって直線的に開く。全体に薄くつくられているが整形はさほど丁寧ではない。口縁ヨコナデ、外面は横方向のヘラケズリ後ナデ、内面はケズリ？後ナデ。焼成は良好でかなり硬質な感じがする。

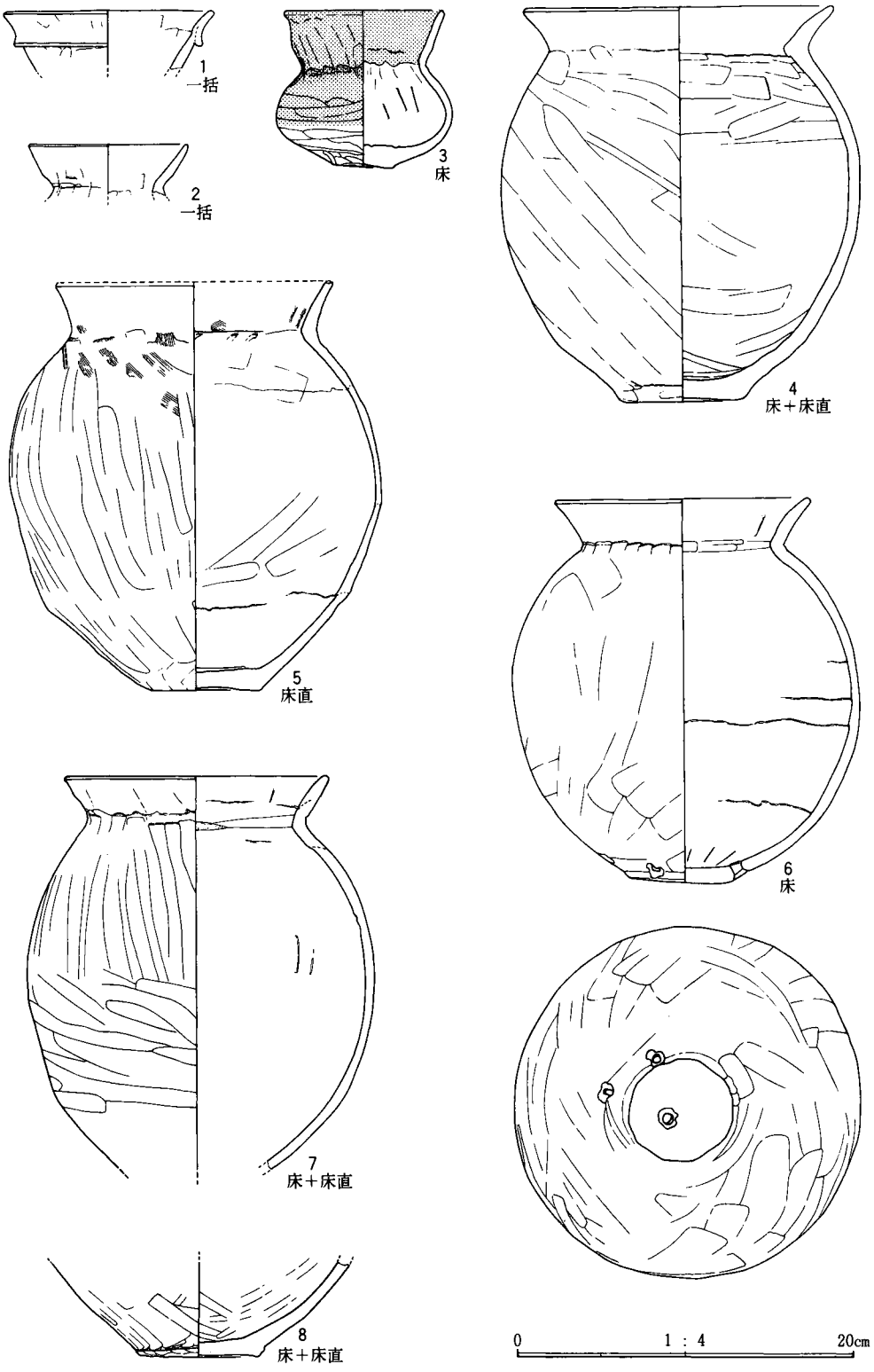
椀・鉢D　くびれ部を持たないものをまとめた。球形に近い体部にやや内湾する口縁を持つものと内湾ぎみに開く体部を持つものがある。

椀・鉢E　底部からほとんど丸みを持たずに立ち上がり、くびれ部からさらに外側に向かって開くもの。ミガキもしくはミガキ様のナデで丁寧に調整される。


椀・鉢C


椀・鉢D


椀・鉢E

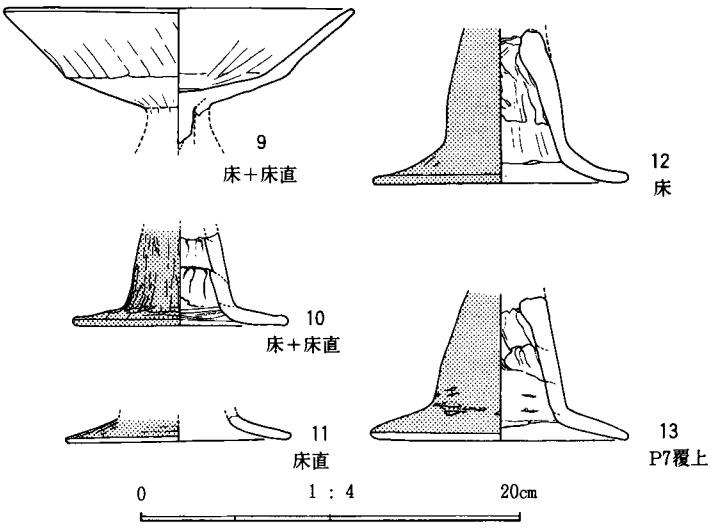


第135図　016号住居跡出土土器(1)

出土土器の説明

０１６号住居跡（第135・136図、図版65・66）

土器のほかに転用羽口、鉄滓、台石、礫片等が出土した。出土位置を記録した遺物は約55点、主だった遺物は覆土下層と床面から多く出土しており、平面的には、中央から西側の部分に集中する傾向が認められる。



第136図　016号住居跡出土土器(2)

１は複合口縁をもつ壺Ｂの口縁部破片。ミガキ、ヨコナデによる最終調整は比較的ていねいである。推定口径は小さい。

２、３は小形坩。いずれもハケ整形後、ケズリ様のナデで調整、口縁部はヨコナデ。最終調整は全体に粗く、器表面に凹凸も残る。３はＢ２に分類され、底部はやや窪んでいる。

４、５、７は甕Ａ２ａ。器形、容量はほぼ同じ。ケズリまたはハケ整形後、ナデで最終調整、口縁部はヨコナデ。５、７には煤の付着が認められる。８は甕の底部破片。

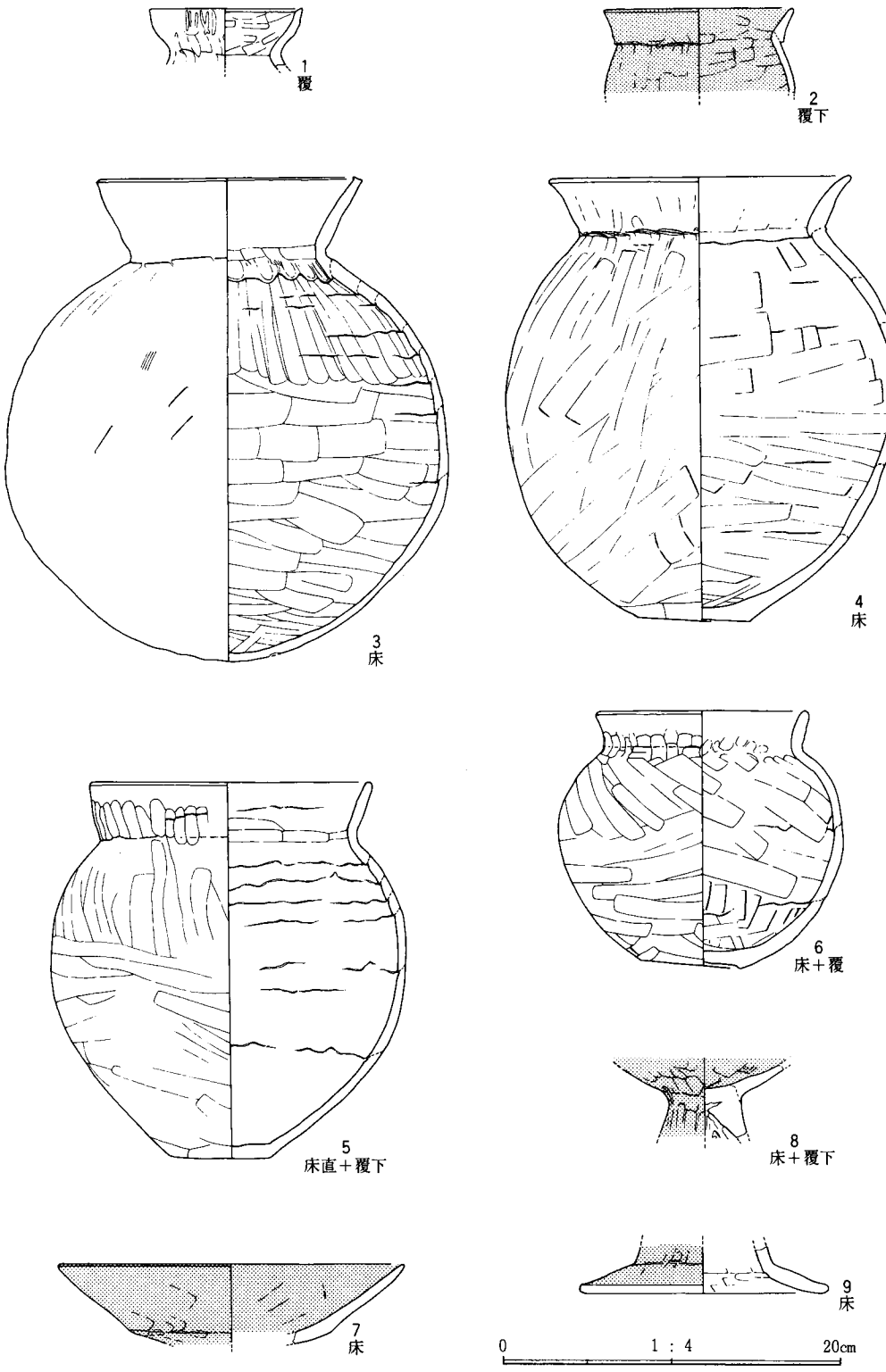
６は甕を転用した甑Ａ２。ケズリ整形後、かなりていねいなナデで最終調整、口縁部はヨコナデ、底部と胴最下半部に３か所、土器焼成後の穿孔が観察される。

０１７号住居跡（第137図、図版66）

土器のほかに鉄滓、礫片等が出土した。出土位置を記録した遺物は約41点、遺物の量は少なく甕以外の土器の遺存度も良くない。主だった遺物は覆土下層と床面から出土しており、平面的には西側、とくに貯蔵穴付近に集中する傾向が認められる。

１は小形坩、小破片のため器形は不明だが口唇は内傾する平坦面を有する。

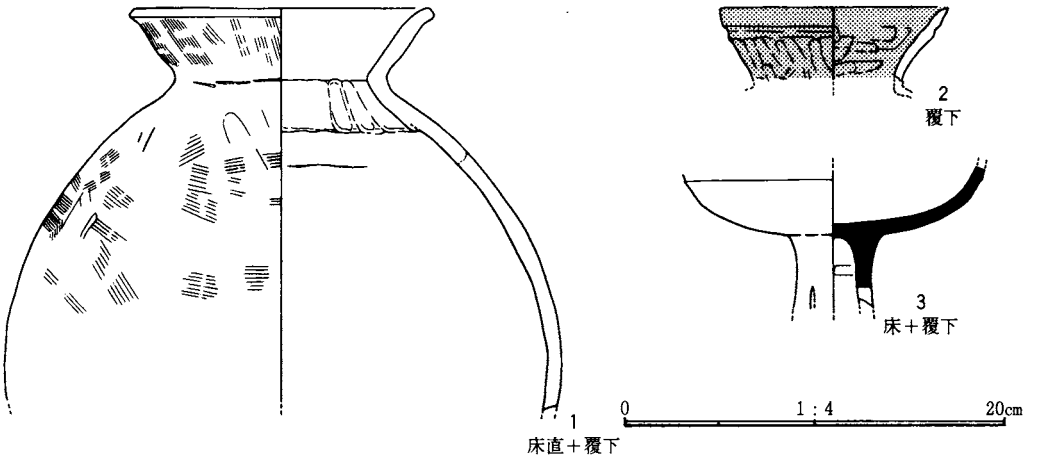
３は丸底の甕Ｂ、口唇部に明確な平坦面を持ち内側にやや突出する、胴部はほとんど球形に近い。外面口縁部から胴部上端にかけてヨコナデ、胴部はハケ整形後かなり丁寧なナデ、内面口縁部から頸部にかけてヨコナデ、胴部上端に顕著な指頭圧痕が残る、胴部上半は指？によるナデ、下半は横方向反時計回りのケズリ。胎土には砂粒が多く含まれ径５㎜ほどの大きなものもある、しかし焼成は良好。外面口唇部から底部にかけてと内面胴下半に煤が付着する、また内外面共部分的に黒斑も認められる、底部には細かい剝落がある。外面胴部下半に器面の最終調整に用いたと思われる布？の圧痕がある。器形や成整形手法に明らかに在地の系統とは異



第137図　017号住居跡出土土器

なるものがあり、鎌取遺跡では特異な土器だが搬入品との断定はつきかねる。

4～6は平底の甕、いずれもやや長めの胴部に「く」の字に外反する口縁部を持つ、4と5はA2a、6は小形甕1aに分類される。口縁はヨコナデ、胴部は内外面とも比較的ていねいなナデ調整で仕上げている。いずれも外面に煤の付着がみられる。



第138図　018号住居跡出土土器

018号住居跡（第138図、図版67）

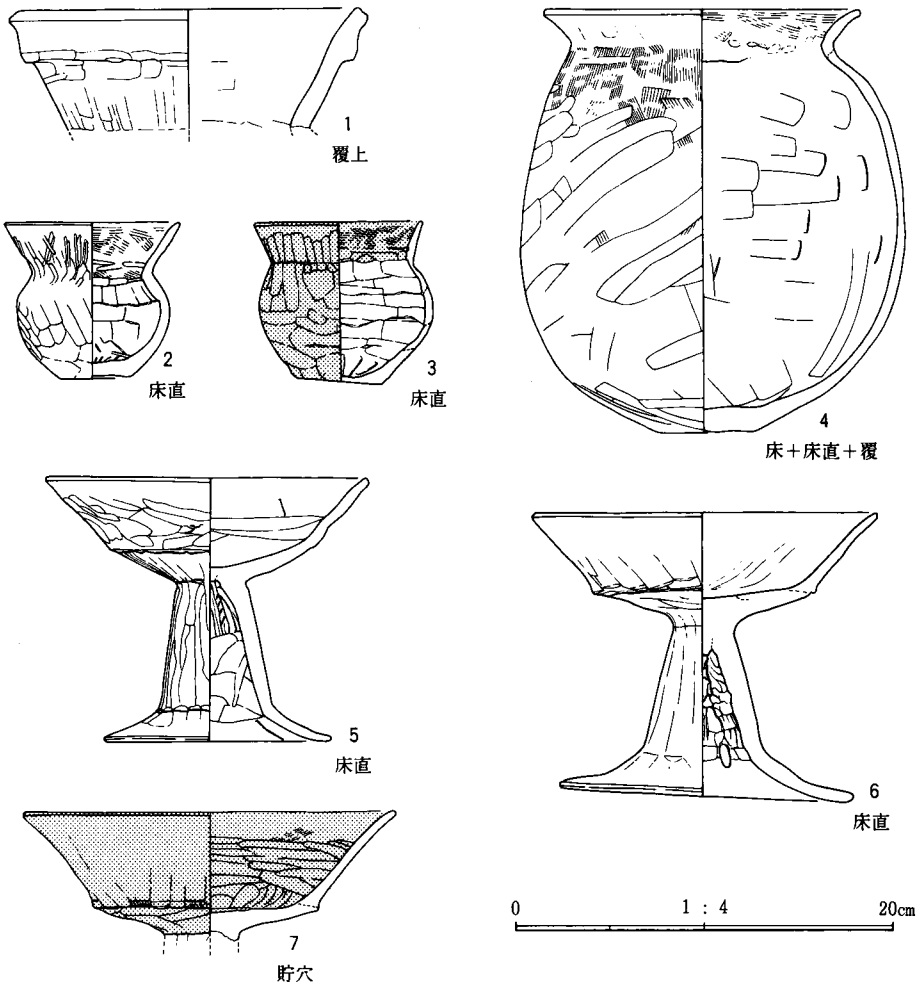
土器のほかに須恵器、砥石、軽石、鉄器、等が出土した。出土位置を記録した遺物は約38点、量は少量で、とくに図示できるものが少ない。遺物はほとんどが覆土下層と床面から出土しているが、平面的にまとまった傾向は認められない。

1は壺Cの上半部破片。口唇部に平坦面をもつ。外面はミガキかナデの前にハケ（6本／cm）整形、内面胴部上端には指頭による押さえ痕が残る。胎土は白っぽく、かなり大きな砂粒が多量に含まれる、焼成は良好。器表面の荒れが著しく調整など不鮮明。

3は須恵器の高坏。坏上半と脚部のほとんどを欠損。坏の残存部上端に弱い稜を持つ、稜より下位はロクロによるナデ、坏底部はロクロ回転によらない？ナデ。脚部上端の径は4.0cmと細く、接合部から2.5cmほど下に透かし孔の上端がある、透かし孔は3か所、残存する上端は細い切り込みだけで全体の形状は不明、脚部外面はロクロによるナデ、内面は指による横方向のナデ、胎土は白い砂粒を含み、くすんだ小豆色をしている。焼成は良好で硬質。色調は青灰色。坏部内面には松灰が溶着したと思われる斑点が認められる。陶邑産TK73か。

024号住居跡（第139図、図版67・68）

土器の他に鉄器、礫片が出土した。出土位置を記録した遺物は約20点、主たる遺物は床面と貯蔵穴中から多く出土しており、平面的には、西側の半分に集中する傾向が認められる。



第139図　024号住居跡出土土器

1は複合口縁を持つ壺Bの口縁部破片、内外面共ヘラケズリ後ナデに近いミガキ、作りは雑でミガキも粗い、他の土器と時間差がある可能性有。

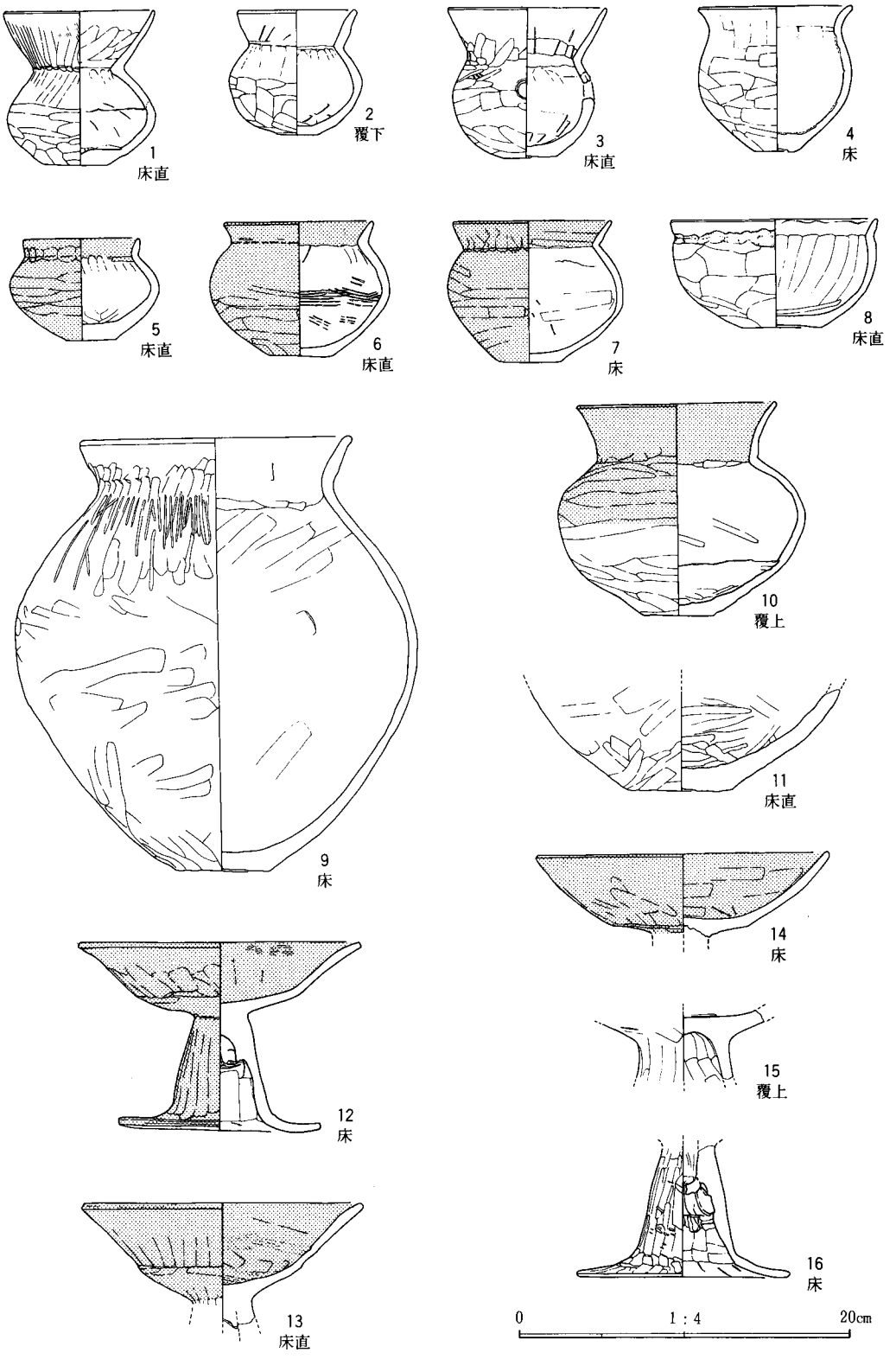
2、3は小形坩B1、ハケメ・輪積み痕が残るが調整はていねいである。

4は甕A3a、外面ハケ整形後斜めのヘラケズリ底部は縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のナデ、口縁ヨコナデ、最大径を胴部下位に持つずんぐりした器形。

5～7は高坏B、いずれも口唇は丸みがあり、坏部外面に明確な稜をもつ、脚部は裾に向かって太くなり、裾部との境には弱い稜ができる。脚部の内面には縦方向の指ナデの跡が顕著に残る、裾に近い部分は横方向のヘラナデで指ナデの跡を消している。

０２６号住居跡（第140図、図版68・69）

土器の他に台石等が出土した。出土位置を記録した遺物は約28点、量は少ないが、坩をはじめ、小形土器の完形、半完形品が多い。多数が覆土下層と床面から出土しているが、平面的に



第140図　026号住居跡出土土器

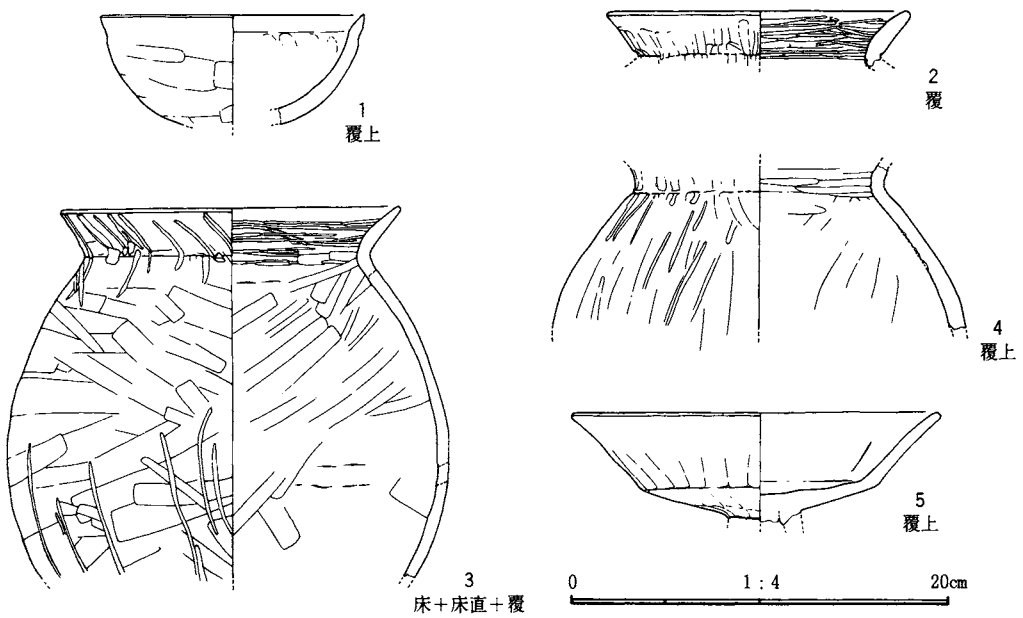
集中する場所は認められない。強いて言えば柱穴の外側、壁際から出土したものが多い。

3は鍵、器形は小形坩Ｂ1、胴部中位よりやや上に径1.1cmの円形孔がある、焼成前の穿孔と思われる、孔の周辺は磨滅している。口縁はヨコナデ外面はケズリに近いナデ内面は上半に指頭痕が残るが基本はヘラナデ。

4～8は埦・鉢。4はＢ4に分類され、底部は上げ底になっている。5～7はA類に分類され、器形・整形などに共通点が多い。調整は口縁ヨコナデ、胴部内外面ともていねいなナデ、屈曲の強いソロバン玉状の胴部に短く外反する口縁を持つ、三点とも外面と口縁内面に赤彩。8はＢ2、若干上げ底の底部から内湾して立ち上がり、弱く外反する短い口縁を持つ。

9・11は甕、9はやや縦長の胴部に「く」の字状に外反する口縁部を持つ甕Ａ2ａで、口唇は丸みがあり頸部の屈曲はさほどきつくない、最大径は胴部の中位にある。口縁はヨコナデ、外面頸部から胴中位までヘラナデ後粗いヘラミガキ、胴中位以下はヘラナデのみ、内面は横・斜めのナデ、外面胴部に煤付着。10は壺Ｃ？、肩の張った胴部にゆるやかに外反するやや長めの口縁が付く、口縁はヨコナデ、外面頸部以下はケズリ様のナデ、内面は横・斜めのナデ、口縁内面から外面胴部中位にかけて赤彩か。

12～16は高坏、12は口径の割に器高が低い、坏部外面の稜・脚部と裾部の稜は不明瞭である、脚部内面に縦方向の指ナデ痕はほとんど残されず横方向のケズリで覆われる、Ｂ類に分類したが一般的なＢ類とはやや違った印象を受ける。



第141図　027A号住居跡出土土器

０２７Ａ号住居跡（第141図、図版70）

土器の他に磨石等が出土した。出土位置を記録した遺物は約45点と多くない、とくに図示で

きるものが少なく遺存度も悪い。また、ほとんどが覆土上層からの出土で床面からはかなり浮いている。平面的にも集中する傾向は認められず、接合する破片も広い範囲に散っている。

1は坏A、全体に厚手で、口唇部は丸みを持たず鋭角的に終わる。最終調整はナデだが、外面には砂粒の動きが見える。胎土は砂質で焼成も甘い

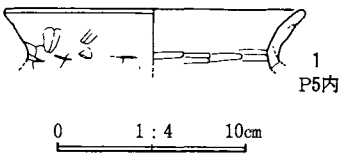
2～4は甕A2a、3点とも同じ器形・調整であろう。3は外面口縁はヨコナデ後、胴部はケズリ様のナデ後雑なミガキ。内面口縁はヨコナデ後横方向のミガキ、胴部はナデ。

5は高坏の坏部b、口唇に平坦面を持ち内外面とも坏底部に稜をがある。調整はていねい。

027B号住居跡（第142図）

出土位置を記録した遺物は4点のみ、少量の土器片が出土しただけである。

遺物が少なく断定はできないが、027A号住居跡との間に大きな時間差はないと考えられる。



第142図　027B号住居跡出土土器

028号住居跡（第143·144図、図版70・71）

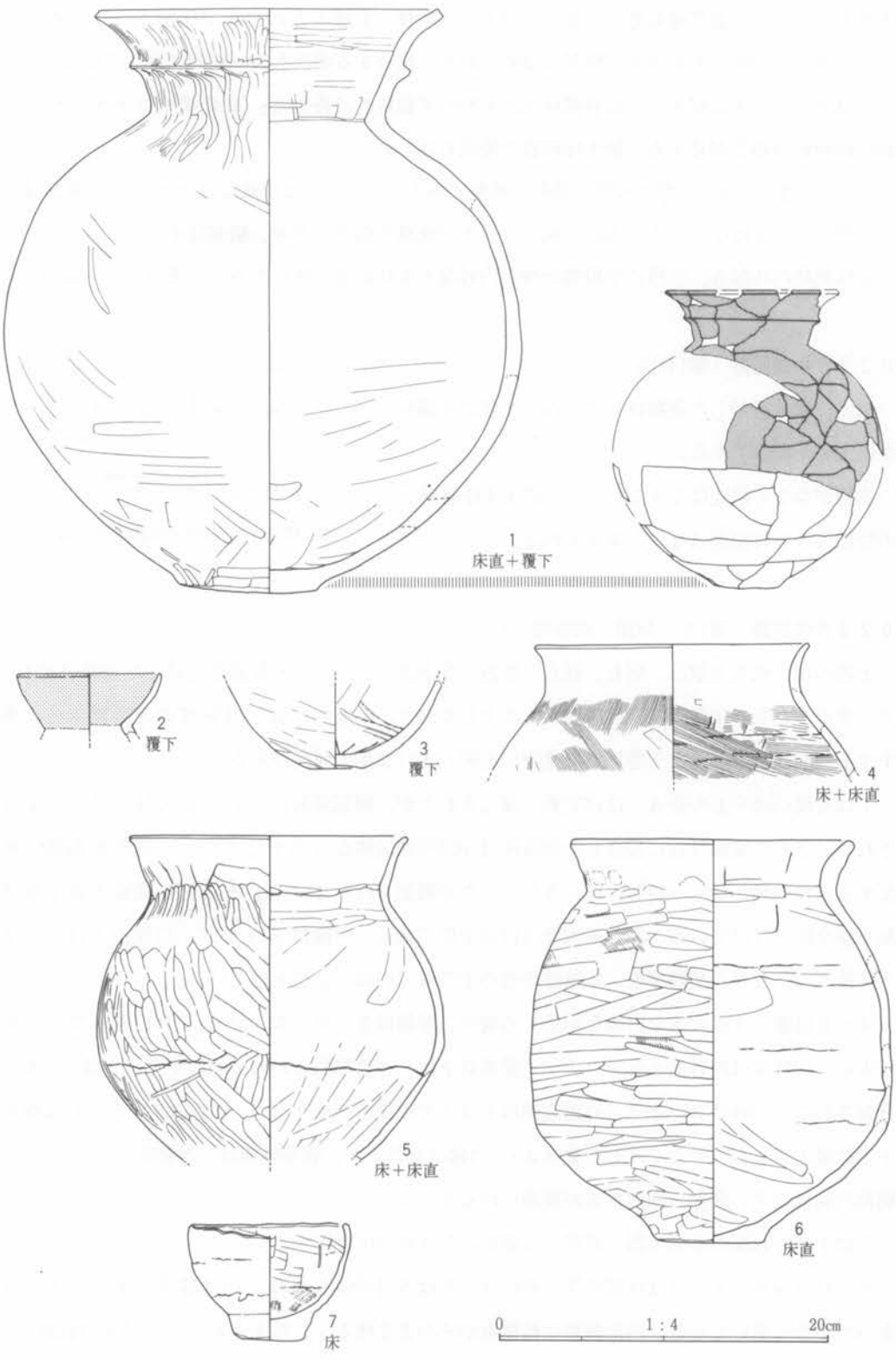
土器の他に板状土製品、砥石、軽石、鉄器、等が出土した。出土位置を記録した遺物は約100点、主だったものは覆土下層と床面から出土しており、平面的には、住居跡の北西側半分に集中する傾向がある。また土器以外の遺物にも同じような集中傾向がある。

1は有段口縁をもつ壺A。ほぼ完形に復元されたが、胴部最大径以下は030号住居跡から発見された。さらに頸部付近に接合した数破片は 055号住居跡から出土している。球形の胴部に外反する有段口縁が付く。口唇にはっきりとした平坦面を作っている。有段部を構成する突帯は粘土紐を貼り付けている。胴部最大径はほぼ中位にある。口縁はヨコナデ、口縁以下はヘラケズリ後ヘラミガキで最終調整、本遺跡の壺の中ではていねいに仕上げている。

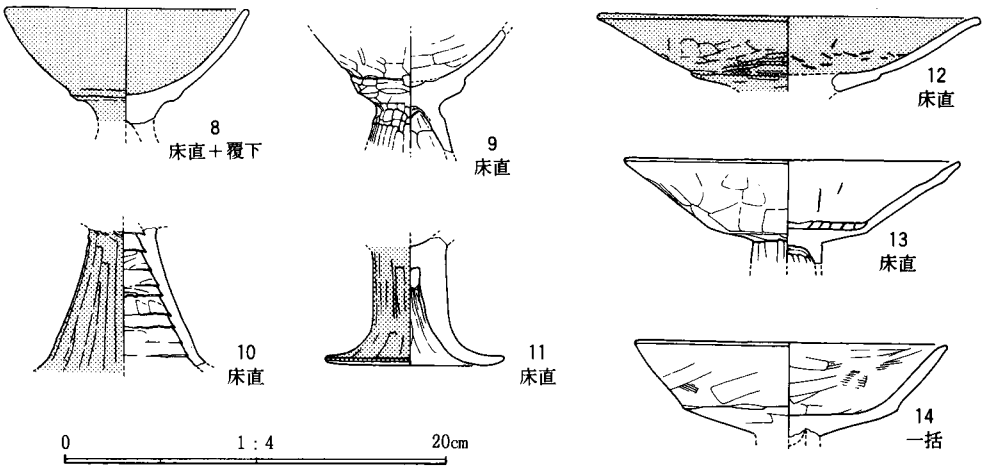
4～6は甕。4は大きな口縁部形態cの破片、頸部はまっすぐに立ち上がり口唇部で若干外反する、口縁部は内外面ともヨコナデ、頸部以下はハケ整形後きわめて弱いナデ。5はA2bに分類される、口縁はヨコナデ、外面頸部以下はミガキ様のヘラケズリ、内面はナデ。6は胴部下半に最大径をもつずんぐりした甕A3a、口縁はヨコナデ、胴部外面はハケ整形後ヘラケズリ、胴部内面はナデ、底部の内面中央が極端に凹んでいる。

7は手ずくね風の小形土器、底部には細かいワラ状の圧痕がつく。

8～14は高坏。8、9は坏部の深い高坏A、8は内外面とも赤彩。10は薄手の脚部、下に向かってかなり開いている、内面調整は輪積痕がそのまま残るa、外面赤彩。11は厚手の脚部f、内面にいわゆる「絞り目」が残る、外面赤彩。12～14は坏部の破片、いずれも直線的に開くb類、12の内外面だけ赤彩。



第143図　028号住居跡出土土器(1)



第144図　028号住居跡出土土器(2)

０３０号住居跡（第145図、図版71）

遺構の確認面が低かったせいか出土位置を記録した遺物は約25点と少ない。平面的には遺構の中央より北東側に集中する傾向がある。土器の他に特筆すべき遺物は出土しなかった。

１は壺Ａ。胴部最大径より上半分は028号住居跡から発見された(028－１を参照のこと)。

２は甕Ａ1a、胴部外面はハケ（8～9／cm）整形後横方向のケズリ様ナデ。３は甕Ａ4b。

０３２号住居跡（第146図、図版71・72）

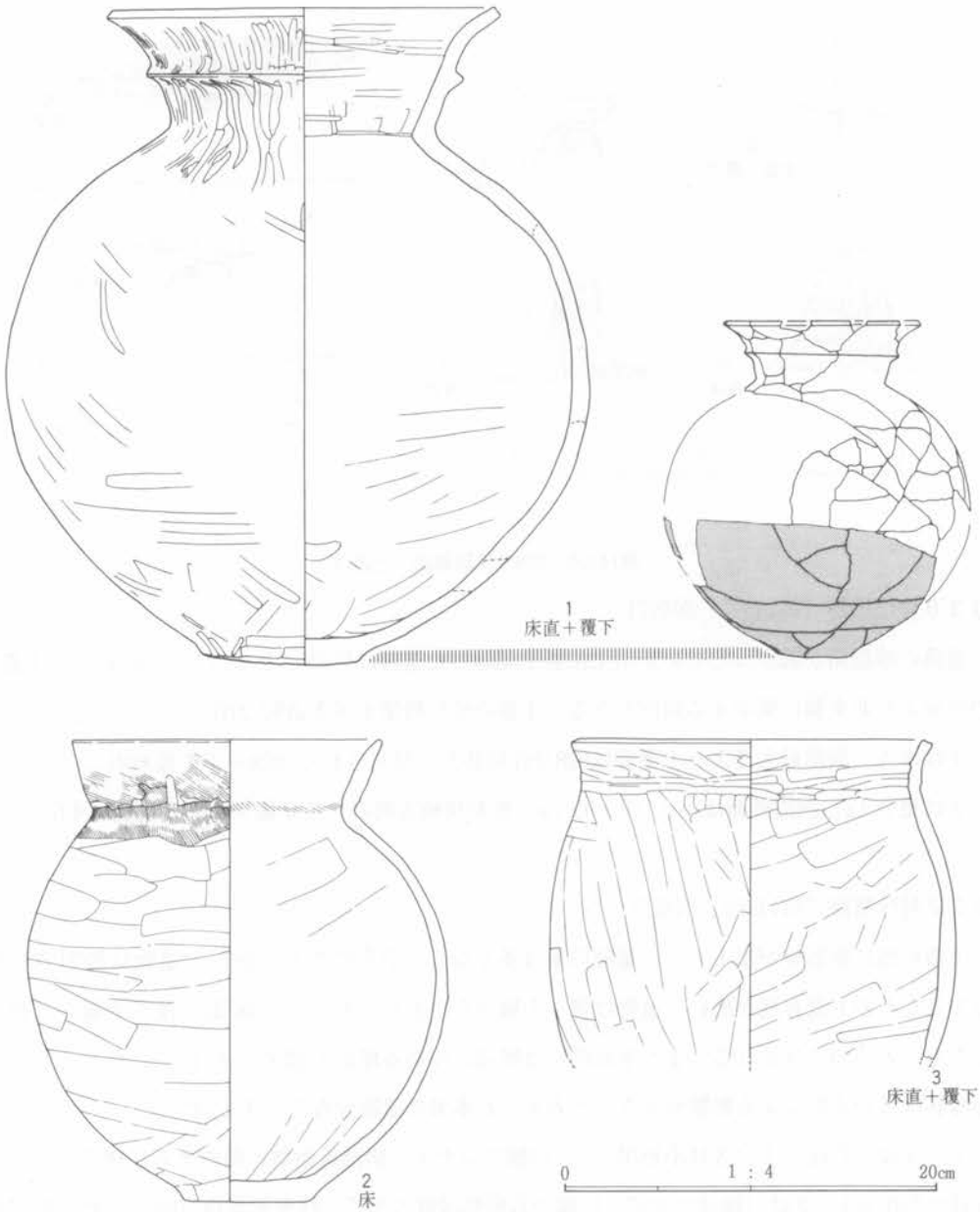
土器の他に鉄器等が出土した。遺物の量は多くなく、出土位置を記録した遺物は約21点、図示できたものも遺存度が悪い。遺物は覆土上層から出土したものと、床面・覆土下層から出土したものの２つに分かれる。また平面的には周辺に片寄る傾向が認められる。しかしこれらの分布状況はかく乱による影響が大きいと考えられ本来の遺物分布を示すものではない。

１～５は小形坩。１、３は小形坩Ａ2、口縁ヨコナデ、胴部外面横方向のケズリ様のナデ、２、４は小形坩Ｂ1、２は口縁ヨコナデ、口縁から頸部は縦のケズリ様整形後横方向のナデ、胴部外面横方向のナデ。４の内面は木口状工具による横方向のナデ。

６は埦・鉢Ｂ4、底部から内湾して立ち上がり口唇部が少し外反する、口縁ヨコナデ、口縁以下は内外面ともケズリ様のナデ、器面は二次的に熱を受けたのか部分的に剝離がみられる。

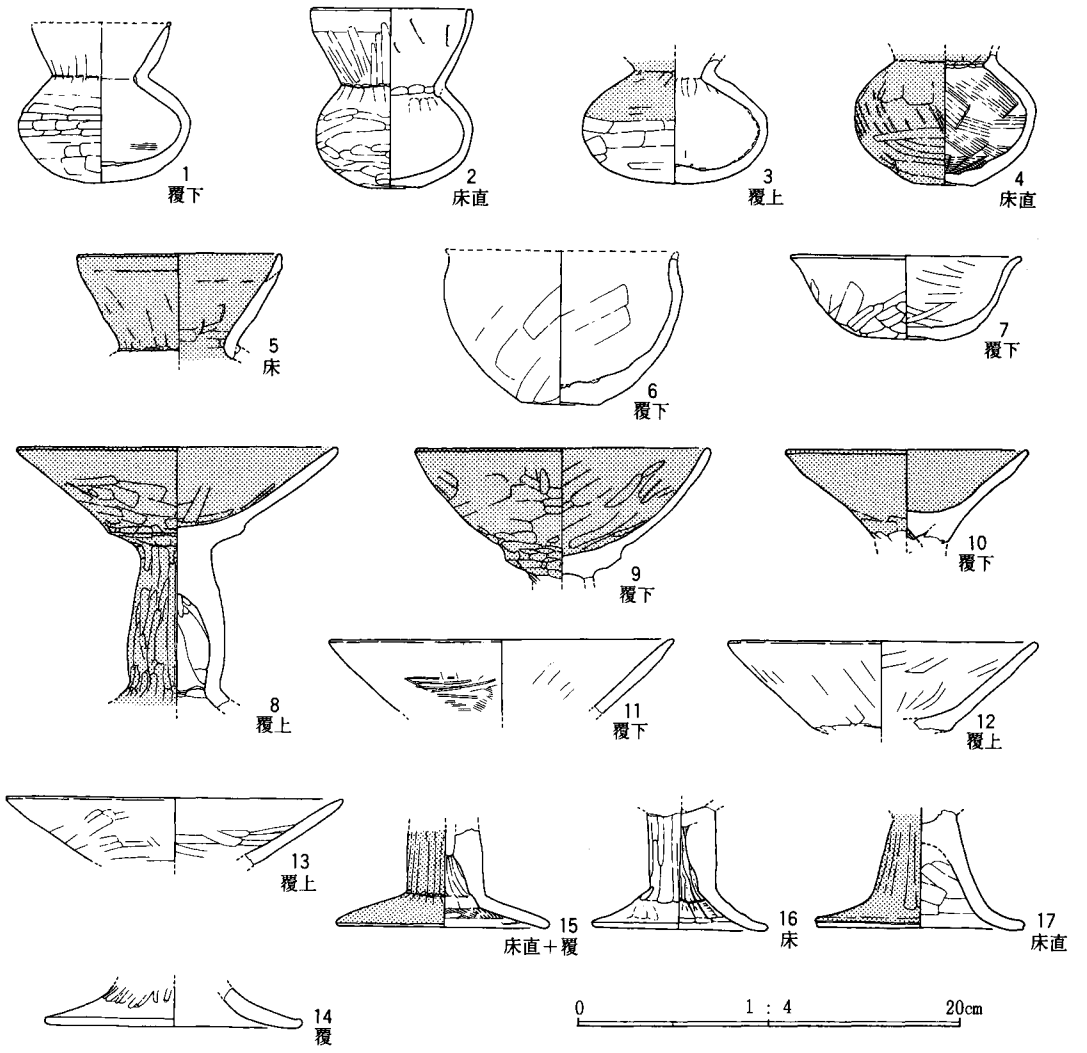
７は坏Ｂ、口縁部はヨコナデ、体部外面はケズリ様ミガキ、体部内面は横方向のナデ、焼成が甘いためか表面が摩滅している、内面一部分剝離。

８～14は高坏で完形に復元出来たものは一点もないがバラエティーが多い、８は高坏Ｄ3、坏部外面の接合部付近には明確な稜がある、脚部は接合部から徐々に太くなるが裾部との境で再び細くなる、口縁ヨコナデ、外面坏部は横方向の、脚部は縦方向のケズリ様ミガキ、内面坏部



第145図　030号住居跡出土土器

は放射線状のケズリ様ミガキ、脚部は縦方向の指ナデ、脚部下端の割れ口は細かく、また摩滅が見られ、欠けてから再利用された可能性がある。9は高坏A、薄手で深い坏部破片、外面の接合部付近に稜をもつ、内外面とも赤彩。10は高坏D4、直線的に開く小さい坏部破片、内外面とも赤彩。15は脚部e、直立する短い円筒状の破片、ハケ整形後粗いミガキ、裾部内外面とも同心円状のナデ、端部はヨコナデ、脚内面は絞り目が残る。16は脚部f、縦方向ナデ、裾部内



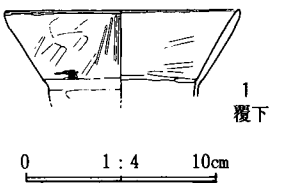
第146図　032号住居跡出土土器

外面はナデ、裾端部ヨコナデ、脚内面は絞り目が残る、裾部の半分ほどが濃い灰色に変色している（高熱を受け還元した可能性がある）。

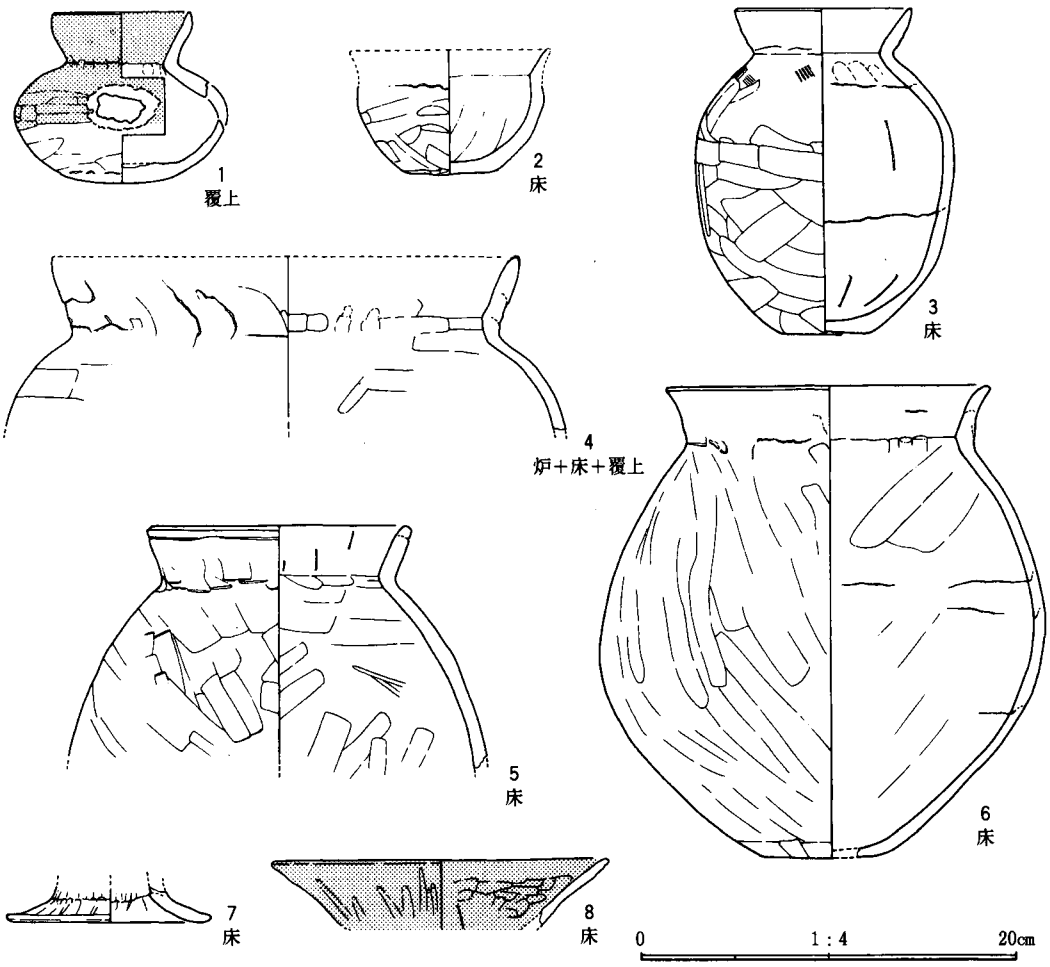
０３４号住居跡（第147図）

遺物は少量の土器片の他はほとんど出土しなかった

１は小形坩Ｃの口縁部破片、ヘラケズリによる成形後、端部ヨコナデ、外面は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキ、胎土は微砂粒を含むが精選されており、焼成も良好で全体にシャープな印象。



第147図　034号住居跡出土土器



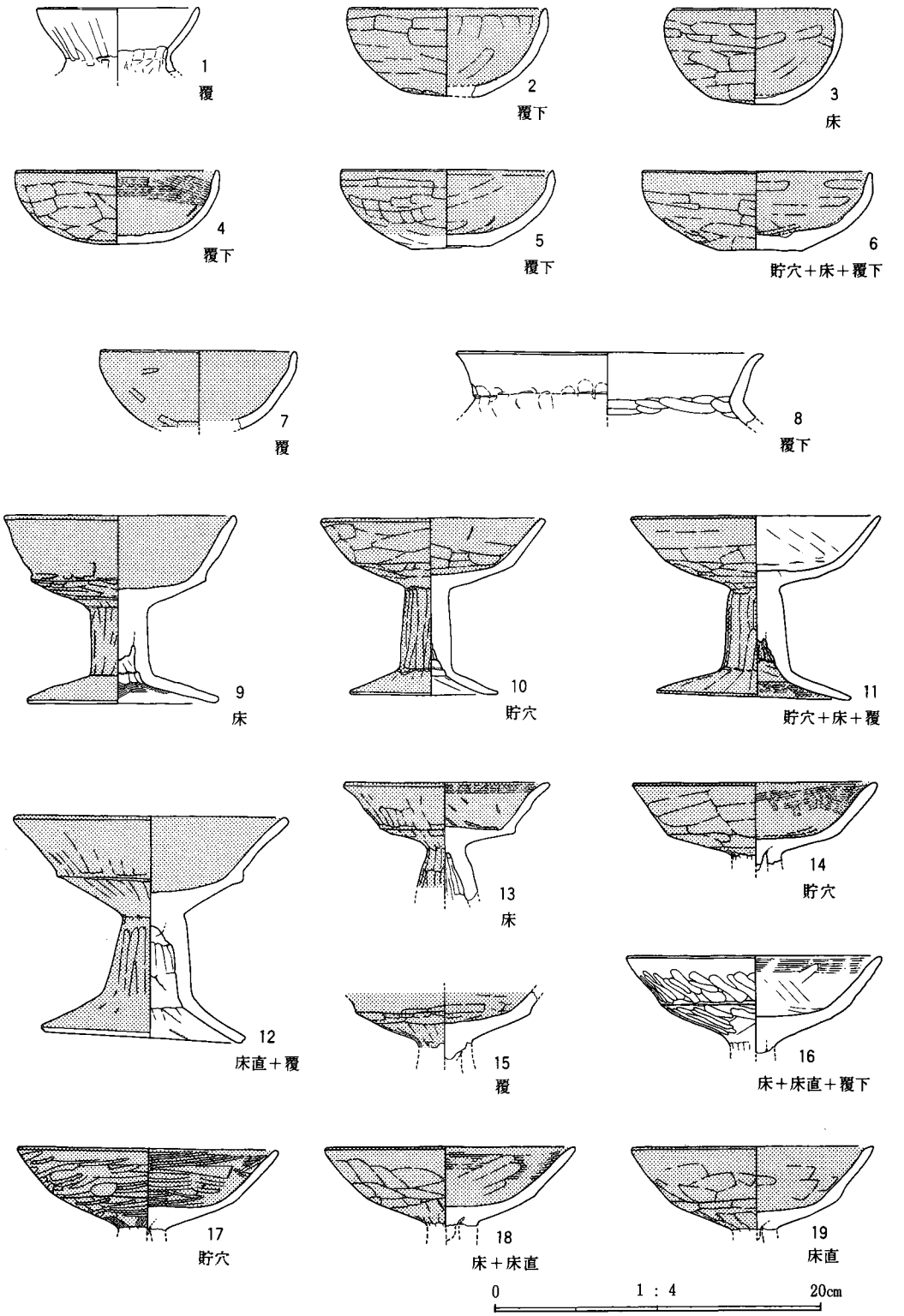
第148図　035号住居跡出土土器

０３５号住居跡（第148図、図版72）

土器の他に滑石製勾玉、軽石、鉄器、等が出土した。出土位置を記録した遺物は約30点、図示したものも遺存度はそれほど良くない。床面から出土したものが多い。また平面的には周溝上や周溝際から検出されたものが多い。

１は小形坩Ａ２に穿孔した壺？、頸部より上は短く口唇部は丸みを持たない、口縁部ヨコナデ、胴部外面はハケ整形後横方向のケズリ様ナデ、内面はヘラナデ。胴部最大径より若干上の位置に径が2.4×1.1cmの孔が一つ開けられている、孔はやや横長で焼成、赤彩後の穿孔、ここでは壺に器種分類したが、孔の形状や大きさからみると疑問が残る。

３～６は甕、３は小形甕２ａ、４はかなり大形の甕だろう、整形は雑なヘラケズリで輪積み痕が残っている。６はＡ３ａ。７・８は高坏の小破片。



第149図　036号住居跡出土土器

０３６住居跡（第149図、図版73・74）

土器の他に土製紡錘車、鉄器、等が出土した。出土位置を記録した遺物は約200点、坏や高坏の割合が多いことが特筆される。図示した土器はこれらを中心に残りの良いものが多い。出土層位は床面・覆土下層が中心で、平面的には東隅の貯蔵穴とその周囲を中心に中央より北東側の半分に集中している。

１は小形坩、全体の器形は不明。

２～７は坏、鎌取遺跡で出土した八個体の坏のうち六個体がこの住居跡に集中する、２は坏Ａ２ｂ，３は坏Ａ２ａ、４は坏Ａ１ａ、５、６は坏Ａ１ｂ、７は坏Ａ１に分類され、器形にはバラエティーがあるが整形の手法は共通している部分が多い、すなわち外面は横方向のヘラケズリ後ナデ、内面は放射線状あるいは横方向のヘラケズリ後ナデ、口縁部はヨコナデで整形している。

８は甕の口縁部破片。

９～19は高坏、全体の器形がわかるものは９～12で９、10、11は高坏Ｃに、12は高坏Ｂに分類される、また13～19についても13以外は高坏Ｃに分類される可能性が高い、高坏Ｃはほとんどの個体がていねいに整形されている、坏部外面は横方向のヘラケズリ後ナデ、坏部内面はハケ状工具？による整形後ナデ、脚部・裾部外面はミガキ様の細かいナデ、脚部内面はほとんど中空部分がなく「絞り目」をそのまま残しているものが多い。

０３７住居跡

遺構が斜面にあり、確認面が低かったせいか遺物はほとんど出土しなかった。

０４３住居跡（第150～152図、図版74～77）

土器のほかに軽石、鉄器等が出土した。

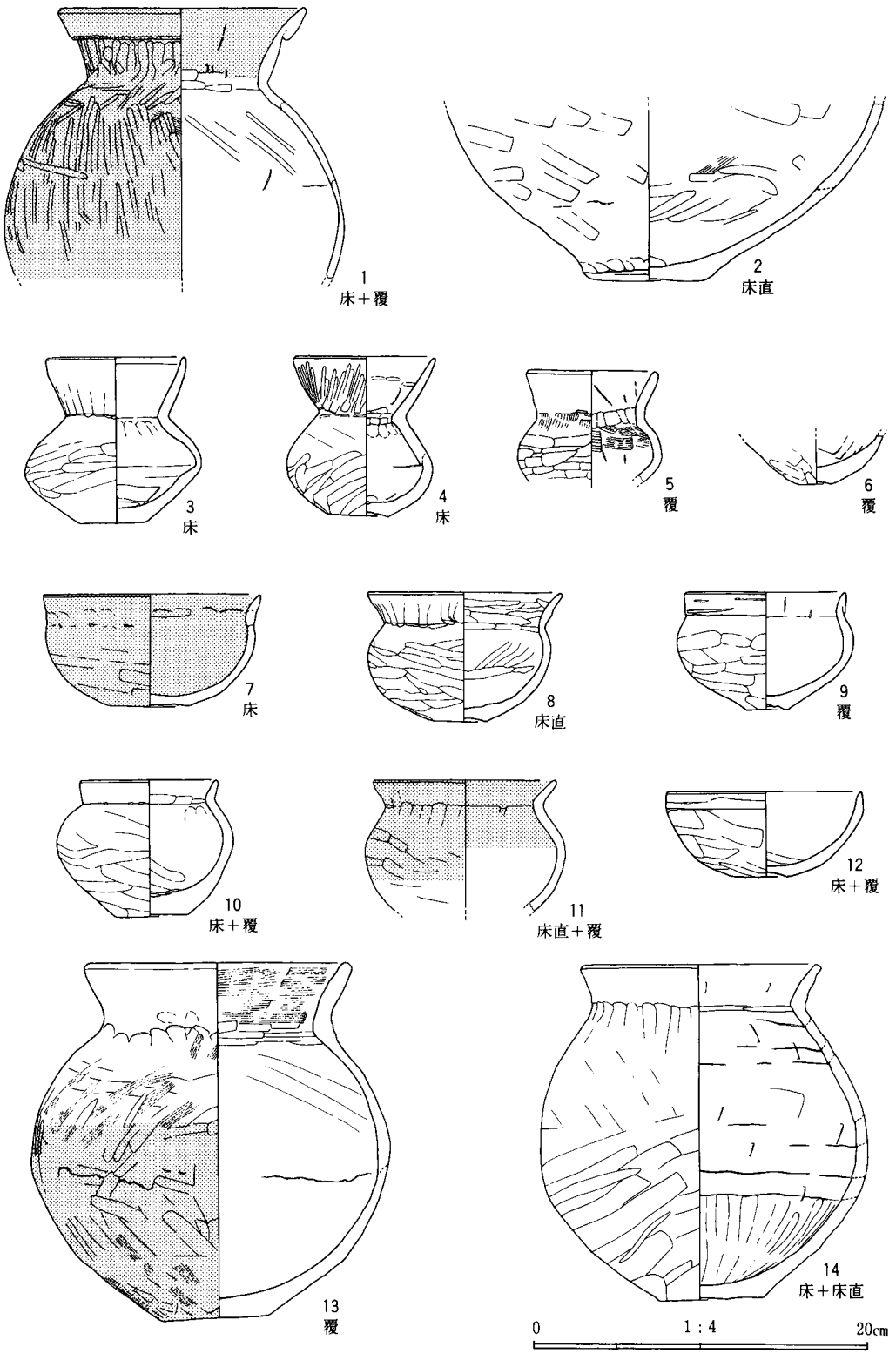
出土位置を記録した遺物は約 203点、図示した土器は26点で本遺跡ではかなり多い方である平面的には貯蔵穴を中心として中央より南西側半分に片寄って分布していた、層位的には貯蔵穴内、床面から出土した遺物が多いが床面から浮いた状態で検出されたものもかなりある。

１、２は壺、１は壺Ｂで球形の胴部を持つと思われる、口縁部はヨコナデ、頸部から胴部には縦方向のヘラミガキで最終調整、ヘラミガキはあまり丁寧ではなく胴下半にはハケ目が残っている部分がある。２の底部破片は割れ口が磨滅しており二次的に転用されたと考えられる。

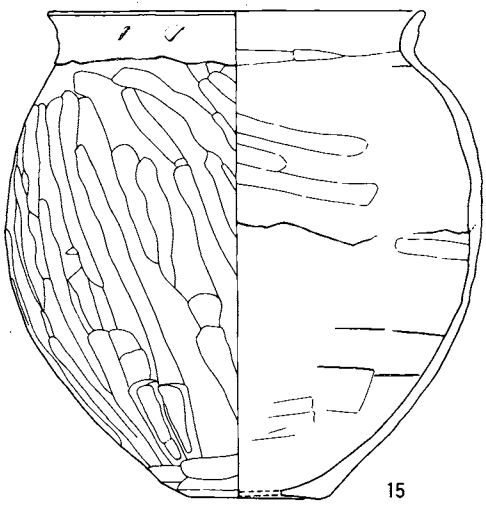
３～６は小形坩、３、４は小形坩Ｂ２、４の底部は上げ底状となっている。

７～11は埦・鉢とした一群で７はＢ２、８はＡ１、９はＢ３、10はＡ３、11はＡ２に分類した。11は遺存状態が悪く不明だが残りの四点はかなり丁寧に調整されている。

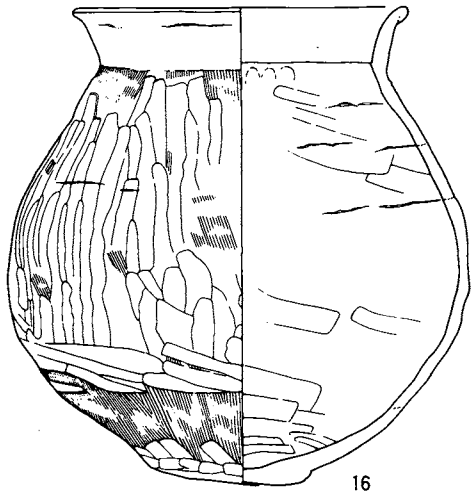
12は坏、坏Ａ１ｂに分類した。底部は上げ底状となっている。



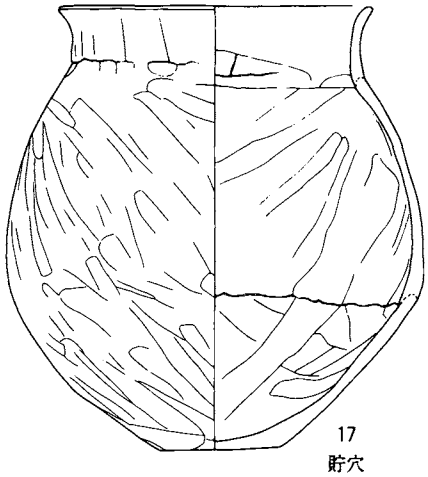
第150図　043号住居跡出土土器(1)



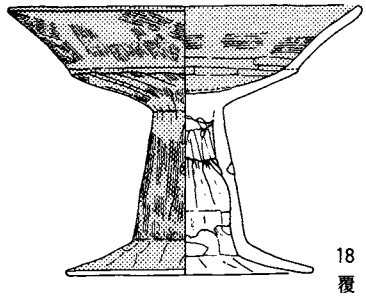
15
貯穴＋床＋床直＋覆



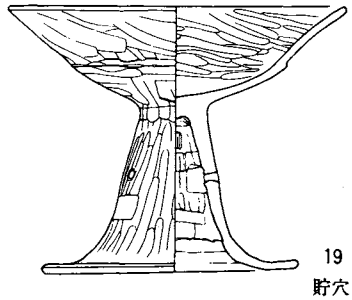
16
床＋床直＋覆



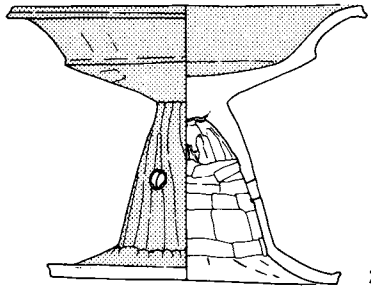
17
貯穴



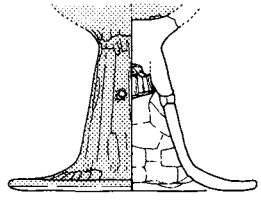
18
覆



19
貯穴



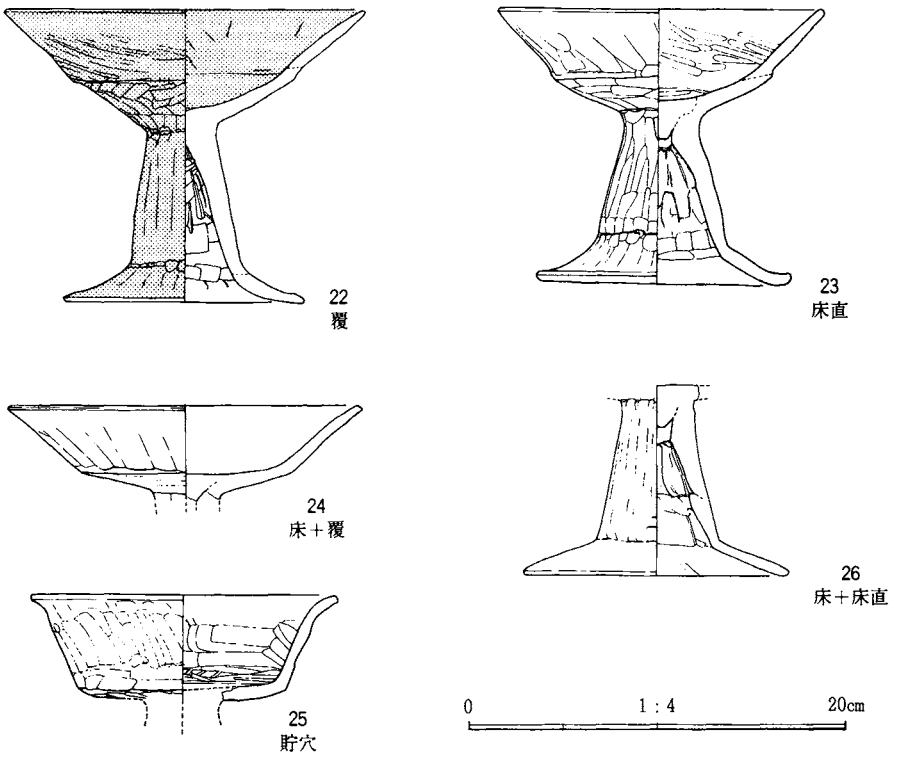
20
床直＋覆



21
覆

0　1：4　20cm

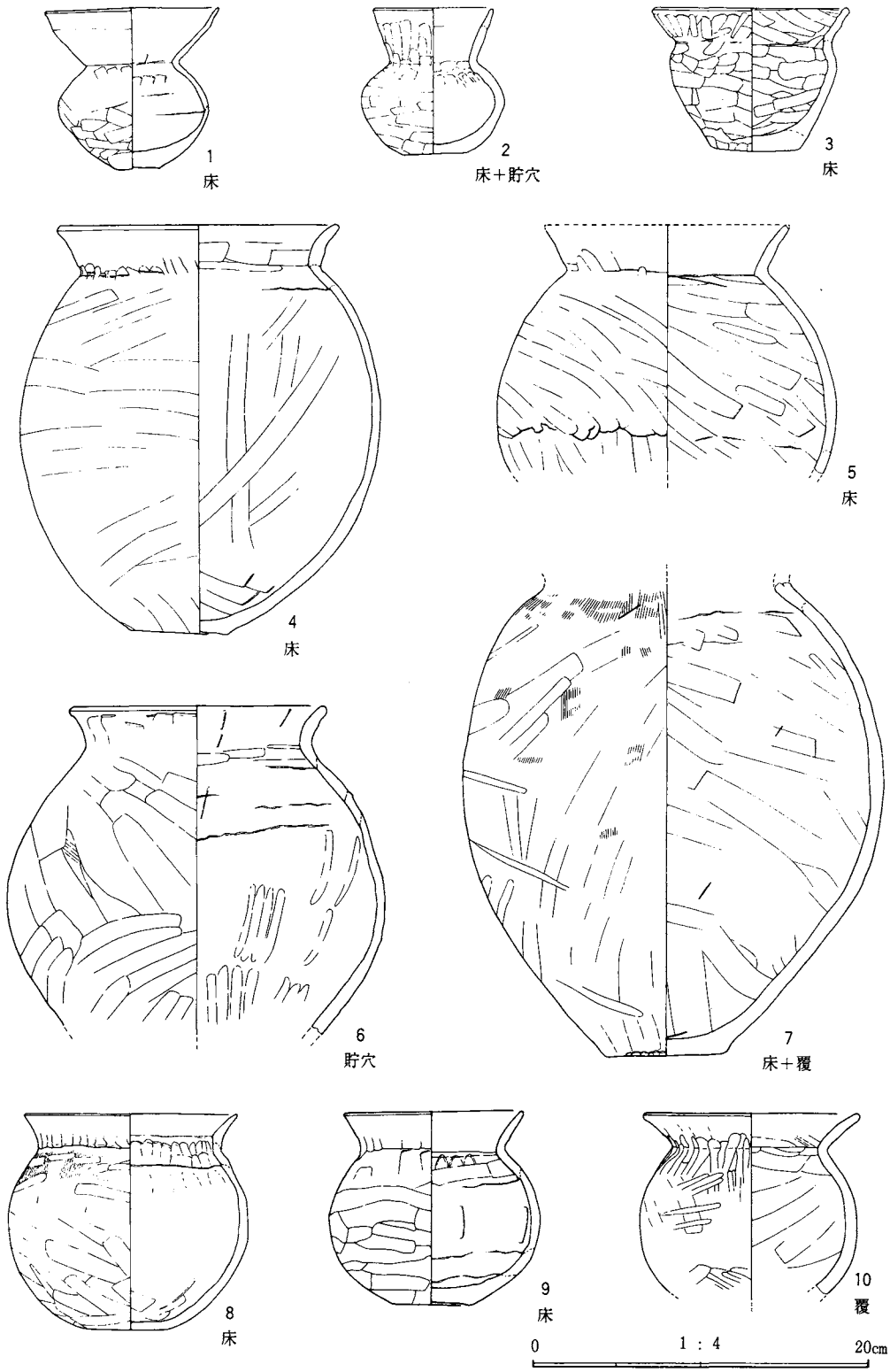
第151図　043号住居跡出土土器(2)



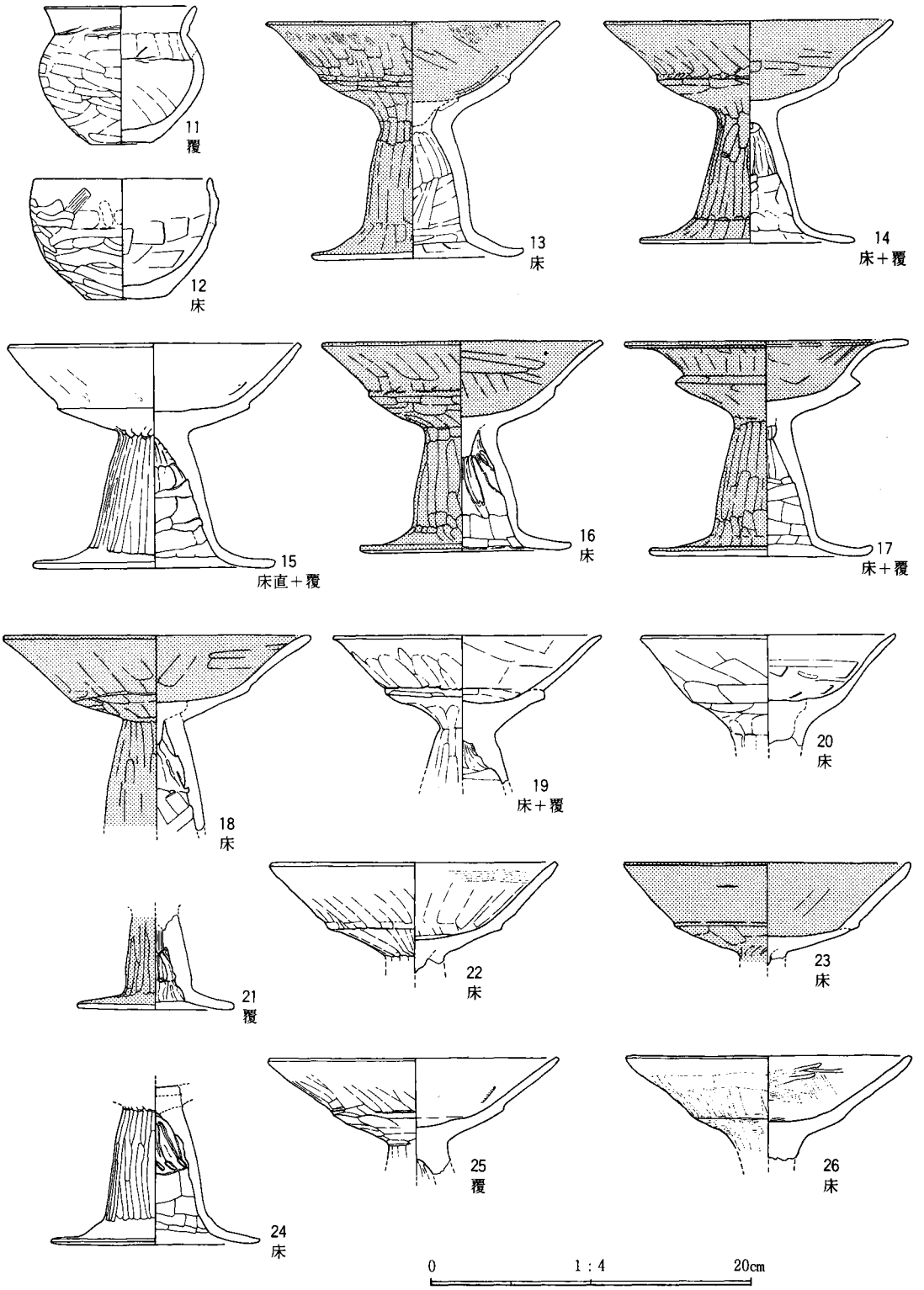
第152図　043号住居跡出土土器(3)

13～17は甕、13は甕Ａ1ａ、外面の最終調整はケズリ様のナデが粗く施される、外面および頸部内面にはハケメがかなり多く残っているのが観察される、口縁部はヨコナデ、胴部最大径より上位に煤付着、それに対応する内面は剝離が著しい、また外面胴部下半には赤彩の可能性がある。14は甕Ａ3ａ、外面上半はヘラケズリ後ナデ、下半はヘラケズリ、口縁ヨコナデ、内面ヘラナデ、底部が変色しており外面には煤が付着している。15は甕Ａ2ｂ、外面は底部から口縁部へ向かってヘラケズリ、口縁部はヨコナデ、内面は横方向のヘラナデ、外面の口縁から胴下半にかけ多量に煤が付着している。16は甕Ａ3ｂ、外面はハケ整形後縦方向のヘラケズリさらにナデで調整している、頸部や胴部下半にハケメがよく残っている、口縁はかなり強いヨコナデ、内面はケズリ様のナデ、頸部内面には指頭痕が残る。17は甕Ａ3ｂ、外面はヘラケズリ後ナデ、口縁部ヨコナデ、内面はケズリ様のナデ、外面は底部付近を除いて煤が付着。

18～26は高坏、器形がわかるものは5点で、このうち18、19、22、23は高坏Ｂ、20は高坏Ｄ2、25は高坏Ｄ5に分類される、坏部が残存しない21、26を含めてすべての脚部の内面調整は一部に指ナデ痕を残し下半をヘラナデするｄの整形が行われている、また18～21の4個体には透かし孔が観察される、いずれも焼成以前の穿孔で18、20は1孔、19、21は2孔である、なお18の孔は何らかの理由で貫通する以前に穿孔を中止している。



第153図　044号住居跡出土土器(1)



第154図　044号住居跡出土土器(2)

０４４住居跡（第153・154図、図版77～80）

土器のほかに石製紡垂車、滑石製勾玉、砥石、軽石、鉄器等が出土した。

出土位置を記録した遺物は約110点、図示した土器は26点でうち14点が高坏である。平面的に貯蔵穴、炉のまわりを中心に主柱穴と主柱穴を結ぶ線より外側、壁に近いところに分布の片寄りがある。層位的には貯蔵穴内、床面から出土した遺物が多い。

１、２は小形坩Ｂ、１は頸部から上が大きく開くタイプで底部は上げ底状になっている、

３、11、12は埦・鉢とした一群。３は埦・鉢Ｅ、内外面ともにていねいなナデ、外面の一部分に黒斑がある、11は埦・鉢Ａ3。口縁ヨコナデ、体部はミガキ様のナデ。12は埦・鉢Ｄ、体部ヘラミガキ、輪積み痕はないが器面に凹凸があり、粘土紐を指で押さえたことがわかる。

４～７は甕。４は甕Ａ２ａに分類される、５、６は甕Ａ１ａか、

８～10は小形甕。３点とも１ａに分類されよう、８の頸部内外面には指頭痕が残る、胴部外面はミガキ様のヘラケズリ、内面は丁寧なヘラナデ。９は外面ヘラケズリ、口縁ヨコナデ。10は口縁ヨコナデ、胴部はヘラケズリ後ヘラミガキ、内面はケズリ様のナデ、胴部最大径付近が黒く変色、さらに胴下半は剝離・赤色変化しており、二次的に熱を受けた可能性が高い。

13～26は高坏。器形がわかるものは５点で、このうち13～16は高坏Ｂ、17は高坏Ｄ２、に分類される、坏部が残存しない21、24を含めてすべての脚部の内面調整は一部に指ナデ痕を残し下半をヘラナデするｄの整形が行われている。

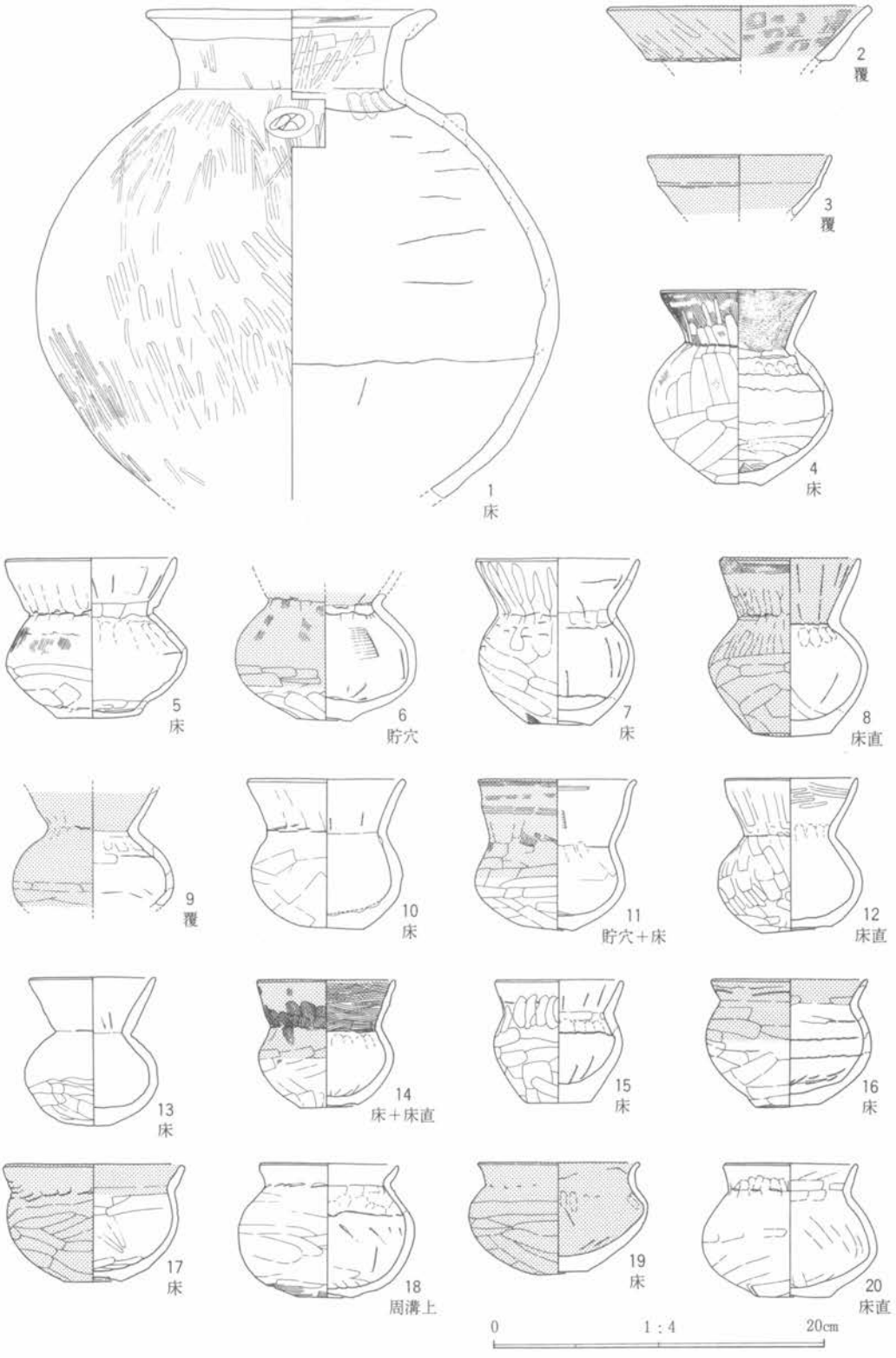
０４５住居跡（第155～157図、図版80～83）

土器のほかに板状土製品、石製紡錘車、砥石、磨石、軽石、鉄器、等が出土した。

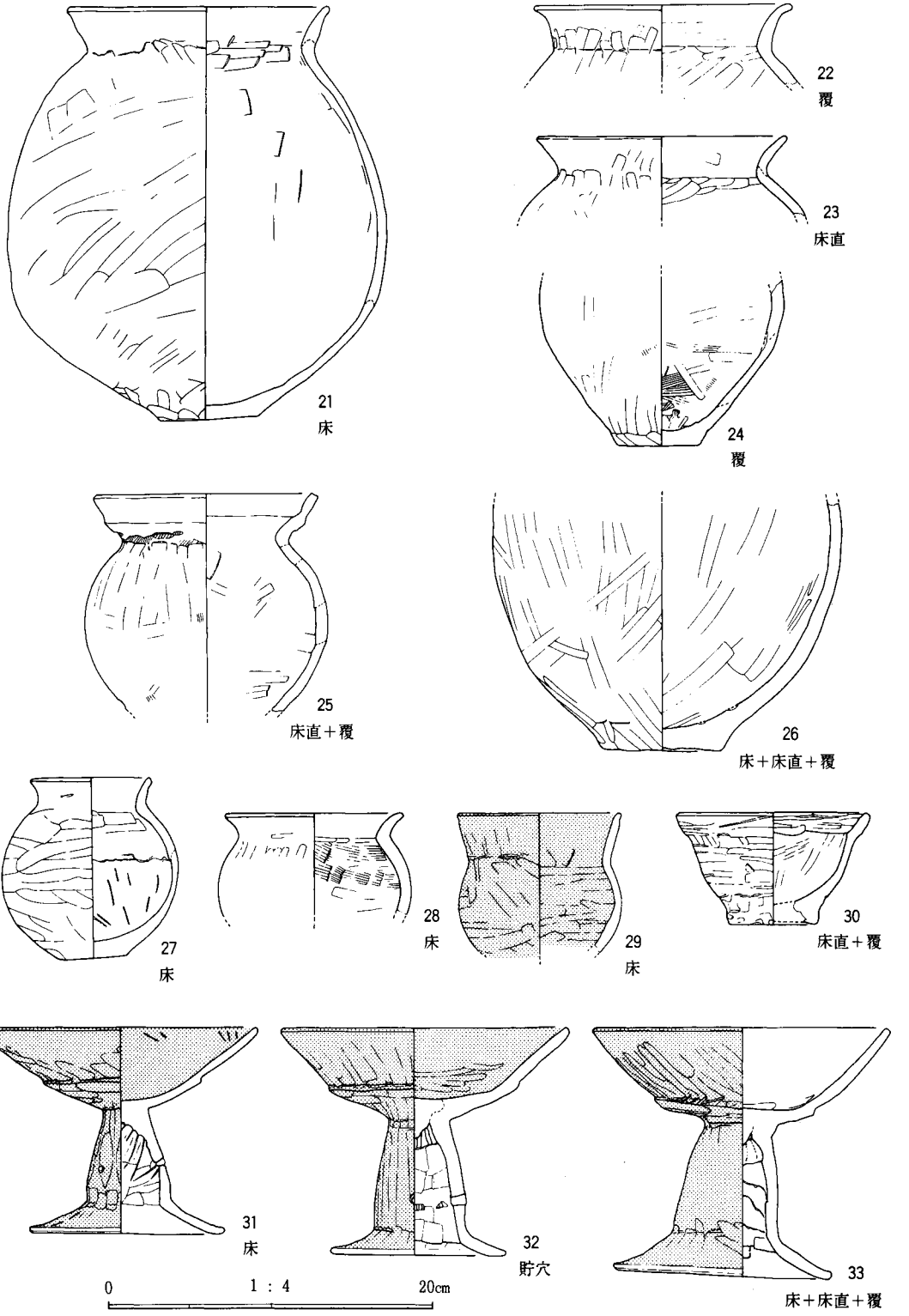
出土位置を記録した遺物は約 134点、図示した土器は41点でそのうち14点以上は坩、11点以上が高坏である。平面的には貯蔵穴とその周辺に大きな集中がある、さらに主柱穴と主柱穴を結ぶ線より外側に小さい平均的な分布があり、内側では南寄りに分布の中心がある

１、２、27は壺。１、２は壺Ｂに分類されよう、１は口縁ヨコナデ、外面は縦方向の細かいヘラミガキ、内面は頸部までヘラミガキ、頸部下に指頭痕が残る、胴部はナデ、外面の頸部下につまみ状に粘土を貼り付けたところが一ヶ所ある、整形終了後に貼り付けて周囲をナデている、目的は不明。２は「折り返し」部分の幅が比較的広い、内面にハケ整形の痕跡が残る。27は壺Ｄ、口縁部は横方向のナデ、胴部は内外面とも粗いナデ、全体に整形、調整が雑、口唇部は使用のためか細かく欠損、外面一部に黒斑、外面は赤彩の可能性あり。

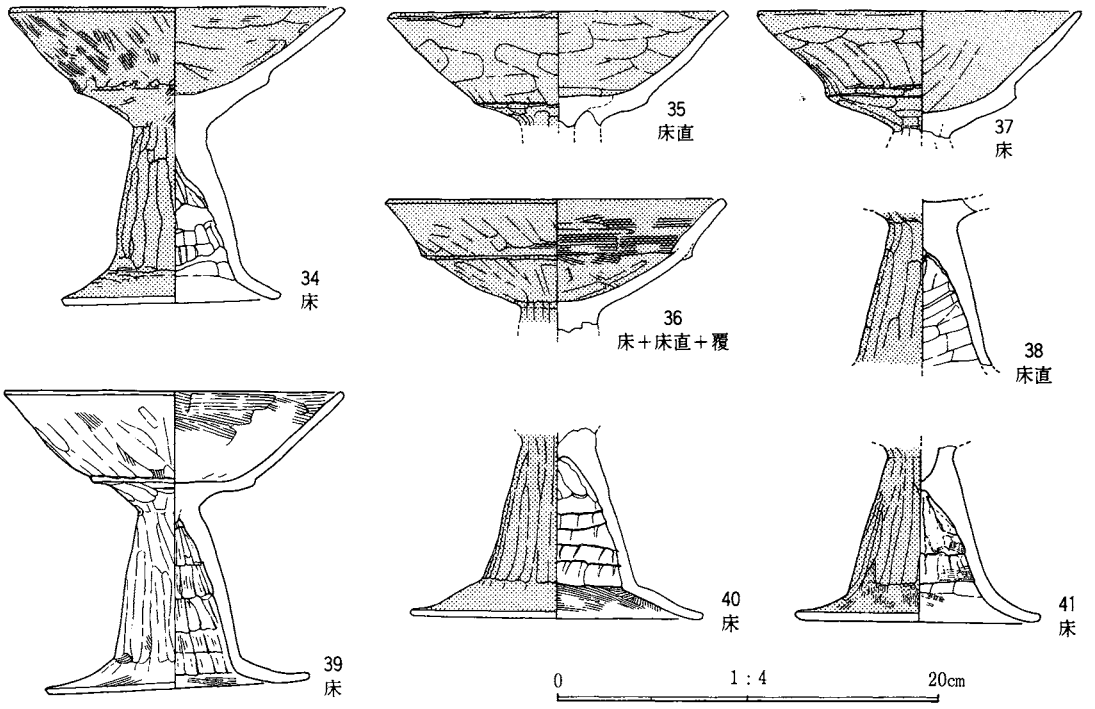
３、４は大形坩。３は口縁部破片、口縁上位で内側に弱く屈曲し段がつく、内外面ともに赤彩。４は大形坩Ｂ1に分類される、口縁から頸部までの内外面にハケ調整の痕跡がよく残っている、外面頸部より上はヘラミガキで最終調整、胴部はケズリ様のナデ、内面頸部下に指頭痕が残る、胴部はナデ、底部は上げ底状になっている、赤彩の痕跡は認められない。



第155図　045号住居跡出土土器(1)



第156図　045号住居跡出土土器(2)



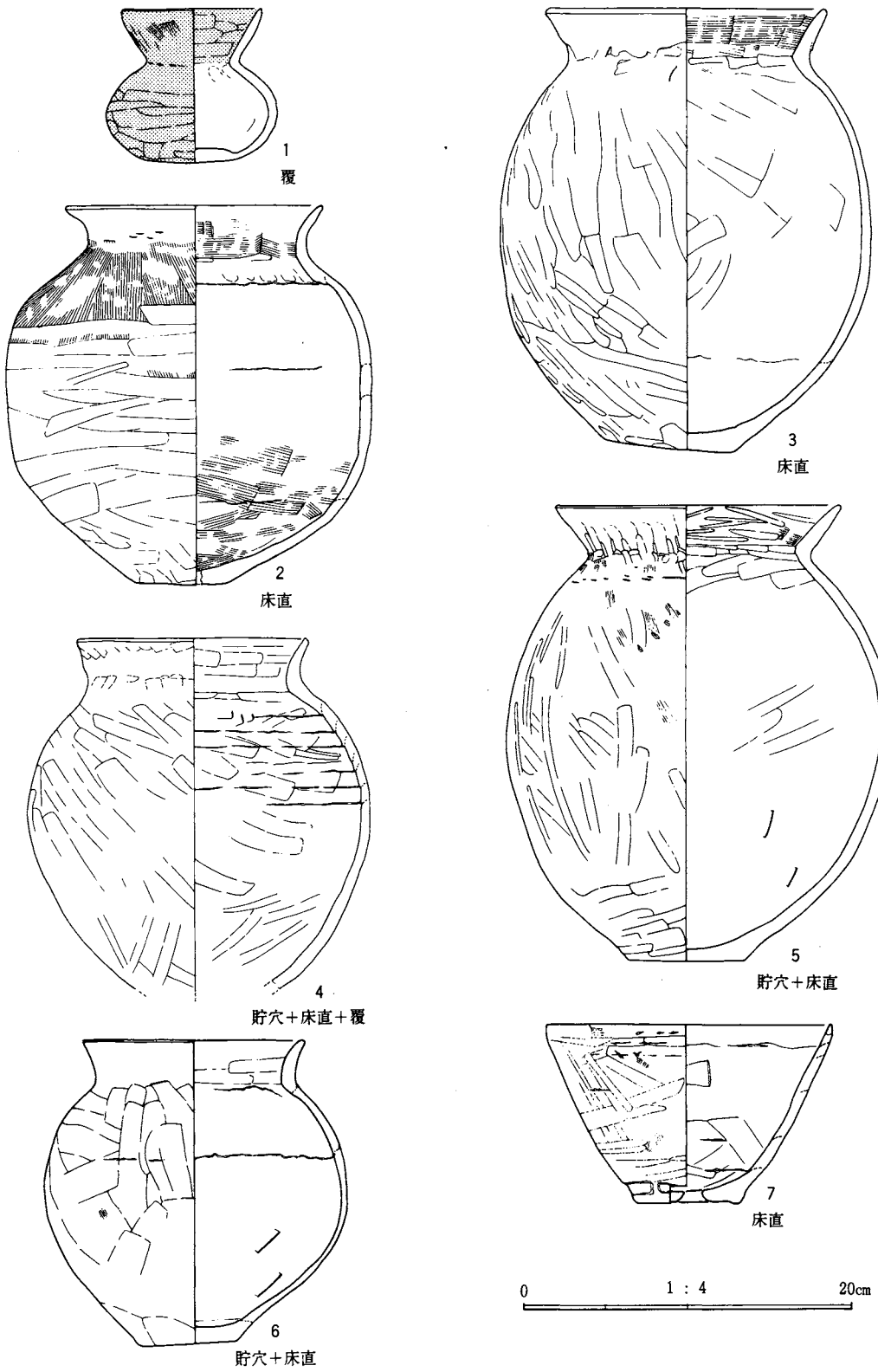
第157図　045号住居跡出土土器(3)

5～15、29は小形坩。13がA1。7、10、がB1。5、6、8、11、12、14、15がB2に分類される。6、7、11、12の底部は上げ底状になっている。赤彩が確認されるのは6、8、9、11、14の5点でいずれも外面と内面上半に塗布されている、二次的に被熱したためか10、13、14の器面が荒れている、14には一部に黒斑も見られる。

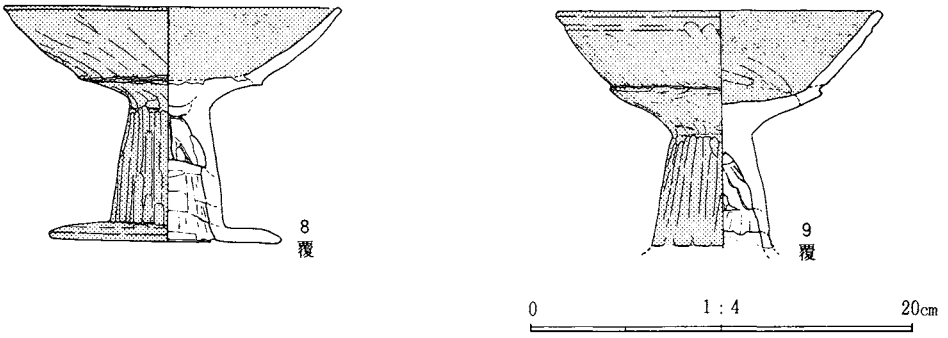
16～20、30は埦・鉢とした一群。17はA1。16、18～20はA2。30はEに分類される、丁寧なヘラミガキが全体に施される。焼成もきわめて良好である。

21～26、28は甕。21はA3a、口縁部ヨコナデ、胴部外面はミガキ様のナデ、下半と上半の二回に分けて調整されていることが分かる。25は小形甕2aに分類されよう、口縁は受け口状になっており別タイプの可能性があるが、成整形が雑な土器なので意識的に受け口上に作ったものではないと判断した、口縁ヨコナデ、胴部はハケ整形後ナデ。22、23は口縁部破片。24、26は胴部破片。28は小形甕の破片である。

31～41は高坏、全体の器形がわかる31～34、39の5点はすべて高坏Bに分類される。坏部の形態はb（32、33、35、39）、e（31、34、37）、i（36)の三種が見られる、脚部の形態はすべてaに含まれる、脚部内面の調整はc（33、39、40、41）、d（32、34、38）、e（31）の三種類がある、31、32には透し孔がある、31は焼成前の穿孔で孔数は一つ、32は焼成後の穿孔で孔数は二つ、一つは貫通するが、もう一つは途中で中止されロート状の窪みが残っている。



第158図　046号住居跡出土土器(1)



第159図　046号住居跡出土土器(2)

０４６住居跡（第158・159図、図版84・85）

土器のほかに板状土製品、台石、鉄器等が出土した。

出土位置を記録した遺物は21点と少ない、このうち図示した遺物は９点、概して遺物の遺存度は良い。平面的には住居跡の東側、とくに貯蔵穴の周辺に集中する傾向が認められる。ただし４の甕は破片が住居跡全体に散乱していた。層位的には床面直上から出土したものが多い。

１は小形坩Ａ２、外面ハケ整形後ナデ、内面頸部下に指頭痕が残る。

２～６は甕。２、４がＡ２ｂ、３、５がＡ２ａ、６はＡ１ａに分類される。２はＡ２ｂに分類したが肩の張った胴部を持ったやや特異な形をしている、内面下半と外面上半にハケメが顕著に残る、外面は被熱変色している。３に煤付着。５に黒斑・煤付着。

７は甑Ａ１。焼成後穿孔、孔は一つ、内外面ともハケ整形後ナデ、口唇は丸みを持たない。

８、９は高坏Ｂ。坏部は２点ともｂ、８の脚部はｂ、脚部内面は２点ともｄで調整。

０４７住居跡（第160図、図版85・86）

土器のほかに石製模造品、鉄器等が出土した。

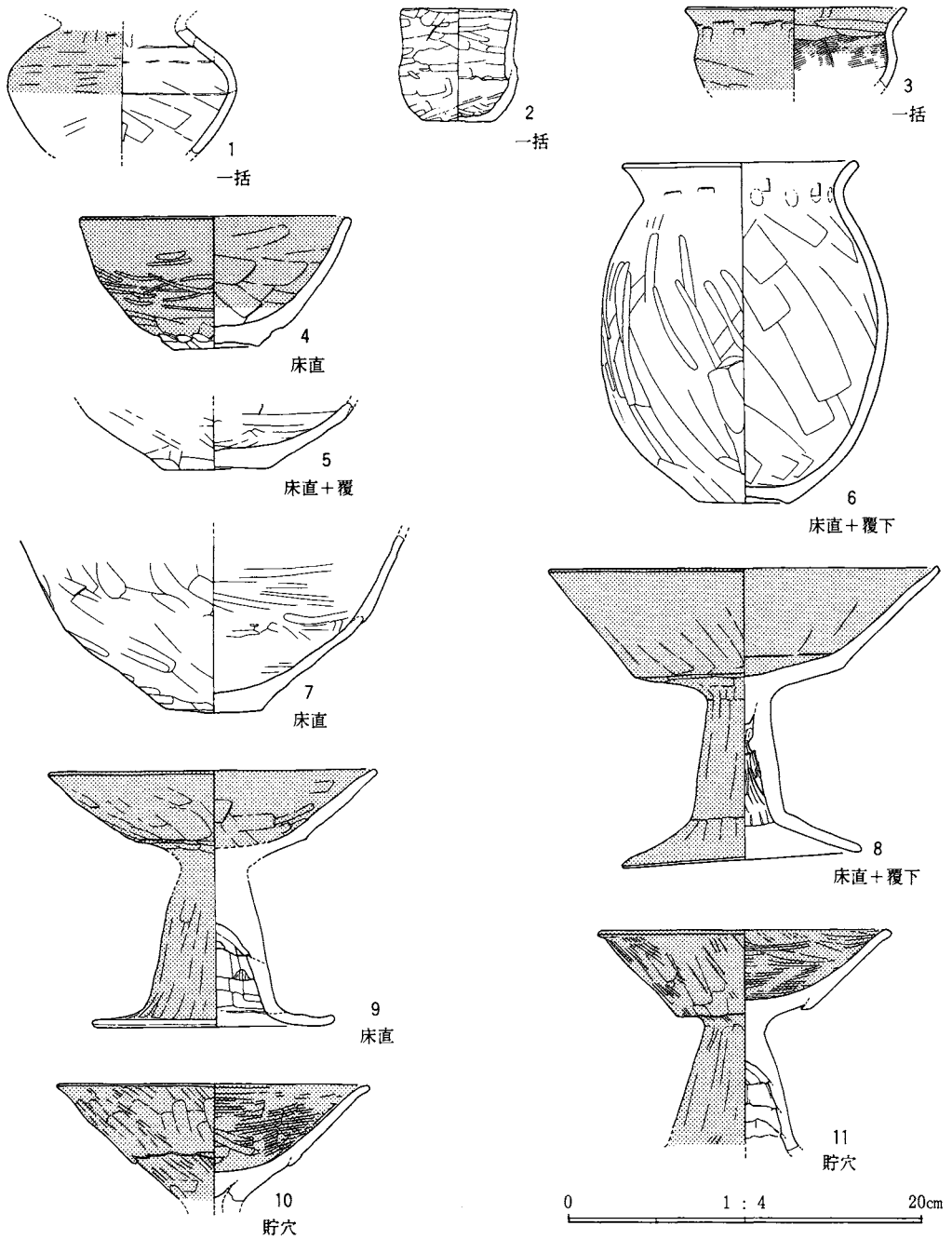
出土位置を記録した遺物は約36点、このうち図示した遺物は11点、平面的にとくにまとまった傾向はない、層位的には覆土下層、床面から出土したものが多い。

１、２は小形坩。２は一応Ｃに分類したが器形は不確実、調整は雑なケズリ後ナデ。

３、４は埦・鉢とした一群。３はＡ１、４はＤ、２点とも内外面赤彩。

５～７は甕。６はＡ２ａ、口縁ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ミガキ様ナデ、内面ヘラナデ。

８～11は高坏。８、９はＢ、坏部の形態はｂ（８、９）、ｅ（10、11）、ｅはナデ整形で坏部の粘土を下方に寄せて稜を作り出している。脚部の形態はａ（８）とｂ（９）がある。脚部内面の成･整形はｂ（８）、ｃ（11）、ｄ（９）の三種類がある、４点とも赤彩。

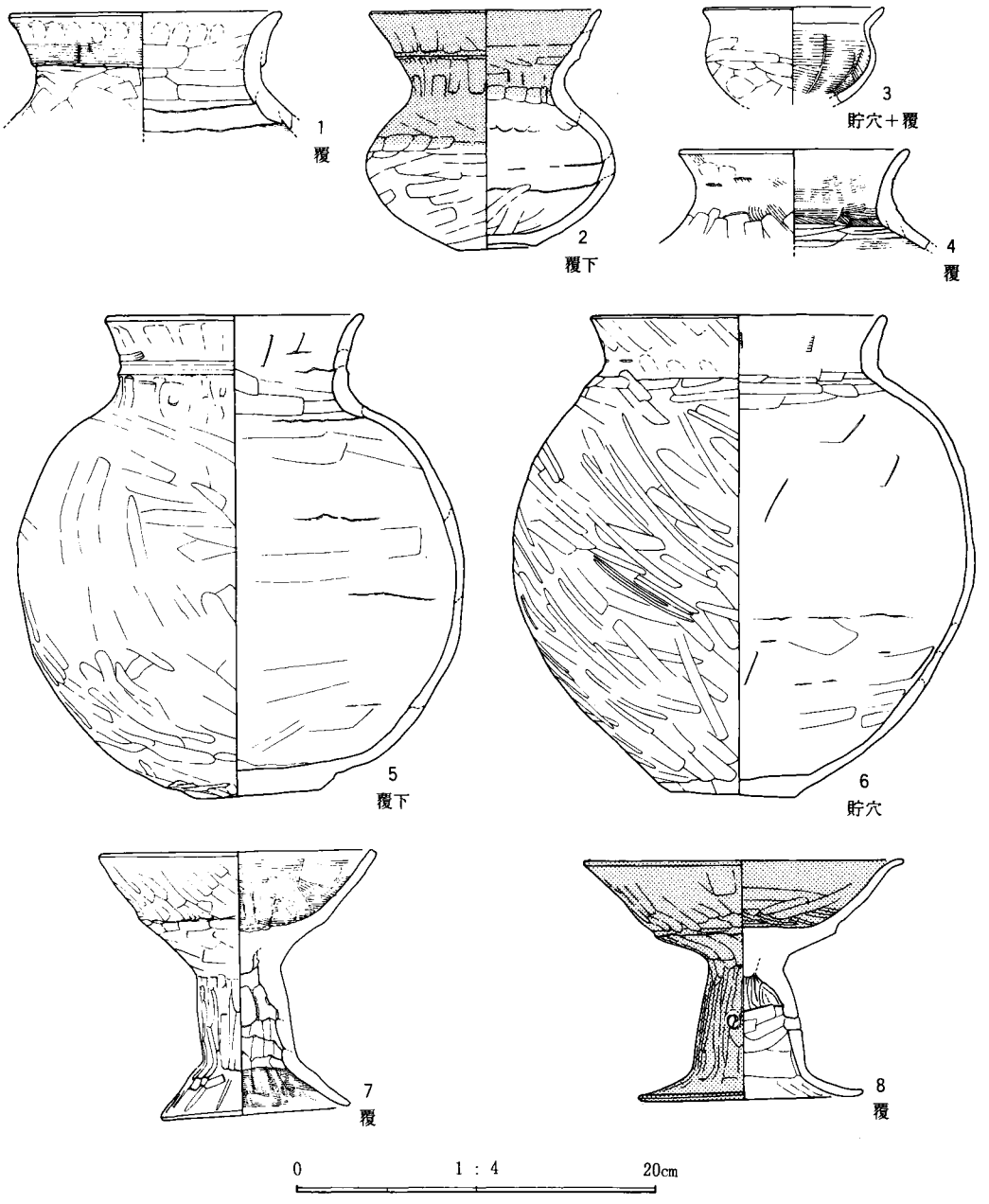


第160図　047号住居跡出土土器

０４８住居跡（第161図、図版86・87）

土器のほかに砥石、鉄器等が出土した。出土位置を記録した遺物は52点、平面的には南東の貯蔵穴とその周辺に集中する。層位的には覆土下層と貯蔵穴内から出土したものが多い。

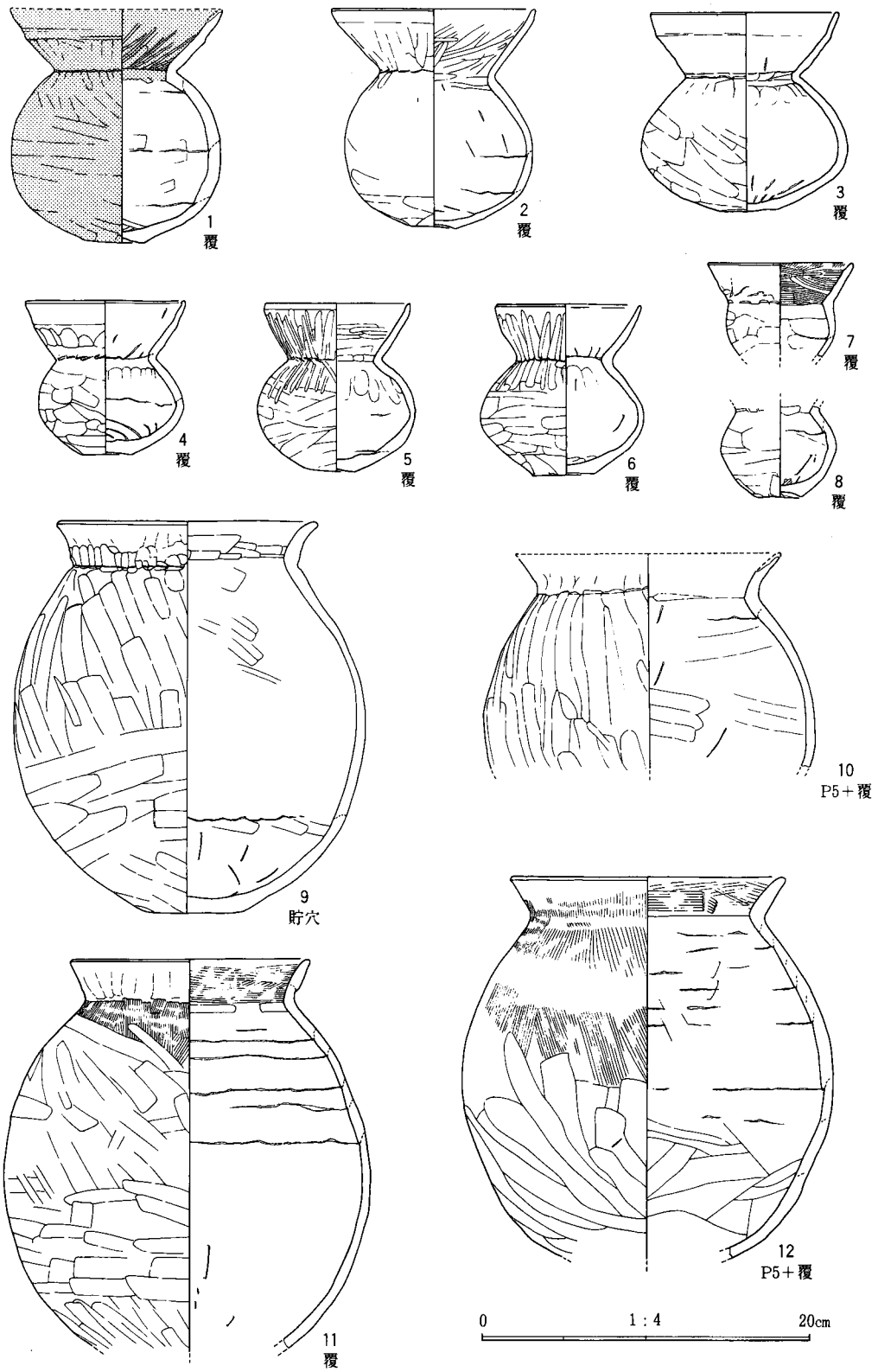
1は壺Ｂ？、甕の可能性もある。2は大形坩Ｂ2、内外面上半赤彩。3は埦・鉢Ａ1。



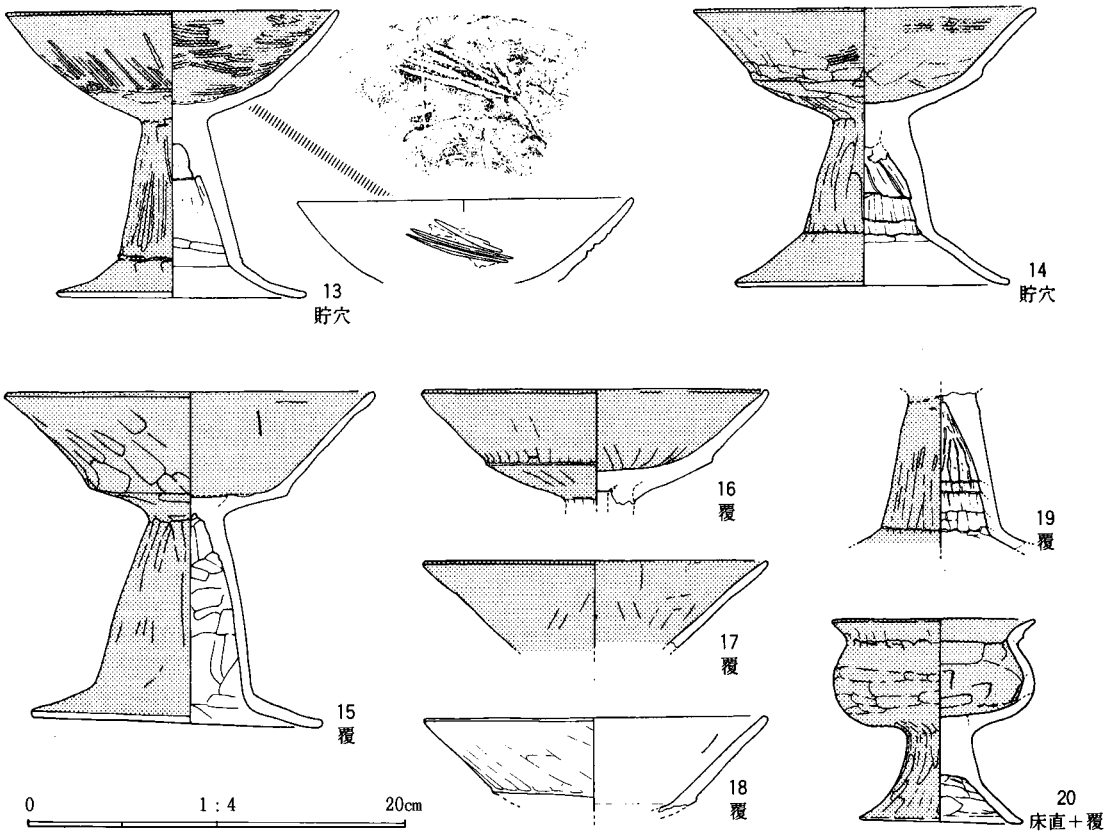
第161図　048号住居跡出土土器

4は甕、口縁形態ｂ。5は甕Ａ1ｂ、口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ナデ、内面ヘラナデ。6は甕Ａ2ａ、口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ナデさらにヘラミガキ、内面はヘラナデ、外面下方は赤色に変色、中位以下に煤付着、内面も中位以下は黒ずんでいる。

7、8は高坏Ｂ、坏部形態ｂ、脚部形態ａ、脚部内面ｃ（7）、ｄ（8）。7の整形は丁寧だが器形が洗練されていない。8には焼成前穿孔の透し孔が三つ、ほぼ均等に開いている。



第162図　049号住居跡出土土器(1)



第163図　049号住居跡出土土器(2)

０４９住居跡（第162・163図、図版87～89）

土器のほかに板状土製品、鉄器等が出土した。

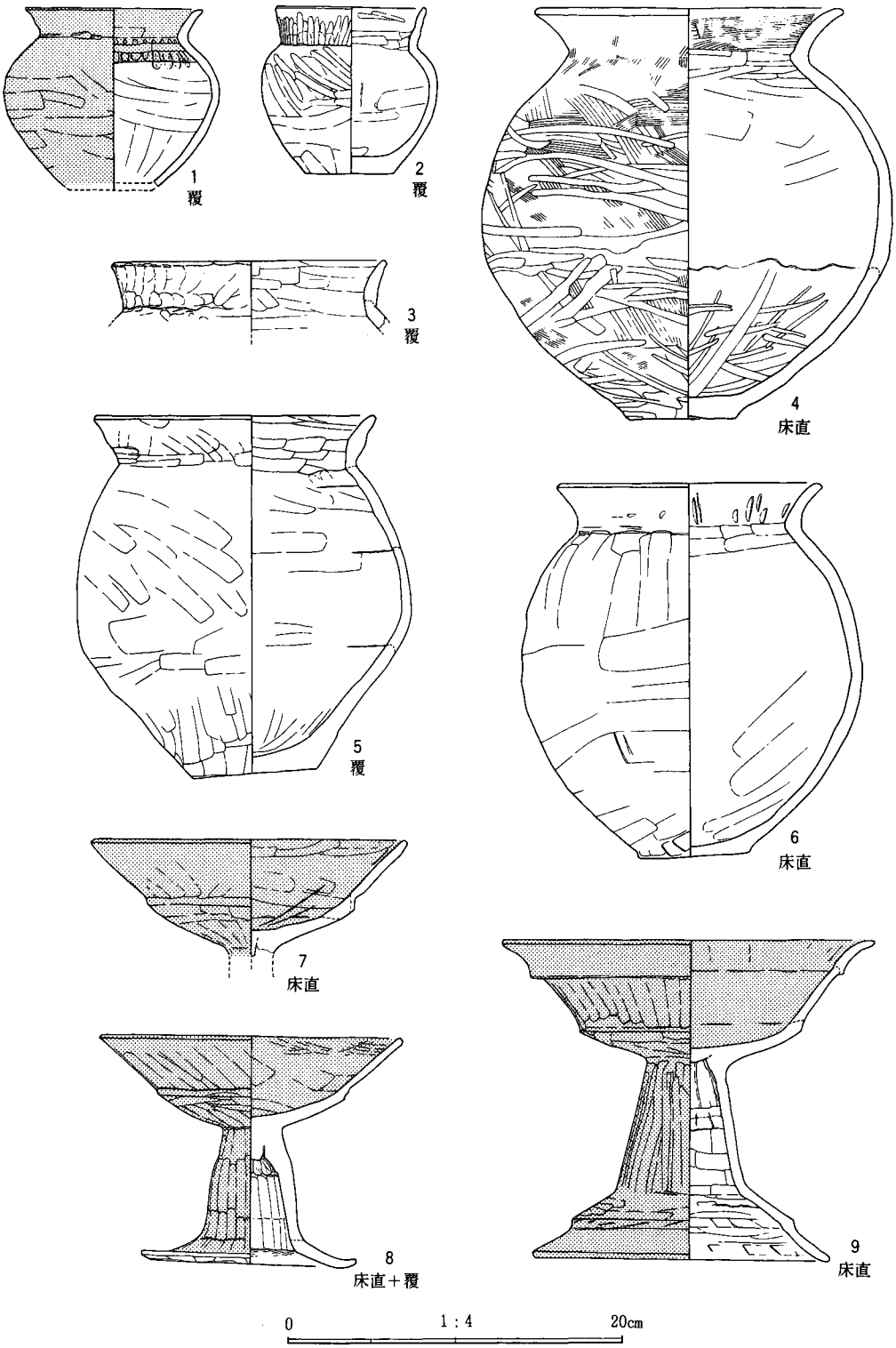
出土位置を記録した遺物は約55点、図示できたのは20点である。平面的には北壁中央と南隅の貯蔵穴およびその周辺に土器の集中がある。10、12は破片が両方の集中に散っていた。層位的には９、10、12～14、20が貯蔵穴やピット内から、それ以外は覆土中から発見された。

１～８は坩、３と７を除いて底部は上げ底状となる、１のみ赤彩痕が残る。１、２が大形坩Ｂ1。３は大形坩Ｂ2。４、６は小形坩Ｂ２。５、８は小形坩Ｂ1。

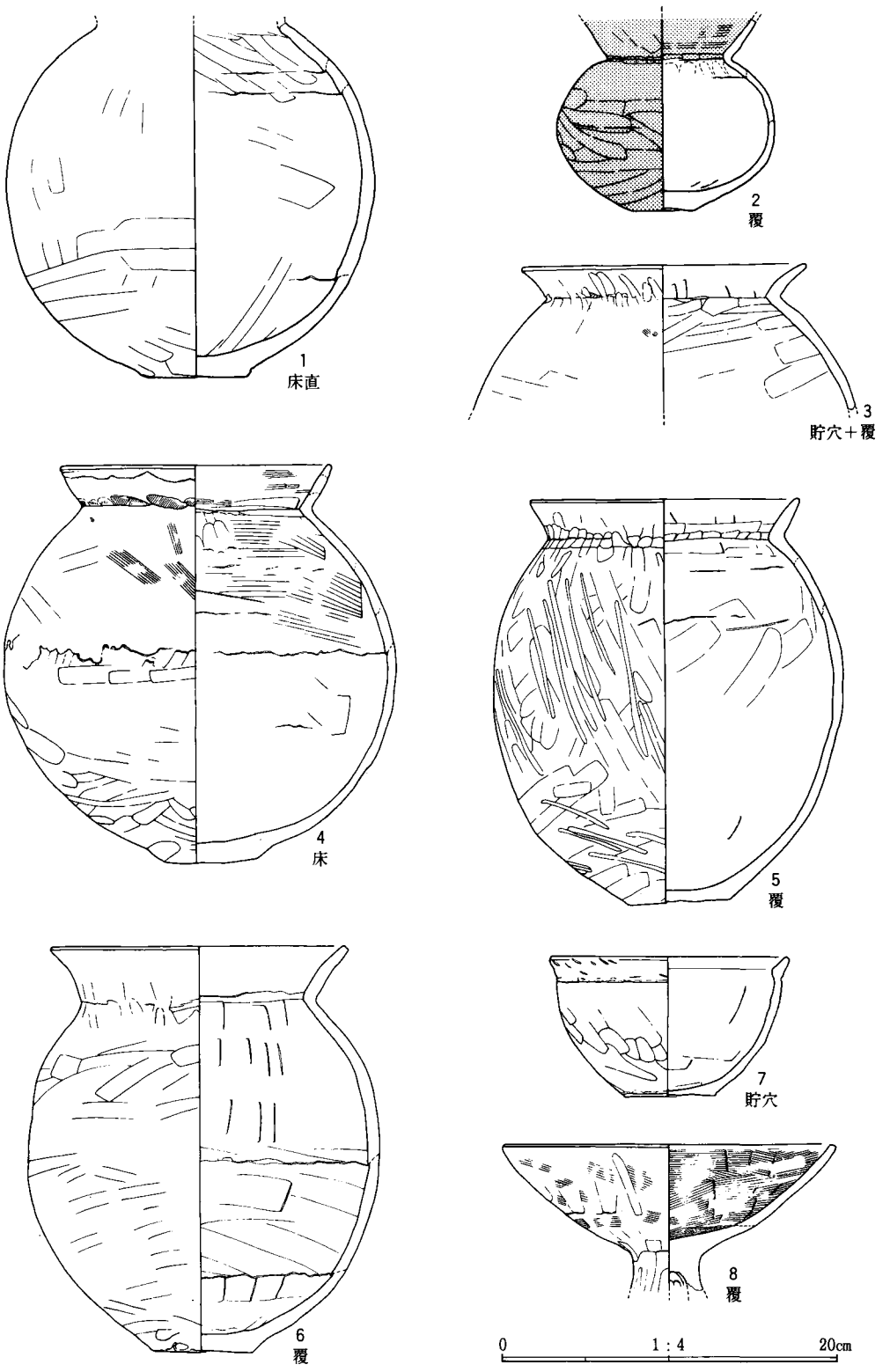
９～12は甕。９と11が甕Ａ２b、12は甕Ａ２a。９は内外面に黒斑、内面一部器面荒れ。

13～19は高坏、18を除きすべて赤彩。器形のわかる13、14、15は三点とも高坏Ｂに分類される。坏部形態はｂ（15、16）、ｅ（13、14）脚部形態はすべてａ、脚部内面の整形はｃ（14、19）とｄ（13、15）が認められる。13の坏部外面には４条ほどの断面Ｕ字状の擦痕が観察される、類例は少なくないが本遺跡ではこの一例のみ、砥石のような使用法が想定される。

20は台付鉢。埦・鉢Ａ２に高坏脚部ｄが付いた器形、脚部内面の調整はｅ、坏内外と脚外赤彩。



第164図　050号住居跡出土土器



第165図　051号住居跡出土土器(1)

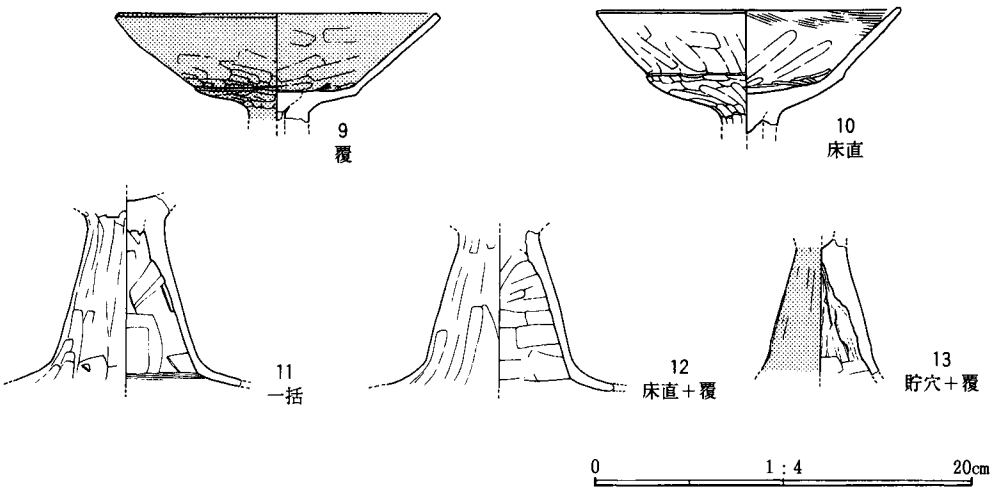
０５０住居跡（第164図、図版90・91）

土器のほかに滑石製勾玉、滑石製臼玉、鉄器等が出土した。

出土位置を記録した遺物は約113点、このうち72点が滑石製の玉類である。図示した土器は９点で、多くは住居跡の北東に集中しており玉類が出土した位置とは異なる。

１～６は甕。１、２は小形甕2a、二つともナデ、ミガキで丁寧に調整されている。４は甕Ａ１a、外面ハケ整形後ナデ。５、６は甕Ａ２a、二点とも調整が雑である。

７～９は高坏、三点とも脚部内面を除いて赤彩。７は坏部形態ｅ。８は高坏Ｂ、坏部形態はｅ、脚部形態はａ、脚部内面の整形はｄ。９は高坏Ｄ１、今回の報告中、最も大形の高坏で器形も本遺跡では他に類例がない、坏部形態はｉ、脚部形態はｃ、脚部内面の整形はｄ。



第166図　051号住居跡出土土器(2)

０５１住居跡（第165・166図、図版91・92）

土器のほかに軽石、鉄器等が出土した。

出土位置を記録した遺物は約25点、図示した土器は13点で、住居跡の南西にある貯蔵穴内とその周辺に集中していた。

２は大形坩Ｂ２。外面はヘラケズリ後丁寧なナデ、内面はハケ整形後ナデ、一部に黒斑。

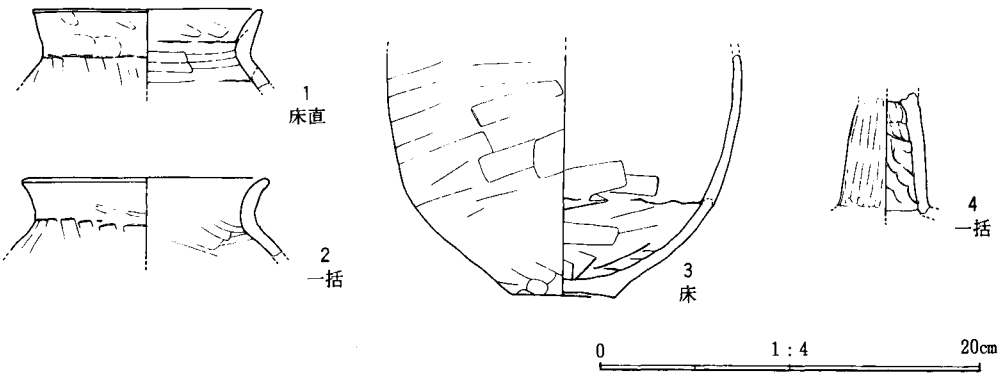
１、３～６は甕。１は器形的には壺の可能性もあるが外面に煤の付着があり、ミガキも認められないので甕とした。４は甕Ａ１a。５、６は甕Ａ２a。４、５の外面に煤が付着。

７は埦・鉢Ｂ３。口縁ヨコナデ、くびれ部外面には輪積み痕が残る、くびれ部付近の内面には稜がめぐる、体部は内外面ともヘラケズリ後ナデで調整。

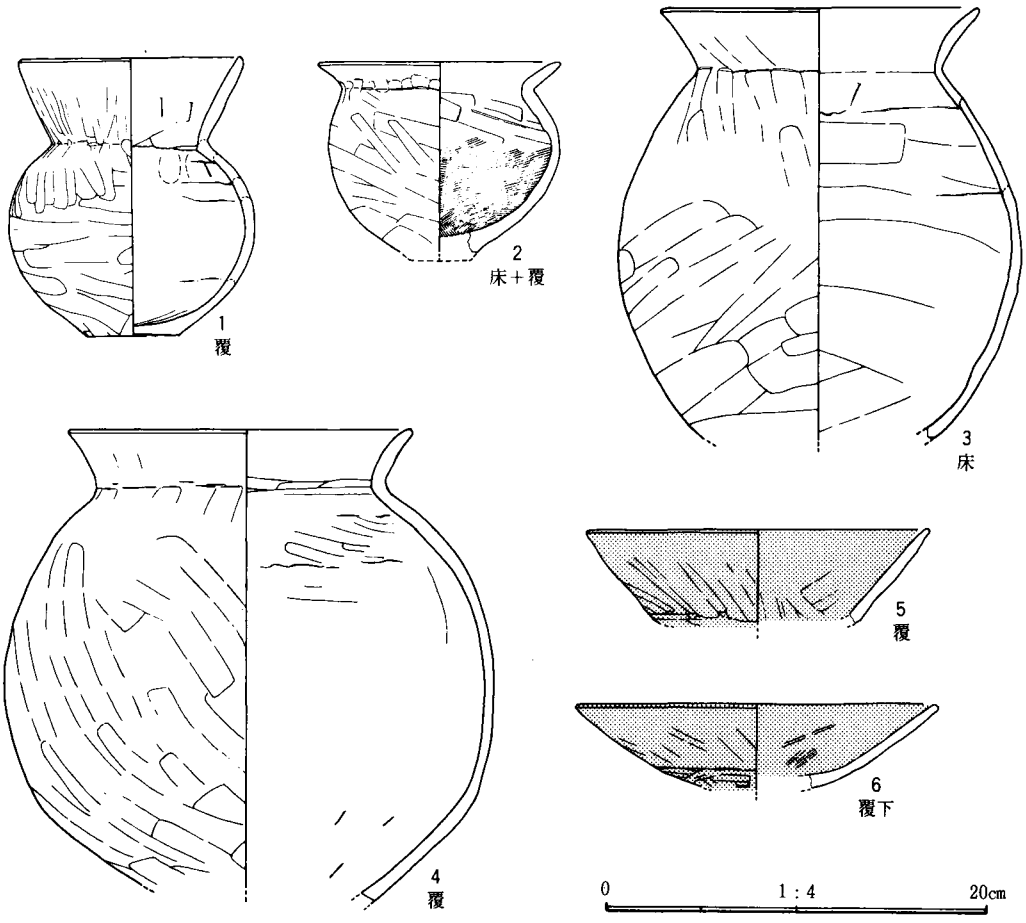
８～13は高坏。８～10は坏部破片、形態はｂ（９、10）、ｆ（８）がある。11～13は脚部破片、形態はｂ、内面の調整はｂ（13）、ｅ（11、12）。９と13に赤彩の痕跡が残る。

052住居跡（第167図）

土器のほかに砥石、鉄器等が出土した。出土位置を記録した遺物は約5点。



第167図　052号住居跡出土土器



第168図　053号住居跡出土土器

1～3は甕。1は口縁部の破片で形態はａ。2も口縁部の破片で形態はｂ。

4は高坏の脚部破片、形態はａ？、脚部内面の調整はｄ、一部分が二次的に被熱している。

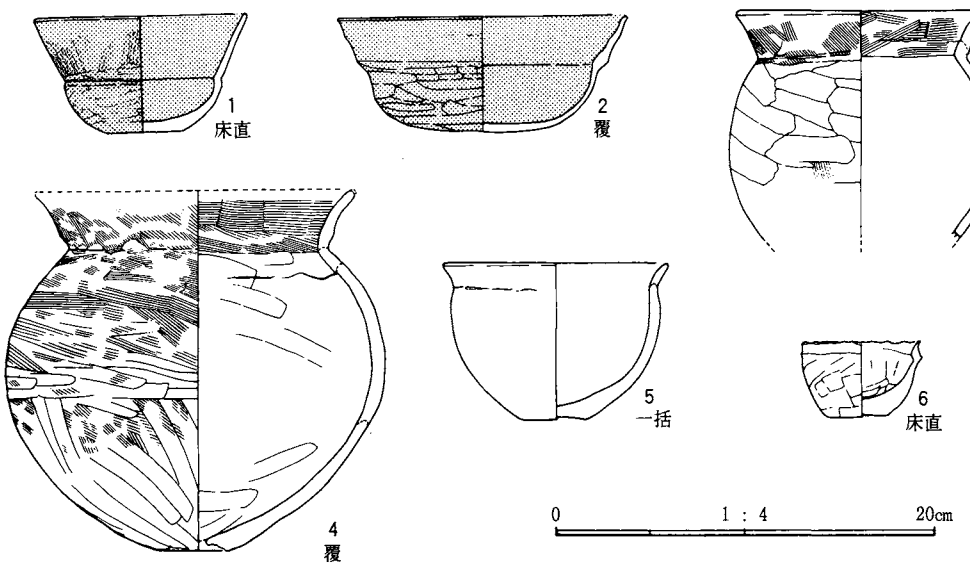
０５３住居跡（第168図、図版92）

土器のほかに鉄器等が出土した。

出土位置を記録した遺物は約28点、そのうち図示した土器は６点である。平面的には住居跡の南側から出土したものが多い。層位的には覆土中出土のものが多かった。

1は大形坩Ｂ1、口縁ヨコナデ、外面上半はケズリ後ミガキ、それ以外はナデで調整。

2～4は甕。2は小形甕1ａ、口縁ヨコナデ？、外面はヘラケズリ後ナデ、内面は単位の細かいハケ整形後ナデ、内外面に黒斑。3は甕Ａ2ａ？、口縁ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ナデ、内面ナデ。4は甕Ａ1ａ？、口縁ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ナデ、内面ナデ、外面煤付着。　5、6は高坏の坏部破片、形態は不明、二点とも内外面赤彩、6は表面の剝離が著しい。



第169図　055号住居跡出土土器

０５５住居跡（第169図、図版93）

土器のほかに鉄器等が出土した。

出土位置を記録した遺物は約11点と少なく、図示した５点も特徴的な分布はしていない。

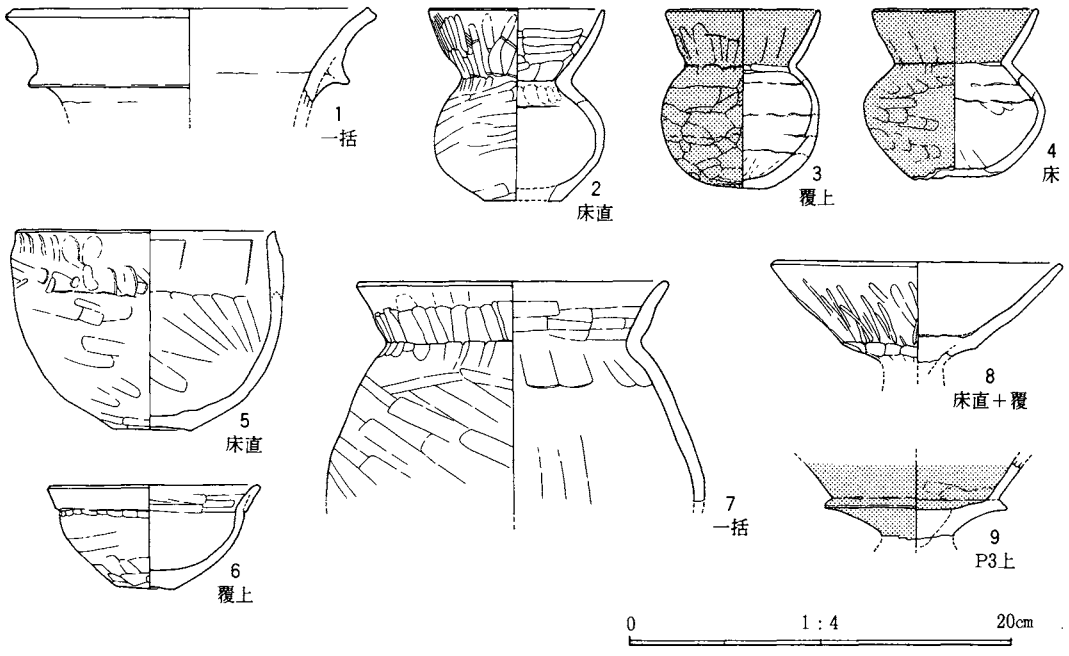
1は小形坩Ｃ。比較的広い底部から胴部は内湾気味に立ち上がる、頸部は低い段が付きさらに口縁に向かって直線的に開く。全体に薄く丁寧につくられている。外面はケズリ？後、胴部下半を除いて細かいヘラミガキ、内面は丁寧なナデ整形が施される、底部以外は全面赤彩。

2は埦・鉢C。丸底ではないが不安定な底部から胴部は内湾気味に立ち上がる、頸部で小さな段が付きさらに口縁に向かって直線的に開く。全体に薄くつくられているが整形はさほど丁寧ではない。口縁ヨコナデ、外面は横方向のヘラケズリ後ナデ、内面はケズリ？後ナデ。焼成は良好でかなり硬質な感じがする、底部も含めて全面が赤彩される。

3と4は甕A2a。3は小形の甕で口縁の内外に細かいハケメを残す、胴部はケズリ様のナデ。4も上半部にハケメを残す、内面は剝離が多い、内外面の下半は変色している。

5は埦・鉢B4の破片。底部は上げ底状になる、外面はヘラミガキ？

6は手ずくね、口縁はヨコナデ、口縁以外は横方向の雑なケズリ、内外面に黒斑がある。



第170図　056号住居跡出土土器

０５６住居跡（第170図、図版93・94）

土器のほかに軽石、鉄器等が出土した。

出土位置を記録した遺物は約17点、出土層位は覆土上層と床面に分かれる。

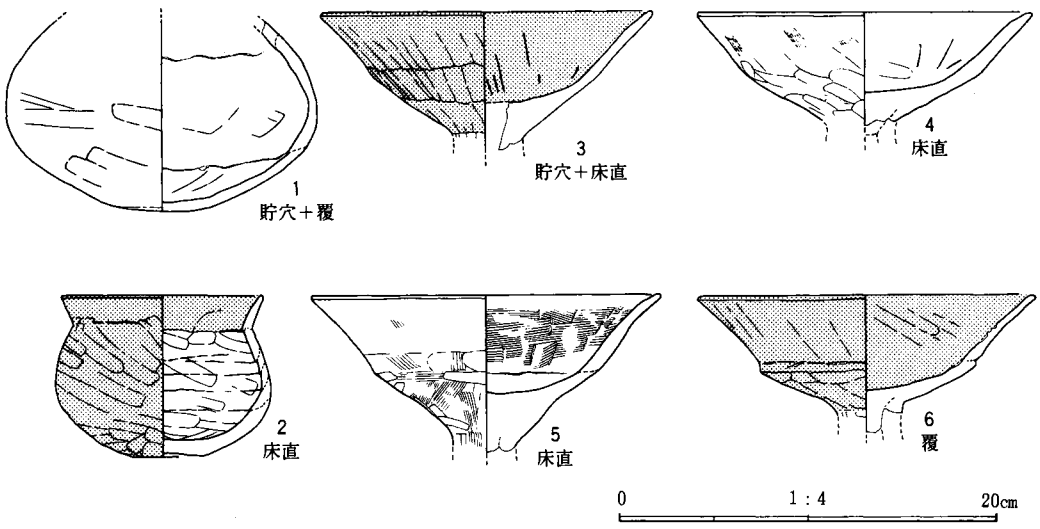
1は壺Aの口縁部破片。口唇部には平坦面をもつ、突帯状の部分は粘土紐を貼り付け、さらにつまむように整形している、調整は内外面とも丁寧なヘラミガキが施されている。

2～4は小形坩。2と4はB2か？、3はA1に分類されよう。2は頸から口縁にかけて内湾ぎみに立ち上がる。4の底部は意識的に打ちかいて割れ口を調整している。

5と6は埦・鉢とした一群。5は埦・鉢D。6は埦・鉢B3、胴部内面は剝離が著しい。

7は甕の破片。口縁部の形態はａ、口縁ヨコナデ、胴部は内外面ともケズリ様のナデ。

8と9は高坏の坏部破片。8は坏部形態ｂ。9は高坏D6、本遺跡ではこの一例のみ。



第171図　057号住居跡出土土器

０５７住居跡（第171図、図版94）

土器のほかに磨石、鉄器等が出土した。

出土位置を記録した遺物は約16点、このうち図示した土器は６点である。平面的に見ると主柱穴を結んだ線より壁寄りから発見されたものが多くとくに南西にある貯蔵穴とその周辺に集中している。出土層位は床面、床面直上が多く貯蔵穴がこれに次いでいる。

１は大形坩の胴部破片。大形坩Ａ２に分類できよう、外面はヘラケズリ後丁寧なナデ、内面はヘラナデ、外面上半に煤付着、下半は桃色に変色、内面は部分的に剝離が見られる。

２は埦・鉢Ａ２。底部は上げ底状となる。口縁ヨコナデ、内外面とも横方向のヘラケズリ後ナデ。内面中位から上半にかけて著しい変色と部分的な剝離。口縁内外面と胴部外面に赤彩。

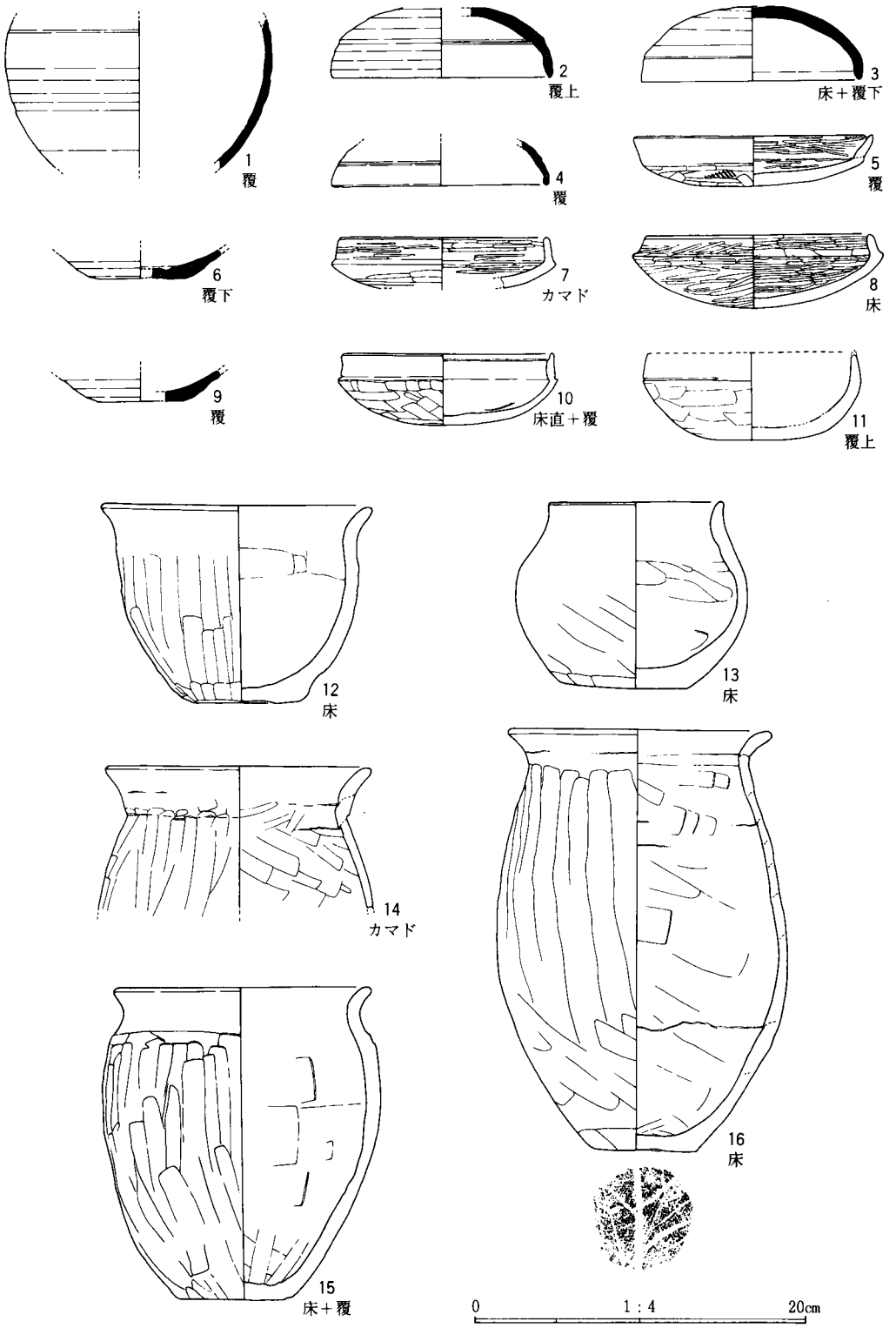
３～６は高坏の坏部破片。形態はすべてｅに分類されるが６を除いて外面の稜が弱くｆに近い。４点とも部分的な剝離や黒斑が認められる。３と６は内外面とも赤彩。

０３８住居跡（第172～174図、図版95～97）

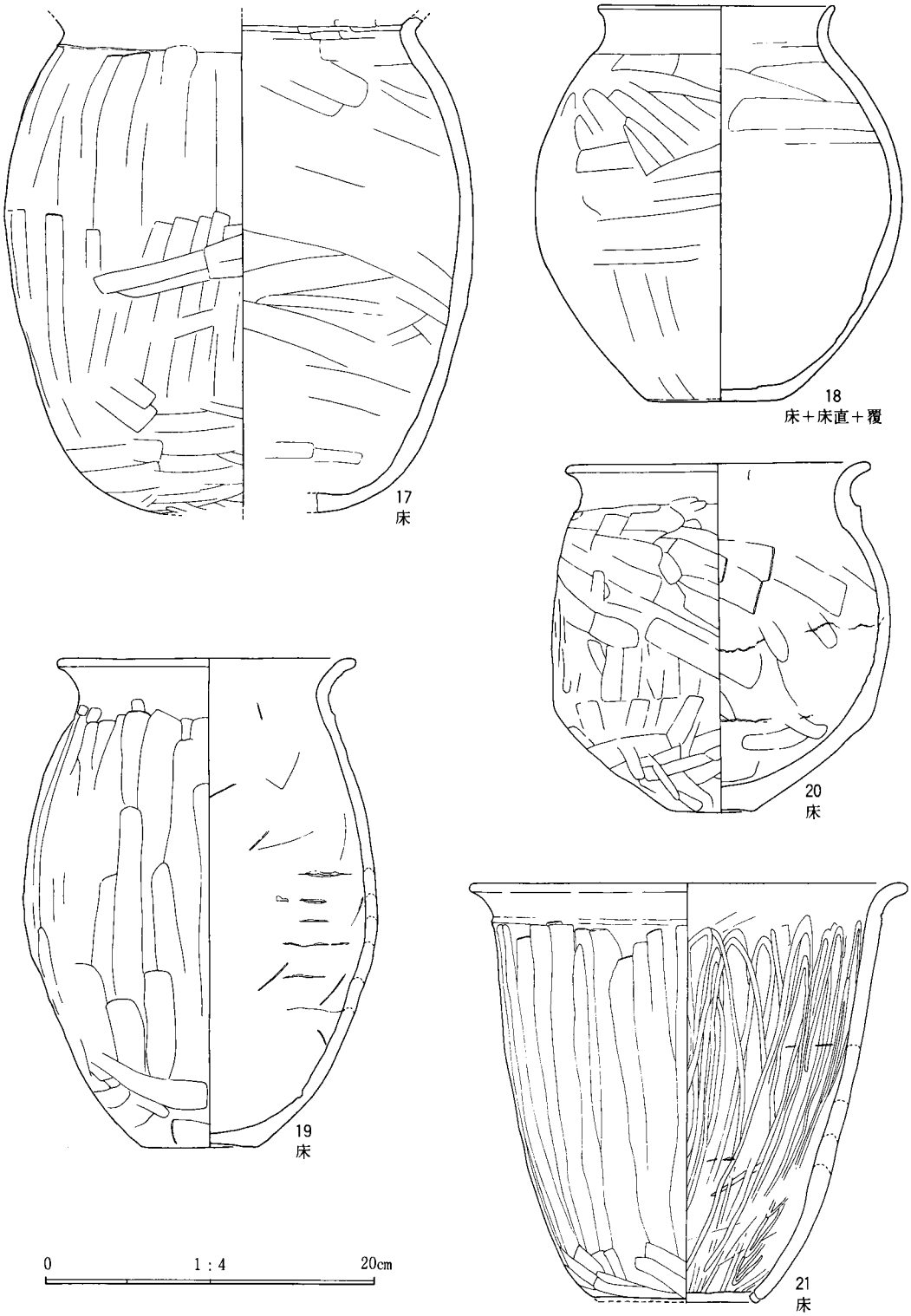
土器のほかに砥石、鉄器、軽石等が出土した。

出土位置を記録した遺物は約45点、このうち図示した土器は29点で遺物の遺存状態は比較的良いほうである。平面的な分布を見ると土器はおおむね半分より西側から出土している。さらに良く観察すればカマドの東脇から発見された19、21、27のグループと北西隅に近い８、11、12、13、16、17、18、20、22、23、24などの二つの集中が識別される。出土層位は数点を除いて床面と覆土下層に集中する。

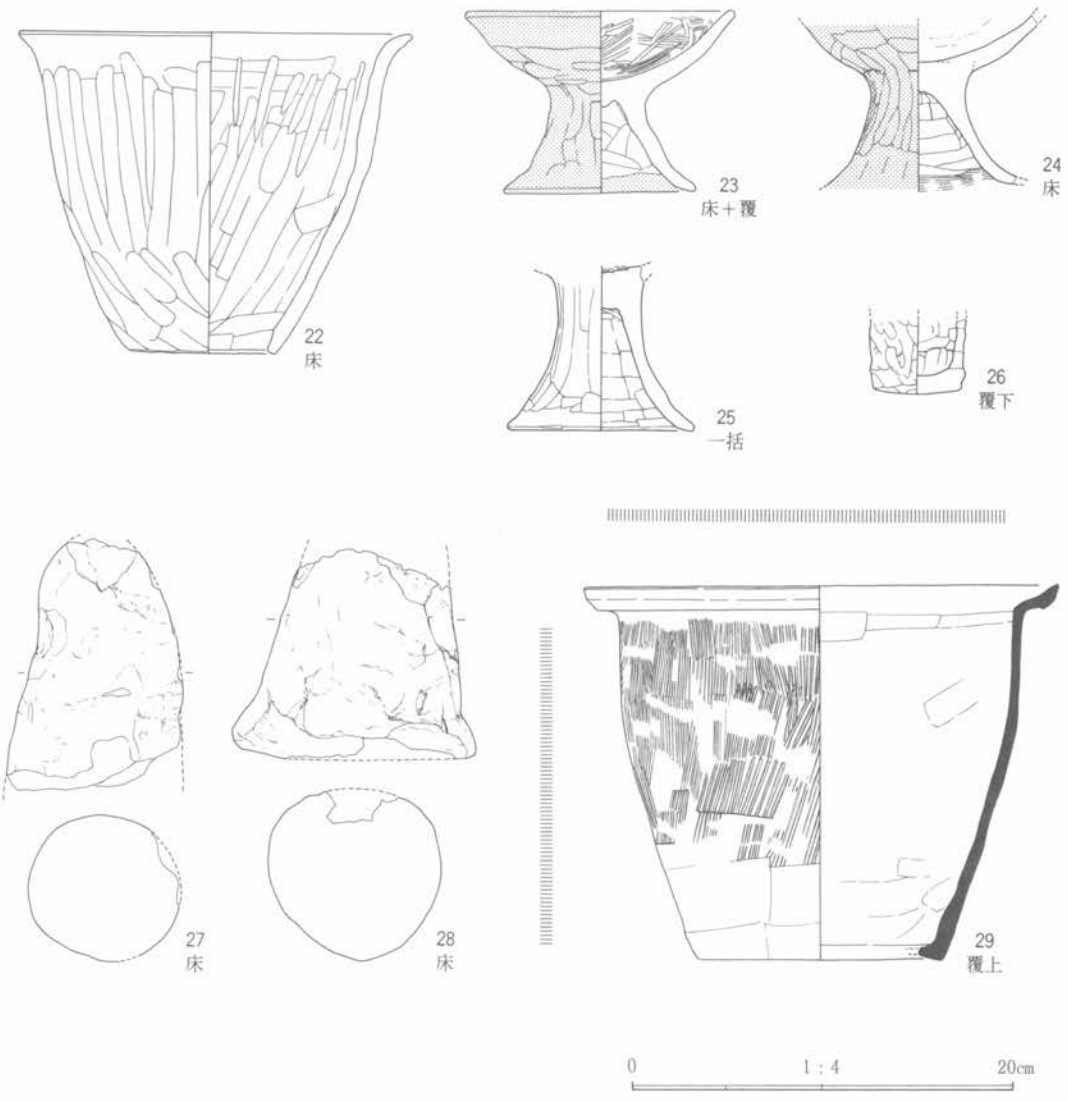
１～４、６、９は須恵器。３を除いて破片の復元実測。１は長頸壺か。２～４は坏ふた、頂



第172図　038号住居跡出土土器(1)



第173図　038号住居跡出土土器(2)



第174図　038号住居跡出土土器(3)

部にヘラケズリが認められる。いずれも在地で焼かれた土器と考えられるが具体的な産地は不明。3は口縁ヨコナデ、肩に浅く弱い沈線がめぐる、内側は丁寧なナデ。

5、7、8、10、11は土師器坏。5は底部が丸く偏平な坏。体部から口縁へは短く開いて立ち上がる、口縁ヨコナデ、底部外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキ、内面黒色処理か。7は体部から口縁へ内傾して立ち上がる、底部欠損、口縁ヨコナデ、内面はヘラミガキ、内面黒色処理。8は底部が丸い坏。体部から口縁へは短く内傾して立ち上がる、口縁ヨコナデ、底部外面はヘラケズリ後ヘラミガキ、内面は細かいヘラミガキ、内面黒色処理か。10も底部が丸い坏。体部から口縁へはやや内傾して立ち上がる、他の坏よりは深めである、口縁ヨコナデ、底部外面はヘラケズリ、内面はナデ。11は平底で深めの坏。底部から内湾して立ち上がり更に内湾して口縁へ至る、口縁ヨコナデ、底部外面はヘラケズリ後ナデ、内面はナデ、器面の一部が剝離

12は鉢。口縁ヨコナデ、外面は上から下へ粗いヘラケズリ、内面はナデか。

13は壺？。球形の胴に短く直立する口縁をもつ、外面ヘラケズリ、内面ナデ、口縁ヨコナデ

14～20は甕。14、16、19は長胴の甕、整形は共通で口縁部はヨコナデ、胴部外面は上から下へヘラケズリ、底部付近は横方向のヘラケズリ、内面はヘラナデ。16の底部に木葉痕が有り、胴の一部に亀裂が入る。19は器表面の荒れが著しく、内面は部分的に剝離もみられる。

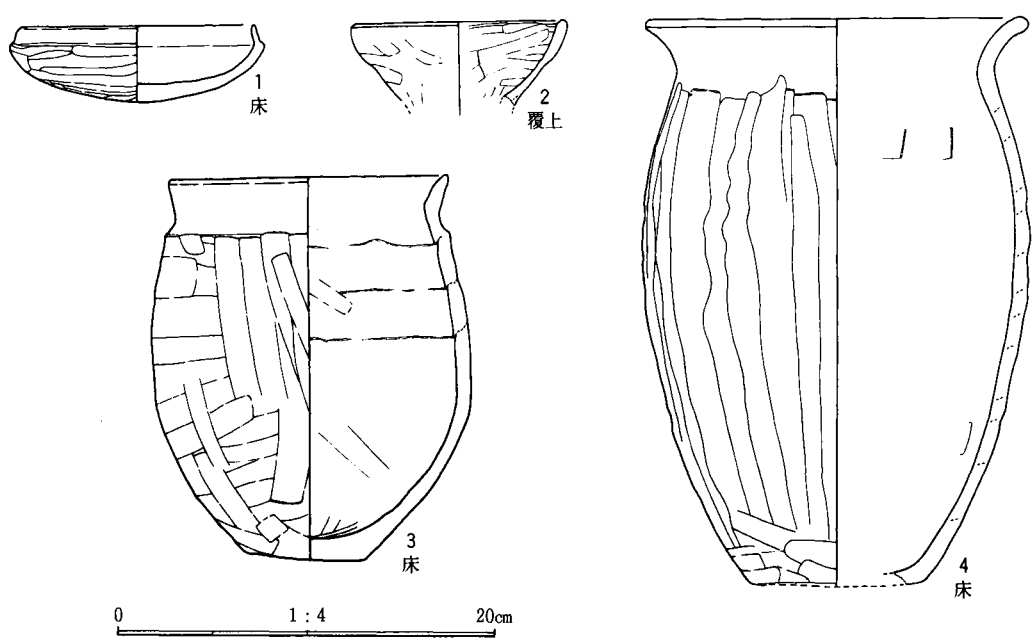
21と22は甑。二つとも「バケツ」形の甑で器形、整形とも似ている。器形は底部からやや内湾しながら開いて立ち上がり口縁にいたる、口縁は外反してさらに開く、口唇部は丸みを持つ、21は底部付近で、22は胴中位で弱く屈曲する。整形は口縁ヨコナデ、外面は上から下へヘラケズリ、底部付近は斜めのヘラケズリ、内面は横方向のヘラケズリ後、縦方向のヘラミガキ。

23～25は高坏。23は内湾ぎみに開く小さい坏部に大きく開く太めの脚部が付く。口縁部ヨコナデ、坏部外面はヘラケズリ後ナデ、坏部内面はミガキ？、脚部外面は縦のヘラケズリ後ナデ、脚部内面は接合部までヘラケズリ。外面全体と脚部内面の一部まで赤彩。24も23と同じような器形、調整の高坏であろう。25は23より細く高い脚部の破片、調整は同様、裾端部ヨコナデ。

26は手ずくね。現存部分は底径5㎝程のコップ状である。

27と28は土製支脚の破片、2点とも胎土は似ているが別の個体である。

29は須恵器の甑。本住居跡の覆土上層より発見されたが明らかに時期が異なる。底部から内湾ぎみに立ち上がり強く外側に屈曲して口縁となる、口縁部は他より厚みがある、底部は欠損。



第175図　054号住居跡出土土器

口縁部ヨコナデ、外面上半はタタキ、下半はヘラケズリ、内面はナデ。

０５４住居跡（第175図、図版97）

土器のほかに鉄器等が出土した。出土位置を記録した遺物は13点、そのうち図示したものは４点で東と西の壁寄りから発見された、層位的には２を除いて床面からの出土である。

１は土師器坏。底部が丸く偏平な坏。体部から口縁へは短く内傾して立ち上がる、口縁ヨコナデ、底部外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキ、内面黒色処理か。

２は器種不明。端部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ナデ、内面ケズリ様ナデ。

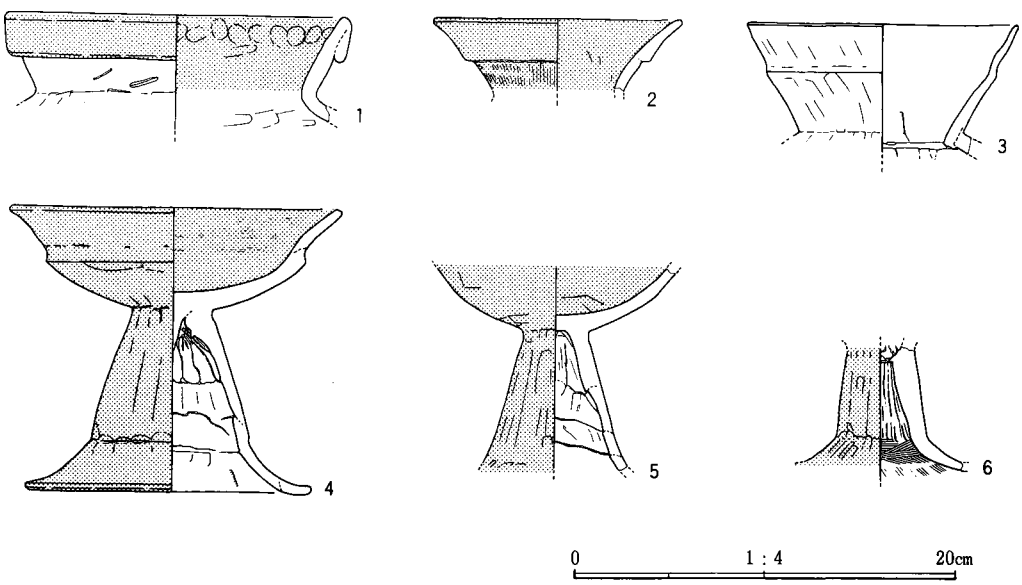
３と４は甕。３はやや長い卵形の胴部に外反する口縁がつく、肩部に稜があり最大径は中位より少し下にある。口縁部はヨコナデ、胴部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ。４は長胴の甕、口縁部ヨコナデ、胴部外面は縦のヘラケズリ、下端は横のヘラケズリ、内面はヘラナデ。

グリッド出土土器（第176図）

１と２は壺Ｂの口縁部破片。１の口縁内面に指頭？痕あり。１、２とも赤彩。

３は大形坩。口縁部に弱い稜がつく、最終調整はていねいなナデ。

４～６は高坏。４は高坏Ｂ。いずれかの住居跡から出土したものだが整理途中で所属不明となった。坏部形態ｅ、脚部形態ａ、脚部内面調整ｄ。三点とも外面に赤彩が残っている。



第176図　古墳時代グリッド出土土器

第14表　古墳時代・歴史時代土器属性

遺構	挿図No.	分類	遺存度	口径	器高	底径	容量	胎土	焼成	色調（内/外）	赤彩	備考
016	1	壺B	口縁1/8残	(12.6)	(3.5)	−	/	微砂粒	良	黄褐/赤褐	−	
016	2	小坩	口縁1/5残	(9.4)	(3.1)	−	/	微砂粒	良	茶褐/暗褐	−	
016	3	小坩B2		9.6	9.4	3.5	220 / 370		良	暗褐	○	
016	4	甕A2a	口縁1/2欠	18.2	23.4	7.0	1,550 / 1,930	微砂粒	良	茶褐	−	
016	5	甕A2a	口縁3/5欠	−	(23.7)	6.6	1,750 / (2,300)	微砂粒多	良	茶褐	−	胴中煤
016	6	甑A2	口縁1/3欠	(15.1)	22.3	5.2	3,870 / 4,220	微砂粒多	良	黄褐	−	上部煤焼後穿孔3
016	7	甕A2a	口縁1/4欠	15.7	(43.0)	−	/	赤褐粒	良	黄褐	−	胴下半二次被熱
016	8	甕		−	5.6	7.2	/	砂粒	良	茶褐	−	
016	9	高坏	口縁1/4欠	18.4	(7.0)	−	/ 545	粗砂粒	良	明褐	−	一部黒斑
016	10	高坏	2/3欠	−	(4.9)	11.4	/		良		○	
016	11	高坏	裾1/6欠	−	(1.2)	12.0	/	砂粒	良	茶褐	○	二次被熱
016	12	高坏		−	9.1	13.2	/	微砂粒	良		○	羽口に転用
016	13	高坏		−	7.4	13.5	/	2㎜小石	良		○	羽口に転用
017	1	小坩	1/7残	(4.5)	(3.5)	−	/	精選	良	黒/黄褐	−	
017	2	甕	1/5残	(11.2)	(5.1)	−	/	微砂粒	良		○	
017	3	甕B1a	胴1/3欠	15.5	28.3	丸底	7,500 / 8,100	砂粒	良	暗褐	−	搬入品？黒斑？
017	4	甕A2a		17.8	26.0	6.5	5,900 / 6,400	砂粒	良	茶褐	−	外煤
017	5	甕A2a	口縁1/2欠	16.6	21.9	5.9	3,950 / 4,520	砂粒	良	暗褐	−	黒斑
017	6	小甕1a	胴1/4欠	12.5	14.8	5.7	1,550 / 1,780	微砂粒	良	赤褐	−	外煤
017	7	高坏	坏1/6残	(20.4)	(4.6)	−	/	砂粒	良		○	
017	8	高坏		−	(3.2)	−	/	微砂粒	良		○	
017	9	高坏	裾1/8残	−	(2.7)	14.6	/	微砂粒	良	内茶褐	○	
018	1	壺C	1/3欠	(16.0)	(20.6)	−	/	粗白砂粒		黄褐	−	器表面荒れ
018	2	小坩	口縁1/3欠	11.9	(3.8)	−	/	砂粒	良	赤褐	○	
018	3	須恵高坏	坏一部残	−	(5.5)	−	/		良	断セピア外青灰	−	陶邑TK73？
024	1	壺B	口縁1/10残	(19.0)	(6.3)	−	/	精選	良	黄褐	−	
024	2	小坩B1		9.3	8.2	3.6	110 / 225	微砂粒多	良	橙～黄褐	−	
024	3	小坩B1		9.1	8.6	4.6	215 / 300	精選	良	黒/黄褐	○	
024	4	甕A3a	口縁2/3欠	(16.6)	22.6	5.0	4,200 / (4,570)	微砂粒多	良	黄褐/赤褐	−	外煤
024	5	高坏B	脚一部欠	17.1	13.6	11.9	/ 450		良	赤褐	−	
024	6	高坏B	脚一部欠	18.4	14.5	15.8	/ 570	微砂粒多	普通	暗黄褐	−	
024	7	高坏	口縁少欠	20.0	5.1	−	/ 800	微砂粒	良	赤褐	○	煤
026	1	小坩B2	胴1/4欠	9.1	9.4	3.7	165 / 275	砂	良	茶褐	−	一部黒斑
026	2	小坩A1		7.3	7.7	−	125 / 175	茶小石多	良	茶褐	−	
026	3	鉢		9.7	9.2	3.2	155 / 295	微砂粒	良	茶褐	−	
026	4	埦・鉢B4	口縁1/3欠	9.4	8.9	2.4	260 / 330	微砂粒	良	赤褐一部黄褐	−	
026	5	埦・鉢A3		7.0	6.1	2.9	145 / 180	微砂粒	良	赤褐	○	一部黒斑
026	6	埦・鉢A3		9.2	8.0	3.9	345 / 405	微砂粒	良	明褐	○	二次被熱
026	7	埦・鉢A2		9.6	8.5	3.7	315 / 390	微砂粒	良	黄褐/暗褐	○	外黒斑
026	8	埦・鉢B2	1/3欠	12.5	6.4	4.8	/	精選	普通	黄褐	−	
026	9	甕A2a		16.5	26.2	5.7	6,100 / 6,650	微砂粒	良	茶褐	−	煤
026	10	壺C	1/5欠	12.1	12.7	4.2	820 / 1,075	赤褐色粒	良	赤褐	○	
026	11	甕		−	(5.9)	3.4	/		良	茶褐	−	外底器面荒れ
026	12	高坏B	裾1/3欠	17.1	11.4	12.3	/ 350	微砂粒多	良	黄褐	○	径3㎜茶色小石含
026	13	高坏		17.3	(7.1)	−	/ 450	微砂粒	良	0	○	
026	14	高坏		17.8	(5.0)	−	/ 465	微砂粒多	良	赤褐	○	
026	15	高坏		−	(3.9)	−	/		良	茶褐	−	
026	16	高坏		−	(7.8)	13.0	/	精選	良	黄褐	−	
027A	1	坏A	口縁1/2欠	(14.1)	(5.6)	−	/	粗砂粒多	良	茶褐	−	一部黒斑
027A	2	甕	1/4残	(16.2)	(2.7)	−	/	砂粒	良	暗茶褐	−	
027A	3	甕A2a	2/3欠	17.8	(19.5)	−	/		良	茶褐	−	
027A	4	甕		(13.2)	(8.6)	−	/	微砂粒	良	茶褐/赤褐	−	内外剝離外一部煤
027A	5	高坏	1/4欠	19.7	(6.2)	−	/ 650		普通	黒/暗赤褐	−	

遺構	挿図No.	分類	遺存度	口径	器高	底径	容量	胎土	焼成	色調（内/外）	赤彩	備考
027B	1	甕	口縁1/10残	(16.0)	3.0	−	/	微砂粒多	良	茶褐	−	煤
028	1	壺A		21.2	35.4	8.5	/	微砂粒多	良	黄褐	−	容量13,050/14,300
028	2	小坩	1/3欠	8.9	−	−	/	微砂粒多	普通		○	白色針状物？
028	3	？		−	(5.2)	3.3	/	砂粒	良	茶褐	−	
028	4	甕		(16.6)	7.9	−	/	精選	普通	淡茶褐	−	
028	5	甕A2b	1/3欠	16.9	(19.3)	−	/	砂粒多	普通	黄褐	−	外全煤
028	6	甕A3a		16.8	24.3	6.6	5,050 / 5,480	粗砂粒	良	赤褐	−	剝離胴中外煤
028	7	手ずくね	口縁1/3欠	10.0	6.9	4.3	/ 250	赤褐粒	良		−	
028	8	高坏A		−	(4.7)	−	/	精選砂粒	良		○	
028	9	高坏A		−	(6.2)	−	/	精選	普通		−	内表面剝離
028	10	高坏		−	(7.3)	−	/	微砂粒	良	褐	○	
028	11	高坏		−	(6.1)	(9.5)	/	微砂粒	良	褐	○	
028	12	高坏	3/5残	20.5	4.0	−	/ 470	精選	良	赤褐	○	内煤？
028	13	高坏		17.7	−	−	/ 420	粗砂粒	良	暗褐	−	
028	14	高坏	1/4残	16.5	(4.9)	−	/ 350	砂粒	良	赤褐	−	外煤
030	1	壺A		21.2	35.4	8.5	/	微砂粒多	良	黄褐	−	028-1と同一個体
030	2	甕A1a		16.5	24.5	6.6	4,650 / 5,150	粗砂粒	良	茶褐	−	
030	3	甕A4b	胴1/3残	19.2	(16.7)	−	/	砂粒	良	茶褐/赤褐	−	
032	1	小坩A2	口縁端欠	7.4	8.3	−	140 / 200	粗砂粒	良	赤褐	−	器面荒れ
032	2	小坩B1	胴一部欠	8.5	9.4	2.9	120 / 260	微砂粒多	普通	赤褐/暗黄褐	−	
032	3	小坩A2	胴1/4残	−	(6.3)	−	/	微砂粒	良	赤褐/茶褐	○	胴内器面剝離
032	4	小坩B1		(5.4)	(6.8)	3.1	/ (200)	精選	良	赤褐	○	
032	5	小坩	口縁1/3欠	10.8	(5.2)	−	/	微砂粒	良		○	黒斑
032	6	埦・鉢B4	胴1/2残	(11.7)	7.6	4.0	/ (500)	砂粒	普通	暗赤/暗赤褐	−	二次被熱？器面荒れ
032	7	坏B	口縁1/4欠	12.0	4.4	4.0	/ 220	精選	普通	暗黄褐	−	
032	8	高坏D3	坏1/2欠	(15.8)	(13.4)	−	/ 400	精選	良	黄褐	○	
032	9	高坏A	坏1/3欠	(15.7)	7.0	−	/ 445	精選	良		○	
032	10	高坏D4	口唇1/3欠	12.8	(4.6)	−	/ 165	砂粒	良	明赤	○	
032	11	高坏		18.0	(3.8)	−	/	精選	普通	黄褐	−	
032	12	高坏	1/3残	(16.2)	(4.5)	−	/	微砂粒	良	茶褐	−	
032	13	高坏	1/8残	(17.8)	(3.2)	−	/	微砂粒	良	茶褐	−	
032	14	高坏	1/2残	−	(2.1)	13.6	/	精選	普通	黄褐	−	
032	15	高坏		−	5.2	11.7	/	砂粒	良	赤一部黒	○	
032	16	高坏		−	(6.2)	9.4	/	微砂粒	良	黄褐	−	被熱変色
032	17	高坏		−	(6.1)	11.1	/	白小石	良	茶褐	○	
034	1	小坩C	口縁1/6残	(12.4)	(4.5)	−	/	微砂粒	良	茶褐	−	
035	1	鉢？	口縁1/4残	7.3	9.0	6.0	260 / 340	小石粒	良	茶褐	○	胴焼成後穿孔
035	2	埦・鉢B1	口縁1/2欠	−	(5.6)	4.8	/	微砂粒多	良	茶褐	−	
035	3	小甕2a	胴1/3欠	10.3	17.1	4.8	1,450 / 1,565	砂粒多	普通	暗黄褐	−	
035	4	甕	口唇欠	24.6	(9.0)	−	/	微砂粒	良	茶褐	−	
035	5	甕		(13.6)	(12.1)	−	/	微砂粒	良	茶褐	−	外煤内器面荒れ
035	6	甕A3a	底2/3欠	17.1	24.8	(6.8)	5,700 / 6200	砂粒	良	暗褐/茶褐	−	外黒斑
035	7	高坏		−	(1.7)	(10.8)	/	砂粒	良	赤褐	−	
035	8	高坏		−	(3.4)	18.0	/	砂粒	良	黒褐/茶褐	○	
036	1	小坩	口縁1/6残	(9.8)	(4.2)	−	/	砂粒	良	茶褐	−	
036	2	坏A2b	1/3欠	12.1	5.4	4.7	/ 330	粗砂粒	良	赤褐	○	胴～底剝離
036	3	坏A2a	口唇	10.2	5.9	4.5	/ 300	粗砂粒	良	暗赤褐	○	外黒斑
036	4	坏A1a		12.4	4.5	−	/ 310	砂粒多	良	赤褐	○	内底一部剝離
036	5	坏A1b	口縁1/2欠	12.9	4.7	4.8	/ 350	粗砂粒	良	暗茶褐	○	内一部剝離
036	6	坏A1b	1/2欠損	13.5	4.8	5.1	/ 350	粗砂粒	良	暗茶褐	○	内剝離多
036	7	坏A1	1/8残	(10.1)	(4.6)	−	/	精選	良		○	
036	8	甕	1/10残	(18.8)	(4.6)	−	/	砂粒	良	茶褐	−	
036	9	高坏C		14.5	11.3	11.9	/ 485	粗砂粒	良	赤褐	○	

遺構	挿図No.	分類	遺存度	口径	器高	底径	容量	胎土	焼成	色調（内/外）	赤彩	備考
036	10	高坏C		13.8	10.7	9.2	/ 250	砂粒	良	暗褐/赤	○	
036	11	高坏C		15.3	11.1	11.9	/ 335	微砂粒多	普通	淡黒/黄褐	○	
036	12	高坏B	1/3残	(16.9)	13.6	—	/ (500)	砂粒多	普通	赤褐	○	
036	13	高坏		12.8	(7.1)	—	/ 165	精選	良	赤褐	○	
036	14	高坏		15.0	(4.8)	—	/ 300	微砂粒多	普通	赤褐	○	
036	15	高坏		—	(4.1)	—	/	砂粒	良		○	
036	16	高坏	一部欠	15.7	(6.3)	—	/ 350	砂粒多	良	赤褐	—	一部煤付
036	17	高坏		20.9	(5.0)	—	/ 365	微砂粒多	良	暗赤褐	○	
036	18	高坏	5/6残	15.5	5.1	—	/ 310	微砂粒多	良	赤褐	○	
036	19	高坏	口唇1/3欠	15.0	5.0	—	/ 315	精選小石	良	赤褐	○	
043	1	壺B		15.2	16.5	—	/	赤褐粒	良	褐	○	
043	2	壺	底1/3残	—	10.5	8.1	/	砂粒	良	暗褐	—	黒斑内剝離
043	3	小坩B2		8.4	9.8	3.9	230 / 335	精選	良	黄褐	—	黒斑内剝離多
043	4	小坩B2		8.5	9.4	3.8	130 / 230	砂粒	良	明茶褐	—	黒斑内剝離
043	5	小坩B2	胴下2/3残	7.8	6.7	—	/	小石	良	赤褐	—	
043	6	小坩？		—	(2.8)	2.2	/	砂粒	良	茶褐	—	
043	7	埦・鉢B2	口縁1/6欠	13.0	6.7	5.0	/	精選	良	赤褐	○	胴内剝離
043	8	埦・鉢A1	少	12.0	7.6	3.1	300 / 430	砂粒	普通	黒/黄褐	—	
043	9	埦・鉢B3		9.8	6.9	2.4	250 / 335		普通	赤褐	—	
043	10	埦・鉢A3	口縁3/4残	(8.2)	8.0	4.4	245 / (305)	砂粒	良	暗褐	—	黒斑内剝離多
043	11	埦・鉢A2	口縁1/4欠	10.9	(17.7)	—	/	微砂粒	良	赤褐/明褐	○	胴内剝離
043	12	坏A1b	底1/2欠	11.8	5.0	2.7	/ 280	微砂粒	良	暗褐/明褐	—	外黒斑内剝離多
043	13	甕A1a	2/3残	(16.1)	21.3	6.4	3,480 / (3,880)	赤褐粒	良	黄褐	○	胴上煤内剝離多
034	14	甕A3a		13.8	19.8	6.1	3,150 / 3,380	粗砂粒	良	茶褐	—	煤（底変色）
034	15	甕A2b		19.8	25.4	6.9	7,450 / 8,100	精選	良	茶褐	—	外煤多
043	16	甕A3b	胴下1/2欠	17.4	25.1	7.8	5,800 / 6,400	微砂粒	良	暗褐	—	
043	17	甕A3b	口縁1/4欠	16.6	23.1	6.4	4,450 / 4,950	精選	良	黄褐	—	外底以外煤
043	18	高坏B		18.8	24.0	13.0	/ 520		良	赤褐	—	
043	19	高坏B		17.9	13.9	13.6	/ 490	精選	良	赤褐	○	
043	20	高坏D2	裾1/2欠	19.1	14.5	(15.2)	/ 435	茶小石	良	赤褐	○	
043	21	高坏	裾3/4欠	—	(9.0)	(13.2)	/	微砂粒	良	黄褐/赤褐	○	焼成前穿孔2
043	22	高坏B	裾1/4欠	19.0	15.6	(12.7)	/ 585	微砂粒	良	赤	—	内黒斑坏底剝離
043	23	高坏B		17.3	14.5	13.4	/ 525	砂粒	良	暗褐	—	黒斑
043	24	高坏		18.8	(4.8)	—	/ 445	精選	良	黄褐	—	白色針状物
043	25	高坏D5	口唇欠	16.4	(5.4)	—	/ 500	砂粒	良	暗褐/黄褐	—	
043	26	高坏	裾1/2残	—	—	12.7	/	微砂粒多	良	黄褐	○	一部煤
044	1	小坩B2	口縁少欠	10.3	9.8	2.4	170 / 310	微砂粒多	良	赤褐	—	
044	2	小坩B2	口縁2/3欠	7.4	8.9	4.0	170 / 245	砂粒	良	赤褐	—	
044	3	埦・鉢E	一部欠	11.8	8.6	5.3	285 / 435	粗砂粒	良	暗赤/赤褐	—	外黒斑
044	4	甕A2a	胴下1/4欠	16.7	24.1	5.7	4,900 / 5,300	微砂粒含	良	暗赤/赤褐	—	外黒斑
044	5	甕A1a	口縁1/4残	(10.5)	(14.6)	—	/	微砂粒	良	茶褐	—	
044	6	甕A1a	2/5欠	15.3	(20.2)	—	/	赤褐粒	良	茶褐一部黒褐	—	
044	7	甕		—	(27.8)	7.4	/ (8,050)	砂粒	良	赤褐	—	黒斑
044	8	小甕1a	口縁1/2欠	12.9	2.5	4.9	1,110 / 1,300		普通	暗茶褐	—	
044	9	小甕1a	口縁1/4欠	10.8	11.3	4.6	615 / 745	砂粒	良	暗赤褐	—	黒斑
044	10	小甕1a	1/2欠	12.8	10.8	—	/	微砂粒	普通	暗黄褐/赤褐	—	胴外剝離赤変
044	11	埦・鉢A3	口縁1/2欠	9.5	8.7	3.9	280 / 365	微砂粒多	良	赤褐	—	
044	12	埦・鉢D		11.1	7.3	5.0	/ 500	微砂粒	普通	暗茶褐	—	
044	13	高坏B	裾1/3欠	18.5	14.8	13.3	/ 565	粗砂粒	良	暗褐	○	黒斑
044	14	高坏B	1/5欠	18.2	13.9	13.5	/ 515	微砂粒多	良	赤褐	○	
044	15	高坏B		18.4	13.7	15.0	/ 515	石英	良	赤褐	—	
044	16	高坏B	裾1/2欠	17.6	12.9	13.3	/ 430	砂粒	良	赤褐	○	裾一部黒斑
044	17	高坏D2	1/3欠	17.9	13.1	13.6	/ 285	微砂粒	良	茶褐	○	胴内黒斑
044	18	高坏	脚1/3欠	19.1	12.0	—	/ 550	微砂粒多	良	赤褐	○	
044	19	高坏		16.9	(8.9)	—	/ 385	微砂粒	良	赤	—	
044	20	高坏		15.8	6.7	—	/ 365	微砂粒多	良	赤褐	—	

遺構	挿図No.	分類	遺存度	口径	器高	底径	容量	胎土	焼成	色調（内/外）	赤彩	備考
044	21	高坏		－	(5.8)	9.7	/	微砂粒	良	赤褐	○	
044	22	高坏	1/2残	18.0	6.8	－	/ 485	微砂粒多	良	茶褐	－	黒斑
044	23	高坏	一部欠	17.8	6.2	－	/ 550	微砂粒	良	赤褐	○	
044	24	高坏	裾一部欠	－	(9.7)	13.0	/	砂粒多	普通	暗赤褐	－	
044	25	高坏	1/4欠	17.2	7.2	－	/ 450	砂粒多	普通	暗赤褐	－	
044	26	高坏	口縁1/4欠	17.6	(6.4)	－	/ 430	微砂粒多	良	暗褐	－	
045	1	壺B	胴1/3欠	17.3	(29.7)	－	/	小石	良	黄褐	－	外煤内剝離
045	2	壺B	1/3残	16.2	(3.2)	－	/	砂粒	良		○	
045	3	小坩		11.2	(3.5)	－	/	微砂粒	良		○	
045	4	大坩B1		8.4	11.7	2.9	370 / 520		普通	茶褐	－	
045	5	小坩B2		10.3	9.5	－	310 / 460	精選	良	暗黄褐	－	
045	6	小坩B2		－	(7.1)	3.4	/ (330)	微砂粒	良	茶褐	○	
045	7	小坩B1	口縁一部欠	10.0	9.9	3.7	230 / 380	微砂粒	普通	暗褐	－	
045	8	小坩B2		8.5	10.7	4.6	210 / 310	微砂粒多	普通	明黄褐	○	
045	9	小坩	胴1/2残	(7.8)	(7.3)	－	/	微砂粒	良		○	
045	10	小坩B1	胴1/3欠	9.5	9.0	4.0	160 / 290	粗砂粒	悪	暗茶褐	－	胴内剝離
045	11	小坩B2		9.8	9.0	2.9	190 / 330	微砂粒	良	赤褐	○	
045	12	小坩B2		8.2	9.2	4.2	155 / 240	粗砂粒	良	暗褐	－	
045	13	小坩A1		7.8	8.8	3.3	115 / 185		良	黄褐	－	外剝離被熱？
045	14	小坩B2	1/3欠	8.5	7.6	3.5	115 / 215	砂粒	良	黄茶褐	○	黒斑器面荒れ
045	15	小坩B2		7.8	7.2	3.8	100 / 170		良	黄褐	－	
045	16	埦·鉢A2	口縁1/4欠	9.5	7.6	3.9	225 / 310	微砂粒多	良	黄褐	○	
045	17	埦·鉢A1	口縁一部欠	11.0	6.9	3.4	250 / 350	微砂粒	良	暗黄褐	○	
045	18	埦·鉢A2	口唇2/3欠	8.5	7.8	3.4	300 / 355	砂粒少	良	黄褐	－	
045	19	埦·鉢A2		9.8	6.6	3.1	250 / 310	微砂粒多	良	暗赤褐	○	
045	20	埦·鉢A2	1/3欠	8.1	7.8	4.6	250 / 325	微砂粒	良	暗褐	－	外黒斑
045	21	甕A3a	口縁1/2欠	16.2	25.8	6.1	6,000 / 6,450	砂粒	良	赤褐	－	
045	22	甕	1/2残	16.0	(4.7)	－	/	微砂粒	良	茶褐	－	
045	23	甕	1/8残	(15.6)	(5.1)	－	/	微砂粒	良	茶褐	－	
045	24	甕	1/2残	－	(9.8)	5.2	/	微砂粒	普通	茶褐	－	
045	25	小甕2a	1/3残	13.9	(13.2)	－	/	微砂粒	良	暗褐	－	
045	26	甕	胴3/4欠	－	(14.5)	7.5	/	砂粒	普通	茶褐	－	胴内剝離
045	27	壺D		7.5	10.9	4.3	420 / 470		普通	黄褐	－	
045	28	小甕	1/2残	11.0	(7.8)	－	/	微砂粒	良	暗赤褐	－	胴外剝離
045	29	小坩		10.1	(8.4)	－	/	砂粒	良	黄褐	○	
045	30	埦·鉢E		(11.9)	(6.7)	(5.5)	/		良	黄褐	－	堅緻・丁寧
045	31	高坏B	坏裾1/4欠	16.8	12.5	12.2	/ 415	砂粒多	良	赤褐	○	焼前穿孔２
045	32	高坏B		17.9	13.7	10.9	/ 505	微砂粒	良	赤褐	○	焼成前穿孔透穴１
045	33	高坏B	裾1/3欠	(18.4)	14.8	13.6	/ (630)	微砂粒多	良	淡赤褐	○	二次被熱？
045	34	高坏B	坏一部欠	17.8	15.9	11.6	/ 515	微砂粒多	良	赤褐	○	
045	35	高坏	口唇1/4欠	18.0	6.0	－	/ 515	微砂粒	良	赤褐	○	
045	36	高坏	底一部欠	(17.5)	6.8	－	/	砂粒	良	暗褐	○	内黒斑
045	37	高坏		16.8	(6.6)	－	/ 465	砂粒	普通	黄褐	○	
045	38	高坏		－	(8.7)	－	/	精選	良	黄褐	○	
045	39	高坏B	脚一部欠	17.8	15.3	13.7	/ 565	微砂粒多	普通	暗赤褐	－	
045	40	高坏		－	(9.7)	15.6	/	微砂粒多	良	赤褐	○	
045	41	高坏		－	(9.5)	12.9	/				○	
046	1	小坩A2	口縁1/3欠	8.5	9.4	－	230 / 330	微砂粒多	普通	茶褐	○	
046	2	甕A2b	底5/6欠	15.4	23.0	5.9	1,700 / 1,865	微砂粒	良	暗褐	－	二次被熱
046	3	甕A2a	口縁1/5欠	17.2	27.1	7.7	5,980 / 6,450	微砂粒多	良	暗黄褐	－	煤
046	4	甕A2b	1/3欠	14.2	(21.5)	－	/	砂粒	良	赤褐	－	
046	5	甕A2a	底1/2欠	17.4	27.6	7.1	6,100 / 6,500	微砂粒	良	茶褐	－	黒斑剝離付着物
046	6	甕A1a	胴1/3欠	13.4	18.0	5.9	2,500 / 2,730	砂粒	普通	暗茶褐	－	
046	7	甑A1	2/3欠	(17.2)	10.4	5.9	/	砂粒	良	暗褐	－	外黒斑焼後穿孔
046	8	高坏B		12.3	17.6	12.2	/ 470	粗砂粒	良	赤褐	○	一部黒斑剝離
046	9	高坏B	口縁1/4欠	17.3	(12.5)	－	/ 585	砂粒	良	赤褐	○	

遺構	挿図No.	分類	遺存度	口径	器高	底径	容量	胎土	焼成	色調（内/外）	赤彩	備考
047	1	小坩	1/4残	－	(7.0)	－	/	砂粒	良	茶褐	○	下半煤
047	2	小坩C	1/3残	(6.6)	6.4	3.8	/	砂粒	良	暗褐	－	
047	3	埦・鉢A1	口縁1/2残	12.6	(4.5)	－	/	微砂粒	良		○	
047	4	埦・鉢D		14.8	7.0	4.6	/ 600	粗砂粒	良		○	
047	5	甕		－	(3.5)	6.1	/	砂粒	良	茶褐	－	
047	6	甕A2a	2/3残	(6.5)	19.0	5.2	2,250 / 2,405	微砂粒	良	淡茶褐	－	
047	7	甕		－	(9.8)	5.6	/	微砂粒多	良	赤褐	－	輪積み痕
047	8	高坏B		22.3	16.1	13.8	/ 1,070	赤褐粒	良	茶褐	○	器面荒れ
047	9	高坏B	脚裾5/6欠	18.6	14.2	14.0	/ 465	微砂粒	良	赤褐	○	
047	10	高坏		17.8	(6.5)	－	/ 465	微砂粒多	良	赤褐	○	
047	11	高坏B		16.8	(12.2)	－	/ 365	微砂粒	良	赤褐	○	
048	1	壺B		15.3	(6.7)	－	/		普通	茶褐	－	
048	2	大坩B2		13.1	13.3	4.6	660 / 975	粗砂粒	良	赤	○	外黒斑
048	3	埦・鉢A1	1/2残	(9.8)	5.4	－	150 / (220)	砂粒多	良	暗赤褐	－	
048	4	甕	1/2残	(12.6)	(5.9)	－	/		良	茶褐	－	
048	5	甕A1b		14.3	26.6	7.0	6,200 / 6,755	微砂粒	良	暗褐	－	黒斑
048	6	甕A2a		16.3	21.4	6.7	7,350 / 7,850	粗砂粒	良	茶褐	－	外下半煤
048	7	高坏B	坏1/4欠	15.6	14.6	10.6	/ 400	微砂粒多	良	暗赤褐	－	
048	8	高坏B	脚一部欠	17.7	13.1	12.4	/ 465	砂粒多	普通	暗黄褐	○	透孔3
049	1	大坩B1	口胴1/3欠	－	(14.1)	3.5	/	砂粒	良	茶褐	○	
049	2	大坩B1	4/5残	12.6	13.4	2.8	495 / 750		良	黄褐	－	
049	3	大坩B2		11.5	12.1	(3.3)	530 / 750	砂粒	良	明褐	－	
049	4	小坩B2		9.6	9.1	3.0	160 / 270	砂粒	良	黄茶褐	－	
049	5	小坩B1		9.0	10.1	3.0	225 / 335	精選	良	黄土	－	
049	6	小坩B2		9.0	10.1	3.9	145 / 245		普通	暗黄褐	－	
049	7	小坩		9.0	(5.7)	－	/	砂粒	良	暗茶褐	－	
049	8	小坩B1		－	(5.5)	2.7	/	砂粒	良	茶褐	－	
049	9	甕A2b		15.6	23.7	5.7	1,700 / 2,000	粗砂粒	良	赤褐	－	黒斑・内面剝離
049	10	甕	口縁2/3欠	15.9	(12.6)	－	/	微砂粒	良	暗茶褐	－	
049	11	甕A2b	胴下2/3欠	14.6	(23.3)	－	/	微砂粒多	良	淡赤褐	－	
049	12	甕A2a	1/4残	(17.0)	(23.3)	－	/	微砂粒多	良	茶褐	－	
049	13	高坏B	裾2/3欠	18.0	15.5	(13.4)	/ 550	精選	良	黄褐	○	坏外溝複数
049	14	高坏B	裾1/3欠	18.2	14.9	14.4	/ 615	微砂粒	良	赤褐	○	
049	15	高坏B	坏1/2残	19.6	17.7	(15.6)	/ 800	砂粒多	普通	赤褐	○	内底剝離
049	16	高坏	口縁1/2欠	18.7	(6.1)	－	/ 600	微砂粒	良	暗褐	○	
049	17	高坏	1/3残	(18.6)	(4.5)	－	/	微砂粒多	普通		○	
049	18	高坏		18.1	(5.1)	－	/	砂粒多	良	黄褐	－	
049	19	高坏		－	(7.9)	－	/	微砂粒	良	茶褐	○	
049	20	台付鉢	裾一部欠	10.9	10.6	8.8	/ 270	微砂粒多	普通	赤褐	○	
050	1	小甕2a	胴1/3欠	10.3	(10.6)	－	/	微砂粒	普通	黄褐	○	
050	2	小甕2a	口縁1/2欠	9.0	9.9	5.2	315 / 435	微砂粒	普通	暗黄褐	－	
050	3	甕	1/3残	(16.2)	(3.5)	－	/	砂粒	良	暗褐	－	
050	4	甕A1a	口縁1/3欠	18.2	24.3	6.3	4,200 / 4,700		良	黒褐	－	
050	5	甕A2a	3/5残	(16.7)	21.4	7.4	3,350 / (3,715)	微砂粒多	良	赤褐	－	
050	6	甕A2a	口肩2/3欠	15.9	22.0	6.6	3,800 / 4,130	砂粒	良	暗赤褐	－	黒斑
050	7	高坏		18.8	(6.6)	－	/ 615	砂粒	良	赤褐	○	一部黒斑
050	8	高坏B	脚1/2欠	18.1	13.1	12.9	/ 555	砂粒	良	明赤褐	○	
050	9	高坏D1		22.3	18.5	15.8	/ 1,050	砂粒多	普通	黄褐	○	
051	1	壺		－	(21.0)	5.8	/ 4,600	白色砂粒	良	茶褐～灰黒	－	外煤
051	2	大坩B2		－	(11.4)	3.8	/ (610)	微砂粒多	良	赤褐	○	一部黒斑
051	3	甕	口縁1/3残	17.1	(8.5)	－	/	微砂粒	良	赤褐	－	
051	4	甕A1a		16.2	23.8	5.7	5,550 / 6,000	微砂粒多	良	黄褐/赤褐	－	外煤多
051	5	甕A2a		16.2	24.0	6.1	1,650 / 2,000	赤褐粒	良		－	胴中煤
051	6	甕A2a		17.8	24.3	6.0	4,250 / 4,710	微砂粒	良	暗褐/暗赤褐	－	口縁外煤

遺構	挿図No.	分類	遺存度	口径	器高	底径	容量	胎土	焼成	色調（内/外）	赤彩	備考
051	7	埦・鉢B3	胴1/4欠	14.2	8.3	5.3	/		良	明茶褐	−	
051	8	高坏	口縁1/4欠	19.9	(8.6)	−	/ 750	砂粒	良	明褐	−	黒斑
051	9	高坏		17.3	(5.4)	−	/ 450	粗砂粒	良		○	黒斑
051	10	高坏		16.3	(6.4)	−	/ 475	砂粒	良	褐	−	一部黒斑
051	11	高坏		−	(9.9)	−	/	微砂粒多	良	茶褐	−	
051	12	高坏		−	(8.2)	−	/	砂粒	良	茶褐	−	
051	13	高坏		−	(7.0)	−	/	砂粒	良		○	
052	1	甕		(12.2)	(4.2)	−	/	砂粒	良	茶褐	−	
052	2	甕	1/6残	(13.0)	(4.0)	−	/	精選	良	黒褐	−	
052	3	甕	3/4欠	−	−	5.7	/	微砂粒	普通	茶褐	−	
052	4	高坏		−	(6.0)	−	/	砂粒	良	茶褐	−	二次被熱
053	1	大坩B1		11.9	14.3	4.8	750 / 1,030	微砂粒多	良	黄褐	−	
053	2	小甕1a	1/2残	12.7	11.0	−	485 / 620	微砂粒	良	茶褐	−	黒斑
053	3	甕A2a	胴1/2残	16.7	(22.4)	−	/	微砂粒	良	黄褐	−	
053	4	甕A1a	胴1/4欠	18.0	(24.7)	(12.1)	/	砂粒	良	茶褐	−	外黒斑煤内剝離
053	5	高坏		(18.2)	(4.9)	−	/	砂粒	良		○	
053	6	高坏	1/3残	(19.0)	(4.3)	−	/	微砂粒多	普通		○	表面剝離
055	1	小坩C	口縁一部欠	11.4	6.0	4.0	70 / 290	精選	良	暗赤褐	○	内剝離
055	2	埦・鉢C	口縁一部欠	(15.7)	6.0	−	250 / 625	砂粒多	良	茶褐	○	硬質
055	3	甕A2a	1/3欠	(13.2)	−	−	/	砂粒多	良	赤褐	−	内剝離
055	4	甕A2a		(16.7)	(18.6)	(4.0)	2,850 / 3,300	粗砂粒多	良	赤褐	−	器面荒れ
055	5	埦・鉢B4	胴上1/2欠	(12.1)	8.0	3.5	/	微砂粒多	普通	褐色	−	砂質
055	6	手ずくね		6.3	3.9	3.2	/ 45	微砂粒	良	暗赤褐	−	一部黒斑
056	1	壺A	1/8残	−	−	−	/	砂粒多	良	褐	−	
056	2	小坩B2	胴1/4欠	8.8	9.8	4.3	175 / 300		普通	暗茶褐	−	
056	3	小坩A1		8.2	9.2	−	160 / 255	微砂粒	良	赤褐	○	黒斑
056	4	小坩B2		8.6	8.8	−	/	微砂粒多	良	赤褐	○	
056	5	埦・鉢D		13.4	10.2	4.1	/ 950	精選	良	茶褐	−	
056	6	埦・鉢B3	口縁1/4欠	11.2	5.3	3.1	120 / 205	砂粒多	普通	暗茶褐	−	内剝離
056	7	甕	口縁1/2欠	16.5	(10.9)	−	/	砂粒	良	暗褐	−	
056	8	高坏		15.1	(5.2)	−	/ 285	微砂粒	良	明茶褐	−	二次被熱剝離煤
056	9	高坏D6		−	−	−	/	砂粒多	良		○	突帯部磨滅
057	1	大坩A2		(16.5)	(9.9)	−	/	微砂粒多	良	黄褐	−	上半煤内一部剝離
057	2	埦・鉢A2	口唇1/4欠	10.5	8.3	4.0	355 / 470	粗砂粒	良	暗褐	○	胴内中変色剝離
057	3	高坏		17.7	(6.5)	−	/ 500	砂粒	良	赤褐	○	内黒斑
057	4	高坏		17.9	(5.8)	−	/ 450	微砂粒多	普通	淡赤褐	−	内磨滅
057	5	高坏		18.7	8.2	−	/ 600	精選	良	茶褐	−	
057	6	高坏	1/2残	(18.2)	7.2	−	/ (615)	微砂粒	普通	暗茶褐	○	内一部剝離
038	1	須恵長頸壺?	1/5残	−	−	−	/	砂粒	良	青灰白	−	
038	2	須恵坏蓋	1/4残	(13.5)	−	−	/	砂粒多	良	灰	−	
038	3	須恵坏蓋	口縁1/5欠	13.3	4.5	−	/	微砂粒多	普通	灰白	−	
038	4	須恵坏蓋	1/10残	(13.2)	−	−	/				−	
038	5	坏	2/3欠	14.0	3.0	12.8	/ 250	微砂粒	良	茶褐	−	内漆処理？
038	6	須恵坏(？)	1/4残	−	−	(5.2)	/	砂粒	普通	青灰白	−	底回転ヘラ
038	7	坏	1/3残	(13.0)	3.0	−	/	微砂粒多	良	黄褐	−	内黒色処理？
038	8	坏		13.6	4.3	−	/ 350	微砂粒	良	茶褐	−	漆塗り？
038	9	須恵坏(？)	1/5残	−	−	(5.2)	/	砂粒	普通	青灰白	−	
038	10	坏	2/3残	12.8	4.2	−	/ 350	砂粒	良	黄褐	−	
038	11	坏	口縁2/3欠	12.2	5.0	5.2	/ 350	粗砂粒	良	赤褐	−	器面荒れ剝離
038	12	鉢	口唇欠	16.1	12.0	6.4	/ 1,200	粗砂粒	普通	茶褐	−	
038	13	壺？	胴上1/3欠	10.6	11.2	7.8	/ 900	微砂粒多	良	黄褐	−	
038	14	甕	1/4残	16.0	(8.4)	−	/	砂粒多	良	暗褐	−	

遺構	挿図No.	分類	遺存度	口径	器高	底径	容量	胎土	焼成	色調（内/外）	赤彩	備考
038	15	甕		15.5	18.5	6.4	2,300 / 2,500	砂粒	良	暗褐	－	
038	16	甕		15.8	25.5	6.1	4,600 / 4,800	砂粒	良	茶褐	－	胴亀裂
038	17	甕		－	(30.0)	－	/	砂粒	良	茶褐	－	
038	18	甕	口縁1/2欠	14.3	24.3	8.2	5,300 / 5,500	精選	普通	黄褐	－	外煤内剝離
038	19	甕		18.4	29.9	6.5	6,000 / 6,400	粗砂粒	良	茶褐	－	器面荒れ内剝離
038	20	甕		18.5	20.9	5.1	4,000 / 4,330	粗砂粒	良	赤褐	－	黒斑
038	21	甑		26.5	24.9	10.5	6,000 / 6,600	砂粒多	良	茶褐	－	底磨滅
038	22	甑		21.5	16.9	7.8	/ 2,650	粗砂粒	良	茶褐	－	
038	23	高坏	口縁1/6残	(14.4)	9.7	(10.3)	/ (200)	砂粒多	良	黄褐	○	内黒色処理
038	24	高坏		－	(9.0)	－	/	砂粒多	普通	一部黒/茶褐	○	
038	25	高坏		－	(8.5)	(10.0)	/	赤褐粒	良	黄土	－	
038	26	手ずくね	2/5残	－	(3.9)	－	/	砂粒多	良	黄褐	－	
038	27	支脚					/	砂粒極多	良	赤	－	スサ多混
038	28	支脚					/	砂粒極多	良	赤	－	スサ多混
038	29	須恵甑？		25.1	(19.4)	－	/	砂粒	良	黒褐	－	
054	1	坏		12.6	3.9	－	/ 300	微砂粒	普通	黄褐	－	内面黒色処理？
054	2	？	口縁1/4残	10.2	(4.3)	－	/	微砂粒	良	赤褐	－	
054	3	甕	胴少欠	14.0	20.1	6.2	2,700 / 2,900	砂粒	良	茶褐	－	
054	4	甕	1/3欠	19.9	(29.2)	－	4,900 / 5,500	砂粒	良	茶褐	－	外煤

グリッド（古墳時代）

一括	1	壺B	口縁1/10残	(18.3)	5.4	－	/	微砂粒多	良	黄褐	○	
一括	2	壺B	口縁1/8残	13.1	(3.7)	－	/	微砂粒	良		○	
C5-2	3	大坩	口縁1/4残	(14.2)	(6.7)	－	/	砂粒	良	茶褐	－	
一括	4	高坏B	裾1/3欠	17.4	14.6	15.0	/ 500	精選	良	赤褐	○	内坏底剝離
一括	5	高坏	1/4残	－	(10.4)	－	/	精選	良	黄褐	○	
一括	6	高坏		－	(6.5)	－	/	砂粒	良	茶褐	○	

歴史時代（P02、グリッド）

P02	1	須恵長頸壺		－	(20.9)	9.1	1,800 /	砂粒多	良	茶褐	－	猿投折戸10？
P02	2	坏	体部1/4残	(12.7)	5.2	6.4	/ (350)	砂粒多		赤褐	－	二次被熱
D-5	1	須恵坏		12.9	3.8	7.6	/ 230	砂粒	普通	灰茶褐	－	
F-5	2	小皿		7.0	1.7	3.7	/	砂粒多	良	明赤褐	－	
F-5	3	小皿		5.8	1.0	4.2	/	砂粒多	良	明赤褐	－	
F-5	4	小皿		4.4	0.8	3.2	/	砂粒	良	明褐	－	

註　遺存度 …… 記載のないものは実測図で示した範囲でほぼ完存している

口径～底径 …… －は計測不能、（　）は現存値ないしは推定値

容　量 …… 斜線左側の数値はくびれ部までの容量、右側の数値は口縁端部までの容量である、（　）は現存値ないしは推定値、測定には粒状のシリカゲルを使用した

胎土～赤彩 …… 原則的には実測時の観察を基にしているが表記の混乱を避けるために属性表作製の段階で用語の一部を変更して統一を心掛けた

第15表　古墳時代住居跡一覧

遺構番号	平面形	規模（m）	面積（㎡）	主軸方位	火所	主柱	柱間距離（m）	副柱	壁溝	貯蔵穴	残存壁高（m）	焼土	備考
016	長方形	6.1×5.1	30.5	N-17°-W	炉	4	3.5×2.3	2	全周	南西隅	0.40～0.60	○	
017	長方形	5.3×5.1	26.6	N-9°-W	炉	4	2.8×2.5	0	なし	南西隅	0.12～0.32	○	
018	方形	5.0×4.9	24.1	N-20°-W	炉	4	2.8×2.5	0	なし	北東隅 東壁中央	0.35～0.42	○	
024	方形	4.6×4.4	19.8	N-54°-E	炉	4	2.5×2.2	0	全周	西隅	0.20～0.22	○	
026	方形	7.0×7.0	48.2	N-36°-W	炉	4	3.9×3.8	0	全周	南隅	0.35～0.44	○	
027A	方形	4.7×4.7	22.7	N-16°-E	炉	4	2.3×2.3	0	全周	西隅	0.50～0.60	○	027Bの拡張
027B	方形	4.2×4.2	17.8	N-20°-E	炉	4	2.3×2.3	1	全周	南隅	0.03～0.06	×	
028	方形	5.1×5.0	25.1	N-63°-W	炉	4	2.2×2.1	0	全周	南隅	0.40～0.45	○	
030	隅丸方形	4.1×3.9	16.0	N-47°-E	炉	4	3.2×3.2	0	なし	南隅	0.08～0.20	×	
032	方形	7.0×6.7	46.7	N-57°-W	炉？	2 (4)	4.0×？	0	全周	東隅	0.15～0.32	○	かく乱多
034	方形	4.7×4.5	21.1	N-9°-E	炉	4	2.5×2.2	0	なし	なし	0.05～0.22	○	
035	長方形	5.1×4.2	24.0	N-51°-W	炉	3 (4)	2.6×2.5	0	全周	南隅	0.32～0.50	○	東隅かく乱
036	方形	5.6×5.7	31.8	N-52°-W	炉	4	2.8×2.8	0	全周	東隅	0.32～0.53	○	
037	方形？	(5.0×4.1)		(N-35°-E)	？	2 (4)	2.5×	？	なし	西隅	0.25～0.40	×	南隅のみ調査
043	方形	6.2×6.0	36.8	N-55°-W	炉	4	3.8×3.7	4	部分	南隅	0.30～0.39	○	
044	方形	10.8×10.8	117.9	N-45°-W	炉	4	6.8×7.0	7	全周	南西壁中央	0.20～0.42	○	
045	方形	10.4×10.3	106.6	N-55°-W	炉	4	6.2×6.2	4	全周	南隅	0.18～0.40	○	
046	方形	5.3×5.1	26.1	N-10°-E	炉	4	3.0×2.7	0	なし	南東隅	0.20～0.38	○	
047	方形	4.8×4.8	23.0	N-33°-W	炉	4	2.6×2.6	1	全周	南隅 北西壁中央	0.33～0.52	×	
048	方形	4.7×4.6		N-0°	不明 (炉？)	4	2.3×2.3	0	東壁部分	南東隅2	0.15～0.39	○	南西部分かく乱
049	方形	6.5×6.3	40.5	(N-31°-W)	不明	4	3.6×3.4	0	なし	北西壁中央 南隅2	0.13～0.27	○	
050	不整方形	3.8×3.4	12.1	(N-14°-E)	炉	0	－	0	北·西·南	南東隅	0.23～0.28	×	
051	方形	5.0×5.0	24.5	(N-22°-W)	不明 (炉？)	4	2.9×2.6	0	北東·南東のみ	南隅2(？)	0.25～0.43	○	
052	長方形	6.7×6.0	40.0	N-5°-W	炉 (残骸)	4	3.7×3.5	1	東·南·西部分	南東隅 北壁西寄	0.25～0.73	○	054と重複
053	方形	4.1×4.1	16.6	N-56°-E	炉	4	2.5×2.3	0	なし	南隅	0.22～0.43	×	
055	方形	6.4×6.1	38.4	N-26°-W	炉	4	4.5×4.3	0	北西隅除き全周	南西壁北寄	0.15～0.38	○	M03と重複
056	方形	4.1×4.1	16.3	(N-27°-W)	不明 (炉？)	3 (4)	2.7×2.6	0	なし	不明	0.05～0.35	○	M03と重複
057	方形	5.0×4.8	23.4	N-2°-E	炉	4	2.5×2.5	0	東半及び西壁	南西隅	0.34～0.44	○	M03と重複
038	方形	8.0×8.0	65.3	N-40°-W	カマド	4	4.2×4.4	0	全周	北西壁際 カマド北	0.43～0.58	○	
054	長方形	3.5×2.9	9.9	N-13°-E	炉	0	－	0	なし	なし	0.15～0.26	○	052と重複

3．土器以外の出土遺物

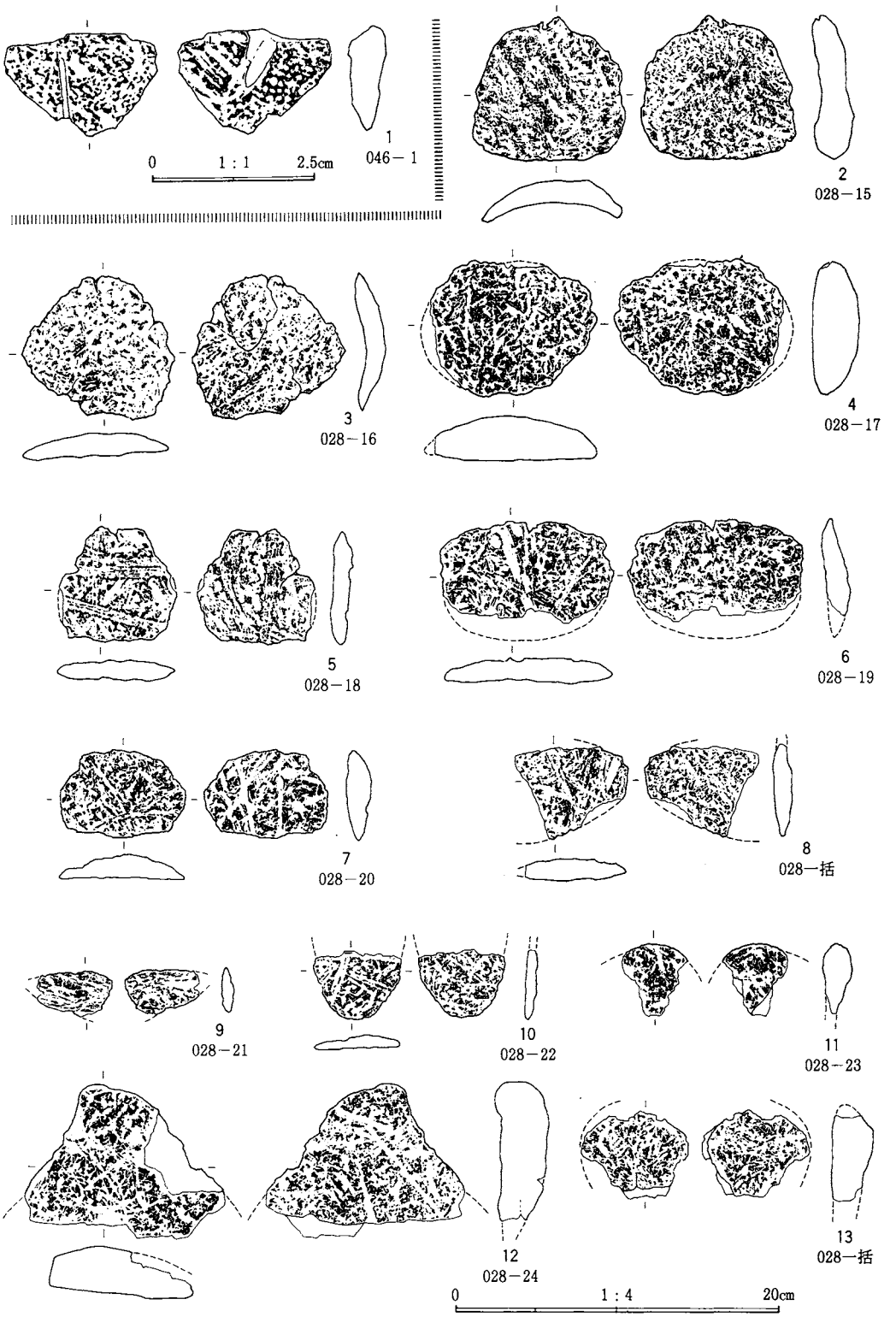
A．土製品

①板状土製品（第177図、第16表、図版98・99）

1～13は粘土を板状に伸ばして焼成したもので形状は不定形である。1は縮尺が1／1で横24㎜、縦16㎜、厚さ5㎜で両面に布圧痕が認められる。2～13は縮尺が1／2で、2は横44㎜、縦44㎜、厚さ7㎜で両面に細い茎状の圧痕が認められる。形状は平らではなく断面アーチ状を呈し、端部は薄くなっている。3は（横50㎜）、縦41㎜、厚さ14㎜で両面に細い茎状の圧痕とやや広い葉脈状の圧痕が認められる。一部を欠損する。4は横48㎜、縦42㎜、厚さ7㎜で両面に細い茎状の圧痕、やや広い葉脈状の圧痕、稲の籾のような圧痕が認められる。5は横37㎜、縦36㎜、厚さ5㎜で両面に広い葉脈状の圧痕が認められる。6は横54㎜、（縦30㎜）、厚さ6㎜で両面に細い茎状の圧痕、やや広い葉脈状の圧痕、稲の籾のような圧痕、他の種子の圧痕が認められる。一部を欠損する。7は横39㎜、縦27㎜、厚さ7㎜で両面に細い茎状の圧痕とやや広い葉脈状の圧痕と稲の籾のような圧痕が認められる。8は(横35㎜)、(縦28㎜)、厚さ7㎜で両面に細い茎状の圧痕とやや広い葉脈状の圧痕と稲の籾のような圧痕が認められる。一部を欠損する。9は(横23㎜)、(縦14㎜)、厚さ4㎜で両面に細い茎状の圧痕とやや広い葉脈状の圧痕が認められる。一部を欠損する。10は（横37㎜)、(縦21㎜)、厚さ4㎜で両面に細い茎状の圧痕とやや広い葉脈状の圧痕、種子の圧痕が認められる。一部を欠損する。11は（横20㎜)、(縦22㎜)、厚さ9㎜で両面に細い茎状の圧痕とやや広い葉脈状の圧痕と種子の圧痕が認められる。一部を欠損する。12は（横62㎜)、(縦42㎜)、厚さ14㎜で両面に細い茎状の圧痕とやや広い葉脈状の圧痕が認められる。一部を欠損する。13は（横33㎜)、(縦25㎜)、厚さ8㎜で両面に細い茎状の圧痕とやや広い葉脈状の圧痕と稲の籾のような圧痕が認められる。一部を欠損する。

出土状況は、1は046号住居跡から出土し、住居内覆土一括で取り上げられている。2～13は028号住居跡から出土し、床面からの出土が多く床面から浮いた状態でも出土している。図示しなっかたものを含めて22点ほど検出されている。住居跡内の炉付近を中心にして住居の北半分に集中している。046、028号住居跡とも伴出遺物から5世紀前半に比定されている。また、図示はしていないが024、045号住居跡からも出土している。

類例は、千葉県沼南町大井東山遺跡（註1)、千葉市小仲台（2）遺跡（註2）でも報告されている。大井東山遺跡例では、3点が報告されており、fig･68の『17～19は用途不明の土製品で、いずれも粘土を板状に延ばし焼いたもので形は不整形である。17は表土中、18は土坑075から出土した。いずれも胎土中に繊維を多量に含む。19は竪穴住居056から出土した。僅かになでた痕跡が認められる。胎土には砂粒の他繊維をわずかに含む。』伴出遺物から6世紀後半～7世紀初頭に比定されている。小仲台(2)遺跡例では、2点が報告されており、第82図60は、SI1住居から出土し、『製品といっても何を作ろうとしたのかはまったくわからない。焼成前に粘土中に植物



第177図　土製品 － 板状土製品 －

の種子と葉、茎をその中に混入してしまい（意図的かもしれない）、そのまま焼成してしまっている。』伴出遺物から6世紀中葉に比定されている。第86図11は、SI3A住居から出土し『SI1の60の土製品とよく似た土製品である。粘土中に植物の種子、茎、葉を混入させた後に焼成している。』伴出遺物から6世紀中葉に比定されている。本遺跡出土の土製品とは時期が同一ではないが形状、製法ともよく類似している。

類例も同じであるが、本遺跡から出土した土製品も用途が何かは不明である。例えば、土器片錘、あるいは玩具としてのおはじきのようなものと考えたのであるが、大きさも形状も重量も不定であり、とくに用途を限定して製作したようには見えない。他に土器焼成前の試し焼きに使用したとも考えられるが確証はない。両面にわざわざ植物の圧痕をつける理由が不明である。さらに多くの類例を待って再考してみたい。

No.	遺構挿図No.	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重量（g）	図版No.	出土状況
1	046 － 1	16	24	6	1.6	98	一　括
2	028 － 15	45	45	7	19.8	98	床　面
3	028 － 16	44	47	6	25.4	98	床　面
4	028 － 17	40	52	14	10.1	98	床　直
5	028 － 18	36	36	6	6.8	98	床　直
6	028 － 19	30	53	8	11.9	98	床　直
7	028 － 20	27	39	8	6.1	98	床　直
8	028 －	28	35	7	4.5	98	一　括
9	028 － 21	14	24	4	1.1	98	床　面
10	028 － 22	21	28	4	2.2	98	覆土上層
11	028 － 23	22	20	9	2.8	98	床　面
12	028 － 24	43	62	14	35.8	98	床　面
13	028 －	25	33	14	10.4	98	一　括
14	028 －	28	20	11	9.7		一　括
15	028 －	28	14	5	1.6		床　直
16	028 －	17	16	6	1.6		床　直
17	028 －	18	25	11	2.6		床　面
18	028 －	20	15	6	2.9		床　面
19	028 －	36	28	12	7.0		一　括
20	028 －	18	9	3	0.3		一　括
21	028 －	20	19	8	1.9		覆　土
22	表採 －	19	13	9	2.7		一　括

第16表　板状土製品一覧

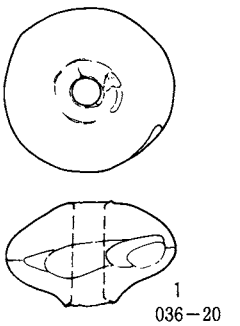
註1　1987　今泉潔他　千葉県文化財センター調査報告第126集『大井東山遺跡・大井大畑遺跡一級河川手賀沼河川浄化に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』財団法人千葉県文化財センター

註2　1989　萩原恭一他　千葉県文化財センター調査報告第160集『千葉市小仲台（2）遺跡・新堀込遺跡・馬場遺跡　千葉都市計画道路3・4・43号磯辺・茂呂町線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3』財団法人千葉県文化財センター

②紡錘車（第178図、第17表、図版99）

完形品。色調は黒褐色、胎土には砂粒を含む、焼成は良好、整形も比較的丁寧である。孔はほぼ中央にあるが正確に中央を通っていない、孔は片側からの穿孔。

ここでは紡錘車としたが、形状からみると紡錘車と土玉の中間のような形をしている。また孔の内面や周囲に明瞭な使用痕は認められず、実際に紡錘車として使われたかどうか疑問が残る。



第178図　土製品 － 紡錘車 －

No.	遺構挿図No.	最大径	孔　径	最大厚	重　量	出土状況
1	036－20	33.7mm	6.3mm	20.1mm	19.1g	覆土下層

第17表　土製紡錘車一覧

B．石製品

今回の調査では、紡錘車や砥石といった石製品のほかに多くの石製模造品が出土しているが、本章ではそれらすべてを一括し、石製品として取り扱うこととする。出土した石製品としては、石製紡錘車３点、砥石12点、鎌形石製模造品１点、剣形石製模造品破片１点、滑石製勾玉24点、滑石製臼玉52点、磨石３点、台石３点、軽石22点が挙げられる。いずれも竪穴住居跡の床面及び覆土中から出土したものであるが、とくに050号住居跡では勾玉22点、臼玉50点と多量の石製模造品が集中して出土しており、その特殊性がうかがえる。

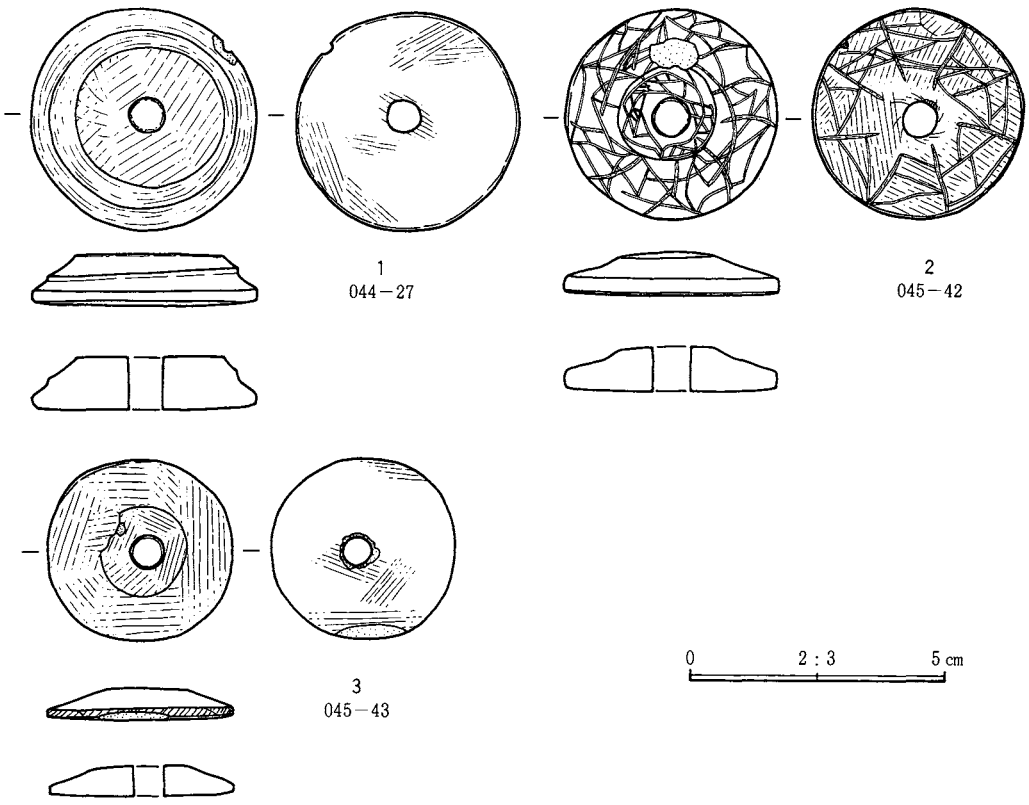
①紡錘車（第179図、第18表、図版99）

今回の調査では３点の石製紡錘車が出土している。なお、036号住居跡からは土製の紡錘車が１点出土しているが、これについては土製品の項を参照されたい。

１は044号住居跡から出土したもので、最大径、最大厚ともに３点のなかでは最も大きな数値を示す。全面に丁寧なミガキを加えて光沢をもつほどに仕上げているが、一部に成形時の擦痕が残っている。表面には１段の稜をもち、上面の一部にはわずかに回転痕を確認することができる。側面には無数の細かいキズが残されており、一部を欠損する。

２・３は045号住居跡から出土したもので、２は最大径、最大厚ともに１に近い数値を示す。表・裏面には線刻によって直弧文のような文様が描かれる。光沢をもつほどにミガキを加えているが、とくに表面は丁寧なミガキを施した後に施文しているようで、成形時の擦痕はほとんど確認することができない。孔の内面および裏面の孔周辺には明瞭な回転痕が確認できる。

３は１・２に比してやや小形で厚みのない個体である。仕上げは１・２に比して粗雑なもので、表面・裏面とも光沢はなく、成形時の擦痕を明瞭に観察することができる。側面にもかなり深く明瞭な斜位の擦痕が残っている。裏面の孔周辺と縁辺の一部を欠損している。使用痕は確認することができない。



第179図　石製品 － 紡錘車 －

No.	遺構挿図No.	最大径	孔　径	最大厚	重　量	図版No.	出土状況
1	044 － 27	43.8mm	6.8mm	9.6mm	27.2g	99	床　面
2	045 － 42	41.1	7.1	8.9	19.7	99	床　面
3	045 － 43	36.2	5.7	6.0	10.8	99	床　面

第18表　石製紡錘車一覧

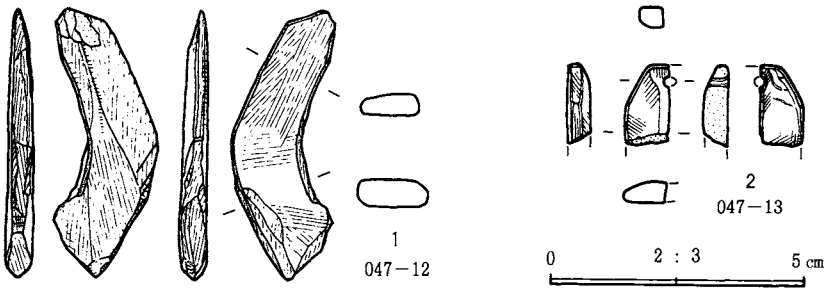
②石製模造品（第180図、第19表、図版99）

047号住居跡から出土したもので、曲刃鎌を模したものと思われる。灰緑色の滑石を石材としており、表面は丁寧なミガキによって滑らかな面を形成しているが、側面の仕上げは雑で、成形時の面の単位を明瞭に観察することができる。

2も047号住居跡から出土したもので、1とよく似た灰緑色の滑石を用いている。小破片であるが、剣形の模造品と考えられる。孔の径は1.8mmほどである。

No.	遺構挿図No.	最大長	最大幅	最大厚	重　量	図版No.	備　考
1	047－12	53.2mm	14.1mm	5.5mm	7.08g	99	曲刃鎌形か？
2	047－13	15.0	9.0	4.0	1.00	99	剣形

第19表　石製模造品一覧



第180図　石製品 － 模造品 －

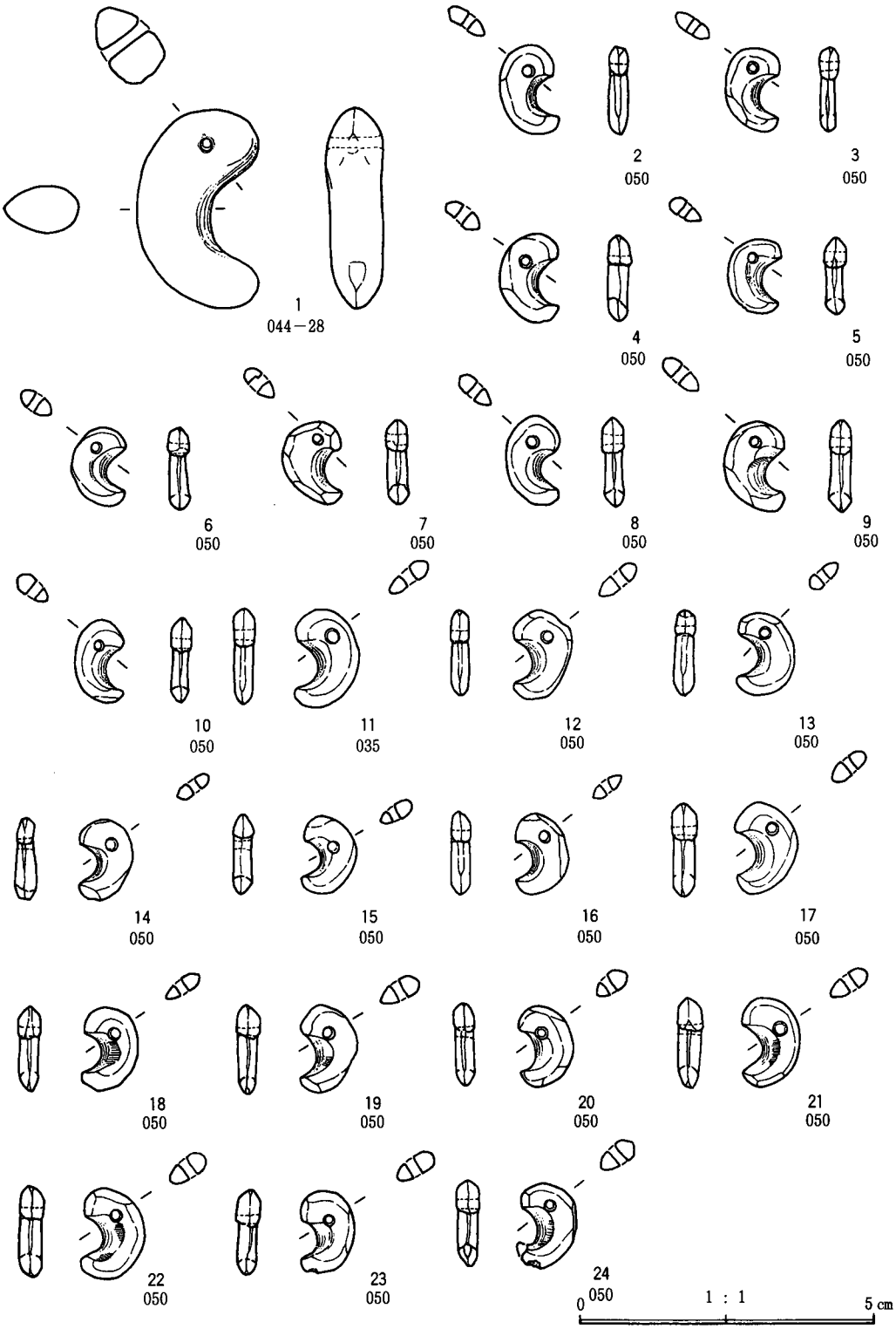
③勾　玉（第181図、第20表、図版100）

050号住居跡から22点、035号住居跡・044号住居跡から各１点の総数24点が出土した。全て黒色味の強い光沢のある滑石製で、粗削りの後にミガキによって仕上げている。形態的にも１を除いて最大長が11.3～13.4㎜、最大厚が2.7～3.6㎜の範囲内で、ほぼ均一である。

１は044号住居跡から出土したものであるが、最大長が30.3㎜と他の個体に比してかなり大き

No.	遺構挿図No.	寸法（㎜）		重量（g）	穿孔（㎜）			図版	備考
		最大長	最大厚		最大径	最小径	方向		
1	044 － 28	30.3	8.6	5.79	2.2	1.7	両	100	両面から穿孔
2	050 －	13.4	3.0	0.45	1.7	1.4	左	100	未調整か？
3	050 －	12.7	3.2	0.35	1.8	1.4	左	100	
4	050 －	13.2	3.1	0.42	1.7	1.4	左	100	
5	050 －	11.4	2.7	0.28	1.8	1.3	左	100	
6	050 －	11.9	2.8	0.32	1.8	1.4	左	100	
7	050 －	12.4	3.3	0.45	1.8	1.3	左	100	２度穿孔
8	050 －	13.4	3.3	0.40	1.8	1.4	右	100	
9	050 －	13.7	3.4	0.54	1.8	1.5	左	100	
10	050 －	12.1	2.9	0.32	1.7	1.4	左	100	
11	035 －	14.6	3.5	0.71	2.2	1.7	右	100	
12	050 －	13.1	3.3	0.46	1.7	1.3	右	100	
13	050 －	12.2	3.3	0.39	1.9	1.5	右	100	
14	050 －	12.1	3.0	0.33	1.8	1.3	右	100	片面調整雑
15	050 －	11.8	3.2	0.32	1.9	1.4	右	100	
16	050 －	11.9	2.9	0.31	1.7	1.4	右	100	一部欠損
17	050 －	13.5	3.6	0.53	1.8	1.4	右	100	未調整か？
18	050 －	12.2	3.2	0.41	1.8	1.5	右	100	
19	050 －	12.7	3.2	0.42	1.7	1.3	右	100	
20	050 －	11.8	3.2	0.40	1.8	1.4	右	100	
21	050 －	13.2	3.7	0.52	1.8	1.4	右	100	
22	050 －	13.4	3.6	0.55	1.7	1.4	右	100	
23	050 －	12.4	3.3	0.39	1.9	1.4	右	100	
24	050 －	12.5	3.1	0.43	1.8	1.3	右	100	尾部欠損

第20表　勾玉一覧


1
044－28
2
050
3
050
4
050
5
050
6
050
7
050
8
050
9
050
10
050
11
035
12
050
13
050
14
050
15
050
16
050
17
050
18
050
19
050
20
050
21
050
22
050
23
050
24
050
0
1 : 1
5 cm

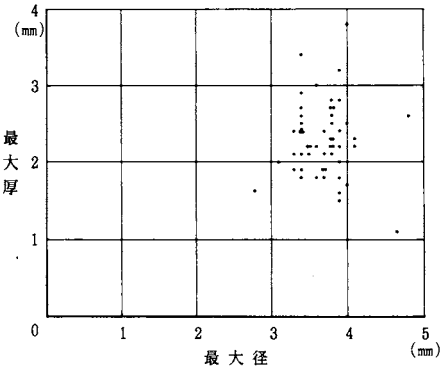
第181図　石製品 －勾玉－

く、一見して異なった様相がうかがえる。たいへん丁寧なミガキによって仕上げられており、腹部にわずかな擦痕が看取されるものの、粗削り時の稜は残っていない。また穿孔は両面から行われているが、これも他の個体には見られない手法である。

2～24も1と同様の手法で製作されているが、仕上げがそれほど丁寧でないため側面には稜が残る。なかでも丁寧に仕上げたもの（8・11）は側面の稜と腹部のわずかな擦痕が残る程度であるが、ほとんどの個体は簡単に仕上げられており、粗削り時に生じた面（7・9・16・20他）や明瞭な擦痕（18・21・22他）が看取される。孔はいずれも片側から穿たれており、2～10は腹部を正面として左面から、11～24は右面から穿孔されている。7は両面から2度にわたって穿孔されているが、右面からの孔は貫通していない。孔の位置は21のようにやや片寄ったものもあるが、ほぼ同位置に穿たれている。形態的にも先述のとおりほぼ均一で、重量もほとんどの個体は0.3～0.5ｇの範囲内である。11のみ035号住居跡から出土しているが、とくに異なった様相はうかがえない。

④臼　玉（第182・183図、第21表）

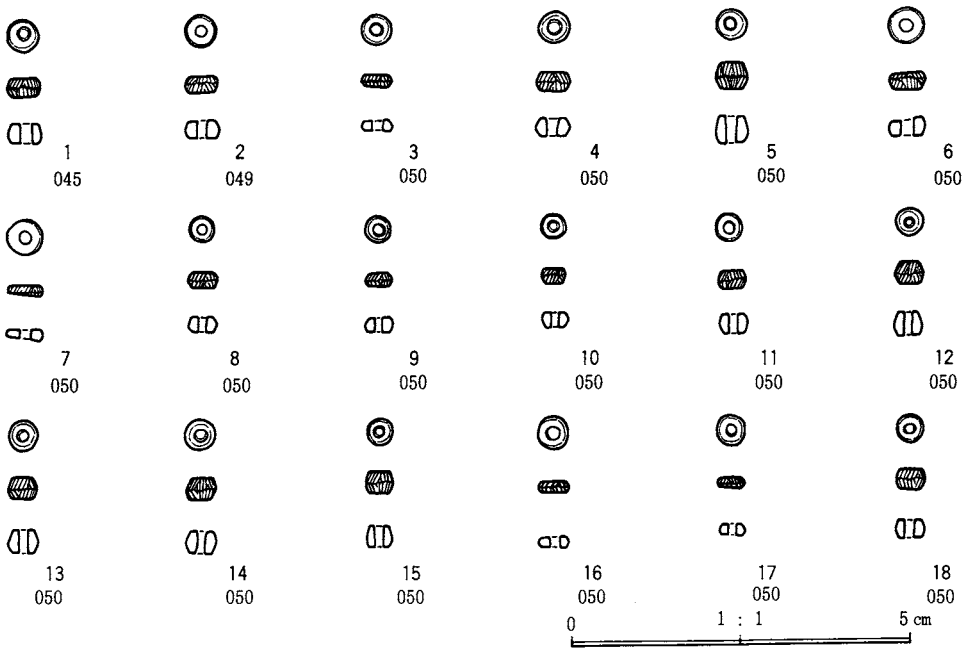
050号住居跡から50点、045号住居覆土下層・049号住居覆土上層から各1点の計52点が出土した。ただし、図示しなかったもので第21表の40と41は同一個体の欠損品と思われ、正確な総個体数は51点としておく。図には最大径や最大厚に於いて特徴的なもの18点を示した。



第182図　臼玉計測値分布

石材にはいずれも勾玉と同様の黒色味が強く光沢を持った滑石を用いており、断面算盤玉状に粗削りした後にミガキによって仕上げている。非常に微細な遺物であるため、側面のミガキはあまり丁寧ではなく、ほとんどの個体で粗削りの単位や方向を確認することが出来る。大多数が完形で出土しているが、一部を欠損するものや、7のように製作中に破損したもののそのままミガキを行って完成させたと思われる個体も存在する。

最大径は3.1～4.8㎜、最大厚は1.1～3.8㎜とやや幅があるが、欠損品を除くと概ね最大径で3.3～3.9㎜、最大厚で1.8～2.8㎜の範囲に納まり、紐等を通して輪状に繋いだ場合には安定した太さや幅を保っていたものと思われる。計測値の相対的な分布は第182図を参照されたい。



第183図　石製品 － 臼玉 －

No.	遺構挿図No.	径	孔 径	厚	重 量	備 考	
1	045 －	4.1mm	2.0mm	2.3mm	0.04 g		図版なし
2	049 －	4.1	1.6	2.2	0.05	下面一部欠	〃
3	050 －	4.0	1.7	1.7	0.03	下面調整粗	〃
4	050 －	4.0	2.3	2.5	0.04		〃
5	050 －	4.0	2.0	3.8	0.05	調整粗	〃
6	050 －	4.8	1.6	2.6	0.09		〃
7	050 －	4.7	1.6	1.2	0.04	一部欠損	〃
8	050 －	3.3	1.4	2.1	0.03		〃
9	050 －	3.3	1.6	1.9	0.02		〃
10	050 －	3.1	1.6	2.0	0.03		〃
11	050 －	3.3	1.6	2.4	0.04	下面未調整	〃
12	050 －	3.6	1.7	3.0	0.05		〃
13	050 －	3.9	1.8	3.2	0.06	下面未調整	〃
14	050 －	3.8	1.9	2.8	0.06		〃
15	050 －	3.4	1.7	2.9	0.04	調整粗	〃
16	050 －	3.9	1.9	1.6	0.03		〃
17	050 －	3.9	1.7	1.5	0.03		〃
18	050 －	3.4	1.6	2.7	0.04	楕円孔	〃
19	050 －	3.8	1.7	2.1	0.03	下面調整粗	挿図･図版なし
20	050 －	3.9	1.7	1.8	0.03		〃
21	050 －	3.7	1.6	2.1	0.04		〃
22	050 －	3.8	1.5	2.7	0.05	上面凸凹有	〃
23	050 －	3.9	1.6	2.4	0.05		〃
24	050 －	3.9	1.6	2.0	0.04		〃
25	050 －	3.3	1.6	1.9	0.02		〃
26	050 －	3.8	2.0	2.2	0.03		〃
27	050 －	3.8	2.0	2.2	0.05		〃

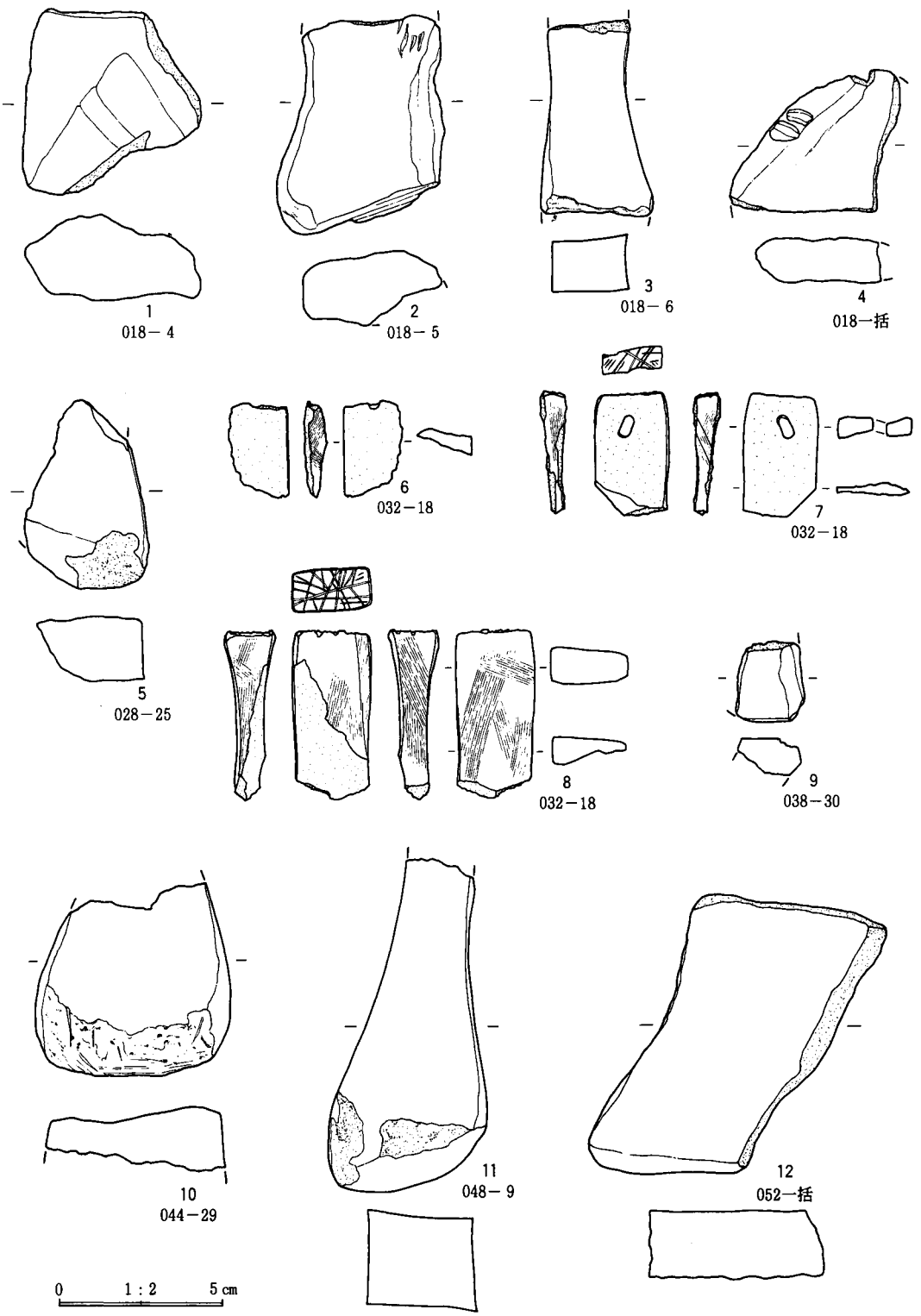
No.	遺構	挿図No.	径	孔　径	厚	重　量	備　　考
28	050	－	3.8mm	1.5mm	2.7mm	0.06ｇ	多面体　　挿図･図版なし
29	050	－	3.4	1.6	2.4	0.05	調粗整　　〃
30	050	－	3.5	1.9	2.1	0.04	下面未調整　　〃
31	050	－	3.6	1.6	1.8	0.04	〃
32	050	－	3.8	1.7	2.6	0.04	側面一部欠　　〃
33	050	－	3.4	1.8	2.5	0.04	下面未調整　　〃
34	050	－	3.4	1.7	2.4	0.03	〃
35	050	－	3.7	1.7	2.4	0.04	上面未調整　　〃
36	050	－	3.6	1.5	2.2	0.04	未調整　　〃
37	050	－	3.7	2.1	1.9	0.03	〃
38	050	－	3.7	2.0	1.8	0.03	〃
39	050	－	3.4	1.5	1.9	0.02	下面未調整　　〃
40	050	－	3.3	1.6	1.1	0.01	41と同個体　　〃
41	050	－	3.4	1.6	3.4	0.02	40と同個体　　〃
42	050	－	3.9	1.7	2.2	0.05	下面未調整　　〃
43	050	－	3.4	1.7	2.6	0.05	〃
44	050	－	3.5	1.7	2.2	0.03	下面未調整　　〃
45	050	－	3.4	1.5	2.1	0.02	下面未調整　　〃
46	050	－	3.4	1.6	1.8	0.02	〃
47	050	－	3.5	1.7	2.2	0.03	〃
48	050	－	3.4	1.7	2.4	0.03	側面一部欠　　〃
49	050	－	3.8	1.7	2.5	0.04	下面未調整　　〃
50	050	－	3.8	1.6	2.3	0.03	1／4欠損　　〃
51	050	－	3.9	2.2	2.8	0.05	〃
52	050	－	3.7	1.7	1.9	0.04	〃

第21表　臼玉一覧

⑤砥　石（第184図、第22表、図版100）

032号住居跡から３点出土しているが、何れも欠損品である。６と７は明らかに同一個体と思われるが、接合はしない。８も同一である可能性がつよい。６・７には端部付近に長楕円の孔が穿たれている。８から判断するとかなり使い込んでいるようで、胴部中央付近は深く抉れている。面の残された部分では、何れも擦痕を観察することができる。端側面には溝状の刻みが残されているが、製作時のものか使用時のものかははっきりしない。実測図には示さなかったが、一部に煤が付着している。

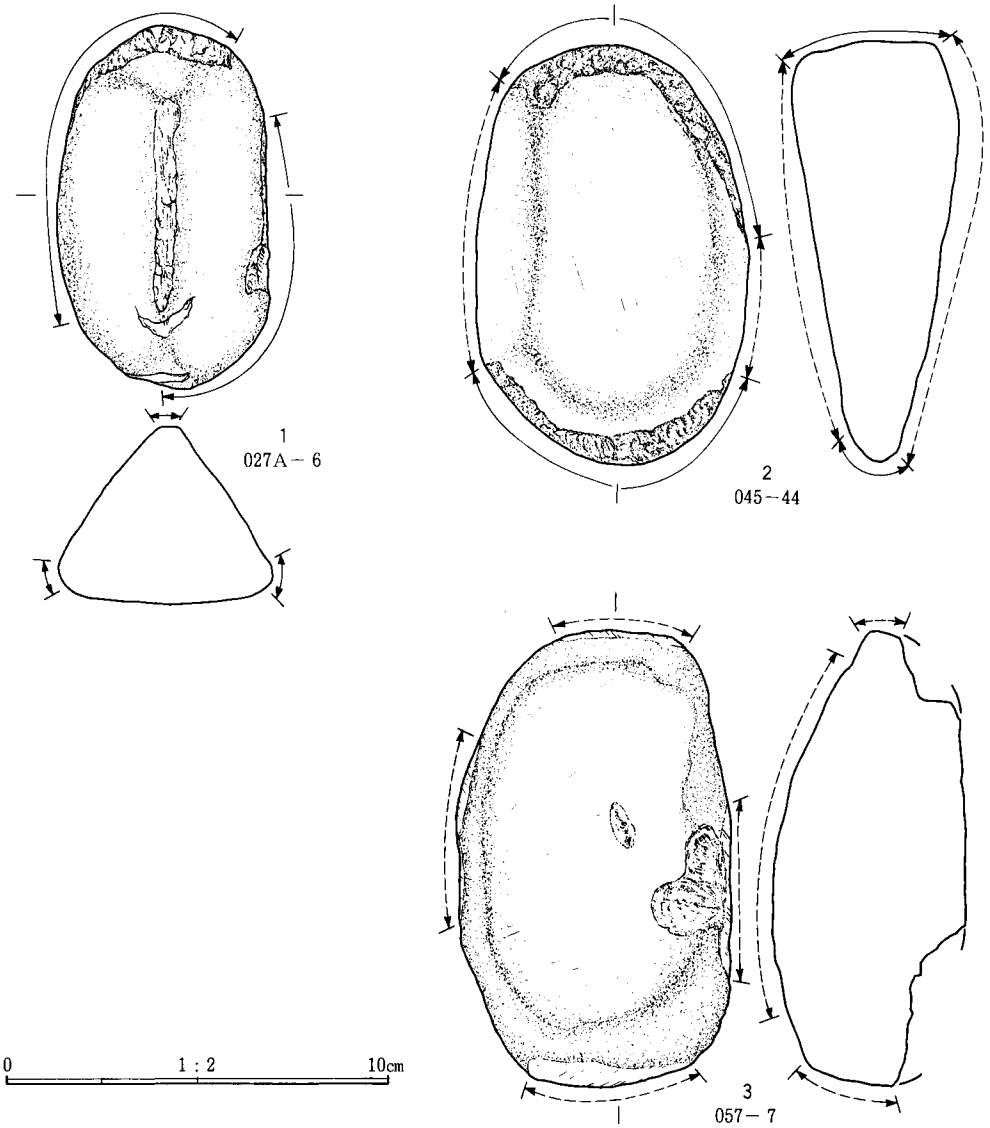
２は、白色で細粒の砂岩製の砥石である。砥面に上記の擦痕とは異なる１㎜程度の３条のきわめて浅いＵ字状の痕跡が見られた。千葉県立中央博物館の高橋直樹氏に鑑定していただいたところ、痕跡の見られる面はかなり磨耗していることから、断定はできないが、三角貝の可能性もあるかもしれないとの指摘を受けた。また、石材については銚子産のものに類似しているということであった。これに近い石材としては１・12があげられる。２、12、１の順で粒子が粗くなる。なお、伊篠白幡遺跡（『酒々井町伊篠白幡遺跡』千葉、1986）のグリッド出土の砥石（遺物番号グ－55）にも三角貝の化石が含まれている。これは赤褐色の少し粒子の粗いもので、４がよく似ている。報告書では石材は凝灰岩となっているが、砂岩である。


1
018－4
2
018－5
3
018－6
4
018一括
6
032－18
7
032－18
5
028－25
8
032－18
9
038－30
10
044－29
11
048－9
12
052一括
0 1：2 5cm

第184図　石製品 －砥石－

No.	遺構挿図No.	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重（g）	図版No.	備　　考
1	018 － 4	(57.2)	(54.8)	(26.7)	(82.2)	100	
2	018 － 5	(66.9)	(52.4)	(27.5)	(86.3)	100	
3	018 － 6	(61.0)	34.7	25.3	(68.5)	100	
4	018 －一括	(43.1)	(51.5)	(15.2)	(37.7)	100	
5	028 － 25	(56.9)	(38.3)	(22.2)	(57.0)	100	
6	032 － 18	(28.0)	(18.6)	(5.7)	(3.1)	100	7と同一個体　楕円孔
7	032 － 18	(36.2)	22.6	(7.4)	(6.8)	100	6と同一個体　孔一部残
8	032 － 18	(49.5)	23.5	13.2	(20.4)	100	6・7と同一個体か
9	038 － 30	(24.0)	(21.2)	(10.9)	(6.9)	100	
10	044 － 29	(58.6)	(60.0)	(21.5)	(87.0)	100	
11	048 － 9	(100.2)	49.1	47.3	(228.1)	100	
12	052 －一括	(84.2)	(90.3)	(20.9)	(172.5)	100	

第22表　砥石一覧



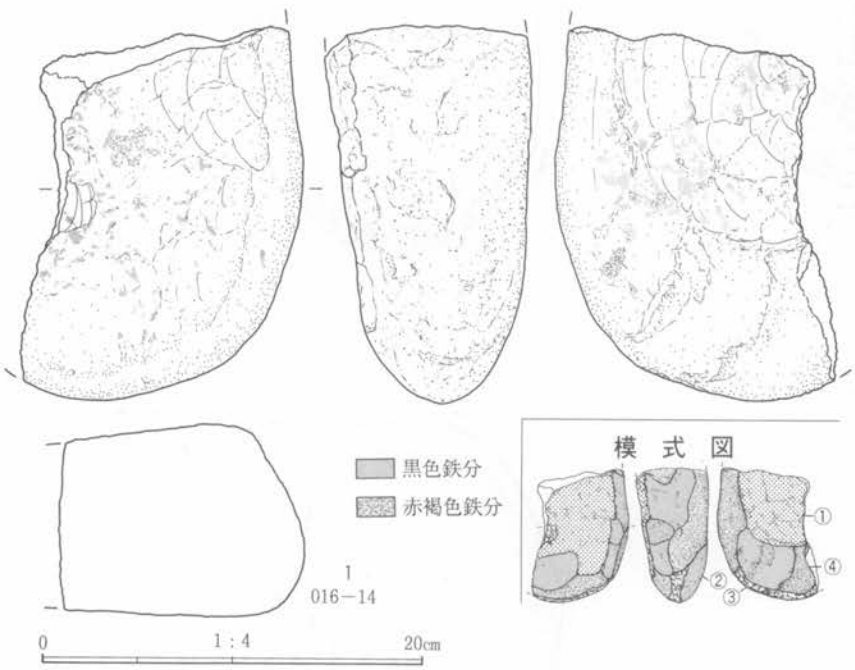
第185図　石製品 － 磨石 －

⑥磨　石（第185図、第23表、図版101）

057号住居跡から出土した3には、砥石6・7・8に付着していたものに非常に似た煤が、縁片部と裏面の破損面のほぼ中央部に見られた。とくに057－3aに顕著であった。あるいは同一の煤の可能性もあるかもしれない。この磨石はピット1の最上面からの出土した遺物番号057－8と貯蔵穴の最上面から出土した遺物番号057－2、同じ貯蔵穴の覆土中部から出土した遺物番号057－13との接合品で、057－2の表面には若干赤褐色化した面が観察されたが、057－8に接合する面にはそれらの痕跡は見られない。057－13には煤や赤褐色に変色した面は全く見られなかった。

No.	遺構挿図No.	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重　量(g)	図版No.
1	027A － 1	94.1	55.6	48.7	356.8	101
2	045 － 2	108.8	71.8	46.1	543.3	101
3	057 － 3	(118.2)	(72.4)	(50.6)	(629.6)	101

第23表　磨石一覧



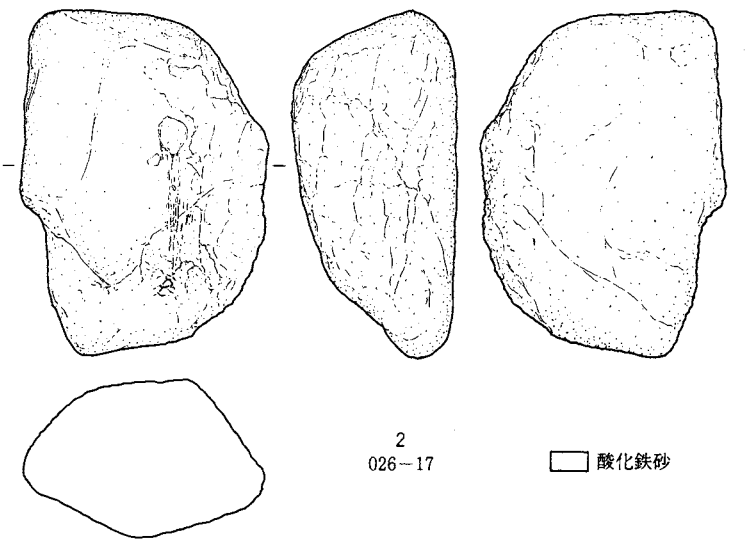
各面の説明
①敲打痕　長2～3cm、幅1～2cm、深0.5～1.5mmの不定形で平坦な窪みが複数見られる。感触は多少ざらついた感じと擦れたような感じの両者を持つ。
②磨耗痕　縄文時代の安山岩製の磨石の表裏面の状態に似ている。擦れたあるいは磨いたような感じで、より滑らかな面とそれほどではない面に分けられる。光沢も他の面とは異なり、一見して区別可能な面もある。
③不明痕　縄文時代の安山岩製の磨石の側面の状態に似ている。浅いあばた状の痕跡が見られる。人為的なものか自然面か判別が困難。
④自然面　多少ざらつきがあり、磨耗した面とは異なる。

これらの面の認定は沢野氏にお願いしたが、各面の認識に個人差がみられた。

第186図　石製品 － 台石(1) －

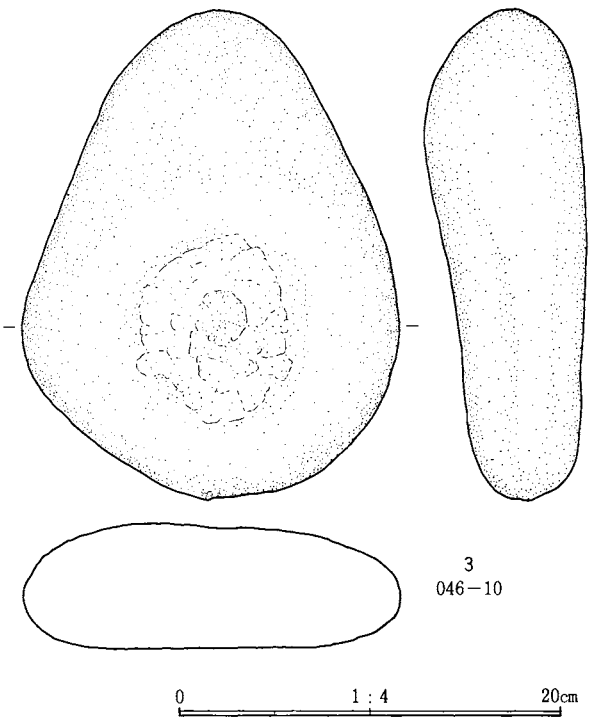
No.	遺構挿図No.	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重量(g)	図版No.	出土状況
1	016 － 14	19.5	14.8	10.0	4.57	101	床　面
2	026 － 17	18.3	13.0	8.2	2.55	102	床　面
3	046 － 10	25.3	19.8	6.5	5.05	102	床　面

第24表　台石一覧



⑦台　石（第186・187図、第24表、図版101・102）

3点あり、いずれも古墳時代中期の住居跡から出土した。1は016号跡の出土で、共伴遺物や鉄分の付着からみて、いわゆる鉄床に使った台石で小鍛冶に伴う遺物であろう。2・3は鉄分の付着等が認められず積極的な評価は出来ないが製鉄関連遺物の可能性がある。



第187図　石製品 － 台石(2) －

1は表面及び裏面に広く敲打痕による剝落が認められる。剝落部分以外は全面に亙って摩耗している。剝落部の稜が磨耗しているため剝落以後に磨耗したと考えられる。表裏面共に黒色ター ル状の鉄分と赤褐色鉄分の付着が認められ裏面の方が付着が著しい。また欠損面には敲打痕・鉄分の付着が認められないため、欠損以後はこの石器の機能が廃絶したものと考えられる。

2は全面が被熱し赤褐色の色調を呈する。右側面から表面にかけて敲打状に割れており、この部分も赤化している。表面右側には樋状の擦痕が数条認められる。この擦痕の下端部及び裏面左縁には酸化鉄分を含む砂が付着している。

3は偏平礫の下側中央部に浅く敲打痕が看取される。器体の色調は敲打痕部分以外が全体に暗褐色のスス状にくすんでおり、風化が著しく判然としないがおそらく被熱していると思われる。鉄分の付着は認められない。

⑧軽　石（第188～190図、第25表、図版102～103）

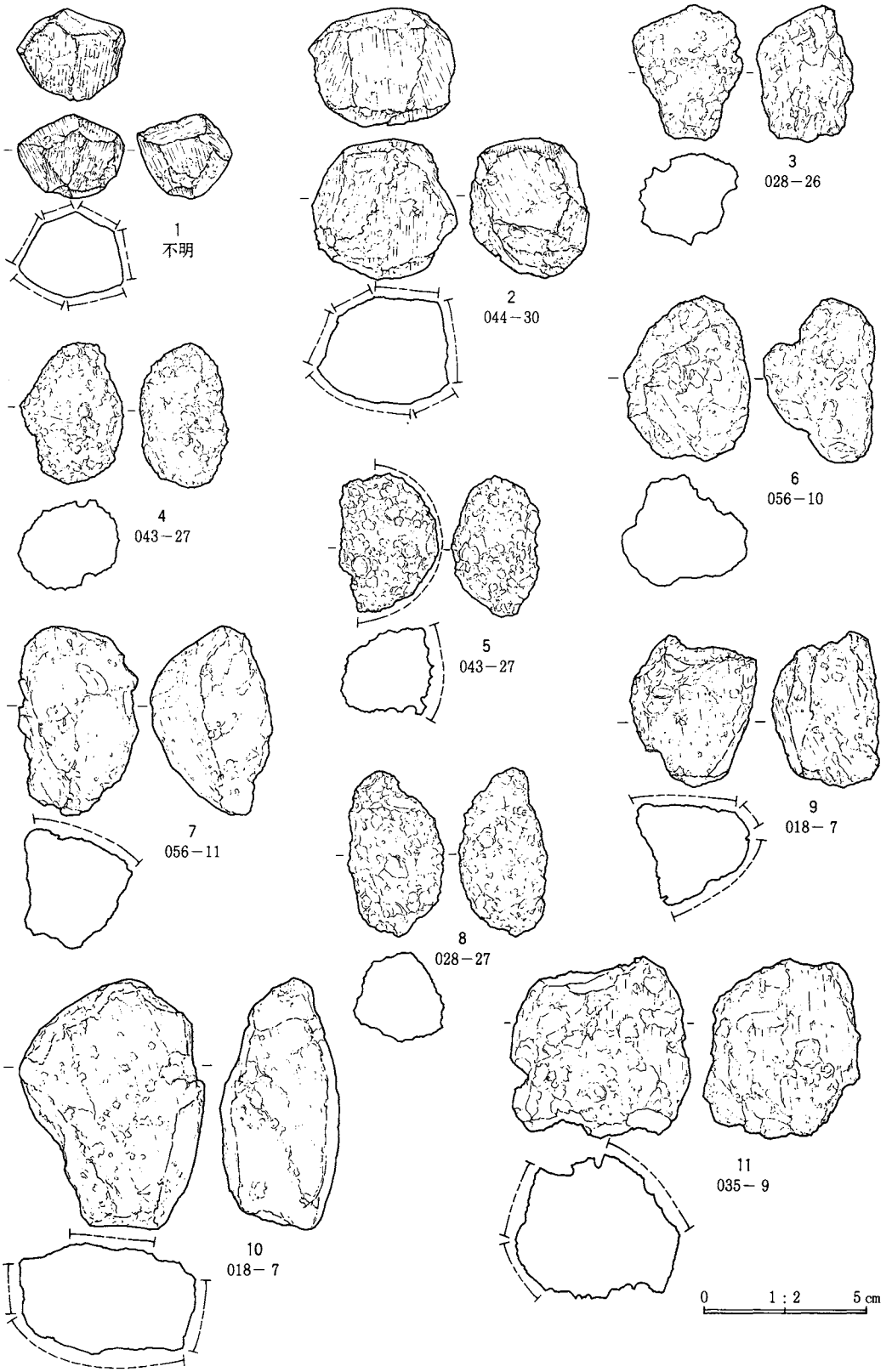
目次、見出し等では便宜的に「軽石」の名称を使ったが、色調から判断して正確には「スコリア」とするのが適当と思われるので、以下の記述では「スコリア」を使うこととしたい。

本遺跡のスコリアは018・028・035・043・044・045・051・056の各住居跡から検出され、051住居跡を除いた7軒では複数個出土している。検出総数は22点で、このうち19点を図示している。出土状況をみると、平面分布には特にまとまった傾向は認められないが、多くが床面、床面直上からの検出であり、各遺構に伴うものと判断できる。

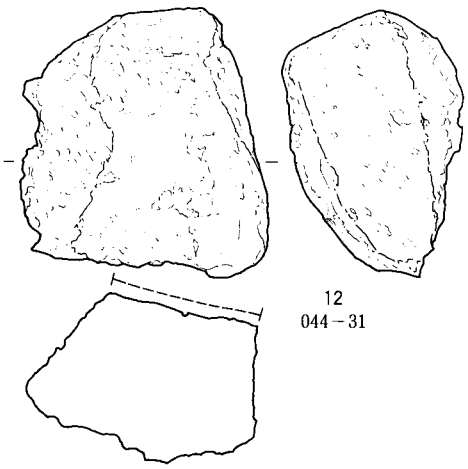
肉眼による観察では、これらのスコリアは黒灰褐色を呈する、概して気泡が発達したもので、中に輝石類、長石類と思われる比較的大きな好物を多く含んでおり、多数の遺跡から出土する乳白色ないし黄褐色のいわゆる軽石とは異なるものに見える。このスコリア自体はそれほど珍しくはないが、遺構から出土したものは類例が少なく、今までにみた限りでは僅かに四街道市の和良比中山遺跡31号住居跡、市原市の草刈遺跡C区107号住居跡、同107号住居跡の3例を確認しただけである。

No.	遺構挿図No.	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重量（g）	図版No.	出土状態	備　考
1	不明	26	33	26	5.8	102	不　明	
2	044 － 30	44	45	34	15.0	102	床　面	
3	028 － 26	42	34	28	8.3	102	履土下層	
4	043 － 27	44	31	23	6.9	102	履土下層	
5	043 － 27	43	31	26	6.5	102	履土下層	
6	056 － 10	50	39	31	16.1	102	床　直	
7	056 － 11	58	37	37	19.1	102	床　直	
8	028 － 27	51	30	27	5.9	102	床　直	
9	018 － 7	47	39	31	10.9	102	床　直	
10	018 － 7	76	56	34	54.8	102	床　直	
11	035 － 9	56	55	44	27.8	102	床　直	
12	044 － 31	70	64	45	47.1	102	床　直	
13	035 － 10	71	78	46	59.5	102	床　面	
14	045 － 45	87	50	37	34.5	102	床　面	
15	044 － 32	85	66	52	85.0	103	床　直	
16	045 － 47	108	55	54	81.3	103	壁　溝	小片2、10.9g
17	045 － 48	111	83	60	143.8	103	床　面	
18	018 － 8	127	106	98	338.6	103	貯蔵穴内	
19	045 － 46	92	91	79	94.7	103	壁　溝	小片多数124.9g
20	018 － 11	－	－	－	－	－	P　内	遺物紛失
21	043 － 29	－	－	－	－	－	履土下層	〃
22	051 － 14	－	－	－	－	－	履　土	〃

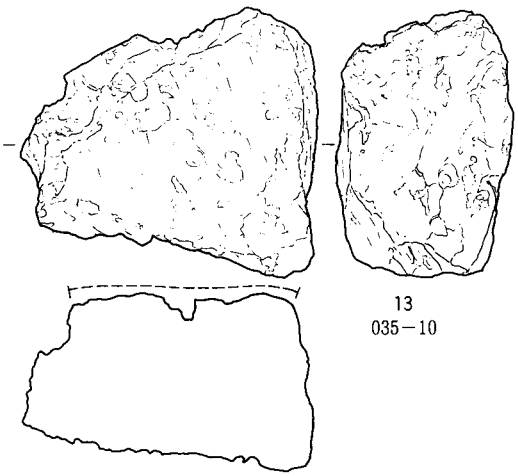
第25表　軽石一覧



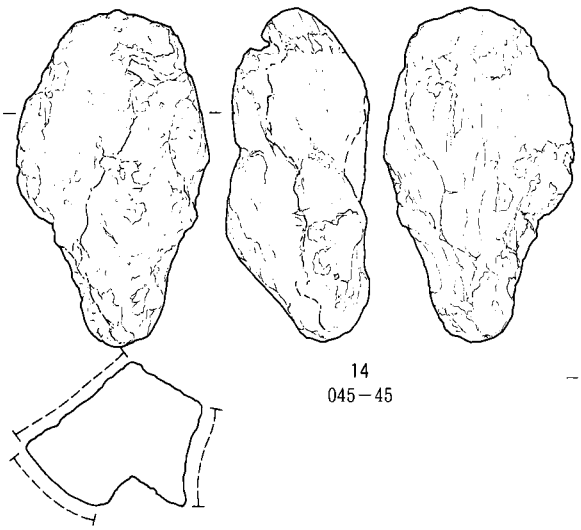
第188図　石製品 －軽石(1)－



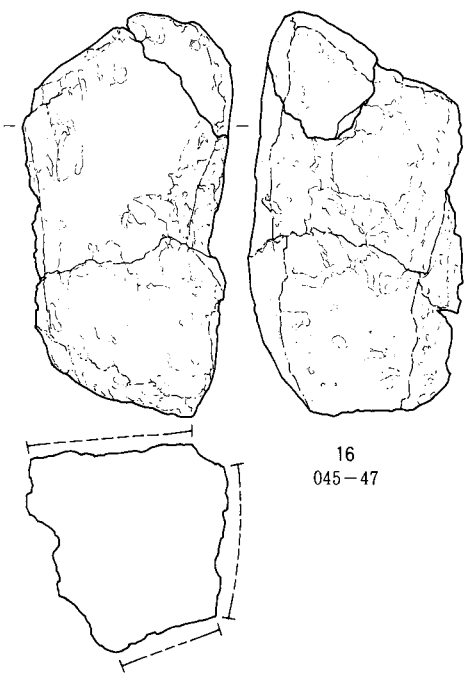
12
044－31



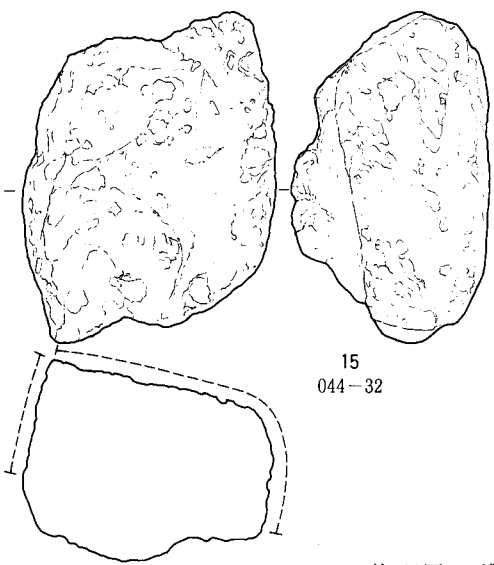
13
035－10



14
045－45



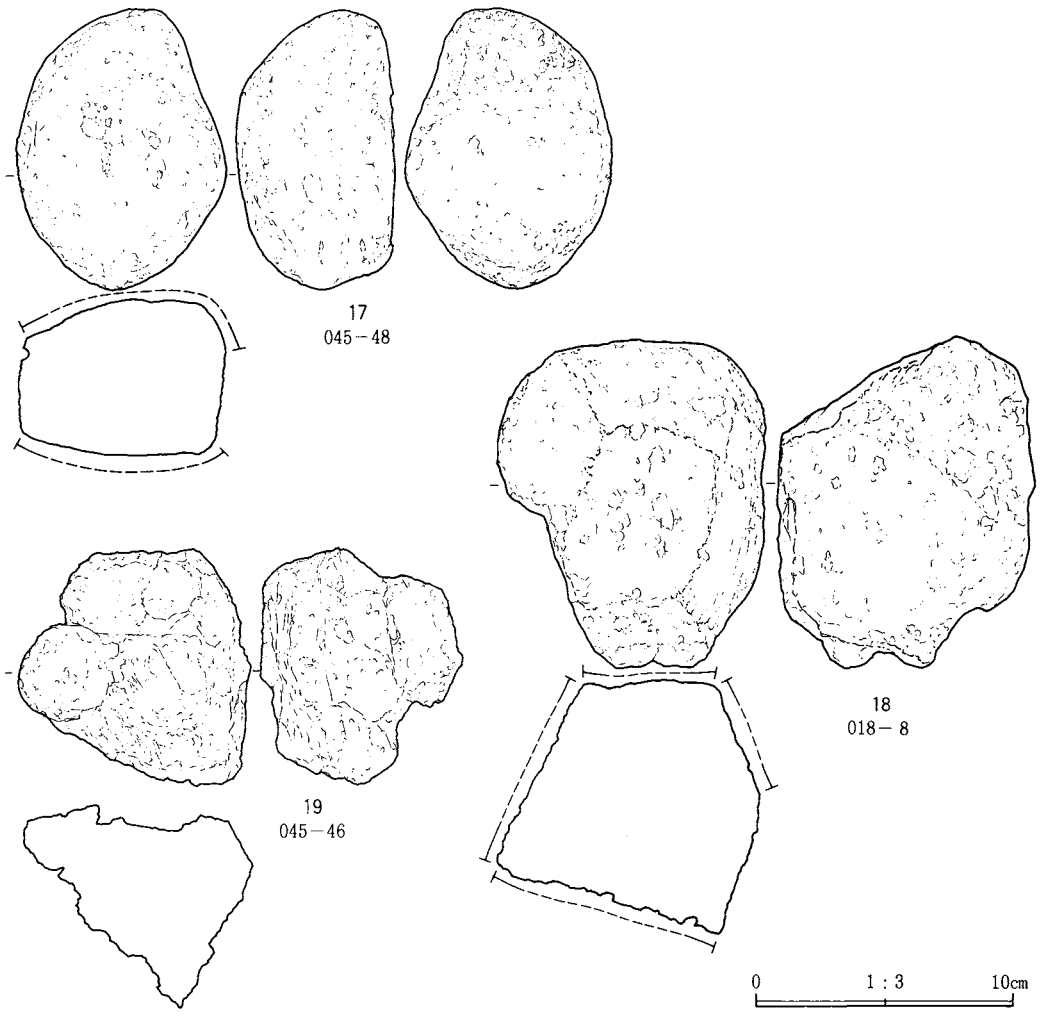
16
045－47



15
044－32

0　1：2　5cm

第189図　石製品 － 軽石(2) －



第190図　石製品 － 軽石(3) －

スコリアは形状、擦り面の状態等から次のように分類した。

ＩＡ類　器面全面が擦り面と考えられる面で覆われ多面体を呈するもの（１・２）。

ＩＢ類　器面の一部に擦り面と考えられる面をもつもの（３・4b・６・8a・8b・９・10～16）。

Ⅱ　類　器面に擦り面と考えられる面をもたないもの（4a・５・７・17）。

ＩＡ類　１は11面の平坦な面で面取りされた多面体賽子状の形態を呈し、２点のうち小形である。２はやや丸みをもつ平坦な面で構成されているものである。器面が大小の気泡で構成され脆く、風化も著しいため擦り痕は看取できないが、自然状態でこの多面体が形成されるとは考えがたいので、この平坦な面は人工的に擦った面と考えられる。他のスコリアについても同様のことが考えられる。

ＩＢ類　3・4ｂ・10・11は擦り面と考えられる面が1面だけ認められるものである。3は正面上側に平坦な面、4ｂは側面に丸みのある面が認められる。10・11はやや大型のもので、正面の広い平坦な面が擦り面と考えられる。6・8ａ・8ｂ・9・12・13・14・15・16は擦り面と考えられる面が複数存在するものである。6は正面の中央の稜で上下面に分かれる。8ａは板状の素材の器面の凹凸の著しい部分以外が擦り面と考えられる。8ｂは正面から側面、裏面にかけて平坦な面と丸みのある面で構成される。9は上下が欠損しており、正面から側面にかけて平坦な面が看取される。12は正面と側面にやや抉れた擦り面と考えられる面をもつ。13は正面から側面にかけて明確な稜を持たないで擦り面と考えられる面が認められる。14は正面、右側面、裏面に上下に長い平坦な面により角柱状の形態を呈している。15は磨石状を呈し、部分的に平坦な面をもつ。16は8面の平坦な面が認められ多面体を呈する。擦り面と考えられる面は全面に及ばないが、形態的にはＩＡ類に類似する。

Ⅱ　類　4ａ・5・7は小形塊状のもので、17は大形不定形のものでそれぞれ平坦な面が認められず擦り面と考える面を持たないものである。

擦り面と考えられる面の状態を中心に説明を加えてきたが、擦り面と考えられる面が素材に認められる場合は平坦な面の数や大きさに差異が看取され、その面の構成状態と素材形状により形態的な違いが存在する。とくにＩＡ類はその顕著なものである。

Ｃ．鉄製品

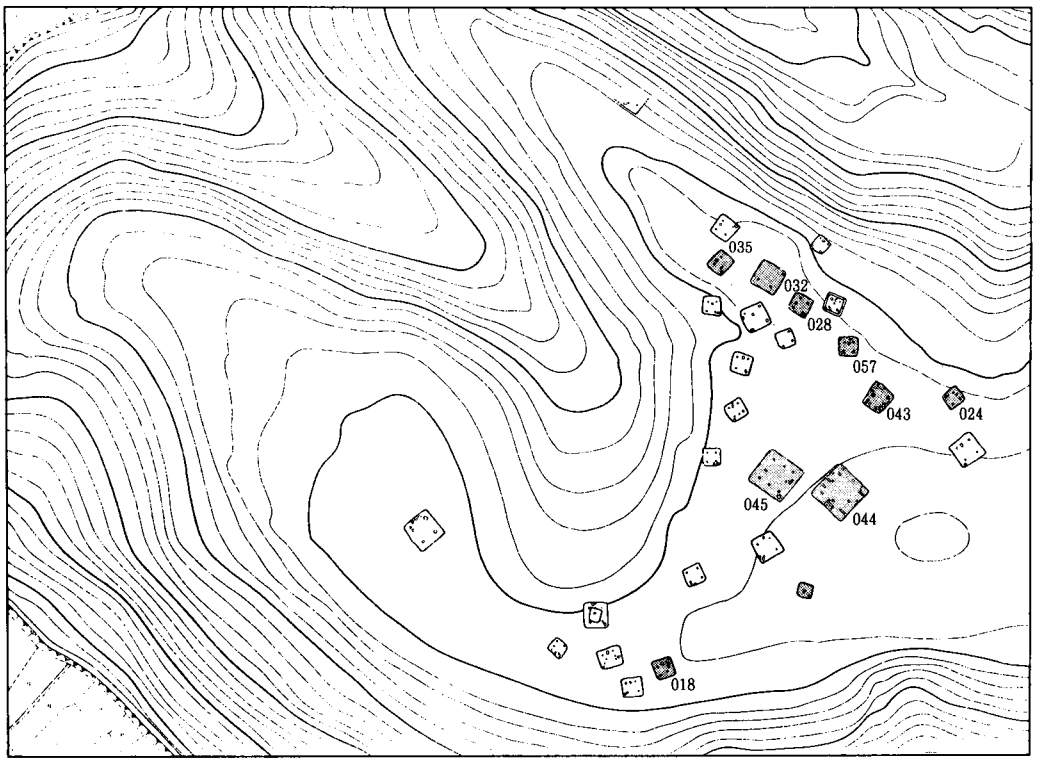
本遺跡では住居跡内および包含層から、計22点の鉄製品・鉄片を検出した。ここでは図示可能な15点について、農具、工具、その他の順に説明を加えたい。なお、図示することが不可能であった遺物が7点あり、その内訳は釘状鉄製品3点（古墳時代中期2点・近世以後1点）、環状鉄製品1点（近世以後）、不明鉄片3点（古墳時代中期）である。

農具（第192図、図版103）

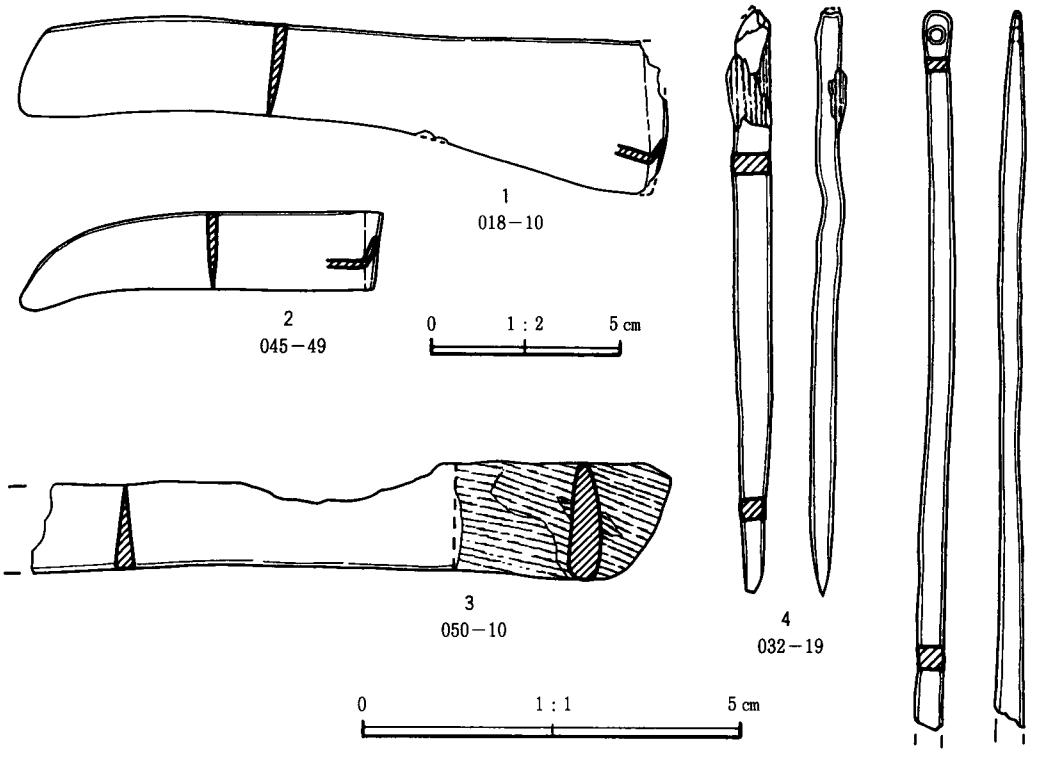
1は018号住居跡出土の曲刃鎌である。全長17.3cm、幅2.4cm、背厚0.3cm、着柄角95度前後である。刃部はゆるやかに内湾しており、着柄部の上端と下端をわずかに欠損する。先端部は斜めに欠損したような様相を呈しているが、欠損の痕跡が認められなかったため、先端部の欠損はないものとして取り扱った。柄の着装部は側縁全体を折り返して作られている。

2は045号住居跡出土の曲刃鎌である。全長9.6cm、幅2.1cm、背厚0.2cm、着柄角90度である。刃部の先端は円く作られ、先端から3分の1ほどのところでゆるやかに内湾した後、直線的に着柄部にいたる。柄の着装部は1同様に側縁全体を折り返して作られている。

1・2はその形態・大きさ・柄の装着角度が異なっており、その機能に差異があったものと考えられる(註1)。



第191図　鉄製品出土住居跡



第192図　鉄製品(1)

工具（第192図・第193図、図版104）

3は050号住居跡出土の刀子である。刃部幅1.1cm、柄部幅1.5cm、背厚0.25cm。刃部なかほどから先端部を欠く。柄部は無関で、鉄地を薄い板材で挟み樹皮で巻いていたと考えられる。刃部柄側2.6cmの部分は大きく内側に入っており、短い柄部を補うための指当てと考えられる。

4は032号住居跡出土の錐である。全長7.7cm、幅0.5cm、厚み0.25cm。断面長方形の角棒状を呈し、先端部はゆるやかに細くなる。茎部には木質の痕跡が認められる。所謂「四ツ目錐」と考えられる。

5は038号住居跡出土の針である。先端部を欠損する。幅0.3cm、厚み0.25cm、断面長方形の角棒状を呈する。針頭は断面を台形状につぶしやや広くした後、径0.15cmの針目を作る。

6は035号住居跡出土の鉋で、全長19.2cm、刃部長2.8cm、幅1.8cm、厚み0.4cm。刃部は断面三角形で裏透きを持ち、更に中央部に溝状の彫り込みをもつ。茎部裏面および側面に木質の痕跡が見られ、表面にも一部木質痕が残る。このことより、断面凹形の木柄が樹皮等により装着されていたと考えられる。柄側の身端部はゆるやかに細くなった後、長さ2cm、幅0.5cm、厚み0.2cmの舌状の端部を作る。先端は刃状を呈する。岡山県神宮寺山古墳出土例に見られるようなフック状の端部と同様の機能（註2）を有していたと考えられる。木柄部と刃部の間に見られるゆるやかな湾曲は指当てと考えることが最も妥当であろう。

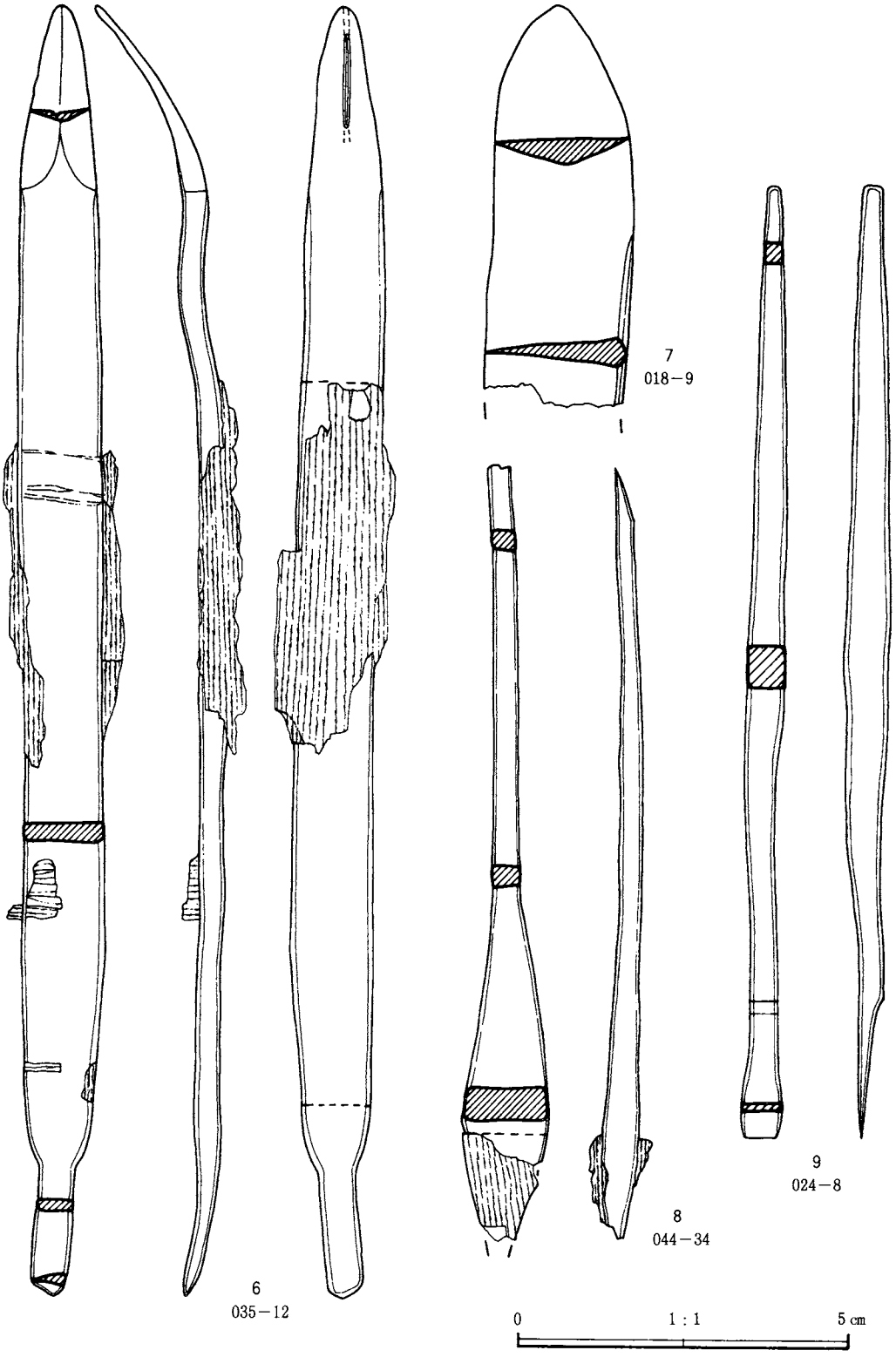
7は018号住居跡出土の鉋であり刃部先端部のみである。幅2.1cm、刃部幅0.4cm、背幅0.4cm。先端部から3.3cmは両側に刃を持ち、上反りのみられることから鉋の可能性が考えられ、本書では鉋として取り扱った。

8は044号住居跡出土の鑿である。茎部端を欠く。幅0.4cm～1.3cm、厚み0.5cm。穂先は無肩で先端から6.6cmのところより幅広くなり、木質の残る茎部のやや手前から再び細くなり茎部端にいたる。

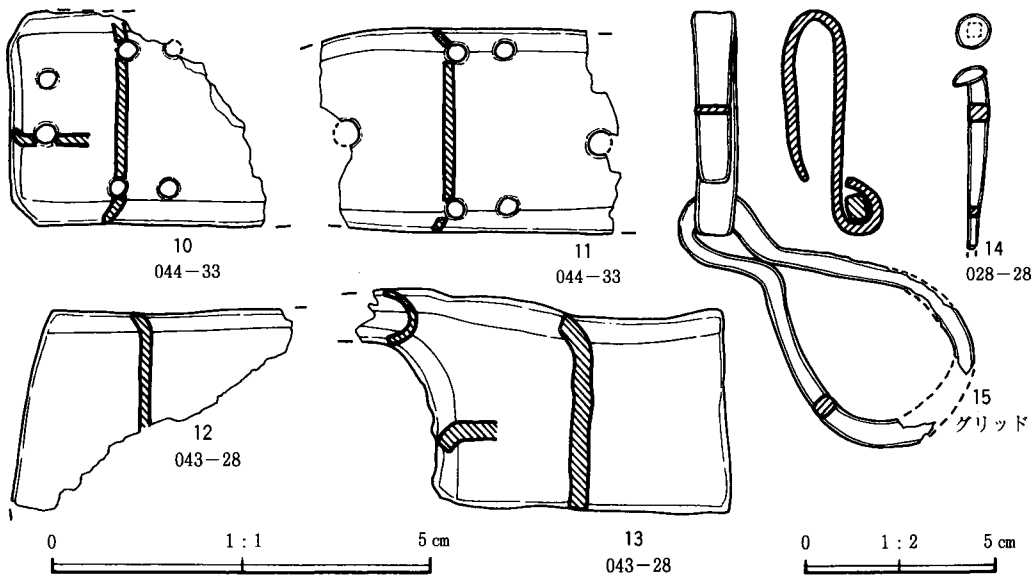
9は024号住居跡出土の鑿である。全長14.1cm、幅0.6cm、刃部端0.5cm。鉄錆が多く付着しているため識別が困難ではあるが、先端部から2cm程のところに段がみられ、先端部にむけて細く作られていることから、鑿と考えられる。

その他の鉄製品（第194図、図版103）

10・11は044号住居跡出土の小札状鉄製品である。10は幅2.8cm、厚み0.15cm。長方形を呈していたと考えられるが、長軸方向の一方を欠くため、その大きさは不明である。残り三辺に径0.2cmの小孔が2個ずつ穿たれている。欠損断面には小孔の痕跡等は見られなかった。長辺は内側に折られており、短辺は外反している。11も長方形状を呈していたと考えられるが、長軸方向の両端を欠く。また、一方の端部はすぼまり気味になっている。長辺には対になるように、径0.2cmの小孔が2個ずつ穿たれており、短辺にも対になるように中央に径0.3cmの小孔が1個ずつ穿たれている。長辺側の端部は10同様に内側に折られている。



第193図　鉄製品(2)



第194図　鉄製品(3)

12・13は043号住居跡出土の鉄製品である。欠損部が多く12は厚み0.15cm、13は厚み0.25cmである。12は10・11同様、端部を内側に折っており、小札状鉄製品の可能性が考えられるが、小孔は見られない。13は厚み0.25cmと10～12に比べ、やや厚くなり、形態も特異である。用途等については全く不明である。

14は028号住居跡出土の釘である。先端部を欠損する。幅0.25～0.5cm、厚み0.2～0.45cm、頭部径1cm。頭部下から先端部までゆるやかに細くなっている。

15は馬具状の鉄製品である。幅1.1cm、厚み0.3cmの鉄板をS字状に曲げ、その一端に8字状の環をとりつける。もう一方の端はフック状に作られ、舌が長くのびている。この遺物は、近世以後のものと考えられる。

註

1　前者は稲刈り・雑草木刈り鎌、後者は穂かり鎌の可能性が考えられる（古瀬1991）。

2　入りこんだ部分とか溝を削った後、削り屑を引っかき出すためのものだろう（古瀬1991）。

引用・参考文献

古瀬清秀　1991「農工具」『古墳時代の研究』8　雄山角出版

三木文雄　1967「古墳時代の鉇について」『考古学雑誌』第42巻3号　日本考古学会

西谷真治他1959『金蔵山古墳』倉敷考古館研究報告第1冊　田中嘉次

内藤　晃他1961『三池平古墳』　庵原村教育委員会

D．製鉄関連遺物

鎌取遺跡の製鉄関連遺物には鉄滓、羽口、鉄床石（台石）がある。また確証はないが砥石、磨石、軽石についても製鉄に関連する可能性がある。

鉄　滓（第195図、第26表、図版105）

全部で6点の鉄滓が発見された。このうち1～4は古墳時代中期に属するもので1～3の3点が016号住居跡、4が017号住居跡から出土した。5は古墳時代後期、6は8世紀末から9世紀初頭の所産と考えられる。また1～5が鍛冶滓、6は製錬炉内滓に分類できる。

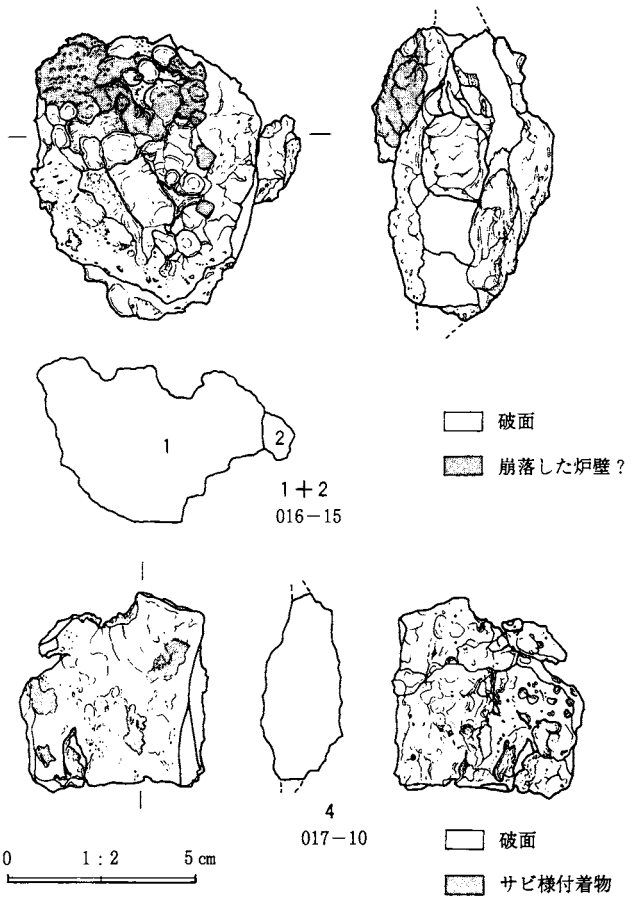
1は鍛冶炉の炉底滓、いわゆる椀形滓である。2と接合した。全体に厚みがあり、緻密で青っぽくかなり重量感のある滓である。平面形は長円形あるいは楕円形に近い。断面は一部が失われているが、かなり深いV字状をしている。

側面には複数の破面が認められるが、割れ口の状態や厚さから見て人為的なものとは考えにくい。破面は大小含めて5か所に観察される。上面には球状の滓がいくつも取りこまれており、本鉄滓の特徴となっている。

色調：本来黒っぽい灰褐色で一部分に土の付着が認められる。また底部と側面の数か所に赤サビ様の付着物がある。このうち側面端部は内部のサビが外面に現れたもの、底部は表面に赤色の酸化物が付着したものと考えられる。

表面：上面に取り込まれた滓は羽口等が溶解して生じたと思われる。形状は0.5cm～1.0cmの球状が多いが、より大形の不整形の滓も同様に取り込まれたのであろう。また一部には滓生成後に炉壁が崩壊して上に乗ったと思われるところがある。上面の周縁部分には1.0cmほどの幅で表面が剝落した部分があって、0.5cmあるいはそれ以下の気孔が多数認められる。ただし密度は場所によってかなり差がある。

底面は半分弱がやや平滑、残りはかなり凸凹で、気孔も多く見受けられる。小さい木炭痕もい



第195図　鉄　　滓

くつか確認できるが、木炭の一部は粉状だったと推定される。

その他：滓の断面形や羽口・炉壁の取り込みから、この滓が生じた炉は底面の曲率が大きい小形の炉であったと推定される。また、滓底面にはいくつかの段が見られ、この椀形滓が一度に出来たものではなく何回かの操業による結果、生成したと考えられる。側面にある4.0×1.5cmほどの破面に2の小鉄滓が接合した。接合面は1.0×1.5cmほどで大きい破面全体には及ばない。

2は貯蔵穴の覆土より出土した小片。1と接合した。1の滓の上面ないしは側面上方と同様な特徴をしている。破面は接合した部分だけで、破面には赤サビ様の付着物が観察される。

3も小片で原形などは不明。地色は黒に近い灰色、部分的に白っぽい変色や茶色い酸化物の付着がある。大小の気孔が密にあり平滑な面はほとんどない。破面が2か所に認められる。

4もいわゆる椀形滓である。平面形は、径8.0cm前後の円形かと思われるが端部に破面が多く確実ではない。断面形は薄い皿状であろう。016号跡の滓に比べると厚みがないが、それでも重量感はあり、スカスカした感じはない。

色調：黒に近い灰色。破面を含め、ほぼ全体に土が付着し、地の色はほとんど見えない。上面および底面に0.5cmほどのサビぶくれが何か所も認められる。

表面：上面は、ほぼ平滑な部分と小さい粒状の突起が認められる部分とが混在しており全体としては、ゆるやかに波うっている。また非常に細かい気孔が観察されるが密ではない。

側面で端部まで残っている部分はほとんどなく、複数の破面で構成されている。大きいものは4.5×1.5cmほどであり、多くの破面に最大0.3cm程度の気孔が観察される。底面は上面に比べて凸凹が激しく、大小の気孔もきわめて密に認められ、大きいものは0.5cmを超えるものもある。

その他：この滓は整理開始の段階で7つの小破片にわかれていた。接合面は地の色を呈しているものが多かったが、実際にどの時点で破片になったのかは不明である。

5も椀形滓である。外形は一辺が3cmほどの三角形をした小片で、比較的重量感のある滓。全体の形は不明、厚みはさほど無く原形は薄い皿状だったと考えられる。本来の色は黒褐色と思われるが大部分を茶色の酸化物が覆っている、また白っぽく変色している部分もある。全体に大小多くの気孔が密に観察され、大きいものは径0.5cmほどになる。上面は他に比べて気孔は少ないが凹凸している、1.0cmほどの木炭痕も一か所認められる。側面の2か所に破面があり、そのうち1つには酸化物の付着がみられる、また側面端部には滓内部のサビが外面に現れたと思われるサビぶくれがある。底面はやや凹凸はあるが概ね平滑で炉壁の付着などは認められない。

6は不整台形をした製錬炉内滓である。全体に茶褐色の酸化物に覆われており、凸凹が激しい。側面3か所に1cm前後の木炭痕がみられる。滓の地は黒褐色で表面は付着物により茶褐色である。気孔の密度は部分的に異なり、0.1cm以下のものが密集する部分と散在する部分がある。破面は側面3か所に点在する。本資料は生成鉄塊を割り取った時の滓主体の部分であろう。

No.	遺構挿図No.	鉄滓の種類	磁着度	MC	大きさ	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	出土状態	備　考	挿図	図版
1	016－15	鍛冶炉底滓	4	×	C1	76.9	53.8	51.5	273.3	床　面	接合後横69.2mm	○	105
2	016－15	鍛冶炉底滓	2	×	C3	24.5	18.3	12.4	5.4	貯　穴	1と接合	○	105
3	016－	鍛冶滓小片	1	×	C3	13.6	10.5	9.2	2.6	一　括		×	105
4	017－10	鍛冶炉底滓	3	×	C1	50.8	50.0	23.3	76.5	覆　土		○	105
5	038－	鍛冶炉底滓	2	×	C2	39.2	30.9	23.0	36.0	床　面	古墳時代後期	×	105
6	P02－	製錬炉内滓	2	×	C1	52.2	36.3	34.7	48.5	一　括	8C末～9C初	×	105

注　1．磁着度は小林1991．6「製鉄遺跡の発掘調査と整理について」研究連絡誌32に準拠
　　2．MCはメタルチェッカーに対する反応、×は全く反応しなかったもの
　　3．大きさ　C1：最大径5cm以上、C2：最大径3～5cm、C3：最大径1～3cm

第26表　鉄滓一覧

羽　口（第196図、図版106）

全部で2点の羽口が発見された。いずれも 016号住居跡から検出されたもので転用羽口である。

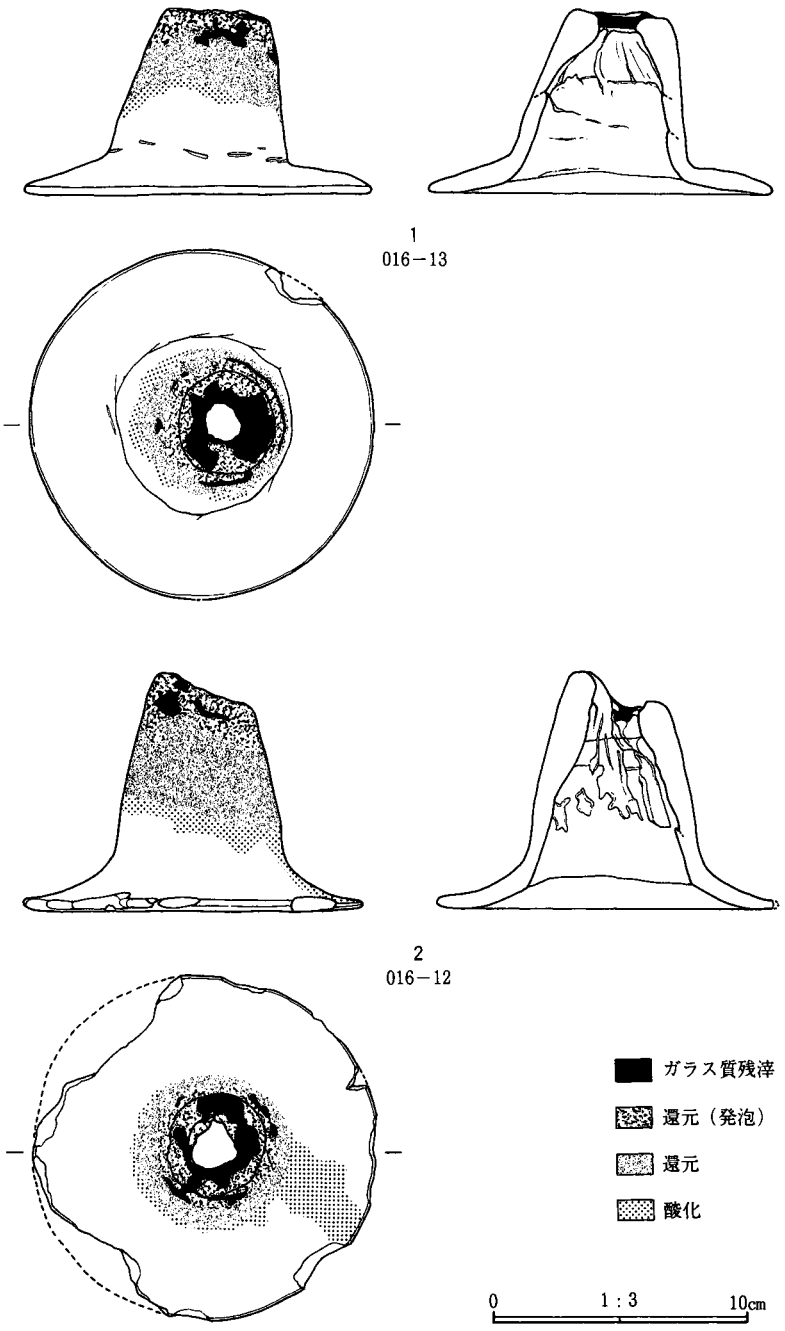
1は高坏の脚部を鍛冶羽口に利用した転用羽口。脚部の形状はこの時期の高坏にごく一般的に見られるもので、羽口としては、ほぼ完形を呈している。先端部での孔径は約1.5cm、残存する先端部から孔径が広がるところまでは約0.9cm、そこから脚の屈曲部までが約6.0cm、さらに裾端部までは約0.4cmを測る（いずれも実測図中心線上での計測値）。裾部には1か所小さく欠けた部分があるが割れ口は摩耗しており、羽口として使われる以前に欠損していたと考えられる。また裾部に対して脚部の立ち上がりは垂直とはならず斜めに傾いているが、もともと器形が歪んでいたのか羽口として使用された時に熱を受けて変形したのか、はっきりしない。

胎土は細かい砂粒や白色針状物を含む普通のもので、他の土器の胎土と異なる特別な特徴を見出すことはできない。もちろんスサなどの混入は認められない。脚部外面には本来、赤彩が施されていたようで被熱変色した以外の部分にその痕跡がある。

先端は部分的に溶解し、滓化している。先端と孔内側の一部は黄褐色ないしは黒褐色にガラス化している。それ以外の先端部と外面 0.5～1.0cm ほどの範囲は強く還元して濃い灰褐色を呈し細かい気孔が多数認められる。その外側も還元して灰褐色に変色しているが発泡していない。気孔が認められる下限には再びガラス化した滓が付着している部分がある。さらに外側は次第に還元の度合いが弱まり裾屈曲部から 0.5～3.0cm ほど上位で変色は終わる。

2も高坏を利用した転用羽口。脚部の形状は1と同様で、羽口としてはほぼ完全に遺存していると思われる。先端部での孔径は1.6～2.1cm、先端部から孔径が広がる部分まで2.7cm、そこから脚の屈曲部までが約5.5cm、さらに裾端部までは約0.9cmを測る（いずれも実測図中心線上での計測値）。裾に数か所欠損部分があるが割れ口は摩耗しており、羽口として使用する以前に欠けていたと考えられる。割れ口の大きいものは炉に設置する時の必要性から整形された可能性がある。

胎土も1と同じごく普通のものである。脚部外面には本来赤彩が施されていたようで被熱変色



第196図　羽　　口

した以外の部分にその痕跡がある。先端と孔内側は滓化、溶解し黄褐色ないし茶褐色にガラス化している、それ以外の先端部と外面0.8～1.0cmほどの範囲は強く還元して濃い灰褐色を呈し細かい気孔が多数認められる。その外側も還元しており灰褐色に変色しているが気孔は認められない。発泡が認められる下限には再びガラス化している部分がある。さらに外側は次第に還元の度合いが弱まりおよそ裾屈曲部から0.5～2.5cmほど上位で変色は終わる（1か所だけ例外的に裾部まで変色が及んでいるところがある）。

鉄床石（台石）（第186・187図、図版101・102）

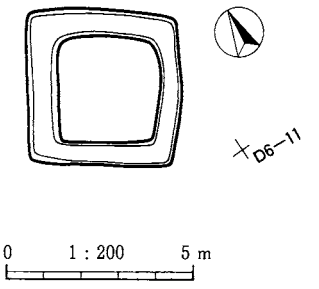
確実なものは016号住居跡から出た1点、はっきりと打痕があり、鍛造剝片の付着が認められることから鉄床石とした。ただし熱による石の変質は顕著でない。現存する端部まで鍛造剝片が付着していることから原形はもっと大きかったことが判る。また剝片の付着状態から両面が使用されたことも判明した。残りの2点は可能性を指摘するにとどめたい。個々の説明はB、石製品⑦（241ページ）を参照のこと。砥石、磨石、軽石はB、石製品⑤⑥⑧（240ページ～）の各項目を参照のこと。

第4節　奈良・平安時代以降

遺構と出土遺物

M01号方形周溝状遺構（第197図、図版64）

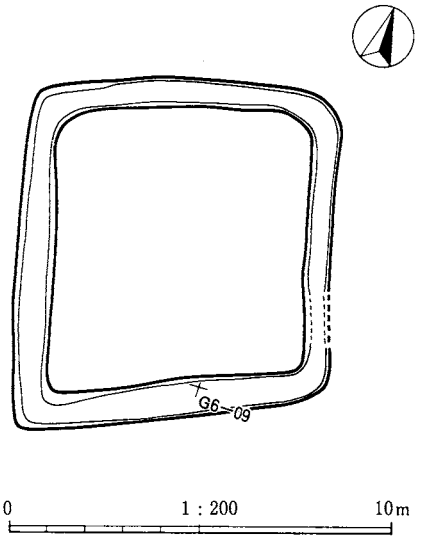
調査区の南西側、D6グリッドで検出された。周溝外側で東西4.2m、南北4.1mの規模で、周溝の幅0.6～0.9m、深さ0.1～0.2mを計る。平面形は、ほぼ方形で周溝内側の四隅は隅丸となる。溝は、断面が浅い皿状を呈し、四隅とも途切れることなく巡る。溝の幅は、北西側がやや広く南東側がやや狭い。周溝内および周溝内側から他の遺構は検出されなかった。遺物も検出されなかった。覆土はレンズ状堆積で、若干ローム粒を含む。



第197図　M01号方形周溝状遺構

M02号方形周溝状遺構（第198図、図版64）

調査区の南東側、F6、G6グリッドで検出された。周溝外側で東西8.2m、南北8.9mの規模で、周溝の幅0.6～1.0m、深さ0.1～0.35mを計る。平面形は、南北にやや長い菱形で周溝内側の四隅は隅丸となる。溝は、断面が浅い皿状を呈し、四隅とも途切れることなく巡る。溝の幅は、西側、南側がやや広く東側がやや狭い。周溝内および周溝内側から他の遺構は検出されなかった。遺物も検出されなかった。覆土はレンズ状堆積で、若干ローム粒を含む。



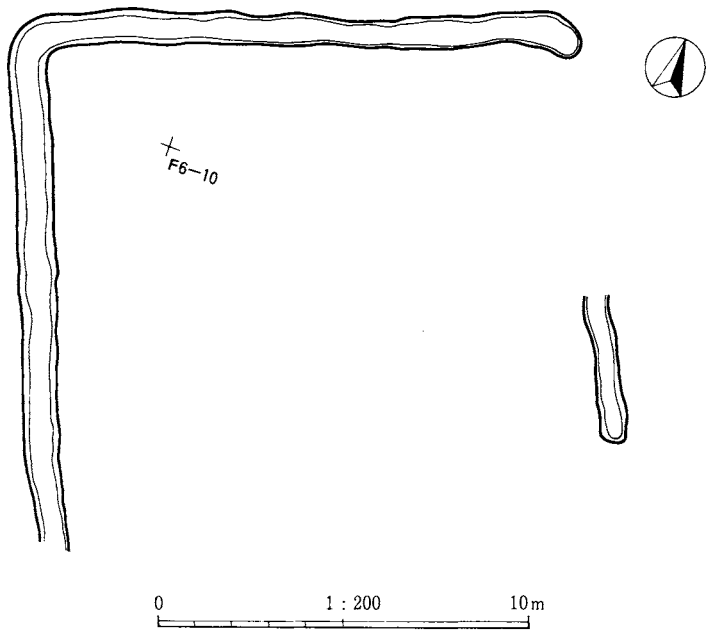
第198図　M02号方形周溝状遺構

M06号溝状遺構（第199図、図版64）

調査区の南東側、F6グリッドで検出された。平面形は「L」字形の部分と短い直線の部分とからなる。「L」字形の部分は東西15.5m、南北14.4mの規模で、溝の幅0.8m、深さ0.05～0.2mを計る。短い直線の部分は長さ4.2m、幅0.6mを計る。覆土はレンズ状堆積で、若干ローム粒、焼土粒を含む。掘り込みが浅いため、平面形を見ると本来なら方形周溝状遺構になることも考えられる。

P 02号土坑（第200・201図、図版63）

調査区の西端、A4グリッドで検出された。東西2.9m、南北2.6mの規模で、深さ0.4mを計る。平面形は、西南西にやや長い楕円形で、断面は皿状を呈す。覆土はレンズ状堆積で炭化材粒、

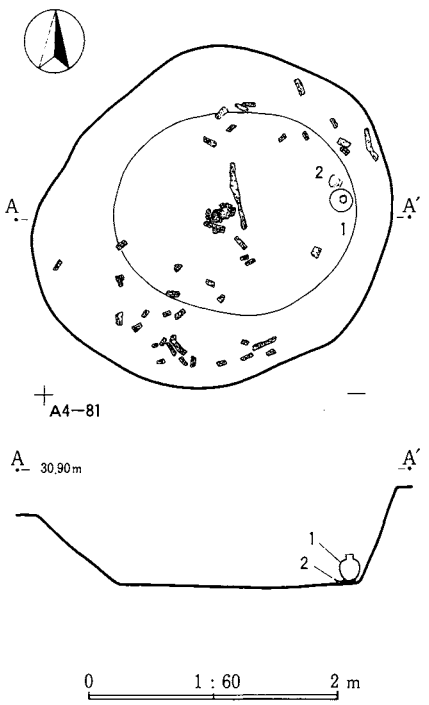


第199図　M06号溝状遺構

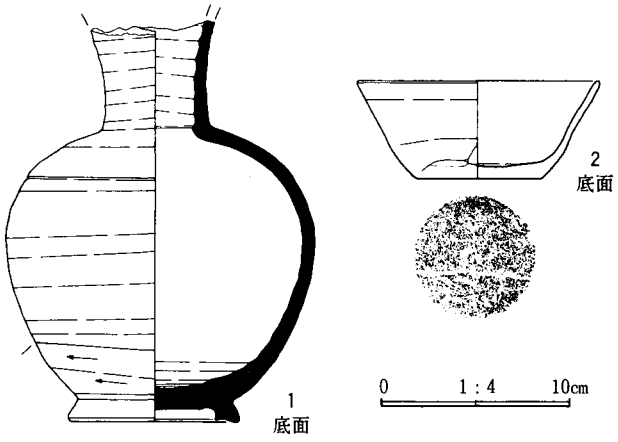
炭化材を多く含む。焼土粒を若干含むがあまり多くは検出されていないため、土壙内で焼却したというよりは炭化材を投げ入れたものと考えられる。遺物は、東隅床面より須恵器の長頸壷と土師器の坏と鉄滓を検出した。

遺物は遺構底面の東端から土器が2点出土した。

1は須恵器の長頸壷。底面に正位の状態で置かれていた。口縁から頸部上半を欠損する。現存する頸端部は細かく打ち欠いて割れ口を調整したようで、割れ口も磨滅しており、口縁部欠損後調整して再利用されたことが窺える。また胴部最大径より肩部にかけて、1.0cm×1.5cmから2.5cm×3.5cmほどの長円形に表面が剝離した部分があるが、これが意識的に打ち欠いたものかどうかは不明である。胴部最大径は胴中位よりやや上にあり頸部はゆるやかに反りながら立ち上がる。肩部に一本の浅い沈線が巡るが装飾的な意図の有無は不明である。体部下半には右回りの回転ヘラケズリ



第200図　P02号土坑



第201図　P02号土坑出土土器

が施される。底部は回転糸切り（ロクロ回転は右）後、高台を貼り付けナデにより整形。胎土はやや緑がかかった明灰褐色で砂粒を含むが良く精選されている。焼成は良好、頸部から胴部上半にかけての大部分に釉がかかっている。器形や胎土からみて、猿投の折戸10号窯に比定される可能性が高い。実年代としては9世紀前後かと思われる。

2は土師器の坏。須恵器長頸壷の北側に正位の状態で置かれていた。発掘時、すでに坏は割れていた。体部約3／4にあたる破片が発見できなかったことから土坑内に置かれたときには欠損していた可能性がある。また破片によって著しく色調の異なるものがあることや器面の荒れが激しいことから割れた後に二次的に熱を受けたと推測される。

器面が荒れているので調整など不明な点が多い。体部下半は手持ち？のヘラケズリ、底部は糸切り後ヘラケズリか。

このほかに底面より製錬炉内滓とみられる鉄滓が1点発見された（D、製鉄関連遺物、251ページ、鉄滓の項に記載）。

P 50号土壙（附図）

調査区のほぼ中央、E5グリッドで検出された。南北1.7m、東西1.2m、の規模で、深さ0.95mを計る。平面形は本来は長方形であったと考えられるが、西側の壁が崩れて擂り鉢状を呈している。覆土はレンズ状堆積を呈し、ローム粒を若干含む。締りがなく、比較的新しい時代の所産と考えられる。形状は縄文時代の陥し穴状遺構に近似する。

P 12～14号地下式壙（附図）

調査区南端近くのE7グリッドで検出された。羨道部を円形に垂直に掘り込み、玄室を羨道部下端より水平に長方形に掘り込むタイプの平面形を呈すると思われるが、天井部が崩落しており、調査上危険であると判断された。したがって、完掘していないため形状時期等は不明である。3基はそれぞれ重複していた。

P 16～19号地下式壙（附図）

P12～P14から北東へ15m強のF6グリッドで検出された。P12～P14と同様に完掘できなかったため、詳細は不明である。4基は重複して検出された。

M03号溝状遺構（附図）

調査区の北東側、F4、G4グリッドで検出された。長さ72m、幅1.8～2mの規模で、深さ0.5mを計る。台地を東西に横切り、主軸方向はほぼ東西を指し、断面は皿状を呈す。

M04号溝状遺構（附図）

調査区の北東側、G4グリッドで検出された。長さ5.8m、幅1.2mの規模で、深さ0.15mを計る。主軸方向はほぼ東西を指し、断面は皿状を呈す。

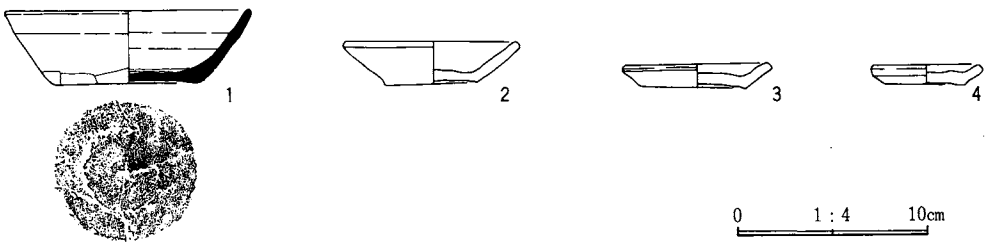
グリッド出土遺物

須恵器（第202図）

1はD5グリッドで出土した。周囲に当該期の遺構は存在しない。器種は坏。体部上半から口縁部にかけてやや内湾する。体部下半は時計回りの手持ちヘラケズリ、底部はヘラ切り後一定方向のヘラケズリ。焼成は甘く、器面は荒れている。

かわらけ（第202図）

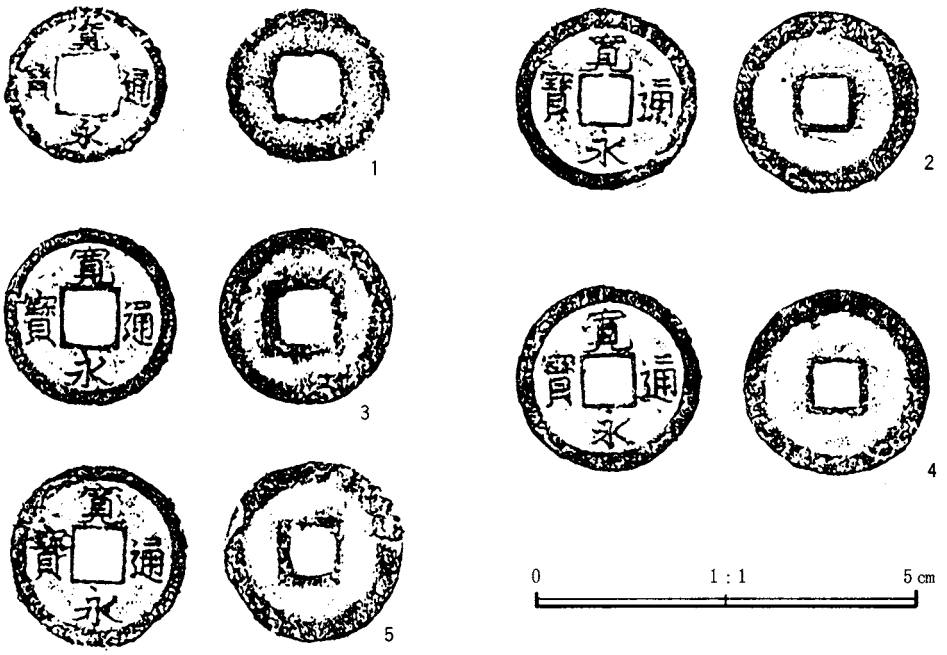
2から4はF5グリッドで出土した。おそらく発掘以前にF4・F5グリッドにあった墓地に伴うものである。墓地についての詳細は不明。器種はすべて小皿。3点ともよく似た成形・胎土をしており、焼成も良好、とくに3と4は形態も酷似しており同一時期の所産であろう。



第202図　グリッド出土土器

銭　貨（第203図、第27表、図版105）

5点の寛永通寶が出土した。「古寛永」と思われるものは1点のみである。遺構に伴うものもないので、すべての資料について銭種と計測値を掲載するにとどめる。1はA4グリッド、2～5の4点はF4グリッドから出土した。



第203図　銭　　貨

番号	銭　貨　名	W	G	N	g	n	T	t	備　　考
1	元文藤沢銭	1.1g	21.50mm	17.47mm	10.05mm	8.40mm	0.83mm	0.47mm	
2	延宝深川亀戸銭	4.1	24.60	19.20	8.12	6.67	1.48	1.04	下半分変色
3	元禄大阪軽目銭	2.2	23.20	18.92	8.90	7.20	1.07	0.64	文字鮮明
4	延宝深川亀戸銭	3.5	24.12	19.55	8.15	6.70	1.54	1.00	腐食
5	岡　山　銭　？	3.6	24.52	19.25	8.10	6.45	1.33	0.80	寛・寶変色

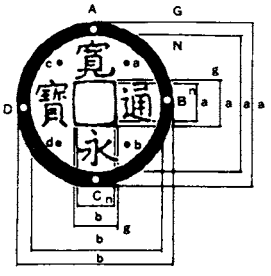
第27表　銭貨一覧

＊銭貨の各部測点については下のとおりである。

外縁外径 $G=\frac{Ga+Gb}{2}$，外縁内径 $N=\frac{Na+Nb}{2}$，内郭外径 $g=\frac{ga+gb}{2}$

内郭内径 $n=\frac{na+nb}{2}$

外縁厚 $T=\frac{A+B+C+D}{4}$，文字面厚 $t=\frac{a+b+c+d}{4}$



第5節　貝サンプルの分析結果

006号跡の覆土内貝層について、各ブロック毎に貝層全量をサンプリングし、分析を行った。なお、貝層の時期は加曽利E式期であり、東南部ニュータウン内の遺跡では過去に六通金山遺跡で3軒の報告例がある。同地域内では、有吉北貝塚・六通貝塚をはじめ多数の貝サンプルの分析を継続して行う予定である。分析を共通した方法で進めていくために「貝サンプル整理マニュアル」というコピー16ページの資料を作成して、関係者に配っており、そこで分析方法をくわしく紹介した。今回もその方法にしたがった。

集計・計測方法　貝サンプルの水洗は、9.52、4、2、1mmメッシュの試験フルイを用いて水洗分離を行い、室内で乾燥後選別作業を実施した。貝類は9.52、4mmメッシュ面上に残った資料について選別作業を行い、腹足綱は殻軸の1／2以上を保存するもの、二枚貝綱は左右の資料を別々に集計して、多い方の個体数を記録した。重量については、保存部位に関わらず無理なく同定できるすべての破片を集計した。また、比較的個体数の多かったハマグリ、シオフキ、アサリの3種について殻長を計測した。

採取量　サンプリングは不定量であり、各ブロックの量は等しくない。そのため、水洗前に目盛りの入った4リットル升でおおよその体積を測った。それによると各ブロックの量は次の通り。

No.	a	b	c	d	e	合　計
体積（ℓ）	5.0	3.0	3.0	6.0	1.5	18.5

第28表　貝サンプル採取量

貝類の組成（第29表／A～C）　個体数でイボキサゴ、重量ではハマグリが最も多く、すべて内湾の干潟で産出する貝類で占められていた。これ以上の評価は今後周辺貝塚のデータと比較が可能となった時点で行いたい。

その他　哺乳類や魚類の遺存体は検出されなかった。第29表以外に検出されたのは、フジツボ類4ｇと微小巻貝類ごく少量のみで、今回は同定を行わなかった。

軟体動物	MOLLUSCA	アサリ	*Ruditapes philippinarum*
腹足綱	GASTROPODA	オキシジミ	*Cyclina sinensis*
イボキサゴ	*Umbonium (Suchium) moniliferum*	ハマグリ	*Meretrix lusoria*
ウミニナ属	*Batillaria* spp.	シオフキ	*Maxrra veneriformis*
アラムシロ	*Reticunassa festiva*	ニッコウガイ科	
二枚貝綱	BIVALVIA	マテガイ	*Solen sreictus*
マガキ	*Crassostrea gigas*		

第29表　動物遺存体種名表

A／貝類同定結果

	a				b				c				d				e				合　計			
	個体数	(%)	重量g	(%)	個体数	(%)	重量g	(%)	個体数	(%)	重量g	(%)	個体数	(%)	重量g	(%)	個体数	(%)	重量g	(%)	個体数	(%)	重量g	(%)
イボキサゴ	119	43.9	19.8	3.2	30	26.8	5.3	1.5	61	33.7	13.0	2.8	1599	82.7	260.7	18.0	552	90.8	93.2	37.3	2361	76.0	392.0	12.5
ウミニナ属	2	0.7	0.1	0.0	3	2.7	0.6	0.2	2	1.1	1.0	0.2	20	1.0	13.8	1.0	11	1.8	3.7	1.5	38	1.2	19.2	0.6
アラムシロ	1	0.4	0.0	0.0		0.0		0.0	0	0.0	0.1	0.0	1	0.1	0.5	0.0	0	0.0	0.0	0.0	2	0.1	0.6	0.0
アガキ	7	2.6	17.6	2.8	2	1.8	9.3	2.7	32	17.7	115.2	24.8	87	4.5	426.1	29.5	28	4.6	123.0	49.3	156	5.0	691.2	22.1
アサリ	12	4.4	37.6	6.0	5	4.5	17.9	5.2	10	5.5	31.2	6.7	40	2.1	88.7	6.1	1	0.2	2.9	1.2	68	2.2	178.2	5.7
オキシジミ		0.0		0.0		0.0		0.0	2	1.1	11.5	2.5		0.0		0.0		0.0		0.0	2	0.1	11.5	0.4
ハマグリ	93	34.3	388.5	62.1	57	50.9	244.7	71.4	46	25.4	184.3	39.8	156	8.1	537.4	37.2	12	2.0	14.8	5.9	364	11.7	1369.7	43.8
シオフキ	37	13.7	162.5	26.0	15	13.4	65.0	19.0	28	15.5	107.1	23.1	30	1.6	117.6	8.1	3	0.5	12.0	4.8	113	3.6	464.2	14.8
ニッコウガイ科		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	1	0.1	0.1	0.0	1	0.2	0.0	0.0	2	0.1	0.1	0.0
マテガイ		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0	0.3	0.1		0.0		0.0	0	0.0	0.1	0.0	0	0.0	0.4	0.0
合　計	271	100.0	626.1	100.0	112	100.0	342.8	100.0	181	100.0	463.6	100.0	1934	100.0	1444.9	100.0	608	100.0	249.7	100.0	3106	100.0	3127.1	100.0

B／ハマグリ（左）計測値分布

殻長（mm）	a	(%)	b	(%)	c	(%)	d	(%)	e	(%)	合　計	(%)
15.0－17.5		0.0		0.0		0.0	1	1.5		0.0	1	1.0
17.5－20.0		0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	0	0.0
20.0－22.5		0.0		0.0		0.0	1	1.5		0.0	1	1.0
22.5－25.0	1	9.1		0.0		0.0	7	10.6	2	100.0	10	9.9
25.0－27.5		0.0	4	25.0	1	16.7	9	13.6		0.0	14	13.9
27.5－30.0		0.0	1	6.3	1	16.7	11	16.7		0.0	13	12.9
30.0－32.5	2	18.2	1	6.3	1	16.7	23	34.8		0.0	27	26.7
32.5－35.0	7	63.6	5	31.3	2	33.3	8	12.1		0.0	22	21.8
35.0－37.5	1	9.1	2	12.5		0.0	2	3.0		0.0	5	5.0
37.5－40.0		0.0		0.0		0.0	2	3.0		0.0	2	2.0
40.0－42.5		0.0		0.0		0.0	1	1.5		0.0	1	1.0
42.5－45.0		0.0	1	6.3		0.0		0.0		0.0	1	1.0
45.0－47.5		0.0	2	12.5	1	16.7	1	1.5		0.0	4	4.0
合　計	11	100.0	16	100.0	6	100.0	66	100.0	2	100.0	101	100.0
	試料数	11	試料数	16	試料数	6	試料数	66	試料数	2	試料数	101
	平　均	32.61	平　均	33.91	平　均	33.33	平　均	30.04	平　均	23.75	平　均	31.00
	標準偏差	3.08	標準偏差	6.52	標準偏差	6.36	標準偏差	4.69	標準偏差	0.00	標準偏差	5.31

C／アサリ・シオフキ計測値分布

殻長（mm）	アサリ	(左)	シオフキ	(左)
22.5－25.0	2	9.1		0.0
25.0－27.5	3	13.6		0.0
27.5－30.0	8	36.4	2	6.7
30.0－32.5	6	27.3	4	13.3
32.5－35.0	0	0.0	12	40.0
35.0－37.5	3	13.6	5	16.7
37.5－40.0		0.0	3	10.0
40.0－42.5		0.0	3	10.0
42.5－45.0		0.0	1	3.3
合　計	22	100.0	30	100.0
	試料数	22	試料数	30
	平　均	29.66	平　均	35.08
	標準偏差	3.42	標準偏差	3.64

第30表　006号跡貝サンプルの分析結果

第3章　ま　と　め

第1節　出土土器からみる鎌取縄文集落の様相

本遺跡より検出された縄文時代の遺構は、住居跡11軒、炉穴6群28基、土坑（中期）6基があげられる。この他に落とし穴状遺構6基、時期・性格不明土坑6基、遺物包含層を検出している。後者については各々の事実記載の項で記してきたように、集落に関する記述の対象から除外した。ここでは遺構出土土器の内容をもとに、以下にあるⅠ～Ⅲ期の便宜的な時期設定をし、鎌取縄文集落の変遷について、細別時期の確定している遺構を用いて概観してみたい。

1．鎌取Ⅰ期

遺跡西側の北西方向に延びる台地平坦部に、早期後半条痕文土器が検出される炉穴が6群28基分布している。この部分は馬の背状になっているが、平坦部の炉穴分布と重複する範囲と斜面部には、該期の遺物包含層が形成される。炉穴の用途から考えるとそれほど定住性は望めないが、一定地域内の複数の遺跡から、同時期のものがある程度まとまって検出される場合は、同一集団のそのテリトリー内での活発な行動が想定できる。未整理であるが、対岸に位置する有吉北貝塚でもほぼ同時期の炉穴群が検出されているので、一時期を設定した。

出土土器は条痕文系土器でも鵜ケ島台式的な様相を残しているが、茅山下層式に比定できるものである。口縁部には区画を作出する隆起線付きの1段の屈曲を有するが、前段階ほどその度合いは強くはない。むしろ形骸化したような低いものも存在している。遺構出土のものでは余り有文の土器がないが、条痕文そのもので装飾的に施文するものや、波状口縁の頂部が突起となるものが存在する。これに包含層出土のものを補足すると、Ⅰ文様帯に押引文が多用され、格子目状などの幾何学的なモチーフを描出するものが存在し、該期の有文土器のメルクマールになると思われる。

2．鎌取Ⅱ期

中期前半を本期とする。時期の確定する土坑2基が検出されるが、確実な居住の痕跡は認められない。土坑は阿玉台式直前期、阿玉台Ⅰb式期のものが1基ずつ検出され、いずれも台地中央部の平坦地に位置する。阿玉台式直前期の土坑はP6で、これは長径約1mで浅い皿状を呈し、深鉢が逆位に埋設されるものである。類例は前期後半期～中期前半期を中心に認められ、中には人骨にこのような出土状況を呈す土器が被覆される例がある。本例もそうした性格を有す可能性があり、墓としての用途も考えられるかもしれない。阿玉台Ⅰb式期の土坑はP4だが、特別な遺物出土状況を呈さなかったので、用途などは不明である。

3．鎌取Ⅲ期

中期後半を本期とする。居住域として把握されるように、最も活動の痕跡を残す時期である。住居跡の全てである11軒と土坑3基が、この時期に比定される。042を除いた他の10軒の住居跡

と土坑は全てが、台地中央部の平坦地に近接した位置関係で占地する。これらのうち、型式学的な根拠をもって以下の細別時期で説明できるものは、住居跡８軒と土坑１基である。

Ａ．鎌取Ⅲａ期

加曽利ＥⅡ式に該当するものを本期とする。住居跡では009・013A号跡の２軒が、土坑ではＰ52が該当する。台地中央部の平坦地は、ゆるやかな傾斜をもちながら北西に延び馬の背状を呈するが、遺構の分布は中央部の比較的至近な範囲に限られている。

土器の出土量は少ないが、いずれも時期決定の指標となったのは、典型的な加曽利ＥⅡ式のキャリパー形土器である。有吉北貝塚では、いわゆる「環状集落」が営まれ続けているが、本期はその終末期に相当する。

Ｂ．鎌取Ⅲｂ期

内容的には千葉市小中台（２）・新堀込・馬場遺跡や、佐原市多田遺跡で提示された加曽利ＥⅢ式古段階に相当する。時期の確定しているものは、004・005・006・007・040・042号の各住居跡跡が該当し、占地の特徴は事実記載で述べた。040号跡を除き、キャリパー形土器の終末期のものと、充填系・沈線系土器の伴出が認められるが、やはり地域性から充填系が卓越する傾向にある。しかし、その中でも004号跡は沈線系が卓越しており、キャリパー形との良好な共伴も認められる。加えて破片ながら充填系のモチーフを沈線系に置換したものも出土している。充填系は005・006・007・042号跡で良好な資料が提示されるが、２本隆起線のものが優勢である。主文様の渦巻文は胴部上半に配されるものは単位文化せず、胴部に２段に配されるものも互いが連繋することはない。ただ、042号跡例は胴部下半から貫入する縦長の渦巻文が、主文様として配される。主文様が胴部下半から貫入するモチーフは、横位連繋孤線文系（主として沈線系）の変形である入組状の横位連繋孤線文土器群の系列となるが、充填系との融合は加曽利ＥⅣ式古段階になってからと思われる。渦巻文はＥⅢ式新段階から球状文などに単位文化し、入組状のモチーフを受容している。渦巻のモチーフを保持しつつ入組状化するものは、あまり例を知らないものである。しかしながら他を含めて考えてみると、やはり加曽利ＥⅢ式古段階の安定した内容としてよい。040号跡では本期に特徴的な横位連繋孤線文系、充填系のいずれも出土しなかったが、①出土したキャリパー形の型式学的な衰退が認められ、②条線文（Ⅰ文様帯）＋縄文（Ⅱ文様帯）という、Ⅲ式に見られる他型式との融合による影響も認められる点から本期に含めた。

Ⅲｂ期は鎌取縄文集落の最盛期であったといえるとともに、終焉ともなった時期である。対岸の有吉北貝塚では中峠式期～加曽利ＥⅡ式期まで継続したいわゆる「環状集落」が終焉し、新たに同一台地の別区域に鎌取集落と同一時期で、ほぼ同規模の小集落を形成している。拠点的集落を維持した集団が、分裂せざるをえなかった社会的、環境的要因があったのであろうか。この問題は周辺遺跡群の様相が明らかにされた時点で、論じる必要のある課題である。

第2節　製鉄関連遺物について

1．遺物の出土状態

016号住居跡から出土した転用羽口2点、鉄床石、椀形滓、小鉄滓の出土層位は床面かピット内であった。しかし、発掘調査の時点では、小鍛冶に関連した遺物群との認識がなかったので、残念ながら鍛造剝片の検出については注意を払わなかった。従ってこの遺構に鍛冶炉が伴っていたかどうかは不明である。しかし、これらの遺物が遺構に伴うものであれ、住居廃絶後に持ち込まれたものであれ、これらを五世紀における当地域の初期製鉄に関連する遺物の良好なセットとして扱うことには異存はないものと思われる。

2．鍛冶炉の存在について

製鉄関連遺物のセットは周辺に鍛冶遺構が存在する可能性を強く示唆している。

住居跡の埋土は土層断面図を見る限り自然堆積と考えられる。

羽口に転用された高坏脚部と016住居跡から出土した他の土器との間には時間差が認められるほどの隔絶はない。

羽口等が発見された016住居跡は調査時の所見から住居跡として扱ったが草刈遺跡などの類例を見る限りでは鍛冶炉には特別の構築材などは見当たらず、炉だけを検討したのでは、鍛冶炉か普通の地床炉かを判断するのはかなり難しいと言える。

現在、鍛造剝片は残っていないが、発掘現場で存在に気付かなかった可能性も充分にあり、初めから遺物群に伴なっていないのか、採集ミスによって鍛造剝片だけが回収されなかったものか、今ある記録だけでは判断出来ない。

住居の形態は6.1m×5.1mの長方形、面積は30.5m²である。鎌取遺跡における同時期の住居跡の大きさの平均は長軸5.6m、短軸5.4m、面積は33.7m²であるから、数字的にみると標準から大きく外れてはいないように見える。しかし長方形を呈する平面形や6本ある柱穴など、決して鎌取遺跡の平均的な遺構ではないと思える特徴も指摘することができる。

以上の所見はみな「状況証拠」にすぎないが、016住居跡に鍛冶遺構が存在した可能性はゼロではないと思われる。

3．周辺各遺跡との比較

遺跡名		炉と発見された遺物（×は無し、？は不明、空白は未確認）
千葉市	鎌取	？・鉄床石・羽口（　×　・転用）・鉄滓（椀形滓・　？　）
市原市	草刈C区	・　×　・羽口（専用？・　）・鉄滓（椀形滓・　）
市原市	草刈K区	炉・　×　・羽口（　×　・転用）・鉄滓（椀形滓・鍛造剝片）
市原市	潤井戸西山	？・鉄床石・　×　（　×　・　×　）・鉄滓（椀形滓・　×　）
四街道市	中山	？・鉄床石・羽口（専　用・転用）・鉄滓（椀形滓・鍛造剝片）
佐倉市	上座矢橋	炉・　×　・羽口（専　用・転用）・鉄滓（椀形滓・鍛造剝片）

鉄床石石材の共通性　3遺跡から出土している鉄床石は石材が石英質安山岩で質もきわめて似ている。おそらく共通の流通ルートを使用していたものと推測され、鍛冶技術を保持していた集団との関係も注目される。

セットからの欠落　小鍛冶に関連する遺構・遺物を整理すると炉、炉壁、羽口、工具、原材料、燃料、製品、滓に分けることができるが、各遺跡から出土する遺物には統一した傾向というものが見られず、遺跡によって差が大きい。技術者集団が小鍛冶に関連する遺構・遺物をどの段階で、どのように廃棄したのか興味ある問題である。

4．軽石石材の共通性と相違性

鎌取遺跡から出土したいわゆる「軽石」はスコリアであることが判明した。このスコリアはかなり特徴的で容易に識別することが可能である。類例は四街道市中山遺跡、千葉市簀輪遺跡、市原市草刈遺跡で確認したが3つとも鎌取遺跡と同時期の遺跡である。さらに中山遺跡と草刈遺跡は前述のように鍛冶遺構をともなっている。製鉄遺跡に伴って頻繁に軽石が出土することは一般によく知られているがこのスコリアも製鉄に関連するものであろうか。スコリアの用途も含めて類例についてさらに検討を加えたい。

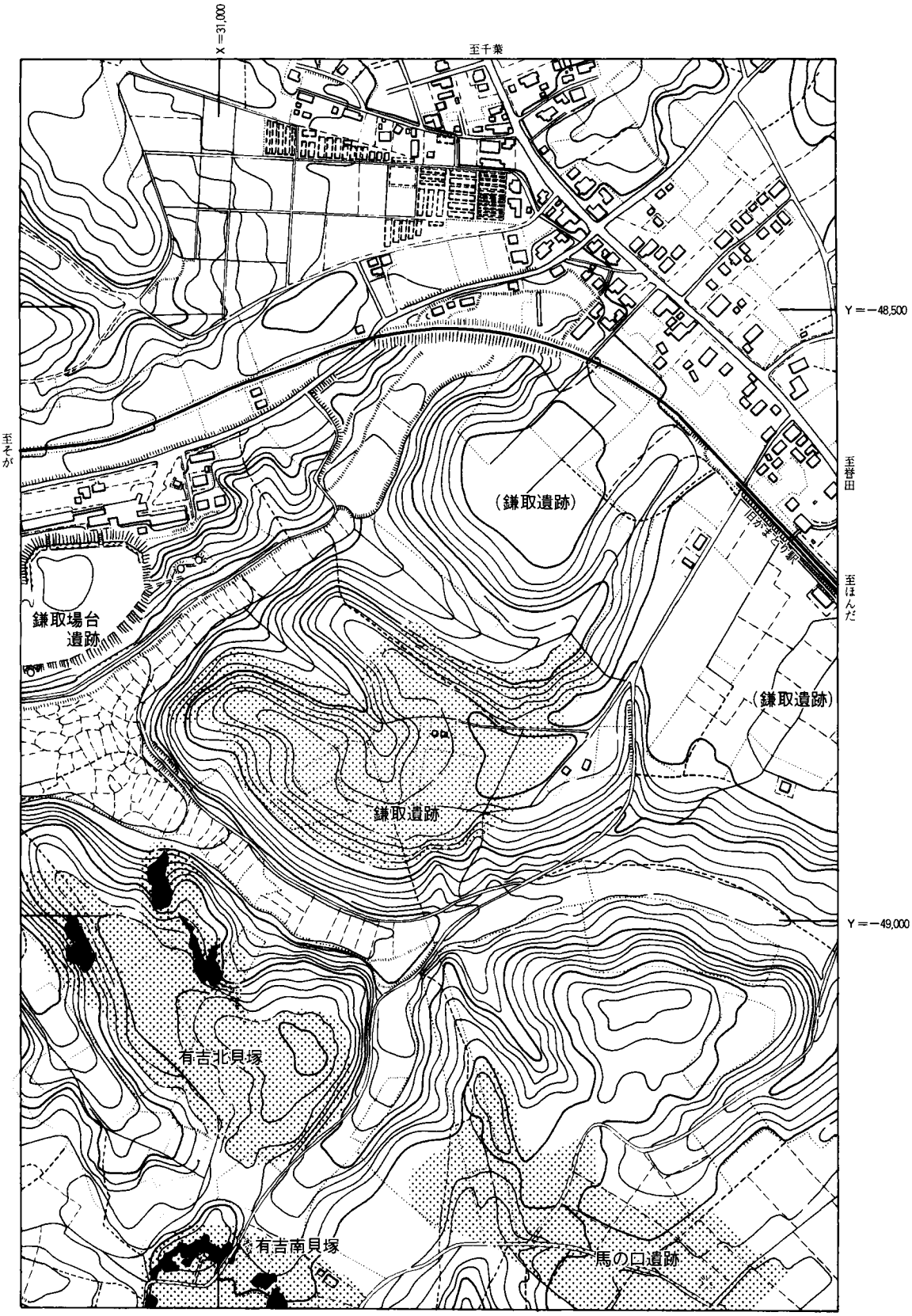
第3節　古墳時代住居間接合の土器について

028、030、055の各住居跡から出土した土器片が一個体の壺に復元された。

埋土　発掘時の土層断面図を見る限り、3軒の住居跡とも自然に埋没したと考えられるような堆積で、比較的単純な様相を示している。観察によれば堆積していたのは黒褐色土や暗褐色土にローム粒や小さいロームブロックを含んだ土が主体となっており、028号住居跡や030号住居跡ではさらに焼土粒や炭化物粒の混入も確認された。所見によれば以上のように、これら3軒の住居跡に堆積していた土についてはほとんど差が認められない。

割れ方と転用の可能性　欠損部分はあるものの破片は明確に住居跡ごとに分かれた。このことは各住居跡に持ち込まれた段階ではある程度器形を保ったままであったと考えられる。以上の事からこの土器は二次的に利用（転用）されたのではないかと想像される。実際に転用されたか否かの決め手になるのは土器の出土位置と割れ口の状態だが残念ながら今回の例は確実性に欠けている。しかしながら古墳時代前期には壺の上半を器台に、下半を鉢に再利用する例がみられることから、この土器についても同様の転用を想定することができる。

写真図版



鎌取遺跡周辺の地形（１：5,000）

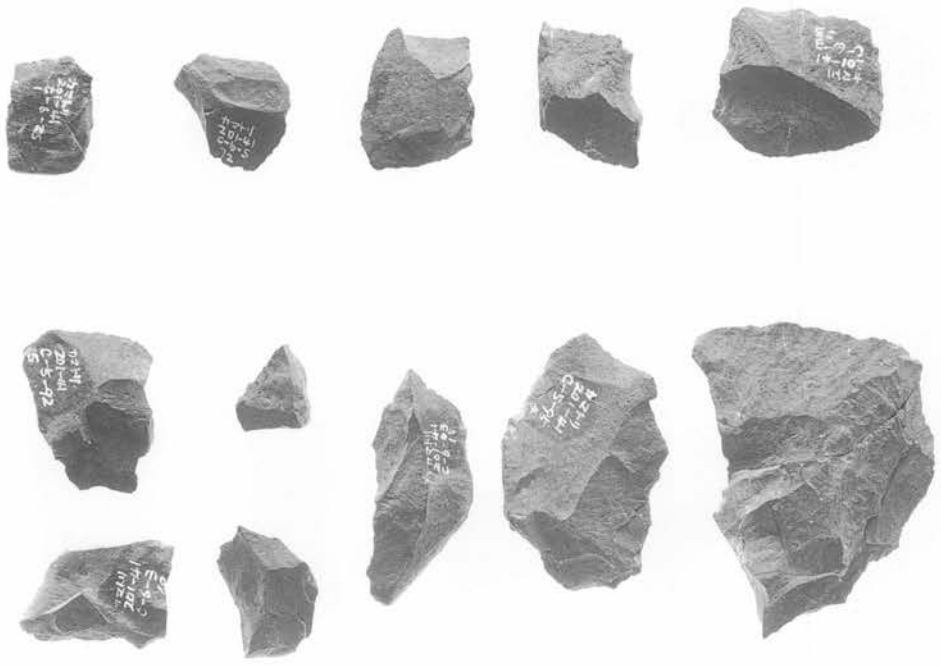
調査遺跡とその周辺

図 版 2

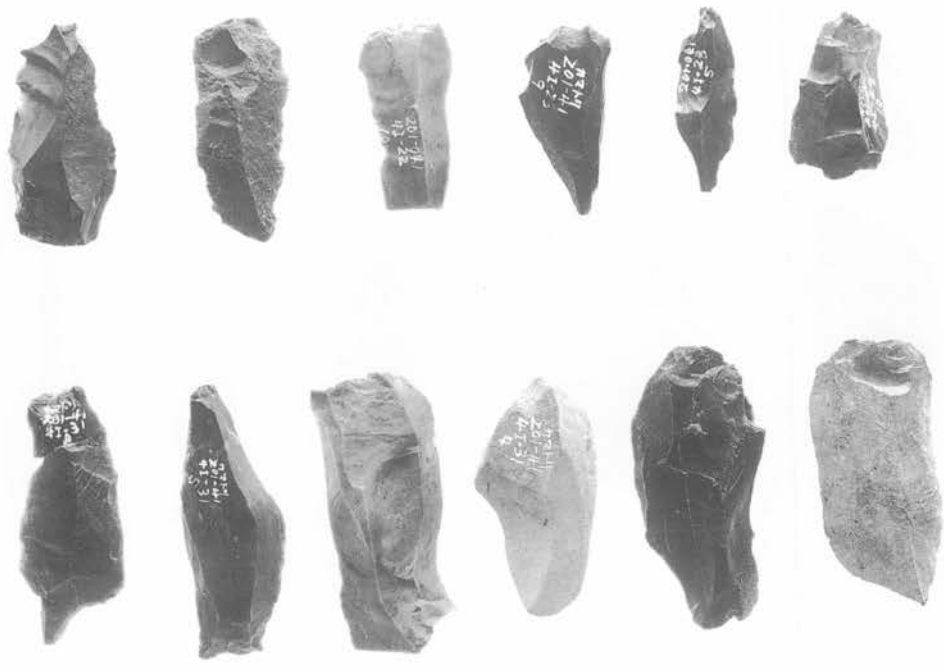
1　調査前全景

2　旧石器第１ブロック
検出状況

3　旧石器第２・３ブロック
検出状況



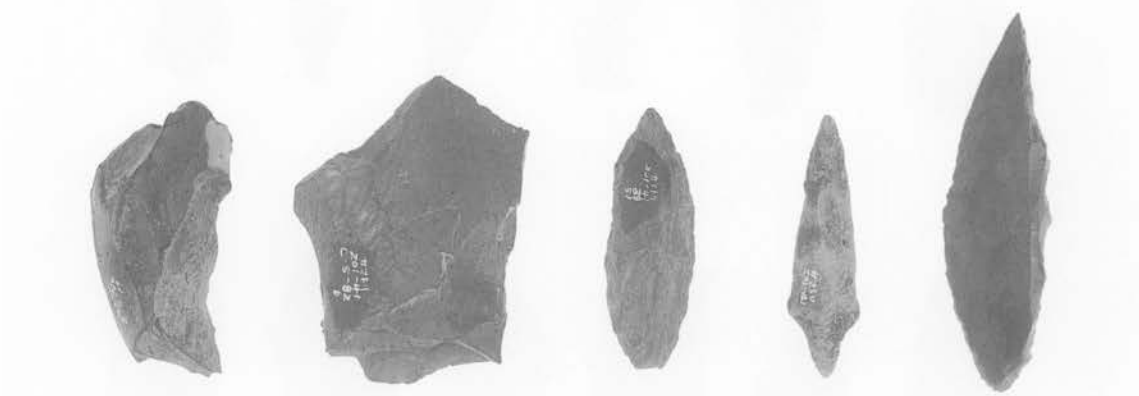
1　第1ブロック出土石器



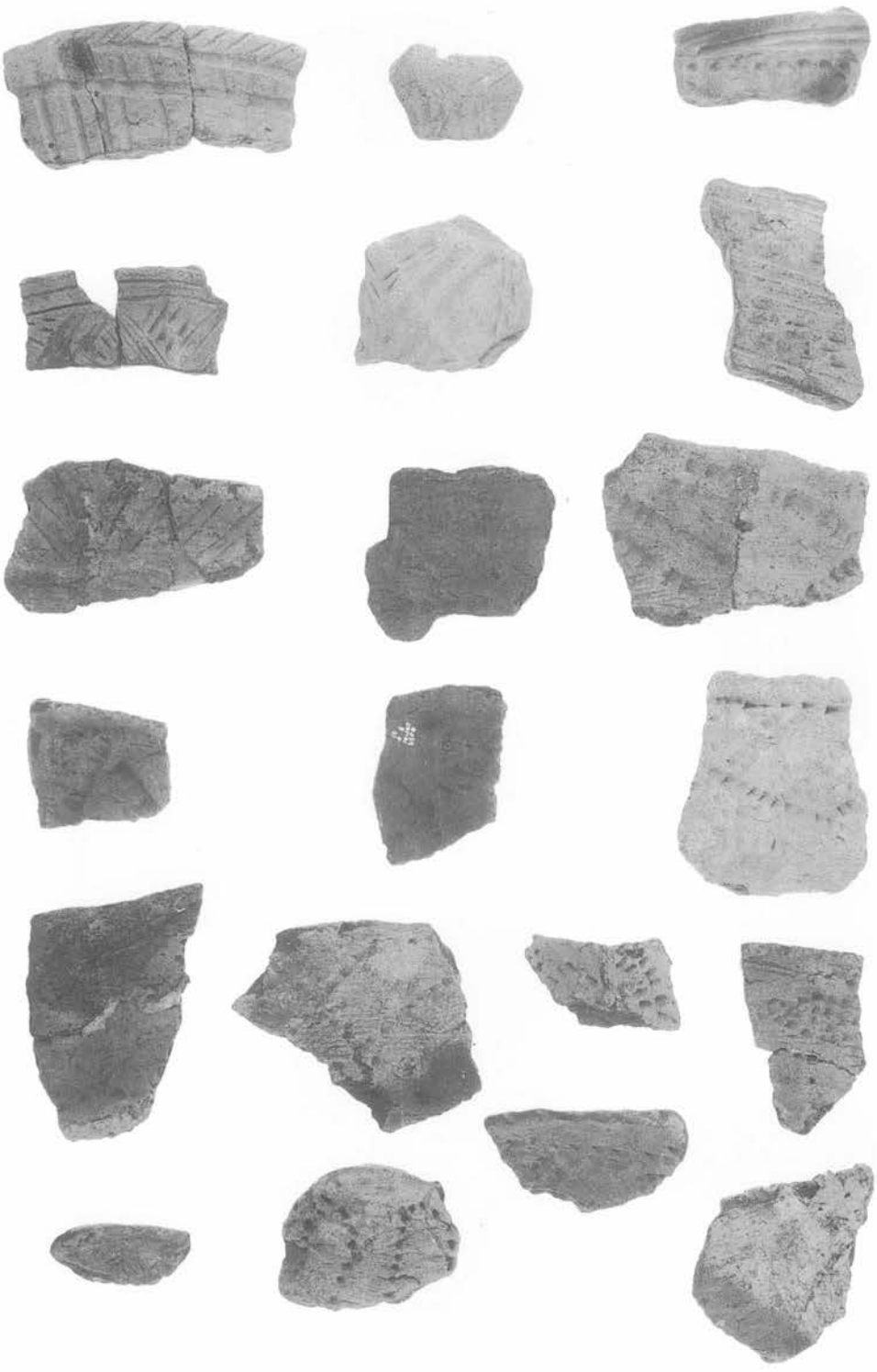
2　第2ブロック出土石器

図 版 4

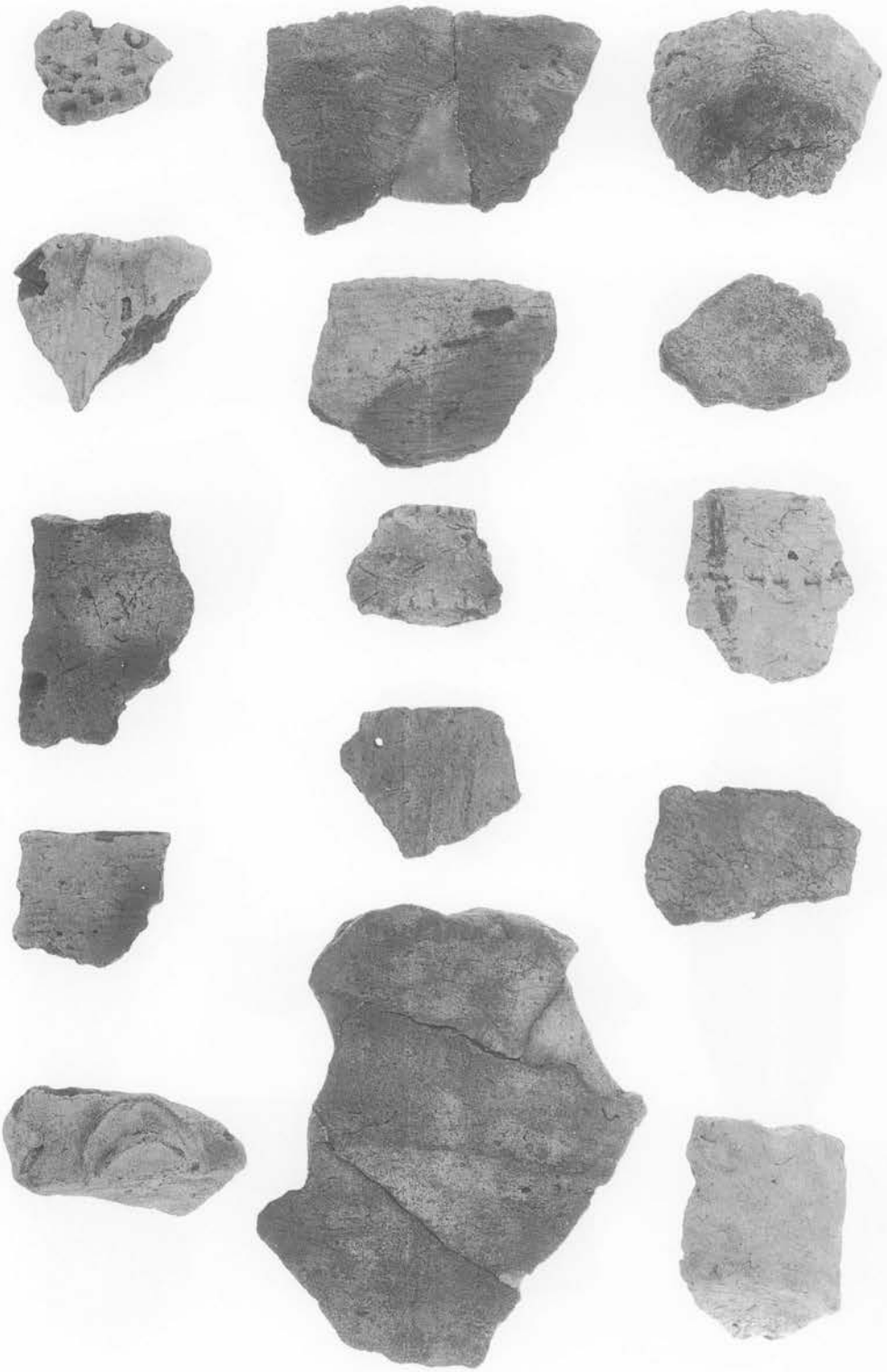
1　第３ブロック出土石器



2　単独出土石器

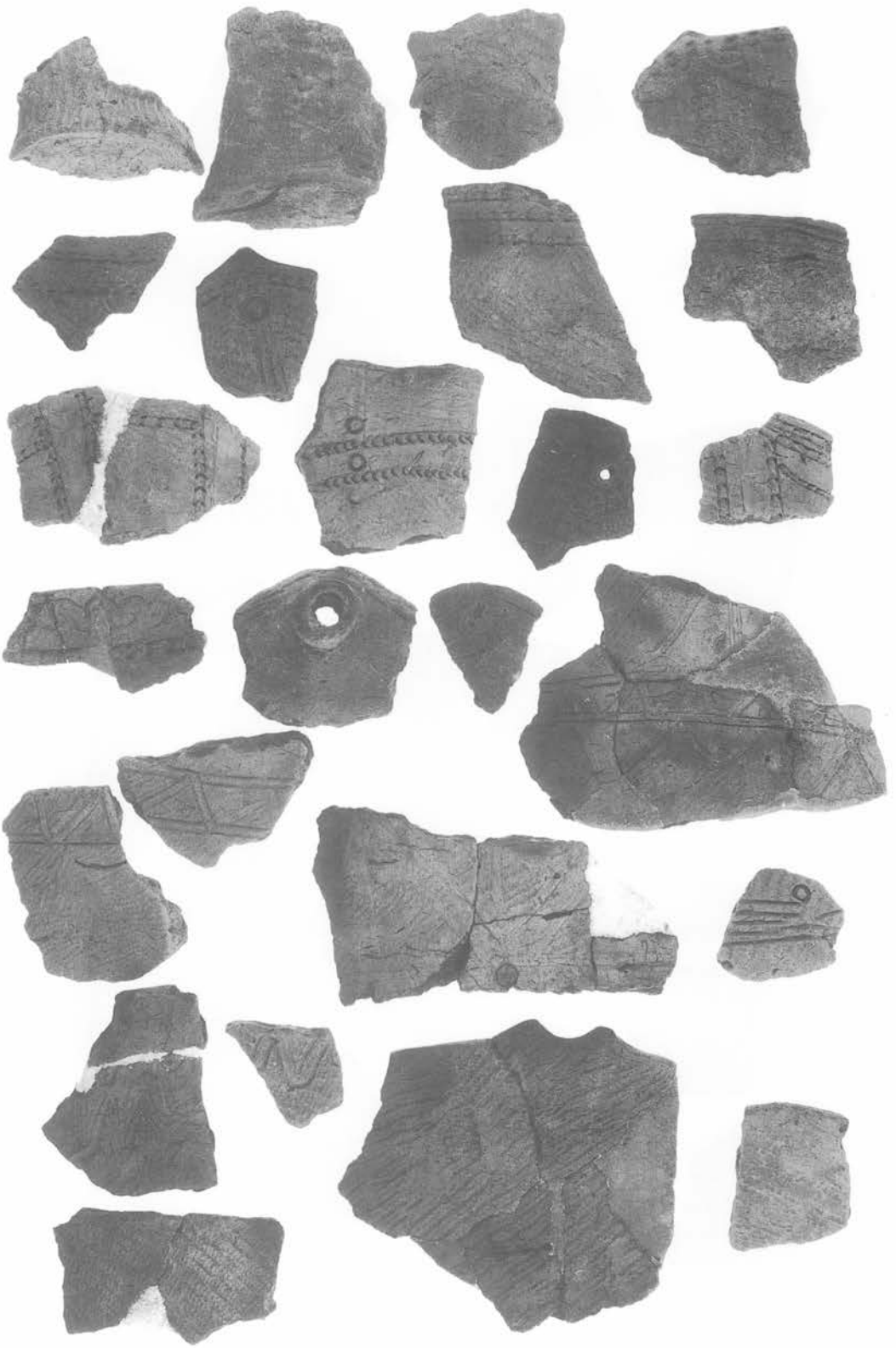


1～20
グリッド出土土器 (1)

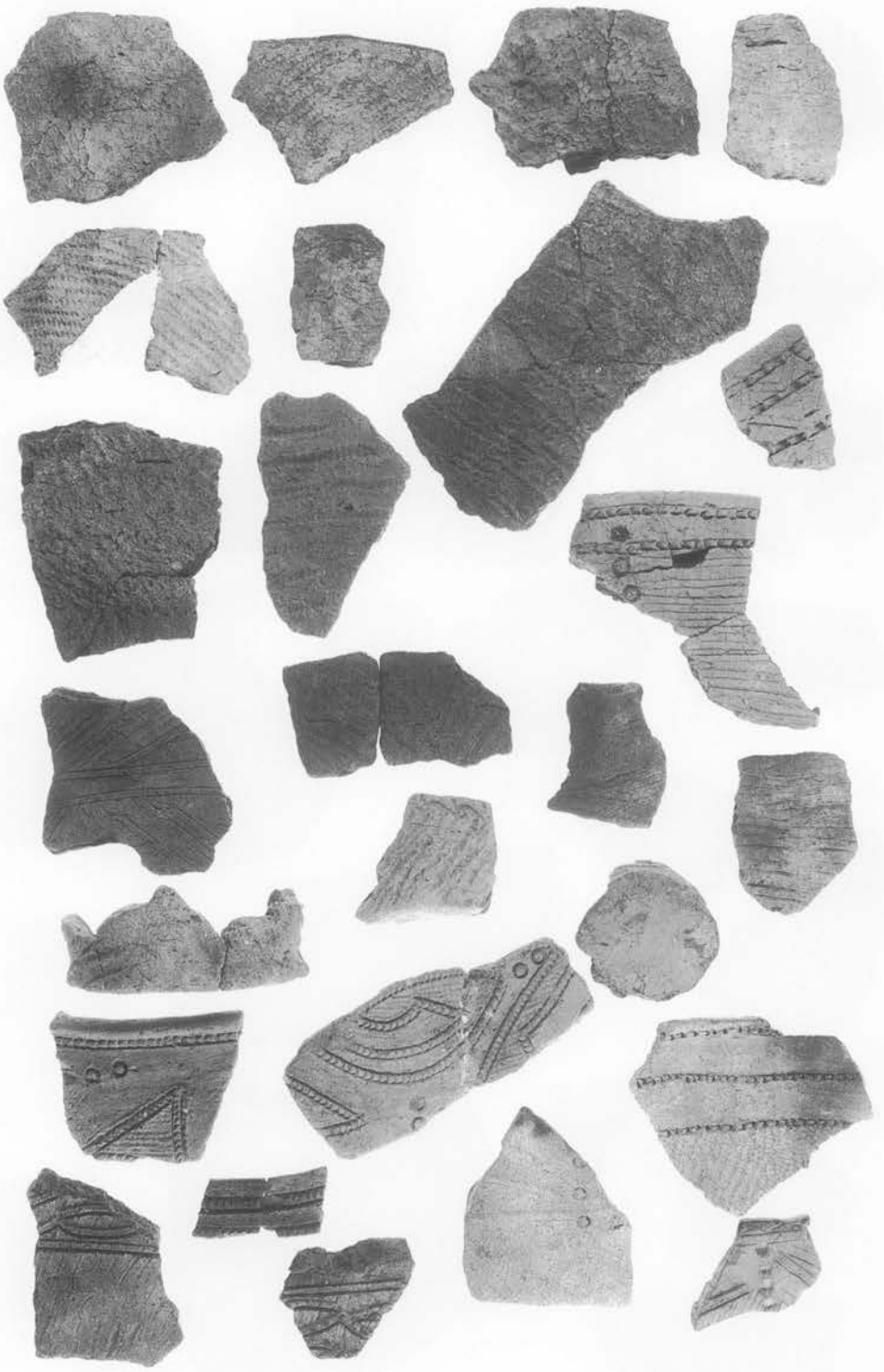


21～35

グリッド出土土器 (2)

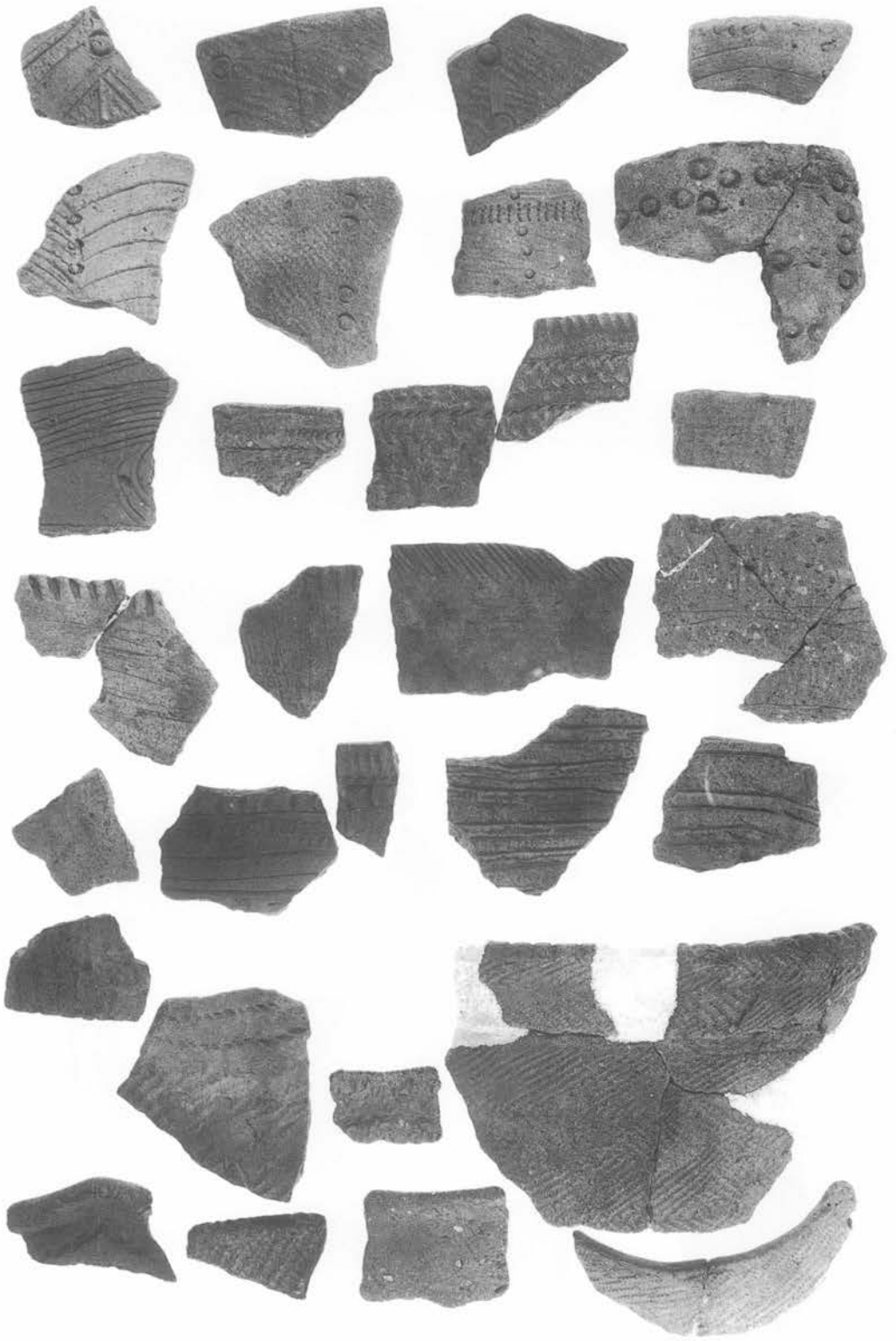


36～59
グリッド出土土器 (3)

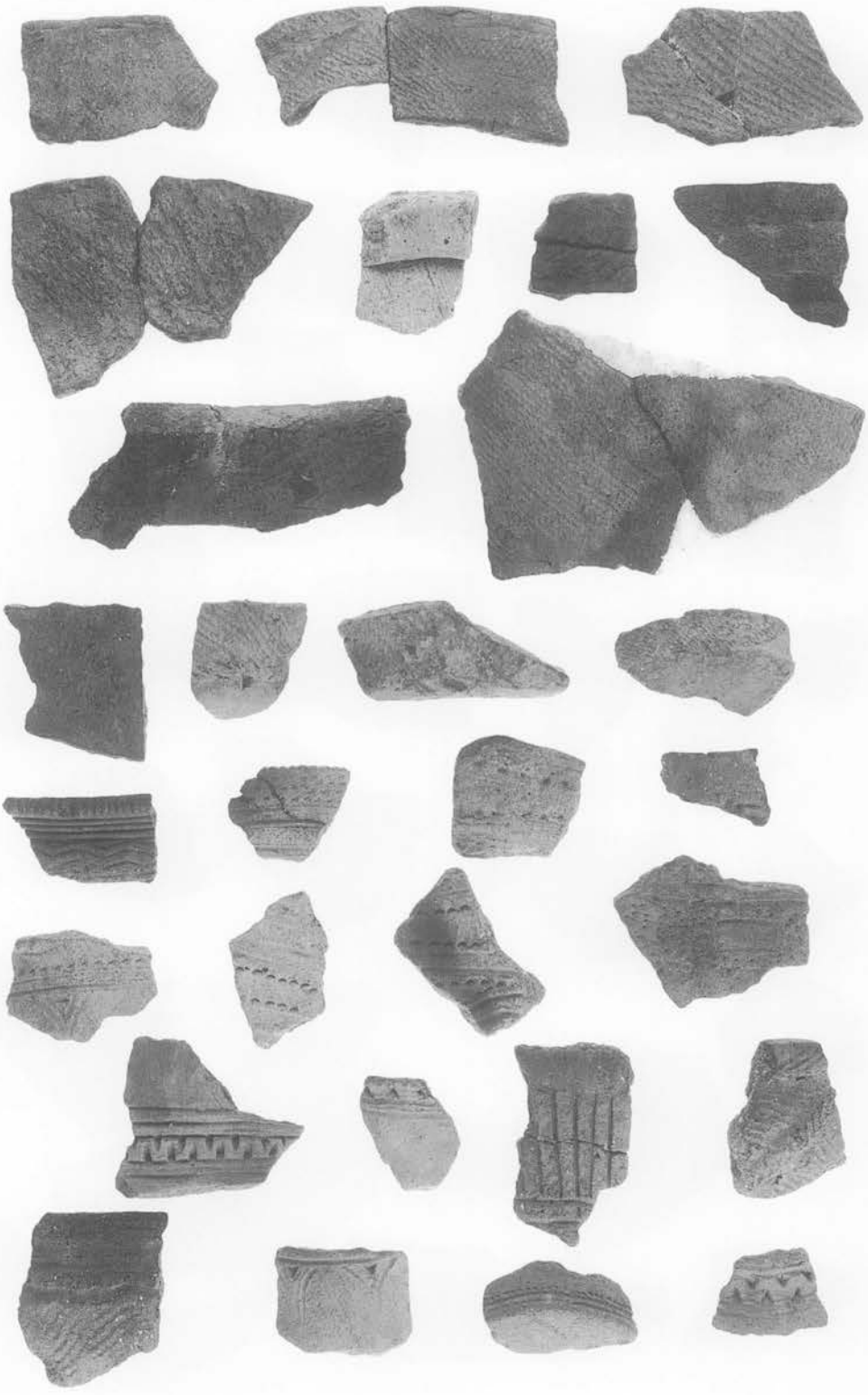


60～85

グリッド出土土器 (4)

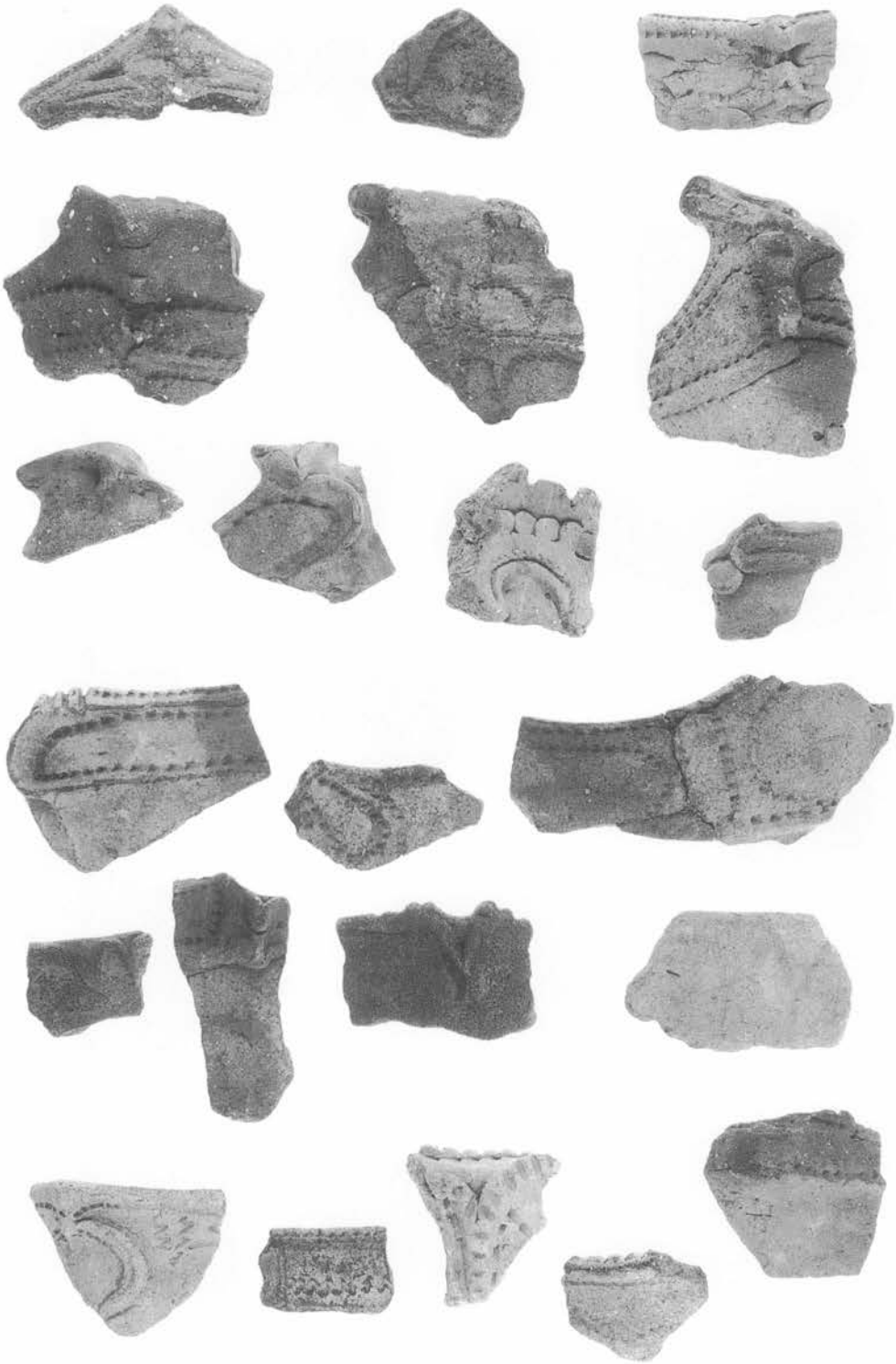


86～113
グリッド出土土器 (5)



114～142

グリッド出土土器 (6)



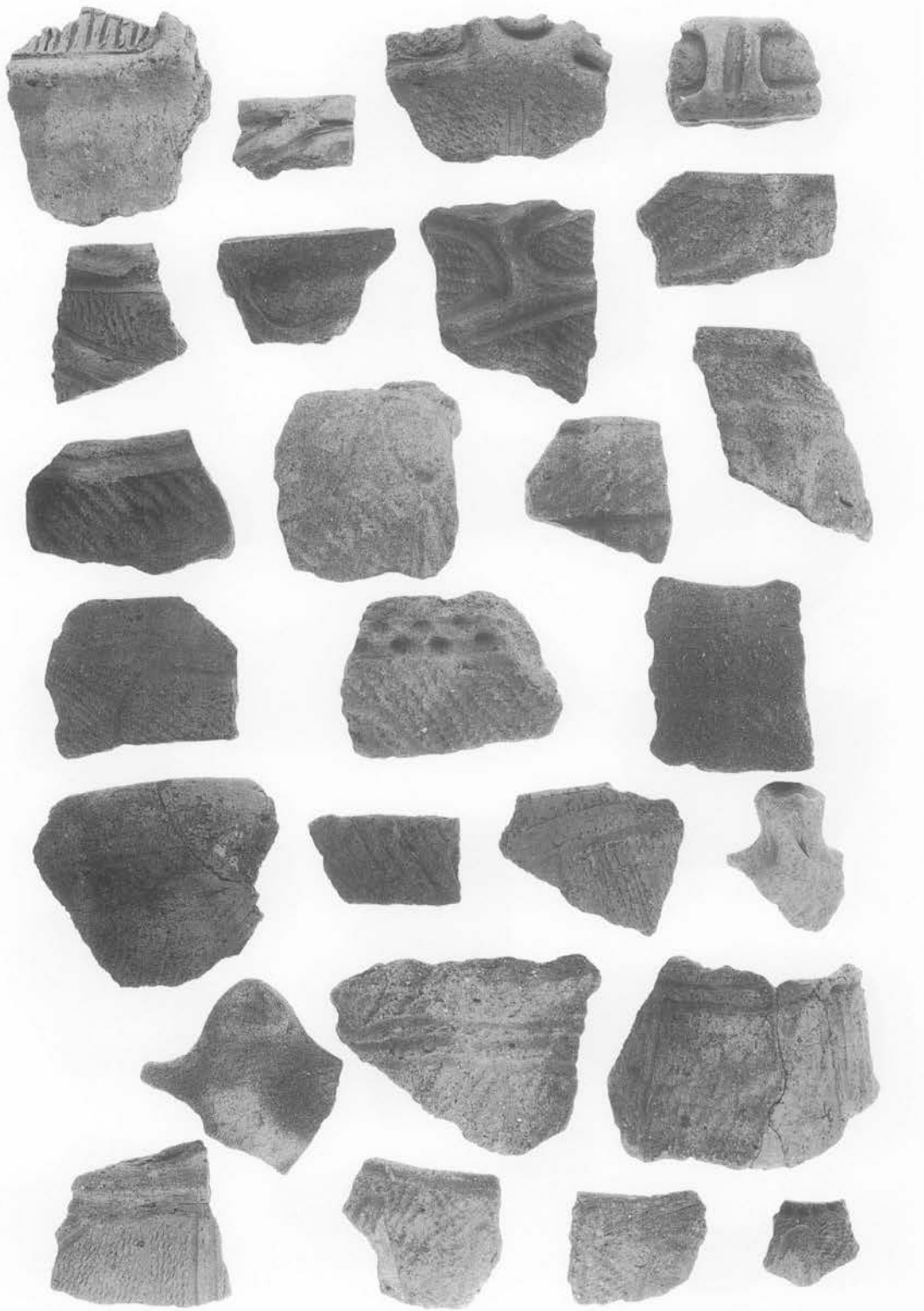
143～164
グリッド出土土器（7）

165～182

グリッド出土土器 (8)

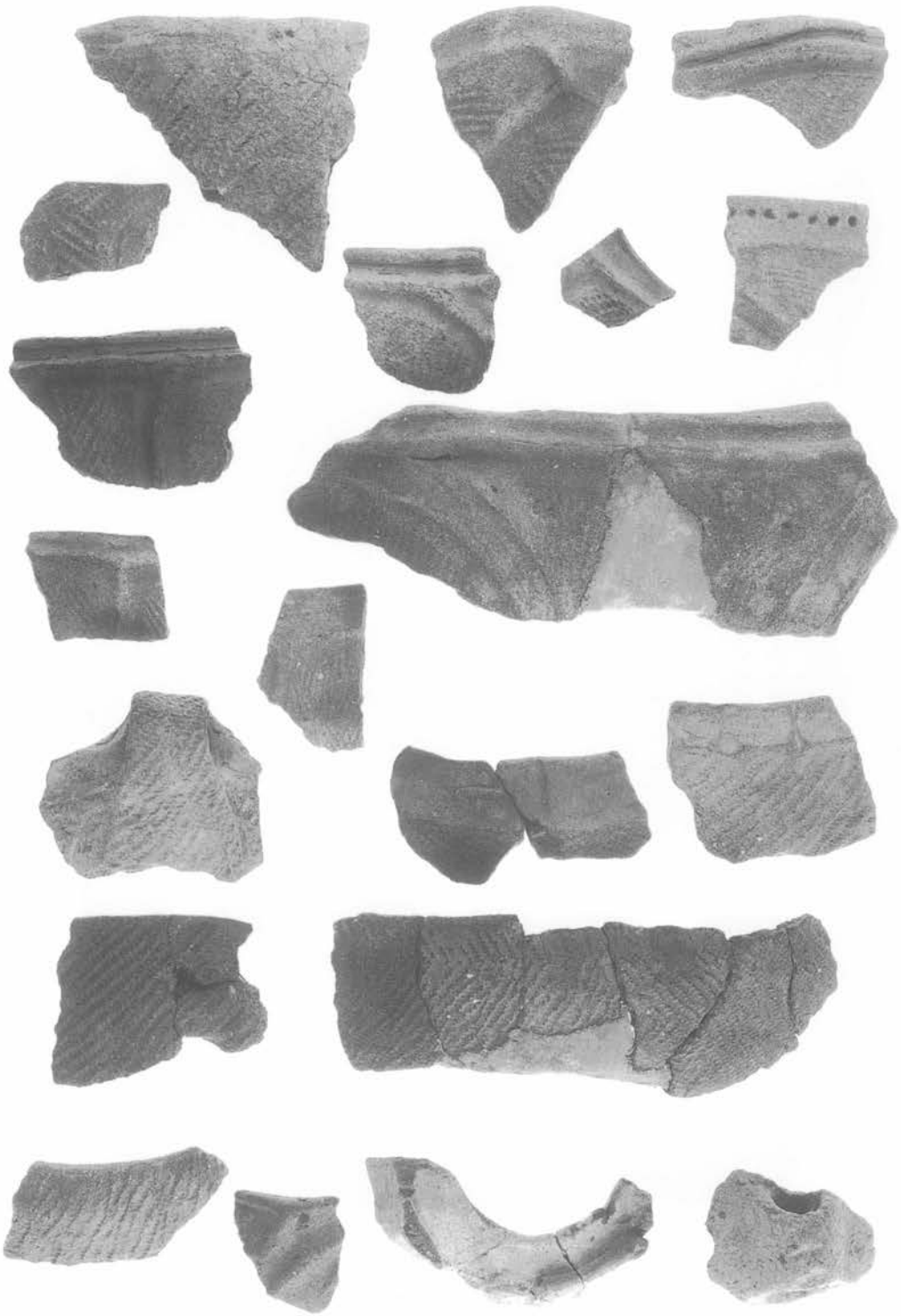
183～204
グリッド出土土器 (9)

図 版 14

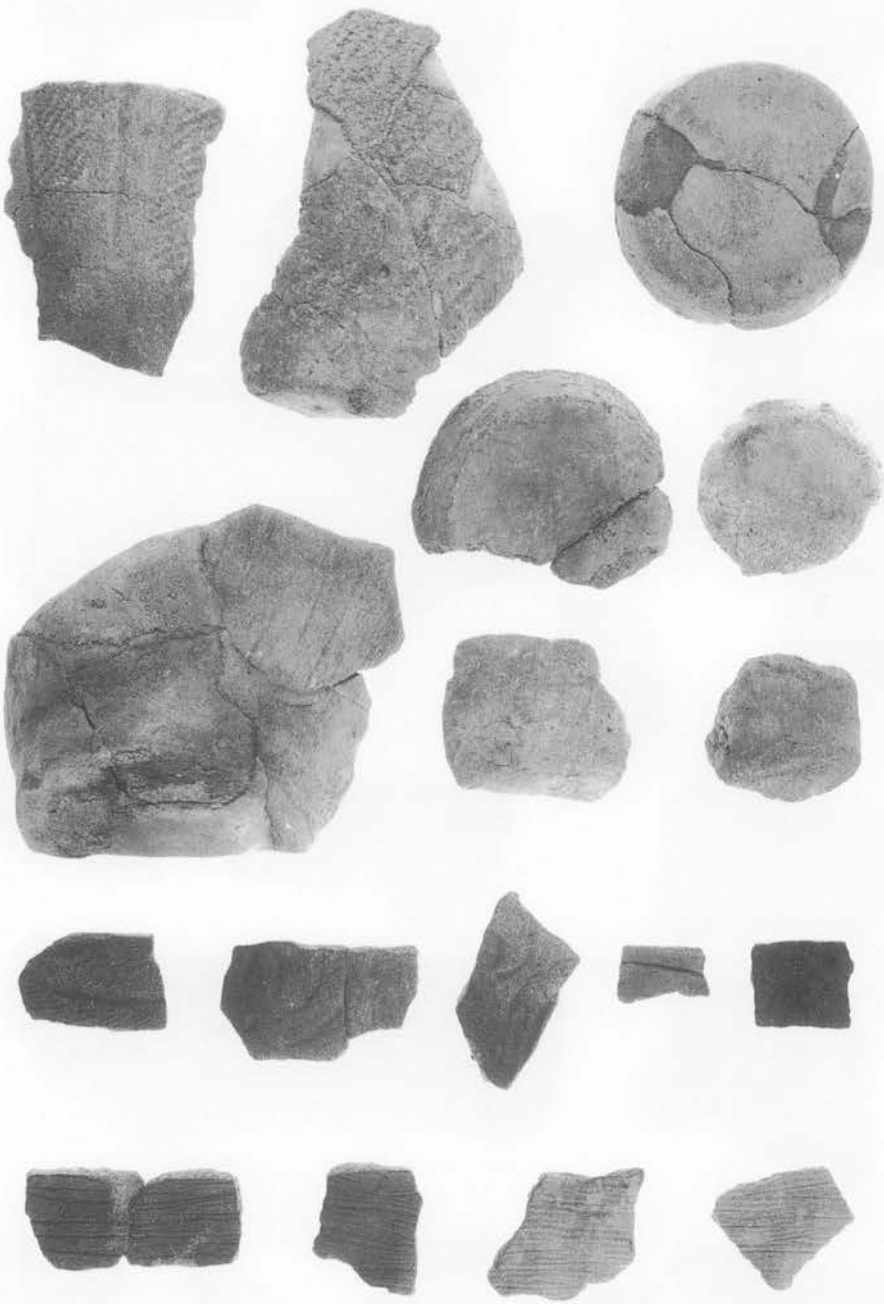


205～230

グリッド出土土器 (10)



231～250
グリッド出土土器 (11)



グリッド出土土器 (12)

251～267

第40図－1

第40図－2

第40図－3

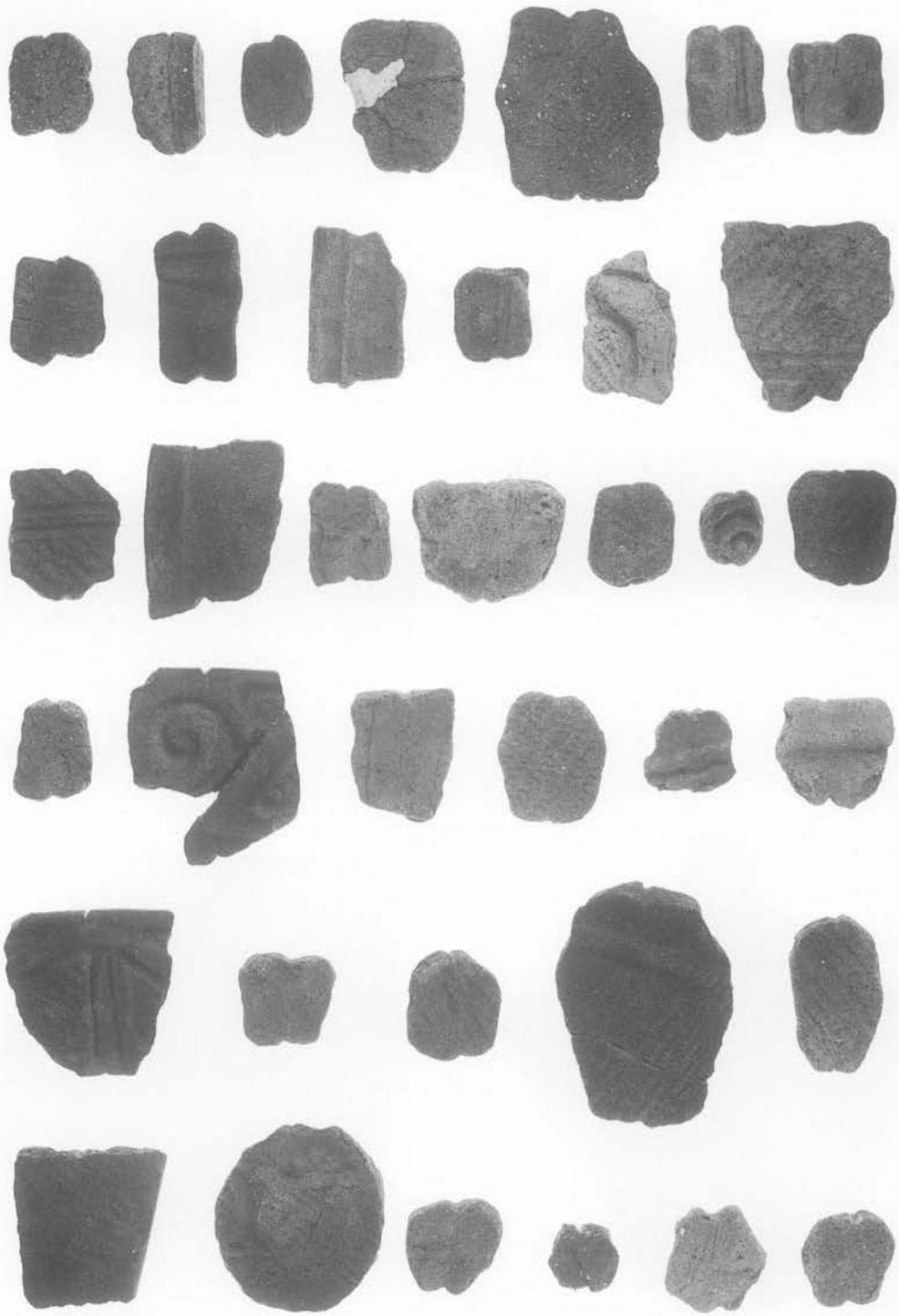
第40図－4

第40図－5

第40図－6

グリッド出土土器 (13)

図 版 18

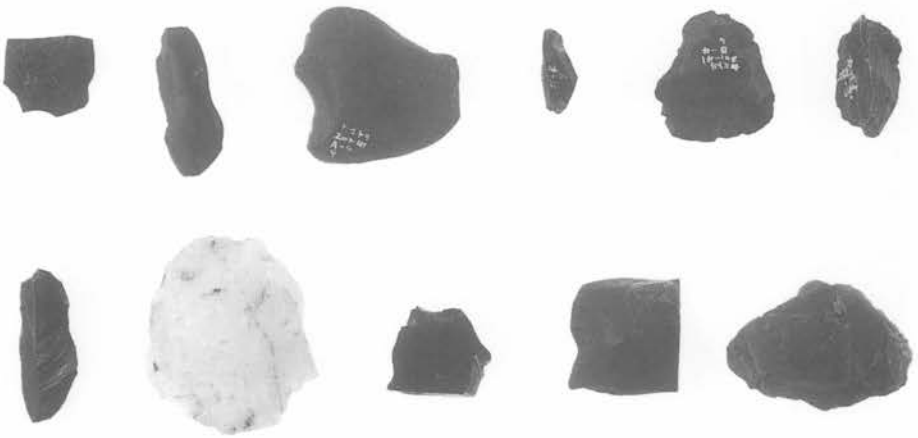


土器片錘

1　土製品・石製品

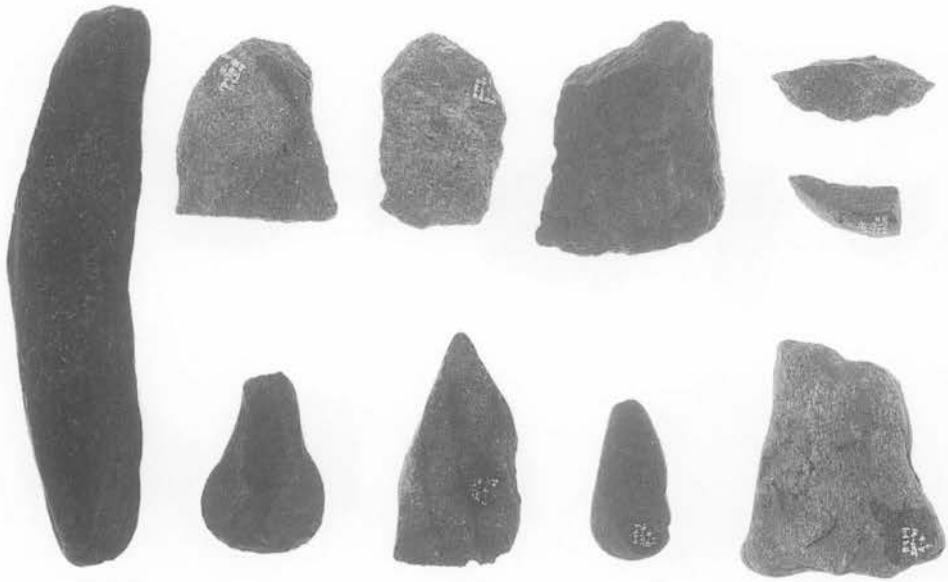
2　縄文時代石器 (12)

縄文時代石器 (1)・(2)



1　縄文時代石器 (2)・(3)

2　縄文時代石器 (4)・(5)・(6)



1　縄文時代石器 (7)・(8)

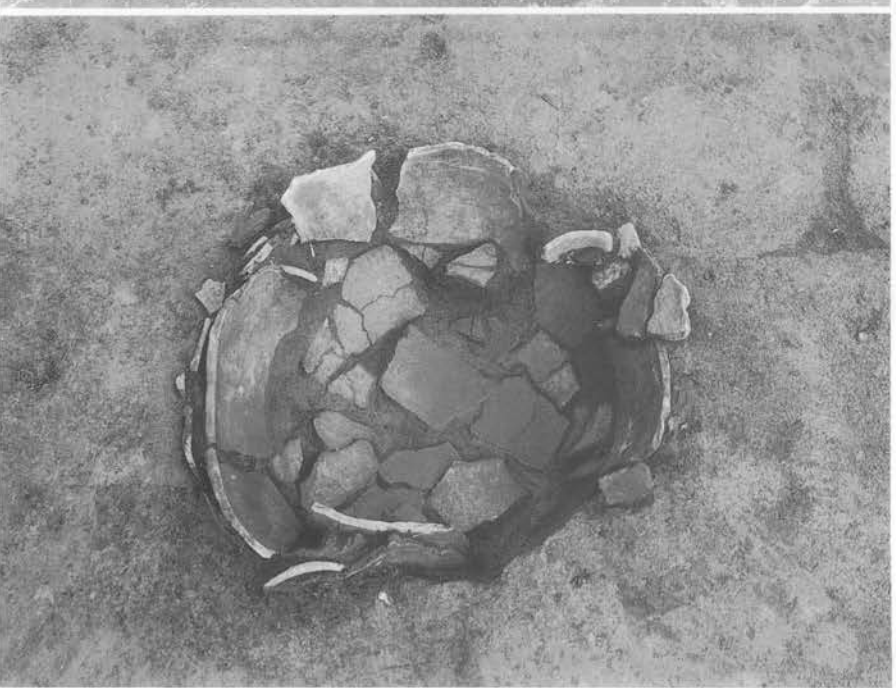
2　縄文時代石器 (9)

1　縄文時代石器 (9)・(10)

2　縄文時代石器 (10)・(11)

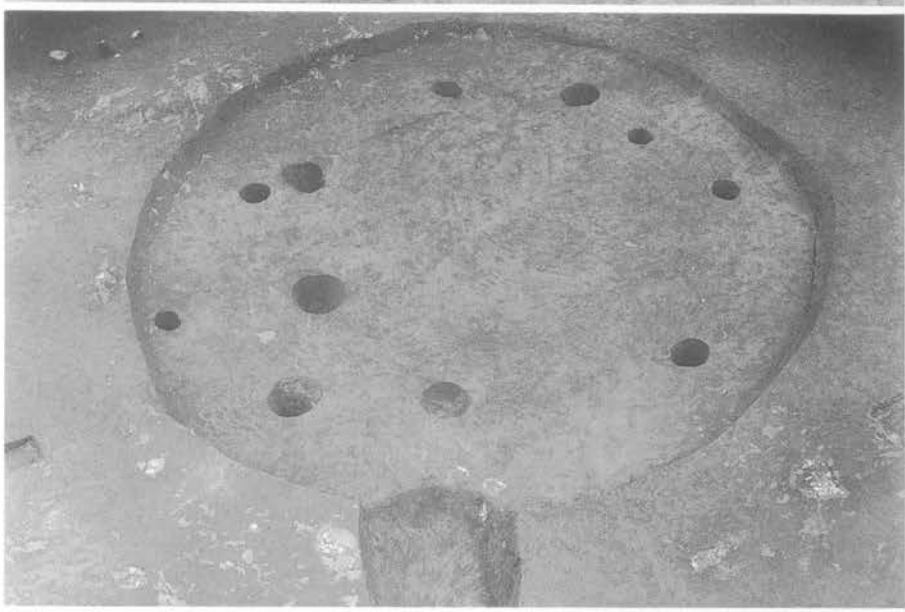
1　004号跡

2　004号跡遺物出土状況

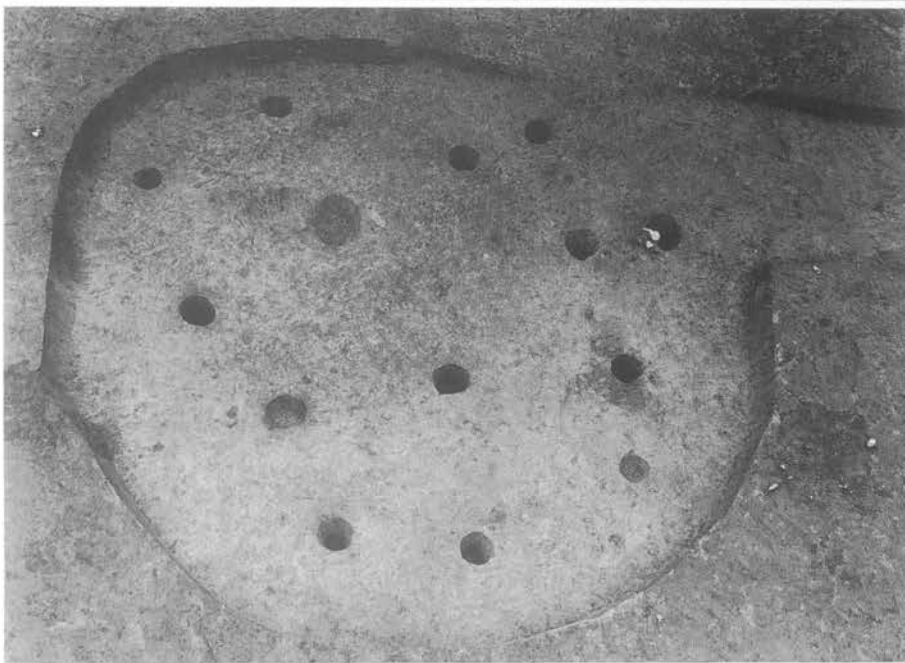


3　004号跡埋甕炉

1　004号跡埋甕炉土層断面



2　005号跡

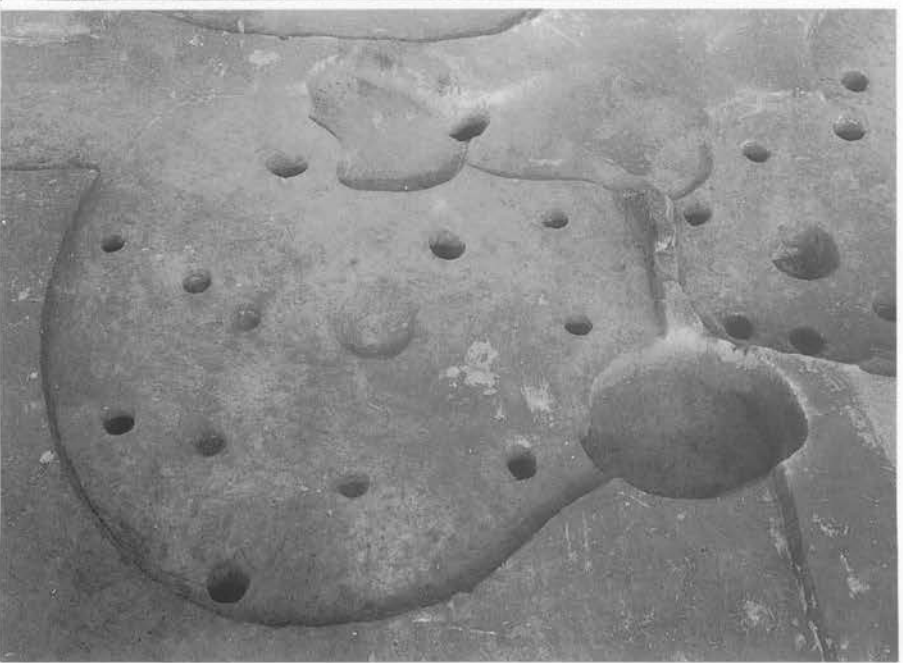


3　006号跡

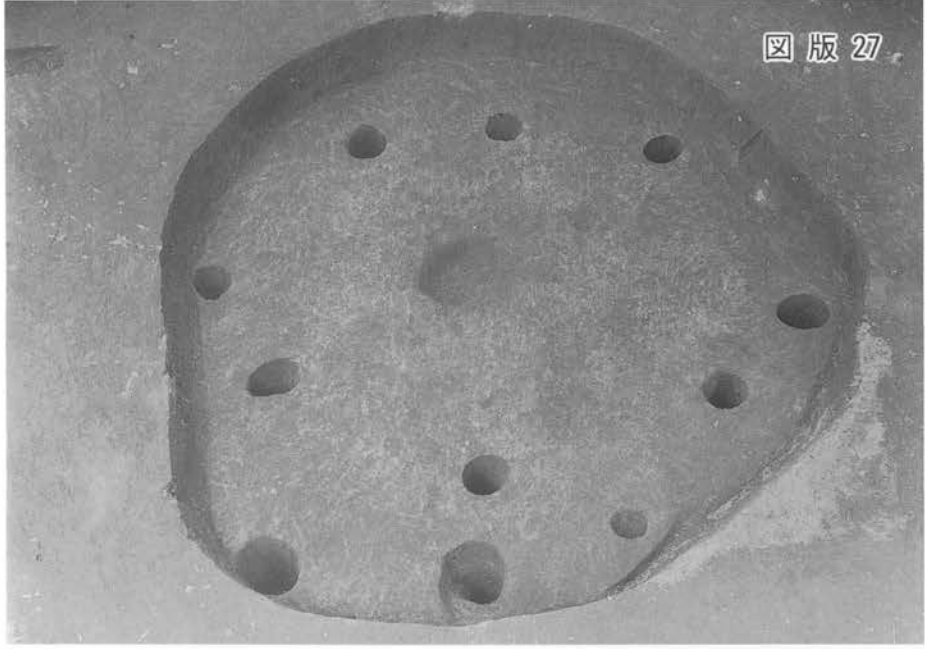
図版 26

1　007号・012号跡，52号土坑

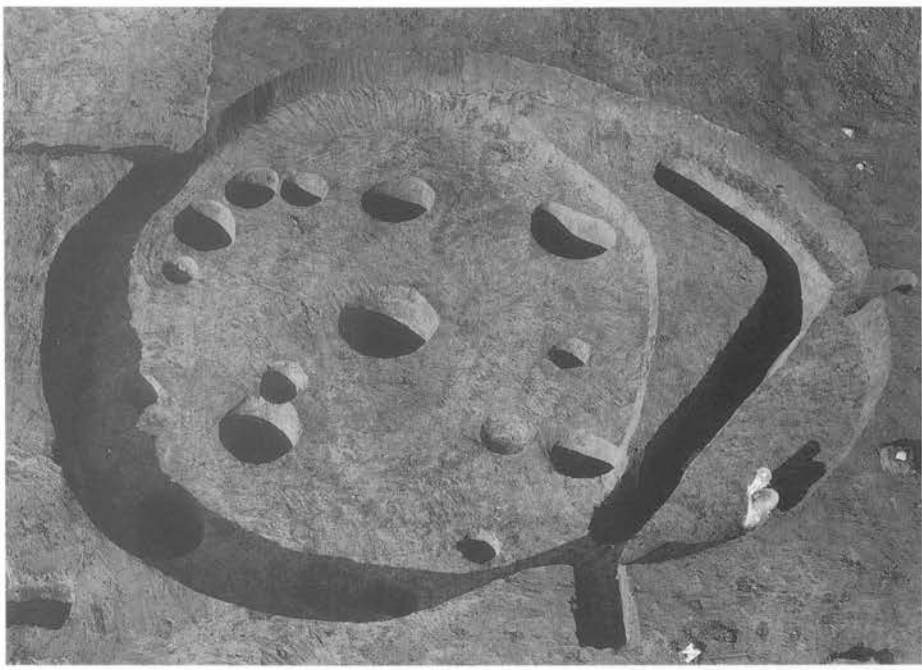
2　007号跡遺物出土状況



3　008号跡，20・22号土坑



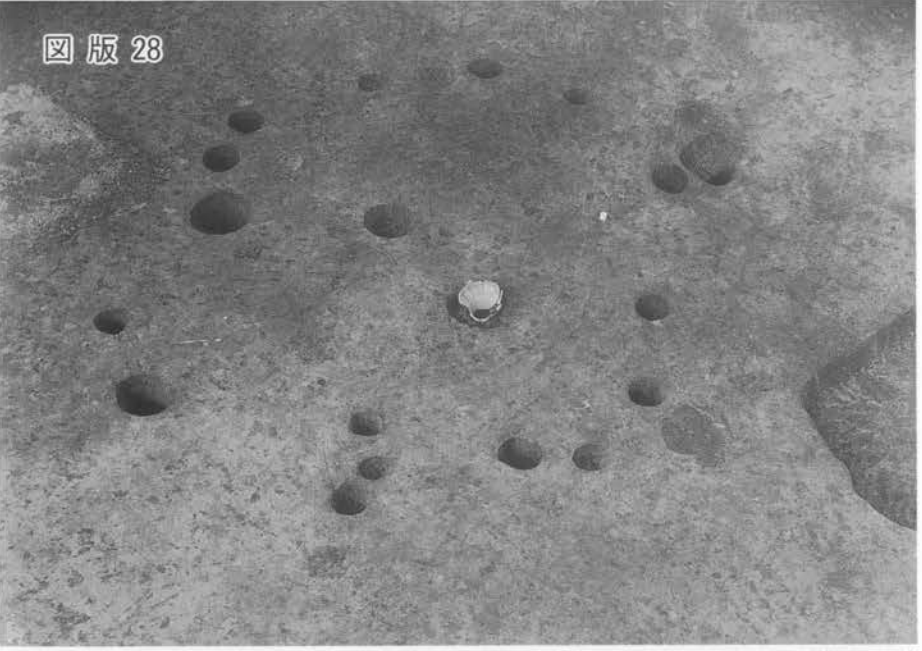
1　009号跡



2　013A号跡

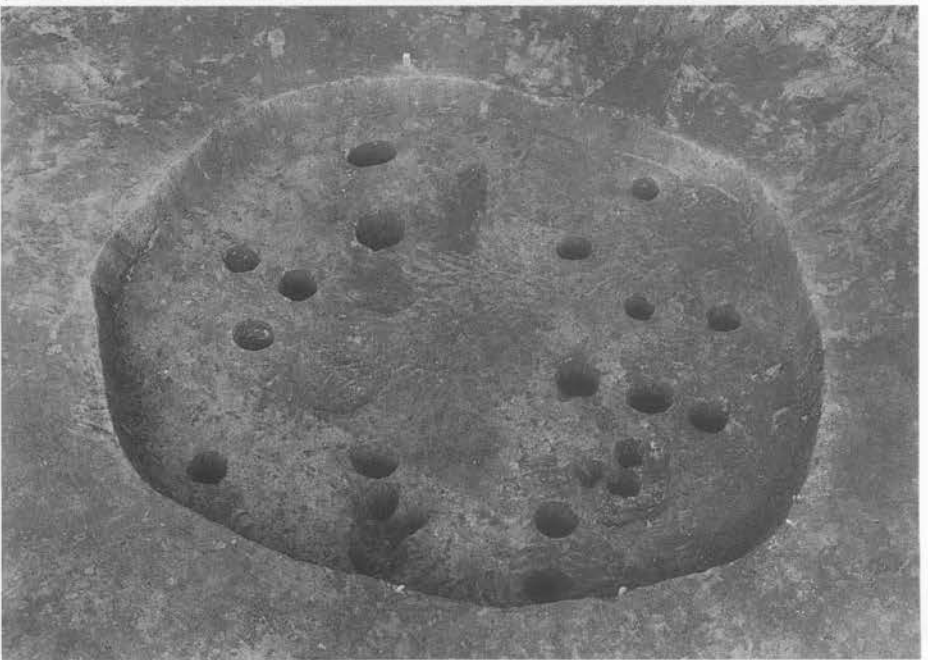
3　013A号跡埋甕

図版 28



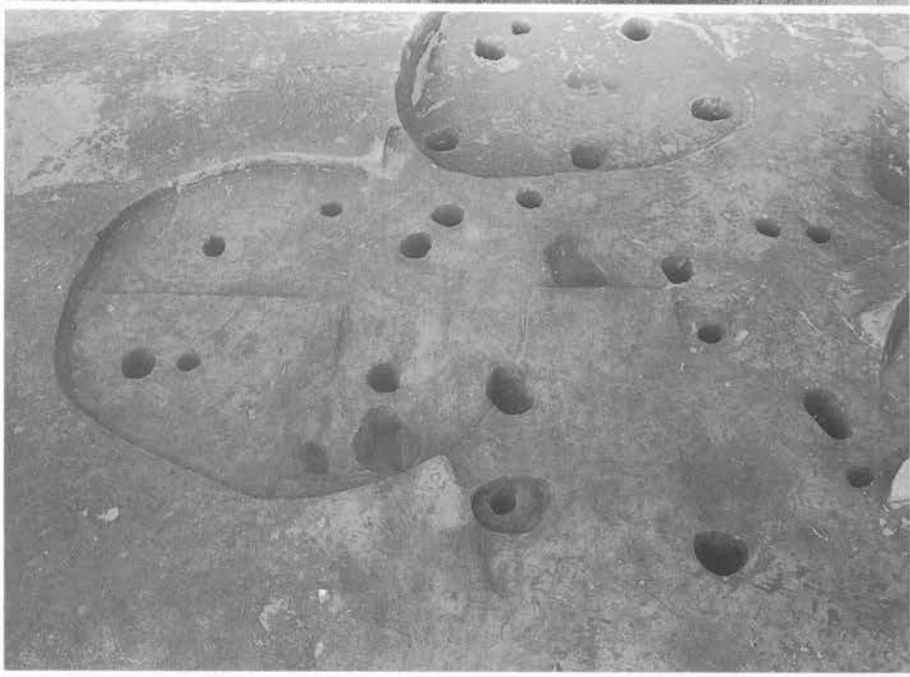
1　040号跡

2　040号跡埋甕炉



3　042号跡

1　001号跡



2　002・003・041号跡

3　014号跡

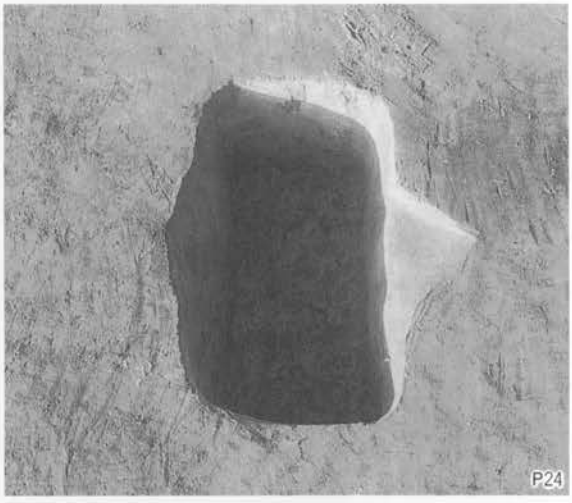
図版 30

P06

P28

1 中期土坑

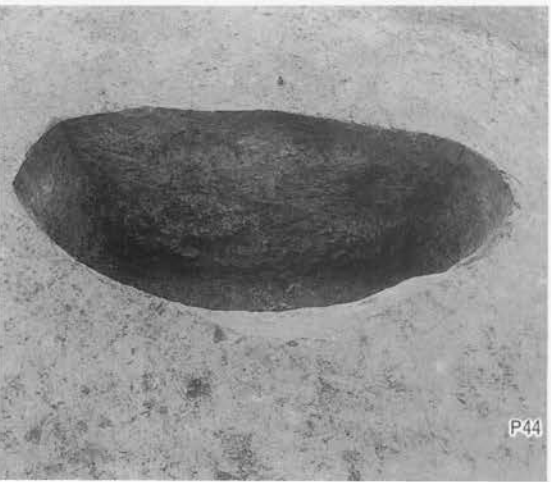
P21


P24

P36

P38

2 落とし穴状土坑

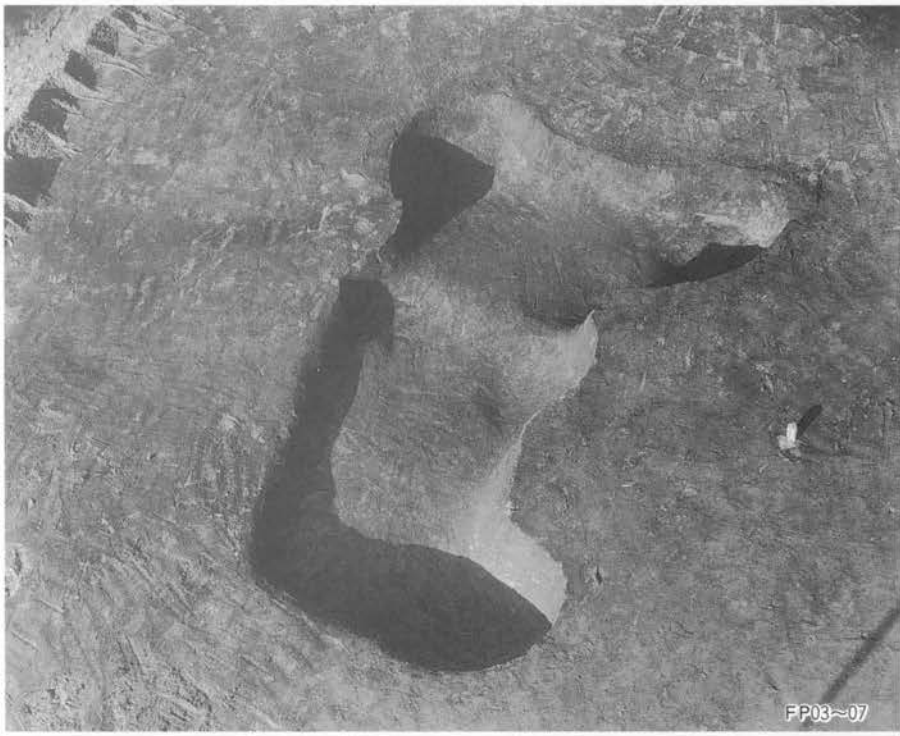

P44

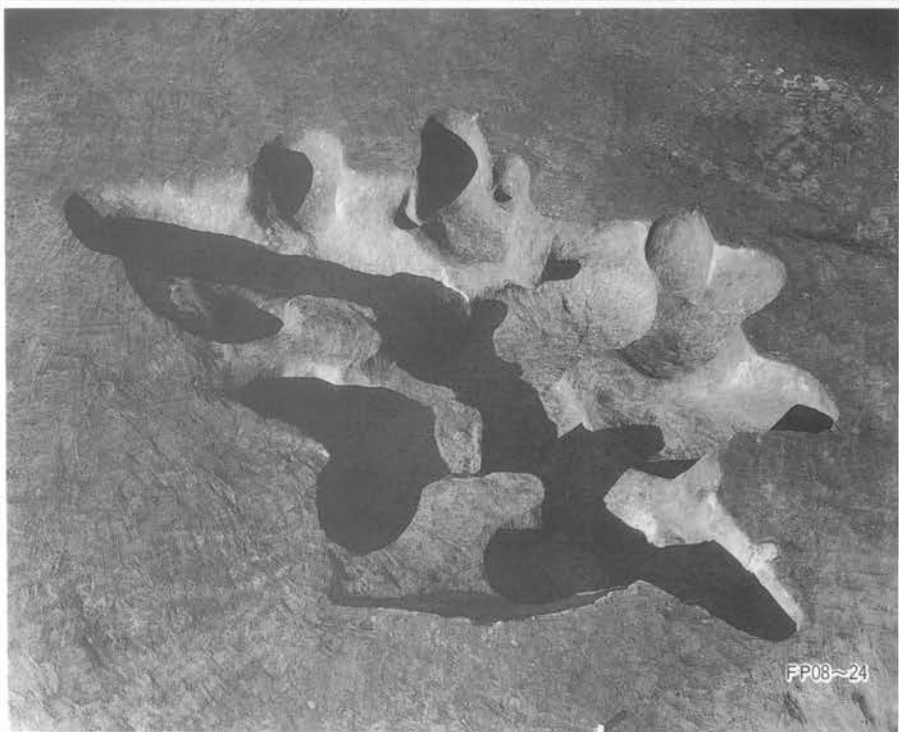
P48

図版 31

FP01

FP02


FP03～07

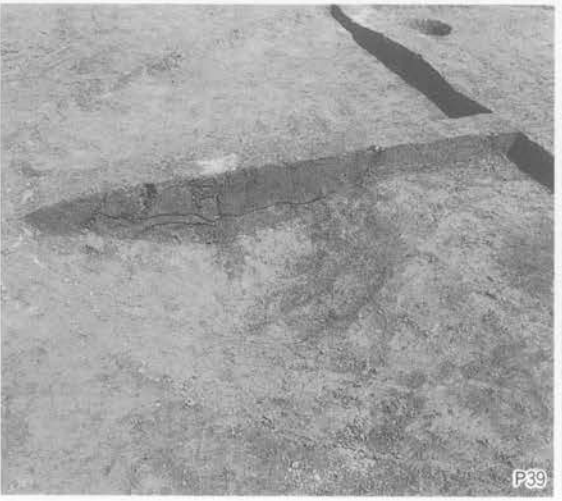

FP08～24

P29

P30

P31

P33


P39

P40

004－1

004－2

004－3

004－4

004－5

004－6

遺構出土土器 (1)

図 版 34

004－7

004－8

005－1

007－1

007－2

007－3

遺構出土土器 (2)

007－4

008－1

040－1

013－1

042－1

013－2

042－2

遺構出土土器 (3)

図 版 36

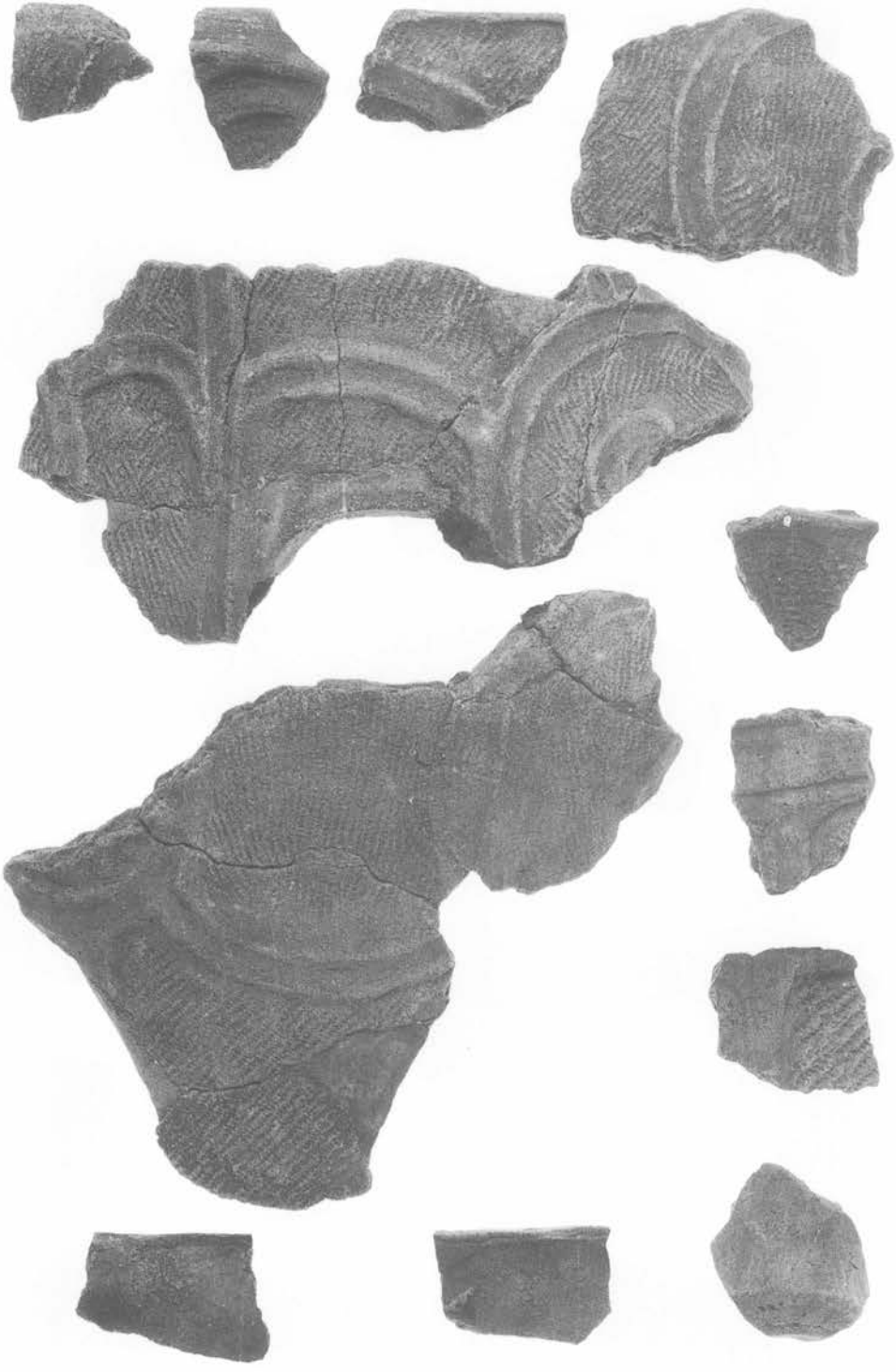
042－3

P52－1

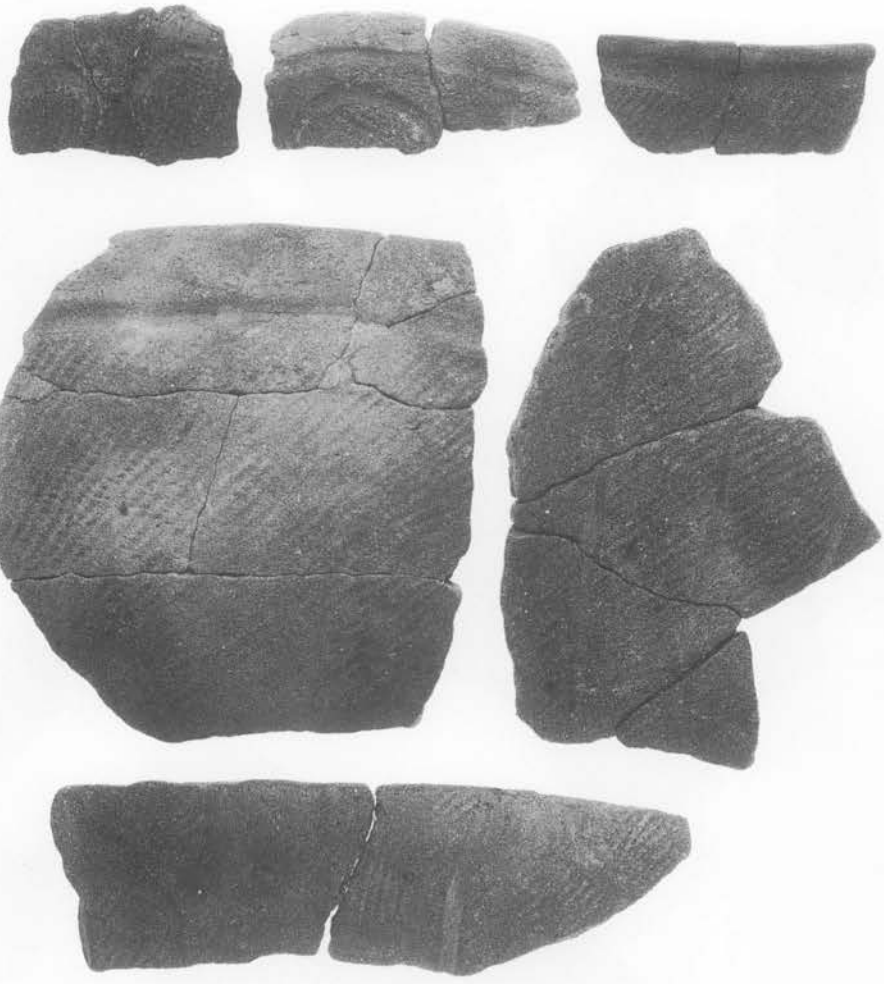
P6－1

002

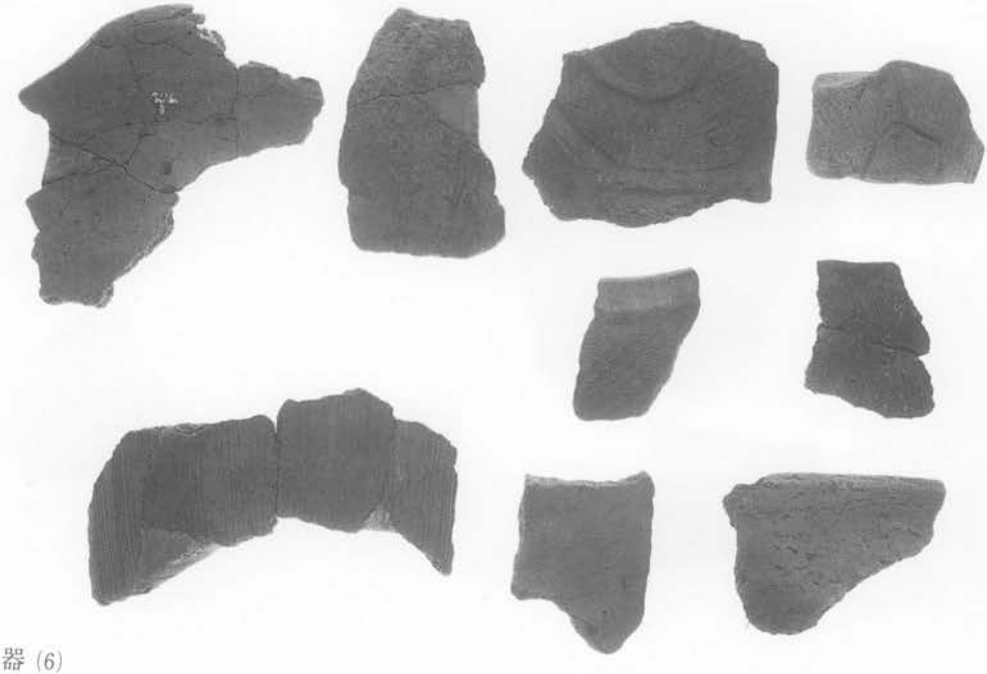
遺構出土土器 (4)



005
遺構出土土器 (5)

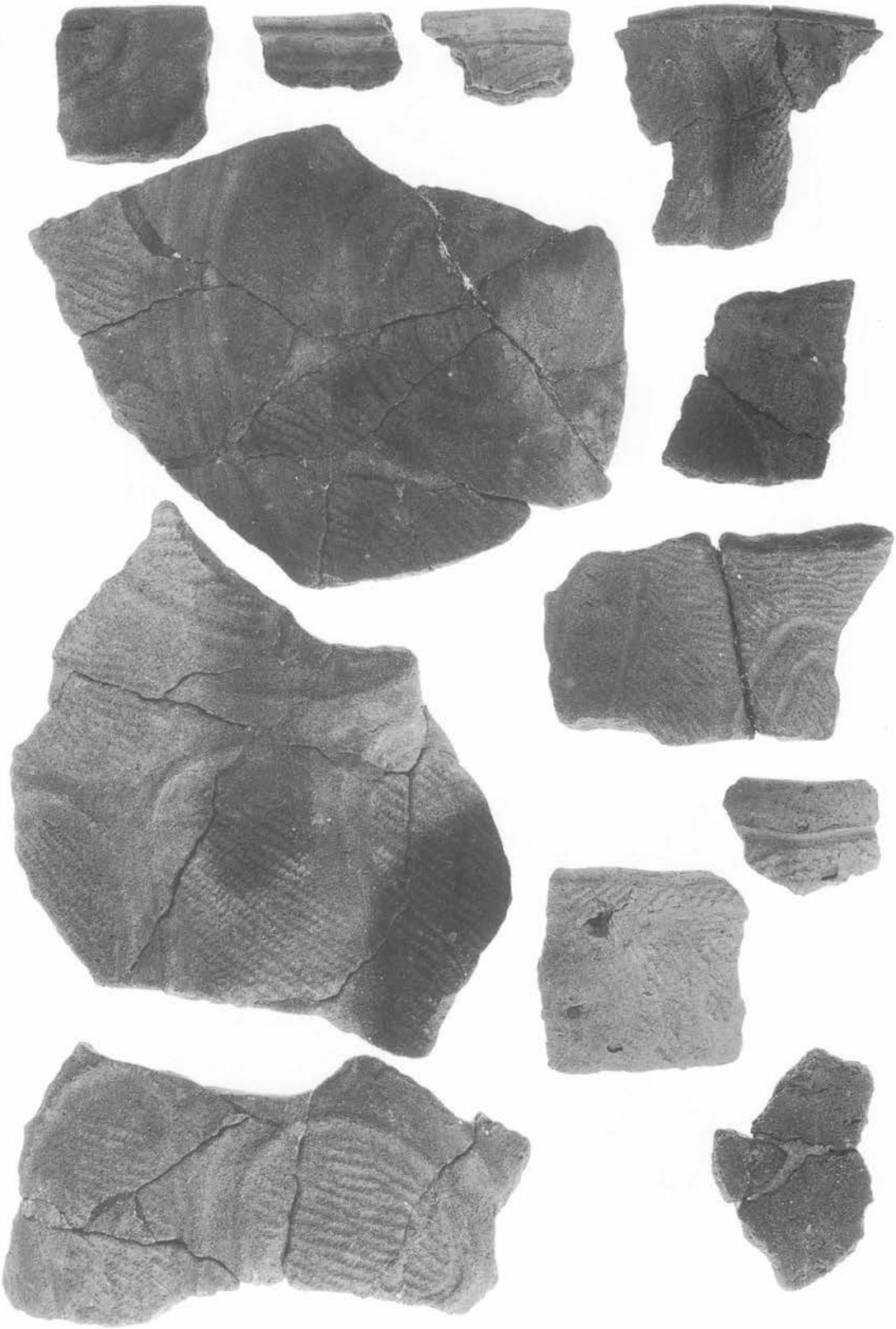


004



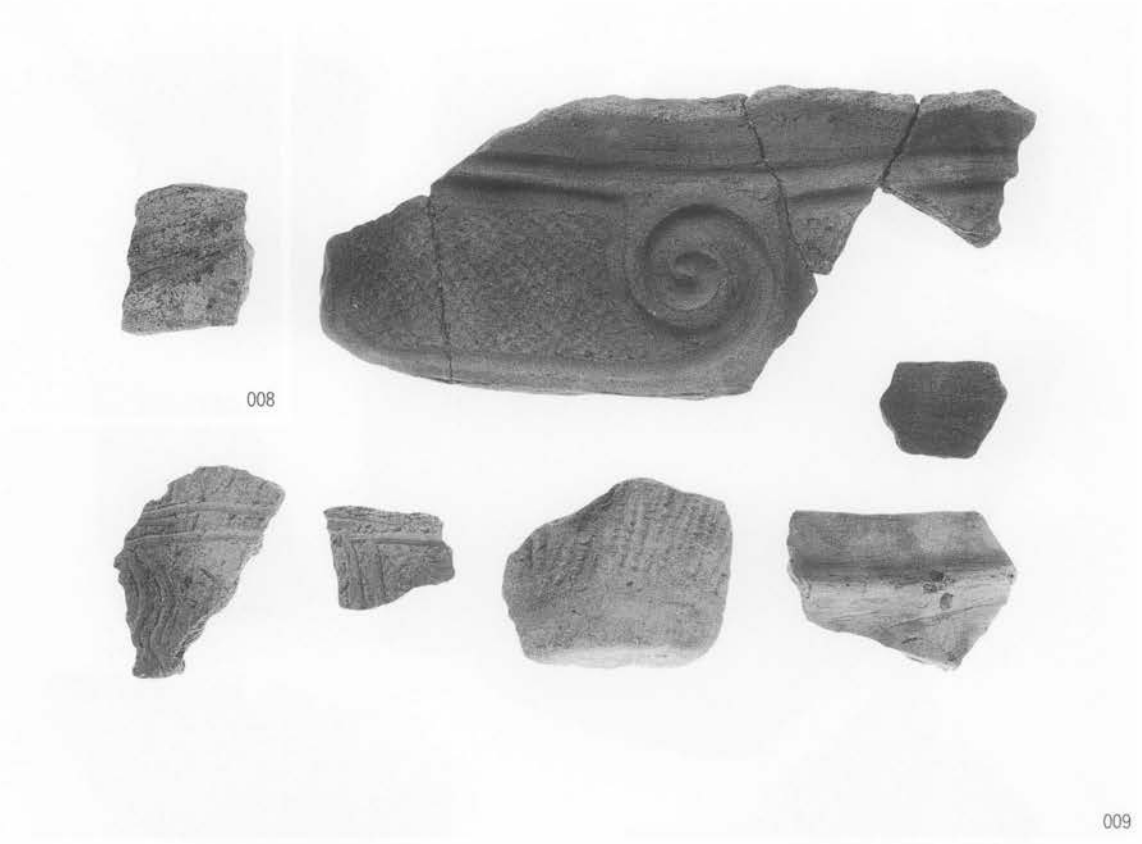
遺構出土土器 (6)

006



007
遺構出土土器（7）

図 版 40

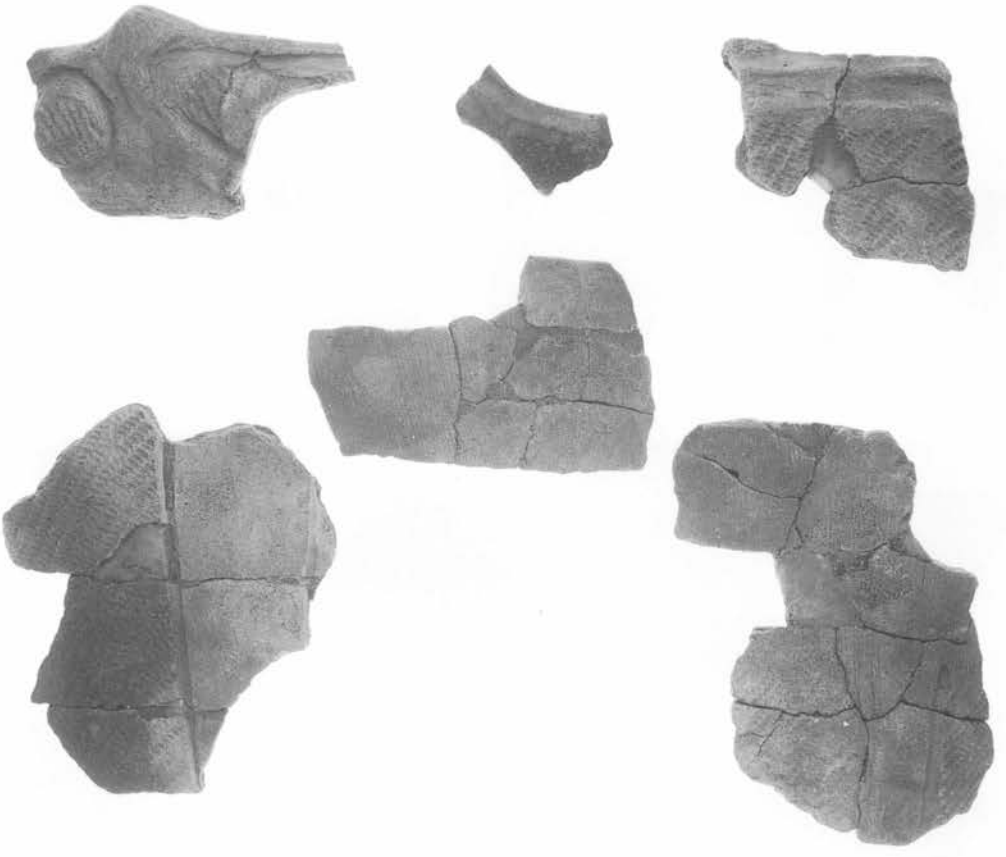


008

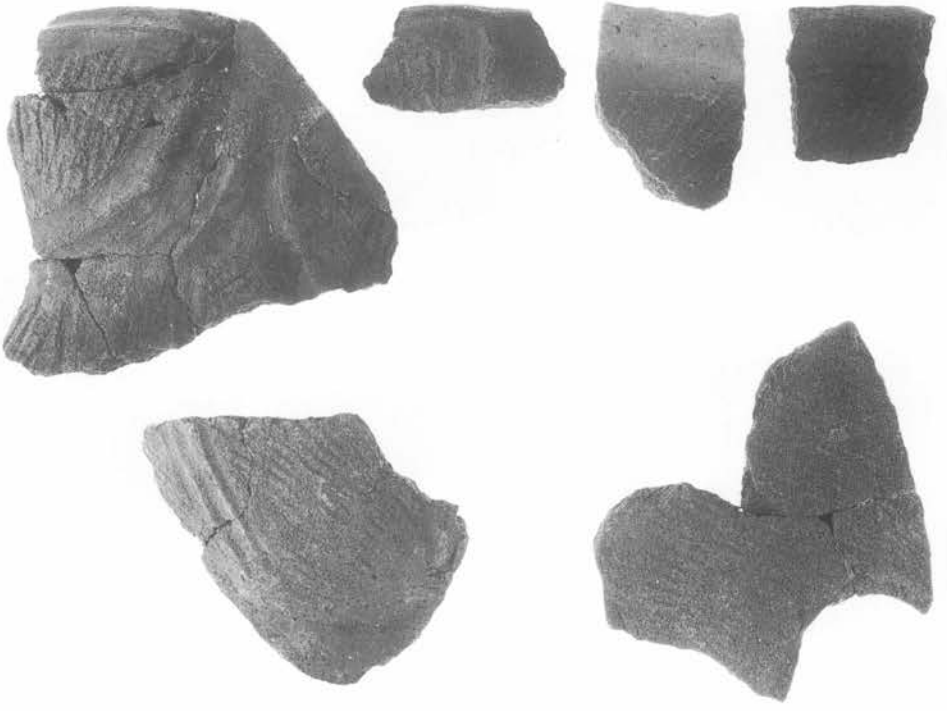
009

013

遺構出土土器 (8)

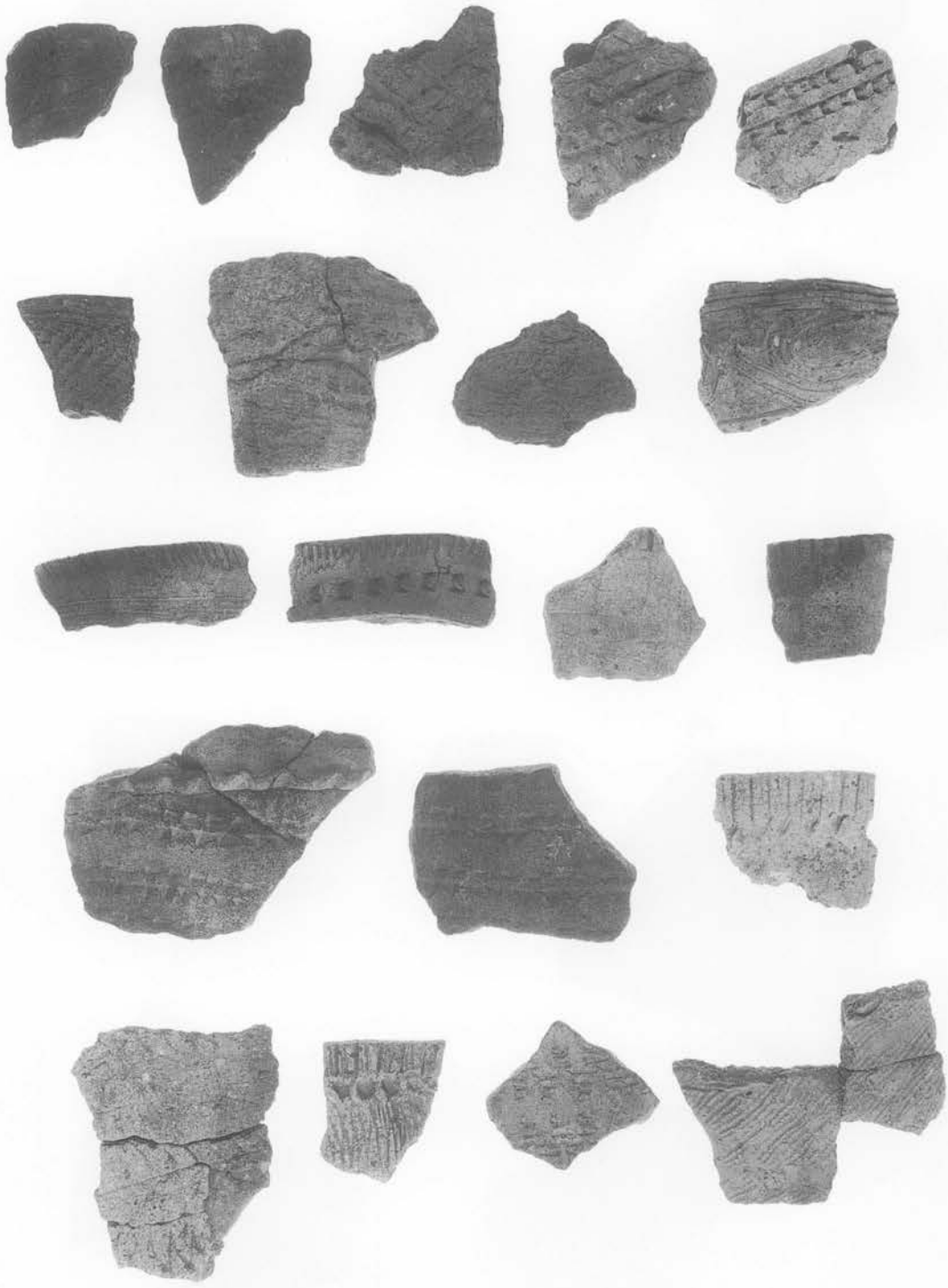


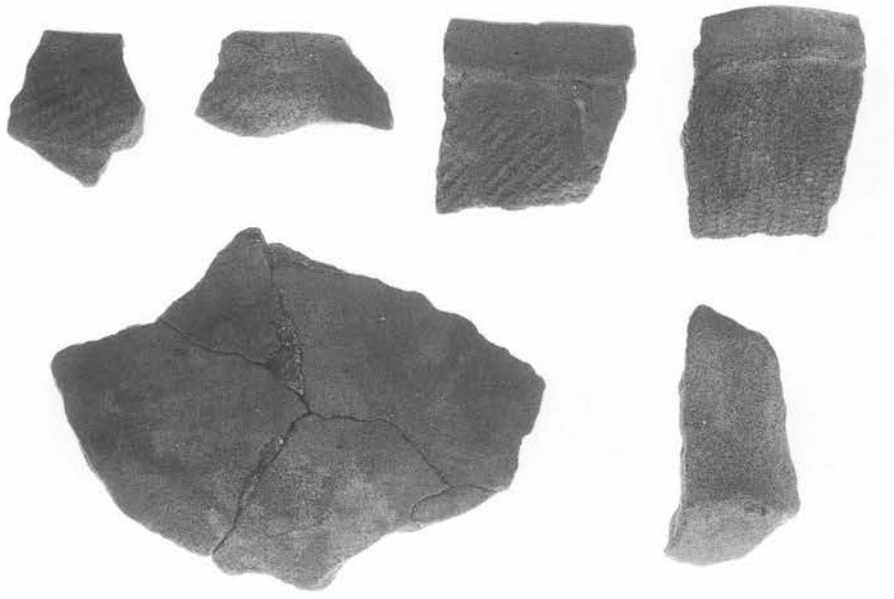
040



042

遺構出土土器 (9)

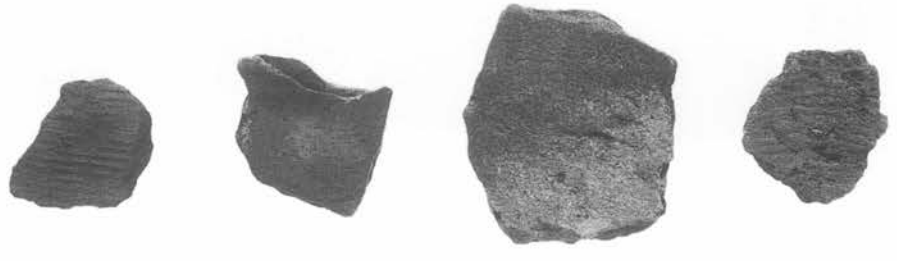




014

041

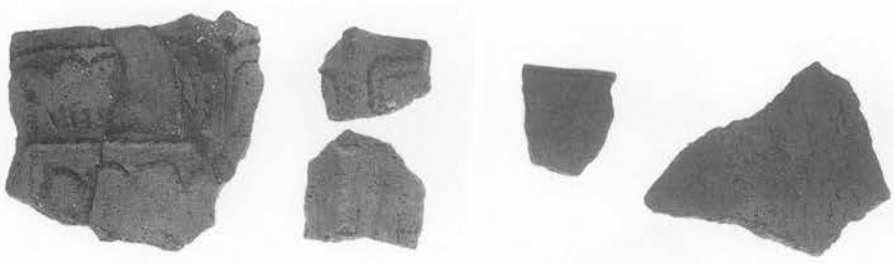
P21



P24

遺構出土土器 (11)

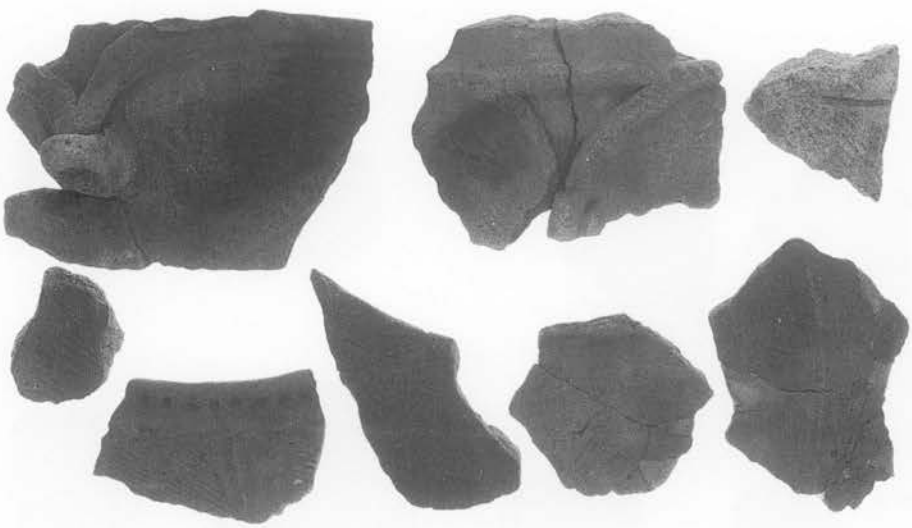
図 版 44



P04

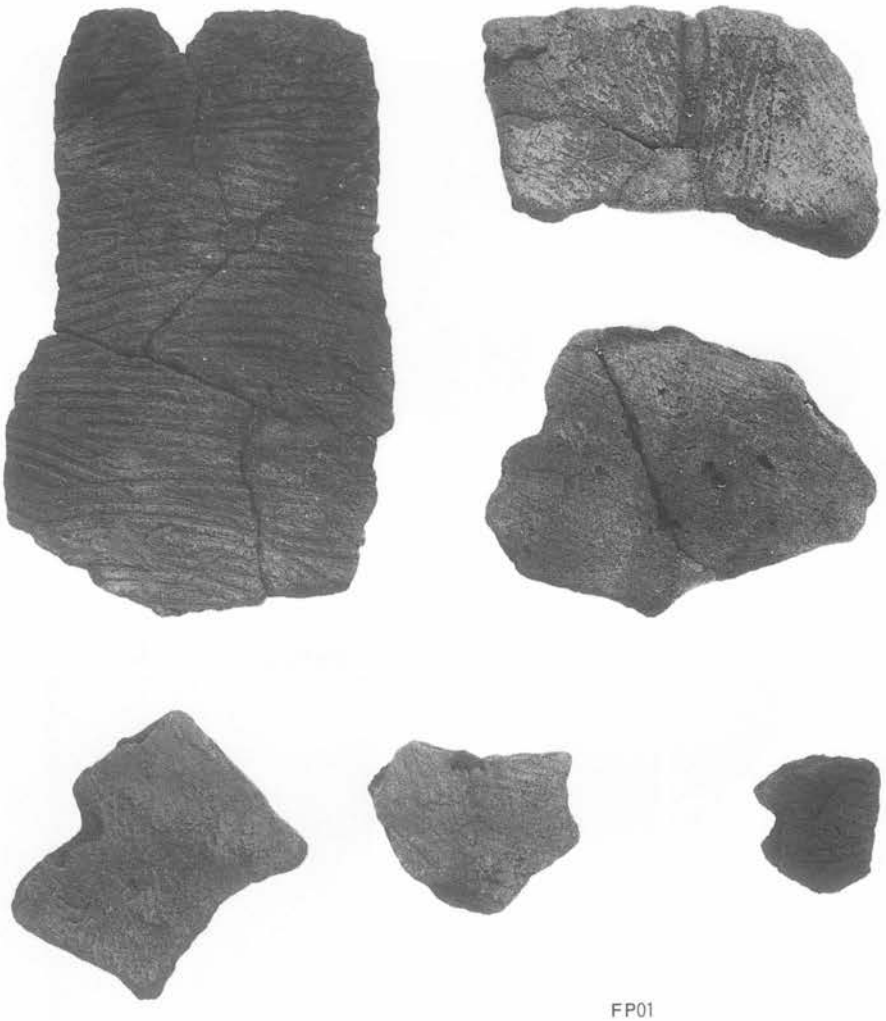
P20

P28



遺構出土土器 (12)

P32



FP01

FP02

FP04

遺構出土土器 (13)

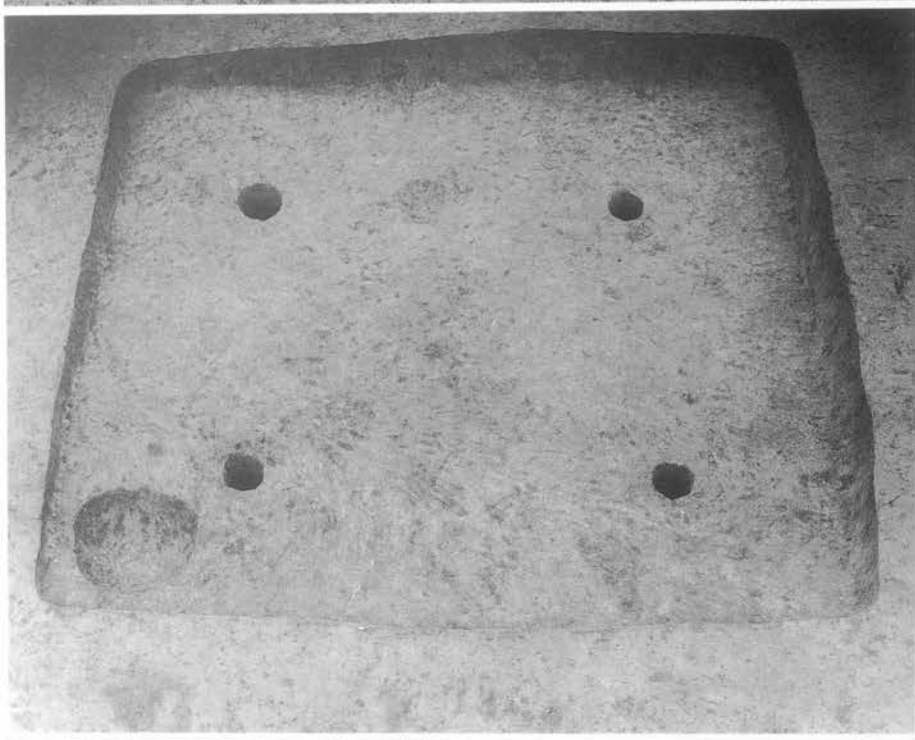
FP08～24

FP13

FP17

FP26

1　016号住居跡（南から）



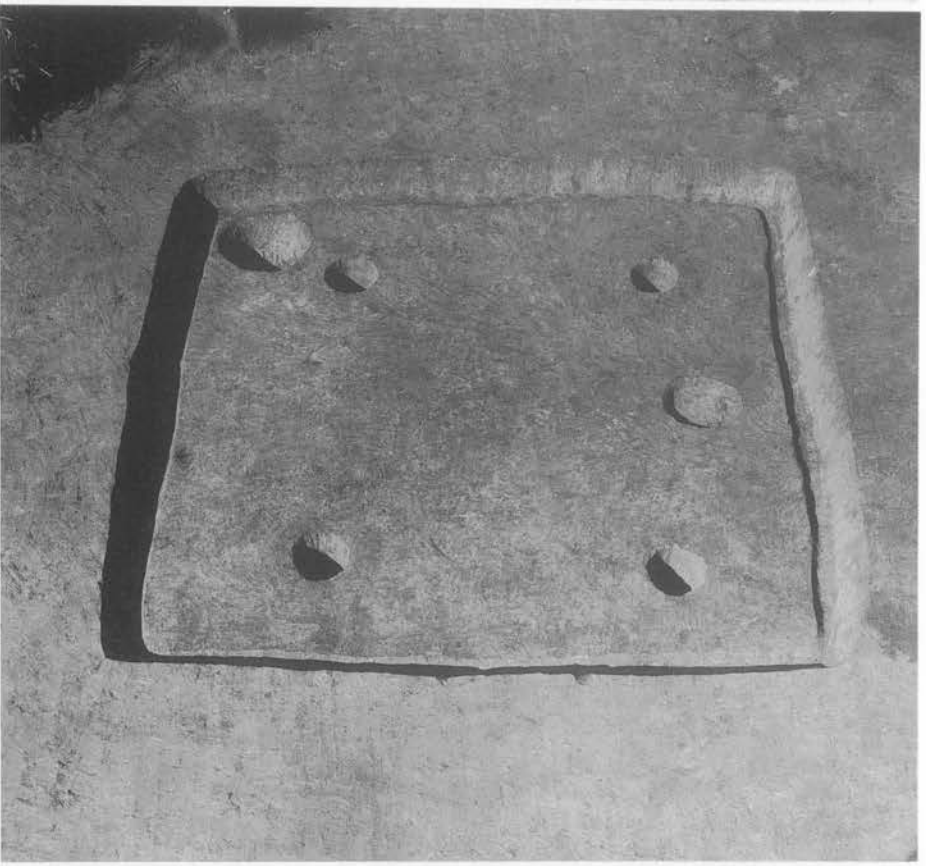
2　017号住居跡（南から）

東壁南側
（南から）

西壁中央
（南から）

3　017号住居跡遺物出土状況

1　018号住居跡（南から）



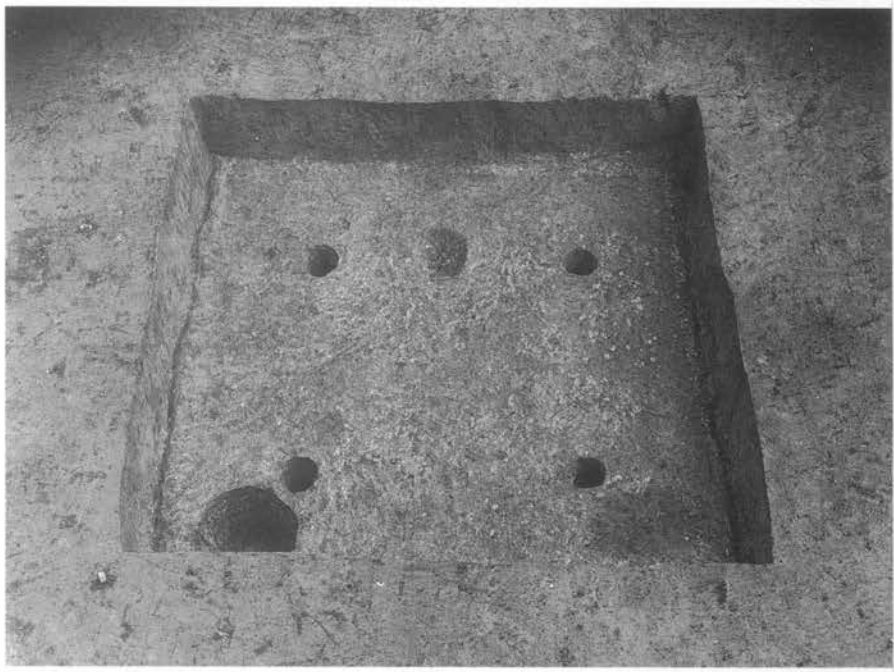
2　024号住居跡（南から）

北東壁中央
（西から）

西　隅
（南西から）

3　024号住居跡遺物出土状況

1　026号住居跡（南東から）

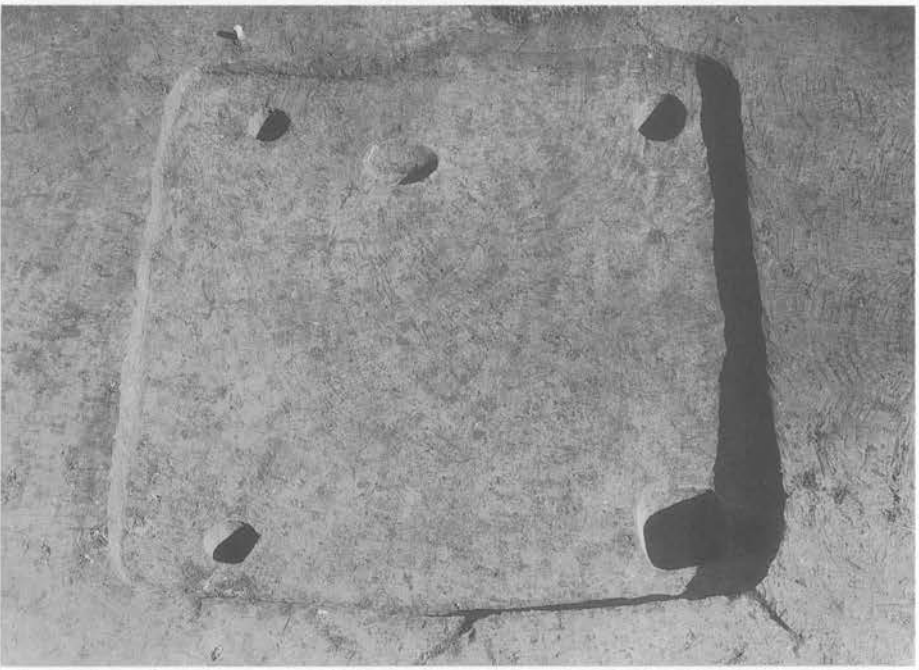


2　027A号住居跡（南から）

3　027B号住居跡（南から）

図版50

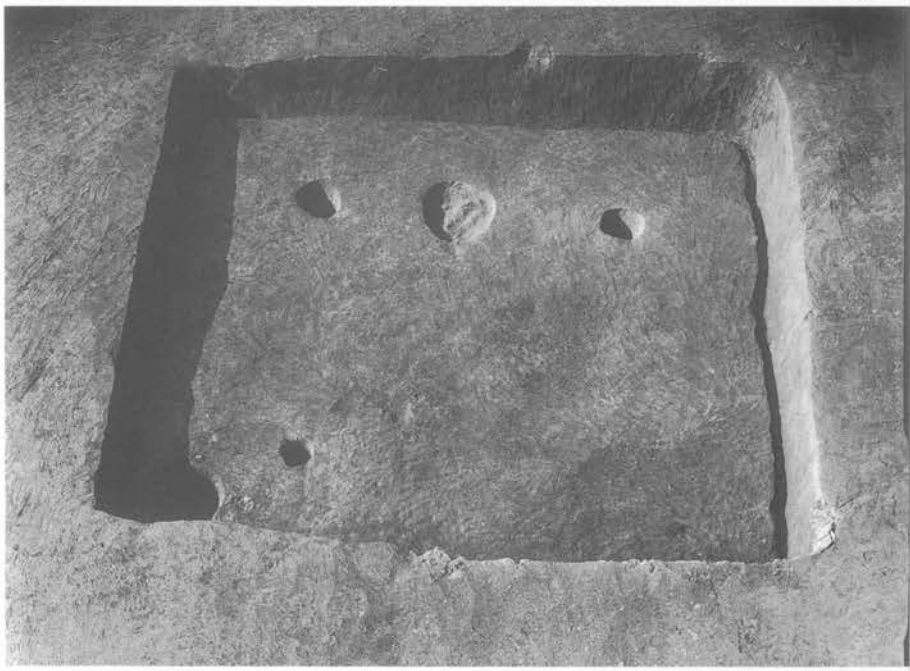
1　028号住居跡（南東から）



2　030号住居跡（南西から）

3　032号住居跡（北西から）

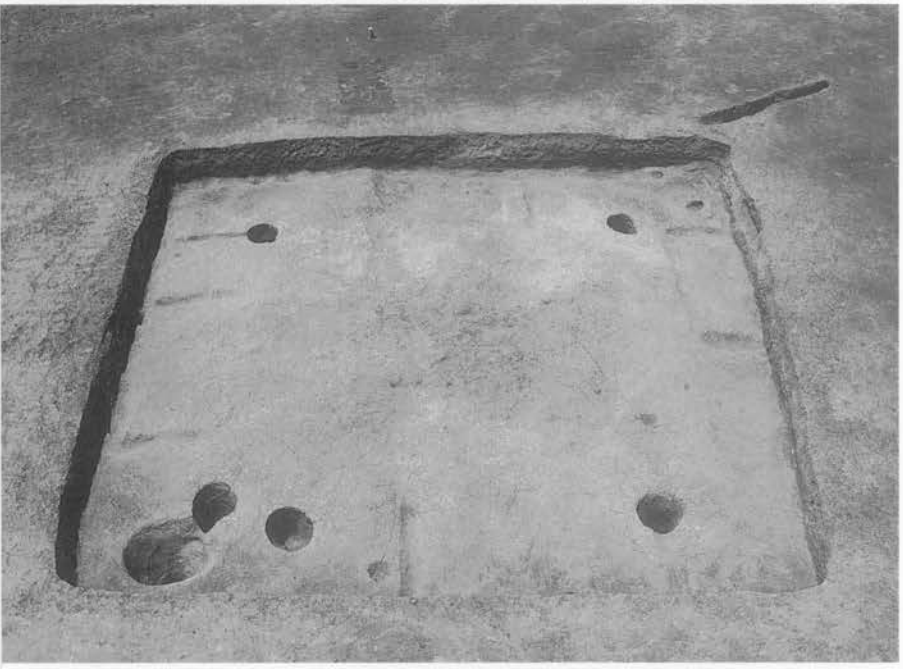
1　034号住居跡（南から）



2　035号住居跡（南東から）

3　036号住居跡（南東から）

1　037号住居跡（南西から）

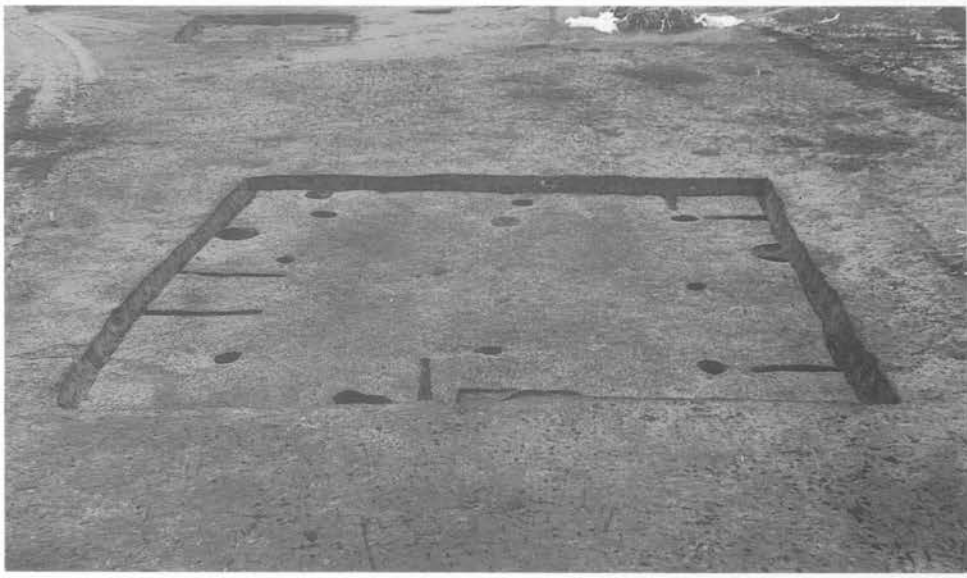


2　043号住居跡（南東から）

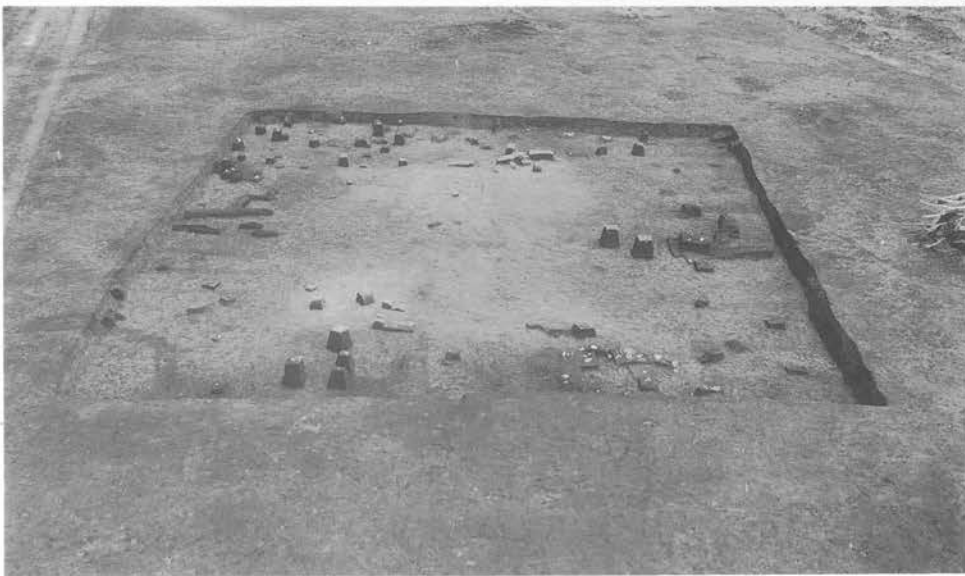
3　043号住居跡遺物出土状況
（南西から）

南西側（北西から）	貯蔵穴（南西から）
南隅付近（南西から）	南西壁中央（南西から）

1　043号住居跡遺物出土状況



2　044号住居跡（南西から）



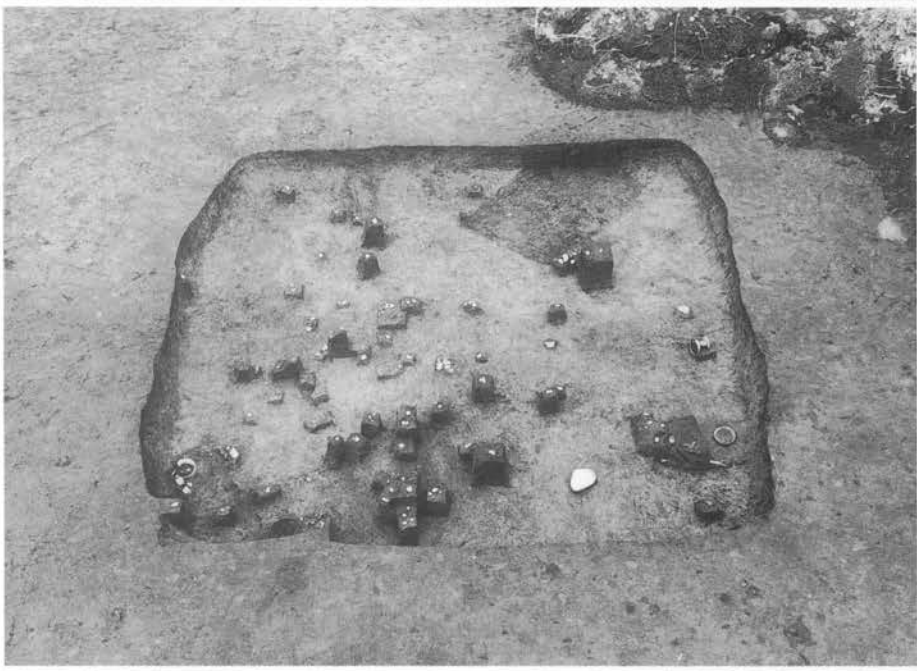
3　044号住居跡遺物出土状況（南西から）

1　045号住居跡
（南東から）

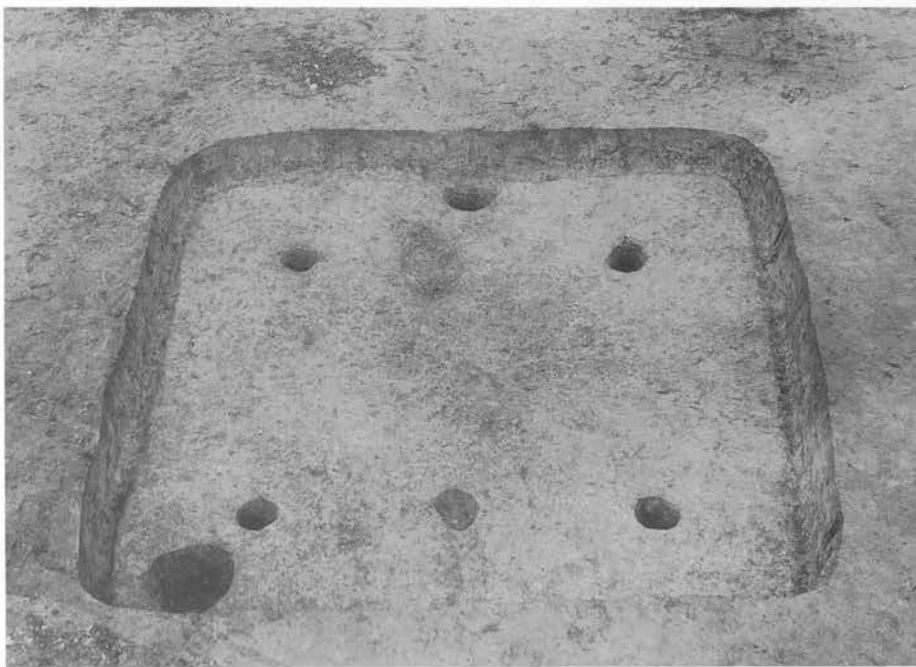
P1付近 （南西から）	南西壁南側 （北東から）
貯蔵穴付近 （北から）	北西壁中央 （南西から）

2　045号住居跡遺物出土状況

1　046号住居跡（東から）

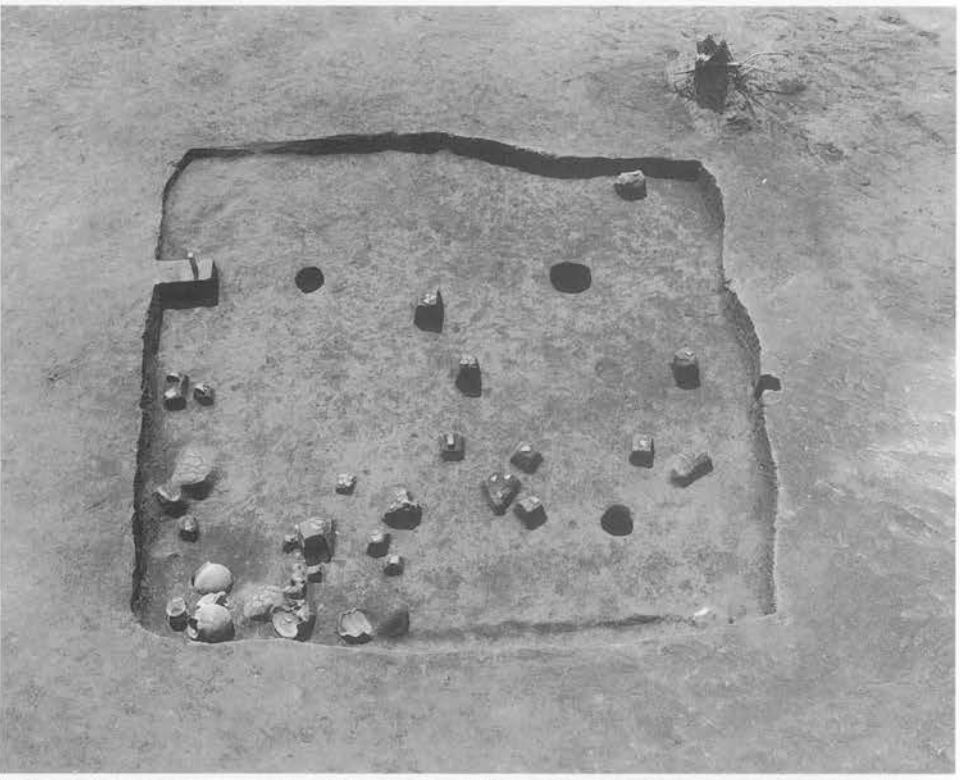


2　046号住居跡遺物出土状況（東から）



3　047号住居跡（南から）

1　048号住居跡（南から）

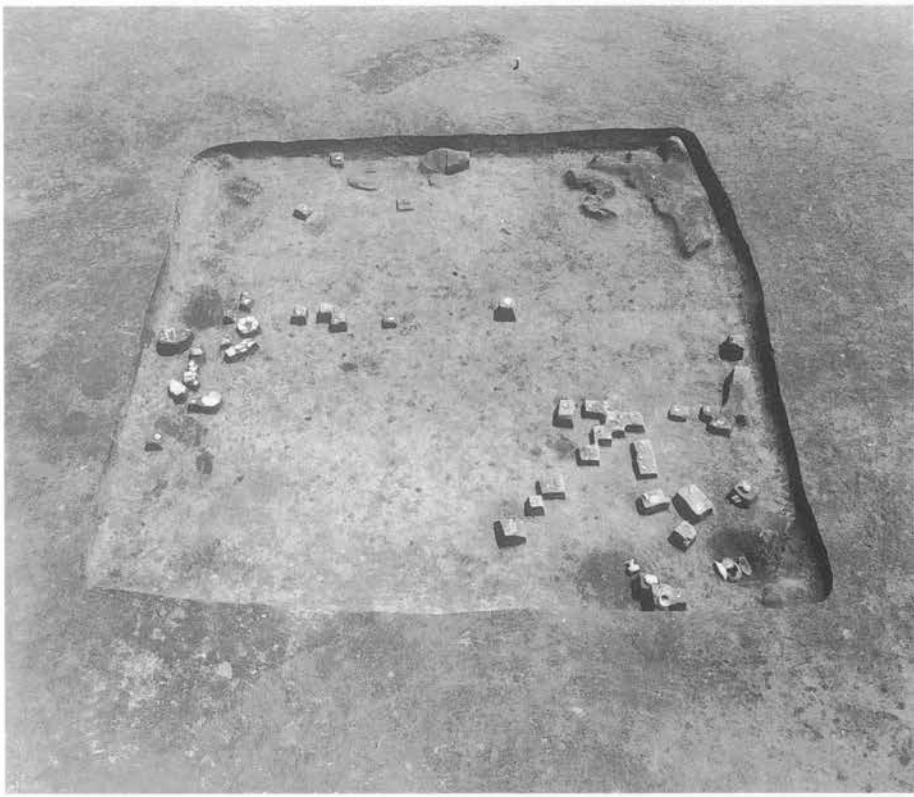


全　体（東から）

西側貯蔵穴（南から）	南　東　隅（南から）

2　048号住居跡遺物出土状況

1　049号住居跡（南西から）



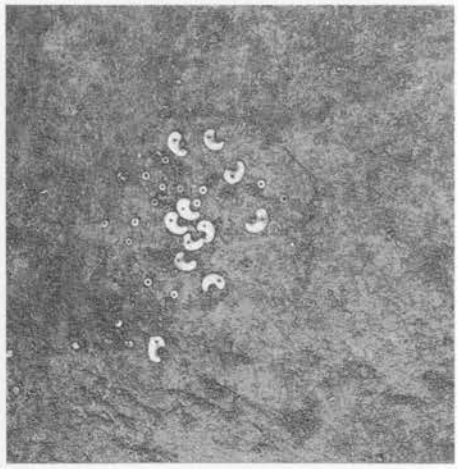
全　体　（南西から）

南隅貯蔵穴（東から）	西側貯蔵穴（西から）

2　049号住居跡遺物出土状況

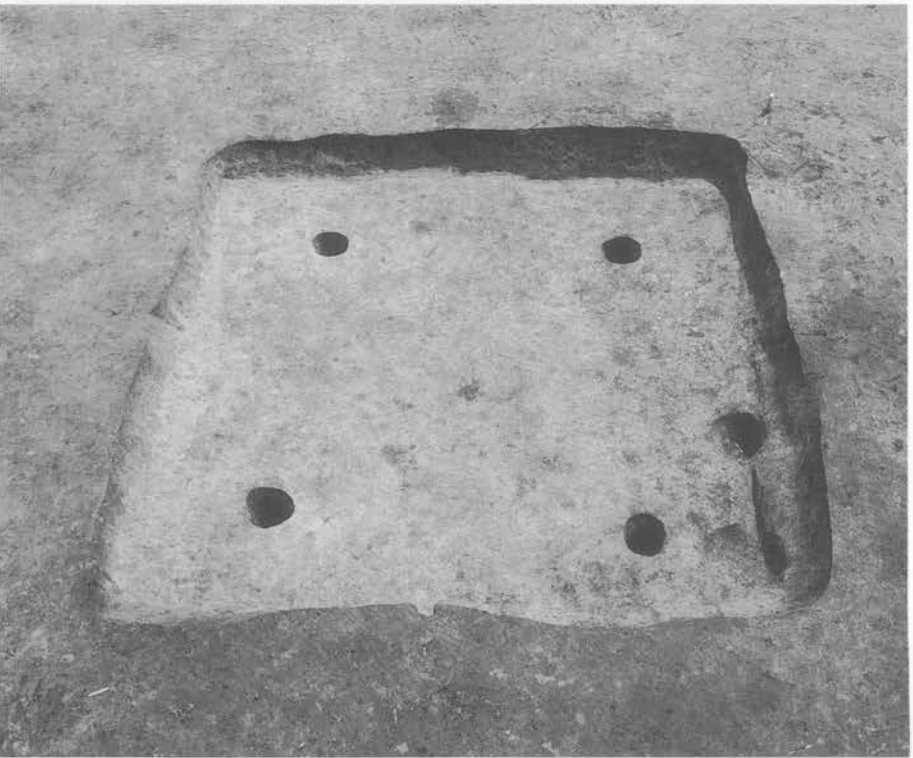
1　050号住居跡（南から）

北東集中地点（東から）

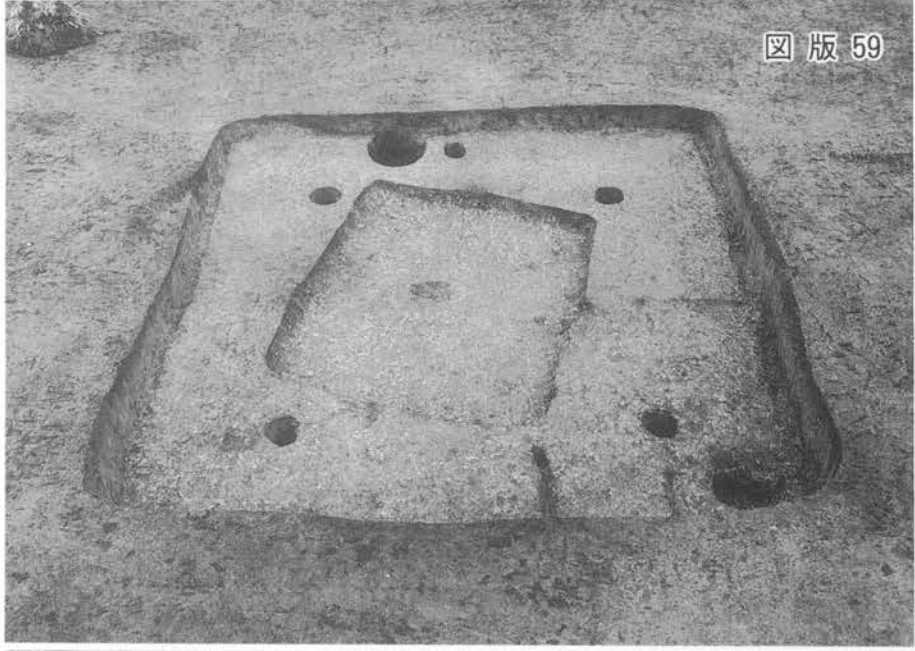


玉類集中地点（西から）

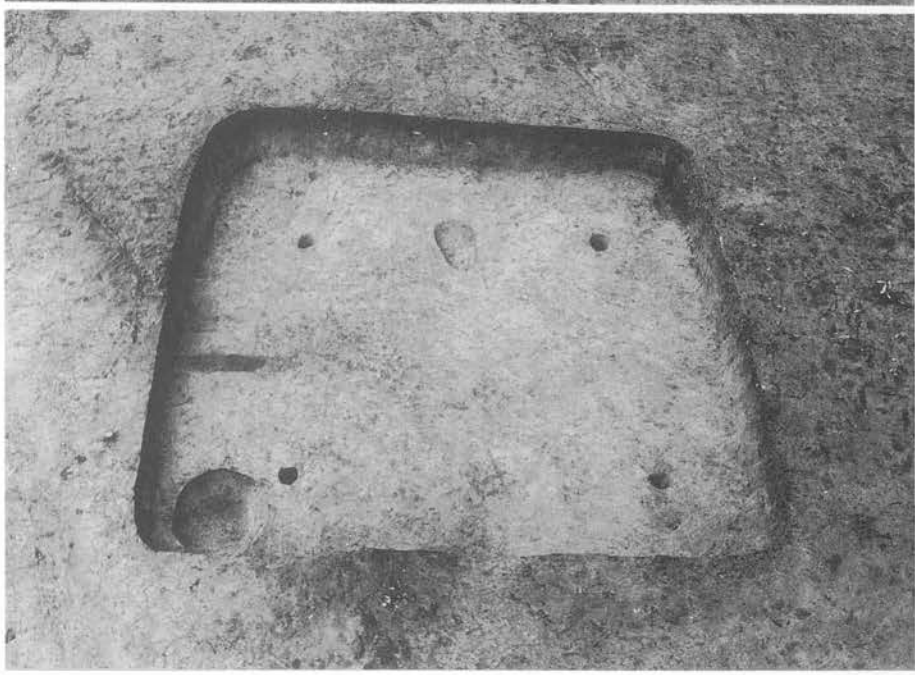
2　050号住居跡遺物出土状況



3　051号住居跡（西から）



1　052・054号住居跡（南から）



2　053号住居跡（南東から）

3　055号住居跡（南から）

全　体　（東から）

北壁中央（南から）

南　隅（東から）

1　055号住居跡遺物出土状況

2　056号住居跡（南から）

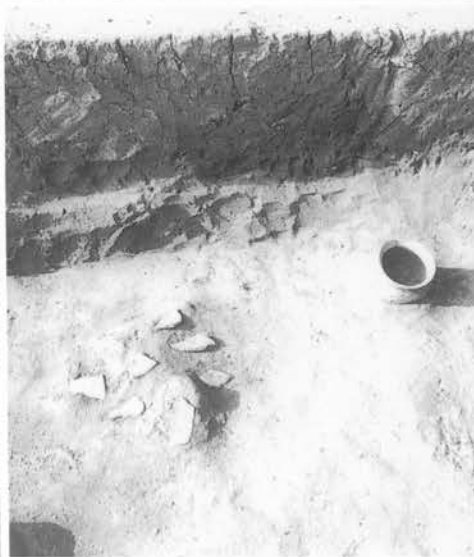
南側状況（西から）

南側中央（西から）

1　056号住居跡遺物出土状況

2　057号住居跡（東から）

全　体（東から）



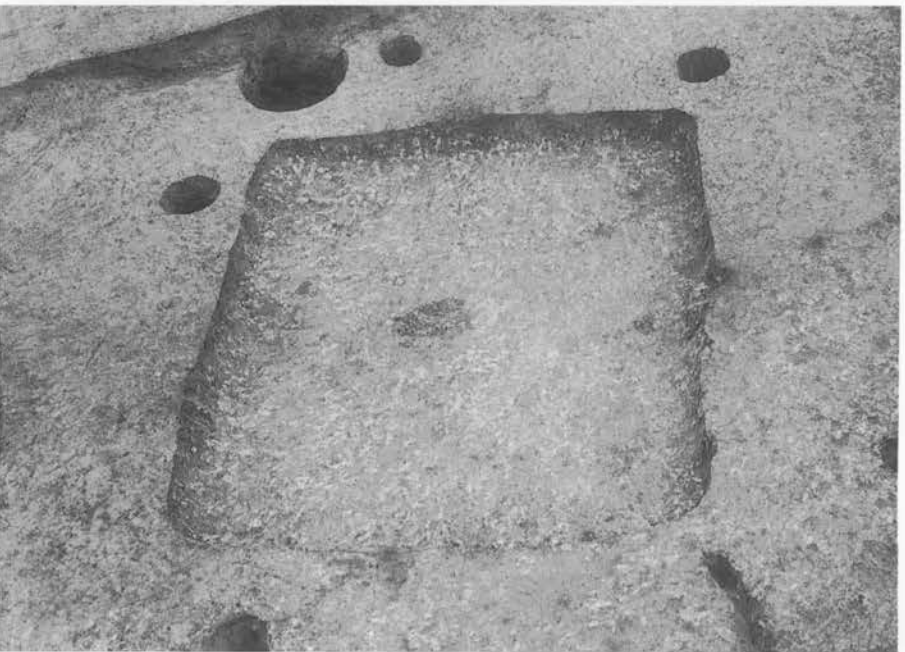
北壁中央（南から）

3　057号住居跡遺物出土状況

図 版 62

1　038号住居跡（南東から）

2　038号住居跡遺物出土状況
（西隅集中・南から）

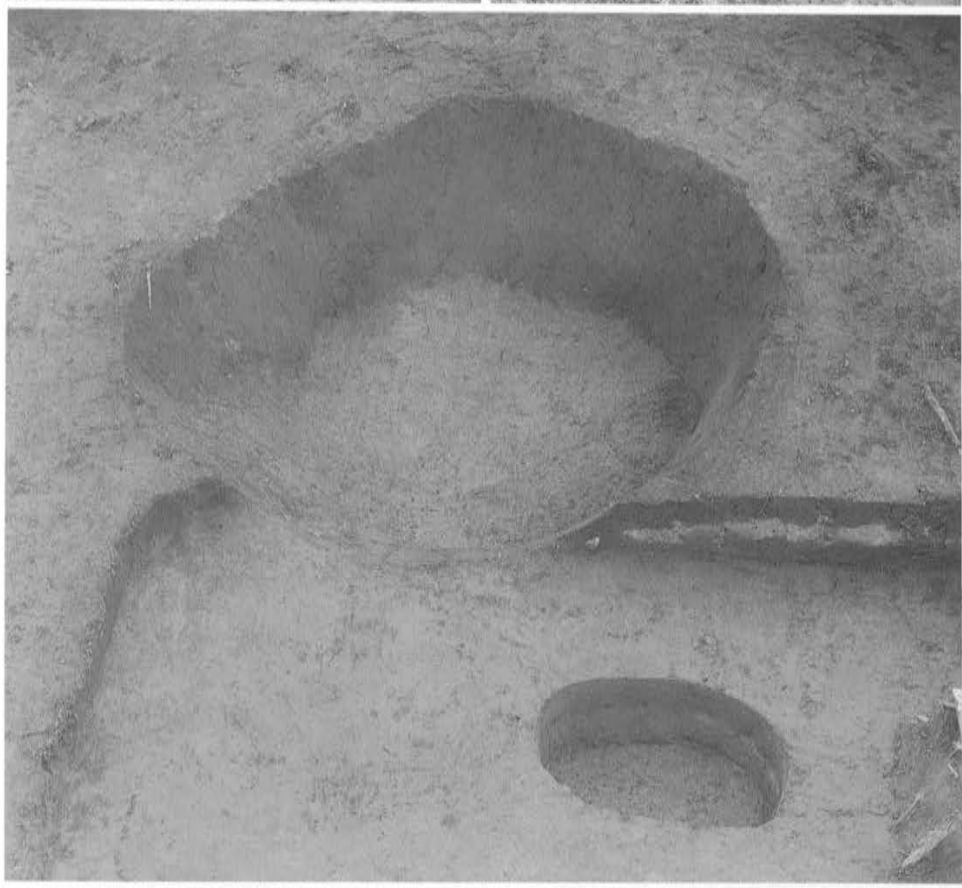


3　054号住居跡（南から）

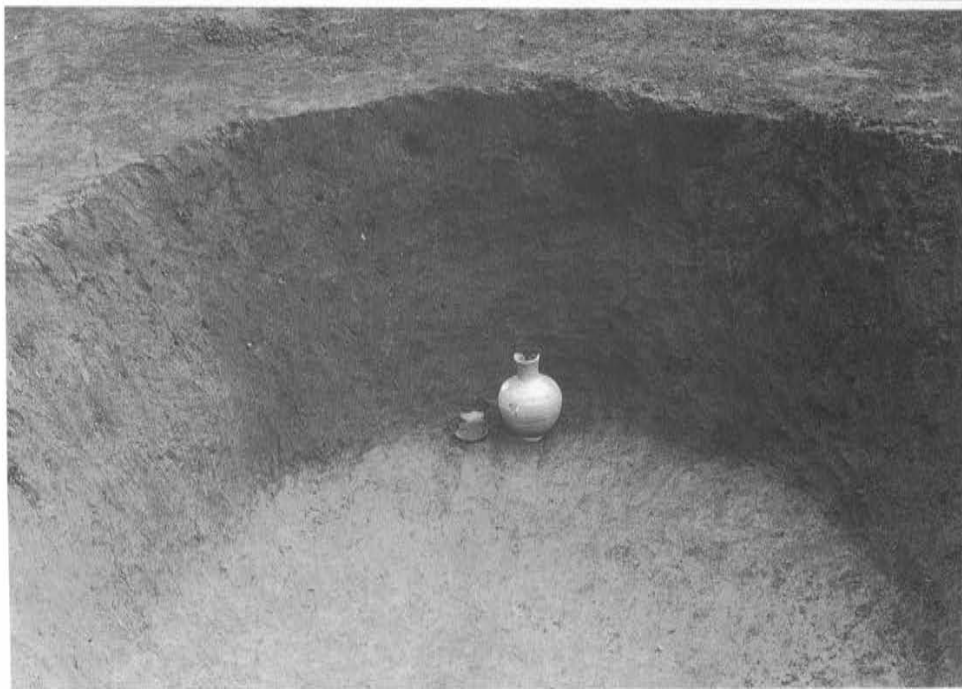
全　体
（南から）

西壁中央
（南東から）

1　054号住居跡遺物出土状況

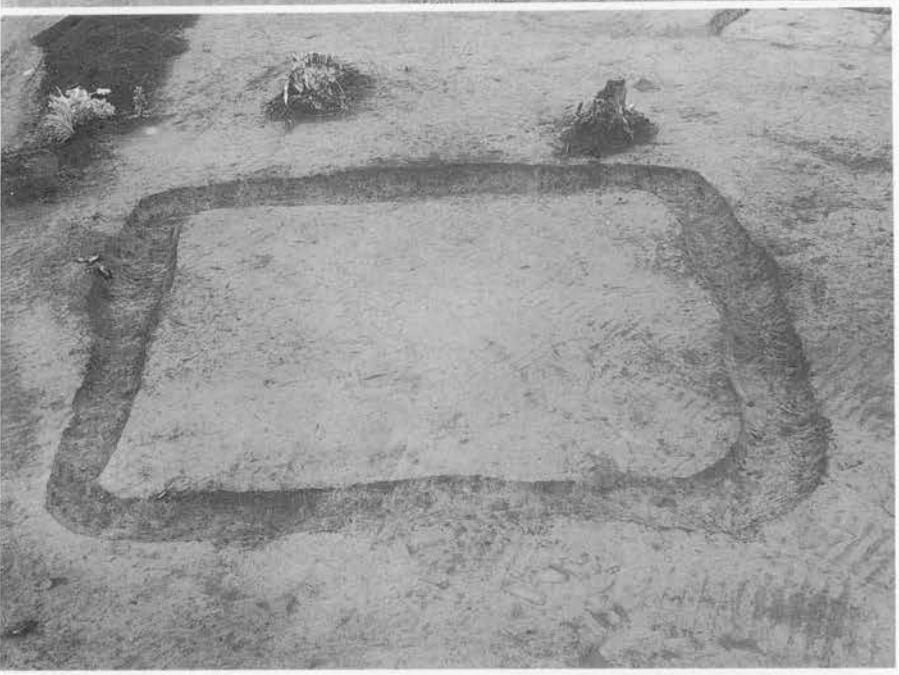


2　01・02号土坑（南から）



3　02号土坑遺物出土状況
（西から）

1　M01号方形周溝状遺構
（南西から）



2　M02号方形周溝状遺構
（東から）

3　M03号溝状遺構
（西側部分・東から）

016－3

016－4

016－7

016－6

016－5

住居跡出土土器（1）

016−12

016−13

017−3

017−4

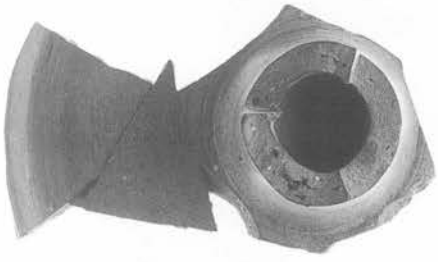
017−5

017−6

住居跡出土土器 (2)

018－1

018－3



018－3

024－2

024－3

024－4

024－5

住居跡出土土器（3）

図 版 68

024－6

024－7

026－1

026－2

026－3

026－4

026－5

026－6

住居跡出土土器（4）

026－7

026－8

026－10

026－9

026－11

026－14

026－12

026－16

住居跡出土土器（5）

図 版 70

027A－1

027A－3

028－1

027A－5

028－5

028－6

住居跡出土土器 (6)

028－7

030－2

032－1

032－2

032－4

032－6

032－7

032－9

住居跡出土土器（7）

図 版 72

032－8

032－10

032－15

032－16

032－17

035－1

035－3

035－6

住居跡出土土器 (8)

036－2

036－3

036－4

036－5

036－6

036－9

036－10

036－11

036－12

036－13

住居跡出土土器（9）

図 版 74

036－14

036－16

036－17

036－19

043－1

043－2

043－3

043－4

住居跡出土土器 (10)

043－5

043－7

043－8

043－9

043－10

043－12

043－13

043－14

住居跡出土土器 (11)

図 版 76

043—15

043—16

043—17

043—18

043—19

043—20

住居跡出土土器 (12)

043—22

043—23

043—24

043—25

044— 2

044— 1

044— 4

044— 3

住居跡出土土器 (13)

044－5

044－6

044－7

044－8

044－9

044－10

044—11

044—12

044—13

044—14

044—15

044—16

044—18

044—17

図 版 80

044－20

044－21

044－22

044－23

045－1

045－4

045－2

045－6

住居跡出土土器 (16)

045－7

045－8

045－10

045－11

045－12

045－13

045－14

045－15

図 版 82

045—16

045—17

045—18

045—19

045—20

045—21

045—25

045—27

住居跡出土土器 (18)

045－31

045－32

045－33

045－34

045－40

045－39

045－41

046－1

046－2

046－3

046－5

046－6

046－4

046－7

046－8

046－7

046－9

047－4

047－6

047－8

図 版 86

047－9

047－10

047－11

048－1

048－3

048－2

048－5

048－4

住居跡出土土器 (22)

048－6

048－7

048－8

049－1

049－2

049－3

住居跡出土土器 (23)

049－4

049－5

049－6

049－9

049－11

049－12

049—13

049—15

049—14

049—16

049—20

図 版 90

050－1

050－2

050－4

050－5

050－6

050－8

住居跡出土土器 (26)

050－9

051－1

051－2

051－4

051－5

051－6

図 版 92

051－7

051－8

053－1

053－2

053－3

053－4

住居跡出土土器 (28)

055－1

055－2

055－6

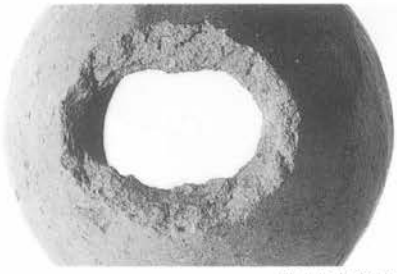
055－4

056－2

055－4

056－4

056－3



056－4

図 版 94

056－5

056－6

056－8

056－7

057－2

057－1

057－5

057－3

住居跡出土土器 (30)

038－3

038－5

038－8

038－7

038－11

038－10

038－12

038－13

038－15

038－16

038－18

038－19

038－20

038－21

038－22

038－23

住居跡出土土器 (32)

038—24

038—29

054— 3

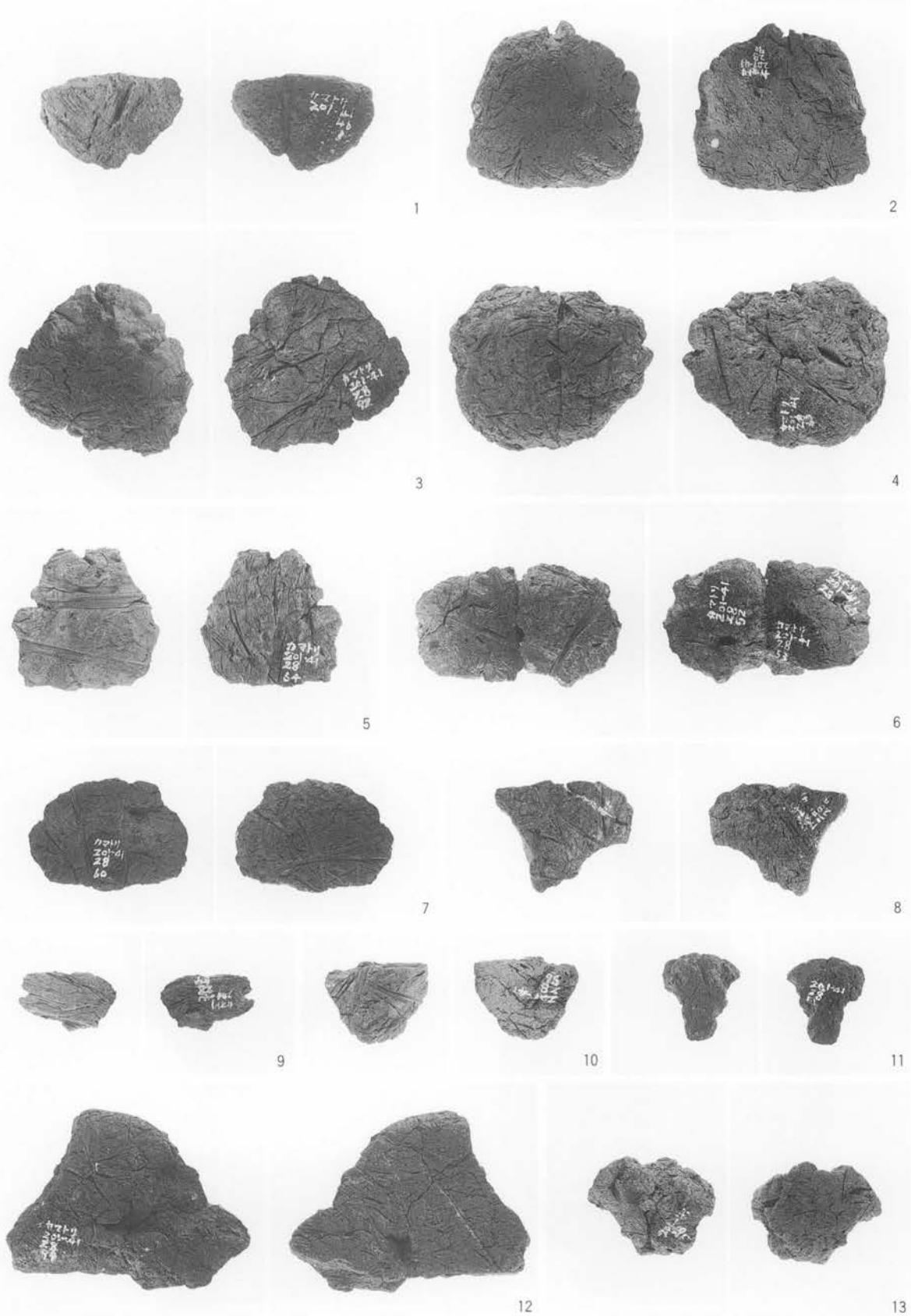
054— 1

054— 4

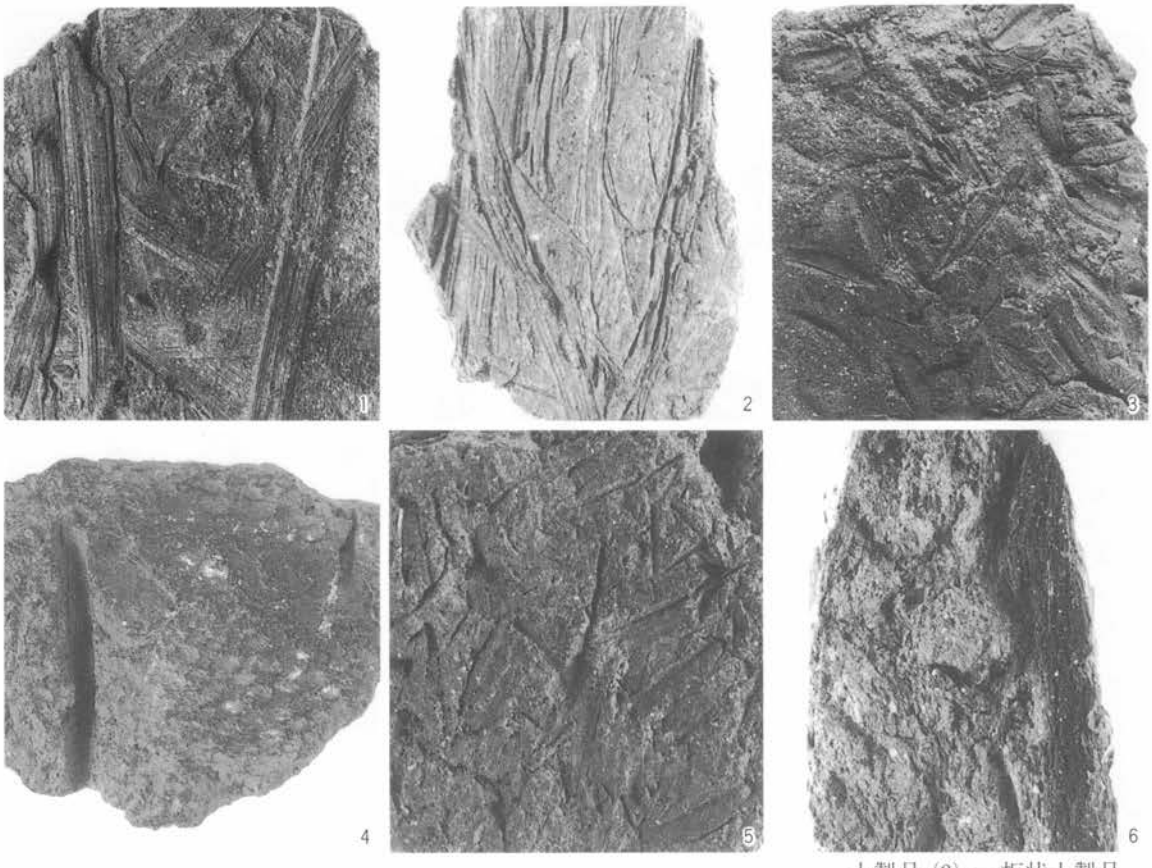
P02— 1

P02— 2

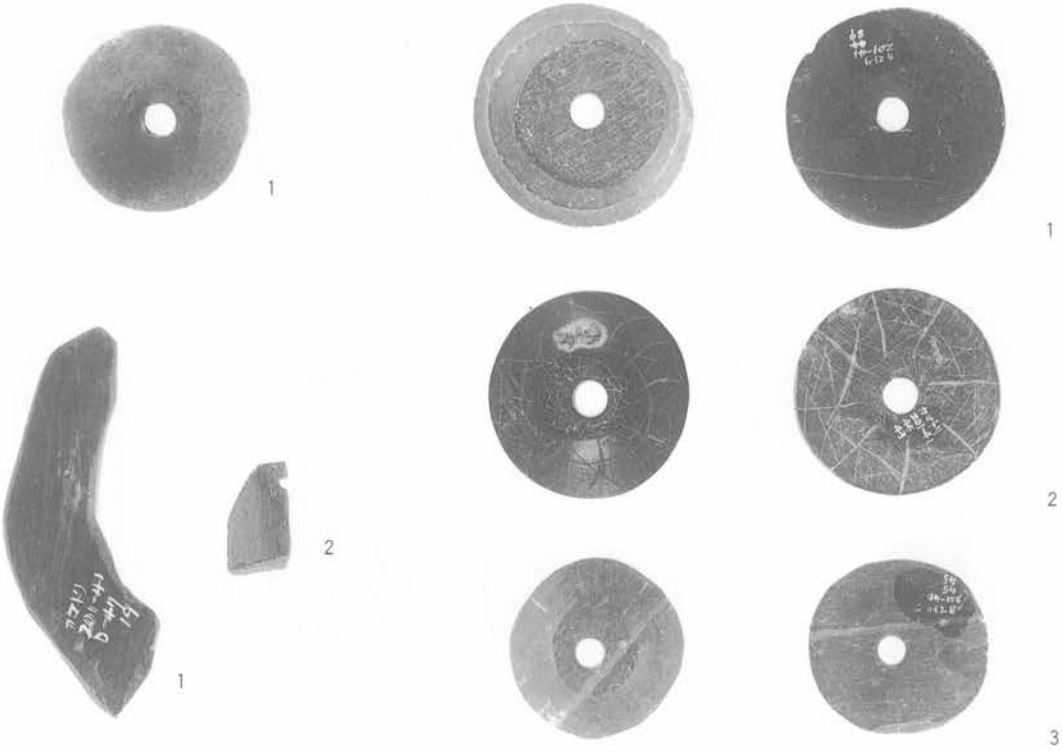
図 版 98



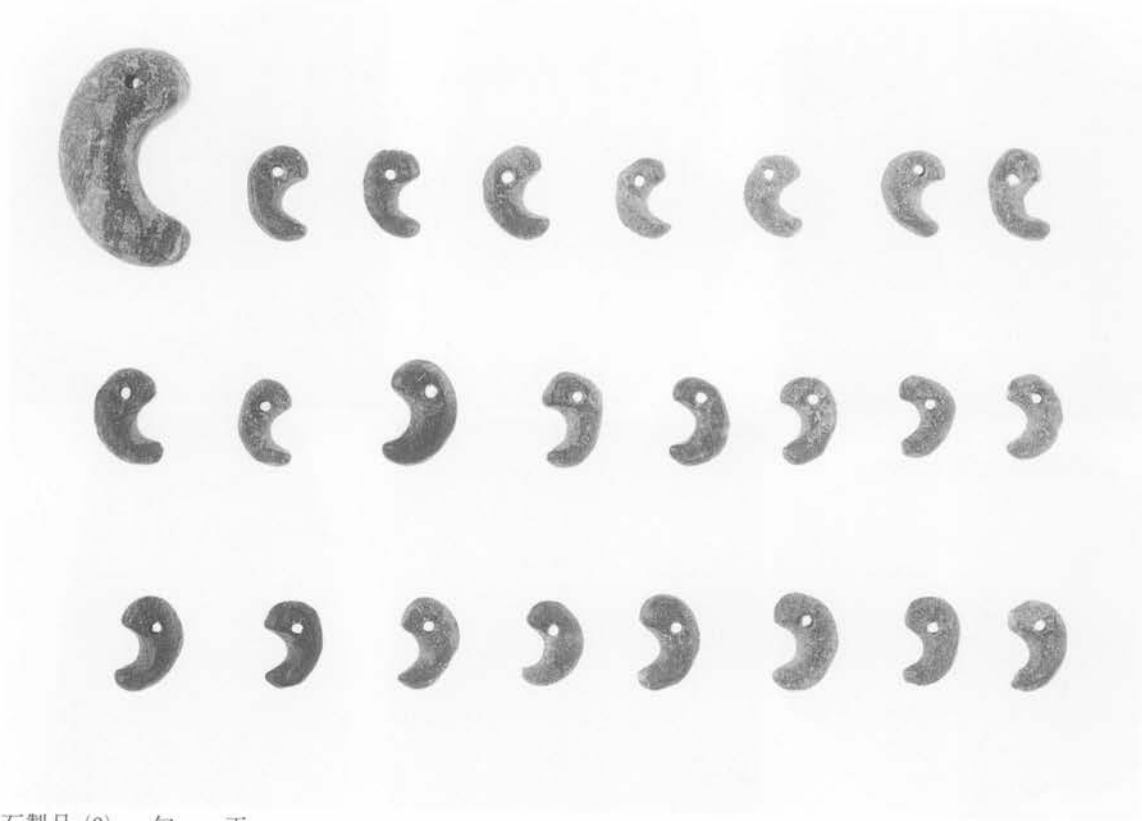
土製品 (1) － 板状土製品 －



土製品 (2) － 板状土製品 －



石製品 (1) － 紡錘車・石製品模造品 －

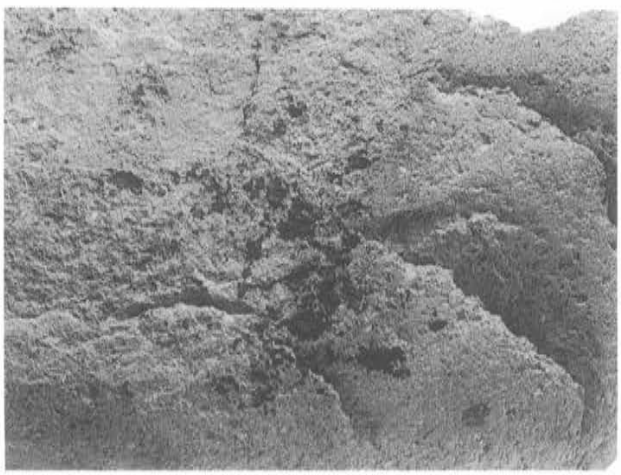


石製品 (2) － 勾　　玉 －

石製品 (2) － 砥　　石 －

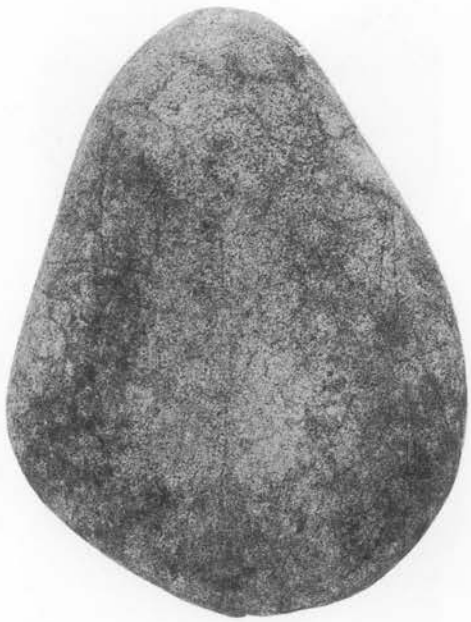
石製品 (3) － 磨　　石 －

1
016－14



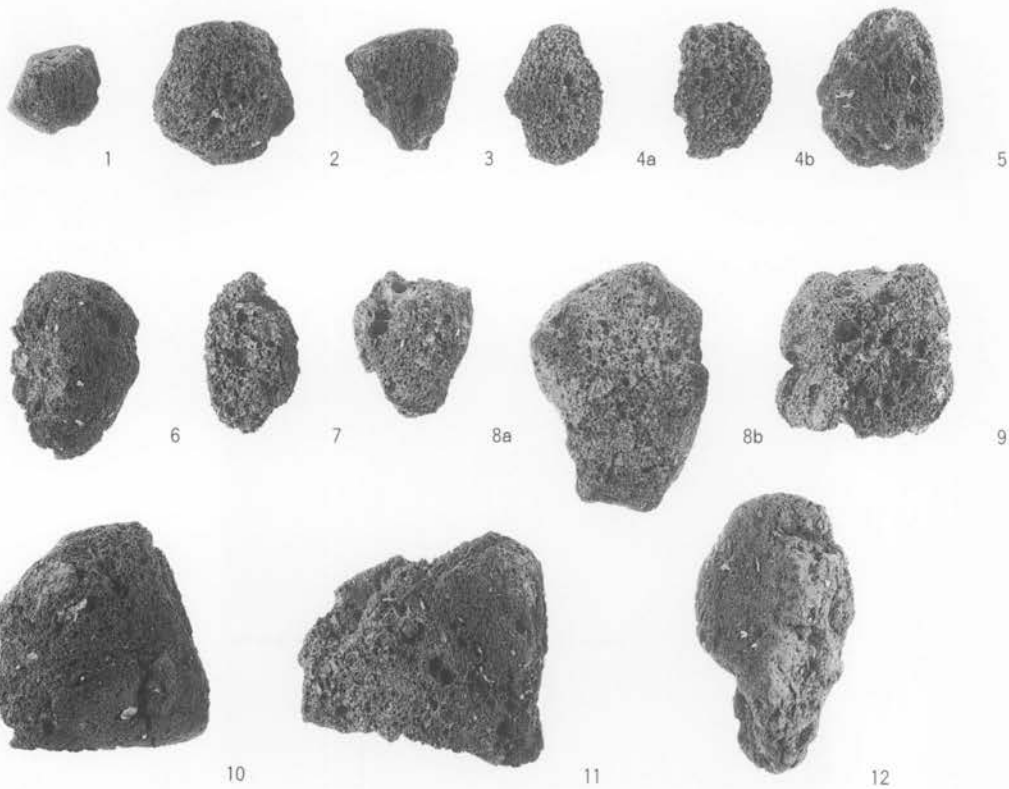
石製品 (3) － 台　　石 －

2
026−17

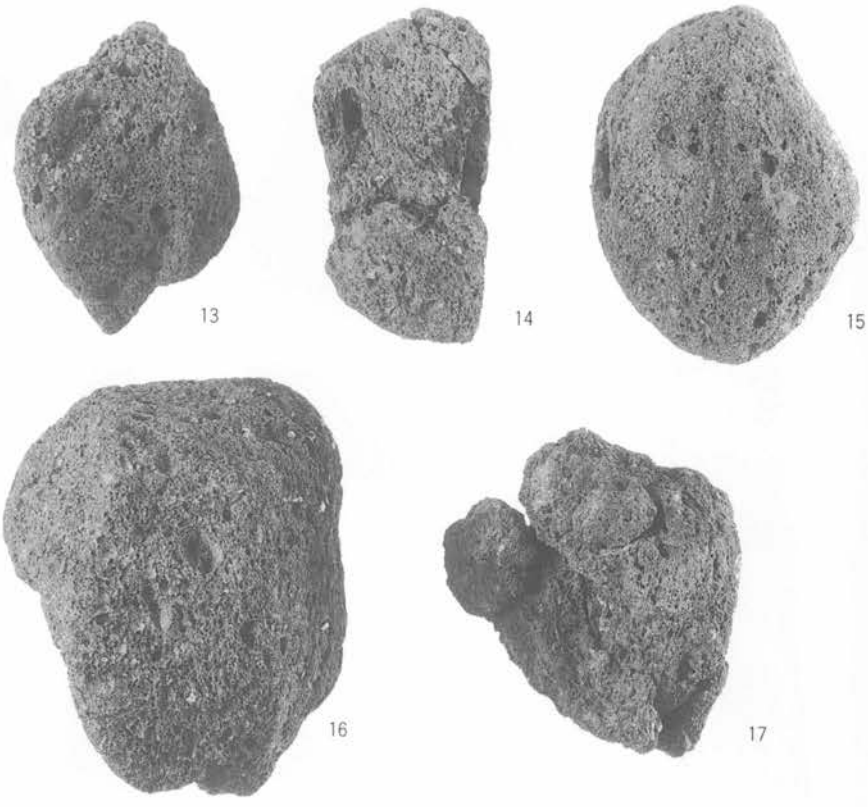


3
046−10

石製品 (4) － 台　　石 －



石製品 (4) － 軽　　石 －



石製品 (5) － 軽　　石 －

鉄製品 (1) － 鉄　　器 －

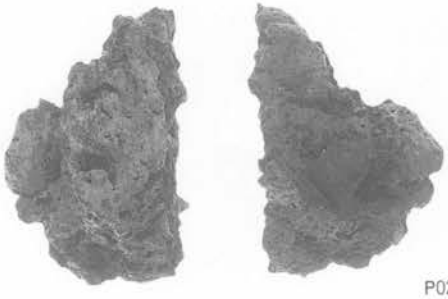
鉄製品 (2) － 鉄　　器 －

016

038—32

016—15

017—10



P02

1

2

3

4

5

016－12

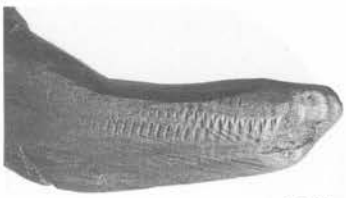
016－12

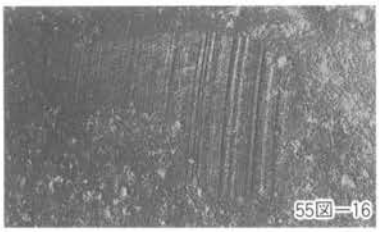
016－13

016－12

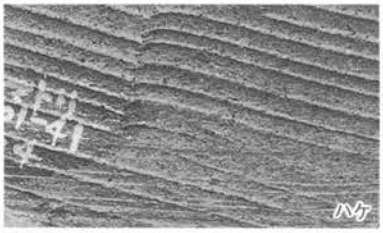
016－13

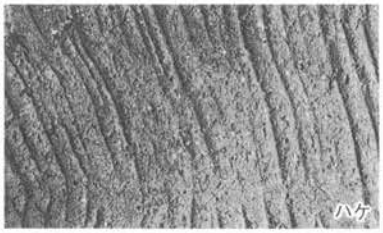
016－13


180図－1


55図－16

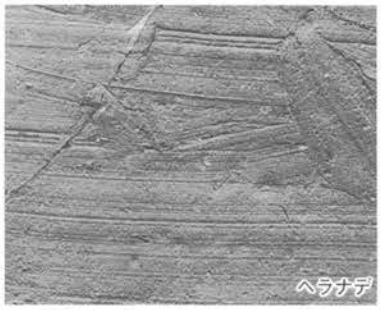
187図－2


ハケ


ハケ

ハケ後ナデ

ヘラナデ


ヘラナデ

ヘラナデ

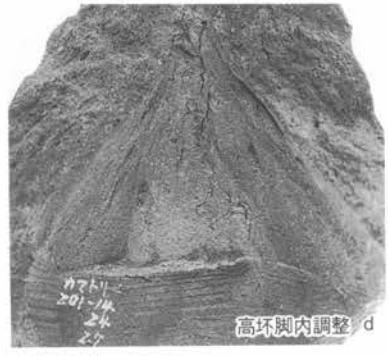
ケズリ様ナデ

ハケ後ナデ・ヘラアテ痕

ヘラミガキ

ヘラケズリ

高坏脚内調整 c 不明


高坏脚内調整 d

高坏脚内調整 b

高坏脚内調整 d

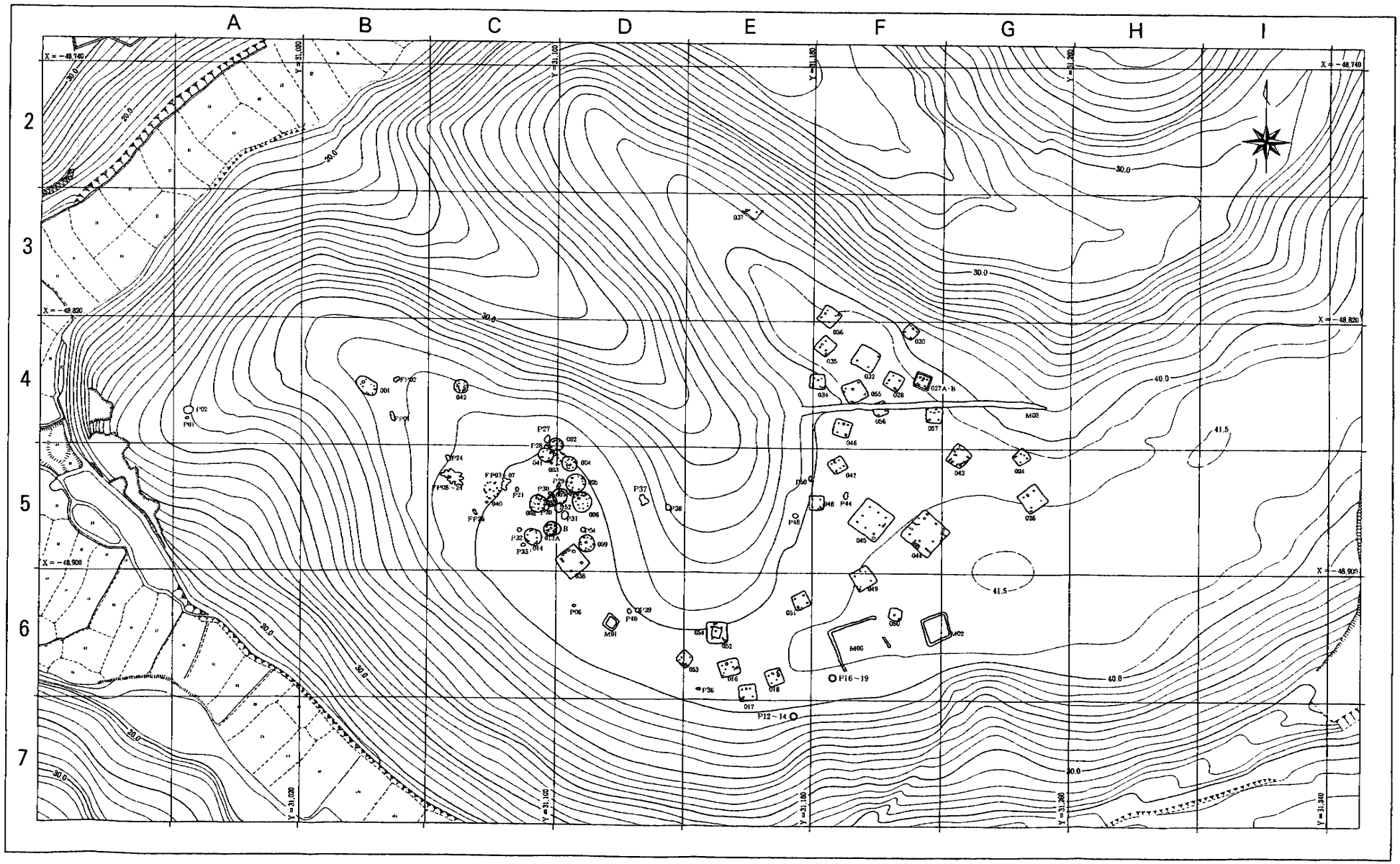
石器表面にみられる痕跡・土器整形痕

抄　　録

フリガナ	チバトウナンブニュータウン18
書名	千葉東南部ニュータウン18
副書名	鎌取遺跡
巻次	18
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第222集
編著者名	上守秀明・出口雅人
編集機関	財団法人　千葉県文化財センター
所在地	〒284　千葉県四街道市鹿渡809番地2
印刷所	有限会社　ミリオン印刷
印刷年月日	1993年3月24日
発行年月日	1993年3月31日

所収遺跡名（フリガナ）	所在地（フリガナ）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
鎌取（カマトリ）	千葉市緑区鎌取町（チバシミドリクカマトリチョウ）	201	041	35° 33′ 30″	140° 10′ 40″	1983.04.01～1983.07.15 1983.09.01～1984.03.31 1985.04.01～1985.08.01	23,000m²	区画整理

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鎌取	集落	旧石器	遺物集中　3か所	台形石器など石器316点	古墳時代住居跡出土の初期須恵器と小鍛冶関連遺物群。
		縄文	炉穴　6群28基 住居跡　11軒	茅山下層式土器 加曽利EⅡ・Ⅲ式土器	
		古墳	住居跡　29軒 （中期27、後期2）	土師器・須恵器 製鉄関連遺物	
		奈良平安	土坑　2基	土師器・須恵器	



付図　錐取遺跡遺構配置図

千葉県文化財センター調査報告 第222集

千葉東南部ニュータウン 18

── 鎌 取 遺 跡 ──

平成５年３月24日　印刷
平成５年３月31日　発行

発　行　住宅･都市整備公団 首都圏都市開発本部
東京都新宿区新宿4-3-17(HK新宿ビル内)

編　集　財団法人　千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809－2　043(422)8811

印　刷　有限会社　ミ リ オ ン 印 刷
千葉市中央区南町3-4-2　043(266)7511

「鎌取遺跡」報告書　追加と訂正

追　加

① 凡例の２ページ目　　斜線部分の追加とその説明

土師器　　須恵器

床

……遺物の大まかな出土状態を表している

床・・・・・・・・・・・・床面密着
床直・・・・・・・・・・・床面直上
覆・・・・・・・・・・・・覆土中
覆上、覆下・・・・・・・・覆土上層、覆土下層
P7・・・・・・・・・・・・ピット７
貯穴、周溝、カマド・・・貯蔵穴、周溝、カマド
一括・・・・・・・・・・・遺構内位置不明
床＋覆上＋貯穴・・・・・床面密着、覆土上層、貯蔵穴
　　から出土したものが接合した

＊記載はおおむね現場の記述に拠っているが以下の遺構については発掘時の記録がないので各種の図面、写真等を参考に整理担当者が判断した

０４３、０４４、０４５、０５１、０５２、０５４

② Ｐ１０１　　第９表　縄文時代石器属性（４）　下から３行目　第55図16の備考の欄に追加・・・・不明線条痕、図版１０７第１段目中央

③ Ｐ２３２　　第１９表　石製模造品一覧　下から２行目１．047-12の図版№に追加
・・・・図版１０７第１段目左

④ Ｐ２４０　　第２３表　磨石一覧　下から２行目２．045-2 の図版№に追加
・・・・図版１０７第１段目右

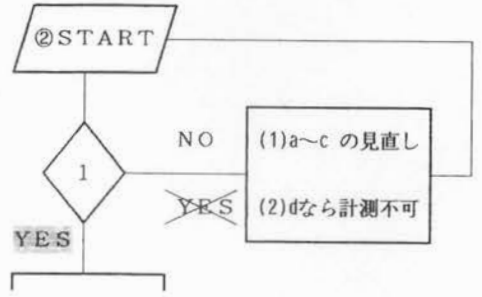
⑤ 図版９８　　１の縮尺・・・・・・約１／１
２～１３の縮尺・・・約１／３

⑥ 図版９９　　網掛け部分追加・１～６の縮尺は約３倍

図版９９

図版98- 5 左側拡大 1	図版98- 9 左側拡大 2	図版98- 3 左側拡大 3
図版98- 1 右側拡大 4	図版98-13 右側拡大 5	図版98- 4 断面拡大 6

土製品（２）－板状土製品－

訂　正

① ８２ページ　「異計測者間の測定誤差」のフローチャート　「ＹＥＳ」の位置を以下のように訂正